GANSHO-DO BOOK STORE, LTD. TOKYO
谷崎潤一郎
GANSHO-DO BOOK STORE, LTD. TOKYO

TRAL REVIEW

中央公論

春期大附録號

第三十一年第四號　第三百廿九號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

嬉しい中にも嬉しい事は
しらが赤毛染ナイスで染めた
美はしい黒髪の艶。

登録商標



白毛赤毛染
ナイス

五大特長

■タツタ二十分で迅速く染る
■染色艶美自然の黒髪に均し
■サラ〱として襟、枕に汚染せず
■一度染て洗ふも剝ず永保し
■用法至極簡易便利なり

GIFT OF
Sidney M. Ehrman



價
大瓶 六十錢
小瓶 三十五錢
男子用 二十五錢
●藥店化粧品店に販賣す

大阪 東京
發賣元
丹平商會藥房

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

白耳義文豪 ノーベル賞金受領者 マーテルリンク著
文學士 栗原古城先生譯

【最新刊】

死後は如何

▼將來の世界を支配するものは心靈の學也。

附錄『交靈術とは何ぞや』

四六判總洋布製・全一冊
正價壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

人生の死後は**絶滅**か、**永生**か、將た『醒むる無きの睡眠』か、果して如何？既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し。而も闇黑の中に一道の光明あり**泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を說かんとす。**現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ、其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者即ち此一篇也。譯者は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供する者と云へり。附錄せる**『交靈術とは何ぞや』**に至りては、眞に人界靈界に亘る一大驚異を說ける者にして、物質萬能の現代社會は、之を讀んで將に大なる**戰慄と畏怖**とを禁じ得ざるべき也。

●三版●

デゼルチス著
高橋五郎先生譯

心靈學講話

四六判總洋布製
全一冊
正價金八十五錢
郵稅八錢

（前付の一）

東京市本郷區西片町十番地
玄・黃社
電話下谷一三九番
振替東京七九九五番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●ダアヰン著●

有らゆる新思想新哲學新科學を孕める新文明の母胎

種の起原

大杉榮氏譯

全二册

▼袖珍總洋布製
▼紙數一千百頁
▼定價壹圓貳拾錢
▼小包料十二錢

晩近の思想に最も根本的なる影響を與へ最も不易的なる基礎を與へつゝある進化の理法、あらゆる人間の眞理の據つて立つ所の地盤たる進化の理法、哲學の哲學たり科學の科學たり實に學問の學問たる進化の理法に、その生物學的證明を與へたるものはダアヰンの進化論也。而して此進化論の中樞をなすものは『種の起原』にして、實に一切の新思想新哲學新科學を孕めるもの。文明の紳士にして這世界的大名著を知らざるが如きは誠に此上もなき恥辱と云はざる可からず。今茲に明快なる新譯を得、輕便廉價の縮刷となして公にす。あらゆる方面の熟讀を待つ。

ロマン・ロオラン著

トルストイ

成瀨正一氏新譯

原著者より譯者に贈り來れるその肖像及び書簡等を掲ぐ。

總洋布上製
▼定價金九十五錢
▼郵送料八錢

「ノベル賞金を得たる佛國の文豪が代表的著作」にして、其の飜譯は我が讀書界の渴望實に久しかりしもの、今漸く公にすることを得たり。最も剴切正確なるトルストイ論傳たると共に、現代思想界の指導者たる巨人の代表的著作たるに於て、更に深甚の意義あり。何人も一度は必ず讀まざる可からざる稀覯の一大名著たり。

東京牛込山伏町 活動文藝社發行
東京市牛込區矢來町中の丸 新潮社發賣

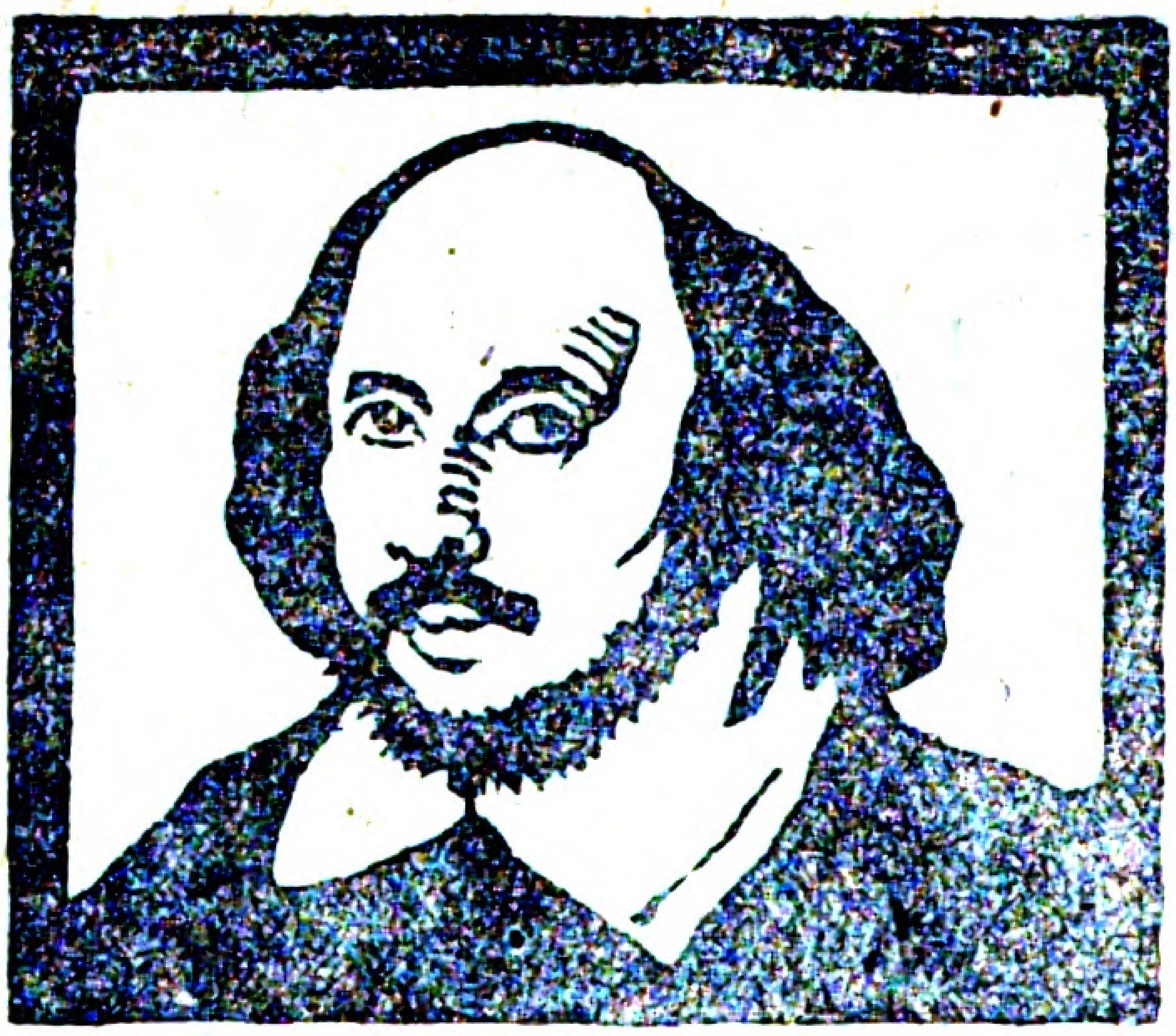
信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(前付の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

沙翁代表作の現代語譯成る

世界文壇の至寶、吾等の親しみ易き現代語に譯せられたり



沙翁三百年祭記念出版

久米正雄氏譯

沙翁名作選

▼美本―袖珍型總洋布最上製
▼廉價―定價金壹圓 送料八錢

■三大悲劇 全譯

■オセロー
■ハムレット
■ロメオとジユリエット

シエクスピイヤの作頗る多きも、その代表的なるを求むれば、こゝに收めたる三篇にとゞめをさす。譯者久米氏は、新進劇作家として知られ、沙翁研究に沈潜すること既に久し。今、沙翁三百年祭に際し本譯を公にせらる。平明暢達の現代語なれば、讀んで晦澁難解の憂あることなく、我が沙翁はこゝに始めて一般の讀物たるを得たり。體裁は閲讀且つ携帶に便なる縮刷袖珍型にして、定價は極めて廉也。

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七四二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大正五年度開始

古書出版 國書刊行會 會員募集

本會は明治三十八年の創立にして秘書珍本を刊行する事、既に原本六千三百餘卷、洋裝菊判二百四冊、十二萬頁に達せり、會員組織實費出版にして、非賣品なり。

刊行書目

江戸時代文藝資料 全五冊
よだれかけ、新吉原常々草、男色比翼鳥、男色今鑑、好色四季咄等

民間風俗年中行事 全一冊
諸國年中行事、北里年中行事、山城四季物語、年中風俗考等

柳營婦女傳叢 全一冊
柳營外戚傳、婦女傳系、玉輿記等

田能村竹田全集 全一冊
竹田の隨筆、詩文、雜錄、印譜等

鼠璞十種 全二冊
燕石十種の如き隨筆雜著を收む

滑稽雜談 全二冊
俗間の行事時令を記せる歳時記

會費 每月壹圓五拾錢〇半年前納金八圓六拾錢〇壹箇年前納金拾七圓（要送料）

會期 一箇年〇每月一冊宛配本〇十二冊完結

期限 四月三十日迄に申込の事

見本 往復葉書にて申込次第進呈

申込所 東京市京橋區新榮町五丁目參番地 振替東京壹四七三電話京橋二九九 **國書刊行會**

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告は揭載謝絕す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

カアペンター原著 富田碎花氏譯

民主々義の方へ

總洋布製美本 定價壹圓廿錢 送料八錢

原著者より譯者に贈られたる肖像及び書簡掲載

オイケン・ベルグソン・タゴールの名徒らに喧傳せられ然も空しく彷徨混亂適歸するを知らざる、我思想界に燦として黎明の曙光を齎らせるの觀あるは吾がカアペンターなり。彼の名今や曉鐘の如く吾等が耳朶を衝き、深奥泉の如き大思想は滔々世界を潤さんとす。此時に當り彼が英國シェフィールドの野に於て耕耘するの傍ら試みたる思想・藝術・宗教・政治其他百般の科學に渉れる嘔心吐血の大文字の精髄たる代表的名著の飜譯なる。將に是れ新日本を建設創造すべき唯一の照燈なり。譯者夙にカアペンターに私淑する多年、文書往復數回にして爰に日本に於ける飜譯權を與へられ、無限の感激を以つて譯出す。蓋し文壇近事の收穫稀有の壯觀たり。

近代思潮叢書

菊型半截美本 ■ 一冊五十錢 但シ十篇十二篇ニ限リ六十五錢 ■ 送料六錢

◀重版發賣▶

- 第一篇 ■ニイチエ超人の哲學　生田長江
- 第二篇 ■惡魔主義の思想と文藝　岩野泡鳴
- 第三篇 ■個人主義思潮　相馬御風
- 第四篇 ■未來派及立體派の藝術　木村莊八
- 第五篇 ■印象主義の思想と藝術　高村光太郎
- 第六篇 ■タゴール聖者の生活　吉田弦二郎
- 第七篇 ■ロマンローランの思想と藝術　内藤濯
- 第八篇 ■オイケンと現代思潮　稻毛詛風
- 第九篇 ■トルストイ人道主義　加藤一夫
- 第十篇 ■神秘主義者の思想と生活　吉江孤雁
- 第十二篇 虛無思想の研究　生田春月

新刊發賣 第十一篇 ショーペンハウエルの哲學　大住嘯風

東京市牛込區神樂町二丁目二十二番地　天弦堂書房　振替口座東京二九五五九番

（前付の五）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は揭載謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大正五年度開始

古書出版 國書刊行會 會員募集

本會は明治三十八年の創立にして秘書珍本を刊行する事、既に原本六千三百餘卷、洋裝菊判二百四冊、十二萬頁に達せり、會員組織實費出版にして、非賣品なり。

刊行書目

江戸時代文藝資料 全五冊
よだれかけ、新吉原常々草、男色比翼鳥、男色今鑑、好色四季咄等

柳營婦女傳叢 全一冊
柳營外戚傳、婦女傳系、玉輿記等

鼠璞十種 全二冊
燕石十種の如き隨筆雜著を收む

民間風俗年中行事 全一冊
諸國年中行事、北里年中行事、山城四季物語、年中風俗考等

田能村竹田全集 全一冊
竹田の隨筆、詩文、雜錄、印譜等

滑稽雜談 全二冊
俗間の行事時令を記せる歳時記

會費 每月壹圓五拾錢〇半年前納金八圓六拾錢〇壹箇年前納金拾七圓（要送料）

期限 四月三十日迄に申込の事

會期 一箇年〇每月一冊宛配本〇十二冊完結

見本 往復葉書にて申込次第進呈

申込所 東京市京橋區新榮町五丁目參番地 振替東京壹四七三電話京橋二一九九 國書刊行會

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

民主々義の方へ

オイケン・ベルグソン・タゴールの名徒らに喧傳せられ然も空しく彷徨混亂適歸するを知らざる、我思想界に燦として黎明の曙光を齎らせるの觀あるは吾がカアペンターなり。彼の名今や曉鐘の如く吾等が耳朶を衝き、深奥泉の如き大思想は滔々世界を潤さんとす。此時に當り彼が英國シェフィールドの野に於て耕耘するの傍ら試みたる思想・藝術・宗教・政治其他百般の科學に渉れる嘔心吐血の大文字の精髄たる代表的名著の飜譯なる。將に是れ新日本を建設創造すべき唯一の照燈なり。譯者夙にカアペンターに私淑する多年、文書往復數回にして爰に日本に於ける飜譯權を與へられ、無限の感激を以つて譯出す。蓋し文壇近事の收穫稀有の壯觀たり。

原著者より譯者に贈られたる肖像及び書簡掲載

近代思潮叢書

菊型半截美本 ■ 一冊五十錢 但シ十篇十二篇ニ限リ六十五錢 ■ 送料六錢

◀重版發賣▶

第一篇 ■ニイチエ超人の哲學　生田長江
第二篇 ■惡魔主義の思想と文藝　岩野泡鳴
第三篇 ■個人主義思潮　相馬御風
第四篇 ■未來派及立體派の藝術　木村荘八
第五篇 ■印象主義の思想と藝術　高村光太郎

新刊發賣 第十一篇 ショーペンハウエルの哲學　大住嘯風

第六篇 ■タゴール聖者の生活　吉田弦二郎
第七篇 ■ロマンローランの思想と藝術　内藤濯
第八篇 ■オイケンと現代思潮　稻毛詛風
第九篇 ■トルストイ人道主義　加藤一夫
第十篇 ■神秘主義者の思想と生活　吉江孤雁
第十二篇 虚無思想の研究　生田春月

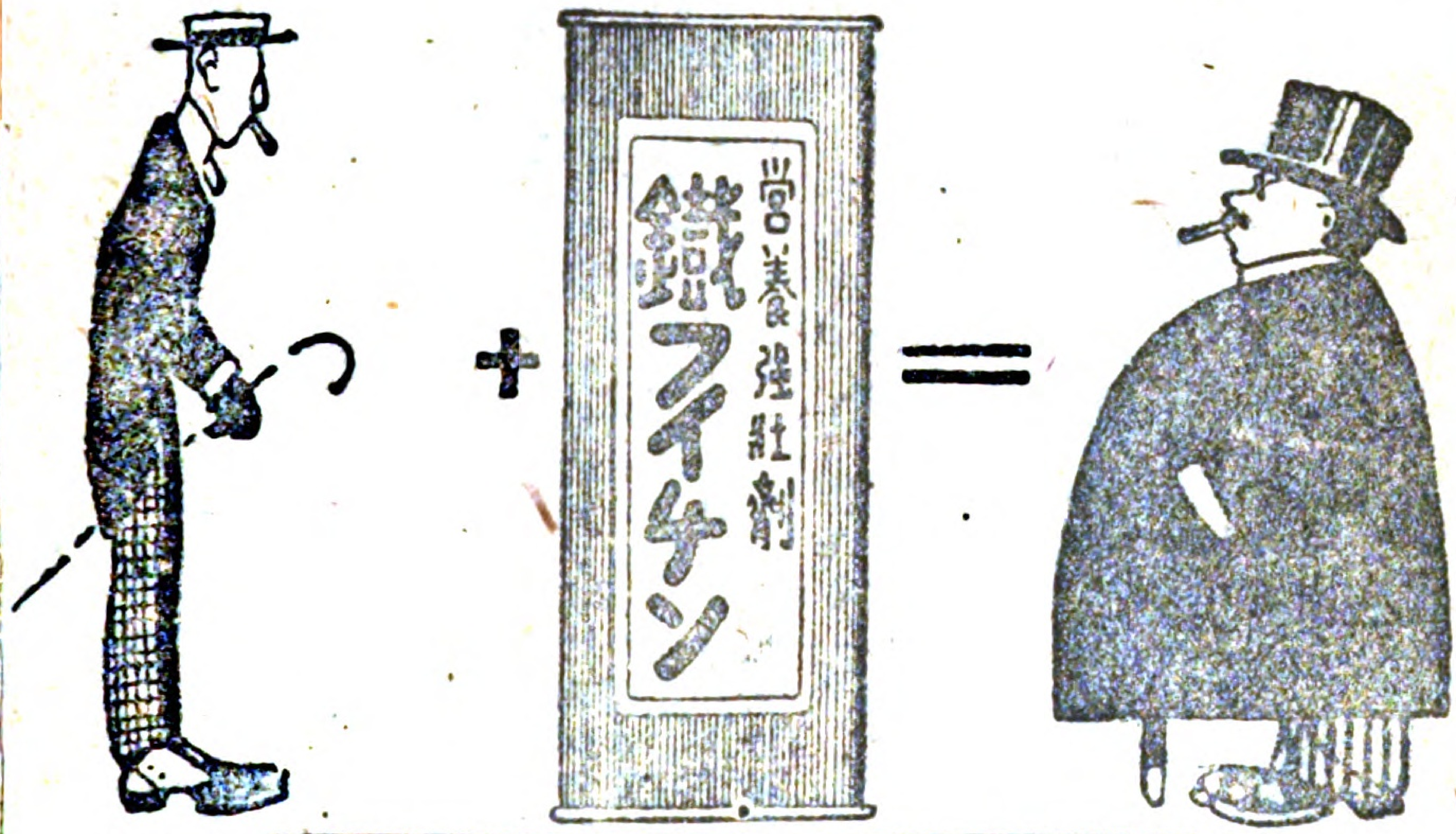
(前付の五)

東京市牛込區神樂町二丁目二十二番地　天弦堂書房　振替口座東京二九五五九番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



腦力及體力を增加せんと欲せば鐵フイチンを服すべし

神經衰弱
身體衰弱
生殖器衰弱
特効新藥

鐵フイチン

鐵フイチンは食欲を進め身體の榮養を佳良となし體重を增加し殊に神經系の疾患及生殖器衰弱を治癒し服用後短時日にして著しく身體全般の健康を增加す

定價一罐(百五十瓦入)十七日乃至廿五日分 金貳圓四拾錢

說明書は神戶市江戶町百四番地瑞西バーゼル化學工業會社日本學術部より無代進呈す

發賣元
東京日本橋區岩附町 友田商店
大阪市東區道修町 武田長兵衛

全國の有名藥店に販賣す萬一品切の節は直接發賣元宛御注文を乞ふ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨附記を乞ふ

古河家經營

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

博愛生命

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
振替貯金口座東京一七一一七番
電話長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
支店 大阪市東區本町一ノ一三（電話長本局二三一一番）

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齢範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▼説苑

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

TURNER



Barnard Castle

Digitized by Google

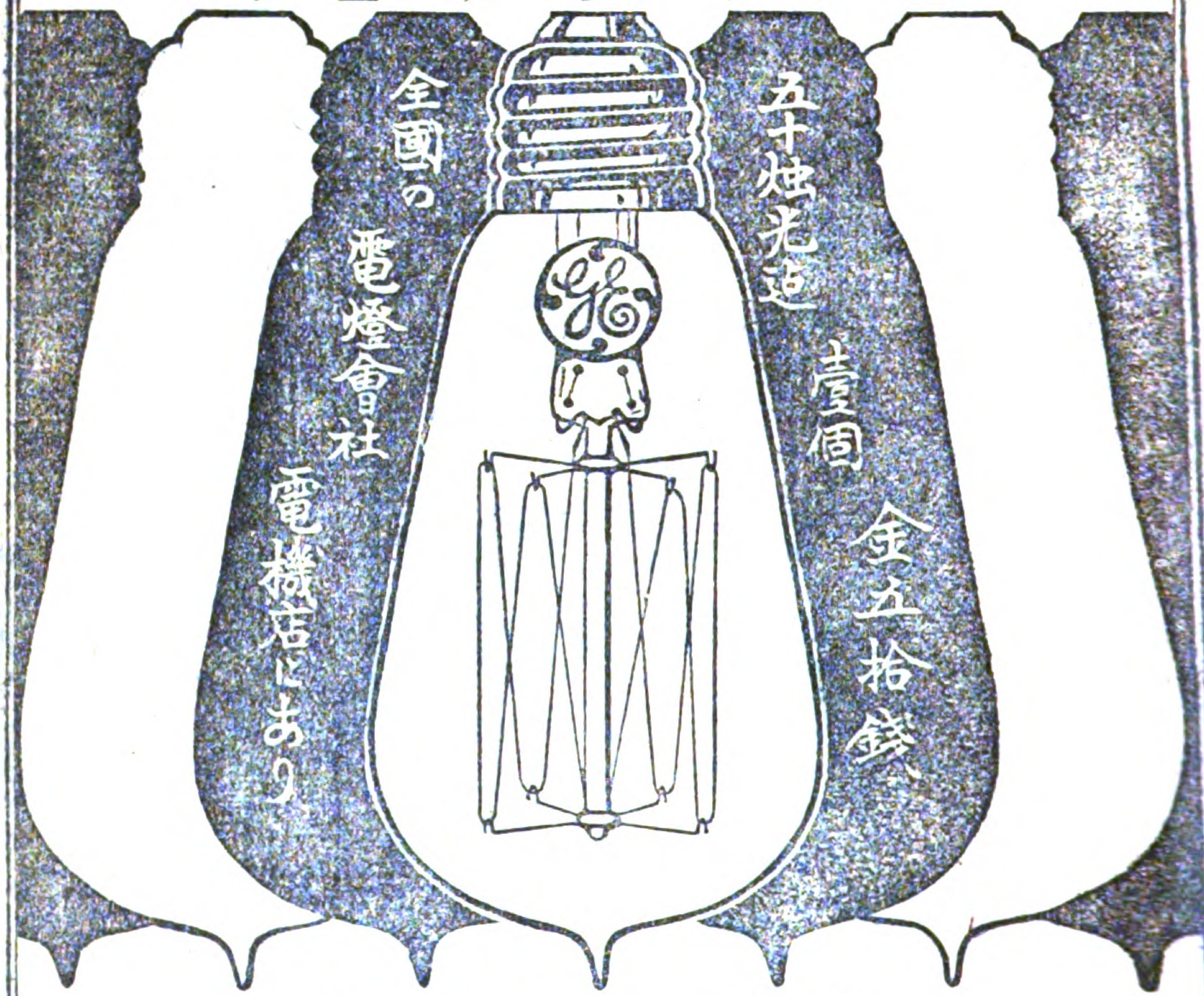
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

マツダランプ



東京電氣株式會社

神奈川縣川崎町

販賣部

東京出張所　京橋區銀座尾張町壹

横濱出張所　横濱市伊勢佐木町壹

大阪出張所　西區阿波堀通一

切り取つて御送り下されば説明書を差上ます

御姓名 ____________

御住所 ____________

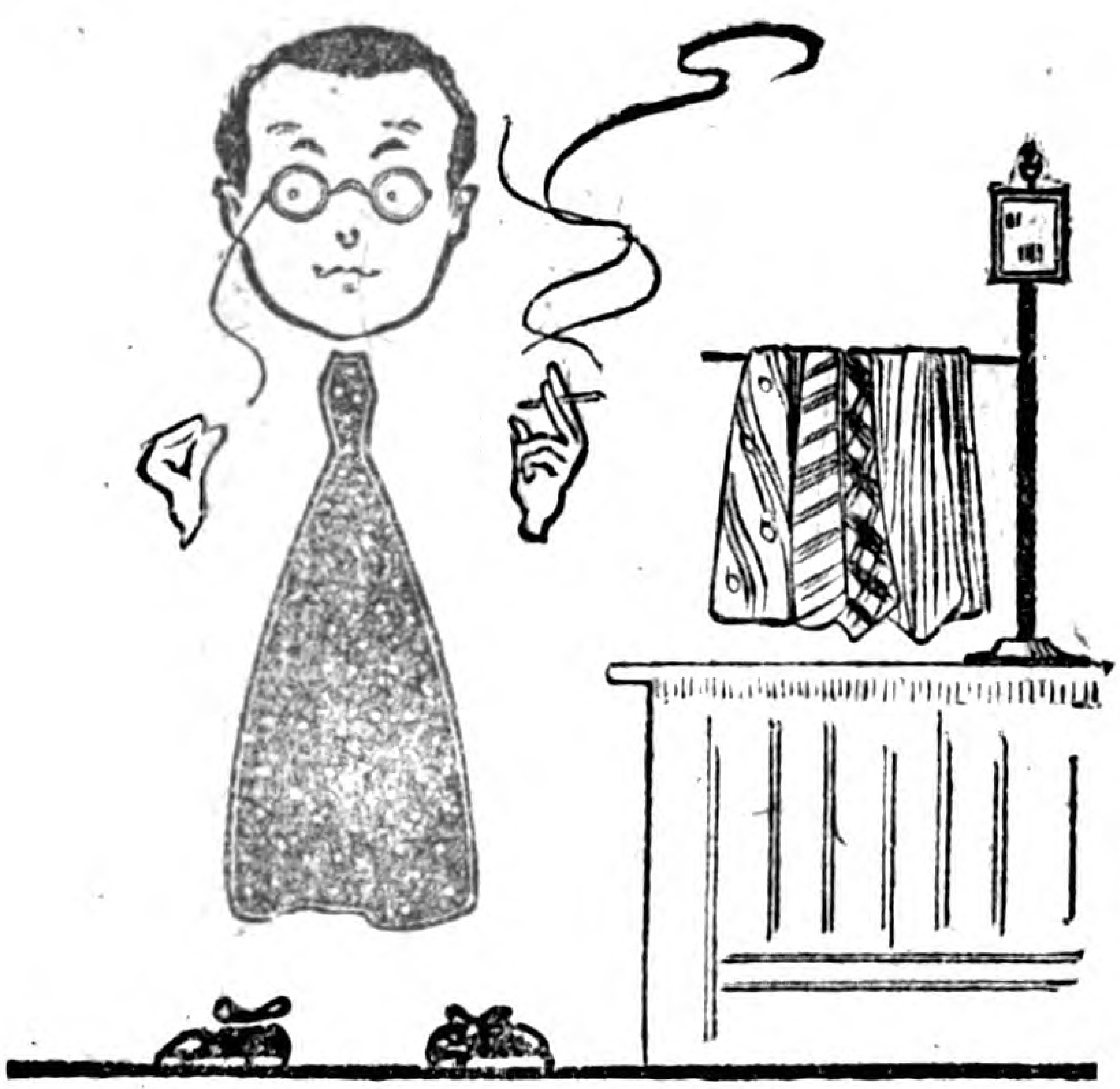
(前付二の一)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

赤帽印リボン付ネクタイ

御手當り次第に
赤帽印リボン付
ネクタイを
御撰擇あれ
何れを御取り
爲されても
趣味、スタイル、
品質は
みんな貴君に
適します



信用ある洋品店にあり赤帽印又は
リボン付ネクタイと御指定を乞ふ

赤帽印ネクタイ發賣元
東京 南文藏 大阪

登録商標 BEST MADE RED HAT WEAR GUARANTEED

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論



第廿一年第四號
春期大附錄號
第三百二十九號

日露同盟論

（一）前論

歐洲の白晳民族は近世科學の智識を軍事と貿易の兩方面に應用して宇內に雄飛し、其東方亞細亞に對するや南方より侵略するものと北方より掩壓し來るものとあり、其狀宛も一大巨人が其鐵の如き双腕を伸張して極東無盡藏の寶庫を包容占取せんと欲するが如し、南ょりするは即ち大英の勢力にして海路貿易を主として覇權の樹立に努め、先づ印度を征略して亞細亞帝國の基礎を定め（一六〇〇年英國印度商會創立、一七八六年コルンウォリス印度總督と爲る、）馬來半島に進み一八二四年新嘉坡島を獲得し、更に進んで一八四二年香港の割讓を得て極東唯一の自由港を開き以て東亞に於ける大英商業帝國の首府

を立てたり、香港の經營と同時に英人は主として上海、天津等の開港及經營に努力し、支那の鐵道事業また英人の計畫に待つもの多く、更に支那政府を援けて關稅制度を組織したるが如き以て永久の偉勳と稱するに足れり、遂に對支貿易上列國中最優位を占め中部支那即ち揚子江流域を其勢圏內に包容するに至れる、其規模の大にして其成功の顯著なる以て古來多く其比を視ず、素より東洋貿易の開拓には初めより英人と伯仲して佛人經營の功沒す可らずして、現に印度支那一帶の地は佛領に歸し南支那の一部亦其勢圏內にあり、獨逸亦遲參者なるに拘はらず、寧ろ其後れて着手せるが故にや、膠州灣方面の經營頗る花々しく、却て先進者を凌駕せんとするの概あり、然れども佛や獨や其功稱するに足るも、前者は共努力間歇的又は區分的にして組織的ならず後者は落後者の覺醒狂奔せる耳、獨り經營各般に亘りて局限せず數百年の間斷なき努力と賢明なる政策空しからず終に覇者の優位を占め得たるものを英國となす。

之に反し北よりするものは露西亞の勢力にして陸路兵力に依り侵略を主とし初め天山の北邊を指し次に蒙古大沙漠に沿ひ蜿蜒として路を東方に開くこと幾千哩、貝加爾湖を渡り黑龍江を下り終に日本海に突出するもの是を露國の經路となす、蓋し露國の東漸は勢なり其進むや最小抵抗の線に由るも到る所沙場瀆地に非ざれは雪峰氷河のみ、一方タシケント、サマルカンドに到れば北印度の沃野は路更に遙なるの感なき能はずして、別に東方に進めば容易に安定の捿息地を得るに至らず端なく進み進みて遂に日本海の濱に到れるなり、而してシベリヤ横貫鐵道の開通に依り北方亞細亞經營の曙光を認め得たるが如きも其唯一の東關門たる浦鹽港は冬期氷結の難ある耳ならず、シベリヤ一圓の地寒帶に近よして未だ本國の移民を誘致するに足らず、玆に於て日清戰後の時局に乘じ極東南下の策を劃し巧に當時の支那當局を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

範蓋して南滿線の租借を獲て不凍港を大連に求め極東大總督府を旅順に置けり、此に於て滿洲一圓の利權已に露人の手に落ちし耳ならず、鴨綠江森林亦露韓合辨の經營に委せられ、韓半島の命脈日に將に縮まらんとすると同時に、北京も亦動もすれは露國に死命を制せらるゝの觀あるを免れず、此時の極東に於ける露國は實に旭日冲天の勢をなし、アレキシエーフ總督の賑かなる經營の下に二億ルーブルの巨資は一二年の間に旅順大連、滿鐵沿線、鴨綠江方面に蒔散らされしかば數百年來高粱を常食とし世知辛き生涯より外知らざりし滿州土民は鼓腹して露人の恩惠を感謝し、旅順大連に在る露國の大官、軍人、御用商人等は常に長夜の宴を張り、太平を謳歌するの情殆んと全世界を擧げて之を羨めり。同時に經營の事蹟亦稱する足るものあり、東洋第一の旅順要塞は一九〇四年を以て竣工して金城湯池の稱あり、大連の築港亦着々進行し、滿州線は一九〇三年を以て開通せり、聖彼得堡より大連に至る無慮六千哩の亞細亞横斷線上には世界最新式の客車を運轉し、馬賊の跋扈跳梁を以て稱せられたる滿洲も一擧にして東洋文明の中心たるが如きの觀あり、實にシベリヤ、滿洲線の軍事上の價値及影響を別とするも、其竣工は東洋文明史上特筆すべき事蹟にして、大に極東の人心を驚破するに足れるものあり、然れども若しも此鐵道が軍事的征服の方略たりし上より之を觀れば其影響更に大なるものなくんばあらず。

蓋し支那自らを除きて外、露國の大膽なる經營と飽くことを知らざる野心に對し最も驚動せるを英國と日本となす、英國は土耳其、波斯、亞弗肝方面に於て露國と衝突すること既に半世紀の久きに及びしが、一八九八年露國の旅順港を租借せんとするや時の首相兼外相ソールベルリ侯は寧ろ一種の好意を以て之を迎へたり、曰く露國が孰れの方面に於て不凍港を獲得せんと欲するは無理ならぬ希望にして、若し

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も支那政府の同意を得てポートアーサ(旅順港)を臨時の海軍寄泊港と爲さんとするならば英國は强ひて之に反對せざるべしと、蓋し其意中を想像するに露國をして幾分極東に於て志を得せしめは必ずや多少君斯丹丁堡及び波斯灣方面の緊張を緩和するを得んと豫期せしに似たり。何ぞ知らん露國の志は旅順方面に於て其一部分を達し得て滿足するものに非ず、臨時の寄泊港として租借せられしポートアーサは乍ち化して東洋無双の堅塞要港となり、鐵道に築港に露の經營する所、直ちに中外の膽を奪ひ北京朝廷は悚々然として制を露國に待つの風あり、此れ實に英國の甚だ意外とせし處にして若しも露國經營の基礎未だ全く成らざるに際し之を破るの謀を立つに非ずんは支那に於ける英國の覇業は遂に根蔕より顚覆せらるゝ憂なしとせず、同時に日本亦類似の憂慮に襲はれたり、我邦の主たる憂慮は朝鮮の問題に係る、即ち露國が一たび其勢力を南滿洲に扶植せんか、北韓一圓の地又韓廷の有に非ず、右手北京を制する露國は又左手京城を掩はんこと論を待たずして、帝國の韓國に於ける狀態は、遂に文祿役後の悲境を繰返すべき恐なき能はず、此に於て我國と英國とは同憂相依り一九〇二年遂に日英同盟の條約を締結するに至れり。歐洲の基督教國が東洋の一國と對等の條約を締結せること(一八九四年)既に異數とせられしに、今や先きの條約改正を距ること十年の後に於て英國は更に日本と防守同盟を結べるを觀れは當時英國が東方亞細亞の局面を如何に重大視せしかを察すべきと同時に南方よりする歐洲東漸の勢力の已に其極度に達せしを知らざる可らず、即ち日英同盟は現狀維持を意味するものにして、英國は日本に對して現在以上其領土擴大を希望せずと誓約せしも同樣の結論に達するなり、如何となれば極東に於て自ら一兵を動かさず一に日本の陸海軍に依賴して露國南下の勢力を喰止めんと欲するは即ち此方面に於ては英國發

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

展の限度已に至れるを自白するものに非ずして何ぞや、之を言換へんに日英同盟の締結は以て南方よりする歐洲東漸の勢力を遂に制止し得て、亞細亞人のための亞細亞を現出すべき第一着歩なりしと云ふ亦誣言ならず、一たび日英同盟成る、之に次きて來るものは日露戰爭たらざる可らず、憶ふに我日本の側に立ちて之を觀れば此戰爭ぐらゐ意義ある戰爭は蓋し少なかるべし、試みに開戰後小村外相が發表せし日露談判の經過に付て考ふれば我政府は戰爭の慘禍を避けん爲めには及ぶべき丈けの謙讓を示して滿韓國境を限りて日露勢圏の區劃を協定せんと努力せしに關はらず、露國當局の鼻息甚だ荒らく、帝國の實力と決心を見限りたる結果にや侮慢の態度亦少ならず、遂に萬止むを得ざるに至りて砲火相見るに至れる次第にして、當時の事また決して露國民の眞意にあらざりしや知るに難からず、即ち吾人は日露開戰の責を以て當時露國上下の聰明を掩蔽せし一部小數野心家に歸するを以て至當なりと信ず、而して遂に一たび戰端を開くや、其結果の歸する所極東の天地未來永劫スラウ民族の支配に歸すべきや將た東洋は東洋人により支配せらるべきやと云ふに歸すること我同胞の齊しく意識する處となれり、若しも朝鮮人民にして其領土を露國の侵略より防禦することを得ば我日本が進んで防禦の任に當る必要あらざりしなり、若しも支那人民にして蕩々たる氷崩の如き露國南下の勢力を防止することを得たらんには我國が之を防止すべき危險多き大責任を負ふの必要あらざりしなり、然るに支那人は漫然として鼓腹し一にルウブル紙幣の散布を祝し韓人は强者に賴り長きものに卷かるゝの安易なるを知るのみ、兩者孰れも亞細亞の亞細亞人の爲めに存し、亞細亞人また自ら人類史上一大使命あるを知らざるなり、獨り此使命を自覺し亞細亞諸民族に代りて極東の獨立の爲めに戰爭の衝に立たざるを得ざりしものを日本國民となす、此

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

間に於ける我帝國の地位は恰も紀元後四五一年のシャーロンの戰と七三二年のプアチエーの戰に於ける佛國人の位地と髣髴たるものあり、夫れ歴史は繰返す歐洲が中古時代に於て亞細亞民族の侵略に遭ひ殆んと其民族としての獨立を失ふるに至りし如く、彼等は二十世紀の劈頭に於て亞細亞に襲來し我儕亞細亞民族の自由、獨立を奪はんと欲したり、而して亞細亞民族の侵略を歐洲より蕩掃せしものの佛蘭西人たりし如く歐洲東漸の勢を極東に喰止めしものは日本人民なり、西歐の佛人と東亞の日人と孰れか其天職に忠なるものと云ふ可らずや、頃は我雄略帝の即位に先だつこと三年、支那の南北朝時代宋の文帝の八年即ち西暦四五一年シャーロンの戰あり、是より先き凡そ半世紀の間匈奴民族は其數六十萬人と稱し醜容獰猛人間と猛獸の混血雜兒と云はれたるアチルラ王に率ゐられて歐洲を征服し、その版圖は北は波羅的より南はダニウブ河に至り、東はボルガ河より西は佛國の大半を包有せり、東羅馬帝シオドシオスも貢物を呈し獨逸民族の祖先亦た首垂れて雌服せり、獨り當時の佛蘭人等は伊太利の援兵を得て斷然匈奴軍に抵抗してシャーロンの平原に會戰せしが皇天遂に歐人の苦衷や憐みけん戰の翌日敵味方の死者十六萬人の多きを算し、アチルラ王の敗に歸し、歐洲は爲めに自由、獨立を恢復せり、更に西暦七三二年、即ち我聖武帝の四年、支那に於ては唐玄宗皇帝の二〇年に當り、プアチエーの一戰に於て佛の執權シャルルは既に地中海南方の沿岸を徇へ西班牙を征服して南部佛蘭西を經略したるサラセン人（アラビヤ民族）の雲霞の如き大軍を擊攘して西歐をして永久に回教徒たる異民族の配下に立つの厄を免れしめたり、此執權シャルルは「マルテル」即ち鐵槌と呼ばれし豪傑にして元の十萬人を擊攘せし我北條時宗に酷似せり、要するに地中海の南岸を經て西班牙の對岸より進んで佛國に入りしサラセン民族は之を通商

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

貿易により海路南より東亞に來れる英人に比すべく、北方陸路西漸して佛國に入りし匈奴民族は以て之をシベリヤ、北滿を經て南滿に入りし露西亞人に對照すべし、野蠻人たると文明人たるとの相違あり、又一は西方より東方に侵略し來り一は東方より西歐に亂入せし相違ありと雖、一民族が經濟上又は政治上の必要に迫られて其本據たる地域を超越して發展し他の民族の本據に侵入し遂に最後の抵抗に遭ひて退却せざる可らざるに至れるは互に相同し、彼れと是れと地を換ゆれば其跡蓋し類す、而して民族主義の爲めに異人種の侵入を擊攘し千古に向つて一大氣焰を吐きしは佛人と日人となり、蓋し今後の國際關係に於て兩國民大に相提携し文明の進步と平和の保持の爲め共に努力すべき前提已に史上に歷然たりと云ふべきに非ずや。

(二) 日露接近

兩個の岩石互に相磨するに其道を得れば終に能く觸着すべし、日露兩國交戰八箇月、鴨綠江渡河の戰を以て初なり奉天の大戰を以て終るまで、金州城の攻擊、旅順の包圍、遼陽、沙河等大小幾十戰、彼我の死傷數十餘萬、東洋未曾有の慘事たらずとせず、加ふるに海上に在りて露國は艨艟の精銳を盡して極東に派遣し奮鬪頗る努むる處ありしも遂に旅順沖に對島海峽に全滅の悲運を見たり、之を普通の人情より見ば我に在りて大痛快事たると同時に彼に在りては大痛恨事たらざるを得ず。而かも露國人は大國民の襟度あり磊々落々として永く怨を懷かず我邦人は武士道の敎訓により敗者に對し禮儀を失はず、戰後幾許もなく鐵道の協定も成り彼我談笑の間に前日の溫情を回復するに至れり、且つ露國に在りては其民間一般に開戰の理由を解せず滿洲經營なる一大冒險の結果、大敗戰を招きし責任を以て一部宮廷派の野

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心に歸し、寧ろ此一派の失脚を好機として內政の改革を行ふに餘念なく、不思議なる心理の作用により一部の露人間に在りて日本人は一種の恩人として持て囃やされしが如し、勿論露國軍人間には復讐を叫びし人も少なからざりしが如くなるも、幾多の國際上の出來事は日露兩國人をして益々相接近するの必要を感ぜしめたり、就中東亞方面に於ける出來事としては錦愛鐵道の運動及び米國國務卿ノックス氏の滿洲鐵道中立提議あり、前者は日露既設鐵道に對する併行線なりと云ふの理由に基ける兩國の抗議により遂に中止せられたれども、支那政府に於ては既にこれを許可するに內定し居りたるもの丶如く、又た滿鐵中止提議に對しては我政府より米國政府に體よく拒絕の通告をなして事止みしと雖も、此間の形勢最も不穩なり、若しも日露の間寸毫の間隙もあらば直に之に乘じて事を搆へんと欲するもの世間決して少なからざること益々明なると同時に、日露相互の利害關係に對する自覺亦著るしきものあり、故に兩國は能く相互の利害を協商して勢力圏を劃定したるのみならず、支那革命後大借款問題に關し四國財團より日露の加入を勸誘せられし際にも兩國は略ぼ同一の地歩を守り滿洲又は蒙古に對する各自の既得權を保留するを條件として借款團に加入を承諾したり。

　歐洲の一出來事にして猛烈に露人の神經を刺激し其注意を東亞方面より轉し東歐に向はしめしを墺國のボスニヤ、ヘルゼゴビナ二州合併とす（一九〇八年）、是より先き英の先帝及び外相ランスダウン卿は當時の列强の形勢に鑑みる所あり、從來英國が大體に獨墺伊三國同盟と去就を共にせし傳統的政策を一變するの必要ありとし、先づ佛國と多年に亘れる幾多の懸案を讓歩妥協して國是改定の前提となせり（一九〇四年）、是れ獨逸の海軍擴張が明かに英國を凌駕せんとする一大野心に基けるを看破し、舊套を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

守りて三國同盟に後援するは敵に武器を貸すと同一なるを知りたればなり、然れども佛の同盟國たる露西亞に對しては依然として敵愾心を懷き、一九〇二年日本と同盟を締結するや双方の共同目的は露國の南下を防止せんとするに外ならざりしなり、然るに日英同盟の結果、滿洲大戰爭を惹起し露國が戰敗の餘り遂に英國と接近するの必要を認むるや英國は波斯、亞弗肝、西藏に關する各問題を露と讓歩妥協し（一九〇七年）、所謂多年の懸案を一切淸算に付し以て國是改定の實を全ふせり、即ち英國の敵國視するは佛に非ず露に非ず獨り獨逸に在り、獨墺を去り佛露と近けるは、ヴイクトリヤ女帝晩期の政策を一變して以て列國の均勢移動の新形勢に順應したるなり、獨帝の慧眼素より直に此形勢を看取し、表面には英の佛露に接近せるは平和の一擔保として大に之を歡迎すと稱しつゝも其實歐洲の均勢の漸く獨墺に非ならんとするを見て心中大に不安に襲はれしなる可し、玆に於て露國が滿洲の戰敗より未だ回復せざるを利し墺國を後援してボスニヤ、ヘルゼゴビナの合併を斷行し大に三國同盟の威信を揚げんと試みたり、抑もボスニヤ、ヘルゼゴビナは伯林條約第二十三條により墺太利の監理に附せられしも形式の主權は尙ほ土帝の有に歸せり、故に二州の合併を行はんとせば先づ伯林條約の調印者たる列國に問ふて其同意を求むるを以て正式の方法と爲さざる可らず、然るに此間に於ける墺の外相アエレンテール伯は實に機敏辛辣を極め、露の外相イスウォルスキーも、佛のデルカッセも、英のグレイも悉く出拔かれて事後に至りて呆然たり、而して最も適切に痛苦屈辱を感じたるを露國となし、巴爾幹スラヴ諸國の覇權を握れりと稱しながら其危急に際し一兵をも動かして之を拯くる能はず斯くては大國の面目果して何くに在る、蓋し二州合併の事たる素より墺太利の政策に屬するも、同時に獨帝は此實物敎訓により露帝が親英政策を採

新聞界、孰れの方面を見るも曾て一人今の時機に於て露國を助くるの急務なるに異論を挾めるものあらず、是れ實に注意すべき現象に非ずや、而して露國に於ても近來日と共に我に對する親情を加へ來り、先般には露帝は近親の皇族を派遣せられ我　帝室に對する悃誠を表せられ、聖彼得具羅土に於ては政府の當局及び政府機關紙を通じて日露親善を悦ぶの聲を聞くは吾人の頗る愉快とする處たらずんばあらず、實に近來の日露は宛も是れ落花流水の觀あり、更に一步を進めて同盟の成立を見るべき殆んど疑ふ可らず。

抑も一の國が他の一國と攻守同盟を締結すと云ふが如きは最も重大事件にして、必ずや兩國の利害よく調和し、同盟に由り相互に得んとする利益亦最も鮮明顯著にして何人も一見首肯する處たらんことを要す、露佛同盟の如き即ち適例なり、前年露佛同盟の將に成らんとするや兩國政體の相違は多少眼障りと爲れるの觀ありしも、爾來露國の獨裁政治は變して立憲主義となり、佛國共和政の基礎亦漸く鞏固なるに至りたれば、今や何人も佛露政體の相違を以て同盟の嫌と爲すものあらず、蓋し軍國主義の獨逸が兩國の中間に跋扈す以上露佛は自衞上是非とも同盟を維持するの必要あり、且つ經濟上財政上露佛の提携は自然有無相通ずるの天理に適ふものなり、又兩國の植民領土の關係に見るも、殆んど衝突を恐るべき地點を發見す可らず、露佛同盟の如きは眞に理想的なりと謂ふべきか、今日露同盟を假想するに兩國は北滿に於て疆場を接觸し、利害の衝突竟に相免れざるが如し、然れども是れ日露各自の國勢の趨向を大觀せざるより來る謬見たるのみ、若しも能く兩國大勢の歸趨を察せば露國は寧ろ東亞及小亞細亞方面の經營を急務とすべく、日本は今日以上大陸に領土上の野心なく、唯だ既得の地步を堅實にし以て極東の平和を支持するを以て天職と爲す、吾人は是より聊か露國大勢の歸趨を論じて以て日露同盟の根蒂を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明かにせざる可らず。

露西亞は大陸國として世界第一の大國たるに關はらず公海に面して開放せる一關門をも有せざるは甚だしき不幸なり、彼得大帝以來露國不斷の努力は千難萬難を排して廣き公海、氷結の恐なき暖き海面に突出せんと欲するに在れども未だ其志を得ず、要するに其努力の向ふ所は三個の方面中の一たらずんばあらず、即ち歐亞の界境に位する君須丹丁堡、印度洋に面する波斯灣又は南滿洲方面即ち是れなり、今この三方面に就き露國は孰れに進出するを最も便利なりとすべきやと云ふに、露國の政治經濟の中心已に歐洲露西亞に在る以上君府を以て最も便利となすは殆んど議論の餘地を存せず、波斯灣素より良港に乏しからず、若しも露國にして此に進出し得とせば其一港を設備して貿易港となす亦不可なく、必ずや波斯、メソポタミヤ、ユウフレチス沿岸地域の物産に對する輸出港として利用せらるべきも、歐露の物産を遥に此處まで運搬し來りて輸出すべしとは何人も想像し得可からず、公海に面する不凍港を獲得せんとは露國の熱望に相違なきも、之を波斯灣に得んことは毫も其目的と添はず、然らば滿洲大連の如きに進出するは如何と云ふ露帝國の極東發展としては如何にも華々敷活躍に相違なきも、露本國の輸出港として何等の價値なきは波斯灣の進出と擇ぶ處あらず、寧ろ滿州の軍事・經濟上の設備に沒頭して本國の經營を忽緒に附するの恐れなき能はずして、立國の基礎を危ふするの嫌なきを得べからず、蓋し露國の經世家は今日に於て滿洲經營の早計なりしを理解せるなるべし、然れば今後滿洲問題を再開して日本と兵火相見るが如きは經世上毫も其必要なく、露人亦疾くに復讐戰の企圖を放棄せるなるべし、寧ろ其全力を獨逸方面の防備と巴爾幹經營に傾倒するこそ策の最賢明なるものと謂ふべけれ。況んや今次戰爭の終局は何人も之を豫測す可らずと雖も露軍のアルメニヤ進出は否む可らず、恐らくはバグダットを拔

きて小亞細亞の背後を制するを得べく假令直に君府を獲得するに至らずと雖も、亦此方面に於て何等かの足懸を占むるに至らんか、斯くて巴爾幹、小亞細亞方面に對する露國の經營は今後多大の努力を要すべきなり。

斯くて帝國の希望と露國の必要とは些も相衝突せず、吾人が露國に向ひ其全力を西部國境に傾注せんことを求むるは、即ち露亦其眞正の利害に顧みて希望する處たらずんばあらず。而して露國が我に要めて其極東の領土を犯す勿らんことを以てすれば、是即ち帝國の自ら期待する所たるに外ならず、但し露國は外蒙古を初め新疆、甘肅、陝西、山西、方面に隱然その勢圏を擴め居れり、是れ亦帝國の海岸方面より經濟的に平和の進入を試みんとする地方と毫も接觸し居らざるなり。斯くて露國は東亞方面の領土を顧念するの繁なく十分の努力を東歐の經營に用ふるを得、我邦亦露の甘諾を得て大陸に於ける地歩を堅ふするを得ば双方の利益幸福之に過ぐるものあらず、是則ち日露同盟の議を賛すべき主たる理由なり。

別言すれば日露同盟及び効能は其本來の性質上多くは消極的ならざるを得ず、露國の東歐又は小亞細亞經營に對し主として其妨害を企つべきは獨、墺、勃牙利の諸國なるべく、萬一露國が戰端を此方面に再開することと在りとせんも我邦は積極的には殆んど援助すべき方法を見ず、然れども斯る場合に際し露の東亞に於ける各種の利害を保證し動亂を豫防し露國をして毫も後顧の憂なきを得しむべきなり、而して露國の我邦に對する責任に付て、主として我が滿洲方面に於ける地位を確保し、又支那に對する相當の權利の主張に勢援するに在りと云ふべく、我邦の極東經營に對し列强の猜疑盛なるべきに關して露國の後援は多大の効能あるべきことと言を待たず。

論じて玆に至れば讀者必ず問はん、日露同盟は遂に日英同盟を廢棄せんとするかと、吾人答て云はん

決して然らず日露同盟と日英同盟と互に相反せざる耳ならず寧ろ日英同盟は基礎にして日露同盟はこの基礎の上に立てらるべき建築なり、即ち日英同盟なければ日露同盟ある可らずと、試みに思へ露國が印度方面に於ける英國の勢力を輕んぜず深く之を敬重して波斯、亞弗肝、西藏に對する協約を締結せし所以のもの素より印度に於ける英國軍隊の侮る可らざるに因ると雖も、亦實に日本軍の後援ありて殆んど犯す可らざるものあるが故に非ずや、滿洲に於ける日本の地歩は强露の力を以てするも素より侮り易らざるものあらん、然れども英國外交の勢援及び公債募集の保證ありて已に侮り易らざるもの遂に犯す可らざるに至れるなり、日本と離別したる英國は東洋に於て無援の孤立なり、萬一日本を敵方に廻はすこともあらんか果して各方面に亘る植民地は之を安全に護るべき成算あらんか頗る疑問なりと謂はざる可らず、又た打明て之を云へば國際間に處しては日本は一の新參なり、ナポレオン如何に偉大なりと雖も墺國ハプスボルク皇室と結緣して其家の貫祿を高めんと謀りしは智慮ある處分なりしと謂はざる可らず、我邦は人種と云ひ宗教と云ひ列强より觀れば異分子の感なきを得べからず、苟も正義を無視し傍若無人の振舞ありて列强の嫉視を受け共同の敵とせらるゝにも至らんか國家の不利益是より甚だしきものある可らず、況んや一旦緩急あらば直に外債募集の必要あるべく、英國との親善を維持するの必要は多言を待たざるなり、然れども已に日露同盟の必要を生じたる以上、亞細亞に於ける國際時局に一大變動ありしは自ら明かにして、從來の日英同盟亦改訂を要するの機に接せり、更に進んで之を云へば新たに日露同盟成りて始めて舊來の日英同盟も、又は英露協商も其價値を能く發揮せんとするものに非ざるなきか、具體的に之を云へば露國が其經營の手を大に君府及び小亞細亞方面に延はさん欲し英國亦之を承認するも、英國に取りては寧ろ二個の有害なるものゝ中最も害の少なき方を執らんとするに外ならず、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

即ち獨逸を此方面に發展せしめんより露國の方危害比較的に少ならんと思惟するに因るなるべし、故に露國は成るべく速に君府方面に對する經營の歩を進めんと欲すべきも英國は其成るべく遲々たらんことを希望し、露の海軍が萬一にも東方地中海に精鋭を集むるにも至らば、英國は埃及、アラビヤ、南波斯の防備に附き一大危險を感ずるなるべし、是れ我日本が兩國の間に立ちて鹽梅宜しきを制し双方の均衡を把持して平和を保障すべき職務ある所以なり、また支那に於て日英往々利害の衝突あり、歐洲戰後の時局に對し我邦は支那に向ひ特種の地歩を占むべき運命の下に立てるは言を待たざるも、在支那の英人等は極力我の發展に向ひ妨害を加へんとすべきは殆んど免れざることとなるべし、此間を調和し形勢の止むを得ざる所以を事實上に示して英人を納得せしめんとするには、日露同盟の事實より善きはなかるべし、斯くて若しも日英同盟を以て國際平和の第一の保險なりとせば日露同盟は其の第二の保險と云ふべきなり、ビスマークは墺と露に對し平和の二重保險を契約するに際し一方に對しては之を秘密に附したりしも、我二重保險は總べて之を双方に打明て毫も疚き所なからんと欲するものなり。

想ふに佛人が匈奴の侵入を擊攘してより千五百年、サラセン人の侵入を擊攘してより千二百年にして、我日本は歐洲東漸の勢を防止して東亞の獨立自由を完全にせんとす、佛國が右手露國と提携して左手英國と握れる如く、我日本は右手英國と握り左手露國に結ばんとす、東亞の人は歐洲の自由獨立を尊重すべく、歐洲人は極東の自由獨立を尊重すべし、此大なる眞理に則り世界の平和を把持せんと欲せば、日露同盟の如きは即ち其一大楔子たらんとするものに非ずや、若夫れ同盟の形式、方法、時期等に至りては吾人は今より愼重の研究を積み歐洲の戰局收り、大勢一定の曉に於て兩國間協議決定せんことを期待するものなり。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政治を支配する精神力

大山郁夫

一、國家と環境

『居は氣を移す』と云ふ古い諺は、我等が幼少時代より親炙して居る所であるが、之は環境が人格の上に及ぼす影響を最も力強く言ひ表はした短句である。我等は古人の言を一から十まで肯定すべき義務を有して居ないが、世上の事實と人類の經驗とを通觀して、此決定說的表現に一面の眞理を寓して居ることを否むことが出來ぬ。近代生活に於ては環境が著しく複雜になつて來たから、それが個人の性情の上に及ぼす作用を的確に指摘することは、極めて困難なことゝなるに至つたけれども、而も仔細に視來れば、各人各樣に其環境の影を宿せるを認むるのみならず、如何に個性の強き人と雖も、畢竟環境以上に超越して居るものでもなく、又超越し得るものでもないことを悟るのである。かの無限の寂寥の境界が社會的群居生活の反射である如く、嚴密に云へば、一般に奇癖と見做されて居る特異の個性も亦た、矢張り環境の一局面を強く映出して居るものたるに過ぎぬ。されば各個の天才も凡才も、強者も弱者も、均しく是れ境遇の兒であり、時代の產物である點に變りはないのである。否、そればかりでは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なく、强者こそ却て最も明瞭に時代精神（Zeitgeist）を發現するものであることは、マッケンジーが其名著『社會哲學提要』（Introduction to Social Philosophy）に於て道破して居る所である。古來郷里に容れられざるものと相場は決まつた豫言者先覺者の徒は、一見恰も無謀にも時代精神に逆行するものゝ様であるけれども、實は最も深刻に且つ充分に時代精神を吸收して居るがために、終局に於ては社會の風潮を指導し人心の機微を支配することが出來るのである。世に時代精神に觸れざる改革者は、未だ曾て在つた例しがない。

國家の生活も亦環境の影響を極めて多く受くるものであることは、個人の生活と異る所はない。加之國家の環境は其規模が更に廣大無邊であつて、風土、氣候、山海、河湖、沙漠、森林、土地の廣狹及びその肥瘠の如き自然現象は言ふに及ばず、風俗、言語、種族、思想、宗教、等の人的社會現象より、進んでは遠近諸國の勢力の權衡乃至その駢立、對立、及び聯立關係の如き國際的社會現象に至るまで、悉く皆其重要なる部分を構成して居るのである。中にも自然的環境が國家生活の上に及ぼす影響は最も直接であり、且つ最も表面的であるよりして、古來多くの觀察者の注意を惹いた。マキアヴェリやモンテスキューは既に早くより此關係を學術的に説明し、バックルは其著『文明史』（History of Civilisation）に於て、氣候、地勢、風土が國民生活を形づくることを極論したのは、有名な事實である。

自然の恩惠の潤澤なる熱帶諸國に於ては、人民が動もすれば遊惰に陷り易く、之に反して風霜氷雪の暴威を逞くする寒帶地方に於ては、人民が自然と戰ふ努力の度に過ぐるがため、自ら萎縮退嬰の風を生じ、眞に農工の產業の繁昌するは、兩者の中間なる溫帶地方であることは、誰しも異論のない所である。又河が文明の發源地であることは、支那の黄河や揚子江や、印度のガンヂスやインダスや、小亞細亞のユーフレーツやタイグスリスや、埃及のナイル等の千載の歷史が之を物語り、又現今に於ても全獨主義の主唱者は、ライン

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

及びドナウの兩河口が、他國に扼せられて居る事實を憤慨し、佛蘭西の愛國者も同樣に『ラインへ！ラインへ！』を絶叫して居るのである。山脈が地方分立の形成を馴致することは、マキアヴェリ以來の定論で、瑞西の聯邦組織の維持せらるゝ原因の一部は之に歸せられ、獨逸の南部北部の間の民情の差異も之に負ふこと多く、西藏が永く世界の神秘境として外界より遮斷せられしも亦之がためであつて、又我國の表日本と裏日本との色彩の分界線は、兩者の間を縫うて走る一帶の長き山系ではないか。海洋も亦國家の運命を支配する強大なる要素である。昔のフィニシア及び希臘の膨脹は之あるがため可能であり、中世紀のヴェニスやジェノア、近世紀の西班牙、葡萄牙、和蘭、英國は曾つて海上の覇者として國民的光榮を贏ち得て、中にも英國は今尚ほ的確に之を維持して居る。若し夫れ日本及び英國が四面環海の島國的地位を以て、完全に國民的統一の實を擧げて居ることは、歐洲大陸の中原に位して諸強國の中間に介在し、ために久しく地方分立的氣勢に禍せられ來りたる獨逸などの羨望の標的となつて居る所である。殊に英國の歐洲に於ける軍略上の地位を重からしめ、之をして久しく『光榮ある孤立』を守つて、大陸に於ける均勢の鍵を握らしめし所以は　其周圍を環る潮流險惡なる海岔及び海峽であつて、曾てブローギューで潮合を待てる大奈翁をして、『七時間の暗黒と一回の順風だにあらば、世界の運命を一擧に變更せんものを』と痛歎せしめたのも、亦寔に故ありと謂ふべきである。最近世に於て帝國主義的運動が諸强國間に流行するに及びては、海洋の重要は一層其程度を進め、二十世紀の劈頭に當りて極東の天地を震撼せしめた日露戰爭は一面より見れば、ビザンチン帝國の榮華と使命とを繼承すると誇稱するザーの社稷が、ピーター大帝以來の政策の骨子たる不凍港獲得の企圖を東洋に試みんとしたるためであるとも說明することが出來る。

　歷史の進展を唯物的見地より解釋せんとする徒は、斯の如き狀態を見て、直に形而下の現象が人類の政治を支配する唯一の要素であると說明する傾がある。無

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

論彼等と雖も、斯る形而下の環境の上に作用する人間の意思の力を認めない譯ではないが、彼等に云はせれば、斯の如き人間の意思の力も亦、其環境の自然現象の結合の關係より生ずるものである。彼等は一切の人事を唯物的基礎の鑄型に流し込まねば承知の出來ぬ、思想上の統一論者である。若し人あつて、「人類の生計の衝動は饑餓(フンガー)と戀愛(リーベ)である」(リッペルト)と說明すれば、彼等は其戀愛も亦饑餓と同じく、最終は物質的條件の上に立つて居るものであるばかりでなく、前者は全然後者に對して從屬的地位を有して居るに過ぎぬとの、一元的說明を加へねば休まぬであらう。之れを政治の上に適用すれば、國民的向上心は究極に於てパンの問題に歸し、デモクラシーとは特權階級の經濟的資源の壟斷に反抗する一般民衆の喚叫である。視來れば其根柢に何等の倫理的基礎なく、高尙と云ふも下賤と云ふも、つまりは人間が得手勝手に設けたる標語に過ぎぬ。彼等は謂ふ、見よ、獨逸帝國の統一の前驅をなしたるものは關稅同盟(Zollverein)ではないか。英國の植民地經營は、新獲得地の經濟的誅求から出發したではないか。米國の奴隷解放戰爭を人道運動と云ふは非常なる誤稱(ミスノーマー)で、實は工業立國を眼目としたゝめ保護貿易主義の樹立を要求した北部と、棉花栽培を主要產業としたゝめ自由貿易主義の維持を希望した南部との兩地方の勢力の衝突に過ぎぬのである。日露戰爭の根柢に國民道德的精神の片影を發見せんと務むるは、蜃氣樓上に永久の居を求めると一般である。鴨綠江邊の森林に投資した露國の諸貴族の施設が、偶ま國內の人口過剩の弊に堪へずして西方に發展せんとしたる日本の勢力の進路を杜塞したるがために生じたる波瀾の內に何の道德的を意義認め得べきぞ。而も此戰爭を終熄せしめたるものは、露國の國家的破產を憂慮せし佛國の資本と日本の過大の浪費を悅ばざりし米國の資本ではないか。戰後に日本が罪もなき朝鮮の首を扼ちた慘劇と、日露兩國が滿蒙に於ける勢力範圍の分配とは何たる露骨なる利益の交換ぞや。彼等は又謂ふ、見よ、世界の諸强國は野蠻人を統御し敎化するを以て文

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明人の權利と呼び、彼等により善き文物と制度の恩澤を及ぼすは、彼等野蠻人自身の利益であると揚言する。併し之は無論文明人自身の利益の目的より出發したる僞善の假面である。されば植民地の土人の慰撫が本國の利益と一致せざる場合に於ては、躊躇なく之を驅除することは、猶ほ野獸の如くではないか。米國人のアメリカン・インヂアン種族に對する待遇、獨逸人の阿弗利加植民地の蠻人退治、日本人の臺灣生蕃討伐は、土耳古人のアルメニヤ人鏖殺の擧と、相距ること僅に一歩である。而も獨逸が今回の戰役開始前に同國植民地開設三十年を紀念した頃、自國の製造品の捌け口たるべき屬領地の土人の頭數の統計上著しく漸減する事實を發見して、愕然として覺醒し、悄然として自ら弔したことは、自業自得とは云へ笑止千萬の話ではあるが、當面の利益の前に文明人の僞善の假面が外づれ落ちたのは興味あることである。然るに此獨逸は、往年宣教師を植民地に運ぶ英國の商船が、同時に安價に製造せられたる偶像の荷を搭載した事實を摘發し、氣味の惡い冷笑をジョーン・ブルの頭上に浴びせ掛けたと同一の獨逸であることは記憶せねばならぬ。又近頃日本は支那に對して同文同種と云ふ感傷的口實を以て接近するの迂を悟り、頻りに利益問題を提唱し、支那の領土保全獨立維持は、日本の實際的必要であり、日支の親善は兩國の利益を增進する所以であると云ふ樣になつた。是れ日本の外交的辭令上の一般の進步であるが、これは必ずしも日本の發明でなくして先進國殊に英國の政治家政論家の口眞似である。

凡そ斯の如き事例は枚擧に遑がない點よりして、政治的唯物論者は、益々其氣焰を高むる根據を有して居る。併し乍ら我等は、斯の如き無道德（アンモーラル）（敢て不道德（インモーラル）とは云はぬが）の政治觀が、內政上幷びに外政上非常なる害毒を流すものであると云ふ、實際政治上の動機より出づる憂慮を離れても、尙ほ斯る唯物的政治觀は、僅に楯の一面を見たものたるに過ぎずして、其政治的事實の觀測の上に缺陷があり、且つ之がために本來複雜である現象と經過との關係を、不當に單純化して考

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へんとした點に、既に誤謬の種子を包含するものなることを指摘せねばならぬ。

二、國家生活と國民精神

個人が環境に支配せられると云ふことは、僅に一面の眞理であるが、同時に個人は其意思の力に依りて絶えず自巳の環境を改造若くは創造しつゝあるのである。若し個人が徹頭到徹尾環境の奴隷たるを以て終始するものとせば、世に進歩といふものゝあるべき筈はない。文明とは人が自然を征服する程度を指示するものであると云ふ在來の解釋は、實に此消息を語るものに外ならぬのである。

國家の環境に對する、亦然り。國家は單に環境の產物たるに止るものでない。國家又は地方自治團體は、國民精神若くは市民意識に依りて、始終環境を改造若くは創造しつゝあることは、吾等が常に國家生活及び都市生活の上に於て目睹する所である。殊に近年歐米の諸都市が、自然の環境を支配して、市民の物質生活丼に精神生活の上に新境地を開拓せんとする努力は、傍觀者の驚嘆心を喚る一種のローマンスである。米國の有名なる市政研究者のフレデリック・ハウは、今後の都市問題の中心は、最早其政治法律問題の方面に非ずして、新環境創造の一點であると云つた。都市のあらゆる施設に於て、大に歐洲諸國に遲れて居る米國は、最近に於て俄に覺醒して、都市の美觀、風儀、秩序、社交、敎育、衞生等の部面に於て、幾多の政治上、法律上、社會上の困難と闘ひつゝ、新環境 創造せんとする努力は、同國を通り綴りの旅客の瞳子にも歷然と映ずるのである。人若し紐育や市俄古や費府等の大都市より、ボーストン、クリーヴランド、デトロイ、タコーマ、ロースアンジェリース其他の東、中、西部各地方の中以下の總べての都市の現狀及び將來の計畫を見れば、性來ヤンキーを好むにもせよ、將又好まざるにせよ、此等の都市の前途を祝福しないで居られぬであらう。昔者大統領のトマス・ジェファソンは、都市生活の弊害を見て『都市は政治團體の上に生ずる腫物である』と言つた。成る程洋の東西を論ぜず、都市として

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

百鬼夜行の魔窟を有せざるはなき狀態を見れば、彼をして此語を發せしむるに至つた動機も首肯が出來るが、現代人は此腫物を不治の症と見て解剖刀を下すことを躊躇する程も、宿命的觀念に囚はれて居ない。少くとも此醜惡なる部分を隔離して、他の健康なる肢體へ病毒を傳染せしめないだけの要意をせんと努力して居るのである。概言すれば、新環境を個人生活及び團體生活の上に創造せんとすることが、現代人の生命である。「生の創造」と言ふことは畢竟此意味に外ならぬ。而して此創造的事業の發動機は、意思精神の力である。團體生活の場合に於ては、市民的精神或は國民的精神の力である。政治を支配する最終の力は此精神力である。此精神力も亦環境の産物であると云ふのは、政治的唯物論者の常套語であるが、創造的意思の衝動に驅られて、前途の運命を開拓する國家國民は、その樣な空論には耳を假さない。彼等は國民的精神力の實在を確信し、之に依つて以て國家の生命の充實擴大を計らんとするのである。

人類の意思精神の力が、自然の環境を改造したる跡を尋ぬれば、我等は今更ながら悚然として其事業の偉大なるに驚異の眼を見張らねばならぬ。無論人類は其放縱と盲目とに依り、此力を誤用して、建設すべき所に破壞を行つたことのあるのも亦事實である。我國は年々夏日には洪水の氾濫に苦んで居る。昔者ナイルの洪水は埃及の平野を一帶の沃土に化した魔力を示したが、我國の洪水は、定期的に家屋財産を破壞し、人畜の生命を毀傷し、電線を切り汽車を止めるのである。而も此災害の幾分は天候に歸すべきものとするも、日本人も亦森林濫伐の如き積極的罪過、若くは豫防の不備の如き消極的罪過の責任より免るゝことは出來ぬ。我國の河川中全然氾濫の憂なきものは、北海道の石狩川のみであると聞いた。人力の及ばぬ所天災なく、人力の及ぶ所人災あるは、文明人の恥辱に非ずして何ぞや。曾て東南歐羅巴が希臘人の支配を受けた時には全國土皆美田であつたのが、一朝土耳古人の政治の下に來つてから此方、甚しき荒廢に歸したとは歴史家の說

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く所である。我日本人は少くとも此一點に於ては、土耳人と名譽（？）を分たねばならぬ。

併し乍ら人類の建設的環境改造力には更に偉大なるものがある。凡そ人類が環境に對する態度は、環境に對する順應と、環境改造若くは創造との二大綱に分つことが出來る。前者は消極的であり、後者は積極的である。其中間には順應しつゝ改造する境涯と、改造しつゝ順應する境涯とがある。各國家は其生の慾望を充たすために、常に此等の作用を行ひつゝある。而して生氣衰へて寂滅に近づきたる國家は、順應の作用を行ふに日も亦足らざる姿があるが、精力旺盛にして興隆の氣運に向つて居る國家は、順應の作用を行ふて餘裕綽々、尙ほ進んで盛に改造の作用を行ふのである。而して各國民の個性が最も明瞭に現はれるのは、此環境改造の一點にあるのである。アゼンスの文化生活は希臘人固有の天才に依りて創造せられ、羅馬の帝國主義は羅馬人本來の統一力に依りて建設せられた。英國が十八世紀の末葉以來製造工業を盛に興して、産業革命の急先鋒となつたのは、單に同國が鐵石炭の産額に於て天與の恩惠に浴して居るためであるとするは、英國人特殊の技能に相當の敬意を拂はぬ唯物的見解である。支那にも同じく鐵石炭の無限の大富源が、開闢以來茫々幾千萬年、空しく沈默せる大地の下に横はつて居たではないか。苟くも國民に天才があれば、アイスランドの如き海上の孤島の磽确の寒土の上にも、都市が興り、文化が生じ、ローマンスが出でことは歷史の示す所であるに、國民に才能が缺乏するか、若くは停滯する時には氣候溫和、天産豐富なる南米の樂土と雖も、久しく低級なる文化の支配の下に、そが値する開發を受けなかつたことは、今は隱れもない事實である。然るに近年同じ南米に英獨佛の資本と人とが流入するに及びて、國土の趣致が俄に革まり、今後の無限の發展を暗示して居ることは、人と環境との關係を知る上に於て注意すべきことである。

近世紀に於ける機械的文明の進歩は、國家生活の環境を變更するに與つて大に力があつた。殊に交通の發

達の世界政局の上に及ぼした影響は、測るべからざるものがある。パナマ運河の將來は尙ほ未知數とするも、スエズ運河の開通は、英國の印度に對する支配を確實にしたのみならず、其埃及政策の根本を形成して居る。若し夫れ此運河が極東の市場を歐洲の政治舞臺に接近せしめたがために生じたる世界政局上の大結果は、今尙ほ其繼續中に在るものと見るべきである。極東諸國が歐洲の政治と直接の交渉を持つ樣になつたのは、此がためであると謂ふも過言ではなからう。海運の進步が國家の興亡の上に及ぼした影響は、餘りに顯著であつて、之を詳說する必要がない位である。舊世界と新世界を區劃して居た太西洋が、蒸汽力に征服せられてから以來は、歐米の政治家は多くの點に於て在來の政策を立て直す必要に迫られた。其昔交通不自由の爲にニユー・イングランド十三州の植民地を失つた英國は、海運の進步の御蔭で、それよりも遙に遠隔の地にある濠洲の植民地を、今尙ほ確實に保有して居る。之に反してモンロー及びアダムスの時代に於て、南北兩米を歐洲諸國の政治上及び經濟上の勢力の外に置かんと計つた米國の畫策は、紐育よりリオ・デ・ジヤネイロに航するよりも快速に、倫敦若くは漢堡より同地に到達することを得る今日に於ては、全然畫餠に歸して、南米の英獨佛に對する經濟上及び金融上の關係が、米國に對するそれよりも遙に密接となつた事實は、一部のヤンキーの排外交黨にして憤懣に堪へざらしむる所である。最近飛行船及び潛航艇の發明及び操縱の技術の進步は、英國の島國的位置より生ずる强みを大に減退し、且つ其制海權に幾分の打擊を與へたことは、我等の經驗に尙ほ新なる所である。之に加へて本世紀に入つて以來の獨逸海軍の目ざましき膨脹は、如何に英國の不安を增大したであらう。英國の艦隊は最早、英佛海峽の守りを天候に任せて居る間に、他の方面に出動して敵艦隊を擊破するネルソンの戰術を踏襲することが出來ぬ樣になつた。

英國の史家故クラム教授は、其著『帝國的ブリテインの起源及び前途』(Origins and Destiny of Imperial

Britain)に於て、國家生滅の跡を尋ね、各國家の衰亡に關して報復説及び輪廻説を掲げ、何れの國家も究極は其崩壞の運命を免れ難きものたることを説き來り、最後に於て畫龍點睛、話一たび大英帝國の前途に及ぶや、近時の機械的文明の進歩は國家生活の物質的環境を改造したがために、今より以後は既往を以て將來を揣ることが出來ぬと逃げて、以て此點に關して宿命的悲觀説に陷ることを避くるに成功した。彼を此論斷に導いた動機は姑く之を問はず、我等は此言の中にも味ふべきものゝ存ずることを認むるのである。

近世史上に於て、環境に對して最も偉大なる順應力と改造力とを示したものは、何と云つても獨逸國民であらう。ツライチュケは其『政治學講義』(Politik)に於て、昔の獨逸人の努力が天候の上に及ぼした影響に就いて斯の如く述べて居る。曰く、『ツェーザーやタチトゥスは獨逸國の永遠の霧を叙して居るが、吾人は何も彼等の形容を文字通りに解釋する必要はない。とは言へ、無數の森林の採伐及び幾多の沼澤の浚渫の結果、今日獨逸の氣候が最早ツェーザーの時代の樣に濕潤でないことは的確なる事實である』(Politik, Bd. I. 1897. p. 209.)と。若し夫れ獨逸國民が天惠の稀薄なる國土の上に、近世の科學上の智識と技術とを施して、農業に將又製造工業に一大飛躍を試みたとは、世界の耳目を聳動せしめた所である。天然の磽确を化して禾穀穰々、野に黃金の波を湛ふる沃土となす農業上の材能は、彼の國人の有理なる誇りである。されば國外に流離する獨逸人が、北米の平野に、將又南米の丘陵に、農民として著大の成効を收めて居るのは、亦淺からざる宿縁の存ずるものがあるのである。彼等は徹頭徹尾Tlatkraft(遂行力)の信者である。彼等の環境改造力は、十九世紀末より今世紀へかけての商船と海軍との破天荒の發達に依りて遺憾なく發揮せられた。獨逸と海との關係に就いて例のツライチュケが『政治學講義』に於て論じた所は、極めて趣味のある言葉であるから、今其一節を左に譯出引用する。

『獨逸に於ける八方塞がりの關係は、何よりも先

づハップスブルグ家の純平たる內地政策に負うて居る。獨りヴァルレンシュタインのみは、懸け離れたる流星の樣に、此間に立つて、斬然として異彩を放つて居る。彼の警眼は彼をして當時既に、ヤーデ灣頭に獨逸の一海港を築き、且つ北海（Nordsee）と東海（Ostsee）との間に一條の運河を開鑿せんとの計企を懷かしめた。一體獨逸は自然に依りて甚しく繼子あしらひにせられて居る國である。東海(オストセー)は主として內海の性質を帶びて居るに過ぎぬ。此事は其海邊の住民の上に、海洋の感化らしいものが極めて乏しいのに徵しても、直に判明するのである。ポムメルンの海岸に數時間暮した處で、海洋近きに在りと云ふ感じは少しも起つて來ない。又北海(ノルドセー)は獨逸側に於ては、其遠淺の砂洲のために、考への及ぶ限りの劣惡な海岸を持つて居る。斯の如く總べてが出來るだけ都合惡く出來て居る。けれども此點に於ても亦吾人は、人が如何にして天然の障害に打勝ち得たかを見ることが出來る。不便不利なる海岸しか有せざる此獨逸も、尙ほ既往に於ては第一流の海國であつた昔もあり、又將來に於ても、神若し望み給はゞ、再び爾かあらねばならぬのである。」（*Politik*, Bd. I. 1897. S. 215-216）

「神若し望み給はゞ……」然り、否。神意に適ふか適はざるか知らず、獨逸人の努力は彼等をして、前路に橫はる萬難を排除して、短日月の間に大商船國大海軍國たるの實を擧げしめ、世界の海上王たる英國をして覺えず不安の警戒を加ふるの已むを得ざるに至らしめたのである。新興國の環境改造の威力も亦凄しい。昇る旭に象徵せらるゝてふ東海の島帝國の同胞よ、我等は一騎打で獨逸に敵することを得るに至るまでは、枕を高くして安逸の夢を貪ることが出來ぬのである。

三、國民精神と代議制度

凡そ近世の各國家に於ては、其政體の樣式如何を問はず、苟くも多少の程度に於てデモクラシーを行ふ所に於ては、其內治外交上の最後の支配者は、國民の精神である。國內政治に於ては、一般民衆の間に鬱勃た

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る意思、希望、理想等は其善惡兩方面ともに輿論の聲となりて發現し、それが議會に反響して最後に國家の法律となり、具體的形式を取りて表はれ、再び其出處たる一般民衆の上に復歸するものであるとは、幾多の學者の研究に依りて確立せられたる原則である。『法律は主權者の命令なり』とするオースチン一派の學徒の解釋は、只形式に因はれたる僻說であつて、此の如き臆斷の上に立つ學說は、如何に間然する所なき形式論理の體裁を備ふるとするも、少くとも政治論としては實際に觸れざる迂言として聽くより外はないのである。我等は國民精神（Volksgeist）を離れて法律制度を解釋することは出來ぬ。又國民精神と無關渉な法律制度が、よし何かの間違ひで制定せられることがあつても、舊き革袋に新しき酒を盛りたる場合の如く、そこかしこに破綻を生じて、結局其實施が有名無實に終るか、若くは早晩其改廢の運命に遭遇すべきは云ふを俟たぬ。現に斯の如き事例が我等の社會生活に、實際常に生じて居ることは周知の事實ではないか。

國家生活の環境は、その形而上のものたると、形而下のものたるとを問はず、國民の個人生活及び團體生活の上に直接の關係を有して居るものであることは、言ふまでもない。而して此環境の維持及び改造、及び一定時に於ける特定の環境に順應するために國民の個人的及び社會的諸勢力を結合し、組織し、驅使する事業は、實際の國民的精神を基礎とするものでなくてはならぬ。蓋し國民が組織せられたる國民としての意識を得た時代に於ては、彼等が或る形式に於て、自己の生活の最も重要なる背景たる物質的及び精神的環境の上に作用する國家的事業に、自己固有の意思を以て參加せんとことを希望するに至るは、國民心理の要求の當然の結果である。是に於て國家生活の環境の上に作用する國家的事業中最も重要なる部分である所の立法事業に、一般國民が國民として參與せんがために、參政權を得んとするの衷心の要求が生じ來るのである。少くとも政治的意識に覺醒したる國民の間に、此種の要求が自然に湧出し來るのである。此國民精神より生

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずる自然の要求を無視して單獨の意思を國家生活の上に實現せんとする爲政者は、所謂專制政治家であり、又國民精神と沒交渉なる法律制度を制定維持して、之を國民の上に强行せんとする國家は、所謂專制國家である。專制政治及び專制政治家、並びに此等兩者を辯護する學者（ボダン、ホッブス、ボスエー、フイルマーの如き）は、既往に於て必要であつた時代のあつたことは、各國の歴史上的確なる事實であるが、今日の如く少くとも文明諸國に於て國家的意識及び國民的精神が政治思想の根本を形づくる樣になつた時代に於ては、其等が悉く時代錯誤に屬する無用物となつてしまつたことも亦、同樣に的確なる事實である。

我等は此立脚地よりして、一部の人々の批難の標的となれる、現代の政治上の代議制度を是認せんと欲するものである。古昔の希臘で見た一都市が一國家の大部分であつた樣な小國家の時代に於ては、現今瑞西の多くのカントンで其類例を見る如く、人民全體が重要なる事件に關し、人民會議（ἐκκλησία）の直接に國政に參與することを得たとするも、現代の特徴の一たる大國家に於ては、最早之を實現することが出來ぬのみならず、睹易き多くの理由に依りて、之を實現することは望ましきことではない。けれども同時に覺醒せる國民の意思即ち國民精神を全然法律制度より隔離するは、前にも述べた如く現代國家の取るべき道ではない。是に於て乎近世に於ては代議制度が國家生活の環境の變化に順應して自然に發達して來たのである。代議制度は『造られたる』ものでなくて、『成長したる』ものであるとは、之を謂ふのである。我國に於ては專制政治制度より代議制度に推移する途中の過渡期が短く、且つ其變遷が急激であつたゝめ、之を以て國民精神とは何等の脈絡がないもの、換言すれば人爲的に製造せられたる附加物であるかの如く考へる者がないでもないが、是は素より誤解である。無論我國の現今の代議政體は外國の土壤の上に成育したものを我國に移植したものには相違ないが、若し我國の政治的環境が此制度の存立に有害なものであるならば、既に今日ま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でに枯死して仕舞つて居る筈である。素より代議政體移植後日尚ほ淺く、且つ我國の政治家及び國民が此制度に對して、そが要求するだけの注意を與へなかつたから、其發達が極めて不完全であつたことは蔽ふべからざる事實であるが、斯る不利なる事情の下に於ても尙ほ、そが今日我國民の政治生活の根本組織となつて居る所以のものは、それと國民精神との間に、根柢の深き冥合があるからである。今日に及んで專制的政治家が出現して、議會を破壞し代議制度を轉覆せんと企つれば、國民が之を默過せざるべきは、明々白々の事理である。由來政治意識に覺醒せる國民は、國民的精神と國家の法律制度との間に脈絡を求むる熱烈なる願望を有するものである。是れ彼等の生の慾求（Lebenswille）より發し、自己主張の本能より發する不可抗的渴求である。然り、それは利害の打算を超越せる不可抗的渴求である。我國民の政治意識に覺醒せる範圍は、縱し西洋諸國民に比して狹小なりとするも、苟くも其覺醒せる範圍内に於ては、此不可抗的渴求が潛勢力として、鬱勃として橫溢して居るとは理論及び事實の共に證明して居る所である。而して此不可抗的渴求の安全辨は、現狀の下に於ては代議制度であり、而して又其理想よりすれば議院政治である。何れの制度と雖も、總べての時代及び總べての事情の下に通じて善良であるものゝ存在しないとは、アリストテレスが旣に二千年の昔に於て道破せる所である通りに、代議制度が國民精神に適合して居ると云ふは、單に現代の國家生活上の環境を標準として言ふものである。されば代議制度は今後國家生活上の環境が變化するに從つてどう變化すべきものなるかは、素より豫見することが出來ないけれども、只一つ安全に斷言し得ることは、將來代議制度がどの樣に進化しても、苟くも國民の政治意識が消滅若くは減退しない限りは、國家の法律制度と國民精神との間の連絡を益す容易に疏通する制度の方へ向上こそすれ、兩者間の連絡を杜塞する危險の常に伏在する專制政治的制度に退化するが如きとは萬々なかるべし、との一事である。（玆に「向上」及び「退

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

化」と云ふが如き價値判斷上の表現を用ひたのは、筆者が本節に於て自己の信條と主張とを開陳して居るため、意識的に之等の語句を驅使したものである。本來ならば『變遷』とか、『推移』とか云ふべき所であることは言ふまでもない。）

代議制度は各國に於て今尙ほ試驗時代に屬するものであつて、其本質的價値に就いては、未だ最終の判決を受けて居ないことは事實である。併し乍ら現狀の下に於ける國家生活上の環境に在りて、國民の意思精神と國家の法律制度との間に一道の確實なる脈絡を通ずべきことを必要とする近代的デモクラシーの要求を充たす上に於て、これ以上に有効なる名案が提供せらるゝまでは、之をして益す進むべき所に進ましめ、發達すべき所に發達せしむるとを務むべきは、現代政治人の義務であると謂はねばならぬ。或は極端なる民主制の國家に於ては、イニシアチーヴ（人民發案權）及びレファレンダム（人民票決權）の適用の範圍を擴張して、一般人民の立法の上に直接に參與する機會を多くする試みが行はれて居るが、此の如き制度は如何なる案件に關しても實行することの出來るものでなく、又其實行の出來る範圍內に於ても、今日までの經驗に依れば多くの場合に於て、代議制度以上に當初の豫期を裏切つて居るのである。縱し又イニシアチーヴ及びレファレンダムが將來に於て其適用の目的物及び範圍を擴大し得べき見込がありとするも、それは當然代議制度の充分に發達し切つた後に來るべき問題であつて、單に代議制度のみを持ち扱つて居る國民間に其實行を期し得べき底のものではない。

殊に我國に於ける如く代議制度採用以來年所を經ること尙ほ少く、且つ又政治家及び一般國民が衷心より其必要を認識しつゝ、事實に於て未だ之に對して誠心誠意を以て保育助長的努力を充分に盡さゞる時に當りて、早くも其既往の成績に失望し其將來を悲觀する者あるは、我等は何う考へても其早計に驚かざるを得ない。日本人は善く云へば諦めがよくて執着心が少く、惡く云へば環境改造の意思力に乏しく、動もすれば政

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

治的宿命觀に陷り易い。過去に於ける專制政治の下に養つた受働的政治生活の餘習の久しく存續する、一に玆に至るかと思へば、積極的創造を生命とする現代精神を呼吸したる徒をして、慨然として腕を撫せしむるに餘りがある。人はよく議會に於ける國民代表は單に表面上の形式であつて、毫も其實績を擧げて居ないと謂ふ。併し乍ら我等は議員選擧に關して、人智の考案し得る限りの方法を講究し且つ之を實驗したことがあるか。未だ之を爲さずして而して代表の原則を根本的に批難するは、何たる無氣力のことぞ。人は又よく議員の品位を指議して代議制度の必然の產物と謂ふ。如何にも我國に於ては每年議會開會中に、議員の品位の低劣なることを確證する事例を見るを常とするは、誰しも遺憾千萬とする所である。併し乍ら議員の品位は、直接には選擧人間接には一般國民の品性、教育、及び政治的訓練の程度を反映するものである。識者がデモクラシーの基礎は、國民の教育に在りと謂ふは、畢竟これがためである。然るに我國に於ては、普通教育を重んずる點は善しとするも、既往に於て立憲的人格造就の手段たり、且つ政治的訓練の基礎たる政治教育を顧みざりしのみならず、政府の施設により積極的に之を妨害し來つたとはなかつたか。立憲政治の根源たるべき政治教育の途を杜塞して、單に其美果のみを收めんことを務むるは、玉の盃底なきに美酒を充さんとすると一般、矛盾に非れば徒勞である。而も記憶せよ、第三十七帝國議會々期中、普通教育に於て政治教育を授くることの非を叫んで、高田文相に肉薄した男が、日本の貴族院議員中にあつたことを。思へば我國の政治的環境には、我等現代的精神氣魄に燃ゆる青年國民の改造乃至創造的意思及び之に附隨する永遠の努力を必要とするものが、無限に存在するを見るのである。

我等はよく政治的思索力の貧弱なる人々の口より、專制政治でも苟くも善政を行ふことを得れば宜しいではないか、と云ふ奇論を聞かされる。併し乍ら政治意識に覺醒せざる人々は兎も角、一旦政治的意識に覺醒

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せる人々に取りては、國民の一部としての自己の意思と國家の法律制度との間に疏通機關を必要とすることは、自己の生存の一部である。我等は專制政治家が國民としての我等の利益であると勝手に忖度してなしたる施設を受働的に甘受して滿足するものでなく、我等獨自の意思を以て國民としての我等の已み難き要求であるとする所のものを能働的に爲政者に有効に通ずる道を疏通し、且つ之を確保せねば已まぬものである。換言すれば政治的意識に覺醒したる我等は、單なる國政の容體たり、爲政者の傀儡たるを以て滿足するものでなく、進んで國政の事實上の主體の一部を構成せんことを求むるものである。我等は之を以て單に政治人の本能と見做すのみならず、同時に其國家に對する道徳的義務と思惟するのである。暫く余の經驗より之を證明することを許せ。余は議員に選良を擧ぐるとを務むるを以て、余の祖國に對する道徳的義務の一と心得て居る點に於ては人後に落ちぬ積りである。而して余は國家に對して直接國税十圓よりは幾分か多額の税を納めて居る。併し乍ら余は現行衆議院議員選擧法に於ける住居上の制限よりして、余尙ほ選擧權を行使して此國家的道德義務の命令を果す資格がないのである。余に取りては此事は財產上の自由權を侵害せられたと同程度に心苦しいのである。余は又歐米に滯在中、彼の地の高度の文化の環境中に居ながら、常に一種の不滿か、否。寂寥か、否。云ふに云はれぬ一種の生活上の缺陷を感じたのは、余自身が周圍の政治上の事件の進行とは何等の有機的連絡關係を有して居なかつたことであつた。余の在米の友の一人は、一日余に向つて『僕をして米國に永住する意思を起さしめない唯一つの原因は、僕等日本人が此國に於て選擧權を得る機會の絕無であることとである』と語つた。加州に在留する日本人が米國人の社會上の事況に冷淡なる一原因は、日本人に歸化權なく從つて選擧權なきが爲である。米國の政治運動者は選擧季節に於ては、選擧權(vote)を有するものと見れば平素彼等が非常に輕蔑するニグローにさへ慇懃に頭を下ける。現に余は有權者と見誤られて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（但しニグローと見誤られたのではない）、彼等の鄭重なる挨拶を受けて痛み入つたことは、余の市俄古滯在中に於て實驗した所である。凡そ斯の如き政治生活の幾微の間の消息は、政治的感覺の鈍重なる人の解釋し得る所ではない。そは兎も角も現代的政治人の衷心の中に流露する此强烈なる參政權の要求を抑壓する政治は、如何なる種類のものたりとも善政であり得ないのである。何となればそは我等が生存の一部として尊重する精神的財産（Geistige Güter）を我等より掠奪することになるからである。故に政治的意識の一般人民間に傳播したる現代に於ては、專制の下に善政を行ふと云ふ思想は、根本より謬妄を極めて居るものである。

我等の此點に關する主張を批評して、それは西洋の政治狀態に適合する議論であるが、日本には適用が出來ない意見であると云ふ人士がある。此派の論者は政治生活に於ける人間の心理作用の根本原則に東西共通のものゝ存在することを否認する如く見ゆる點に於て、我等をして其觀察の淺薄若くは迂遠に驚かしむるに足るのである。余は斯の如き批難を聞く毎に、曾て何かの書物で讀んだ次の逸話を思ひ出さないで居られない。その話の筋を述ぶれば、英國に於てチャールス・ダーウィンの進化說が始めて喧傳せられた時、同國貴族の一人たる某は大に憤慨して、人間が猿猴と共同祖先より分れて進化したものであるとは、近頃怪しからぬことを聞くもの哉。猿猴と祖先を共にして居るものは、それは大方平民のことであらう。少くとも英國貴族の祖先は猿猴とは何等の親族關係を有して居らぬ。と云つたとの事である。日本に於て進化論が紹介せられた際にも、文學博士故黑川眞賴氏は之に抗議して、日本人は遠く神代の昔より猿であつた時代は曾てない。其證據としては、上古時代より『民草』と云ふ日本語はあつたけれども、『猿草』といふ日本語は全然なかつた。と論じられたと傳へ聞いた。餘りに馬鹿げて御挨拶の仕樣のない名論である。古往今來、學術界に於ても笑話の材料は殆ど無盡藏にある樣に思はれる。

或は今後の政治に其典型をプラトーンが其『理想國

家篇』(Πολιτεία)で描いた優者政治の樣式に求めねばならぬと說く者がある。併し乍らプラトーンの時代に於て善良と見做されたるもの、必しも現代に於て優秀と限つたものでないことは、アリストテレスの諸制度相對價値說に依るまでもなく、誰しも考へ得る所である。無論此古今獨步の思想上の巨人の傑作中の傑作たる『理想國家篇』は、其中に不朽の眞理を包含して、今尙ほ吾人の寶典たる價値を十二分に保有して居ることに異存のあるものは一人もあるまいが、されぱとて我等は之を鵜呑にして、全篇を通じて初より終に至るまで之に裏書する必要はない。第一、プラトーンが夢想せし理想國家は、彼の時代に於ても畢竟理想中のものであつて、其實現が不可能若くは困難であつたことは、彼がシラクースのディオニシウス父子の朝に立ちて前後兩度其所說を事實の上に體現せんと試みて蹉跌した跡を見ても推測することが出來る。或は彼は理想家であつたが實際的經綸の手腕を缺いたがために、彼の實驗は遂に失敗に終つたのだと云ふ歟。然らば我等は彼の所說を、一大理想家の美しき冥想の痕跡として取扱ふに止まるが寧ろ安全である。彼自身とても後年の著作に於て『理想國家篇』中の主旨を多くの點に於て制限して、之をして實際的事況に近づかしめしのみならず、晩年の述作として傳へらるゝ『法律篇』(Νόμοι)に於ては、斯の如き理想は只神の子の間に於てのみ實現を期し得べきものであると述べたのである。

第二にプラトーンの『理想國家篇』は、多くの點に於て希臘生活の實際及び理想を反映して居る。而して彼の眼中に置いた國家は、當時の政治的單位の標型であつた面積狹少にして從つて其包有する住民も之に比例して少數なる『都市國家』(πόλις)であつた。殊にことは、此書を讀む者の容易に看取する所である。彼が彼の理想國家に於ては、少數の學藝技能に秀づる哲人を治者階級に置き、之をして一般人民の共同利益を揣りて政權を行はしめて居るのは、其前提を都市國家に置いて居るからである。彼に取つては國家の目的は、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

道德上及び智識上の高遠の理想を此地上に實現するにあつた。故に彼は殊に治者階級、及び之を補佐して内治外交の上に其經綸を執行する任に當れる補助階級の教育を重んじ、彼等をして嚴格なる規律訓練の下に、智能を練磨し、公私の道德觀念を涵養せしめ、以て此宏大なる國家目的に副はしめんとした。彼は斯の如き理想は只、狹少なる一の都市國家の中に於てのみ實現し得るものであるとを知つて居つた。されば彼は『法律篇』に於ては、一國家の住民總數を五千〇四十人の公民及び此等公民の需要を充たすに足るだけの奴隷及び其他の分子に限定すべきものと宣言した。プラトーンが、掲げた國家の高遠なる理想は、千載の下尚ほ潑剌たる新生命を有し、現代の各文化國家の歸趨點を指示して居るものであることは、的確なる事實に相違ないけれども、當時の希臘の各部に散在せし小都市國家とは甚しき相異のある環境の下に置かれたる現代の大國家は、此同一の終局目的を到達するためにも、自らプラトーンの立案せるものとは違つた組織に依らねばならぬことゝなつた。無論今日の大國家に於ても、政權を行使する爲政者に優秀者を擧ぐべき必要は毫も減退しないのみならず、益す增加して居るが、同時に一般人民の意思を此等爲政者に傳達すべき確實なる機關を必要とする樣になつたことも亦事實である。古往今來、被治者の疾苦を察し利害を慮り、其衷心の要求に同感し、其國民的精神に共鳴すべきことは、政治家道德の不文律となつて居た所であるが、現代の大國家に於ては、爲政者が單獨の意思を以てしては政治道德上の此重大なる使命を果たすことの事實上不可能なることは言ふ迄もない話であつて、必ずや人民意思疏通機關の協同を要するのである。然るに一方に於ては同じ理由に依りて一般人民が直接に其要求を提げて國政に作用することも亦不可能となつた點よりして、代議制度は先づ政治的意識の旺盛なる國民の間に發達し始め、漸次他の國民に依りても採用せられたのである。此見解よりして我等は、代議制度は國民的精神及び其要求より引き離して考ふることが出來ぬものであると謂

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふのである。代議制度の理想は國民の代表者として選良を野に求め、之を立法部に送り、以て國民の要求を爲政者に傳達し、國民の合理的意思に即して立法行爲に翼賛し且つ國民の共同利害に基きて爲政者の施設經營を監督し、斯くて國家の政治と國民の眞精神とを一致融合せしめんとするのである。即ちプラトーンの理想國家とは其制度體制をこそ異にすれ、其目的とする所に逕庭がないのである。且つ代議制度の理想は爲政者と一般國民の代表機關との協同を要求するもので、其對抗を要求するものでないから、從つて責任內閣制を要求し、議院政治を要求するものである。無論各國に於ける代議制度の現實が此理想より非常に遠く懸け離れて居るとは事實であるが、さりとて差詰め之に代るべき名案の出で來らざる限りは、我等は一方に於ては其名案の出づべき餘地ありや否やの問題、及び若しありとせばそれは何であるかの問題を極力講究すべき國家的義務を有するとは當然であるけれども、同時に當面の事業としては、出來る限りの學者的研究と實行的努力とを費して、現在我等が所有する此代議制度を發達する所まで發達せしめなくてはならぬ。斷じて之を自然の成行に任すとか、或は之を從前の專制政治に引戻すと云ふが如きことをしてはならぬ。我國民は既往に於て代議制度の進歩に關して、未だ是と云ふ程の保育助長的努力を盡くした經驗のないことは、前既に述べた通りである。然るに昨今我國の代議制度の宿弊に絕望して、既に早くも反動的復舊的意見を表現するものを往々見受くるのは、歎はしい次第である。我等は此點に於ても宿命的印度思想の惡影響を看取せぬ譯には行かぬ。生氣ある個人及び國民は、自己の環境改造力及び創造力に信賴するものである。我國民は過去に於て未だ何一つ世界の文化の上に見るに足る貢獻をして居ない。我國の眞の意義ある國家生活は將來に在る。果して然らば我等は國民として今の內から老耄して、寂滅爲樂の境界を憧憬すべきではないのである。

第三にプラトーンの國家組織は、國家と個人の靈魂との一致の臆說より出發して居る。プラトーンに依れ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ば、個人の靈魂には理性、氣慨、物慾の三部分があつて、それ〲特殊の德を備へて居る。理性がその體得する觀念(ιδέα)に從つて他の二部分を支配するは智の德であり、氣慨が理性の支配に從つて其所を守るは勇の德であり、物慾が理性の支配に從つて其所を守るは節制の德であり、而して此三部分が各々其所を得て相調和して働く所そこに公正の德を現出するものである。國家にも亦靈魂の三部分に相應するものがなければならぬ。而して理性に相應するものは治者階級であり、氣慨に相應するものは智者階級の命を奉じて內秩序を維持し外敵國を防ぐ文武官吏の階級即ち補助階級であり、物慾に相應するものは農工商の職務を行ひて全國家に物資を供給する平民階級である。治者階級には智能の優秀なる者のみを置きて天下に命を行はしめ、他の二階級をして其支配の下に各々分に安んじて其職務を行はしめねばならぬ。斯の如きもの實に是れプラトーンの國家組織に關する根本思想であつた。故に彼の理想國家は哲人たる政治家の專制政治の支配の下に在るものである。此理想が既に前に述べた如くプラトーンの時代に於てすら其實現を困難とした所とすれば、現代に於ては全然之を不可能とするのである。現代人の政治的意識は能働的に國政に作用する機會の要求を中心とするものであるが故に、此要求を無視するが如き專制政治は、既に其出發點に於て現代政治人の堪ふる能はざる壓迫的分子を包含して居る。次にプラトーンの理想國家は治者階級及び補助階級のみの教育を重んじて平民階級の教育を不問に附し、此點に關しては全然放任主義を採用して居る。然るに現代の各文化國家に於ては、國際的競爭の激甚の結果、普通教育乃至高等教育を一般國民に開放することを以て生の條件(Lebensbedingung)として居る。此教育のデモクラチゼーションが最も完全に、最も徹底的に行はれて居る所は、恐らく世界中獨逸を以て第一となすであらう。今回の歐洲戰亂に於て、獨逸が世界の驚歎を促すに足る程の絕大なる國民的能率を示して居るのは、其全部とは云はずとも其一部は慥に此教育のデモクラ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

チゼーシヨンの結果であると云へると思ふ。そは兎も角、教育の開放の結果は智能上の優秀者を各階級に普遍的に散布することになる。然るに一方國家が爲政者即ち高等政策運用者として、及び其下に從屬する文武官として登庸し得る人の數に限界があるから、天下の秀才を擧げて悉く之を官海に網羅して野に遺賢なからしむることは到底期し得べきことではない。加之縱しや斯の如きことを爲し得とするも、之を爲すことは國家の慶事ではない。何となればプラトーンやアリストテレスの時代に於ては、我國の封建時代に於けると同じく、農工商の職業は比較的優秀なる才能を必要としなかつたから、それが自然輕侮せらるゝ傾向を生じて、之に從事する人々の社會的地位も亦從つて低劣なるを免れなかつたが、現代に於ては農工商の産業の方面に偉大なる企業心及び其他の才幹技能を要することは、敢て國家の立法行政の方面に讓る所がない。此點に於ても亦獨逸は、此新時代の要求に適應する力の明敏快速なることを示して居る。我國に於ては官尊民卑の風未だ全く跡を絶たざるがため、大に國運の澁滯を來したことは、識者の顰蹙して措かざる所であるが、米國の如きは又他の極端に趨り、官吏民選の餘習強くして民尊官卑の風を生じ、有爲の材は有司となるを好まずして商工業に身を投ずるを常として來たが、最近米國人は此點に留意し始めて、漸次兩者の間に均衡を保つ傾向を示す樣になつた。要するに教育開放の結果と新時代に於ける國家的環境の變化とは、今後益す多くの賢良を官海以外に出だすに違ひない。而して此在野の賢良の意思を國政の上に疏通する道を杜塞するは、單に國家道德の上より見て批難すべきことであるのみならず、同時に其利益の上より見ても不得策とする所である。プラトーンが高く揭げた國家目的は、現代に於て尙ほ其生命を有し、プラトーンが主張した優者政治は、今尙ほ依然として我等の渴求する所である。併し乍ら此境地に達する手段として彼が案出したる國家組織は、最早現代の國家的環境には適合しないものとなつた。我等の當面の義務は、我等の所有する

代議制度を愛護し、其弊害を矯正し其美點を助長し、之をして十二分に其本來の使命を果さしむるに在る。素より星は移り物は變り、時勢は進展し、環境は更新し、而して變化の法則は萬物を支配するは天道の常とする所、世に變らぬものは變ると云ふ事だけである。されば我等は代議制度と雖も不朽の價値を有するものとは思はない。併し乍ら代議制度が他の有らゆる制度と同じく、到底變更の運命を免れぬものとすれば、我等は之をして益す國民的精神と國家の法律制度との間の連絡を疏通する制度の方へ向上せしむべく、斷じて此兩者間の連絡を無視する專制政治制度の方へ退化せしむべきではない。乞ふ、我等をして我等の環境順應力、改造力、乃至創造力の限界を認識すると共に、其可能性を知悉し、且つ之に信賴せしめよ。

四、國民精神と帝國主義

國民精神が最も潑溂たる活躍をなすは、世界政局の舞臺の上に於ける帝國主義の運動に於て之を見るのである。物質的利益の方面のみを以て帝國主義運動の動機及び作用を說明するは、無論偏頗の議論たるを免れぬ。此種の論者をして言はしむれば、土地は有限であつて、其生產力は終極に於て生產遞減の法則に支配せられるものである。然るに人口の增加は無限であつて其底止する所を知らぬ。故に各國家は其生存を全くするためには、詰まる所は領土的膨脹の手段に依らねばならぬ。經濟的手段の獲得壟斷は、人類の團體生活の衝動の基礎であることは、原始時代以來の定則である。種族の鬪爭、階級の鬪爭、及び國民の鬪爭は、其根柢に於て物質的基礎の上に立つて居るものである。人間の制度、法律、風俗、習慣、道德、宗教の如きも、詮じ詰むれば物質的環境の產物である。世に物質を離れて精神生活なるもの存在せず。精神生活と云ふものは要するに宇宙の空間に、物質的環境を夢の如く反映する蜃氣樓たるに過ぎぬ。帝國主義運動の如きも亦、當然此理法に依りて解釋すべきものである。と云ふのである。

されば彼等は帝國主義運動の基礎としては、各國家

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の人民の物質生活充實の努力を高調する。彼等の言ふ所に依れば、近代の各國家、殊に其面積の比較的廣大ならざる各國家は、工業立國の主義を以て國是となすものであるが、工業それ自身は土地を要せざるか、若くは之を要すること極めて少きも、工業用の原料品は之を土地に仰がねばならぬのみならず、工業の結果たる製造品の國内消費額を超過する剩餘分は之を國外に送らねばならぬ。故に現代の各工業國は、第一には原料品産地を抑制するを要し、第二には製造品の捌け口たる市場を要する。此外猶ほ重要なる第三の原因は、國内の過剩人口を送る植民地の必要である。自國よりの移民を驅つて、他の獨立國の主權の下にある版圖內に送るは、それだけ自國民を失ふ結果を生ずるよりして、各國民は成るべくならば其流出人口を、海外に於ける自國の領土若くは勢力範圍圈内に送らうとするが常である。凡そ此等の多くの事情が相纒綿紛糾して、帝國主義運動の動機となり來つたことは、今更之を指摘するまでもないことである。十九世紀中に起りし阿弗利加に於ける歐洲列强の領土獲得競爭は、最も赤裸々に之を例證して居る。其他近世の外交上の慣例となれる勢力範圍の設定とか、門戸開放主義の要求とか、最惠國條款の解釋とか、關稅上の互惠條約の締結と云ふが如きもの丶流行は、皆國際政治の經濟的基礎を適確に指示して居るものである。彼のベルンハーディ將軍が絶叫した「世界帝國歟、否れば沒落歟」の豪語の底にも、國家の物質力渇求の哀調を聽き得るではないか。

彼等は又言ふ、列强各國の帝國的膨脹が相駢んで行はれ得るも、將又相衝突するの運命を見るに至るも、亦均しく國際政局上の物質的環境の狀態如何に依るものである。曾て歐洲諸國間の政治上の勢力關係の緊張を一時緩和したものは、極東への航路開通の結果として東方亞細亞が歐洲諸國の市場へ開放せられたことであつた。併し乍ら此方面に於ても列强の勢力範圍が漸次區劃せられて、今は殆ど剩す所なきに至つたから、之が永久に歐洲の政治關係を緩和する要素たる力は匪

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に消滅したのである。又英國が久しく本國及び屬領地に於て自由貿易主義を取り來つた事實は、列强が平和の間に經濟的膨脹を行ふ餘地をして尙ほ廣濶ならしめたが、此狀態は何時までも繼續する見込なく、早晩日の沒する時を知らぬと云ふ大英帝國の全版圖が、所謂プレファレンシアル・タリッフの紐帶に依りて大規模の關稅同盟の下に統一せらるゝ氣勢を示して居る。露國及び佛國の如きは、疾くより各植民地に保護稅の壁を高く築いて、本國以外の經濟的勢力の侵入を防止し來つた。合衆國のモンロー主義は、歐洲諸國の經濟的勢力の南米に膨脹することを防止する効果を有さなかつたけれども、其政治的勢力の北、中、南米のどこの一角に及ぶをも默過せざるべく警戒して居る。思へば世界の表面に於ける政治的及び經濟的膨脹の餘地は、次第に狹ばめられる一方であつて、列强の騈進的膨脹關係をして對抗的膨脹關係に變遷せしめでは止まらない。對抗的膨脹關係の勢力の窮まる所は即ち國際戰爭の勃發である。今次の歐洲戰亂に至るまでの經過も、此理法を以て說明するより外はないのである。憐むべし、人類は水草を追うて漂泊せし遊牧時代の昔より、帝國を建設して力と文化とを相競ひ誇る今日に至るまで、只生計の資料を得んがために齷齪奔命に疲れ、只之がために戰を宣し和を講じ、同盟を結び敵國を作り、凱旋を祝し敗衂を弔し、都市を建て村落を起し、坐臥行住、一喜憂、詩を作りローマンスを演じ、斯くて呪はれたる者の如く霎時の安靜を得ることなく、遑々焉として永劫の荒野を橫ぎりつゝあるのである。之を要するに物質生活の範圍內の自己保存慾の法則は、キャリバンの上に臨むプロスペロの如く、人類の一切の行爲を支配し命令する宿命的暴君の威を揮ふものである。

彼等は更に言ふ、帝國主義運動は、國家の自己保存慾より出發し、其物質生活の充實を目的とするものであるが、人類は如何なる行爲にも道德的意義を附けなければ滿足しないと同樣に、各國家は元來が經濟的慾望の產物たる帝國主義其物をも、御苦勞千萬にも道德

的に是認せんと試みて居る。併し乍ら帝國的膨脹とは尋常の手段では得られない權利及び特權、殊に當該國家が任意に與ふることを肯んぜざる權利及び特權を强奪することを前提とするものであるから、これを道德上より辯護することは頗る無理なことで、「盗賊にも三分の理窟」とまでは行かずとも、少くとも算盤玉の上に勘定づくの經濟行爲を倫理的に說明せんとする企てに於て見る程の滑稽はある。十六、七世紀頃の西班牙や葡萄牙等の舊敎國が、新世界征服の口實は、斯の如き征服は土民の敎化を伴ふが故に、終局は被征服者の靈魂を救ふことになると云ふのであつた。靈魂か靈魂か、十九世紀の中頃に於ける米國の奴隷解放戰爭前まで、ニグローは靈魂を有するや否やの問題が基督敎側で眞面目に議論せられて居つたことを思へば、靈魂問題も白皙人種に依りて隨分得手勝手な取扱を受けたと云ふことが判るではないか。現代に於ける帝國主義の道德上の辯護も亦、近世紀初頭の舊敎國の新世界征服の口實と其主義に於て異る所を見ない。帝國的膨脹の辯護者の說く所に從へば、世界の大部分が利源開發の能力なき種族又は國民の手に委ねらるゝは人類全體の不幸である。「世界の表面の人口が益稠密となるに從つて、遠隔地方の天然の富源は人類全體の幸福のために利用しなくてはならぬ。而して若し或る國民若くは種族が、今尙ほ時勢後れの生產法に依つて居るとか、將又其鑛山なり森林の如き富源の或部分を放棄して顧みぬとかのために、人類一般の幸福增進の道を阻礙して居ることがあるならば、斯る國民若くは種族は、斯る富源を最も善く利用し得る先進國民の支配若くは保護の下に置かれねばならぬ。兎も角先進國民は、世界の各部に於ける投資を安全にし、生產事業の經營を確實にして、復土人の妨害侵奪の危虞なからしむるために、世界を警護せねばならぬ。併し乍ら是だけの要求だけで引込む國民は滅多にない。大抵の國民は明らさまに、世界は最優强の種族の所有に歸すべき遺產であると見做して居る。然り、彼等は實に優强種族は、野蠻狀態を脫せずして精神と人格との力を缺く種族に取つて替はる權

利があると考へて居る。殖民上の苛酷なる方策の一辯護者（ウヰリアム・ハーヴイー・ブラウン）は曰く、「劣等なる種族が優等なる種族の使役に甘んずべきは、進步の法則の嚴命である。故に若し劣等種族が優等種族の命を奉ずることを肯んぜざる時は、彼等は殲滅の運命を免れざるべきものである」と。」(Reinsch, Paul S.-*World Politics*. 1900, pp. 11-12)」斯くて文明人は世界の各所に跋扈して植民地、保護國、乃至勢力範圍を作り、未開人若くは後進國民を頭から抑壓して居るのである。北海道にアイヌの漸滅し、臺灣に生蕃の討伐せらるゝ如く、又は合衆國の各部に於てインディアンスの諸種族が滅びゆく如く、文明人の勢力の侵入する所、劣等人種は最早從前の如く天日を仰いで大空の浩氣を吸ふ自然の寵兒たる境涯を失ひて、寄る邊なき日蔭者の悲運に陷り、精神的に將又肉體的に頽廢して種族存續の見込さへ立たなくなるのである。而も文明人は揚言すらく、先進國民が未開人に代つて事業を經營し利源を開發するは、人類全體の福祉を增進する道德的行爲であると。

右の如き政治的唯物觀は、徒に人間の政治生活の一面に觸れて居ると同時に、國内幷びに國際政治上のすべての現象を物質的慾望に歸せんとするは、極端に思想の單純及び統一を求むるの餘り、却て事實の眞相の觀察を誤るの弊に陷つたものである。政治的唯物觀を評してアレキサンダー・ウーラーは叫んだ。『素晴らしき幻想よ！　人間と云ふものは不幸にして論者の考へて居るよりは遙に愚鈍なものである。人間は動物の眼より見れば滑稽であるに違ひない特殊なる忘想のために懊惱して居るのである。そのため人間は自己に全然無關渉なる樣々の事柄を氣に懸け、肝腎要めの胃腑(マーゲン)の問題(フラーゲ)は體面を繕ふ觀念よりして之を輕蔑し其極名聞を重んずる人々をして、此汚辱の法度に觸るゝよりは、寧ろ肉身の死滅を一般に希求せしむるのである。現今の進歩せる巴理の市中に於てさへ、(3)店頭の俎上より丸裸の雛一個を盜み出さんよりは、寧ろ街頭に餓死せんことを願ふ人々が尚ほ存在して居る。こは實に是れ最

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大程度に於て政治問題である。こは人間が氣の毒にも超經濟的本能を有することを指示するものであつて、超經濟的本能こそは、最も不利益の關係の下に於てすら優勢を持續するものである」と。(Politik, Bd. III von der,, Gesellschaft" Sammlung. 1906. S.15)—彼は尙ほ語を繼いで政治の起源を人間の經濟的慾望に歸するは、事の始終物の本末を誤つて居る僻說であるとなして、斯く結論して居る。『事實上高度の文化的生活樣式に於てこそ或種の非經濟的要素が發現しないのであつて、却て玆で始めて民衆又は統治者の經濟的慾求が政治の上に顯はれて來るのだ。而して原始的生活樣式に於ては、經濟的要素が總てを支配するのではない。否々、それとは全く反對に、そこでこそは經濟的要求が全然缺如するのだ。即ち原始的生活樣式に於ては、只單に宗教的要素のみが、總てを支配し、衝動し、嚮導し、活現するのである。』(Ibid, S. 16)——

ウーラーの此議論は中々暗示に富んで居るが、原始時代のことは今は姑く問はず、現代に於ても政治を支配するものは經濟的動機のみでないばかりではなく、此經濟的動機は多くの場合に於ては、重要の程度より云へば、寧ろ從位を占めて居るに過ぎぬことは、少しく有るが儘の事物相を虛心平氣に研究すれば判明するのである。人間は政治生活に於ては、何時も生存上の必要條件たる物質的要素の誘導のみで動く程も冷靜であり得ないものである。殊に短期の間に絕大なる事變が發生し完結する場合などに於ては、經濟上の損得の觀念などは全然無視せらるゝこと比々皆是れである。彼の佛國革命時代の國民議會に於て、貴族議員等が感情昂奮の刹那に、自家に不利益なる議案を甘んじて採決したるが如きことは、正に其好適例である。殊に多數の民衆が祖國に酬ゐる一片の丹心の衝動に依り、笑つて死地に趨くは、全く任意的犧牲の行爲であるが、之に反して黄金脈を探らんがためにアラスカやクロンダイク三界の山野の果てに彷徨する者が、適ま危難に遭遇して身命を殞すことあるも、そは任意の自殺と謂ふことは出來ぬ。そは寧ろ不慮の災禍と謂ふべきであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。兩國の運命に關して殆ど宗敎的信念を有する獨逸の軍隊が、白耳義及び佛國の戰場に於て、聯合軍を相手に殆ど超人的と思はるゝ計りの大功業を樹てゝ居るのは、一面に於ては慥に政治生活に於ける精神力の効果の偉大なることを示して居るものではないか。人は信念のために身を鴻毛の輕きに比する場合は極めて多いが、利益のために義を泰山の重きに置くなどゝ云ふことは、表現それ自身が既に滑稽なる矛盾である。果して然りとすれば、人の經濟行爲に於ては理智の打算が有力の要素であるに反して、政治行爲に於ては、理智の打算以外に幾多の感情上の要素が相紛糾錯綜して居る消息も說明が出來る。而も之を經濟的衝動の作用としてのみ說明するのは、抑も無理な遣り方である。單純なる思索方式を求むるは、之は成効した場合は結構であるとしても、それがため牽强附會に墮するは、大に排斥すべきことである。

近世の政治生活の動機は複雜なる合成體となつたがために、其間に於て物質的要素と精神的要素とを甄別することは、單に至難であるのみならず、多くの場合に於ては不可能である。けれども歷史上の或る重大なる瞬間に突然として表面に現はるゝ大動亂に至りては、之を仔細に觀察すれば、我等はそれが畢竟、暗々裏に社會の基底の上に作用し來りたる精神の堆積鬱結したものが、何かの刺戟により俄然爆發したものであることを認むるを通例とするのである。彼の故クラム敎授が、人類の行爲は無意識の間に成し遂げられたるものが、最も偉大なる効果を有するものであると道破したのは、政治を支配する精神力の作用に觸れたる言であつて、上に引用したウーラーの說とは同巧異曲のものである。只ウーラーの表現は極めて皮肉味に富んで居るに反して、クラムのそれは無限の眞面目の氣分に充實して居るのを、異とするのみである。

國民主義（Nationalism）が現代國際政局上に於て最も重大なる働きをなす要素——若くは斯る要素中の一であることは、誰しも疑はぬ所である。大和民族を中心とする日本の國家至上主義の如き、又は歐羅巴に於

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ける全獨主義、全塞主義、全露主義、伊太利のイレデンチズムの如きは、皆國民主義の結晶であり、又支那に於ける革命運動も一部青年の胸裏に燃ゆる國民意識より發する愛國運動であると主張する者の所說を是認すれば、土耳古青年黨の行動も亦同じく國民主義的運動であり來つたと謂ふことが出來る。而して此國民主義の基底に於ては、物質的要素の混入を認めざるに非ずと雖も、其最も主要なる要素は、大抵の場合に於いては精神力である。此事理を最も明瞭に看取し、且つ最も適切に記述したものは、蓋しジョーン・スチュアート・ミルであらう。乞ふ我等をして暫く彼の說く所を傾聽せしめよ。

『人類の一部分は、若しそれと他の部分との間には到底成立つまじき同情同感に依り繫がれて相結合する時は、一民族を構成して居るものと謂ふことが出來る。（中略）。此民族的情操の發生を促す原因は多種多樣である。時としては共同種族及び血統が之を誘起する場合もある。言語の同一及び宗教の同一と云ふことも、之が發生に與つて大に力があることもある。地理上の疆界も亦其原因の一である。併し乍ら總ての中で最も强き原因は、共同の政治的經歷、即ち民族的歷史の所有、及び之に附帶する共同的追憶、即ち共同に經來れる事件に纏綿せる共同的榮辱及び共同的喜憂である。』（Representative Government, Ch. 16.—無論ミルは民族的情操を說明したものであるが、墺匈國の如き國內の諸民族の自治的要求の强烈なる國家は別として、他の比較的完全に統一せられたる國家に就いて言へば、此民族的情操の說明は、同時に國民的情操の說明として適用することが出來るのである。）

現代の帝國主義は此國民主義を立脚地として居ることは、學者實際家の一致する所である。是れそが、始めてアレキサンダー大王に依りて企てられ、羅馬に依りて一たび完成せられ、次いで神聖羅馬帝國に依りて繼承せられ、大奈翁の沒落と共に永久に地球の表面より拭ひ去られし世界國家主義の思想の上に基礎を有せ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し往時の帝國主義と、其選を異にする所である。既に國民主義と稱する精神力を主柱とする地盤の上に立脚して居る所に、現代帝國主義運動の强みの中心があるのである。我等は物質的條件が其の成敗を決する上に於て有する重要なる地位を看過するものでないが、同時に其本來の基礎が今尙ほ依然として國民の精神の上に在つて存することを主張する者である。既に單一民族より成る國家（若しあらば）、若くは一の優勢なる民族を中心として存立する國民國家の基礎が確立すると、斯る國家が有らゆる障害を排除して膨脹せんと務むるに至るべきは自然の數である。蓋し國家自身は一個の活物であつて、成長期の終る時は軈て是れ其衰頽期の始まる時であるから、各國家は生の慾求の衝動に從ひて、極力成長期の繼續を長からしめ、衰頽期の到來を遲からしめんことを計るのである。帝國主義の萌芽は實に此間に胚胎するのである。

若し世界の人類が冷靜なる利益の打算より出發して、永遠の平和の下に物質的享樂を恣にせんと欲するならば、國民主義運動を終熄せしめて、諸國家相互間の帝國的膨脹の衝突の禍根を絶つに限る。現に平和主義者及び軍備撤廢論者のロジックは、終局は此點に歸着せねば、少くとも不徹底の譏を免れないであらう。けれども是は國民主義の精神の坐視せざるべき所である。何となれば國民主義は國民的情操の存續を希求する熱望に於ては、結局利害の打算以上に脫出する超經濟的勢力であるからである。現今世界政局の上に於て國民主義に逆行する思潮の主流は何ぞやと云はゞ、そは超國家的世界主義（Cosmopolitanism）である。而して過去の或る期間に於て最も多く此主義に浸潤せし實際的勢力は、宗教、資本、及び勞働の三分子であつた。宗教の極致が超國家性に在ることは既に幾多の論客の指摘する所である。又資本の流動が國際的であり、而して其作用が多くの場合に於て超國家性を帶ぶるものなることは、國外の事業に對する投資、公債の募集、及び其他各種の有價證券の賣買が、國境を超越して行はる間に之を看取することが

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出來る。又勞働者の利害が時として且つ國際性及び超國家性を帶ぶる傾向を呈することあるは、國際的社會主義の思想及び運動が歐羅巴に於て一時大に流行せし事實に徵しても分明である。而して極端なる西は東と一致する如く、極端なる超國家的世界主義は極端なる個人主義と共鳴するものであるが、此兩者の中間に來るものが國民主義である。此兩思潮——即ち經濟的利害の打算を中心とする個人主義及び超國家的世界主義と、國民的情操の精神的要求を樞軸とする國民主義とは、相互に好個の對照をなし、常に兩々相對峙して逆行倒施して居るものである。而して或る特定の時に於て此等兩個の思想の潮流の中、孰れが最も優勢を占むるものであるかと云へば、それは當時の實際上の環境と、精神的及び物質的傾向の均衡の狀況如何に依りて決すべきものである。而して事實に就いて之を見れば、十九世紀の後半に於て、國民主義の潮流が著しく勢力を增大し、其對流たる超國家的世界主義を壓倒する樣になつたことは、最近史上の偉觀であつて、此事は偶ま政治を支配する精神力が今尙ほ旺盛なる作用を示しつゝあることを證明するものである。斯くて本來國際性と超國家性との色彩を最も强烈に帶び得る宗敎、資本、及び勞働までが、現代に於ては其國際性をこそ其儘保有して居るのみならず、時としては之を增大して居るが、漸次に其超國家性を稀薄にする樣になり、同時に之に比例して從前よりは遙に多く國民性を帶び來る樣になつたのである。(此場合に於て國民性は超國家性の對稱であつて、國際性の對稱でないことは云ふ迄もない。國民性は國際性と並び行はるゝことを得るものである。今之を例示すれば、支那に於ける列國の鐵道に對する投資、及び同國の借款に對する列國の加入競爭の如き、又南米に於ける英獨佛の資本流入の如きは、資本の國際的及び國民的の兩方面を發揮して居るが、その超國家的方面とは沒交渉である。更に又佛國が露國の公債に應募して、兩國間の外交上の密接關係を維持して居ることも亦、此類例であると謂ふてとが出來る。)此點は國際政局研究者の見逃すべからざ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る現象である。

論じて玆に至れば、我等は、唯物主義を體現する怪物として取扱はれ來りたる帝國主義の根柢にも亦、人心の幾微より迸り出でたる精神力が横溢して、力强き作用を顯はせることを認めざるを得ないのである。されば全獨主義者が獨逸の文化上の使命を說き、大英帝國主義者が英國の自由主義宣傳の使命を唱へ、全露主義者がビザンチン帝國復興の宗教的使命を叫ぶも亦、强ち僞善的假面を冠りて世界の公道に切取强盗に出掛くるものと早斷してはならぬ。一の興隆の氣運の途上に在る國民には、人心の奥底より湧き出づる一の理想がある。是れ即ち國民是である。此國民是こそは、其之を所有する國民の精神的財産であり、是あつて始めて國民の國家的存立に人道上の意義があり、又其帝國的膨脹に理由が生じ、同時に其道徳的是認も亦可能となるのである。故に各個の帝國的國家は皆何れも、人道主義の一部面の當該國家内の國民的精神に共鳴し國民的才能に適合せる或物を狙つて、之を其國是として標榜し、之を國民的向上心の目標となし、之に依つて以て内は國民の精力を集中統一し、外は其勢威を世界の果てまで伸張せんことを企てるのである。現代の帝國主義の運動が、往古のアチラやタメルランの疾風的掠奪運動と異るは、一に此特徴あるがためである。素より斯の如き帝國的理想が、實際に於ては幾多の國際的僻見を産んで、それが又世界政局を不安ならしめ、或は之を攪亂することがある。何れにしても帝國的理想、及び之より生ずる僻見が、現實に政治を支配する精神力として作用し、政治的唯物論者の巧思妙想を冷笑して居るのである。

クラム教授は羅馬の帝國主義は公正の主義を天下に布くを使命として居たが、英國の帝國主義は自由の精神を四海に及ぼすに在りと謂つて居る。余を以て見れば、羅馬の企てし公正の傳播も、英國の行へる自由の普及も、共に同一の帝國的支配力の經營が、異りたる環境の下に異りたる表現方式を取つたものとしか思へぬが、そは兎も角、帝國的膨脹に必要なる國民的精神

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

統一の目標を、人道主義に合致し同時に國民的才能に適合する道徳的理想の上に置ける點に於て、兩者の間に不言の冥合がある。而して同時に是れ他の總ての帝國的發展を畫策する現代諸國家の、相率ゐて其轍を踏まんとする所である。

知らず我國の帝國主義の目標は如何。東洋の神秘主義と西洋の機械文明の調節融和乎。白人の人種的偏見の打破乎。亞細亞洲の衰亡諸民族の復興乎。知らず、我等は何を以て世界の進歩に貢獻することを、我等の國家的使命となす乎。而して又之を實現せんとするに、如何なる手段を取らんとする乎。文化國家主義乎。軍國主義乎。或は兩者を結合して、アゼンスとスパルタとの長所を同時に實現するにある乎。抑も亦平和的膨脹乎。武斷的征服乎。陸主海從主義乎。海主陸從主義乎。或は又海陸駢行主義乎。我等は國民的勢力及び國民的精神の完全なる合理的統一の必要を切實に感じ、而して之を實現せんとするの目的を以て、上既に政治的機會均等主義の上に即する民本主義の政治の完成を主張した。併し乍ら我等は此統一せられたる國民的勢力を以て、人類文明のために何をなさんとする乎。目的なしに効果の永續する事業をなし得られぬは、言ふを須たぬ。されば我等は今に及んで此等の重要なる國家的諸問題を國民的に講究して、確乎不拔の國是を樹立して置かねば、或は怕る、今後益す緊張すべき傾向ある世界列强の政治舞臺の上に於て、永遠の國民的悲劇の主人公となる日の到來せざるを保すべからざることを。

（大正五―三―一一）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

天下一に定まらん

山路愛山

(一)

今年三月五日我等は信濃國北佐久郡中津村に往き其青年會の爲に一場の演說を爲したり。論題は時世論にして其要點は去年の暮、同國上水内郡青年聯合會の爲に講演したるものに殊ならず。世界の狀況今や混一の時代に近づきたれば人々其用心をなすべしと云ふに在り。さて其演說を終りたる後、同村の佐藤氏に一宿したるに人々來りて色々の物語せし中に、或人の言けるは、今を距ること十四年の昔、君此村に來りて盛んに露西亞征伐の已むべからざる理由を說き、其夜も此村に泊られしが、其時の評判に愛山君はあの樣に說かるれども、露西亞は左樣に容易に戰ひ得べきものなりや、露西亞と日本との關係も左樣に切迫し居るや、愛山君に說かれて見れば成程と合點も行きたるやうなれども、到底無責任の書生論らしく思はるゝとて實は半信半疑にてありしに、其後君の信濃を去ると同時に開戰となりたれば愛山君は流石に見解ありとて始て感心したり。されば今日の御論も少々大言壯語に類するやうに、聞えざるに非ざれども、先例もあることなれば君の說、或は事實となりて現はるゝの日なきに非るべしとて實は恐ろしく思ふことなり、果して貴說の如く世界一統の日、既に近づきたらば我等も今より其心掛けを爲し置かざるべからず、されば猶ほ詳に承りたきことも候とて我等の言ひし所に深き懸念を抱くものゝ如し。此論固より一夕の閑談にて盡くすべきに非れば我等は唯だ然らんには例の書生論と聞き流し置きたまへとて輕く挨拶し置きたれども「世界統一の時期近づきたり」と云ふ我等の說には世間に同論者甚だ少きは調

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り中津村の有志者の懸念に依りて知るべきに非ず、大抵の論客も先づ以て一種の空想として片付け置くことならん。そは今年歳首の諸新聞を見るに日本國に於ては選り抜きの識者とも云ふべき人々の將來の日本に關する豫言めきたる意見も多く掲げありしかども一人として世界統一の時期に向ひたりなど云ひし人なし。今度の大戰、若し曲りなりにも或は和睦の時機に達せば戰後の諸國民は、益す獨逸流の軍國主義に傾くべしと云ふ人もあり。或は戰爭の慘禍には既に十分、十二分に懲り果てたれば必ず平和主義の繁昌を見るべしなど云ふ人はありたれども世界統一の時期近づきたりと暗示したるものは一人もなし。是は我等の甚だ不思議に感じたる所なり。加之近頃朝鮮より一寸歸朝したる軍人に逢ひ、語るに此論旨を以てしたるに馬鹿なことを云ふものかなと云ふ顏付にて言語、風俗、慣習を殊にする諸國民を統一するなど云ふことが何として行はるべきや到底空想に過ぎずとて、殆ど笑談の様に取扱はれたれば、いや左様に輕々しく否定すべき議論に非ず、君は言語、風俗、慣習を殊にする國民を統一するは容易ならずと云はるれども、第一君の勤務する朝鮮は日本帝國と言語、風俗、慣習を殊にするものなれども、早くも既に日本國に合はせられたるに非ずや。加之我等の目前に於て白耳義。セルヴィヤは氣の毒千萬にも既に亡國となれり。言語、風俗、慣習とて必しも國の獨立を維持すべき堤防に非ずとて懇ろに討論を續けたるに、負けぬ氣象の軍人はいや〳〵何と言はれても予は左様の時期が予の眼の黑き内に來るべしとは思はずと云ひて納得せざりければ兩人、徒らに口を酸くしたるのみにて、はては餘談に轉じたりし。世間の人大抵世は何時までも現狀に彷徨すべしと信じ居ると此の如し。此時に方りて我等のみ世界混一の時期既に近づきたりと叫びたりとも遽かに同感者を得ざるは勿論にして、まだしも中津村の有志者なればこそ我等の說に半信半疑の恩典を與へたるなれ。他人に在りては何の老書生めが埒もなき夢を見て無病呻吟を事とするとて冷笑するのみならん。我等は我が議論の孤なるを悲まざ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るを得ず。

（二）

昔し梁の襄王孟子に逢ひ天下は如何に定まるべきと問ひしに孟子は「一に定まらん」と云へり。去りながら其時代の支那には何人も孟子の言ふ所を信ずるものなく當時の政治家いづれも合縱連衡の政策にのみ骨を折り目前の得失に苦勞して氣運の向ふ所を察せざりしと云へり。我等は敢て現代の孟子を以て自ら任ずる次第に非ざれども時世の大局を見ると能はず、小問題にのみ頭を沒して國の前途に横たはれる至重至大の關係を忘るゝもの多きを常に歎かはしく思ふものなり。たとへば論者は世界統一の時期既に來れりと云ふ我等の說を痴人の夢に過ぎずと冷笑すれども、唯今の歐洲列强が今日の大國となりたるには果して何年を要したりや。論者若し東京市中の古本屋を尋ねたらば輿地誌略と云ふ古寫本を發見すべし。輿地誌略は靑地林宗の譯述したる所にて、靑地は文政五年（一八二二年）に幕府天文方に所屬する譯員となり、同十年（一八二七年）に幕命を受け萬國地誌の編輯に從事したるものなれば此書の原書は思ふに第十八世紀の末か第十九世紀の初に書きたるものならん。然るに其伊太利の部を見れば、伊太利は單に地理上の名にして政治上の名に非ず。政治上に於ては伊太利は幾個の王國、共和國、法王領若くは墺太利領に分れたり。是は獨逸も同樣の事にて唯今の獨逸國は未だ地上に現出せず、やはり小國の聯合に過ぎず。されば今より百年前の歐羅巴に於て國民的一致を有する大國と稱して差支なきものは東方の蠻民たる土耳古及び土耳古に抵抗して起りたる半開の露西亞を除きては唯だ英、佛二國ありしのみ。尤も西班牙、葡萄牙、及び和蘭は其前の時代に於て植民地を世界に有する大王國となりたれども英、佛の大國民として起るに至りて此三國は既に海上の威力たりし昔の繁昌を失ひ、二國の下風に立つに至りたれば、大國民と云ふべきは唯だ此二國に過ぎず。墺太利は獨逸伊太利諸國の盟主たりしかども單に聯邦の盟主と云ふのみなれば固より英、佛に比すべき大國に非ず、實は小國の集合

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

證なり。されば此有樣を一言に約すれば今より百餘年前の歐羅巴は眞に小國の時代と云ふべきものなりしに、英、佛、先づ大國となり、尋で諸國の統一行はれ、所謂强國の時代を生じたるは何故ぞや。猶ほ此有樣を裏面より觀察すれば第十八世紀までは國際關係に於ては小國も大國と同樣の權利を有し、國際會議にも人並に口を利きたりしに、第十九世紀に至りて遽かに小國合して大國となり、所謂Powersの權威のみ獨り强く、小國は事實に於て唯だ其下風を仰ぐだけのことゝなりたるは何故ぞや。此問題に答ふるに先だちて我等が讀者の注意を請ひたきは斯る變化の僅に一世紀の間に行はれたることと是なり。歐羅巴の歷史は古りたり。さりながら歐羅巴は久しき間、小國の世界なり。歐羅巴が其歷史に名高き三十年戰爭を終り慶安元年（一六四八年）を以て諸國の使臣ウエストフアリヤに會し、國際關係を定めたる時には小國と大國とは其發言權に何等の差違なくして、たしかに小國の時代たるを示せり。當時西班牙、葡萄牙、和蘭諸國前後して東西兩洋に植民地を廣げ世界的帝國を開拓したる如くに見ゆれども退て其本國を察すれば依然として古流の小國のみ。未だ以て大なる人口を統一し、大なる兵力を整頓し、大仕掛を以て强國の威を張りし第十九世紀の大國に比すべからず。かく千餘年來小國に甘んじ、國の大小を以て念頭に置くこと少かりし歐洲諸國が第十九世紀に至りて忽ち其方針を一變し凝集して大國となりしは如何なる仔細なりや。論者若し此點に就て多少の思慮を費さば我等の天下一統論が必しも架空の言ならざるを知るを得ん。何となれば千餘年來の舊慣たりし小國の安心を破り、僅に百年間にして忽ち强國の世界となりし現代の秘密を看破し得たるものは同時に强國の更に合して世界的統一現出すべき秘密にも達し得べければなり。

（三）

日本にて元龜天正の時代までは大地主の世界なり。日本を六十餘州に分ちたる其一州にさへ小は百騎、二百騎の大將よりは大は千騎、二千騎の大將に至るまで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

數十個の大地主各小さき獨立を保ち、祖先以來の系圖を誇りたるがその時代の實相なり。勿論其時代にも斯波氏は尾張一國の守護と稱し、今川氏は駿遠二國に於て屋形の尊號を受け大國に君臨したる形なきに非りしも畢竟するに部下に在りし多數の地主の盟主たるだけのとにて德川時代の大名の如く其領分の人民を統一し其領分の物貨を自由に使用し得たるに非ず。謂はゞ獨立の大地主が床の間の飾物として聯合體の頭首に祭り上げたるまでなり。然るに此大地主の世界が何時の間にか一變して所謂八天下の大國となり、信玄、謙信、信長、家康の如き眞の意味に於ける一國、若くは數國の領主を生じ、更に一轉して六十餘州の統一となり、關原の一役に至りて德川氏の覇圖を定めたるは何故ぞや。其原因に付ては樣々の說明あるべし。さりながら千言萬語も歸する所は兵器の革命に在りと謂はざるを得ず。元來兵馬の力を以て日本國を一統したるものは獨り德川氏に限らず、賴朝、尊氏も家康同樣馬上にて天下を定めたるものなれども、其定めたる日本國の內景を解剖すれば賴朝、尊氏の定めたるは大地主の日本國にして賴朝、尊氏は其大地主の現狀を維持し、其機嫌を損ねぬやうにして、其上にそつと座はりたるに過ぎざれども家康の定めたる日本國は之に殊なり、大地主の權威を全く破壞し、幕府の力を以て國の形を改造したるものなり。斯樣に大地主の勢力を破壞し得たる所以は何ぞやと云ふに鳥銃の軍陣に用ひられし結果に外ならず。鳥銃を軍用に用ひしより弓矢の用廢し、多數の兵力を集中し、多數の鳥銃の敵陣に向て注ぎかくるものには如何なる勇者も敵し難く、如何なる天險も守り難かりしかば、其時代までは一方に割據し『御山の大將、己一人』と威張り居たる大地主も勢、甲を脫ぎて强國に降參せざるを得ず。されば武田氏も新羅三郞以來數百年の獨立を失ひて、其嫡流は天目山に敗死し、其天險を賴んで數ば信長の猛威に抵抗したる伊賀の士も力屈して降り、山陰道の山國たりし、石見の士も其地理上の長所を應用するに由なくして亡びたり。是も皆鳥銃の世に出で來りたる結果にして一言にして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

曰へば兵器の革命が日本國の統一を促したるものなりと謂つべし。是は西洋も同樣にして西洋に於て封建政治を破壞し、王國の生れたるはやはり鳥銃の用ひられし結果なり。さりながら鳥銃の用は猶ほ限あり、科學の應用更に進歩し有力なる大砲の製造せらるゝに至ては其破壞力は更に大に進歩せざるを得ず。大ナポレオンが好んで砲陣を用ひたる英雄にして其恐るべき砲火の集中に依て歐洲諸國の獨立を破壞せんと試み、七八分まで成功したるは此理を具體的にしたるものに非ずや。然るにナポレオンは不幸にして兵器の進歩が是だけの所に達したる時に敗北したれば、其覇業も空しくなりたれども、其後科學は倍す長足の進歩を爲し、所謂蒸氣の時代に入りて汽車、汽船を生じ交通機關は此に巨人の歩を以て進み來れり。論者は歐羅巴の小國變じて大國となり、國民的統一行はれて、大なる兵力集中、大なる物資集中の生じたるは實に此際に在りしことを知らざるべからず。此趣を簡單に言へば大砲はナポレオンの覇業を刺戟し、蒸氣の時代は强國の發生を促したるものにして日本國に於て大地主の時代が一轉して八天下の時代となり、八天下の時代が一轉して六十餘州の統一となりたる原因、則ち科學の應用が生みし兵器の革命が、歐洲に於ては日本國に於て行はれしよりも一層猛烈する勢を以て行はれ、千餘年間小國たることを以て安心立命の地としたる諸國も時世の刺戟に堪へず、最近百年間に於て遽かに大國となりたるものなりとせざるを得ず。

（四）

さりながら科學の進歩は蒸氣の時代を以て中止せず、今や進んで所謂電氣の時代に入り、從て人間を驚歎せしむる發明、發見日々續出し、初に科學を以て自己の奴隷とせんとしたる人類も今や逆まに科學の奴隷たらんとする不思議の光景を生じたる其有樣は水滸傳の洪大尉が伏魔殿を破り、妖魔の走り出づるに逢ひ目瞬し、口呆しで措く所を知らざりしものに似たりと謂つべし。世間の識者は科學の應用が斯樣に產業世界に突進し來りしことを恐怖し、科學の生じたる力の餘り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に偉大にして經濟狀態之が爲に激變したる光景を目して産業革命と稱し、世の所謂社會問題も詮ずる所、此革命の結果に過ぎずとて色々苦心する樣子なれども、我等の見る所に依れば科學全盛の時代が生じたる結果は獨り産業革命に止まらず、更に恐るべき兵器の大革命を生じ、世界を混一すべき時期を早めたるものゝ如し。元來科學の進步が産業革命を生じたりと云ふ人は其眼の着け所、主として同じ國內、同じ種族內に在り、さる人々は治者對被治者。資本家對勞働者の關係に激變を與へたる科學應用の結果をのみ論題とするものにて、其範圍だけにて言へば其議論に誤なきことなれども、一國、一種族の內部に産業革命を生じたる科學の力は、獨り國若くは種族の內部の組織に激變を與へたるのみにして已むべきや。決して然らず。我等は此恐怖すべき力が國と國、種族と種族の間の生存競爭に應用せられ、若くはせらるべきが故に世界の面目日に改まり、小國次第に亡びて大國となり、大國も遂に亡びて世界的統一に近づかんとする時期の旣に眼前に迫れるを見る。仔細は人間は世の始より種族を爲し、村を爲し、國を爲し、是を以て共同攻擊、共同防禦の機關とし、自ら一個の共同生活體として以て他の共同生活體と生存競爭を續け來りしものなり。此段、人と獸との分るゝ所にして獸は或る例外を除けば專ら單獨にて他の單獨なる獸と生存競爭に從事するものなれども人は始より共同生活體として他の共同生活體と生存競爭に從事したり。されば世の所謂五常の倫理も其始は一の共同生活體が他の共同生活體と死生を決すべき爲の陣立にして父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序ある共同生活體は其なき共同生活體を倒し適者として生存するを得るが爲に五常の倫理愈よ光輝を益したるのみ。かく五倫の敎も詰る所は國の力を堅固にして他國を倒す方便たるに過ぎずと云はゞ古流の道德學者は大に憤慨し、汝は妄言を吐く男かな。汝の云ふが如く、倫理道德も詮ずる所、强き社會が弱き社會を倒す仕掛に外ならずとせば古今聖賢の訓戒も畢竟殺人の具たるに外ならざるに非ずやとて我等を批難すること

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ならん。道德學者の仁愛の情には我等も多少の同情なきに非ざれども如何せん、古今の倫理思想を科學的に研究すれば、否でも應でも國の道德法律は畢竟するに其國が國として他國と生存競爭に從事する爲の道具として發生したるものなりとせざるを得ず。斯くて社會と社會、種族と種族、國と國との生存競爭、年と共に激烈なるに連れ、內部の陣立も追々變化し、さまざまの政體を生じたり。たとへば露西亞が日本と戰ひ、思の外敗戰したる後、其國體を改め憲法政治とし、議會を開きたるは何故ぞや。詰まる所は憲法政治ならでは列强の間に立ちて國としての存在を堅固ならしむる能はざるを覺りたるが故に非ずや。斯くて社會を全體として有力ならしめ、個人は社會の目的に從て其部分たる任務に服せしむるを以て他の社會との生活競爭に勝ち得べき術なりとしたる人類は生存競爭の結果、小國より大國となり、大國より强國となりたり。されば人類の歷史を中絕し、社會の進歩を遮住し、人類を解散して國なく、家なき獸の生活に還らしむることを得ば格別、否らずして人類の天性は亡ぼすべからずとせば國と國、社會と社會、種族と種族の競爭は愈よ益す劇烈にして、現代に突進し來りし科學の力の如きも此競爭の道具として用ひられざることを得ず。現に唯今歐羅巴に行はれつゝある大戰に於て絕大なる科學工藝が軍隊と結び歷史に前例なき殺戮を縱にして仁人君子の膽を寒からしめつゝあるは正に此事實あることを證するものにして科學の人類を迷惑せしむること獨り產業革命のみにあらず。國際的關係に於ても前人の夢想せざる慘劇を演じつゝあること明白なるに非ずや。支那の諺に小國の大國に敵するを蟷螂の隆車に對ふに譬へたり。科學の應用が生じたる兵器の革命と科學を以て粧ひたる海陸軍の猛威とは汽車の突進するが如く突進し來る。何程の元氣あり、何程の我慢ありとも、國小にして兵寡く、物資に富まず、科學の提供する利益を十分に受くること能はざれば、忽ち大國の破壞する所たるを免れざらん。白耳義。セルヴイヤの如きは正に其例なり。斯くて或る一國、若くは或る聯合國が他の諸

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國を壓倒し得べき富を積み、其富に依りて新式の武器を裝ひ、絶待的の兵數を持して世界に號令せば何人か之に敵するを得るものぞ。思ふて此に至れば我等は世界的帝國の現出は正に明日に迫れるを感ず。

（五）

論者或は獨逸人の帝國主義を論じて其横暴を尤む。其説に獨逸人は誇大妄想狂の病人にして世界の併呑を夢想し、ウイリヤム二世は即位の初より獨逸の將來は海に在りと稱し、大海軍を建設し、植民地の擴張を計り、平地に波を起し天下の平和を亂だすことを憚らず。たとへば露西亞の西部ポーランドにも獨逸人の住む地方には數年前より獨逸皇帝の勅命に依りて發行したる獨逸民謠の印刷物を配布し、獨逸語詩吟倶樂部其外にて之を歌はしめ、或はその各市の獨逸人をして獨逸ライフル銃協會を組織せしめ、現在露西亞政府の治下に在りながら公然獨逸の軍服を着け獨逸人種統一の歌を謡ひて市中を練り行かしめて敢て憚る所なきが如きは誠に亂暴を極めたる擧動と云ふべきものにして世間獨り我あるを知りて他人あるを知らざる天狗の所業なりと云ふ。其論旨を摘めば獨逸を以て狂人あしらひにし、世界の現狀を破り、平和の天地に戰爭の慘禍を生じたるは獨り其心得違ひに出でたりとするもの丶如し。成程獨逸は今日に於ては日本の敵國に相違なければ何程惡口したりとも誰に尤めらるゝ心配なし。さりながら敵にも公平ならんと欲するは我等の大和魂なり。獨逸の位置になりて今度の戰爭を説かせたれば獨逸側にも必ず一理窟も、二理窟もあることならん。世界の論者は獨逸を以て帝國主義の代表者とし、此主義を以て惡むべきものなりとする樣子なれども、知らずや帝國主義なるものは人類の歷史と殆ど同時に生じたるものにして、如何なる國も自ら他國を壓倒する力ありと感じたる時は世界の統一を心掛けざることなし。たとへば豐太閤なども群書類聚に載せたる太閤事書に依れば朝鮮、唐國殘らず征伏せんと希望したることにて其初志は則ち世界の混一に在りと見えたり。誠に夢のやうなる大望とは思はるれども、人は生れながらに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して權力を好むものにて若し大海を呑み盡すを得ば、何の益なきことながら必ずそれを呑み盡して自己の力を誇ることならんと或る心理學者は言へり。されば六十六國を掌裡に丸めて自己の力量を信ずるを得たる豊太閤が世界混一を望みたることと人性の自然にして强ち妄想なりとは云ふべからず。たとひ妄想なりとも斯樣の妄想は人間が自己の力を信ずる場合に必ず起るべき必然必至の約束なるが故に强て之を尤むべきに非ず。されば東西六千年の歷史は詰る所世界的帝國を現出せんと欲する人類努力の記錄に外ならず。アッシリヤ。波斯。アレキサンダー大王の帝國より羅馬帝國に至りて此希望は稍や現實にせられたれども、時未だ可ならずしてその帝國も遂に一兩の花火、間もなき光となり終りたり。さりながら人類の心に根ざしたるこの希望は、再び羅馬帝國の殘墟より焚へ出だし、『チュートン』人種の帝國となり、世界的の羅馬敎會となり、回敎國となり、西班牙、葡萄牙、和蘭の植民的帝國となり、更に一轉して英、佛の勢力競爭となり、英帝國の現出となりて以て大ナポレオンの時に至れり。論者は世界的帝國を建設せんとする努力を以て獨逸の始めたる仕事のやうに思へども、何ぞ知らん、近世の文明を採用し、事實に於て世界的帝國を建設したるは我同盟國たる英國こそ最初の成功者にして獨逸が未だ小國の聯合體たるに甘んじたる時代に英國は早くも世界に君臨する大帝國となり居たるものなり。加之今日に於ては英國は世界の平和を維持する神樣のやうに自負し居れども翻て英國が世界的帝國を建てたる迹を見れば何の秘密も無し、詮ずる所、其武力の結果に外ならず。讀者若し一部の英國史を取りて仔細に之を讀まば此理は自ら明白ならん。たとへば我が天正の末に英國の海軍が西班牙の大艦隊を擊破したるは英國が海上に威を立つる初にして、それより常に軍艦を以て其貿易を保護したり。當時和蘭は海上の威力として英國を凌ぎたる有力の國なりしかども如何せん貿易を守るに國の威力を以てする必要を忘却し、政治的に大國となるを求めず、其國境も亦歐洲大陸の地續きにして大國の攻擊を免れ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ざりしかば其盛運は忽ち一場の夢と化したれども、英國は島國にして、而も他國の抗敵し難き海軍を有し、英國の艦隊は到る所の海を支配し、地中海は宛も其池沼の如く、英國より埃及に至り、埃及より印度に至るまで何の國も其海權を妨ぐるものなかりしかば印度は英國國富の源泉となりて以て益す其帝國的經營を堅固ならしめたり。さればナポレオン戰爭の當時、英國が是非共ナポレオンの事業を破壞せざるべからずと決心し、是が爲には其國力を盡し、史家をして當時の英國人民は生活の一吋にすら課税せられたりと云はしめし程の奮鬪を惜まざりしは畢竟國力の全體を以て其帝國を支へたるものにして、英國人民が力の信者にして同時に力(主として海軍力)を以て其貿易を維持し、力を以て他國の貿易を破壞し、五大洋を横絶する世界的帝國を建てしものなること疑なき事實に非ずや。人間は自己の力を信ずる時に大望を生ず。二十余年前我等は麻布の東洋英和學校にて「神よ我が女皇を救へ」と云ふ英國の國歌を聽き英國人が世界の文明、世界の平和を以て自己の肩上に在りとする自任の精神に驚き、其抱負の世界的なるを壯なりとしたり。さりながら世界を我分内とする其心は取も直さず世界を我領分とする心にして、英國が印度を取りて其人民の獨立を足下に蹂躪したる言草を聞けば、印度人が自ら印度を治めし時代と英國が印度を治めし時代とは善政、良法孰れに在りや、印度の英領となりたるは英國が好んで他國を取りたるに非ず、英國人の品性、印度人に超絶し、自然に印度の主人たるに足るべかりしが故に天意人心自ら英國に歸したるものにて是れ則ち文明の權利に外ならずと云ふ。其心事を露骨に言へば恰も我英國は世界を支配する特權あり。英國人は天の選民にして其文明の權は天の指の示す所なりと云ふものゝ如し。誤解する勿れ。我等は我同盟國を罵らんが爲に斯く言ふに非ず。我等は唯だ英國が世界の諸島を併呑し、坤輿の上に大帝國を立て得たる其成功の自信が英國をして自ら世界に文明と秩序とを與ふる天職ありとの抱負を懷かしめたる自然の成行を、事實其儘に陳述したるもの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のみ。されば帝國主義の名こそ無けれ、英國は近世に於て最初に世界的帝國を打立てたるものにして商賣上の嫉妬を以て和蘭と戰ひ、其海軍の威力を以て其好敵手たりし佛蘭西の勢力を北米より掃蕩し、印度の利益を獨占し、武運益す盛にして世界の富を其國に集中し得たり。されば世上の論者、若し英國を自由貿易、平和主義の國なりとなし、英國の偉大なるは唯だ其個人の偉大なるに在りとのみ思はゞ、其人は英國歷史の「イロハ」だに知らざる馬鹿者にして英國人は個人としても强き人間たるに相違なけれども英國の今日あるは全く其武力、主として海軍力と、其好んで他國の貿易を破壞したる世界市場の獨占に在りしことを忘れたるものなり。されば今より十餘年前にも佛國若し盤谷を占領して海軍の碇泊所となさば英國の東洋艦隊は其殆ど世界を包圍する英國全艦隊の網の目と連絡を斷たれ非常なる困難に陷るべしとて英國の識者は心配したり。英國若し海權を生命とせず、腕力に依賴せず、春風駘蕩たる自由、平和の天地に於て個人の活動に一任し、それにて今日の國富を積み得たるものならば、英人の神經、何故に獨り海軍力の消長に於て餘りに鋭敏なりや。何事も遲重にして恰も鈍牛の鈍なるが如き英人が何故に世界市場の爭奪に於てのみ「ヒステリー」の如き感傷性を顯はすや。英國が武力を以て世界的帝國を樹て、武力を以て之を維持し、好んで他國の貿易を破壞したること益す以て明かなるに非ずや。されば今度の大戰に於ける是非曲直の論は別として單に獨逸は帝國主義なりと謂て之を憎み、英國は平和主義なりと謂て之を愛するものあらば全く愛憎の標準を失ひたる空言にして、其實は英國は獨逸に先ちて帝國主義を事實に現はし、早くも世界的帝國を建てたるものなり。加之更に深く英國人の心理に立入りて評したらば是れ則ち世界の初より人性に根ざしたる世界的帝國現出の努力が、幾多の失敗に終りし前例ありしに關はらず、英國に至て始て稍や成功したるものなりと謂はざるべからず。島の世界的帝國既に儼然として起つ。歐羅巴大陸、何として指をくはへて他人の成功を座視す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べきや。大ナポレオンの雄圖は則ち陸の世界的帝國を樹て、以て島の世界的帝國に對抗し、若し好機會を得ば陸の世界的帝國に依りて以て島の世界的帝國を破壞し、文明諸國を一號令の下に統治せんと試みたるものなり。さりながらナポレオン時代は科學と武力の結合、今日の如く盛んならず、英國の島國たる天然の特權は科學の破壞し能はざる所なりしかば殆ど半以上成功したる英雄の覇圖も空しく蹶き陸上より世界的帝國を建てんとする希望は當分夢の如くなりたれども、ナポレオン死して其精神は滅びず、科學の應用、更に長足の進歩を爲せしに連れて遂に所謂Powersを生じ、流石の英國も次第に其帝國の不安を感ずるに至れり。さりながら英國が近頃に至るまで猶ほ其所謂『光榮ある孤立』を守り得たるは全く其海權の絶大なるを頼みたるが爲なりしに、露佛同盟の威力、極東にまで及び、露國は波斯、アフガニスタンより印度を威嚇し、佛國も亦印度洋、支那海の一海權たるに至りて世界の諸島を征服したる英國も懸念に堪へず遂に日英同盟を結んで以て之に對抗せざるを得ざるに至れり。日英同盟の前後に於ける露國の威望は恰も大ナポレオン時代の佛國に比すべきものにして歐亞の二大陸に跨れる世界的帝國を支配し、西は佛國を與國として獨逸を脅かし、東は印度、支那を俯瞰し、島の世界的帝國たる英國と相對立したる有樣は恰も支那の戰國時代に秦、楚の互に帝たるを爭ひし形あり、天下の勢、英に歸せざれば則ち露に歸し、露に歸せざれば則ち英に歸すと云ふ程の光景となりたり。されば日本帝國大學の外山正一博士などは世界の形勢は露國の一顰一笑に依りて定まる勢ありとて露國の恐るべきことを論じたり。流石の英人も露國の前途には頗る寒心し、『スラブ』人種の將來こそ世界の最も懸念すべき問題なりとて只管に露國の擧動に注意したり。勢此の如くなれば露國自身も此時を以て得意の絶頂としたるもの〻如く明治三十一年唯今の露帝が世界の二十六國に通牒し、其委員の會同を求めヘーグに於て萬國平和會議を開きたる當時を顧れば露國が世界の平和、世界の秩序を以て自己の肩上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に在りとする自任の精神の自ら掩ひ難きものあるなり。さりながら我等は此處に露國の盛衰史を語らんとするにあらず、勿論歐洲現代史を說かんとするものにも非ず。我等は唯だ所謂帝國主義なるものは獨り獨逸の產物に非ず。其實世界的帝國を現出せんとする努力は人性の自然に出でたるものにして近時に至りては英國の如く略ぼ成功したるものあり、露西亞の如く一時成功に近づきたるものあり、科學の武力に應用せらるる結果、日々起り來れる兵器、兵制の革命は必ず遂に世界の統一を現出せずんば已まざるべき經過を述べて以て些か世人の懶眠を覺まさんと欲するのみ。

（六）

前文を讀みたる人或は言はん。科學の力、絕大にして人間を困惑せしめ、小國の時代は大國の時代となり、大國の時代は强國の時代となり、進んで帝國的の統一に入るべしとの說、一應は尤なり。さりながら元來戰爭は馬鹿らしきものなり。各國も其馬鹿馬鹿しきを覺りたればこそ、其政治家の胸中には常に軍備縮少の意見あり。英國と合衆國の代表者はヘーグの平和會議に於て各國聯合して强制仲裁裁判所を設けて各國間の國際問題を議すべしとさへ論じたり。現在の世界は既に經濟上に於ては殆ど統一したる一帝國なり、貨幣經濟時代より信用經濟時代に移りし現代は世界の此の極端と彼の極端との取引をも帳面勘定にて濟ますことゝなれり。諸國の大都會も今は國の都市に非ずして世界の都市なり。たとへば東京は政治的に言へば日本帝國の首府なれども經濟的に言へば世界の市場なり。東京の商品は世界の商品にして東京の取引先は五大洲なり。日本全國の產物は其全島を縱橫する鐵道に依りて全島の諸港に運ばれ、此諸港は海運に依りて世界の市場に連る。世界は既に大なる共同生活體となれり。今にして猶ほ兵を動かし血を流すの必要ありや。されば君の所謂世界的統一は事實に於て既に來りつゝあり。唯だ其來る道筋は君の想像するが如く兵馬の力を以てせずして通商貿易の手段を以てするのみ。歐洲も今度の戰爭にて懲り果てたるべければ、此後は大なる戰爭も無

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かるべし。かくて世界は談笑の中に平和の統一に入るべしと。成程それも一理窟なるべけれども我等の思ふ所は然らず。勿論現代の世界は色々の方角より平和の統一に向ふべき徴候を示さゞるに非ず。萬國平和會議。萬國郵便の聯合。著作權の協商。學術上の國際會議。發明品特許の協商。法律制度の類似。共通文明的生活など云ふことを數へ立てたらば世界が談笑の間に統一に向ふべしと云ふ論者の豫想もまんざら架空の言に非ざるに似たり。されば何事も先走りする米國人は、嘗て其議會に於て國際的協商に依りて諸國の軍備を減じ、國際的の合同海軍を造り世界の平和を維持し、軍費を減じ、戰爭の機會を少くすると云ふ大主義を立て列國の外交方針を此主義の實現に向くる樣努力したしと議したり。歐羅巴にも此種の論者なきに非ず、歐洲大陸は商業の區域、交通機關、鐵道、郵便に於ては事實上既に聯邦たり、此上は兵を撤し、境を破り、各國を連ねて一個の合衆國を造り、唯一の外務省、唯一の軍務局、唯一の稅關を有する共同生活體となるべしなど云ふの人もありしなり。かく平和統一論者の材料は甚だ多きに似たれども飜つて思ふに、是れ正に武力を以て世界を統一する帝國の出現を容易ならしむべき準備にして斯樣に世界が統一に向ひたる氣運なればこそ、强國各々世界的帝國を建てんとする野心を起し、其野心もやがて實現せらるべき時期となりたるなれ。たとへば關ヶ原の大戰に德川氏が威を取り、霸を定めたるも日本全島既に一統の平和を冀ひたる感情に乘じたるものにて此感情なければ德川氏とても、あの樣なる天下分ヶ目の戰に從事する能はざるべし。されば史學の示す所に依れば天下混一の運に向ひたる時こそ大戰爭の起るべき機會にして、大戰と平和を冀ふ感情と相待ちて世界の光景は一變するを常とす。若しも列國各擠我慢を出し、何としても他國の節度を受くまじと云ふ高傲の氣風のみ强からば統一の大戰は起るべき機會なからん。支那の歷史を見るに戰國の末に六國の執政は秦の金を受けて其國を賣りしかば秦は統一の事業を爲し得たりと云へり。他國の賂を受けて其國を亡ぼすと云ふ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は不埒千萬の事なれども是れ支那が既に經濟的に一國となりたるを示すものにして此經濟的統一はやがて秦の武力的統一を招致したり。十數年前我等は通鑑を讀み此條に至り、支那は一人種の國なれば秦の黄金は六國の政治家を腐敗せしめたれども今の世界にはその樣なることも當分は起るまじと思ひしに何ぞ圖らん黄金の外交は六國の末路の如く世界に行はれ米國に駐在する獨逸の大使は一週間に四百萬圓の機密費を散じたりなど云ふなり。他國の黄金既に其論客の心を痲痺せしむるに足らば其次に來るべきものは秦の統一なり。人種も、言語も、習慣も今や人間を阻隔すべき城壁に非ず。萬國の勞働者は協同して資本家に對抗せんとし、萬國の資本家は『シンジケート』を結んで資本を國際的に利用しトルストイ、イブセンの書は日本の農村にも讀まる。是れ正に天下の一定すべき大氣運にして雄國の覇業は實に斯る場合に發す。我等は世界が平和に傾きたりと云ふ平和論者の説に裏書するとともに此平和の傾向こそ正に世界を統一すべき帝國の出現する機會なりと斷ずるものなり。

（七）

中津村にて以上の趣意を演説したる我等は更に一轉語を下し、昔は人が自己の腕を用ひて物を造り、中頃は人が機械を役し、今は機械、却て人を役す。是れ實に科學の應用が生みたる力に依れり。此力は日露戰爭に應用せられて日本軍の勝利となれり。日露戰爭は科學の戰爭に應用せられし力の最も著しく發揮したる一時期にして諸君の崇拜する諸將軍と雖も科學の力が生みたる大なる組織大なる機械の手傳ひを爲したるに過ぎず。されど今や日露戰爭を十倍二十倍して猶ほ餘れる大なる戰爭は諸君の眼前に開かる。此戰爭の勝負は勿論我等の豫言し得る所に非ず。されど勝敗は何れに在るにもせよ。科學の應用が兵器と兵制の革命を促し、之が爲に國と國との關係、種族と種族の關係を一變し、今や世界の諸國は小國たるの苦痛に堪へず大國たらんとし、大國たるを以て足れりとせず合して强國となり、强國たるを以て足れりとせず。更に世界的帝國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しも遠きに非るに似たり。時務を知るを俊傑とす。我等は諸君が善く此時勢を解し、之に應ずる手段を講ぜんことを望むとて少しく日本國民の覺悟に論及したり。さりながら談は猶ほ長し。一篇の論文に盡くすべきに非ざれば此處には之を略す。會散じたる時、或人曰く中央公論に足下が世界統一を論ぜらるゝ趣廣告あり。今日の演説を聞きて其論旨を覺りたり。敢て問はん。世界の統一せらるゝ場合に日本國の立場は如何。日本國は自ら世界の盟主たるべきや、抑ゝ亦世界の盟

と。夫れ心は小ならんを要し、膽は大ならんを要す。日本帝國既に世界の强國たり。此帝國的競爭の時代に於て何ぞ獨り人後に落つべけんや。されど世界的帝國の現出するや必ず其抱負あり。孟子梁の襄王に對へて曰く『人を殺すを嗜まざるもの能く天下を一にせん』と。武力は方便にして目的に非ず。最後の勝利は世界の生靈を愛惜する人情主義に在り。是れ我等の忘るべからざる所なり。

人間を滅す人間の慾求

茅原華山

一　富士山無用

死んだ聖人　中心人物と中心思想

駿河の國から或青年が遣つて來て、靈嶽（富士山）の頌文を貰ひたいと申し出た、昔しはいざ知らず、今に於ては富士山なんかは難有くも何ともない、あゝいふ山が日本國民の理想の山で堪まるものかと言つた、するとその青年を目を睜つて驚いてゐた、君よ、別に驚

くこともないではないか、富士の山は既に死んだ山ではないか、僕には阿蘇山とか淺間山とか霧島山とかいへば活ける英雄に接するの趣があるが富士の山は全く死んだ人間に遭ふやうな心地がする、富士の山は火の山といふのださうだが、最う死火山で活火山ではないではないか、生命安くに在る、精神安くに在る、活動主義安くに在る、阿蘇山、淺間山、霧島山は現在及び將來を代表してゐるが、富士の山は唯過去を代表してゐるのではないか。

富士の山は心熱主義を與へない、浪漫的精神を與へない、去ればとて富士の山は功利主義、自然的精神をも代表してゐない、富士の山には奇巖恠石はあらう、鎔岩流を以て滿ちて居るであらう、然しながらそれが我々の現代生活に何の貢獻する所がある、金が出ないまでも銀が出るかといへば、銀もない、鐵が出ないまでも銅が出るかといへば、銅もないではないか、石炭が出るかといへば、石炭も出ないではないか、近ごろも樺太程にもパルプを供給して呉れたならば、我々は何の位助かるかも解らない、富士製紙會社はあるが、そは富士の山に自然のそして太古より斧斤の入らざる大森林があつてそれから原料を取るといふのではない。浪漫的精神の方からいつては、若し富士の山を共理想とされては、日本國民は過去といふ葬り去られた時間の中に滅入り込むより外はないではないか、自然的精神の方からいつては、富士の山は日本國民に甘露の一杯をさへ與へない、此世界的大戰爭に際して、日本に一攫百萬金千萬金の船成金のあるが如く、日本國民も亦全體として大成金に爲りたいが、三國一の富士の山は冷然袖手傍觀してゐて、何等の國民に貢獻する所がないではないか。

富士の山はそれでも晶々として神代ながらの雪を戴いてゐて、いかにも日本國民の潔白性を代表してゐるではないかと青年はいふ。

潔白といふは消極的道德である、苟も積極的に陽的

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

白は自ら其中に在る、雪を戴いての潔白は到底是れ木乃伊の潔白であるのだ、白い氷つた雪ではない、赤い血潮の迸る赤い體軀の潔白でなければ活ける人間の潔白ではない　富士の山の潔白は我々には無用の潔白である。

浪漫的精神からいつて富士の山は無用、自然的精神からいつて富士の山は無用、そして木乃伊の潔白も亦無用だとすれば、富士の山は日本國民には一切無用ではないか。これでも强ひて頌德表を奉れといふならば、富士の山は禪家の謂ゆる『寒巖枯木、三冬暖氣なし』で、『死せる聖人』『入定の儘往生して化石した坊主』といふより外はない。

其靑年は流石に鈍感ではない、熊本縣人は何處かに阿蘇の感化を受け、信州人は何處かに淺間の感化を受けてゐ、そして我駿河の人は何處かに富士の感化を受けてゐる、私は先生の說を決して奇矯とは思はない、好んで異を立てゝ人を驚かすものとは思はない、日本といふ國家には今や中心の人物がない、又且つ中心の思想がないといつて辭して去つた。

二　凸して男と爲り凹して女と爲る

男前女後か女前男後か　人間生活は男性中心か女性中心か

今や美人中心の文學の時代である、男性中心の文學の時代ではない、僕は男であるが、決して女を眼中に置かないで、經世の策を立てやうとするものではない、男といふことを考へるには、女といふことを考へねばならない、何となれば女のない男といふものがあり得やうはないではないか、僕は男女が先天的平等でないといふことに異議のないものである、生理學から言つても、凸するものは男と爲り、凹するものは女と爲る、男女に胎內に在つて三月までは全く區別がないのである、四箇月以後に於て、未だ科學の說明する能はざる否、人間の說明し能はざる理由に依りて、或は凸して男と爲り、或は凹して女と爲るばかりである、其間に何等特別なる逕庭がない。

斯う論じ來つたならば、男も女も實は一の生命が陰陽に分たものに過ぎない、易の語を藉りていへば、太極が兩儀を生じたものに過ぎない、而して性的相違以外に於ける男女の差異、畢竟するに男と爲つて男に必要なる屬性を生じ、女と爲つて女に必要なる屬性を生じたまでに過ぎない、故に僕は男女先天平等說には何等の異議を言はないものである。異

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

議を言ふ餘地のないことと信ずるものである。

生物進化論者は或は女から男が出たものであつて、女は始め女自身で生殖してゐたのであるが、謂ゆる科學の未だ說明する能はざる事情の下に、男が女から分れて出來たものだといふ、之が女性中心說である、或はさうではない、男から女が出たのである、神が男の肋骨の一本から女を造つたのであると云ふ說もある。

女前男後であらうとも、若くば男前女後であらうとも、又は男女は同時に發生したとするも、それは毫も僕には干渉のないものである、歐米の學者には勉强以て人間を動物に引戻し、動もすれば動物界に行はるゝ法則を把つて以て、人事を律せんとする傾向がある。これは猶進化論が基督教の特別創造說に反對して起つた如く、神が其姿に似せて人間を造つたといふの說に反對して起つたものである。

僕は人間には自ら人間の生活がある境遇があると信ずるものである、故に僕は此處で詳にしたいのは、人間の生活上、境遇上、女性が中心であるべきか將た男性が中心であるべきかといふことである、動物として人間は女性中心であるとか將た男性中心であるとかいふのではない、人間は人間として女性中心ならざるべからざるか將た男性中心ならざるべからざるかといふのである、最も切にいへば日本國民は女性中心ならざるべからざるか將た男性中心ならざるべからざるかといふのである。

何故に僕が今更斯かる問題を提出したかといふに、日本國民は現に男性中心の生活を爲すか將た女性中心の生活を爲すかといふ一大岐路に立つて居るからである。

三　赤兒が母の脊中から乳母車の上に下る

赤兒から解放された女　家族主義自然消滅　女の新しい義務の自覺

西洋は女尊男卑の民族、東洋は男尊女卑の民族で、從つて西洋に於ては男が女を崇拜し東洋に於ては女が男が崇拜すといふことは一般の定說であつて、僕の如きも今日までこれを文明史的に說明するに力めたものである。然しながら日本國民が維新改革以來、外的にも內的にも物質的にも精神的にも一大暗潭默々を爲し

つゝあるはこれ亦何人も爭ふことの可能ない事實である、暗遷默移といふは人心が機微の間、視聽を聳がすことなくして變化するの謂ひなしとすれば、維新改革以來の遷移は明遷公移に加ふるに暗遷默移を以てしたものであると謂はざるを得ない、我々は日本國民の男女の位地が依然として封建の世と異ることなしと見做して居つたならば、そは此明遷公移と暗遷默移との前に其兩眼を閉づるものではあるまいか。

『赤兒が母の脊中から膝の上に下り、更に下女の脊中に上り、又更に乳母車に下つた』といふことは都會の上中流の社會に於て果して事實ではあるまいか、僕は歐米の間に周流すること六年、唯一度丁抹に於て女がその赤兒を脊負つてゐるのを見た、西人の說明に依れば昔しは歐洲に於ても女が其子を脊負つたものだが、今や此風は蕩然一掃して復た見るべからずといふ、僕は御斷りしておくが、女が赤兒を脊負ふのは美風良俗であるといふのではない、又赤兒を脊負ふのは衞生上害があるとか害がないとかいふことを論ずるのではない、日本の風俗の遷移を示す一事實として擧げるのである、日本に於ては赤兒を脊負ふの風は未だ仲々蕩然一掃されないのみならず、都會に於ても亦一掃されて復た見るべからずといふまでには至らないが、其之を見受くることの少くなつたのは何人も氣が附いて見れば成程と謂はねばならぬ事實である。

女が赤兒から解放されつゝある、女が赤兒から解放されつゝあるといふことは女が家族主義から解放されつゝあるといふことである、日本の先輩に家族主義を力說しつゝあるものが少くはないが、其娘が父母と同棲する男に嫁することを願ふものは幾人もない、殆ど一人もあるまい、自分の娘を除いての家族主義苟も娘を有てるものは、皆自分の娘を除いての家族主義を實行せんとならば、家族主義は自然消滅に歸せざるを得ない數である、僕は毫も昔しの家族主義を其儘に維持せんとするものではない、此乾坤の新整頓を要する時代に方つては、何事も時に及んで變通するの計がなければならないが、人間は若し舊るい義務を捨てたならば

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

更に新しい義務を取らねばならないのではあるまいか、人間が進化すとか發展すとかいふことは、其核心は道義的精神の進化發展を意味するのではなからうか、若し自分の娘を昔しの家族主義が脱却せしめ解放せしめて新なる義務を取らしめずんば如何。

父母と同棲しない新しい日本の家庭、西洋の面影なる日本の家庭、夫婦差向ひの家庭に於て、其妻たるものは果して何等の新しい女としての妻としての母としての義務の切實なる自覺があるであらうか。

新聞の三面記事を賑はして、貧しき男女が艶羨の標的たる「新郎新婦」――常に才媛である其新婦が輿入れをするに方つて、果して何んな義務的精神を持參金にして行くであらうか、封建の時代に於ては、新婦は恐ろしい義務――短劒を懷にして輿入れをした者である、毎朝九十九枚の戸を開けるべく餘義なくされたるものである、僕は現代の新婦にも短劒に懷にして輿入れせよとは言はないが、男が女を妻にする自己完成の爲め、女が夫を有つのも自己完成の爲めだとすれば、昔しのやうな消極的義務心は要らないとするも、更に積極的の超越自然的精神、即ち道義的精神がなければ女としても妻としても其義務を完くすることが可能ないではないか。

男の學校に於ては、忠君愛國を反覆して、男に忠君愛國なく、女の學校に於ては、賢母良妻――貞操が反覆されて、女に復た貞操の念なし、これが現代青春男女の心理的寫眞ではないか。

四　結婚は樂をするものなるか

指折り數へて結婚を待つ　結婚旅行先きの指定

僕は西洋に於ては女が嫁入するに義務を以て戰慄せずして幸福を以て歡喜するを目撃して東西の習俗が斯くまでに顚倒するかに驚いたことがある、或英國の女が僕に語つた、「喜んで下さい、私は漸く男を捕へました、私は是からは樂が可能る」、僕は決して夫婦共稼の主唱者でもなければ奬勵者でもないが、結婚するといふことは即ち樂をするといふ思想は果して人間生活の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本色なるか、結婚は幸福なり、享樂なり、歡樂なりとするは、是れ實に人間を零落と墮落とに導くものではあるまいか、否、徹底していへば、既に零落し墮落した人間であるから結婚が幸福なり享樂なり歡樂なりとするのではあるまいか。

少くとも日本の都會に於ける新婦の間には西洋の此風が浸潤しつゝあるにはあらざるが、ニイチエは『人間は必ずしも幸福を冀うものではない、唯英人のみ之を冀ふ』といつたが、人生は易きを避けて難きに就くものではなくして、難きを避けて易きに就くものである、人生は自然に任かせば向上するものではなくして向下するものである、幸福、享樂の風が一たび浸潤したならば、最も早く之に歸化するものは女である、僕は都會の女が宛も小兒が指折數へて正月の來るを待つが如く、指折り數へて結婚日の來るを待つもの寡からざるを知つて、眞に今昔の感に堪へないものだ。

赤兒から解放され、家族主義から解放され、懷劍を簞笥の中に藏め置くことから解放され、そして結婚の朝に泣かず結婚の夕に喜び勇んで輿入れし、豫じめ結婚旅行先を指定するに至つた日本の女は果してそれが眞の幸福であり享樂であり歡喜であらうか。

五　女權擴張か女德擴張か

參政權と女の解放　性善と德治主義　性惡と法治主義　矢島楫子女史に質す

日本には獨發の思想がなく、現代に於てはそれが一切西洋の借想であるが如く、日本にも西洋のフエミニズムの思想を借りて女權擴張を說くものがある、女の家庭及び社會に於ける位地を向上せしむべしと說くものがある、僕も其精神には異議はないが、日本の女を西洋の如く爲さんとする、若しくは日本に於ける男女の關係を歐化せんとするに就いては大なる異議がある、日本國民の生活的要求は決して西洋の生活的要求ではない、丁抹に於て曩きに憲法改正の事あり、女に參政權を與ふることに爲つたが、丁抹の女は是れ『女の解放である』と稱へて狂喜禁ずる能はず、相議して一

謝の意を表したといふ、日本の女には果して參政權を獲得せんとするの要求があるか、そして若し參政權を與へたとすれば、果して是れ「女の解放である」と稱へて一大示威運動を興すや否や、否、女に參政權の要求がないのみならず、男にも亦實際參政權の要求がないではないか、既に得たるものは之を行使することを知らず、未だ得ざるものは進んで之を取らんとする要求を表示したことは一度もないではないか、日本の男女が丁抹の男女に劣るのではあるまい、又日本の男女が進歩すれば丁抹の男女の如くなるといふことも言へないではないか。

儒教は德治主義であつて、刑名派は法治主義である、孟子は性は善なりといひ、刑名學の祖と爲つた荀子は性惡なりといつた、德治主義は性善なりといふ前提の上に立ち、法治主義は性惡なりといふ前提の上に立つ、人性は善でもあり惡でもある、絶對的に人性の善惡を定めんとすれば、若し善と定まれば善も惡もなる、故に人性は前漢の揚雄が言つた如く「善惡混ず」といふが、語弊はあるが、一番適切であらう、果して然らば我々が理想の政治は先づ人性の善であることを認識して、此に德治主義を樹立し、更に人性の亦惡であることを認識して、此に法治主義を樹立し、德治、法治並び行はれて、始めて二元的なる超東西の政治が實現されるのである。

西洋の政治は法治である、人性は惡であるとするのである、君主は惡である、貴族は惡である、富豪は惡であるとするのである、是れ常に下の階級が上の階級を憲法を以て拘束し、其政權の行使をば一々公約に遵はしめた所以である。日本に於ては、人性は善であるとする信仰が國民心理の根柢を爲してゐる、人を見たら盜賊と思へといふが、それさへ人を見て善人と思つて失敗することがあるが爲めに、之を警戒する意味である、君主を惡人と見做さないで善人と見做す、廊廟に立てる當局者を惡人と見做さないで善人と見做す、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本では天子を見ることと佛國民がルイ十四世を見るやうなことは未だ曾て無つたではないか、故に西洋に於ては國民は明白に當局者を不信任し、日本に於ては暗默に當局者を信任す。

斯して日本の女には何故に參政權の要求がないかゞ解るのみならず、併せて日本の男にも亦參政權の要求がないかゞ解るであらう、日本民族は義務本位の民族で權利本位の民族ではない、別言すれば徳治本位の民族であつて法治本位の民族ではない、人事の複雜になるに從つて、徳治一元で行かぬは言ふまでもないが、其出發點は徳治でなければならぬ、又徳治でなければならないではないか。

此標準から判斷すれば、日本に於て『女權擴張』といふが如きは、法治本位の西洋思想の輸入に隨伴して來た借想であるといふの外、殆ど何等の意味もなさぬではないか、而も日本に於ける女權擴張なるものは、多くは男の女權擴張であつて女の女權擴張ではない、

正すべしとする請願を議會に提出するが誰も相手にしない、僕は矢島氏の方が非常識で又不徹底である、之を相手にしない方が當然であると信ずる、矢島氏のは端的基督教的思想の直輸入――即ち借想に過ぎない、又男女平等で男が參政權を得れば女も亦參政權を得ねばならぬ――男がフロックコートを衣るから女も亦フロックコートを衣ねばならぬとする小乘的西洋の借想に過ぎない、苟も夫婦を認め、家庭を認め、而して女が子を產む限り、貞操――若し貞操といふ字面が古いならば、自由戀愛本能の自己抑制に於ては唯一の持參金ではないか、男は生活責任者で女は貞操責任者である、男が生活責任を取るは男の貞操ではないか、僕は固より男の不品行を許すのではないが、男が其素行を愼むは自己に對して愼むのである、女は獨り自己に對して愼むべきのみならず、人の妻としては生活責任者たる夫に對して愼まねばならないのだ、故に夫婦の基礎、家庭に[illegible]、夫は生活責任者に

して如何にも面目上堪へられないとするならば、寧ろ刑法から一切此條文を削除すべしと請願するが增しである、苟も教育あり修養ある日本の社會に於て、妻が姦通したりとて夫が親告して之を監獄に投ずるものあらんや、皆離縁で萬事了る、即ち謂ゆる內濟にするのではないか、西洋の如く、離婚訴訟を裁判廷に提出し夫は妻を訐き、妻は夫を訐くは、日本民族の人情として爲し得ぬ所ではないか、日本に於て夫が妻を親告するものは、常に下等社會のものであつて、自ら瞋恚を制する能はざるものに限られてゐる、若し妻に親告權を與へたならば、又必ず下等社會の女に濫用される、日本の男女道德は益々破壞される、何うして婦人矯風の目的が達せられやう。

僕が日本の女權擴張は多くは男の女權擴張であつた、獨り矢島氏が挺身して屈せず撓まず年々議會に女權擴張を請願するを多として、聊か之が批評を試みた、矢島氏たるものは『中央公論』に於て當然之に答へられ

法律を以て女の身體財產を擁護する必要は此上にもある、僕は日本の女が輕薄なる男の爲めに欺瞞され零落せしめられた幾多の事實あるを知つて居る、人性は惡であるといふ點より法律を以て女を擁護する必要のあるを知つて居るが、要するに法律は最後の賴りである、女權擴張の要求なき日本の女を法律を以て擁護するは、遠識卓見ある經國家の事業である、即ち經國家の德業であらねばならない、德から出た法でなければならない。

女權擴張が女德擴張か、日本の女は最早封建時代の教訓習俗の下に置くべからずとするは何人も異議のない所であらう、是れ女の損であるが同時に男の損である、女を理會しない男の女に無用であるが如く、男を理會し得ない女は亦自ら男には無用である、日本の女が女權を擴張せんとならば、女自ら起つて倫敎の女の如く要求せねばならぬ、是れ日本の女の性情が許さない所である、そして女權擴張といへば男と對抗する所と

為る、謂ゆる兩性對抗と為らねばならぬ、女が男に對抗せねばならぬ境遇に置かれたならば、それも已むを得ないが、我々は日本に斯かる境遇の生じないやうにするのが先決問題であらう、女權擴張が主ではない、女德擴張が主であらねばならないではないか、積極的に女德を擴張し、女德以て男を包擁するに至れば、男の女に對する態度も亦自ら一變せねばならなくなる、日本の女を男の專横、壓迫、放恣、亂行より救ふは、女權の擴張ではなくして、積極的に女德を擴張するに在りと斷言せざるを得ない。

六　人間の三生活

禁慾生活　物質生活　國家本位の生活　夫婦と藝妓娼妓と何の擇ぶ所ぞ

歴史に現はれた人間の生活現象は大別して三つと為る、勿論個人としては一に此範疇に入らないものがあるが、民族としては第一に禁慾的の生活を為すか、第二に物質生活本位の生活を為すか、若くは第三に國家本位の生活を為すか、凡そ此三者の外には出られないやうである、佛教徒や耶蘇舊教徒が一たびは實行した禁慾生活は最早歴史の扉の中に入つて了つた、殊に日本人は斯かる極端な人生撥無的の生活は為し得ないのである、故に日本民族の計は生活本位の生活を為すか、若くば國家本位の生活を為すか、此二者の中、孰れか其一を取ることである。

僕は先づ生活本位の生活は生活其物さへ徹底的に攫み得ないといふことを明にしておかねばならない、日本が其過剰人口を按排せんとならば國家の力を以て人の國を奪うて、新日本を海の彼岸に立てねばならないといふことは、僕が昔の持論であることは、世間が多少知つてゐる所であらう、生活問題も亦之を個人的に解釋しないで、國家的民族的に解釋せねばならぬ、若し之を個人的に解釋せんとならば、父母も一切無用と為る、子孫も一切無用と為る、富が始めであつて終りである、人間は黄金と始終せねばならなくなる、富を得たるのは先づ食を美にし衣を美にし家を美にし骨董を蒐める、然しながら男は富を造つて、食と衣と家と骨董では決して滿足の可能ないものである、其自動車には必ず窈窕たる阿嬌を載せねばならない、富を多く造り得ないものは、其食を粗にし、其衣を粗にし、其家を粗にしても、女が欲しくなる。子の出來ないやうに性慾を縦にする、其更に甚だしきものは、時としては醜業婦に近いて自ら慰める。

男の生活は到底女とは相離れられない、猶女の生活の到底男とは相離れられないやうなるのである、が、僕が此に明にしたいのは、男は女を目的として生活すべきものであるか、將た女を手段として生活すべきものであるかといふことである、僕は女と雖男を目的とすべきものではな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い、男を透して更に大なる目的を實現すべきものだと思ふ、果して然らば男が女を目的として生活すべからざるは自明の理ではないか。

然しながら生活本位の生活に於ては、女は抵抗し難く男の生活の目的と爲る、男は女の爲めに生れ女の爲めに勞し女の爲めに死することに爲る、男にして浪漫的精神がなく、其自然的慾求――衣、食、住、色の慾求を超越する赤熱したる、否、白熱したる道義的精神が不斷に活火を大空に放つ噴火山でない限りは、男は其自然的慾求――衣、食、住、色の奴隸と爲るより外はない、而して衣、食、住、色の生活は遂に色を中心とせねば止まない、女色中心、若くば女性中心と爲らずんば已まない。

支那民族は生活本位の民族である、世界に於て消極的ではあるが最も功利本位の民族である、最も道義的精神のない民族である、内的に墮落した支那民族は外的にも亦墮落して、最不淨最不潔の民族である、此支那民族が世界の最好色の民族であることは世界周知の事實ではないか、此世界に於ける最好色の民族は家族主義であるといふが、實は極端なる利己主義的個人ではないか、歐米人も亦生活本位の民族である、そして女性中心の生活をしてゐるではないか、歐米人が身命を惜しまず勞作する、何の爲めに勞作する、女に財産を遺さんが爲めであるとは、彼等の告白する所ではないか、支那人は農業本位て其生活程度が極めて低いから、避姙が全民族の習慣には爲らないが、歐米人は商工業本位――縮めて商賣本位であるから、其生活程度が極めて高い、父母も無用、子孫も無用と爲る、衣食足れば獨り女が有用、衣食足らざるも亦女が有用、生活本位の民族は即ち女を目的として生活して居るのではないか。

女を目的として生活する生活本位の生活は男には生活上法律的權利の主張はあるが、自己の自然的慾求を超越した道義的精神より生ずる高尙な義務心がない、男既に義務心がない、男の目的とする女に義務心の全滅するは理勢の自然である、近ごろ女が頻りに男を相手取つて裁判所に扶養料だの慰藉料などを要求するは、道義的精神より生ずる高尙なる義務心撥無して獨り生活上の權利を主張せんとする男を學んだものである、一葉落ちて天下の秋を知るべきではないか。

義務のない夫婦といふものは最早眞の夫婦ではない、夫婦は唯享樂の爲め歡樂の爲めに一時結合したのである、子の出來る心配さへなければ自由戀愛を自由自在に實行した方が、更に理想的ではないか、義務の觀念なくして夫婦が性慾を行ふのは、藝妓、娼妓、私娼、大正藝妓を相手とすると多くの相異がないではないか、否、全く相異がないではないか、若し強ひて相異なる所を擧げれば、一時的なりといふも、聊か永遠的なると、それから惡疾に罹る患の少ない位なものである、或は言はん、妻は金の要らぬ娼妓であると、享樂中心の生活に於て、即ち女を中心とし、女を目的とする生活に於て、妻に金が要らぬといふは膚淺の見である。三越、白木屋、帝劇、歌舞伎座、活動寫眞、天賞堂は誰が爲めに繁昌するる。

七　男は女の爲めに殺さる

相愛することは相殺すこと　男の自滅女の自滅

人間は到底犧牲と爲らざるを得ないものである、自己實現即自己犧牲、自己犧牲即自己實現、國家の爲めに犧牲と爲らずんは則ち女の爲めに犧牲と爲る、國家民人の爲めに死せんか、又は女の爲めに死せんか、是れ日本男兒の決せざるべからざる當面の問題である。

戰の爲めに可惜無數の男が犧牲に爲ると嘆息する男がある、平和論はこれからも起るのであるが、戰の爲めに死ぬ男の數は女の爲めに死ぬ男の數に孰れぞや、戰は時あつて起るのであるが、性慾は不斷である、女は不斷に性慾を以て男を殺しつゝあるのを知らないのか、英國の或夫人いふ、男女が相愛して夫婦と爲るといふは、互に相殺し合うといふ契約である、相愛すといふことは即ち相殺し合ふといふことであると、男の精力は有限である、女の性慾は無限である、男は常に女の爲めに殺さるゝを免れない、渡邊洪基も女の爲めに死んだ、中上川彥次郎も女の爲めに死んだ、乃至桂公の如きは亦實はお鯉の爲めに死んだのではないか。

生活の爲めに死し、商賣の爲めに死し、機械の爲めに死んだといふことも、生活本位の生活に於ては、究竟女の爲めに死んだことである、男は女の爲めに生きねばならない、そして女の爲めに死んでゐた日には、女も亦竟には自ら死なねばならなくなる、生活本位の生活は男の自滅である、男の自滅は又女の自滅である、男女の自滅は即ち人間の自滅である、人類は是の如くにして、日夜自滅の計を深じつゝあるのではないか。

八　人間を滅す人間の慾求

最廉價に買收した都會生活　惡魔の吐息　惡魔の本體　僞りの太陽の光　物質慾の滿足　人間の自滅　灰色の肺　人類の退化　人間本位

第十九世紀の文明、都會文明、都會生活なるものは即ち「人間を滅す人間の慾求」――物質慾、經濟慾が最も遺憾なく發展暴露したものである、東京を咫尺離れ、高處に立ちて東京を望めば、晝は石炭の烟が黑濛々として動いてゐる、夜は電氣の光が一大アーチを爲して包んでゐる、東京にせよ、大阪にせよ、由來封建の都會が無秩序、無組織、次第不同に成長したものであるから、近世的にこれが工業區域、これが商業區域これが住居區域といふやうな區別はない、第十九世紀文明、都會生活といひながらも、最も廉價に歐米の第十九世紀文明、都會生活を買收したのであるから、縱し其大に於て其人口に於て其富に於て其工場制度に於て倫敦、紐育、伯林に及ばないとしても、其是より受く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る弊害は、反つて此れ彼れよりも甚しきものがあることを記憶せねばならぬ。

深川、本所から王子にかけて工業が發達してゐるといふが、此れが東京の工業區域とはいへない、偶然又は必然に多くの工業が此に發達したに過ぎない、工場は隨處に在る、小石川には砲兵工廠がある、凡そ此等の工場が有する煙突は何の位あるか解らないが、石炭を燃料とする湯屋の煙突までも合したならば何千本といふ數なのであらう、大井町に在る毛織會社の煙突から吐き出す煤煙も風に依りては大井町を蔽ふに餘りがある、大崎附近の如きは鐵道院の有する工場の煙突の吐き出す煤煙の爲めに黒く染つてゐる、灰黒色に染つてゐる、然るに東京市内にある何千本といふ煙突から吐き出す近代文明の惡魔の吐息――人間を呪ふ惡魔の吐息だから堪らない、東京市民は不斷に煤煙と其灰とを呼吸せねばならない。

そして其惡魔の正體とは何であるかといへば、煙突の下に龍蟠虎踞してゐる機械である、人間を睥睨して汝、憫れなるものよ、來て我番兵と爲れと言つてゐる、昔し人間が道具を使つてゐた時代は人間が道具を使つたのである、鍬、鋤、刀、鋸、鐵砧、皆人間の道具があつた、然るに道具が進化して機械と爲つて最早人間は機械を使へなくなつた、機械は餘りに偉大である、餘りに複雜である、一人の人間の右の手では自由にならない、無數の勞働者が番兵に爲つて、其機械を君主の如くに取扱はねばならなくなつた、單純から複雜に赴くのが進化であるが、其複雜に爲つたものをして更に單純化せしむるも亦進化である、第二十世紀の文明は複雜にして收拾すべからずなつた第十九世紀の文明を綜合し單純化せしむるが其の使命でなければならぬ『科學統一』の叫びの出たのも決して偶然ではない。

或學校の寄宿舍で二十燭の電燈を點じながら就眠したので、寄宿生が皆神經衰弱に陷つたといふ、電燈の光をして太陽と同一の光たらしむる處に科學の未來があり使命があるのであらうが、現在の電燈の光は未だ其處までは進んで居らぬ、そして此幾百萬燭だから解

らない電燈が夜の東京に點けられる、東京市内に居ては解らないが、曇つた夜が最も可いが、東京と較々隔りたる處からして東京を望めば、電氣の光が雲に映發して一大不夜城を現出してゐる、人間は太陽の光る時に活動し、星宿の光る時に於て安眠すべく造られてゐる、光處に勞し暗處に休す、農夫は星を戴いて出で星を戴いて歸る、人間勞苦の絶頂であるとされて、稼穡の艱難は屢々詩に歌はれたものであるが、それでも日出から日沒まで勞作するに過ぎない、光處に勞し暗處に休することが可能たのであるが、第十九世紀の都會文明なるものは、夜に於て僞りの太陽の光を造つて、晝に勞働するのみならず、夜も亦勞働する。

晝は煤煙――最も廉價なる惡質の石炭から吐き出す煤煙と其灰を呼吸して勞働し、夜は電氣の光に包まれて安眠――神經衰弱眠をしてゐる、これが日本の都會の生活ではないか、動力としては必ずしも有煙炭を用ゆる必要はない、水力もあれば電力もある、煉炭もあれば瓦斯もある、有煙炭を用ひても若し或る裝置を施せば、必ずしも一天を濁らすに灰黑色の煙を以てすることはないのに、それさへ遣つてゐない、或人の目撃した處に依れば、宮内省までも此有煙炭を用ひて、九重の空に煤煙を棚引かせてゐるといふ、不用意、不注意も亦甚しいではないか。

斯くして人間の慾求――物質慾、經濟慾は滿足されやうが、人間それ自身は究竟自滅せざるを得ないではないか。

晝は煤煙に包まれ夜は電光に包まれる、東京市は晝夜共に火事場である、一大火事場である、それに砂を捲き上げる、塵を捲き上げる、この砂、塵が煤煙と其灰とに混じ、太陽の紫外線が地上に到達するを妨げる、田園の人は顔から黑くなる、自由に日光に浴するからである、所が都會の人は色は白い、都會の女は常に田園の女よりも色が白いが、鼻の中から黑くなる、石炭坑夫の肺を搾れば黑い汁が出る、都會人の肺を檢すれば、田園人のそれが赤いのに反して、全く灰色である。東京人の肺は即ち灰色である、絶えて赤味がないので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。

東京の何處でも可い、耳を地に附けて地上の聲を聽け、自動車、自轉車、荷車、人力車から電車、鐵車、それが機械の音が交響樂、合奏樂を奏してゐて、宛も百雷の一時に轟くが如くである、聽神經の衰弱は直ちに全神經の衰弱と爲る、視神經の衰弱も亦全神經に影響して神經衰弱を惹き起す。

近世の都會は肺結核の都會である、胃腸病の都會である、脚氣の都會である、腦病の都會である、而して梅毒淋疾の都會である、都會は百病の淵源である、醫學益々進んで疾病は更に强行進軍的に進む、人類が肉體的に退化しつゝあることは、生物學講話の著者丘淺次郎博士を待つまでもなく明白の事實である、近世の廉價なる都會文明、都會生活なるものは、人類の退化を促進せしむるものではないか。

聽神經衰弱し、視神經衰弱し、味神經も嗅神經も亦衰弱し、聽覺も亦衰弱し、體内の各機關亦衰弱しつゝある近代人は、其頭腦の發達した爲めに亡びると謂はんよりは、寧ろ其物質慾、經濟慾の爲めに滅びねばならないといふの當れるに若かず。

近代の都會生活なるものは、端的人間の物質慾、經濟慾が造り出したものであるとすれば、之を改造するには人間本位といふ標準を以てすれば一刀直ちに兩斷することが可能るのである、僕は言ひたい、國家中心の生活は即ち人間本位である、國家は富を要するが更に人間を要する、乾剛强健なる男を要する、人間本位よりして都會生活を改造するには幾多の費用が要るといふかも知れないが、いかに富を造るに急なりとて、人間には代へられないではないか、見よ、都會の兒童は皆弱者たらんとする傾向を有し、田園の兒童は皆强者たらんとする傾向を有するを。

九　安くにか心忘と身忘とを求めん

都會人は多淫に傾く　三角關の爲めの爆烈彈　個人生活は世界的にして女性中心的　男の血税　カント　戀愛は絶對か　戀愛

中心は男が弱者と僞り女が強者と僞る　父母無用子孫無用

それ夜となく晝となく、其物質慾、經濟慾を滿足せしめんとして心を勞し體を勞す、勞働者も資本家も若くは其富に寄生する官吏も教育家も新聞記者も小賣商人も亦此雰圍氣中に呼吸する青年も皆必ず煩悶あり懊惱あり疲憊あり苦痛あるを免れない、富めるものも、貧しきものも、富めるにあらず貧しきにあらざるも、大觀すれば皆一つである、必ず何處にか慰藉を求め安息を求め心忘を求め身忘を求めざるを得ない、個人として高尚な趣味と娛樂とに赴くものがあらうが、一般的にいへば、論なく食に求める、食では刺激が足らないから酒に求める、尋常の酒では刺激が尙足らないから最も强烈なる酒に求める、炭酸瓦斯を以て滿ちたる活動寫眞館に求める、劇場に求める、然しながら神經の皆衰弱せる都會人は自然に多淫に傾く、健全なる農夫の疲勞は安眠を促がすが、不健全なる都會人の疲勞は淫蕩を促がす、食あるも酒あるも、活動寫眞あるも、劇場あるもカフェあるも、必ず女に歸着せざるを得ない、妻に歸着するも、藝妓に歸着するも、娼妓に歸着するも、大正藝妓に歸着するも、若くは高等內侍に歸着するも皆均しく女に歸着するのである。

外的には自然と乖離して唯物的なる都會は內的にも亦道義的精神と乖離した唯物的なる都會でなければならない、爆烈彈を何の爲に製造するかといへば、人を殺す爲めではない、三萬圓を詐取せんが爲めだといふ、都會人がいかに唯物的に徹底してゐるかを察すべきではないか、唯物的生活には國境がない、商品は唯ヨリ高く買はんとするものに賣る、日本人たると支那人たると英米人たるとを問はない、高く買ひさへすれば敵國の獨逸にも密輸入をする、此風が俗を爲せば、政治家の運動費が袁世凱から來たり、米國から來たり獨逸から來たりするやうに爲つても、何にも不思議はないではないか。

唯物的個人生活は一面には女性中心と僞り一面には國境を撤して世界的に爲る、人間生活が女性中心と僞れば、男は晝に於ては飽くまでも身心を疲憊せしめ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夜に於ては女を樂しましめんが爲めに、之を歌舞の場歡樂の鄕に誘ふのみならず、常に逸して性慾是れ念ふ女を滿足せしめんが爲めに男に過ぎた血稅——昔しは兵に徵せらるゝを血稅といつた——を拂はねばならない、昔しは國家に血稅を拂ひ、今は女に血稅を拂ふ。

しかも都會人は尋常一樣の刺激では滿足が可能ないから、其性慾にも亦人工的の刺激を加へんとする、人間は此に至つて完全に畜生道、餓鬼道、惡魔道に陷つたものである、男自ら慰藉し安息せんとする目標たる女は卽ち男を殺さんと待ち搆へてゐるのでする。

僕は生物學上、女性中心が眞理であるか若くば男性中心であるかといふことには興味がないが、人類の生活に於ては、それが男尊女卑の東洋でも、若くば女尊男卑の西洋でも女性中心であつたといふ事實を看取せざるを得ない、男は或る小さな例外を除き、常に生活の責任者であつた、知らず誰が爲めに生活の責任者と爲つた、一は固より自己の爲めであるが、一は女の爲めになる、自己と女とを喰はし、そして女に對する戀の爲めに人類數千年の歷史を作り來つたものである、大體に於て男は勞し女は逸し來つたのである、人間の生活は女性中心ではないか、若し此上にも女性から男に對する義務、それから男を透して更に大なる理想を實現する義務——道　的精神がなくなつたならば、カントの格言たる"I ought, therefore I can"『我は斯く爲さゞるべからず、故に之を爲し能ふ』といふ自然的慾求を制御する精神がなくなつたならば、男は先づ女の爲めに野垂れ死に死し、女も亦遂に自ら野垂れ死に死なねばならぬ。

男は常に女性を中心として生活し來た、女は更に其代償として男を中心として生活せねばならぬ、そして女を以て男の始めとし終りと爲さしめないやうにするのが、男を愛護し亦自ら愛護する所以である。

近代の美人中心の文學は卽ち戀愛中心の文學である、戀愛を中心として結婚するのが西洋の風で又近ごろ日本に輸入された風であるが、僕は人生に於て何事も絕對ではなく相對的であるとすれば、戀愛中心も亦餘程の制限を以て聽かねばならぬと思ふ、封建風の結婚以外、西洋風の結婚、やはり超東西の結婚がなければならぬと思ふ、男は常に積極的であつて女は常に消極的である、若し戀愛を中心として個人的に結婚をするとせば、多くの場合に於て、男は求める者と爲り、女は求められる者と爲る、日本に於ては此事が未だ風俗とは爲てゐないが、西洋に於ては拔くべからざる牢乎たる風俗と爲つてゐる、男が女に求むれば、男は始めから弱者として立ち女は始めから强者として立つ、何んとなれば可否の權、ヴイトーの權、諾不諾の權は全く女に歸するではないか、故に男は其愛する女の愛を惹起せんとならば、之に責むるに結婚後に於ける女の夫に對し父母に對し子孫に對する大義務を以てする譯には行かない、之を責むれば女は逃げて行く、其處で何うあつても西洋の如く幸福と歡樂とを以て女を誘はねばならなくなる、富を以て誘ひ、ダイヤモンドを以て誘ひ、寶石入れの指輪を以て誘はねばならなくなる、是の如くにして得たる妻

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に於て果して男は女を中心として生活に努するものなれば、女は宜しく男を中心として男の財務者と爲り、愛護者と爲り、更に男を透し、其子を透して更に大なる理想目的の爲めに盡くすといふ氣に爲れるや否や、妻の夫に求むるものは不斷の快樂、不斷の歡喜ではないか、其不斷の快樂、不斷の歡喜を追求するが爲めには父母無用、子孫無用と爲るのも亦論理の必然的展開ではないか。

日本の社會が既に斯く爲れりとはいはないが、斯く爲らんとする傾向のあるのは掩ふべからざることである、斯かる社會は僕が此に反覆するまでもなく、男は其物質慾を滿たし好色慾を滿たさんとして自ら死を急ぎつゝあるのである、そして女は一には男が容易に富を得ぬが爲めに從つて不婚と爲り晩婚と爲るのが爲めに、女も亦晩婚と爲り、若くは老孃と爲らねばならない運命を擔はねばならなくなつた、一は女が享樂主義と爲るから、左なきだに心に死を急ぎつゝめる男をして更に死を急がしめて若後家と爲らねばならない運命を擔はねばならなくなる、都會とは最も得意なる小數の女と多數の未婚の女と多數の後家との都合であるといふことである、男も可哀想だが、女も亦可哀想ではないか。

十　世界には唯二個の國家あり

商工業と科學　日本は世界主義たる條件を缺く　人の衆きにあらず地の小なるなり　精神なき國學組織　日本民族の特別なる境遇から自發した民族的思想　日本の一大矛盾　超越生活精神　英雄的健闘努力　新日本主義　超東西生活

國家々々と口癖のやうにいふが、世界には國家らしい國家はない、國家は戰爭から進化したことはトライチュケを待たないで既に何人にも首肯される所である、國家といへば海軍にもせよ陸軍にもせよ、武力が中心でなければならぬ、日本が武を以て國を建てたといふも亦此れである、既に國家を立つ、積極的に進取せねばならぬ、積極的進取的の國家主義は勢ひ、帝國主義と爲らねばならぬ、由來、商業も工業も科學も世界的のものである、此强盛熾烈なる國家主義ありて、商業、工業、科學始めて國家の目的に集中されて其用に供せられるのである、斯かる國家は即今安くに在りやといへば、僕は唯獨逸之あるのみと謂ふより外はない、而して日本は較々類似してゐるといふより外はない、然り形式的に類似してゐるといふより外はない、支那は天下であつて國家ではない、印度は天下であつて國家ではない、露西亞は天下であつて國家ではない、米國は天下であつて國家ではない、英國は一たび

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國家らしかつたかも知れないが、今や天下である、佛國は既に衰へて將さに西班牙の後を趁はんとしてゐる、世界に國家らしい國家は唯獨逸なりといふは之が爲である、日本民族は民族的國家主義を强持して進まんか或は他の世界の多數の民族の如く個人的にして世界的、そして女を中心として生活せんかといへば、日本が女を中心として性慾を中心として生活するには、重なる條件が缺けてゐる、條件とは何ぞ、世界に於ける生活本位、女本位の民族は皆自足自給するに足る一世界を成してゐることである、獨逸は七千萬の人口がある、日本は臺灣、朝鮮を除けば、五千餘萬に過ぎない、そして人口の過剩に苦しんでゐる、人の衆きにあらずして地の小なのである、獨逸は世界に覇者たらんとして七千萬衆を結束して世界を相手に戰つてゐる、日本が早くも五千餘萬の人口の衆きに苦しみながらも其生活問題を民族的國家的に解釋しないで、個人的に解釋し、生活中心の生活を爲し、國內に於て人々相喰まんとするは、いかにも其志が小であると謂はざるを得ないではないか、僕は日本民族は獨逸以外の世界の風潮たる非國家的傾向、世界的傾向に對して卓然として自立する所あり、國家主義、帝國主義を以て日本の總ての問題を解決したいと思ふが、日本には形式的に機械的に國家の組織はあるが、有機的に精神的に此形式的機械的の國家の組織する國民的思想がない。獨逸にはウイリヤム選王以來、フレデリツキ大帝以來、一貫した國民的精神がある、そしてカント、ヘーゲル、フヒテ、ニイチエ、トライチユケ、下つてはバーンハーデに至るまで民族的なる向上的精神、道義的精神があつて獨逸の國家の生命と爲つてゐる中核と爲つてゐる、日本には此向上的精神がない、道義的精神がない、日本民族には日本民族の特別なる境遇がある、此特別なる境遇から自發した民族的思想がなければ、日本の國家は支持されないのである、然るに日本にはカントもなければヘーゲルもない、フイヒテもなければニイチエもない、唯縱に獨逸の思想を藉り來つて、日本の國家を思想的に支持せんと努力するものがある位である、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

獨逸の思想に依りて支持せらるゝ日本の國家は、甚だ覺束ない國家ではないか。

所謂ゆる獨逸より藉り來つた國家思想なるものは極めて少分量である、日本の青年を支配するものは獨逸思想ではなくして、反て世界的天下的である英米の思想である、露西亞の思想である、頽廢的なる佛蘭西の思想である、日本の青年が之等の諸國の思想、藝術に支配されて、唯物的個人と爲つてゐる、生活中心と爲つてゐる、戀愛中心と爲つてゐる、女性中心と爲つてゐる、其形は國家的、其神は世界的、日本民族は自ら意識しないやうであるが、斯かる大矛盾の中に生活してゐるのである。

維新の改革は徳川時代に於ける國學者、漢學者が國家的勤王的精神を扶植鼓吹して始めて成就されたものである、カントもヘーゲルもフイヒテもニイチエもあつたのであるが、維新以後に於て日本民族の生活は外的にも内的にも一變したことあるを記憶せねばならぬ、西洋の文明、西洋の教育、西洋の一切を輸入し、新なる生活を始めた爲めに、維新の改革を成就した人物も、思想も、精神も、現代の青年には全く前世界の觀があつて、之を西洋に比すれば、更に縁遠いのである、青年ばかりではない、苟も近世學校の教育を受けたものは盡く縁遠いことであらう。日本は政府が先頭に立つて歐化に忙がしいのであつた。歐化といふは功利化、物質化、機械化、分裂化、個人化、世界化、女性中心化である、日本が形に於ては國家的、神に於ては非國家的といふ奇觀を呈するに至つたのは之が爲めである。

プラトンは國家は最高道徳であるといつた、我々が民族として民族的に生活問題を解決し併せて世界を引上げて更に一段の向上を成就せしめやうとするにも、亦國家を透さねばならないと決意すれば、我々は生活に入つて更に生活を超越せねばならぬ、超越生活精神は即ち超越自然的慾求精神である、此精神自發して始めて民族が活ける道義的精神の噴火山と爲り得るのである、克己的精神、犧牲的精神、向上的精神は是より

生じ、英雄的健闘努力が民族の常習と爲る、英雄的健闘努力の前には人間の物質慾、生活慾は瞬息に征服されざるを得ない、經濟の人間、富の人間ではなくして人間の經濟、人間の富と爲つて、人間本位の本活が樹立される。

　人間本位の生活が樹立されて、始めて新なる男性中心の生活が樹立される、男性中心であつて女性中心、而して實は男女を超越した生活である、男は有史以來女性中心の生活を爲し來つたものである、若し生活中心の生活と爲れば、男は全く女の爲めに生存することに爲る、男は勞し女は逸す、男は勞を以て逸を待ち、女は逸を以て勞を待つ、國家中心の生活、英雄的生活人間本位の生活あつて、男は義務に生き、女も亦義務に生く、男は女を中心とするも、女も亦男を中心とするに至つて、男は女の擁護者となり愛護者と爲ると共に女も亦男の慰籍者、愛護者と爲つて、道德の根本たるギヴ、アンド、テーキ(與へて取る)が完全に行はれる、そして此圓滿なる男女の關係は、男女の心が常に國家の目的理想を實現せんとする活火に燃えて居らなければ決して成就するものではない、男女の關係が是の如くならば、夫婦の關係は決して男對商女の關係ではなくなる、從つて夫婦が其性慾を遂げるのは、男と商女とが其性慾を遂げるのと全然其意義を異にするに至る、夫婦なるものゝ存ずるは、現世を中心として前世及び來世を一貫するが爲めであるといふとに爲る、超東西生活を樹立するには、先づ男女の關係、夫婦の關係から新にして掛らねばならないではないか。

　歐洲戰爭は日本民族に對する一大警策である、日本民族は聰明にして判斷に富んだ民族である、最早舊日本の生活を維持すべからざることは百も承知、二百も合點してゐる、然しながら全然歐化主義には滿足しなかつた、其歐化主義に滿足しなかつたのも亦適ま日本民族が聰明にして判斷に富むを證するものである、僕は長く歐化主義の一先鋒であつた、歐化主義は世界的生活に參加せる日本民族として必ず一度は經過せざるべからざる階段であつたので、僕は今にして之を悔ゆ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ることはしないが、我々は最早時代と共に豹變して、新日本主義、超東西生活の爲めに努力せねばならない機運に入つたのであるといふことを自覺せねばならぬ。若し思想上の英雄兒ありて先づ之を言に唱へ、政治上の英雄兒あつて更に之を行ひに現はしたならば、日本民族の中心思想先づ定まり、之を黎明期として出發點として革風易俗の大業も容易に成就することを信じて疑はない、嘆ずるを休めよ、中心人物なく、中心的思想なしと、苟も憂を同じくするもの之が先唱たるを辭せずんば、大才は亂世に起るものである、死馬の骨を千金に買へば、駿馬忽ち群り至る、我々は大に自ら發憤せねばならないではないか、附記、近作七絶一首。

品海曉望

山生彼岸望蒼茫。一々行帆帶曙光。知是西方夜猶墨。日輪先照太平洋。

行國、定國、進國

竹越與三郎

第一　行國より定國まで

國家發達の順序を歴史的に言へば、先づ行國あつて而して後定國がある、行國とはトルキスタン、アフガニスタンと云ふ如き、半ば遊牧半ば農業國の民が、一定の土地に國を建てるか、併し地味盡き羊豚、力を失つた後は國を擧げて新たなる土地へ移る、此時は羊豚乃至、一木一草まで、悉く引抜いて新たな土地に移るのであつて、例へば言はゞ我國の諸侯の國替の如きも

のである。唯我國の國替は中央政府の命に依り、行國は自己の利害を自から判斷して移るだけの相違である。而して是等の行國が或一定の土地に定住して自己の墳墓を築き自己の歷史を繰返し、其處に根據が立つた時に、容易に動くことが出來なくなる、而して地味が渴れば、更に土地を廣げて行くと云ふ手段を執る。之を名けて即ち定國と云ふのである。何れの國も皆行國より定國となつたものでないのはないが、偖て更に定國となつた後に、又種々なる變遷がある。即ち定國が千百年の歲月を經て相當なる文明を有し、相當なる歷史を有する時に至つて、人民の氣力國家創造の時の如くならず、政權が唯々二三權豪の手に歸し、國民全體の希望に副ふことが出來ない。國民は僅かに生活し、政權は權豪一門の手にあると云ふ時に當つて、國家の休戚は人民の利害に伴はずと云ふ場合になれば、此國家の存亡は人民は顧る處にあらずと云ふことになつて來る。此時に當つては國家存在を保つのみであるから、之を名けて停國、即ち停つた國となる。歷史もそこに停り、運命もそこに停り、人民も其國に停り、即ち國家發展の機會がない。其土地で作つた物を其土地で食べると云ふに過ぎぬ。斯の如き國は即ち衰亡の運命を含むものである。如何なる國が停國かと云へば、種々なる因緣はあるが、地理上より言へば、大陸の中央に位して四方の交通乏しく、刺戟少なき國が停國となり易い。即ち歷史地理學に於て、海なき國は滅亡すと云ふ斷定を下されるのは、海なき國は刺戟がない、刺戟がない國は即ち停國となる運命を有して居るからである。人類の歷史を見るに、如何なる國も海へ出やうと努力する。殆ど人類の歷史は陸地より海へ達せんとする努力の外はない位である。露西亞は多年土耳古と戰つたものであるが、それもダーダネルスの海峽に出たい爲めである。獨逸が此數十年努力したのは何である。佛蘭西へ出ることは思ひも付かないから、小亞細亞を經てペルシャ灣に出でんとした努力の結果である。日露戰爭は何の爲に起きたかと云へば、南方に於て凍らぬ港を得たいと云ふ露西亞の欲望の結果で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。斯の如く如何なる國も海へ出でんことを努力するのは何であるかと云へば、其國に停らざる爲めである。絶えざる刺戟を得んが爲めである。刺戟のなき國は即ち停國となるのである。是等の理由に依て國は常に停國ではいけない。吾々の國の歴史が行國より定國に行くが如く、停國より進國に始終入らなければならぬ。進國とは如何なる國であるかと云ふに其國民の氣力常に旺盛にして、不斷に開展する所の氣力を有つて居ることである。政治家が此國民の氣力を弛まさゞるが爲めに、常に四方に向つて疆を開いて、行くと云ふことである。軍人識者が此事を行はんが爲に、常に土地を開き、進んで取ると云ふことを考へることを止めない國である。氣力進み、國力進む。故に之を名けて進國と云ふのである。顧つて思ふに我國は古き歴史を見れば、矢張り行國であつて、神武天皇の一族、草木禽獸を隨へて、悉く國を擧つて而して先づ中央に都を定めた。是より所謂定國となつて國家を經營して來た。而して種々の因縁に依て四方に威力を及ぼして來て、吾々は今日之を繼承して居るのであるが、之を名けて果して進國と言ひ得べきや否や。進國ならば我國は何れの外に向つて進んで居るのであるや否や。是れ頗る注意せねばならぬことである。

第二　我將來は南にあり海にあり

國家は活物である。進歩せずんば即ち退くものである。何れの國も其國を經營して行くと云ふことは、恰も坂に車をやるが如きものである。登らずんば即ち落ちるものである。國運は一所に止まつて居らぬ。我國運を進めると云ふことは政治家として言はざる者はないが、併し二千五百年間集約的に耕やされた此國は、山は麓まで開けて居る。山の絶頂まで既に茶が植ゑられて居る。畑は三尺四尺の下まで掘返されて居る。此國力を唯國の內に於て進めんとして努力するも詮なき事である、如何にしても境界を廣げて之を大きくし、田畑を殖やすと云ふ工風をせねばならぬ。是が今日國政の眼目であらうが、果して實際に於て其努力ありや否や。之を努力せずんば進國と云ふことは出來ざるので

ある。矢張り停國の運命を免かれぬ。我國は人口は年々四十萬内外の増加があつて、而して衞生は行屆いて、疫癘なく、饑餓なく、都會の健康も益々能く保たれて、死亡率は少なくなつて來る。大正四十年になれば我人口は本土のみに於ても、凡そ一億萬となる有樣である。國の境を廣めずしては此人口の始末を付けると云ふことは容易ならぬのである。亞米利加に於ては十萬の日本人あり、布哇に於ては七萬の日本人あり、是等も進み得ざる運命を有つて居る。然らば之を滿洲に送らんか、然らば之を朝鮮に送らんか、滿洲は政府が非常に努力するも恐らくは容易ならざるものであらうと思ふ。何れの國の政治も、政治家が人爲を以て多くの事を行はんと努むるが、其努力が物理學の原則に外れる以上は何等の效果もない。物理學に於ては、水は高きより低きに就くと極めてある。或時は喞筒を使つて高きに上げることは出來るが、上つた水は矢張り自から下へ降るのである。我國に於ては南滿鐵道、參謀本部、政府の努力に依て儲かる會社、是等のものが頻りに喞筒を使つて滿洲へ人を送るが、併し喞筒に依て送らるゝ水は軈て歸つて來るのである。何であるか人類は生物學の原則に於て生活するものである。生物學に於ては何を敎ゆるかと云へば、生物は本能がある。渴して水を飮み、寒くして暖を求め、安逸を好んで苦痛を嫌ふものである。支那古來四千年の政治學の敎ゆる所の智慧は何であるか、人情に基きて民を治めると云ふことが王道であると云ふことに歸着して居る。人情と云ふことは即ち人の本能と云ふことである。然るに我國が滿洲に向つて政治上の喞筒を使つて人を送つた所が、生物學の原則に於て、暖きを好んで寒きを嫌ふと云ふ原則、渴して水を飮むと云ふ原則に外れて居る以上は、生物なる吾々は滿洲に向つて行くことを厭ふのである。故に是等の努力は國家を進國とする努力と云ふことは出來ぬのである。唯空しく努力すると云ふことに止まるのである。又吾々は歷史地理學の原則に依て治められて行くものである。英雄一時の權謀術數に依て、地理學や歷史學の原則を脫却すること

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は出來るが、軈て元とへ戻つて來るものである。强き力のあるものは弓弦を引くけれども、放てば元の所へ歸つて來る。英雄は國家の弓弦を引いて矢を動かすことがあるが、放てば軈て元の所へ歸つて來る。地理學は何を敎ゆるか。山に國を建てるものは亡びて、海濱に國を建てるものは榮えると云ふ敎へである。大陸の中に國を建てるものは亡びて、海に行くものは進むと云ふ敎訓を與へてある。半島に國を建てゝ困厄せざるものはないと云ふことを敎へてある。島國にして大陸に努力して無益ならざるものはないと云ふことを書いてある。南の國が北に進みて成功したものが少ないと云ふことが敎へてある。然るに我國は島國であつて大陸に手を伸さんとして居る。我國は四面環海の國で、天惠を受けて居りながら、此天惠を捨てゝ山の中に入らんと云ふことに努力して居る。斯の如きことは國家を進國とする手段にあらずして、好んで自から墳墓を築かしめんとするものである。英吉利がバルカニデーの領土を有して居つて、大陸に手を掛けた時に、國家は多年戰爭に引き入れられて、人民は生を聊せずと云ふ有樣であつた。然るに佛蘭西の爲め、大陸から追去られて島國となつて以來、英國の權力は茲に增加して來たのである。又支那二十四朝の歷史を見ても、厚氷の張る、黑ずんだ雲の出る、駱駝の繁殖する北の國民が相率ゐて、地味の好き、杏子の花咲き、葡萄の實のる南の國を侵略した歷史でないものはない。即ち北方から南方を壓迫すると云ふことは、支那二十四朝の歷史である。僅かに明朝が元朝を追拂つたと云ふことは、一の異例であつたが、今日淸朝が中華民國に亡ぼされたと云ふことも、南淸が北淸を追拂つたものであるが、二三年ならずして北方の袁世凱は矢張り南方の中華民國を亡して仕舞つたのである。是れ歷史の敎ゆる所である。所謂北方の弱なるものは歷史に定められたる事實である。北方の强なるにあらず、北より南に行くものゝ强なるなり。然るに我國は島國を以て大陸に手を着け、海の國を以て大陸の奥に入込まんとし、南の國を以て北に手を染めんとする。而して歷史學の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

敎訓に背き、地理學の敎訓に背き、生物學物理學の原則にも背いて此國を成さんとするものがある。是れ國家を進國より停國たらしめんとするものである。是れ國家をして墳墓ならしめんとするものである。予は茲に大聲叱呼して、此の我國の將來は大陸にあらずして島にある、我國の將來は北にあらずして南にある。と告げんとするものである。

第三　事實に現はれる國民の希望

國家を經營する所の國策なるものは二三少數の識者が考へた政策ではならぬ。國民が寒くして衣を求むるが如く、渇して水を求むるが如く自然に要求したる政策でなければならぬ。而して此要求が新聞紙の議論や、論客の小冊子に現れたものばかりではならぬ。國民が數百年間事實の上に於て示したる要求でなければならぬ。偖て此二三百年間の歴史に於て、我國民が曾て北を要求したることありや。幕末の文章を見れば、折々憤慨して北方を戒めると云ふことがある。併し是は露西亞の進擊に備へんとしたに過ぎぬのである。翻つて人民が南方に活動した歴史を見れば三四百年間の歴史、悉く之を報道するものにあらざるはない。之を證明するはボルダス航海の一卷にて足れりである。暹羅の歴史も一冊にて足れりである。我國に於ては頻りに暹羅に於ける山田長政の偉功を傳へるが、豈啻山田長政のみならんや。幾多の山田長政なる者は當時南洋に往來して居つたのであつて、長政時代に暹羅のバンコック國に於ては日本人が八千人居住して居つた。當時最も大なる船であつても、六七十噸の船しかない。六七十噸の船に於て、支那海臺灣海峽を通つて暹羅に航海すると云ふのは非常に難事であつたに相違ない。此難事を冒して尙ほバンコック國へ八千人居つたと云ふことである。以て如何に支那沿岸、南太平洋に無數の日本人が居住したと云ふことが分る。歴史に依れば暹羅王が隣國と戰つた時に、先陣に六人の日本人が、日本服に依て日本刀を佩びて居つた。中陣に日本服を着日本刀を佩したる暹羅人が數百人居つて、而して後陣に數千人の暹羅人が象隊を率ゐて居つた。此陣立を見

な隣國、風を望んで去つたと云ふことが書いてある。僅か六人の日本人が隣國を威伏すると云ふ此の一事で如何に日本人の威力があつたと云ふことを證明する。此他無數の男女は暹羅の朝廷にも出入して居る。或者は暹羅の總理大臣の妻となつて、宮廷内外に勢力を振つたと云ふこともある。ボルダスの航海に依れば日本人がボルネオ附近を徘徊するに、刀を船の中へ置いて上陸したと云ふことが書いてある。何となれば獰猛なるボルネオ人も日本人に睨まれると、概して慴伏して仕舞ふのである。故に彼等に對しては刀を差す人がなかつたと云ふことである。以て如何に日本人の威光が輝いて居つたかと云ふことが分る。又和蘭人が墺門、即ち今のマカオを攻める時に當つて、日本人と聯合してマカオの葡萄牙人を攻めたと云ふ記事がある。又和蘭人が瓜哇スマタラより暹羅を經て日本に航海するに當つて、水夫は到る處募集しさへすれば日本人が應ずると云ふとである。凡そ南洋沿岸一帶何れの地と雖も日本人の居らざる所なきと云ふ有樣であつた。當時若し我國に一人の政治家があつて是等海外に居住する日本人に向つて一本の指でも加へたならば、南洋沿岸支那の南方沿岸、疾く既に我日章の旗を翻して居つたのであらうと思ふ。之等の無數の英雄が幕府の鎖國令に依て、或は其土地に終り、或は歸り、空しく英雄の事業を煙霧に付して仕舞つた。是即ち日本人が渴して水を飲むが如く、寒くして衣を求むるが如く、自然に南方に發展するの希望と性質を有つて居ると云ふことを證明して居るものである。吾々が今日唱へる所の南進論なるものは、漠然たる一家の言にあらず、國民の本能、國民の歷史、國民の希望に基く所の政策であつて、我國は停國たらしめず、進國たらしむるの策は他なし、即ち此生物學の原則に依て動く所の國民の希望を實行せしむるの外はない。

第四　先づ汝の兄弟を數へ

翻つて思ふに、吾々の祖先は高天原より來れりと云ふが、此高天原は何れに在るか予は知らざる所である。併ながら瓜哇スマタラを中心とする南洋一帶の島

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來人と吾々は、少なくとも祖先を同じうすると云ふ一事だけは、斷言が出來ると思ふ。吾々の脈管の中には蒙古人の血液があることは爭ふべからざることであるが、併しながら馬來人の血液は尙ほ更に多いものと思ふ。吾々と祖先を同じうする所の馬來人が今瓜哇スマタラを中央として八千萬人より一億萬人を數へられて居る。之等の者が如何なる狀態にあるかと言へば頗る悲むべき境遇にある。吾々の弟、吾々の妹、吾々の遠き親戚、之等が今斯の如き悲しむべき狀態にあるに當つて、吾々日本人は手を拱して傍觀し居らるべきや否や。吾々は四海に大義を布くとか、文明を四方に及ぼすとか言ふが、吾々は今吾々の同族の馬來人が此悲しむべき境遇に居るに當つて、之を傍觀して、徒らに大義を四海に布く、文明を四方に及ぼすと言ふも、誰か之を信ぜんやである。予は一年之等の地方を廻巡して、此政治組織、社會の行樂、人民の集望、風俗習慣を視察して、確かに吾々の祖先の風俗習慣を維持して居るものであると云ふことを見て、此同族を何時までも悲しむべき狀態に置くと云ふことは、吾々として忍びぬことであると感じて歸つて來たのである。若し日本人が僅かに衣食して自から存在すると云ふに止まらず、文明を四方に及ぼすと云ふ心持があるならば、先づ救ふべきは支那にあらずして、南洋諸島である。蒙古人の國にあらずして馬來人の國である。吾々は基督教の勢力を過大に見て居る。或は佛教の勢力を過大に見て居るが、玆に吾々の閑却せざるべからざるはマホメット教の勢力である。マホメット教は其宗祖が天國は火光劍影の下にありと教へた爲めに、頗る勇猛心を有つて居る。是が政治組織の惡いが爲めに、今日頗る勢ひを失つて居るが、宗教としてマホメット教なるものは容易ならぬものである。而して此マホメット教徒が團結して旗を揚げると云ふことは、又世界の治安上容易ならぬ問題である。流石に獨逸のカイザルは玆に着眼して、土耳古はマホメット教の中心なるが故に、此中心に綱を下せば、以て世界のマホメット教徒を動かすに足ると思つたのが、彼の土耳古政策の動機である。彼

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は之に於て着々成功して、今は土耳古を驅使して、露西亞を苦しめ、是より埃及を窺つて英吉利を苦しめんとして居る。吾々は宜しく此事に着目すべし。獨逸は全然馬來人と關係の無きものであるに拘らず、尙ほ瓜哇スマタラを窺はんとして居る。吾々は馬來人と血脈を同じうするものである。而して我國は宗教に於ては極めて寛大なる者である。宜しく印度洋以東のマホメット教徒の保護者を以て任ずべきである。而して馬來人を敎導し、誘掖し、之を練磨すべしである。苟も日本人は南洋マホメット教の保護者を以て任じ、馬來人を組織し訓練したならば、我國の前途頗る望ありと言はねばならぬ。而して又之を行はんが爲めには、南に向つて進み、島に向つて進まねばならぬ。大陸に向つての努力よりも其力を海と南に集注せねばならぬ。

第五　南進の焦點

斯くて吾々は南と海に進むとして、其力を集むべきは何處であるかと云へば、瓜哇スマタラである。瓜哇スマタラは今日和蘭の領土たることは明白であるが、併し此領土權なるものは頗る疑ふべきものである。瓜哇には尙ほ嚴然たる王者が在る。一人はジョクジャカルタに住み、一人はスーラカルタに居つて、尙ほ王と稱して居る。彼れは今和蘭に服從して居るが、未だ曾て一日も其羈絆を脫することを思はぬことはない。而して和蘭が彼等に對して有つて居る權利は頗る薄弱なものである。唯權力に依て之を守つて居るだけである。又北の一角アチインに於ては年々歲々和蘭と戰つて居つて、未だ曾て和蘭の主權を認めて居らぬ。此アチインなるものは今日北の一割に追詰られたが、馬來人の歷史に於ては驚くべき沿革を有つたものである。曾ては馬來半島を襲ひ、和蘭と戰ひ葡萄牙と戰つたとのある强國である。如何に追詰られたりと雖も、尙ほ獨立國である。吾々より見れば交戰國である。斯の如き狀態であつて瓜哇スマタラに於ける和蘭の權利なるものは頗る薄弱であつて、寧ろ權力である。吾々は隣國に於て强大なる國家あることは敢て意としない。併しながら和蘭の如き薄弱にして中立を守ることの出來ざる國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家のあることは頗る危險である。日露戰爭の時に、和蘭が如何に露西亞に便宜を與へたかと云ふことは吾々の忘るゝ能はざることである。日獨戰爭に於て、如何に彼等が獨逸人に便宜を與へたかと云ふことも亦忘るべからざることである。瓜哇スマタラに於ける獨逸人が、如何に此處に無線電信を引いて、獨逸の艦隊に便宜を與へたかと云ふことも忘るべからざることである。今や瓜哇スマタラに逃込んだ獨逸の船は、多くは亞米利加の船籍に變へてある。必ずや機會を窺つて脫却する積であらうと思ふ。又獨逸の艦隊が吾々に追拂はれて南米まで逃走るまでには、或は其一部は膠州灣まで逃歸るまでには、如何に和蘭の植民地の島々が、彼等に便宜を與へたかと云ふことも亦忘るべからざることである。過去既に然り、將來も亦知るべし。他日日本が外國と事を構ゆる時に當つて最も危險なるものは外國の軍艦にあらず、これ等中立を守ることの能はざる島々である。故に吾々は自衞の點より言つて、これ等の地方に和蘭の植民地があると云ふことは、頗る危險であるが故に、自家の危險を避けるがためには、和蘭をしてこの植民地を日本に讓渡さしむると云ふことを以て、最も得策とするところである。

第六　國防の第一線を碧水の上に立てよ

瓜哇とスマタラの間にスンダの海峽がある。此海峽は頗る航海するに難かしい海峽ではあるが、併ながら葡萄牙和蘭時代に於ては、此海峽が東西兩洋の關門であつて、唯此海峽に依て交通して居つたのである。今日に於ては新嘉坡の海峽が發見せられたけれども、東西兩洋の關門は唯此二つあるので、外には關門がない。地圖を見れば茫々たる海洋、何れの所と雖も通行は出來るやうには見ゆるが、石炭、糧食、暗礁、種々なる理由に依て、スンダの海峽を通るにあらざれば、新嘉坡の海峽を通らねばならぬことになるのであつて、我國今や大海軍を持つて居なければならぬと云ふて、或は八八艦隊と云ひ、或は八四艦隊と言つて居るが、若し我國にして和蘭の植民地を讓受けてスンダの海峽に要塞を築き、潜航艇と戰鬪艦に依て此處に據れば、敵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

羅巴の如何なる强國、如何なる艦隊と雖も此處に之を防ぐことが出來るのである。若し此處に據ることが出來るならば、八八艦隊でなくとも、八四艦隊尙ほ能く守ることが出來るのである。若又此處を取ることが出來ず、茫々たる海洋唯日本本國の附近に於て戰ふと云ふことであるならば、八八艦隊は愚か十六、十六、艦隊と雖も以て敵するに足らぬのである。熟々思ふに今日の戰爭は獨逸の勝利にして終るか、聯合國の勝利を以て終るか、之を知るものは唯上帝のみである。併ながら假りに獨逸が勝つたとするならば、勝たざるも現狀を以て和睦するとするならば、彼れの傷つかざる艦隊は必ずや東洋に於て威力を回復するとに努めるに相違ない。瓜哇スマタラを和蘭より讓受くるに相違ない。此時に方つて費用を費すこと三百億、人を殺すこと一千萬、此大戰爭に懲り果てたる英佛露は必ずや獨逸をして、其爲さんと欲することを爲さしめて傍觀するに相違ない。戰爭を賭して之を爭ふものはない。日本之を爭はんとしても、獨力であると云ふことを忘れてはならぬ。若又英吉利が勝つたとして如何にすべきか。必ずや其植民地の擴張に於て吾々の利益ではない。宜しく今日に於て、唯今日に於て、明日と言はず猛斷すべし。毅然として行ふべし。鐵は其熱したる時に於て打たざるべからず。宜しく今日に於て瓜哇スマタラを和蘭より申受くべしである。而して之を以て平和會議に臨まば、誰か之を爭はんや。外交上に於て爲さんと欲することは妨げらるゝものであるが、爲されたる事實は認めらるゝものである。我外交の當局宜しく斷ずべしである。若又之を斷ずるの力がないならば、國民は宜しく斷ずるの力ある政治家をして其政策を行はしむべきである。

第七　食料の自給策

今日の戰爭に於て吾々が學んだ敎訓は何であるか。一國存亡の戰ひに於て、兵力軍器と共に重大なるものは、糧食を自給自供せねばならぬのである。獨逸の苦しむ所も玆にあり、英佛の苦しむ所も玆にある。偖て日本が他日萬一外國と事を構ゆるとして、日本は果し

て十分なる糧食を有するか、是れ國民が今日に於て猛然として顧みなければならぬことである。我國米を以て食物の主なるものとして居るが、此米は臺灣より七十萬石を輸入し、朝鮮より三十萬石乃至五十萬石を輸入して居る。而して此他に尙ほ二百二十萬石内外を外國より輸入して居る。此兩三年は輸入は少ないが、平均すれば二百二十萬石内外である。若し十五圓であるとすれば三千三百萬圓づゝ米の代價を拂つて居るのである。他日外國と事を起した時に當つて、是等の植民地との交通も斷たれ、若くは運送上不便利であると云ふ場合に當つて、外國米に吾々が依賴せねばならぬと云ふ場合に當つて、二百二十萬石の外國米は果して我國に安全に達すべきや。コーチンチャイナ及び緬甸支那の米が、其本國の政治上の向背に依ては、全然日本に來らぬことになると云ふことを豫備しなければならぬ。然らば即ち吾々は戰時平時を問はず、吾々に米を與へて吾々は餓死せしめざる爲には、南洋和蘭の植民地に於て、吾々の米を作る場所を攻究せねばならぬ。

又吾々の支那貿易の最も大なる項目は何であるかと云ふと紡績である。此紡績は五億萬斤の内外の綿を使つて居るが、此綿は一斤なりとも日本では出來ぬのである。或は印度或は亞米利加、時としては埃及より來るのであるが、若し此綿の原料が停止された場合には吾々の紡績業は全然事業を停止して、而して支那に對する貿易は全然破壞されて仕舞ふのである。吾々は今日に於て宜しく之等の綿を供給する土地を熱帶地に於て求めねばならぬ。即ち和蘭の植民地を讓受けて、之等の耕作を起すと云ふ必要があるのである。以上は吾々の貿易を保護し或は餓死より免かるゝが爲に已むを得ざる手段として行はなければならぬことであるが、更に進んで積極に考へれば、吾々は歐羅巴諸國より遲れて立つたるが爲めに、財政上に於て頗る不如意たるを免かれぬ。之に加へて滿洲朝鮮に於て大責任を引受けた爲めに多くの金を要する。此金を造るが爲には、世界の市場を支配して貿易上の勝利を占めなければならぬ。世界の市場を支配する所の手段は何であるかと云へば、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

熱帶地を支配するの外はない。世界は今日鐵の時代であると言ふが、一面より言へば護謨の時代である。車のタイヤ、電信電話、大なる船舶の中の通路に敷く莚悉く護謨である。梯子段の辷りを防ぐ爲めに敷かれる護謨、或は甚しきは吾々が日常使ふ蛇の目の傘の頂きに被せる布すらも護謨となつて來た。倫敦のユーストン停車場の如きは構內の大部分は多くは護謨を以てして居る。故に數千の旅客が往來しても何等の響きもなしと云ふ有樣である。若し今回の大戰爭微せば倫敦若くはパリスの最も整潔なる部分は道路の上に護謨を敷いたであらうと思はれる位である、而して此護謨は赤道の左右五度以內に於てのみ生產するものである。文明人が飲む所のチヨコレート、珈琲、是亦熱帶の產物である。世界の商賈を遣り取りする船舶、此船舶の大部分はチイクを以て作られるものである。此チイクは又熱帶の產物である。此船の貨物の揚卸、之に使ふ所の馬尼剌繩、是亦熱帶の產物である。吾々が朝夕手を洗ふ所の石鹼、是は椰子より出る所の油から作られるものであつて、是亦熱帶の產物である。凡そ數へ來れば文明の生活の七八分は熱帶の產物に於て營まれるものであると言へば、予が熱帶を支配するものは、即ち世界の市場を支配するものであると云ふことも決して過言であるまいと思ふ。此點より吾々は熱帶地に植民地を求めねばならぬ。此熱帶に植民地を得んと欲すれば其時機は唯今日である。予は大聲叱呼して我國の將來は北にあらずして南にあり、大陸にあらずして海にあり、而して此生物學と物理學と歷史學の原則が教ゆる所の南進の政策を行ふは唯今日にあり。此今日の機會を外せば千載又得べからず、と警告するものである。予は國民が區々の紛爭を捨てゝ此目的に向つて擧國一致することを望むものである。若し內閣にして此政策を行ふこと能はずんば、宜しく之を打破して新內閣を作るべしである。

予の憲政論の批評を讀む

法學博士　吉野作造

本誌一月號に掲げたる予の憲政論に對して、予の學友並びに操觚界未見の數氏より懇切なる批評を賜つた事は、予の大に光榮とする所である。即ち小倉徂峰氏及び茅原華山氏は洪水以後（一月中下旬號、及び二月上旬號）に於て、室伏高信氏は雄辯（三月號）に於て、植原悦二郎氏は國家及國家學（三月號）に於て、上杉愼吉博士は中央公論（三月號）に於て、夫れ〴〵評論を掲げられ、又文學士木村久一氏は一月の心理學會に於ける講演に於いて予の民本主義論を批評せられたのである。而して之等以上數氏の批評は、色々の點に觸れて居るのであるが、予は今一々之に答辯するの遑がないから、此處には只學問上有益なりと思はるゝ數點に就て、一には諸氏の批評に答ひ、一にはまた予輩の立ち場を一層明かにしやうと思ふ。

立憲政治の意義に就て

予輩は立憲政治の何物なるかを説くに當り、先づ其の最も解り易き特色、即ち憲法と云ふ法典の規定の上に現はれたる特色を擧げて、それから其規定の精神に立ち入つて研究すると云ふ順序を取つた。而して其所謂根柢の精神は東西共に同一にして、此精神に基く憲法運用の方法も亦同一ならざるべからずと云ふ根據に立つて民本主義を主張したのである。此立ち場に對して二種の反對説が稱へられた。

一、**立憲政治の特色を憲法の形式に取るを非とするの説**　植原氏は、立憲政治の特色を憲法の規定の上に就て論ずるのは誤で、專ら「國民の意見により國民の爲に國民が行ふ」と云ふ精神に之を求めねばならぬと論じて居る。けれども予輩の立場は決して憲法の精神を無視したのではない。憲法の規定の上に付て先づ其特質を求め、其特質の由て生ぜる所以に立ち入つて憲政の精神を尋ねたのである。此點に於て植原氏の批

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は當を失して居る。のみならず植原氏の如く精神とか目的とかのみに憲政の特色を置くのは亦誤である。何故なれば、立憲政治は或る目的を達するための或る手段であり、手段と目的と相伴つて此處に憲政があるのであるからである。

之に類する考は上杉博士も抱かれて居るやうに見ゆる。尤も上杉博士は植原氏と同じ誤に陷つたのではない。唯博士は憲政の目的即ち善政を布くとか、民本主義を行ふとか云ふ方面を高調するに過ぎ、此目的を達するに如何なる方法を取るかと云ふ方面をば不當に輕視したのである。憲政を論ずるに目的の認識の必要なるは云ふを待たない。然し乍ら之よりも差し當り先づ問題となるのは其方法の如何である。如何なる方法に依りて政治するかゞ重大なる問題である。此問題の重大なる事は上杉博士も丸で認めぬではない。そは博士は我國に於ける憲政の採用を以て未曾有の變革と看做して居るからである（中央公論三月號二〇頁）然らば何故に之を未曾有の變革と云ふやと云へば、其理由色々ある中で、議會が君主の意思決定に與ると云ふ從來絶えて無かつた事が現はれたからである。若し上杉博士が此方法手段の問題も所謂目的の問題と同じ程度に重要視して居られたならば、博士の所謂天皇親政說は餘程其趣を異にしたであらうと想ふ。蓋し博士が天皇親政說を固く執らるゝ以上は、其の當然の結論として我が憲法の議會制度を全然否認しなければならぬ。我國の憲法其者が國體に合はぬと論斷せなければならない。而かも博士が我國の立憲政體を布けるも亦「最もよく我國情と時勢とに適したる政治を行はんとするに在る」（中央公論三月號二〇頁）となして明白に之を是認し、前後矛盾の說明を試みられたかに見ゆるのは、畢竟立憲政治の特徵を見るに當て餘りに重きを其精神的目的の上のみに置き過ぎたからであらう。

二、日本の憲法政治と西洋の憲法政治とは之を同樣に運用するを得ずと云ふ說

此說にも色々ある。

上杉博士は、立憲政治の根柢の民本主義にある事は東西共に同一であるが、唯其實現の方法は彼と我と同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

じくない、即ち西洋に在つては君主を出來るだけ多く制限する事に依つて、又我國に在つては君主の完全なる親政に依て、民本主義の目的が達せらるゝと說いて居る。是れ即ち博士の所謂天皇中心說の唯一の根據である。天皇と云ふ尊き御名を論爭の問題とするのは、時として重大なる誤解を招ぎ、論ずる者自ら多少の不安と危險とを感ずるの常であるが、然し予輩は斷じて此處に明言する。上杉博士の所謂天皇中心說の根據を予輩は決して正當と認むることは出來ないと。如何に尊き御名に包まれても、不合理は到底不合理である。何故に之を不合理と認むるやは別に後段に之を說かう。

小倉氏は上杉博士の說に更に一歩を進め、西洋の立憲政治は其起原に於て民主々義に根柢する、從て之を我國に應用すべからずと說いて居る（洪水以後一月中旬號一九頁）。西洋の立憲政治がもと民主思想に基いて起つたのは事實である。然し乍ら民主思想に基いて起つたものは總て永久に此思想に根柢せねばならぬと考ふるならば、少くとも其考へ方は誤である。例へば其の始め租稅承諾の爲に召集された大名の會議は、今日は豫算協贊の任務を盡すの議會として新らしき意義を以て其存在を繼續して居るではないか。同じものが新時代に於いて新意義の下に生存を續くると云ふ事は、世間其例に乏しくない。起原は物の本質を決定する唯一の標準ではない。今日の立憲政治を解するも亦此の理を誤つてはならぬ。予輩の考ふる所に依れば、十八世紀の末歐洲大陸に民主思想の起つたのは、人類の自己解放乃至自己開發の要求に其心理的根柢を有する。此要求は所謂近代文明の華として、時に遲速の差別はあれ、東西を問はず均しく著しく起つたのである。而して其最も早く發したる歐羅巴諸國に於ては、當時恰も君主專制が其人類の要求を抑壓したるが故に、自己解放・自己開發の本然の要求は、自ら民主々義と云ふ形を取らねばならなかつた。而して其結果として此處に立憲政治が發達したのであるが、此の政治的形式は、偶人類の深奧なる心理的要求を大體に於て滿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

足するに適するものであつたから、後には民主思想の全く無い處にも之が行はるゝに至つたのである。故に民主思想を以て立憲政治の根柢と見るのは、歴史的には誤ではないけれども、心理的には尙ほ皮相の觀たるを免れない。予輩は近代人に共通なる鬱勃たる内心の要求が實に立憲政治の本當の根柢なりと認むるものであるから、其始め西洋に起つた立憲政治も、吾々は之を西洋人のものとは思はない。或る意味に於ては實に吾々のものである。從つて西洋の立憲政治を學ぶのは、何も日本に根據の無いものを西洋に學ぶのではない。立憲政治が西洋のものなるが故に日本に之を容れずと云ふのは、空氣は酸素と窒素とから成ると云ふ西洋の學理は、日本の空氣には適用なしと云ふ類の議論である。畢竟原理は東西同一である。唯西洋では動もすれば民主的形體を取るに反し、我國では民主思想と云ふ段階を踏まずして直に根本原理の發現を見得るのである。之れ東西國體を異にするの當然の結果である。我國の國體が君臣の大義を明かにして居るが故に、立憲政治の根柢的精神は、民主的形體を取ることなくして發現し得るのである。故に東西國民性が異なるから西洋の立憲思想を我國に容るべからずと云ふのは適當でない。

デモクラシーに就きて

予は憲政の根柢は民本主義である事、民本主義はデモクラシーの譯語であり、西洋の此言葉には民主々義及び民本主義の二樣の異つた意味がある事、而して此處に憲政の根柢として取るのは第二の意義であると云ふ事を說き、更に民本主義の内容としては、政治の目的に就き並に政策の決定に就き、二種の綱領を含むと云ふ事を說いた。然るに此說に對しては次の三樣の批評を見た。

甲、デモクラシーの譯語に就きて

一、室伏氏はデモクラシーなる言葉の本來の意義は、予の說くが如きものにあらずとなし（雄辯三月號七〇頁）所謂本來の意義に於けるデモクラシイとは、帝國主義・軍國主義に對する言葉である、政治上、社會上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に於ける平民的思想・運動・傾向等の總稱であるとなし、此の中には社會主義やサンヂカリズムや婦人參政權運動をも含むべき事を主張して居られる。然し乍らデモクラシーを貴族主義・官僚主義に對する辭と云ふなら未だしも、之を帝國主義・軍國主義に對する語と云ふのは全然誤である。二者はカテゴリイが違ふ。男子とは老人に對する言葉なりと云ふが如きものである。若し夫れ氏が廣き意味に於ける平等思想を概稱してデモクラシーとなすに至つては、西洋に於ては往々此用例に從ふものなきにあらず雖も、之は語原の上から觀ても又精密なる議論をなすの論理的必要から觀ても正當ではない。予輩は學生に對する講義などに於いては斯かる思想・運動乃至傾向に Emancipation とか又は Liberation とか云ふ名目を與へて居る。而してデモクラシーは實に其が政治的に表はれた者はゞ一面の現象に過ぎない。室伏氏が各種の解放運動に共通の基礎を認め、之を以て現代文明の一大特徴なりとなすの見解は頗る卓見と云はねばならぬ。けれども惜むらくは精密なる思想を表はすための精密なる用語の選擇に聊か注意を缺いて居られはしないかと思ふ。

二、予はデモクラシーなる言葉は西洋に於いては二つの觀念を表はすに用ひられ、之を明にするためには民主主義及び民本主義なる二つの譯語を立つべきを主張した。之に對して主權の所在は君主に在りとか人民に在りとか云ふのは誤りだから、民主主義などと云ふ言葉を立てるのは間違つて居ると批難する人が少くない。例へば室伏氏植原氏の如きは、今日の學問上の定説としては、國家の主權は國家と云ふ法人格又は國民と云ふ全體の團體に在る、人民とか君主とか云ふ一部分に在るのではないと云ふやうな事を云はれて居る（雄辯二月號七一頁、國家及國家學正月號一九――二〇頁）。

第一に此説は學問上の定説ではない。室伏氏植原氏が此説を唱ふるのは、恐らく國家主權説と云ふやうな事を眼中に置かれての事であらう。先年我國に於て、天皇の國法上の地位を如何に觀るべきやに就き、上杉博士の所謂君主主權説と美濃部博士の所謂國家主權説との間に盛なる論難の戰はれた事があつたが、之は憲法學上の極めて微妙なる問題に屬する。然し何れの説を取るにしても、我國の國法上天皇が最高權力者の地位に在らせらるることだけは明かである。此點は君主主權説を取るものも、國家主權説を取るものも、我國憲法の佛米憲法等と異る最大特徴として均しく認識してあやまらざる所である。予輩の所謂君主民主の別を説くは之だけで十分である。植原氏は主權と統治權とを分つて更に細密なる論を試みられて居るけれども、佛國の Pouvoir constituant と Pouvoir constitué との區別に當て篏めたものかも知れぬが、日本の憲法學には植原氏の云ふ通りには適用がない。

一體國家主權説と云ふ思想の起りを考へて見るに、國家と云ふものゝ社會學的觀念を其儘法律學の議論に移さんとする事に基いて居る。國家を一つの社會現象と見れば、國家の支配權力は勿論國民の綜合意思を離れては存在しない。國民の意思の上に何等の根據なき意思力は人民を服するに足らない。然し乍ら斯くの如きは法律上の問題ではない。法律は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

權力團體たる國家の內部に於て形式上命令權の發動する處を定むるものである。即ち國民の綜合意思の表現者を一人にするか或は多數者の團體にするかを定むるものである。而して後者の場合には、此の多數者の團體が即ち全體の國民を代表する者と云ふ約束の下に立つので、一人制と相並むで君主主權・人民主權の別を生ずるのである。社會學的に觀て國家の權力が全體に在ればとて、直ちに之を法學上の觀念に移して國家主權說と稱ふるといふ譯には行かないのである。

此處にモウ一つ國家主權說なるものゝ起つた沿革上の理由がある。其は白耳義憲法の解釋に就いてゞある。從來多くの憲法は、主權は人民に在りとか君主に在りとか云ふ點をば極めて明白に定めて居つた。然し白耳義の憲法は、一方に於いては世襲の國王を立て、他方に於いては國家の權力は總て人民より出づと規定してある。爲めに從來の君主國及び民主國の分類に這入らぬものになつた。そこで一部の憲法學者はこゝに人民と君主との別を超越した國家と云ふ觀念を抽象し、こゝに主權の所在を認めやうとした。此處からまた國民主權說が起つたと云ふ事情もある。而して此說明は、國權の作用を中央と各聯邦と、更に詳しく言へば皇帝と聯邦參議院と帝國議會とに分屬せしめて居る複雜なる獨逸帝國の國法上の性質を說明するにも極て便利なりしが故に、獨逸法學者が盛に之を採用するに至つた。やがては又他の民主國や君主國にも當て嵌めらるゝことになり、遂に此說を以て有らゆる國家の法學的性質を統一せんと試むるものを生じたのである。

之を要するに、國家主權說は少なくとも國法上の定說ではない。從て國權の表現者を一人とするや多數團體とするやの別に依り君主民主の分類を立つるの說を誤なりとするのは、極めて幼稚なる議論である。の假りに一步を讓り、國家主權說が正當であつて民主國だの君主國だのと云ふのは理論上意味を爲さずとしても、西洋人が民主主義と云ふ意義に、デモクラシーなる語を使つたと云ふ吾人の說明は、單に事實の問題である。民主主義と云ふ觀念が正當でないからとて、予輩の事實の說明が間違つて居ると云ふ譯にはゆかぬ。予輩はデモクラシーなる文字の用例を示したのである。予輩の說明に誤ありとすれば、斯かる用例が西洋に無いと云ふ事を論證しなければならない。室伏植原二氏は國家主權說其者を正當に解して居ないのみならず、此說の理論上の正否の問題と、又西洋に於ける此用例の存否の問題とを混同して居る。思想の精密は學問上の論難の第一義である。

三、デモクラシーを民主主義民本主義の二様に譯するに對しても、亦多くの諸君から批難された。植原氏が「原語がデモクラシーなる同一の言葉である以上は、此兩者の內容も當然同意義でなければならぬ」（國家及國家學一七頁）と云ふの無意義なるは云ふ迄もなく、民主主義及び民本主義なる言葉が、宛も事物の性質及び作用其者に與へられたる名稱なるかの如くに誤解して（同一七頁）一方は主權の所在の說明に關する一つの主義、他方は主權の運用方法に關する一の主義なる事を忘れたのは、特に詳に之を爭ふの必要もあるまい。之を外にして筋道の立つた反

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

對論としては、第一には室伏氏（雄辯三月號七一頁）茅原氏（洪水以後二月下旬號一一頁）の西洋には斯んな風に使ひ分けた學者が無いと云ふ批難がある。然し乍ら斯く使ひ分けた學者の有無は、予輩の議論には直接の關係はない。唯西洋人の思想にから云ふ二つの觀念があると云ふ事を證明し得れば渾山である。第二に小倉氏（洪水以後一月中旬號一九頁）のデモクラシーと云ふ言葉に依て表はさるる觀念は西洋に於ては唯一なりとし、所謂民本主義なるものは民主思想の當然の結果にして獨立の觀念ではないと云ふ說がある。然し此考も亦誤である。純なる理論上より之を論じても、予の先きにも述べたる如く、民本主義は民主思想と伴はずして成立し得る觀念である。勿論多くの場合に於いて、民本主義が民主思想に伴うて發現した事は事實の示す所である。從つて今日でもデモクラシーなる言葉は二つの觀念を包括した意味に用ひらるゝことがある。然し乍ら例へば國王神權說の行はるゝプロシャに於いても、議會選擧法の Demokratisierung と云ふやうな辭が政府からも民間からも稱へられ、又新聞にも絕えず散見するが如く、民主思想と全然離れた意味に於いて此辭の用ゐられて居る場合も尠くは無い。斯く民主思想と全然關係が無い意味に於いて此文字の使はれて居る實例がある以上は、西洋人のデモクラシーなる言葉に附けて居る觀念に二樣ありと云ふも、決して怪しむべき事では無い。從て民本主義は必然に民主主義と伴ふものと斷定する事は出來ない。此點よりして小倉氏の民本主義は日本憲法と相容れずとする議論の根據も自ら崩れる事になる。

乙、民本主義を立憲政治の根柢とするの可否に就きて

一、小倉氏は民本主義共者は總ての國に適用して誤なりと主張し、之に代ふるに民重主義を唱へて居る。此說は頗る暗示に富む面白い說明である。若し人民と云ふ觀念を有機的のものと見ず、氏の所謂離索的個人主義の根柢に立つものと解すれば、氏の批評は正當である。成る程民本主義の前驅たる民主思想は、個人的・遠心的の性質を有するものであつた。從て功利主義的思想も之に附隨して起つたのである。此思想の賜として人民は一旦過去の因習の桎梏より解放されたのであるが、今や此解放された人類は、更に一步を進めて再び統一的・求心的の傾向を取り、全體としての人民と云ふ有機的觀念が段々に明かになりつゝある。斯くして人民と云ふ觀念を有機的のものと解すれば、小倉氏の說は少なくとも此點に於て吾人と大なる逕庭あるものではない。小倉氏は人民と云へば必ず遠心的性質を有する者と想像され、故らに此文字を避けて國家と云ふ辭を揭げられて居るが、然し乍ら人民を離れては國家は無い。人民の有機的全體が即ち國家である。小倉氏は此國家と人民との關係を認識するに餘りに法學的機械觀に囚へられて居る。故に小倉氏と予輩との立場の本當の差は、民本主義を憲政の根柢とするの是非の論では無くして、氏の所謂人材政治若くは新英雄主義なるものと予輩の衆議院尊重說との利弊如何の問題である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二、民本主義は議會の意見を尊重するの點に於て少くとも我國憲法の根柢とするに適せずと云ふ批難は、小倉、茅原、上杉の諸氏より加へられた。茅原氏は氏の所謂英雄主義なるものを積極的に說かれず、氏が自ら日本憲政の理想を說いた唯一不朽の名著と誇稱せらるゝ自著「黎明」の一讀を予に薦められて居る（洪水以後二月上旬號）何れ暇があつたらゆつくり拜見する事にしやう。予の議院尊重說に對して最も痛烈なる狂熱的反對を加へられたものに上杉博士の所謂天皇親政說がある。此說に對しては別に項目を改めて其論評を試みやう。

丙、デモクラシーの內容に就きて

予はデモクラシーに二つの內容がある。一は政權運用の終局の目的は一般民衆のためと云ふ事にあるべきの要求で、二は政權運用の終局の決定を一般民衆の意向に置くべきの要求であると說いた。而して第二の項目は第一の項目から自ら導かるる事項なるかの如くに說いたので（中央公論一月號五八頁）、木村文學士は、予が第一の內容が主たる綱領で、第二の內容は第一を保證する手段に過ぎざるものと解せりと爲し、其の誤なる所以を氏の專門の心理學上より批判された（心學學會講演。此講演の大要は何れかの雜誌に載る事と信ずる）。此批難は全然正當である。予は固より第一を主たる內容とし、第二を從たる內容とするの考は毛頭無かつた。全然相對立する觀念と觀て居つたのである。唯構想の際の粗漏に從つて誤つて木村氏の指摘せるが如き說明を試みたのである。此點は全然氏の說に降服し、且つ深く氏の示教を感謝する。

尙ほ氏は、當日の講演に於て、心理學上より論ずれば、第二の內容が寧ろ第一の內容よりも主たるものたる所以を力說し、次のやうな事を云はれた。曰く人類には自ら其能力を發達せしめんとするの本能がある。之れ人類に進步發達ある所以である。蓋し自己の運命を他人に托する時は、吾々の能力や伎倆は自ら萎縮するものである。幸にして人類には自治の本能がある。於是人類に發達がある。古來人類は絕えず色々の形に於て自己の解放を求めて熄まざりし所以も亦ここに在る然し乍ら人類の間には其解放を求むる要求に厚薄の差がある。切に解放を望んで其目的を達する國民は榮え、他人の世話燒に甘ずる國民は衰ふ。大國民たらんとするものは斷じて民治に依らなければならない。所謂仁政の下に居るよりも、民治となれば色々困難な事もあらう。然し多少の不便困難は、能力の萎縮に較ぶれば何んでも無い。英國の前首相キャメル・バンナマンが Self Government is better than good Government と云つたのは千古の名言であると。

所謂天皇親政說に就きて

甲、所謂天皇親政說とは何を謂ふか

天皇親政說とは、國法の組織に於いて天皇を唯一最高の主權者とすると云ふ意義であるとするならば、吾

々は全然異議を有たない。而して此意義に於ける天皇親政說は吾人の主張する議院尊重說とは何等矛盾するものでは無い。

然れども上杉博士が執て以て予輩の議院尊重說を駁擊するの根據とする天皇親政說は、右の意味に止まるものではない。政治の實際的活動に於ても亦天皇を唯一獨自の主動者たらしめんことを主張するものゝ如くである。博士は「議會に於ける政黨が政治の中心となり、內閣大臣は多數政黨の首領を以て組織」(中央公論三月號二三頁)する事になれば、君主は大臣を任免するの自由を失ひ、所謂天皇親政の意義が沒却すると云つて居らるゝから、博士の天皇親政と云ふのは、君主の政治上に於ける意思決定に對しては、何等事實上の拘束を絕對に許さないと云ふ極端なる天皇親政說である事が明である。

然らば問ふ。斯かる意義に於ての絕對的君主親政は法律上又事實上可能なりや否や。曰く否。

第一に絕對的天皇親政と云ふ事は、神代の昔ならいざ知らず、國務多端の今日、到底あり得べからざる事である。此事は上杉博士も現に自ら多少は認めて居らるゝのである。そは博士は即ち君民直接の政治は事實上困難であり、從つて所謂中間勢力なるものゝ必要を認められて居るからである(中央公論三月號三一頁)。而して博士は、此中間勢力は本來君民の間を疏通するがために認められたのに、永く此地位に在る時は、何時の間にか其政權を專斷する。是に於て上下壅塞、所謂天皇の民本主義は行はれなくなる。故に政治は天皇親政といふ事にならなければならないと云ふて居る(中央公論三月號三一頁)。一方に於いては中間勢力の發現を以て時勢の必然なりと爲し、他方に於いて天皇は絕對に萬機を親政せざるべからずと云ふ。博士は此間に自ら其矛盾を感ぜざるを得るか。博士は維新當時の歷史を述べて「事實上幕府倒れて混沌たる時に當つて政治を擔當するの實力を備へたのは薩長藩閥である」とか、「實力ある薩長諸藩が政權の中心となつた」とか云ふて(中央公論三月號三五頁)、維新の當時政治

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上の實權が幕府より薩長藩閥に移つた事を說き乍ら、直に所謂天皇親政が明治維新の精神であつたと云ふ(中央公論三月號三一頁)、は、亦矛盾の譏なしに同時に之を主張することが出來るか。法學上の主權の觀念は之を政治上の權力と混同してはならぬ。政治上の實權を全然君主の手に收むるの不可能なるは、實は上杉博士の議論からも論定する事が出來るのである。予輩は政治上の實權は何の道所謂中間勢力の手に移るものなることを認むる。然らば之を少數者に委ぬべきか又は多數者に委ぬべきかの利害得失の問題が發生する。此問題に對して予輩は議院尊重說を唱ふるのである。

加之帝國憲法はまた明白に所謂親政說を否定して居る。何故なれば我憲法は中に君主の意思決定を拘束すべき幾多の規定を含むで居るからである。上杉博士は我憲法の規定より天皇親政說を論證せんと欲し、先づ「天皇ハ統治權ヲ總攬シ此憲法ノ條規ニ依テ之ヲ行フ」と云ふ個條を擧げて、統治權を行ふものは天皇であるといふ。然し之を行ふに當り此憲法の條規に依らねばならぬと云ふは一の制限ではないか。博士は又「天皇が憲法を改正するには、固より一定の手續を經ねばならぬけれども、改正の權は一に天皇に在り」と云ふて居る。一定の手續を經ねばならぬと云ふのが既に一つの制限ではないか。若し立法權は帝國議會の協贊を經なければならぬけれども、之を行ふものが天皇であると云ふならば、何故に議會の多數黨の領袖を擧げねばならぬけれども、結局大臣を任命するものは天皇なりと云ふことが出來ないか。多數黨の領袖を擧げて大臣に任ずると云ふ政治的慣例が所謂天皇親政の本旨に反くと云ふならば、法律の制定には必ず議會の協贊を要すると云ふ憲法上の規定も亦天皇親政の大義に背くといふべきである。故に之等の憲法上の規定即ち博士が其天皇親政說を論證せんが爲に引用せられたる總べての規定は、寧ろ却つて明白に博士の所謂天皇親政說を否認する根據となるものである。反對論者は或は立法權の行使の場合には君主に Veto の權ありと反論するかも知れない。然し乍ら大臣任命の場合と雖も、君

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

主は決して某々大臣の任命を強制せらるゝのではない。君主は其意に反して議會を通過せる法律案を裁可せざるべからざるの必要なきと同じく、又必しも其意に反する人物を大臣に擧げねばならぬ義務もない。唯多數黨以外に大臣を求むべからざるは、兩院の議決を經ざるものを裁可して之を法律となすべからざると同じく、一個の制限ではある。法律制定の場合と大臣任命の場合との間には、何等實質上の區別はない。唯君主は事實上兩院を通過せる法案の裁可を拒否するを困難とするが如く、議會多數黨の推薦せる特定の人物の大臣任命を拒む事を事實上困難とするであらう。然し之がために博士の云ふが如く「政黨は立法行政の權力を掩有して政權を掌握する事になり……天皇は虛器を擁して何事をも爲す能」(中央公論三月號二三頁)はざるに至るものと速斷するのは正當でない。博士が君主の地位の最も薄弱なる國として擧ぐる英吉利に於いてさへ、而かもヴイクトリヤ女皇時代に、女皇が多數黨の推薦せる人物に好惡の選擇をなし、屢々內閣組織を困難ならしめた事は、今日普く人の知る所である。英吉利でさへ君主は大臣任命の自由を全然失ふものではない。此任命の自由を再々行ふのが好いか惡いかは自ら別問題である。之を行ふに妨げなしとするのは法律論である。之を屢々行ふは得策にあらずと云ふのが政治論である。之を要するに、我憲法の規定は、君主の主權を法律上制限するものではないとしても、少くとも政治上は著しく之を制限して居るのである。從つて絕對的天皇親政說の如きは斷じて我憲法の認むる所ではない。

要するに絕對的天皇親政と云ふ事は實際上にはあり得ないのである。故に從來政權運用の方法に關する議論としては、議院尊重主義に對してたゞ超然內閣主義とでも云ふべきものが爭はれて居つたのである。されば議院中心主義を否として官僚內閣又は閥族政治を主張するならば議論になる。議院內閣を否認し、又官僚閥族の內閣も不可なりとして、あり得べからざる天皇親政を主張し、剰へ之に反對する議論の天下に流行す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るのは國家のために慨嘆に堪へずと力むのは、宛かも夫の西洋の天主教の坊主が今仍ほ Infallibility を固執して近代思想と戰はんと擬して居るが如きものではあるまいか。

乙、所謂天皇親政說の根據を評す

所謂天皇親政なるもの丶あり得べからずと決すれば、此說の理論上の根據如何の如きは最早や深く之を問ふ必要はないのであるが、然し此點は上杉博士の最も力を入れて說かれて居る所であり、又一部の人の間には正當と信ぜられて居るかとも思ふから、予輩は此處に尙數言を費して其說明の學術的價値を計量して見やうと思ふ。

所謂天皇親政說の理論上の根據として擧げらる丶ものに三つある。

一、天皇親政說が我國體に基く當然の結論なりとするの論（中央公論三月號二四頁）。　上杉博士は、天皇を主權者とする我國體に於いては、天皇は現實に主權の活動をなし得る地位に在らねばならぬ事を主張して居る（中央公論三月號二四——二五頁）。之は當然明白の事であつて、何人も異議を挾むまい。けれども現實に主權を行ひ得る地位に在ると云ふ事は、一切の政務は何もかも皆之を君主自ら執り行はせ給はねばならぬと云ふ意味では無い。博士は切りに名實共に主權者ならざるべからざるを說き、名ばかりの主權者を之と對照せしめんとして維新以前に於ける朝廷の狀態を擧げて居る。成る程維新以前に在ては、言はゞ一種の委任統治が行はれたので、實權は幕府に在つた。此實權を皇室に回復したのが即ち維新の大業である。然し乍ら、維新の皇政復古は、絕對的の意味に於いて、政治上の實際の活動が君主御一人の方針のみに依つて定まるやうになつたと云ふ意味ではない。凡そ政權の實行は、如何なる場合にも各種の事實上の制限の附着するを免れない。此種の制限は德川氏とても受けて居つた。政權に附着する制限は、例へば家屋に附着する家屋稅のやうなものである。本來の所有者が、新に他人の占有から其家屋を回復したりとて、家屋稅納付の義務は依然として之を免るゝ事は出來ない、と同じ意味で、事實上の制限は政權の朝廷に回復された後にも付纏ふて居る（維新の當時實權の藩閥に歸した事實を認むる上杉博士は（中央公論三月號三五頁）、固より予輩の此說明を承認する筈である。故に維新の大業が名實共に主權者たるの地位を天皇が回復したものであるからとて、事實上に加へらるる制限の存在までを君主親政の大義に悖るものと云ふ事は出來ない。況んや二十二年の憲法は、法律を以て更に明白に君主の意思決定に對する重大なる制限の規定を設けたるに於いてをや。故に博士の云ふが如き天皇親政說は、決して我國體の要求する所ではな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。

且つ又一人の君主を舉げて主權者とする國體にあつては、總て君主の絕對的親政が行はれざるべからずとすれば、之は獨り我國に限つた事ではない。之を以て我國獨得の特徵なりとするのは正當でない。よく人は我國體の精華が萬國無比であるなどと云ふ。若し國體と云ふ通俗の觀念が、博士の云ふが如く、一人の君主を主權者とすると云ふ事だけに止まるものならば、我國體は何も萬國に比類なきものではない。我國體の精華として誇るべきものは、實は天皇が唯一の主權者であると云ふ國法關係にあらずして、其君臣の情誼が我國に於いては、一種特別なる深いものがあると云ふ點である。此意味に於いての國體と云ふ思想は、最早法律觀念では無い。之れ予が世間普通の用例に於ける國體なる辭は道德的觀念なりと云ふ所以である。道德的觀念としての我國體が萬國無比なりと云ふ議論から、天皇が主權者なりと云ふ法律觀念にも一種特別の意義あるが如く說くのは決して正確なる思想の許し得ざる推論である。

二、憲法制定の沿革より天皇親政ならざるべからずとするの論（中央公論三月號二六——二七頁）。　上杉博士は憲法制定の由來を說くに當り、先づ明治十四年の國會開設の勅諭に遡り、此勅諭の發布の即日大隈參議の一派が打ち揃うて免官せられたのは、天皇親政說と議院中心說との爭議の根本的解決を意味するものであると說いて居る。然し乍ら此時代に於ける立憲政治の根本義に關する爭は博士の云ふが如き天皇中心說と議院中心說との爭では無い。露骨に云へば當時の藩閥政治家間の勢力爭ひである。表向き立てた主義の上から言へば議院內閣主義と藩閥內閣主義との爭である。此事は後段に於いて博士自らも認めて居る。博士は「當時の所謂民權論は、薩長の政權を壟斷して居る事に對する不平の爆發であつて、其論頗る過激に走りしかども、決して天皇親政說に反對したるものに」あらず。否當時の民權論者は何れも尊王心の強き人々であつた。一言にして云へば當時の民權論は有司專權に反對したのであると說いて居る（中央公論三月號三六頁）。然らば博士の言によるも當時の爭は天皇中心說と議院中心說との爭では無い。又十四年の解決は天皇中心說が勝つたのでは無くして、出來るだけ議會の勢力を制壓しやうとする藩閥の主張が勝つたのである。天皇中心說の如きは始めから問題とならなかつた、と觀ねばならぬ。博士の此點に關する說明は前後矛盾して居る。

假りに一歩を讓つて當時の論爭が所謂天皇親政說の勝利を以て局を結むだものとしても、二十二年の憲法は唯此の主義のみに基いて發生したと見るならば是れ大なる誤である。成程直接に憲法法典を作つた人々の考は非議會主義であつたらう。けれども此考は日本に憲法政治を出現せしめた唯一の思想では無い。人文史上の一現象として公平に我國憲法史を論ずるものは、一方には民間の要求たる議院尊重の主張、他方には之に反對なる藩閥主義、此二つの思想の交涉妥協の結果として憲法は生れたと見る。憲法を作つた人々が、內心議會に勢力を與ふる事を欲せず、其が爲に大に苦心したからと云ふて、非議會主義的に憲法を解釋せざる可

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からずと云ふのは、恰も金を借りて證文を書く時、餘儀なく利子を拂ふと約束したけれども、實は利子は拂ひたくないと云ふ本來の考であつたからとて、證文の解釋上利子は拂はなくてもよいと云ふ類の議論である。加之直接に憲法制定の事業に當つた藩閥政治家が如何に苦心したと云ふても、彼等の反對の思想たる議院尊重の要求は、全然之を無視する事を得ずして、其痕跡は二十二年の帝國憲法の規定の上に歴然として殘つて居るではないか。此事は先にも述べたから再び贅せぬ。尤も帝國憲法は所謂欽定憲法である、憲法の規定に依て君主の受くる制限は、自ら加ふる所の制限なるが故に、議院中心主義を認むる事に依て蒙むる所の事實上の制限とは、自ら其性質を異にするなどと云ふ議論もあらうと思はるゝが、斯の如き説明の取るに足らぬ事は今更予輩の言を待たずとも明白であらう。

三、政治の目的より天皇親政ならざるべからずとするの論　上杉博士は善政を行ふと云ふ事即ち民本主義を行ふと云ふ事が立憲政治の大眼目なりとし、而して民本主義は天皇親政に依つてのみ行はるゝと云ふ事を主張して居る（中央公論三月號二八――三二頁）。何を以て斯く斷ずるや。其根據として博士は(一)日本歴代の天皇は、神代より今日に至るまで、最も適當に主權を行用し給ひ從つて最もよく民本主義を實行せられたと云ふ事、(二)偶々政權が臣下に移り所謂天皇親政の阻止せられし時は、必ず民本主義の行はれざる時であると云ふ事を擧げ（中央公論三月號二八――二九頁）、我國に於ては天皇親政に依るに非れば民本主義が行はれずと斷定し、更に進んで民本主義の擔當者たる事が天皇の本質なりと論結して居る。結論は兎も角もとして、博士の議論の進め方には少なくとも次の疑問が起る。

第一に日本の君主が歴代必ず民本主義の擔當者なるに、支那には「眞正なる民本主義の擔當者は一度も實現せず」、又「西洋諸國の國王は始めから人民の敵として生れた」（中央公論三月號二九頁）と云ふのは、果して歴史上の事實に合するや否や。然し之は外國の歴史上の事で、直接には本論の問題外であるとも云へるから、深く追窮はせぬ。

第二に我國に於いて天皇親政の阻止せられし時は必ず人民の塗炭に苦しみし時なりと云ふのは、嚴格に歴史上の事實に合するや否や。恐らく大多數の歴史家は、無條件に博士の説に贊成はしまいと信ずる。況んや博士の意味するが如き天皇親政なるものは、如何なる時代に何れだけ永く續いたかを考ふる時は、蓋し思ひ半ばに過ぎるものあらう。博士自身も實は他の個所に於て君民の直接政治と云ふ事の時と共に困難となる事君民の間を疏通するが爲に中間勢力の發生の必然なる事を認めて居る（中央公論三月號三一頁）。而して博士は此中間勢力が其本來の使命即ち「天皇の意思を益々發揚し、人民の幸福を益々增進する」といふ意義を失はざる間は（中央公論三月號三二頁）、其の存在は必しも天皇親政に妨げないと論じて居る。然らば同じく之と同一の使命を有し得る議會が中間勢力となる事を、何故に不可なりとするか。博士は又此中間勢力の動もすれば政權を壟斷するに至り勝なる事を認め、如何なるものを擧げて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中間勢力とするやの選擇は、餘程愼しむ事を要すると說いて（中央公論三月號三一——三二頁）。暗に議會政黨を中間勢力とするの不適當なるを仄めかして居る。然るに博士は更に進んで政黨議會を非とする理由を說き、金力が政黨を支配するに至ると云ふ一事を擧げて居る（中央公論三月號三三頁）。中間勢力の適否の判斷の標準を假に金力に置く說の當否は姑く別として、博士は容易に金力の支配を受くる者は獨り政黨のみにして、博士が暗に其存在を必ずしも非認せざるが如き口吻を洩して居る所の藩閥元老は、能く其支配を逃れ得ると信じて居らるるのであらうか。予輩は博士と共に中間勢力の發生は必然であると信ずる。君主は或る點まで實權を之に御委せになるのである。然らば何人を擧げて此中間勢力の地位に置くかゞ政治上重大なる問題であり、此問題に對して予輩は、少數者をして此地位を壟斷せしむるよりも、多數の者をして此地位を占めしむる事が政治を公明正大ならしむる所以であると云ふのである。主義として予輩は藩閥元老の存在に反對するものである。

第三に博士は民本主義の擔當者たる事が我國天皇の本質な[illegible]を云はるゝが、其結論に不服なるには非れども、過去[illegible]皇が民本主義であつたと云ふ歷史的事實を根據と[illegible]によりて時間を超越したる事物の本質を決定せんとする[illegible]上非常な誤謬である。過去の經驗の直に物の本質を語る者[illegible]る事は、例へば東京帝國大學の從來の憲法講座が非議會說を講述し來りたればとて、非議會說の鼓吹が卽ち我が憲法講座の本質なりと云ふ能はざると同一である。

我國の君主は過去に於ては固より、將來に於ても亦永く民本主[illegible]者に在はす事は吾々臣子の深き確信である。然し乍ら過去に於て然りしが故に將來に於ても亦然らざるを得ずとする其議論の仕方は、論理學上重大なる誤謬に陷りしものなる事明白である。

以上の如く論じて見れば、上杉博士の說いて以て天皇親政說の根據となすものに對しては、予輩は不幸にして全然承服の辭を呈するを難んずる。抑も博士が多年尊皇の大義に心血を注ぎ、國體擁護の爲に力說及ばざるなきの至誠は吾々の常に[illegible]所である。然れども[illegible]無缺[illegible]では無い。飛んでもない間違つた[illegible]を生命にも代へ難き大眞理と心から信じて居る者は、西洋にも敬虔なる舊敎神學者などの中には少からずある。

丙、**天皇親政說は却て危險を伴はざるか**

上杉博士は天皇親政說を主張すると共にまた議院尊重說の危險を說いて居る。豈圖らんや、之を實行するに依つて國家の危險を蒙るのは、議院尊重說に非ずし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て寧ろ天皇親政説にある事を。第一に博士の云ふ通りの天皇親政を實行すれば、君主は直接に百般庶政の得失に對する道徳的責任の衝に當り給ふ事になる。吾々は天皇の絶對的親政と云ふ事は現に行はれて居るのでは無い、政治上の實權は或る點迄内閣に委任されて居ると考へて居るから施政上の成績に付て忌憚なき批評を試み、且無遠慮に内閣の攻撃をも敢する。然るに政治上の實權が絶對に君主に在りと云ふことになれば、其當然の結果として人民は自ら政治上の實際上の責任を畏くも君主に歸し奉ることになる。少くとも其の恐れがある。尤も我國の臣民は尊皇の念厚きが故に、君主の御親政に對して濫りに不平は云はないに相違ない。然し度重なれば之も什う云ふ結果になるか、吾々は甚だ寒心に堪へぬのである。博士の説は實に此の君主の尊き地位を群議の直接の標的たらしめんとするものではあるまいか。「第二に博士の所謂天皇親政説は直接には議院中心説を排斥するものであるから、此説によつて利益するものは議院尊重主義の實際上の敵手たる藩閥政治主義である。何となれば議院中心説を排斥することによりて擁護し得べしとする所謂天皇親政説は一個の妄想に過ぎないからである。此點に於いて天皇親政は自ら藩閥を擁護するの結果となる。藩閥擁護の説と見らるゝ事は博士自身の嫌がつて居る（中央公論三月號四三頁）所であるけれども、斯く見る世間が決して間違つて居るのではない。

[illegible]

之を要するに[illegible]上杉博士の議論は天皇親政[illegible]に拘泥して政治の實際を全く離れたる議論である。博士も實は時に政治の實際に眼を轉じられると見へ、「賢者をして政治の實際に當らしむべし」と云ふプラトーの説などに贊成して居らるゝけれども、其の所謂「國家存在の本義を充實し發展する天皇の決心を爲し奉り、日本民族の文化を促進して大日本帝國の丕基を益鞏固に」（中央公論三月號四四頁）するの任務に當るべき賢者を一體誰れが推薦するのか。天皇御一人の力では、賢者の選擇を誤りなく爲し給ふと云ふ事は事實上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出來ない。而かも少數の人に選擇推薦の權を壟斷せしむるのは弊害がある。故に之を議會に與ふるのが制度としては最も適當なりとするのが予輩の立場である。議院尊重又は議會中心と云ふ文字が面白くないとて、事實有り得べからざる天皇親政說を揭げ、之を以て萬國無比の國體に淵源する帝國憲法特有の精神なりとし、「時勢過る事あれば、隻手の之を支ふべからざるものがあつても、敢て努力するのが吾々の本分」であると力むのは、言は甚だ壯快を極むと雖も、やゝ明治初年に於ける何がしの國學者が、地球が太陽の周圍を巡るとか怪しからぬ、夷狄の國は兎も角も、天御中主神[illegible]の開き給へる我が豐葦原之瑞穗國だけは、[illegible]に坐し萬古に亘つて決して動かないと[illegible]ふ話に類するものではあるまいか。

かくて博士の天皇親政說には予[illegible]服する事は出來ない。然し乍ら博士の學[illegible]て深きは予輩後進の常に敬服して措かざる[illegible]中博士の立憲政治に對して有せらるゝ深刻なる批評眼は、從來の著書論文等に散見せるものに就て見ても、大に傾聽に値するものあるを疑はない。予輩は夙に博士より予の憲政論に對する反駁文の揭載方を中央公論社に交涉すべき依賴を受けた時、予は私に博士より手嚴しき立憲政治の批判を聞くを得べきを豫期したのであつた。然るに何事ぞ博士は其最も得意とする方面には全く觸られずして、却つて空疎なる獨斷說一點張りで其陣を張られんとは。是れ予の聊か意外とし、且つ學界の爲に甚だ遺憾とする所[illegible]を改め更に其[illegible]を[illegible]のために匿名でも好いから續々發表せ[illegible]れん事を切に希望するものである。

代議政治の運用に關する問題に就きて

一、予が民本主義の理想は現今代議政治と云ふ形に於いて實現されんとし、從つて代議政治の運用を整ふるが立憲政治の眼目であると說けるに對して、室伏氏は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大體論として予の代議政體推奬の態度を批難されて居る。氏は「吾々はモウ議會萬能の夢より醒めなくてはならぬ」と説き代議制度の改[illegible]に關する諸案、特に選擧權の擴張並びに多數決制度[illegible]唱ひ、且つ暗にレフエレンダム、イニシアチーヴ等に贊成するかの如き説を主張されて居る。即ち氏は現今の代議政治に慊らず、更に進んで人民の直接行動を認む[illegible]至らなければ承知しない論者であつて、太だサン[illegible]リストの立場に似て居る。此説は學説としては西洋のデモクラシーの意義を過分に擴張せんとする傾向に淵源する説であり、又實際論としては、凡ての國民の智德が悉く相當の程度に發達した事を條件としてのみ、弊害なく行はれ得べき説である。英吉利に於てレフエレンダム論の起つた所以に就き、室伏氏は重大なる意味を之に置いて居るけれども、之は事實に相違する。他の歐洲諸國に此説の起りしに就いては無論多少の意味はある。何れにしても今日此制度が實際には餘り効力を發揮して居ない事だけは總ての人の認むる所である。アメリカ各州に於いても、此制度を憲法上に認むる國は漸々殖いて居るけれども、之を實際に行つた例は極めて少ない。

二、予は代議政治を立派に運用せんが爲めには各種の方面の共同努力を必要とする。中にも人民と代議士との關係を整ふる事を第一の急務とし、次に議院と政府との關係を整ふる事を第二の要務とすると論じた。之に對して[illegible]氏は責任内閣制の樹立が第一にして而か[illegible]れて居る[illegible]作ら氏の主旨は、（一）唯責任内閣の形式が出來れば好いと云ふのか、よく分らない。議會の多數黨が内閣を組織すると云ふ形だけが出來たのでは、内閣が議員を買收し選擧に干渉し、更に代議士をして國民を籠絡せしむると云ふ弊害を絶ち得る事は出來ない。（二）若し又氏の本旨が、責任内閣の實が完成せなければならぬと云ふ事に在らば、之は人民が十分に或は少なくとも相當に、議員を監督し得る事を條件とせねば出來ぬ話

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。之には予の所謂第一の人民と代議士との關係が先決問題となる。植原氏の說は何の道よく徹底しない。

三、予は責任內閣の實は最も好く二大政黨對立の國に於いて行はれ、又政黨は其自然の傾向としては二大黨派に分れんとするものであると云ふ事を說いた。此論を駁して室伏氏は、二大政黨になると云ふ自然的傾向も存せず、又二大政黨の對立では現代の時勢に應ずることは出來ないと難ぜられて居る。然し予輩の考ふる所では、凡そ政黨の結束と云ふものは單に主義主張のみに依つて岐るゝものでは無い。更に他の一面に於いて、之は歴史と現在の事情、略言すれば「勢」の決定する所である。故に室伏氏の云ふが如く、其時代に存在する思想の數程政黨が多數に分るゝもの[illegible]政黨は一面に於いて政界の實權を握り其經綸を行はん事を目的とするものである。此目的を達する爲には多數を結集するの必要がある。多數を結集するには小異を捨てゝ大同に合せねばならぬ。斯くして其始め互に分立して居つた各種の政黨も、勢に迫られて漸々に合同し又は提携し、遂には大體に於て社會の現狀を維持せんと欲する傾きのものと、現在の制度を破壞して新なる運命を開拓せんと欲するものとの二大黨に分るゝやうになるものである。是れ予が大體に於いて政黨關係は自由保守の二派に分るゝの自然的傾向を有すと云ふた所以である。

尤も今日の文明國に在つては、各其國情を異にするに從つて、此自然の傾向を其儘に進行せしむる處もあれば、又之を[illegible]する特別の事情を有する處もある。其[illegible]を妨ぐる事情の最も著しきは人種・宗教等の關係であるが、尚其外今日仍ほ超然內閣主義が横行して、政黨に與ふるに政權に接する機會を以てせざる國に於いては、殊に政黨の合同提携を妨げて居る。故に現前の事實に執着して觀察すれば小黨分立は世界普通の現象である。けれども理論上政黨分立の自然的傾向を論ずれば、什うしても二大黨對立と云ふ原理を立てざるを得ない。現に諸外國の政黨に付て見ても此傾向は慥に社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會の底に流れつゝあるを認めざるを得ない。

但し此處に二大黨派の對立と云ふのは必しも政黨が文字通りに唯二つの黨派に分れると云ふ意味では無い。實際問題の論戰に於いて甲乙の兩團體に分れて爭ふといふ關係が、多少恒久的に續けばそれで好いのである。例へば英吉利に於ては勞働黨といふものがあるが、之は吾々の論點から云へば別に自由黨以外の獨立の一黨として算ふるを要せざるものである。若し夫れ愛蘭土國民黨に至ては、Home Rule の獲得と共に消滅すべき一時的の政黨である。更にアメリカに就て云はん乎第三黨は之迄屢企てられた事があるが常に失敗に歸した歷史を殘して居る。されば夫の進步黨の如きもルーズヴエルト一身の存在に關係なくして何れだけ續き得るやは大なる疑問である。要するに現實には第三第四の黨派ありとしても、英國米國の如き狀態に在れば、之を二大黨對立なりといふても差支ないと思ふのである。歐洲大陸諸國に在ては現今實は殆んど例外なく小黨分立であるけれども、假りに其の之を妨ぐる原因が全く除かれ、又は少くとも其の原因の影響が段々減ずるといふ事になつたら、二大政黨對立の傾向はモット判然と表はるゝであらうと思ふ。

唯此處に一つ問題となるのは、最近に於ける社會黨の發生である。社會黨は自ら勞働階級の代表者を以て任じ、他の階級との共同は堅く之を非認し、從つて在來の自由保守兩黨の對立關係以外に於ける獨立の存在を主張する理論に此點よりして最近に於ける政黨對立の關係は三黨鼎立の傾向を有すと云ふ說もあるが、然し此見地からすれば、實は三黨鼎立するに非ず、時勢の進むと共に四黨にも五黨にも分るゝ傾があるのである。蓋し第十九世紀初頭に於ける平民運動は、實は平民階級中の識者の運動であつて、從つて其成功後に於いては最下層階級の利益は餘りに之を顧みなかつた。最下層階級は乃ち此事を自覺して不平を起し、こゝに所謂第三階級の發生を促し、此階級が所謂社會黨と云ふ團體を作るに至つたのである。然るに此團體も亦段々細密に調べて見ると、よく〳〵の下層の階級の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

利益は幾分之を等閑に附したと云ふので、やがて此處にまた所謂第四階級なるものを生じ、社會主義に對して即ちサンジカリスムなるもの丶發生を見た。斯くして段々に所謂取り殘されたと自覺する者が第五階級第六階級と云ふ旗幟を揭ぐるに至れば、政黨は三黨許りでなく、四つにも五つにも分れねばならぬ譯になる。此見方は確に社會の事情に基く一種の根據ある見解であるが、然し更に一歩を進めて考へて見れば、之とても大體に於いて保守自由の二派對爭の傾向を根本的に紛更するものではない。何故なれば、現今の社會黨の理想が實現されて社會黨だけで議會に多數を占め得れば、勢ひ從來の保守黨自由黨は相提携して之に當るだらうし、又之に反して彼等の理想が實現せられなければ、英吉利に於ける場合の如く社會黨は、表面は何と云ふても、實際は自由黨と提携するの外は無いからである。但し獨逸の如く政黨內閣の絕對に拒否されて居る國に於いては、各政黨に大同に合するの實際的必要が無いから、小黨分立の大勢は其儘で續く。必ずしも社會黨のみが他と離れて獨立の存在を維持して居るのでは無いから、之は別問題と觀ねばならぬ。

附記

此稿を終つた後、友人の注意に依り、『日本及日本人』の二月一日號に三井甲之氏の鄭重なる批評があつたと云ふ事を知つた。氏の批評に對しては予輩に多少辯解の餘地あるを認むるけれども、大體に於いて同氏の指摘が予の議論の方法の缺點に突き當てたものなる事を承認する。今氏の說に對する愚見を述ぶるに遑なきを遺憾としつゝ、深く同氏の好意にも感謝の意を表する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我國と利害の接觸多き諸外國の中心人物に代つて日本人に與ふる書

▽露國外相サゾノフに代りて日本國民に與ふる書

大庭柯公

外務同僚の日本より歸り來る者皆予に告げて曰く、日本は花の國なり山水の國なり、一遊せざるべからずと。斯くて予や日本の春と山水とを憧憬して空しく歳を過ぐること久矣。今や陽春四月諸君が山水の郷は、山笑ひ水香り花雲靉靆の候なるべきに反し、我が露京は今尙ほ氷雪の寒天地に在りて、只遙かなる東隣國民の春の如き温情に心醉しつゝあるのみ。思ふに日本國民の義氣と勇風とは、十年來我露國民の總てに依りて汎く理會を得たる所。今次出征して西方の獨逸を膺懲すべく戰線に立てる古參の將卒は、皆是れ滿洲の野に日本の兵火に洗禮を受けたるの勇士なり。彼等や郷に入りては郷黨の間に日本國民の義氣を語り、軍隊に伍しては日本兵の勇風を談じて、無意識の裡に親日信念を村民卒伍の間に宣傳す。個人としての予の所見を以てすれば、露國に於ける親日的信念は下層階級に深くして、上流階級に薄きが如し。而して此の關係は不思議にも露國人の對獨關係に正比例するを見る。則ち露國に於ける親獨感念は上流階級に深くして、中流より下層階級に下るに從ひて著しく反感の度を增す。予の仄聞する所によれば、日本には日露獨三國同盟を戰後に於て夢想する一派論者の存在を見ると。而かも予を以て見るに露西亞に於ける親日親獨の兩感念は、根柢に於て相反せる二個の感念にして、親日信念を低氣壓なりとせば、親獨感念は正さに高氣壓なり。而して露國民の九分强を占むる農民階級に普及せる親日信念が、我が露國々策の基礎たらざるべからざるは言ふまでもなし。

日本にては露日の提携政策を考ふるに當りて、露國が立憲政體なるに拘はらず、尙ほ其實に於て寡頭政治の感ある以上、政策の變更は猫眼の轉ずるよりも容易にして、一二政治家の一旦ザー陛下を擁するや、國政を掌上に弄するの常にして、その間亦民論の聽從を容さず。斯かる政體の國との提携は不斷の危險と不測の禍害を免かれ難しと観測する者尠からざるが如し。而かも見よ去る二月廿二日露國議會開會の日、ザー陛下は親しく議會に臨幸ありて軍國の政治が擧國的なるべきを諭せられたるに非ずや。特に開戰以來、露都の冬宮にもペトロゴフの宮殿にも席暖かなるに遑あらずして、國內の各地を巡幸せらるゝ狀の如き、自動車の車窗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をさへ打開かせられて、何等の警戒を路傍に施すなく、到る處に人民總代、猶族總代等を引きて拜謁を許され、且つ過言を聽き給ふ。此の如きは實に農奴解放以來露西亞の憲政史上に於ける一大改革にして、苟くも眼識の士の充分に看取すべき所。所謂露國の專頭政治は此の祖國的大亂に會ひて壞滅し了り、議會政治の之に代りたる事實は、由來官僚系に屬すと見做されたる予の如きすら承認せざるを得ざる所。北邊の雪國も今や時代は正しく一變したり。

予をして忌憚なく語らしめば、日本人の對露發展地は西比利亞にして歐露には非ず。獨逸が歐羅巴露西亞に對して地の利を占むるが如く、西比利亞に對して地の利を占むるものは日本なり。此發展が飽迄も經濟的發展たるべきは勿論にして、日本の西伯利亞に於ける發展が經濟的なる時、露日の關係は益々親善なるべく、若し誤りて政治及軍事的發展の片影をだも認めんか、二國の關係は一變して仇敵の關係と化すべし。獨逸の歐露に對するや、最初は農業に始まり移民と變じ而して最後には怖るべき侵略的勢力と化したり。吾等露國民が日本に待つ所のものは、西伯利亞に於ける經濟的發展なり、農工鑛及水產に於ける日本人の指導若くは提携なり。戰後の日本人は秩序ある計算を以て、有ゆる西伯利の開拓に任し、能ふ丈吾等露國人と提携して此新天地の經濟的開發に任ずべきなり。日本人にして或は誤りて遠く歐露の企業を策し、或は遲れて時機を失するあらんか、戰後の西伯利亞に經濟的侵入を敢てせんものは疑もなく米人ならん。之を要するに露日兩國は此の大戰亂を期として接近提携の運命に會す。而して其接觸は飽までも經濟上に於て今西伯利亞を舞臺とせざるべからず。獨り兩者が政治的に提携すべきは只夫れ支那に對する兩國一致の國策に於て爾りとするのみ。

▽英國首相アスキスに代て日本國民に寄す

田中萃一郎

ヴエルダンの守堅うして獨軍に失望の色ありと雖も、戰局の前途猶ほ遼遠にして余に瞬時靜養の遑無し、而もこの匆忙の秋に際して一書を裁して遙かに極東同盟國の諸君に寄せんとする所以のものは、遠く東亞の天地を望んで愉悅禁ずる能はざるものあればなり。抑も弊國の政體を理想として內政の刷新を圖りたるもの曩に伊太利あり、今や貴國あり。貴國は憲法制定の際に方りて維世納のスタイン博士の說に動かされ、伊藤公の如きは獨逸思想に感染し大にビスマーク公に私淑したりとの說ありしも、今や伊藤公并により獨逸的なりし桂公は故人と爲り、六十年來英國思想を體現せる大隈老伯は內閣首班たり。貴國には政治家實業家等の間にも居常我が英國を口にせらるる紳士少からずとのことなるが、極東のカヴールとも云ふ可き大隈老伯がこの大戰に際して輔弼の任に當られしは余の欣喜措く能はざる所なり。さればこそ日英條約正條の解釋に於て

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は貴國に必ずしも交戰參加の義務無かりしにも拘はらず、サー・エドワードの一片の電文は貴國をして蹶然起て青島の師を起さしめ、南北の太平洋は勿論印度洋方面に於ても赤獨艦の蹤跡を絶つに至らしめたり。就中貴國海軍の力によりて占領したる獨領南洋中の濠洲に接近せる部分を進んで弊國に交付されしが如きは尤も貴國の誠意を示せるもの、余の感謝措く能はざる所なり。

貴國に於て日英同盟に關して沙上偶語の行はるゝが如く、弊國に於ても余が統率せる自由黨內には日英同盟を好まざるもの絶無なりとせず。否平時に於ける余が反對黨のうちにも近來漸く貴國に對して無責任なる批評を加へんとするものあり。貴國が露國と干戈を交へし前後に於て熱心極東方面にありて貴國の爲に健筆を呵して弊國の輿論を指導したりしドクトル・モリソン、パトナム・ウイール諸氏が最近數年來貴國の爲に不利なる議論を行るは周知の事實なり。然れども弊國の輿論は決して之によりて動かさるゝものにあらず。現にターナー陸軍少將は去る二月二十六日發行の『土曜評論』誌上に寄書して、今回の戰爭に於て日本が大に盡したると未だ十分に認識せられざるは日本の位置が遠隔なるが爲なり、日本の功績として數ふ可きは、第一東洋方面の海上に獨逸國旗の跡を斷ちたるは全く日本の賜と云ふ可く、第二日本海軍は其兵士を新嘉坡に上陸せしめ危險なる暴動の鎭定を助け、第三に其功績の最も大なるものは日本が露國に對し大々的に與へたる援助は遂にアルメニア方面に於ける露軍の連戰連捷殊にエルゾルムの陷落となりて現れたり。英國に於てすら何多少の親獨的分子を有するに拘はらず、日本に於ては毫も親獨的分子なしと論じたり。この論旨は余の徹頭徹尾共責きせんとする所なり。

貴國の兵制が普佛戰後全然モルトケ、ローンの組織を踏襲したるとも、將た又貴國の行政組織司法制度が一に範を獨逸に取り、憲法の解釋にスタール一流の神權說採用せられ、シーメンス會社等の活動又驚く可きものあり、容易に弊國の勢圈を脫せざる可しと自負せし海軍部內までも獨逸の勢力浸潤せりとの事實は余も之を傳聞せざるにあらず。故に貴國に親獨的分子毫も無しと斷ずるは甚だ輕卒なるに似たれど、大隈首相をはじめ曩に外務大臣たりし政府黨の總理加藤男の我が英國に對して同情温きを思ふ時は余はこの斷定の却て當れるを思ふものなり。貴國に親獨的分子無きにあらず、而も貴國の政策を左右するの力ある親獨的分子無き也、然らば毫も親獨的分子無しと云ふも何の不可なることかあらん。但し仄聞する所に據れば貴國陸軍の首腦たる參謀部內には親獨的分子と云はんよりは寧ろ獨逸の侵略武斷政策を理想とせる年少氣鋭の論客ありとのとなり。軍人の間にかゝる對外硬派あるは弊國に於ても亦免れざる所なり。然るに幸にも貴國に於ては目下文治派の頭目民主主義の化身とも云ふ可き大限老伯の大政燮理の任に當らるるあり、曩に武斷派が袁世凱氏の帝位に即かんとするに方りて氏の野心を助けて有利なる交換條件を獲得して支那に對し特殊優越なる權利を行使して列國の意向をも顧みる勿らんとするに際して、能く之を制御して弊國その他の與國と共に袁氏に警告を試むるを得たり。是れ全く貴國に於て文治派の實權を握れる的確

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なる證據なりと云ふ可し。世間或は曰く貴國に一大野心あり支那を以て第二の朝鮮となさんとすと。然れども余は井上大使の證言に信頼して之を眼中に置かず。且又常識より判斷するも、獨逸が墺土勃諸國の援助を受けつつなほ且實現し得ざる程のものを否、更により以上のものを貴國が單獨に企て得可しとは信ぜられざるなり。思ふに大隈老伯は身命を賭してもかゝる暗中の飛躍は試みられざるならん。老伯を首相とせる貴國は幸なり。貴國の政界に於ける落伍者中には大浦子瀆職事件選擧干渉事件等を以て頻りに老伯を攻撃するよしなれども、政爭の白熱に達せる時かゝる活劇を見るはさまで珍らしきことにあらず、弊國に於ても今より約二百年前には議員の買收も行れたり。貴國が歩一歩堅實なる發展を告げんことは余の衷心貴國の爲に祈る處なり。(三月十八日)

▽濠洲聯邦首相に代りて日本國民に與ふる書

若宮卯之助

(一)

六大殖民地より成立する我が濠洲聯邦に於て、今日最も多く其の政治家の夜半の夢を破るものは、獨佛國境に於ける獨逸の捷報で無く、メソポタミアに於ける英軍の敗績で無く、大英帝國の可能の破裂で無くて、濠洲自らの人口停滯の問題である。白人文明の最大遺産を相續して、北米合衆國、若くは露國等の全歐洲に匹敵すべき廣漠なる、土壤の概して肥沃なる、氣候の必ずしも苛烈ならずして寧ろ溫和なる、其の砂漠の部分を除外して猶ほ優に數億の人口を養ふに足る、大なる地積の寶藏を新に繼承した我が濠洲白人は、覇を太平洋に稱すべき形勝の地を占むるが故に、其の豐饒なる、人の耕犂を待つて、未開發の原野に、青年的民族の新鋭を注ぐときは、アングロ・サクソンの博愛主義の表皮に包まれた利己主義は、必ずや目覺ましき勢を以て、新に世界を飾るに至らんとは、其の移住開拓の最初に於ける、殆ど一切の人の期待であつた。而して其の期待は完全に裏切られて、今や濠洲は徒らに人工的人口制限法の巧妙なる實行と、其の實行の遺漏なき普及とを以て世界に名聲を歌はれて居るのである。

之を日本に比較すれば、濠洲は其の最も肥沃にして豐饒なる、溫帶に屬して風光の明媚なる、ヴィクトリア殖民地一つだけを以ても能く日本の本島に相當する。クヰンスランドの砂漠の外だけでも尙ほ日本の五倍を超越する。我が濠洲の最大富源は實にメリノ種の羊である、其のメリノ種の羊毛は、品質と分量とを以て實に世界に冠絕する。我が濠洲は黃金の產出を以て世界の第二位を占め、小麥の生產に於て其の第十二位を占め、家畜の輸出、家畜の肉の輸出を以ても著しく聞えて居る。我が濠洲に於て、食料は豐富である。生活は容易である。職業の人を要するや益々火急であつて、人の之に應ずることは彌々緩慢である。人口增加の必

要は適り、其の増加すべき條件は此の如く具つて居るに拘らず、到底増加せざるものは人口其のものである。其の人間の棲息すべき土地の廣さは日本帝國に數十倍して、其の人口は漸く日本帝國の十分の一である。若し土壌を以て泰山を積み、涓滴を以て江海を充たすが如く、人口増加の率にして漸を追うて必ず大を成すに至るものならば、或は深く憂ふるに足らぬかも知れぬ。然ながら我が濠洲の人口は、其の増加率の減退を以て佛蘭西に次ぐの名譽を有して居る。其の益々減退の傾向ある濠洲人口の増加率は、今日の儘に續くと假定して、而して其の自然の加増を以て、日本帝國今日の人口數に達するには、實に百三十六年の久しきを要するのである。我が濠洲は此の如き情態を以て、果して能く太平洋に雄視するに至るであらう乎。我が濠洲に近接する國々の人口趨迎は、我が濠洲の未來に、驚魂すべく動魄すべき一種の影響を與へぬであらう乎。濠洲政治家の私に深憂大患と爲す所は實に此の問題である。

（二）

人口増加率の減退は、獨り佛蘭西及び我が濠洲に特有の事實で無くて、文明諸國に共通する、一個普通の現象である。英米二國は無論の事、人口増加を以て一たび有名であつた獨逸帝國も此の點に於ては何等の例外で無く、否、極東第一の文明國として其の進歩の迅速と堅實とを以て世界を驚かした日本帝國も亦同一の傾向を示して居る。日本の人口率は漸く其の減退點に到達した。日本に於ては農業的東北部は、今尚ほ早婚の慣習を守つて、加増率の減退を示さずに居るが、其の商工的西南部は、漸次に晩婚の風を生じて、著しく其の減退を加へて居る。此の事實は、信憑すべき日本統計家の研究報告として已に世界に發表せられて、一點の疑無きまでに明瞭となつて居る。人口の増加は文明の進歩と反比す。これ實に人口學上の一法則である。我等が我が濠洲の人口停滯を以て、私に深憂大患と爲すは、寧ろ其の人口分布の狀態と他の人口稠密にして繁殖力の比較的旺盛なる國々との關係に於てゞある。

我が濠洲聯邦五百萬の人口は、啻に停滯の勢を挾つ許りで無く、その三分の一は、六大殖民地の首都に偏在して、而してその總人口十分の九は、全く濠洲海岸の住民となつて居るのである。濠洲內地が如何に未開發の儘に存するかは、此の事實に由つて、明に推すことが出來る。勿論此の人口の偏在には地理上の關係もある。交通の爲め及び灌漑の爲めの貫通せる河流の存せざることは、內地の開發に對する非常の障礙である。而も其の人口の偏倚集中には、自ら濠洲特殊の理由がある。

我が濠洲の經濟狀態は、牧畜時代を經過して農業時代に到達したが、未だ製造工業の時代に入らずに居る。然も濠洲勞働者の性格は、十九世紀の英國工業に發成せられた都會的職人の性格である。人工的刺激物に富める歐洲大都の人の海に誕生した職人的性格を以て、直ちに離群的索居的農業の經營者たり、勞役者たらうとするは、恐くは容易に出來得べき相談で無い。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(三)

我が濠洲人口が、都會に集中し、海岸に偏在して、進むで內地の開發に從事せざるの說明は、人口其のものゝ停滯の說明で無い。我が濠洲人口の停滯する所以は、今日まで樣々に說明されて、その說明に從つて、色々の方法が案出された。然して我が濠洲の人口の增加せざること故の如く、停滯すること依然として異る無きは、抑も如何なる事情に由るのである乎。

內地の開發せざる理由として第一に提出せられたものは、家畜用借地制の爲に土地兼併の盛に行はれる結果として、自然に人心を地方に誘導するの妨げを成すと云ふ理由であつた。而して土地の使用に累進稅を課するの制度を以て之を矯正するの手段とした。其の累進稅は成立した。而して內地の開けざるは依然として舊の如く人口の停滯的なるは今猶ほ昨の如くである。次ぎには劣等なる移民の渡來が、惡貨の良貨を驅逐するが如く、生活標準の高等なる濠洲土着の人口の繁榮を妨げると云ふ理由であつた。而して移民は嚴重に制限された。而して濠洲人口の停滯は、依然として確定不動の事實である。

我が濠洲聯邦の中に加はらざるも、我が聯邦と弟兄の關係ある新西蘭の社會狀態は、我が人口問題の性質を最も鮮明に語つて居る。新西蘭は彼の社會主義政治家が、民族發展の根本義諦として要求した殆ど一切の政治的改革を實行した。而して新西蘭は此の如き政治的改革の幻滅の活ける標本である。新西蘭は自治制を實行した。普通選擧を實行した。婦人の參政權を承認した。官業擴張を斷行した。新西蘭は軍國主義の必要を離れて、養老年金の備へを有して居る。新西蘭は勞働者の保險と、無料教育の制度と、機會の極端なる平等とを以て世界に誇つて居る。加之、天は破れざる平和を以て我が濠洲人と共に新西蘭を惠むで居る。天意此の如く我が濠洲に厚く、人事此の如く我が濠洲に於て盡されて居るに拘らず、我が廣漠なる、豐饒なる、肥沃なる國土に相當すべき人口增加の率を得ざるは、如何なる根本の理由に據る乎。

食料肉類は我が濠洲に於て甚だ廉價である。營養不足に由來する結核の蔓延は之が爲に免れて居る。濠洲人は美食し暴食する。其の結果として、結核よりも怖るべき癌腫の流行蔓延に襲はれて居る。然しながら結核よりも、癌腫よりも、我が濠洲人口の停滯を導くものは、十九世紀の最大發明たる避姙法の流行である。

世界は人多くして土地の狹きに惱むで居る。而して我が濠洲は土地廣くして人の少きに苦むで居る。人の少きは來る人の少きが爲で無くて、來る者を來らせずに、產むことの少きが爲めである。濠洲人の理想は白人濠洲である。白人以外の有色人種を斷乎として排斥する、純粹白人の濠洲である。而も事實に於て、所謂白人濠洲は新マルサス主義の濠洲であり、避姙法の濠洲である。此の事實は我が濠洲の感傷家をして、斷へず白人濠洲の不可能を叫ばしむる根本の理由であつて、已に獨逸人の仔細に點檢した現象である。獨逸人の尻馬乘りに巧妙なる日本人も亦恐く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は之を看逃がして居るであらう。

我が濠洲政治家の私に戰慄するは、此の乾坤一擲の賭博に於て、最後の勝利の獨逸に歸することで無い。最後の勝利の獨逸に歸する結果として大英帝國の破裂を導くに至ることで無い。願くは獨逸の敗績を祈る。然も獨逸の勝利の結果として濠洲聯邦にカイゼルの威風が及ばうとも、猶ほ白人濠洲の偏狹なる理想には何等の妨けが無い。我が濠洲の眞に怖るる所は日本人の膨脹である。膨脹力の偉大なる日本人と露國人とが聯合して、一は海上的に、一は陸上的に太平洋に雄視するに至ることである。日本人が賢明なる海主陸從の政策を棄てゝ、暗昧なる陸主海從の方針を以て、其の終に無効に了るべき亞細亞大陸の活動に全力を盡くすことは、我が濠洲愛國者が我が濠洲の平凡なる平和の爲に偏へに日本國民に對して切望する。

▽佛國大統領ポアンカレー氏に代りて日本人に與ふるの書

五來素川

親愛なる極東の新盟約國民よ！

余は敢て玆に貴國民を呼ぶに盟約國民といふ、貴國は既に英國と攻守同盟を締結し、今亦將に露國と同盟の約を結ばんと傳ふ、英露は素より我が善隣なり、友邦なり、戰友なり、同盟國なり、然かも我が貴國を呼ぶに盟約國と云ふ所以の者は、決して英露を通して然るの意味にあらず、必ずや近き將來に於て日佛兩國民も亦相同盟するに到るの運命を有するが故なり。

其然る所以は他なし、今日我等聯合軍が其兵力と財力とを盡して、攻伐日も是れ足らざる彼の獨逸の軍國主義なるものは、決して容易に之が破壞の目的を達し得べきものにあらず、此故にたとへ一たび彼等が挫折して平和を克復するに到るとも、彼等は捲土重來の策を講ずるに至るや必せり、何となれば獨逸人の軍國主義と其破壞力とは、其特種文明の產物にして、若し其國民全體を殺戮し盡すにあらずんば到底之を絕滅せしむること能はざればなり、此故に來るべき平和克復後に於て、必ず之に備へざる可らざるや明にして、是れ現に聯合諸國經濟會議召集の議さへある所以なり。思ふに今回の大戰は其因て來る所甚た遠く、歐洲の大勢は必ずや此等大衝突なくして已まざりしと雖も、然かも其破裂を避け得可き唯一の方法丈けはありしなり、そは彼の英國が單に佛露兩國と協商的關係を保つに滿足せず、進んで英佛露の三國同盟を作るべかりし一事是なり。一昨年八月歐洲大戰が勃發せんとするや、獨逸の尤も憂慮したるものは、獨逸が露佛と開戰の曉、果して英國が中立を守る可きや否やの一事なりき、七月廿五日露國外相ザゾノフ氏は、英國大使に向つて警告して曰く、「獨逸は實際戰爭を欲するものとは信ぜざるも、獨の態度は英國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の態度如何に依りて決す可し、若し英國にして佛露兩國と共同一致するときは戰爭起らざる可し、若し之に反して兩國を助けざれば、英國は戰爭の渦中に引入れらる可し』と、然るに英國大使は答へて曰く、『英國は今直に露國の同盟國なりと言明するよりも、寧ろ友邦として調停の勞を執り、若し英國の勸告にして容れられざる時に至りて同盟となる方、却つて調停に便宜多し』と、露國外相は重ねて告げて曰く、『不幸にして獨逸は英國の局外中立を守るべきを確信しつゝあり』と、露國外相の此警告は決して杞憂にあらざりき、時局漸く切迫するに到りて獨逸が英國の中立を求むるの情は漸く切なるを示し、七月廿九日獨逸宰相ベートマン、ホルキツチ氏は駐獨英國大使を引見して下の如き勸誘を試むるに到れり曰く、『英國政策の大主義より推定すれば、英國が佛國の戰爭に於て滅さるゝを傍看するを得ざるは蓋し明白なり、されど佛國を滅すは獨逸の目的にあらず、故に英國の中立嚴守にして確實ならんには、獨逸は今や起るやも知れざる戰爭に於て、勝利を博するも、佛國の領土を獲得せんとするが如き目的を有せざる保證を英國に與ふるを得べし』と、是に對して英國大使は問ふて曰く、『さらば獨逸は佛國の殖民地に對しても同樣の保證を與ふるや否や』と、此質問は甚しく獨相の急所を刺したりと見え、彼は答ふるに、『此點に關しては同樣の約束を爲すこと能はず』と云へり、此くの如き形勢に於て吾人佛國政府は戰爭を僻る唯一の方法が、英國をして露佛に與して開戰すべき決心を明言せしむるにあるを知れり。此に於て七月卅一日佛國は其大使をして英國外相グレー氏に對して云はしめて曰く、『駐獨佛國大使よりの電報に據れば、伯林に於て氣強く感じつゝあるは、英國の干涉有無が不確定なるが爲めにして、英國若し斷乎として露佛に與すと宣言せば、獨逸の態度は平和に且好都合に決定す可し』と、然るに英國外相は未だ其明白なる態度を取ることを欲せず、佛國大使カンボン氏に答へて曰く、『吾人は英國が敢て干涉せずとの感想を獨逸に與へたることとなし、否吾人は局外中立に立つべしと明言することを斷然拒絶せり、然かも今朝獨逸大使に若し佛獨兩國が戰爭の渦中に投ぜば、吾人も亦其中に引入れらるべきことを通告したり、されど是は佛國と約束する所以にあらずして、唯獨逸をして誤解せしめざらんが爲めなりしのみ』と、此くの如き、曖昧なる態度は吾等佛國政府を滿足せしむる能はず、更に英佛兩國提携の宣言を迫りしに、英國外相は尙ほ逡巡して曰く、『本日の內閣會議を於て刻下何等の約束を爲す能はずとの決議を爲せり、吾人は吾人の政策を議會に於て述べざる可らざるも、吾人は前以て議會の決議を保證すること能はず、今日迄の處英國の條約或は義務の之に係累すとは、吾人は勿論我國の輿論も亦之を感ぜざるなり、然れども今後時局の發展に由り、政府幷に議會が干涉を正當なりとするの意見を懷くに至るやも知る可らず、白耳義の中立維持如何は吾人の態度を決定するに於て決定的なりとは謂はざるも、重大なる要素たるを失はず』と、佛國大使は反覆更に英國の決心を問ふや、外相は常に答へて曰く、『刻下の場合、吾人は如何なる約束をも爲す能はずと云ふ答を固執するより外能はず』と、此くの如きは未だ可なり、英國外相が積極的に其中立の宣

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

志あることをほのめかせしは、佛獨兩國に對して『他國が白耳義の中立を侵犯せざる限りは兩國は各々之を尊重せんとするの覺悟ありや否や』との問に對して速答を求めたるの一事是なり、此に於て獨乙大使は直に英國外相の急所を刺して、問ふて曰く、『獨乙が白國の中立を侵さゞる約束を與ふるときは、英國は中立を守るべきを約束するや否や』と、是に對しても英國外相は『之を言ふこと能はず、吾人の手は何ほ自由なり、吾人は如何なる態度を執るべきやを今や考慮中なり、唯余の言ひ得可きものは、吾人の態度の我が輿論に由りて大抵定まること、亦白國の中立は我が輿論に極めて強き感動を與ふべきこと是なり、吾人は唯是等の條件のみを以て中立の約束を爲し能はずと考ふ』と答へたり、獨逸既に動員したる時に於て英國政府は『吾人は如何なる態度を執るべきかを今や考慮中なり』とは果して何等の不決斷ぞや、獨逸が英國を以て到底中立を破りて佛露兩國と共に開戰することなかる可しとの決論に達したるも決して無理ならぬことゝ云ふ可し。

此くの如き開戰前の外交事情に照して考ふれば、若し英國の態度だに、佛露兩國と進退を共にするの決心明白なりしならば、如何に獨逸の大膽無謀を以てするも、決して劍を拔くの擧に出でざりしなり、是を以て若し英國にして露佛と共に三國協商たるを以て滿足せず、三國同盟を形作りしならば、獨逸は決して此三强國を敵とし戰ふことを爲さゞりしなり、是れ實に千歳の恨事なりと云ふ可し、然れども既往は追ふ可らず、唯之を將來の殷鑑となせば足れり、是を以て大戰終結后の對獨政策は、亦多言を要せずして明白なり、曰く、現聯合軍を形成する諸國は、此に一大同盟を形作るの一事是なり。此くの如くんば、英國の海軍ある限り、獨逸は到底最後の勝利を占む可らざるを知るを以て、如何に其軍國主義の本領を發揮して、歐洲大陸を征服せんと欲するも、決して其目的を達す可らざるが故に、再び開戰して無用の努力を爲すの愚に出づ可らざればなり、若し此觀測にして過らずんば、英佛露以日の諸國に當然同盟の約を訂すべき運命を有するものにして、余が日佛兩國がやがて盟約國たる可しと云ふは實に是が爲めなり。彼の日露同盟の如きは、必竟此結果に到達すべき正當の順序たるに過ぎざるのみ。

余は吾人の戰友たる日本國民が、余の年來の政綱たる愛國主義の何たるやを理解せられんとを乞ふて已まざるものなり。余やもと佛國の東境、ロルレーン州に生れ、五十年前佛が獨の破る所となるや、我が郷土は悉く獨逸軍の占領する所となり、親しく戰敗國の慘狀なるものを目擊するの機會を得たり、普佛戰爭一たび終りを告げて、平和の克復を見るや、我がロルレーン州の大部は、アルザス州と共に獨逸の併呑する所となれり、是を以て余は幼より國土恢復を以て心となし、愛國主義を以て終始したりき、彼の六年間の長時日に亘れるモロッコ問題の終結するや、余は此に擧國一致以て獨逸の野心に備ふるの必要を感じ、千九百十二年一月カイョー內閣の後を承けて、所謂國防內閣なるものを組織し、時の朝野の名士を網羅して立てり、翌千九百十三年一月には、自ら選まれて大統領の職に就き、我が政友ブリャン氏余に代りて愛國黨を組織し、以て

彼のカイヨー氏の率ゆる非愛國主義の急進黨と爭へり、一昨々年の總選擧に於ては、不幸我が愛國黨は敗れたるも、我が年來の主張たりし三年兵役制は、克く一昨年獨逸軍の襲來に備へて、幸に之をマルンの一戰に擊退することを得たり、是れ實に獨帝の野心を看破したる余が政策の致す所にして、今にして我が佛國民は余に感謝して措かざるなり。

抑佛國々民の愛國心なるものは、其精神に於て貴國民のそれゝ異れり、貴國民の愛國心は天下有名なり、然れども其本く所は、畢竟日本國土を神聖視して、之を一歩も外夷の汚す所たらしめざらんとするにあり、余は日本語に通せずと雖も、一島の何國に屬するやを問はんと欲するときは、日本人は『此島はどこの領地ですか』の一語を用ひることを聞けり、英佛獨語にては、皆『此島の誰に屬するや』を問ふ、畢竟日本人は、國家の一語を以て主權を指さず、人民を指さず、實に大地を指すものなるや明白なり、此故に日本人の愛國心も亦土地的なり、此點に於て支那人の人を主として土地を從とするの考とは自ら異る所ありて存ず、我が佛國民に到りては、更に此兩者と其趣きを異にして、我が佛國文明を保護するの精神に本くなり。

由來佛國は其文明に於て世界各國に感化を與へしもの少々にあらず、一其十七世紀の古典文學、十八世紀の政治哲學を始めとして、彼の大革命を以て殆んど天下の政治思想を改革し、自由平等、博愛の理想は、今日世界の立憲政體、法治主義社會政策の實現を來さしめたり、然かも伊太利、ポーランド、白耳義等は一時獨立の國民となり、やがて來る可き完全なる獨立の基礎を作れり、十九世紀に於ては科學の發見相踵いで起り、ラヴオアジエの無機化學を創立するあり、キュヴイエの博物學に貢獻するあり、彼のベルトは始めて有機化學を組織し、パストウールは黴菌學を創立し、近くはキュリー夫婦のラヂーム發見の如き、我が從弟アンリー、ポアンカレーの天文學、數學に貢獻せしが如き、若し是に自動車、飛行機、飛行船の發明の如きを加ふれば佛國の天才的國民なりと稱せらるゝも亦決して故なきにあらざるなり、彼の美術に到つては、即ち是れ天下獨步、貴國が東洋美術に於て世界に冠たると相比す可し、此くの如くにして我等佛國民は其文明を以て世界に貢獻しつゝあることを知るものにして、我國民が其獨立を失ふの日は、即ち此に佛國文明の消失するの日なることを知らざる可らず、此くの如きは實に世界人類の大損害にして、我等は今や我が國家を防禦するは、即ち世界人類の爲めに之を防禦するものなるを知るなり、徒に其土地を攫め、其力を大にせんと欲する獨逸人の愛國心とは自ら其類を異にするものあるなり、即ち我が佛國に於ては、愛國心と人類の至情とは善く一致し、其國家を愛するものも、其人類を愛するものも、共に力を併せて戰ふを常とせり、彼の十八世紀に於ては、佛國の哲學全歐を風靡し、ルーソー、ヴォルテール、ヂヅロの徒皆自ら文藝の共和國に住すとなし、自ら世界の民を以て居れり、然れども其一たび革命戰爭となりて、戰を全歐と交ゆるや、是等自由、平等の味方は、自ら愛國者（パトリオート）と稱し、屍を廣野に曝せしもの其幾何なるを知らざりき、彼の十九世紀初頭よりサンシモン、コントの徒、亦人類敎な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るものを創設し、大に愛國主義に對抗し、近くは社會黨、急進黨の一類亦世界主義を唱導して、自ら其高遠の理想を誇るの傾ありしも、一たびカイザーに對して文明戰を開始するや、彼等は悉く戟を揃へて、獨逸軍に對して勇戰しつゝあり、現今に於て我が内閣は愛國黨の首領ブリヤン氏を頭として、政黨各派悉く來閣に列し、擧國一致以て此文明の公敵に向ひ義戰に熱中しつゝあり、此くの如く佛國は人類思想、世界思想尤も發達して、平生較や理想負けを成すの觀あるも、一朝有事の日は、即ち國家の爲めに戰ふこと上述せるが如し、是れ我等の愛國心の佛國文明を守るの精神に本くが故なり。

此故に苟も新眞理を發見し、新思想を齎すの國民は我等の常に尊重して措かざる所なり、彼の徒に他國民の摸倣を是れ事とするの國民は、たとへ其兵力天下に冠絶し、其富力世界に比す可きなきも、吾人は必しも尊重せざるなり、聞説く、近比貴國歐化熱甚しく、カフエー、バー、デパートメントストア、の語頻々として行はれ、婦人は肩掛(フリー、ショール)を纏ひ、オペラバツクを携へ、雜誌の名にサンデー、イーグル、寫眞タイムスあり、女に新しき女あり、眞新婦人あり、家庭に共同生活(ユニオン、リーブル)あり、我等西洋人をして後に瞠若たらしむ、殊に甚しきは藝文上に於ける外國摸倣甚しく、其根本的素養を閑却して、却て末技、小思想を大藝術、大哲學なるかの如く振り廻すの滑稽事あり、彼の未來派(フユチユーリズム)三角派(キユヴイズム)の如きは歐洲にありては、一の戯笑畫(カリカチユール)の部に屬するものを宛も一大派の出現の如く吹聽し、ニツチエ、オイケン、ベルグソン、タゴールを擔ぎ廻はる倘可なり、唯其流行三ヶ月を出ずといふに至つては、其輕薄も亦驚く可らずや、唯自然主義の如き現實派哲學(レアリスチツク)の傾向を承けて人間の弱點を羞恥もなく、さりとて同情もなく、宛も動物の性僻を敍するが如く描き盡して樂むが如きに至つては、必ずや理想あり、道念ある思想家の痛嘆を招く所なる可し、此くの如き貴國民の模倣僻は甚しく我が佛國民の卑斥する所にして此點に於ては、吾人は却つて其五千年の文明を以て五億の人類を教化したる支那國民を以て、勝れりとする所なり、若し余をして忌憚なく言はしめば、現今佛國民が世界の地圖上より消滅すれば、世界は非常の損害を感ず可きも、若し貴國民が消滅すとも、人類の文明には甚しき痛痒を感ぜざる可し、願くば我が親愛なる貴國民が我が苦言に耳を傾けて、其思想上、科學上、藝術上に於ける創始力を養ふを以て其心となさば、吾人の幸之に過ぎざるなり、願くば其言の奇矯なるを以て其意を過るなからんことを。

（妄言多罪）

▽米國大統領ウイルソンに代りて日本人に與ふ

鶴見祐輔

余が日本國民に望まんとするの言葉は又余が平生米國民に望めるの言葉と異る所無いのである。蓋し余が幼少志を立てて學に就きたる以來今

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日に至る迄始終一貫して渝らざる積年の理想は之を訴ふる人の米國人たると日本人たるとを異にせず、之を訴ふる所のニユージヤーシーたると東京たるとを異にせず又之を訴ふる時の大統領預選付の前夜たると大統領就任の今日たるとを選ばぬのである、余は人有つて、汝が衷心の望何ぞやと問ふあらば、何等躊躇する所無く必ず言下に即答すべし、余が內心の理想は健全なる平民政治の發達であると、只之のみ又他ある無し、諸君若し余に對し汝は日本に對し何事を望むやと問ひ給はゞ、余は加洲問題よりも、支那門戸開放問題よりも、先づ第一に、余は衷情より東亞の櫻花國たる日本に於て高潔なる政治健全なる平民政治の櫻花の如く咲き匂はんことを冀ふと答ふべし。

余が平民政治の唱導に際し政敵より被りたる批評攻擊の數まことに尠くなかつた、然し其の最も甚しきものは余を目して急激論者（ラヂカル）なりと爲すにあつた、急激か保守か余自ら知らず、然りと雖若し事物の根柢に溯つて之を徹底的に改革せんと欲する者を目して急激黨なりと言はゞ、余は將に急激急進の名を甘受する者である、蓋し余はかの中空に燎爛たる萬朶の花は素と之れ地中暗黑中に隱棲する根より其の芳麗の質を享くるに過ぎざるを信すればである、萬象の美果何物か其の養を土中の根より享けざる物かある、此の無言の土——萬物の養の源たる土——よりして凡ゆる生命と活力とは湧き起つて來るのである、普通並々の土中より又靜かなる平民の胸底より、我が全地球を新にすべき希望と決斷の麗しき流が滾々として湧き起り燃え上るのである、平民政治の眞諦も亦之に外ならぬのである、無數の無名なる平民の心底に潛める活力の羈絆束縛を寸斷して之に奔放自由の天地を與へむとするに外ならぬのである、余は米國々民が其の胸底に於て正義、有德にして有望なる事を確信するのである、平民政治は民を信ずるに起る、若し之をしも過激と言はゞ余は喜んで過激の名を受くるのである。

余が日本人に關する知識は實にボルチモアー遊學中に始まる、當時ジヨンスホプキンス大學に於て余は偶然にもＮ君Ｓ君其の他の兩三君と相識つたのである、南方カロライナより出で來りたる余は初めて相見る此等數名の日本青年に多大の興味を感じたのである、而して交遊幾閲月にして深く其の人格と學才に敬服したのである、其の後余はプリンストン大學教授時代に十幾名の日本學生に教授するの機會を有したが、更に選まれて白堊館裏に入るに及び公人として日本の代表者と相商議するの時機に到つたのである、此間余の受けたる印象は常に良好であつた、其の事は余が著書「米國々民史」中に於て「南歐移民よりも東洋の或國の移民の方米國の爲めに望まし」と論じて大統選擧運動中政敵の攻擊を被つたに徵しても明かである、然らば余は全然日本の歎美者であり謳歌者であるか、余は不幸にして必しもそうでない、日本に對して余の希望に堪へざる點亦尠からぬのである。

其重なるものは既に述べたる平民政治の一面である、余は國家を指導する最聰明なる聲は常に平民の聲であると信じて居る、そうして此の平民の良心の聲を握る所に經世家の賢明があると考へてゐる、余がニユー

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ジャーシー州の知事として群議を排して直接選擧法（プライマリー）を敷いたのも此の確信に出でたのである、そして平民政治は多數政治なるが故に常に多數の國民の胸に落ちる様な直截簡明な政治でなければならぬと余は信じて居る、そして爲政者の思想と國民の希望とが常に最密接に連絡して居なければならぬ者と信ずる、之れ余が好んで市中喧鬧の巷、群集雜踏の街に伍して國民の談論を聽く理由である、又余が自學館中成る可く周圍の政治家と遠かつて家庭醫師一人のみを友として、近親者の政治談を避ける理由である、蓋し心を平坦空虚となして天下の言議を輕風の如く我心に入らしめんことを欲するからである、余は日本の政治家の如何様に生活せらるゝかを知らぬ、乍併余が大學に在つて學生に世界各國の政治狀態を說明するに當り、最も其の變化の隱約にして不明瞭なるに苦しんだのは東洋諸國である、それも土耳古や波斯の如き專制國の政治の不規律なるは怪しむに足りない、が日本の如く憲法の典章整はれる國に於て此の事あるは最も余の了解に苦しんだ所である、之は余をして忌憚なく言はしむれば政治政爭が單純直截でないからで、その原因は日本の平民政治の發達の不完全に則しなければならない、そして其の根本は人民は最も聰明なる判斷者なりと言ふ信賴の情が徹底せざる爲めではあるまいか、而して斯の如き政治が不規則になると言ふ事は更に言へば日本の國民性に缺點があるのではあるまいか、即ち日本人が其の心情が單純でない甚だ複雜なる心理狀態を有し、是を是とし非を非として公の面前に言説を發表しない爲めではあるまいか、余は嘗てアーヴィングの演ずるタイフーン劇を見た事がある、若しあの劇中の日本人の性情が多少なりとも眞の日本人の性格に似通つた點ありとするならば、將來益々發達すべき日本國民としては大に反省すべき廉があるのではあるまいか、雄心落々眼前の些事は心に留めないと言ふ事が武士道の教へたる教訓であつたとしたならば眼前的な不規則なる政治運動は日本民族の誇ではあるまいと余は考へるのである、世間往々にして日本人は世界中に於て最も氣の知れない國民であると言ふ事を聽くのである、之は余が過去の經驗に徴して其の然るざることを信ずる。

我が同僚なるヴァージニア大學總長オールダーマン氏は米國人中地方的精神の旺にして世界的氣魄の乏しきを嘆じたる一人である。余は往々にして同一の批評を日本人に就て聞くのである、或は思ふに之は我等兩國共通の疾患であらふ、今や天下の機運は次第に世界的となりつゝある、一國が獨自一己を貫くことを得ざる時代である、日本の固有なる國粹は吾人の嘆賞する所である、然し又日本が更に一層世界共通的の色彩を帶びんことは余の望む所である。

更に余は日本に大なる興味と希望とを持つてゐることを一言する、それは、日本が軍國としての勇武と愛國心は既に世界の認識したる所である、余等の足を踏てゝ待つ所は日本は平和の時代に於て世界の文明に果して何物を貢獻せんとするかと言ふ一事である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▽智利國大統領「ファン、ルイス、サンフエンテス」に代りて日本人に與ふる書

三隅棄藏

一

世界の一角南米智利國から遙々東亞日本人諸員に一書を呈す。今を距る二十有餘年前、日清戰爭當時に我國から貴國に軍艦「エスメラルダ」號を賣却したことがある。其因緣から我輩は貴國に對して一方ならぬ注意を拂ふ樣になつたが日露戰爭に際し貴國の連戰連勝と其後に於ける隆々たる國勢は我輩をして大に諸君に傾倒せしむるに至り、日頃諸君に對して同情と敬意を拂つて居た次第である。其諸君が失禮ながら我南米に對しては餘り注意を拂つて居られない樣に察せられ何となく物足らない感じがする。それも御互の交通が日も淺いし、距離が馬鹿に遠いから無理も無い話だが、我輩が日頃心外に堪へぬのは諸君が兎角我南米を誤解し居られることである。知らぬなら知らぬふりで濟むが、なまじいに誤解シカモ曲解されては我輩實に遣瀬が無い、先づ此點から辯解せねばならぬ。

我南米は北米に對して唱ふる名稱であるが此「亞米利加」といふ言葉に囚はれて諸君は兎角南北亞米利加を混同さるゝ傾向がある樣だ。現に昨年九月我「サンチヤゴ」市に開催された日本品博覽會の出品物中には全然北米向のものも大分認められた。成程我南米も亞米利加には相違ない。北米合衆國と地續ぎだといふことも事實である。併し乍ら我南米は北米合衆國とは根柢に於て違つた文明を形くつて居る。別種の思想の下に發達したものである。北米合衆國は「アングロ、サクソン」人種が國の基礎をなして居るが、我南米人は殆んど拉丁人種の血統である。人種に於て全然違つて居る、また北米合衆國は彼の有名なる清教徒が植民して今日にも世界に新教國として知られて居るが、我南米は征服當時から羅馬法王の加督力敎を布いたもので、今尙純然たる加督力國敎國である。彼方に「セークスピア」の言葉を話せば此方では「セルヷンテス」の言葉を使つて居る、尤我友邦伯剌西爾丈は葡萄牙語を國語として使用して居るが、これとても西班牙語と姉妹語の關係上兩者間の交通理解は夫れ程難事でもない。北米の英語國民とは此點に於ても全然相違して居る。我南米は此の如く人種宗敎言語を北米と異にして居る結果、風俗習慣も別種の發達を遂げて居る、文學美術も悉く歐洲直接の傳來である。母國西班牙葡萄牙の面貌は今日尙窺ふことが出來るが終始我南米人の憧憬となるものは何時も佛蘭西である。婦人の流行も佛蘭西風である。南北氣候の差異から巴里の新流行は我南米位早く傳はる處はない。明眸皓齒の我南米美人が佛蘭西風を裝ひ楚々として歩く處は純粹の巴里つ子よりも恐らく諸君の注意を惹くだろう。我南米は今日は既に南米としての特色

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を持つて居るが其本をなすものは凡て歐洲直傳である。我々の趣味は北米のそれと大に異つて居る。我南米を研むるには此點を劈頭に解してかゝらねば凡ての事が解釋は出來ぬ。今後我南米の位置が如何に變化するとも此點は特に注意し置く必要がある。夫を「亞米利加」なる名稱に囚はれて一も二も無く北米と同様に解せんとし、又は北米風の觀察のみに仍らんとするは餘りに事實に迂遠だと云はねばならぬ。

二

夫れでは一歩を進めて我南米が歐洲諸國と直接何れ丈の關係があり接觸があるかといふことを事實の上から少しく述べて見よう。第一資本の點よりいへば我南米は國が幼稚なる結果有發の處外國資本に依りて事業を經營して居る國柄で、而かも其外國資本の中で一番巨額を占むるものは實に英國資本である。約一百億萬圓の英國資本は南米の各國に分布されて居る。其他佛蘭西白耳義獨逸伊太利西班牙等の資本が大分放下されて居る。要するに歐洲資本を以て南米諸國の財政乃至事業が運轉されて居るのが其現狀である。之に對する北米の資本は今日迄の處では到底英國などの相手にはなれなかつたのだ。第二に運輸交通だが南米の東西兩海岸に航路を有する汽船會社は殆んど英獨伊等歐洲諸國のものである。貴國の東洋汽船會社が此間に立つて我國「バルパライソ」港迄航路を有せらるゝ點は我輩の大に多とする處である。北米は全然絶無とは云はれないが我南米との商業も殆んど外國船に仍るといふ實情である。第三外國貿易だが南米の事業資本が歐洲資本に仍る關係と南米人の嗜好が最も歐洲品に存する事實と同じ其他の理由に仍り我南米貿易は殆んど歐洲貿易たるの觀を呈して居る。其第一位を占むるものは不相變英國だが次位は獨逸である。夫からズツと降りて佛伊白西等が國に仍り其位置を上下して居る。米國も輓近非常の進歩をなし獨逸と伯仲の間にあるが英國に比すれば未だ及ばざること遠しである。第四は移民關係だが我南米は本來西班牙葡萄牙の植民地たりし關係上今日尚此等母國人の來住するものあるが、毎年最も多數南米に渡來するものは實に伊太利移民である。要するに南歐移民が其大多數を占めて居る。尤も我智利の南部や伯剌西爾の或州には殆んど獨逸人のみよりなれる地方も無いではないが、此間に北米人の移民を認むることは非常に尠い。第五に銀行業だが英獨西伊等の諸國は南米到處に銀行を設け其發展は素晴らしいものだ。北米人は自己の銀行を有せざる結果此等の銀行に仍り南米貿易を營んで來たものである。此の如く數へ來れば我南米の現在に於て北米人の施設は少小に非ずとはいへ、我南米は大體に於て歐洲諸國に負ふ處のもの頗る大なるものあるを認めざるを得ぬ。諸君の中我南米には北米の事業が一も二もなく行はるゝものとなし、歐洲諸國の南米に於ける實際關係が何れ程蓄く、又た何れ程迄に進み居るやを等閑視せらるゝものあるを慮り、我輩が一言玆に辯じた次第である。

三

我輩は我南米事情に關し歐洲諸國側より以上の言をなせるが、更に翻に北米側より之を諸君に語るの頗る興味あるを覺ゆる。歐洲諸國の流風

餘韻が南米に存在することが事實であると同時に、北米合衆國の我南米に於ける活動が又た實に偉大なることを認めねばならぬ。我輩は玆に諸君に向つて國際政局を說くもので無い。「モンロー」主義に對して批評を試みるもので無い。唯た南米の現狀を說明する爲に努ひ歐洲並に北米の南米に對する經濟的施設に論及する迄である。第一回の全米會議が北米「バファロー」市に開催された以來、我南米の各共和國委員は屢次相會して事情の疏通と將來の發達を計つたが、殊に國務卿「ルート」氏の南米視察は一層彼我の交情を温むることゝなつた。氏は今を距る七年前に南北兩米間航路の開設、南米に於ける北米金融機關の設置を首唱した位であつたが、不幸にして此希望は直ちに實現するに至らざりしも北米人の南米に對する實際的施設は氏に負ふ處頗る多いと云はねばならぬ。其後に至つて「ブライアン」「ベーコン」「ルーズヴェルト」等の諸名士も來遊し、一昨年あたりから北米各地の商業會議所議員や、有力の實業家等が南米實業視察團を組織し、我南米に向つて實際的注意を拂ふべく、度々視察團を送り、また北米政府よりは特に商務官を南米に派遣するに至つたのである。尤も從來とても北米の南米に於ける貿易額は大したもので而かも年々非常に增加の度を示して居た。成程歐洲全體を一括として比較すれば敢て及ぶ處に非るも、之を國別にすれば英國の下位には立つも伺ほ優に獨逸と優劣を爭ひ、佛蘭西の如きは到底其相手になれなかつたのである。地理的政治的にいへば南米に對して第一位を占むべき北米合衆國が貿易國として此の如く第二流の位置に立つ所以のものは、北米自身の內部事情もあるべく、交通金融兩機關の不備や、其他幾多の理由に依るものと認めらるゝが、巴奈馬運河が愈々開通されて見ると從前通り悠圖〳〵して居る譯に行かず、北米側に於ても上述の如く實際の施設を夫々進捗せしめて來たもので、我智利國丈に就ていふも從來佛國の資本にて成り夙に南米第一の稱あつた「コラル」の製鐵所も北米資本家の手に歸し、「テンエンテ」銅山は既に數年來北米人の經營であつたがまた昨年から鑛業並に發掘高に於て世界第一と稱する「チユキカマタ」の銅山も愈々北米資本家の企業となつた。其他隣國亞爾然丁の「ブエノス、アイレス」市、伯剌西爾國の「リオ、デ、ジヤネロ」市には北米「ナシヨナル、バンク」の支店が設置され北米貿易の爲に金融の便を添ふることゝなつた。又昨年北米に催された全米財政會議に於ては南北兩米間の汽船航路開通問題が重要問題の一であつた。此の如く北米の南米に對する實際的施設が着々として進行さるゝ以上は我南米の經濟狀態は北米人の豐富なる資本と潑溂たる活動力とに仍りて新生面を開くことゝ我輩大に期待して居る次第である。

四

我輩は既に諸君に向つて南米に於ける歐洲諸國の從來扶植して居る潜勢力と、北米合衆國が新鋭の氣を以て活動を初めたことに就て說く處があつた。此双方の立場より見て諸君は我南米の現狀に就き首肯せらるゝ處があると信ずる。併し現狀維持は何時迄も出來るものでない。早晚兩者の關係が如何なる方面にか轉化されねばならぬ。巴奈馬運河の開通と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今回の歐洲戰亂は此轉化を促す有心無心の動機ではあるまいか。實に歐洲戰亂は我南米一圓に對して一方ならぬ衝動を與へた。歐洲よりの資本輸入は全然杜絕し、日本品の輸入に非常に制限され、我輸出先の大得意は失ふし、我南米自身は實に尠からぬ迷惑を感ずるのである。歐洲諸國が從來我南米に有する經濟上の根底は一朝にして動かすべからずとするも、果して何等かの動搖をも感じないであらうか。又た夫れ丈け北米合衆に取つて活動の餘地を與ふるものであるまいか。我輩は我南米に於ける歐洲北米の經濟力の消長に關し我東亞の友人たる諸君が特に留心注意されんことを希望する。

五

我南米は土地廣く人稀に、山には無盡の鑛物を藏し、地にはありとあらゆる耕作物が出來るのである。我南米の富源は到底諸君の想像し得る處で無い。印度支那の富源は既に世間に知れ渡つた過去の歷史を有するものである、が、我南米の富は今日僅かに知り初められた計りで未來に藏る一種の秘密である。

將來必ず此秘密が世界に發表さるゝに相違ない。而して此秘密は世界各國民の來りて之を發くのに任かせてある。由來我南米は外國人寬待主義を以て世界に知られて居る。諸君が我南米に入りて事業を企て、商業を經營さるゝに就ては南米一圓、何れも非常に之を歡迎し、滿腔の同情を以て出來る丈の便宜と助力を與ふるに吝ならぬのである。我々は決して狹隘の見を抱いて妄りに固執するもので無い。我輩の亡友前亞爾然丁大統領「サエンツ、ペニヤー」氏は「亞米利加は亞米利加人の爲に存在するにあらずして世界人道の爲めに存在す」と一種の人道主義を首唱した位である。諸君の之を諒せられんことを望む。

▽中華民國大統領に代つて日本人に與ふ

山 中 未 成

中華民國に項城が總統たること茲に殆ど五星霜、然も內外の施政未だ其の實を舉げ得ざるに、現時憂患交々臻り、外侮を受けて而して內徒らに相閱ぐ。而も其の罪一に悉く吾人項城自身の責任にありとなすものは、即ち日人を措いて、又他に多く認むべきなし。

惟ふに人誰か愛國の至情なからん。況や身を一國の最高位に置き、下に萬衆の蒼生に臨む。豈に國を憂へずして、寸陰をも送るべけん。項城曾て英邁非凡の器に非ず、以て天邊地極の洪業を建て、萬世不易の鴻謨を排くべきなしと雖、一片愛國の赤心は未だ嘗て渝らず、政務の鞅掌一日も寧處せず。然も支那を亡ぼすべきは、即ち項城一人の秕政より胚胎すとなす者、又日人を措いて、他に多く之を言ふを知らざる也。

內憂外患の責、亡國の罪。共に是れ容易に論ずべき輕々の茶飯事に非ず。況や支那の事、他の敢て俄かに揣摩臆測を許さゞるものあるに於て

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をや。所謂亡國の憂患は、蓋し項城の在るが爲に然るに非ず、現代の支那自身が既に已に其の素質を内に具へて外に露はるゝものに非ずして何ぞ。卽ち袁項城が總統の位を退讓し、天下何人にして克く之に代るも、誰か斯の頽餘の大勢を收め、興國の實を能く恭年ならずして擧示し得るものぞ。

現時革命黨の唱道する所のもの、其の言や甚だ好きに似たり。焉ぞ知らん其の妄りに勃發する動亂擾裡に、抑々如何の興國的信條を備へ、將た亂後國勢の收拾に、抑々如何の成算あつて存するものぞ。蓋し日人識者は明治維新創業の印象、尚未だ腦裡を去らず、民國革命黨者從つて之を憧憬し、以て、支那革命の事も亦、項城を失はしめて孫文或は黃克强等を推擧する、易々として反手を翻へすが如しと思へるが如し。是れ外に宇内の大勢が半世紀を推移せる時運の變遷を視ず、内に中國と日國と其の立國の意義を悉く異にせるを忘れて、徒らに最も單一なる聯關觀念に終始せるの錯誤より出づ。若し夫れ項城の政府一旦倒壞し、新奇且つ相整はざる革命政府の現出を促がすの暁に於て、中國の禍亂却つて益々蕭牆の内に激成し、猶且つ亡國の憂患を增さしむるなきや否や。這間の消息は、苟くも中國の將來を惧るゝ者の、必ずや肯んずる所なるべく、東亞の前途を慮るの先覺が、卽ち不肖項城を重しとする所以、而して歐洲米國の爲政治家は卽ち項城と善誼日に深く、却て相接壤する日國のみ上下今や殆ど反袁の義に傾くは何の故ぞや。或は遠交近攻と憤りて、項城が對外政策を忌憚し、或は日支親善を阻礙するものとなして、項城の存在を呪咀するが如き、是が日國の上下の論難たる、卽ち歐米列强が懷抱且つ施行する親袁主義に對照して、旣に一日の短を有するものたるを否み難からん也。

遠交近攻の政策、日支親善の阻礙、齊しく是れ論難する日國及び日人自身が、項城をして餘儀なからしめしものたり。遠者は我と結ばんことを努め、近者は我を苟くも虐げんとす、我は頽餘の勢を辛うじて維持し、其の間、勢の窮まる所、結ばんとするものと結び、虐げんとするものを防ぐ、蓋し是れ必須の事のみ。乃ち玆に日國の具眼者に與ふ、脣齒輔車親善の義は、夫れ希くば先づ隗より始めよ。况や進取一日の長ある日國は悉く是れ能動すべく、我は悉く是れ受動の態勢にあるに於てをや。

帝制の事、偶々日國上下の反感を購ひ、延期の勸告は輙ち發せられ、雲貴廣の動亂も亦偶々僻陬に事を構ふ。思ふに日國曩に利權の交渉あり、更に帝制延期の勸告あり、前者は歐洲大戰が日國に齎したる副產物にして、後者は袁家一場の禍機のみ。只帝制の反感より及ぼして、日國自ら革命黨者を苟くも援助するあらんか、中國の將來と東亞の前途は卽ち知るべし。由來東西兩洋の緩衝たりし中國の含容は、爾後日國の勢力浸潤に伴ひ必ず壞れ、歐米列强の角逐と共に、日國卽ち東亞に孤立して中國保全の大責を全うするに苦しみ、東亞の深禍必ずや之より萌さん。知らず日國々力は現今及び將來に於て、克く如上の危機に安處し得べきや否や。

是に由て之を觀れば、所謂遠交近攻の策、日支親善の阻礙は、中國自身の保全に資すべきの所以なるは素より、中國が東西緩衝の地理的使命

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を全うする所以、從つて日國擁護の大傘たる所以、然らば日人は宜しく項城に贊謝して、帝制の事を止め、其最も親交ある英國と終始志を同じうし、以て東亞百年の大計を定むるを要す。如上の要旨、之を短見の徒に語るべからず、元老山縣公は項城と默々の裡に知己相照の契あるを懷ふ。新帝陛下倘春秋に富ませ給ふ、山公の自重加餐を切祈し、且國上下の識者に、中央公論を介して、試みに斯の一書を與ふ。 袁項城

▽支那革命黨首領孫文に代つて日本人に與ふ

中華革命軍海軍總司令 王統一

現總統袁項城が、一書を中央公論に寄せて、日國識者諸賢に對し、當衰の詭辯を敢てしたりと聽き、乃ち吾人の所信を披攊して、普く大方の一粲を博せんことを思ふ。

吾人が曩に貴國に亡命してより殆ど三年、其の間、拮据經營し來りし革命擧義の事、機運徐ろに熟し來り、頃者其の勃發せるを示せり。惟ふに東亞是より益多事、而して貴國及び貴國民が、其の駿足を延べて更に多年の宿志を成さんとする所以のもの、吾人は必ず且に然るべきを是認し、且之を祖國の現狀に照らして、這裡自ら戚々の感懷なきを得ざる也。東亞は即ち東亞、一ありてな二く三なき所以のものを信じ、是が東亞の多事なるに際會して、貴國及び貴國民が、所謂東亞即東亞の根本義を、克く是が東亞自身に體現せしめ得べきや否や。貴國の民論は能く之を成し得べきを屢々提唱し、僞政家も亦時に之を道ふと言ふも、尚未だ竿頭に一歩を進むるに至らざるを憾み、姑く貴國の覇權を思ふて吾人即ち感慨切りなるものあり。

夫れ祖國の亂を思ふ者は、即ち吾人革命黨なり。然も四天の大業は、吾人に亂の已むべからざるを敎へ、亂によつて祖國の大勢を掀翻し、而して毒を藥に置換せしめんと欲するもの、一に愛國の至情に出づ。即ち貴國人士の夙に同情を厚うする所以なるべく、而して吾人が亡命寄寓、途に好むで貴國に終始する所以のものと、其情悉く一なり。

袁項城が既に中外の機を受け、而して倚頼む所あるが如きは、外に他列强の利己的推薦に甘んじ、內に專權を如實に擅にし、加ふるに親近亞流の傘下者に擁せられて猶獨り其の野望を逞うし得べしと妄信せるに出づ。今や內憂繁く岌々乎として是が收拾に焦慮しつゝあるもの、蓋し自ら招ける所のみ。而して其の最も貴國を憂惧するものは、即ち貴國の態度克く彼が喉頭を掌握せんとする如きを自知せるが爲のみ。況や貴國と吾人との提携如何を、彼が晝夜焦心して畏怖する所のものは、蓋し東亞の大義を決するの擧が、彼が由來の規矱と悉く牴觸し、猶彼が扶植し來りし五年の秕政を脚下に覆へんとする所なればなり。之に於て吾人は屢々貴國人知己より聞く第三革命の成否如何に就いて、倂言せざる能はず。

革命は素と從前の大勢に逆行せんとする反撥的意義を有す。然も大勢

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の推移漸く彩を異にし、機運新たに暗轉するに乘じ、是が大勢の回轉に良く順應するに非ざれば、革命の事は即ち休む。吾が第三革命は之に於て輙ち悉く善し。袁項城が自ら賴まんとする歐洲列强は戰禍の裡に今や漸く砣々焉たり。彼が野望の帝制策は一朝にして蹉跌し了らんとし、簒奪大逆に對する嗟聲は、且に民國に充てり。猶且貴國の民論は旺に反袁の氣勢を擧げて、上司の耳を傾けしめ、國民外交の具現將に近からんとするに似たり。吾が革命の事、斯くの如くにして成らざらんか、則ち民國の振興何れの日にか庶幾ふべけん。蓋し民國の興廢は、關りて貴國との親疎如何に負ふ所多く、而して袁項城の末路今にして洞察すべきに至れるの素因は、彼が一に貴國の權威を無視し、或は少くとも之を蔑視し來れるが爲なれば也。

袁項城が貽さんとする殷鑑已に斯くの如し。吾人が成業の日に於て、猶袁項城を覆轍せんとすと忖度する如きは、即ち吾人を中傷するに非ずんば、由る所なきの狐疑の言のみ。吾人革命の規箴と基調とは、單に民國内地に亂を以て苟くも自家を成さんとするに非ず、實に東亞即東亞の根本義を布いて、種族の安きを希はんとするにあり。吾人が貴國と親しまんとする所以のもの、其の一理由は玆に胚胎す。所謂帝制反對の宣言の如きは、吾人舉義の爲めの對內策たるに止まれるのみ。

吾人今や貴國を後にし、祖國の風雲裡に自他を操縱するの期近きを思ふ。艱難必ずや前途に繁く、大事の完く成る必ずしも匆々を希はず。玆に一片の衷情を、最も敬重し且つ親愛する日本人諸士に呈す。心鏡相照の感切なり。

孫文

▽印度の代表的人物に代つて日本人に與ふ

山上天川

はしがき。我輩は過日某所で我が國の或る識者等が、「印度には印度人で印度を代表する底の人物が居ない」と噂したと云ふことを聞いた。呑氣な日本の識者の云ひさうなことだが、印度には我が國の加藤男や原敬氏や犬養氏級の人物ならザラに居る。只大隈伯や山縣公に比すべき老朽の大人物が居ないばかりだ！看よ！孟買州にはチラーク君あり、ベンゴール州にはアラビンド・ゴース君あり、前のカルカッタ大學總長モカッデイー博士あり、マドラス洲よりは印度現内閣の文部大臣を出せるあり、パンジャブ州にはラジパト・ライ君が居るではないか。而して彼等一たび號令すれば何れも一人にて五千萬乃至八九千萬の人間を動すだけの力を有つて居る。斯く列擧し來れば第一流の人物の名だけでも、優に本誌の一ページを埋めるだらう。で、今我輩は印度の第一流の人物中から、誰某と云ふ一個人を撰び出し、其の人に代つて日本人に一書

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を與ふるを好まない。蓋し彼等の日本及び日本人に對する意見は、他の政見や何かと異つて、皆同一歩調同一感想であるからである。故に我輩は特に印度の代表的人物に代つてと云ふ標題にしたのだ。以下我輩は彼等に我輩の口とペンとを貸して、彼等の思ふ所を述べしめやう。

敬愛する日本人諸君！諸君は現代に於ける東洋の先覺者ではないか？亞細亞は一なり（Asia is one）とは、十數年前に、日本國民の一員、岡倉覺三君によりて道破せられた名言なるか、其一なる亞細亞を、本當に打して一團たらしむるには、是非とも諸君の力に俟たねばならぬ。諸君は此の事を深く諸君の胸底に保藏して、世界に起る凡ての事件を料理せなければならぬ。諸君は株式會社、亞細亞銀行の頭取たる自覺と成算と勇氣とがありますか？　そして近き將來に於いて其頭取たる面目を十分に發揮すべく、今から準備に取りかゝつて居ますか？諸君は東方問題として云へば、支那のことゝのみ考へて居はしないか？支那も大事だらうが、印度は更に諸君にとつて大事な國ですよ！何ぜ？とならば、支那の近き將來に關しては最早諸君には大體の見當がついたでせう、が、印度の近き將來に關する諸君の見込は、まだ少しもついて居ないやうに思はれるからです。印度はねえ、近き將來に於いて迚も此の儘では濟みませんよ！極力現狀を維持せうと云ふのが、英國民の希望には相違ないが、世の中は、さう望み通りには行かないものです。然らば印度は近き將來に於いて何うなるか？これ諸君に取つて、頭燃を救ふが如く、精進研究せなければならぬ大問題ではないか？

聞けば日本人中には吾々の名前さへ知つてる人が稀だとか。勿論吾々は亡國の民で、國際社會の檜舞臺に躍り出す機會がないから、天下の人より認められないのは當然かも知れぬ。が、諸君が印度三億數千萬の人類を代表する吾々の名前すら知らぬと聞いては聊か失望せざるを得ない。此一事もて現代の印度に關する諸君の智識の如何に貧弱なるかを推知するに足らうと思ふ。何ぜ諸君は、しかく印度を問題外に放擲するか？吾々は英國の嫁分で、諸君は吾々の亭主と同盟の親類筋だ。而かも此の嫁たるや英國が惚れて〳〵惚れ込んで――磯の鮑の片思ひかも知れんが――無理矢理に迎へ、後生大事に扱つて居る戀女房なのだ。苟も斯る美婦を娶れる御亭主と親類附合の間柄にある諸君が、少しも其の戀ひ女房のことを知らず存ぜずとありては、餘りに無頓着な、そして禮を缺ける態度ではあるまいか？勿論他から我が女房の毛穴が幾つあると云ふことまで讀まれては、却て焼餅の種子になるだらうが、大體の容貌や後ろ姿や立姿、目もと口もと鼻の恰好位は知つて居て、亭主に會ふたら、偶にはお世辭になりとも、女房のことを襃めてやるのが、友達同士親類同士の附合と云ふものです。一體に西洋人はサイノロジストだからねえ。ホク〳〵喜びますぜ、妻君を襃めてやると。

然るに諸君は全く彼の戀女房に關して知る所がないとあつては、人間社會の交際の道すら心得ないと云ふものだ。說をなすものあり、「諸君は英國の戀女房のことを知りたいのだけれど、一寸近寄つても焼かれるの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が蒼蠅いから、成るべく近寄らないやうにして居るのだ。」と然し他の妻君を何うしやうの斯うしやうのと云ふ野心が、諸君にある譯ではあるまいし、正々堂々たる交際をするのに何で蒼蠅いとがありませう。西洋ではねえ、我が東洋と違ひ、人の妻たるものゝ交際は頗る自由ですぜ。詰り東洋の男よりも西洋の男は、その妻君に對して寛容です。だから一向構つたことはない、ドシ／＼交際にお出なさい。

日本人諸君！諸君は我が印度が近き將來に於いて、今の儘では濟まない、乾度何うかなると云ふことの見當がついたら、何うかなつた場合に諸君の採るべき態度を今から定めて置く必要がありはすまいか？少なくとも採るべき態度を定める準備に取りかゝる必要がありはすまいか？吾々の見る所によれば、さう云ふ場合に諸君が採るべき態度の定まつて居ない計りでなく、諸君には其の準備の糸口さへまだ見出されて居ないやうに思はれる。苟も我が東洋の先覺者を以て任ぜなければならぬ諸君にして、其の日暮し主義又は泥繩主義の信者たるが如きことあるに到りては亞細亞のため、且は諸君自らのために口惜しからざるを得ない。無暗に盲目判を押すやうな銀行の頭取(プレシデント)だつたら、その銀行の將來や知るべきのみである。十九世紀の中葉以前までは、盲目判の頭取(プレシデント)で濟んだかも知れんが、今や什麼なものは前世紀の遺物として、珍重するものすら無い。品物(シング)なら古いのも尊ばれるが、人間の古手ほど役に立たぬものはない。だから諸君！諸君は遲れ走せ乍らも、今から早く諸君の採らねばならぬ態度の準備に取りかゝりなさい。一日遲くるれば亞細亞のため一日の損です。亞細亞の損害は、亞細亞の先覺者たる諸君に取りて最も直接なる大損害です！

敬愛する日本人諸君！諸君は今や世界の強國獨逸を向にまはして戰つて居られるが、這回の大戰爭の終局及び戰爭後の世界を何う觀察しますか？吾々は諸君が一九一四年獨逸に對して、宣戰の布告をさるゝ時、日本は聊かアセり過ごした。世界平和の鍵を握れる日本が斯くアセり出しては、世界將來の平和が思ひ遣らるゝと杞憂を懷いて居たが、果然吾々の觀察が的中した樣に思はれる。あの時今少し諸君が自重して呉れゝばいゝがと、吾々は批評家としてよりも、寧ろ亞細亞の後進國民としての立場から、新聞に雜誌に警告もし忠告もしたけれど、吾々の言論は諸君に對して何等の反響も與へ得なかつた樣です。一體、諸君は英吉利と云ふ國を餘り信じ過ぎて居はしまんか？英吉利人に對する知識は、失禮ながら吾々の方が諸君よりも二三日の長たる積りです。諸君の國のバローン加藤は、最も英吉利通、外交通だと云ふことですが、これ迄の遣り口を拜見した所から推演すれば、彼の人の英吉利通も何だか怪しいものですねえ。吾々は賢明なるバローン加藤にして、眞逆英吉利を買ひかぶる樣な事はあるまいと信ずるけれど、亞細亞銀行の頭取(プレシデント)としては、餘りに英吉利かぶれではないかと憂ひざるを得ない。日本の外務省は英國の外務省の出店だと云ふ評判も穴勝無根の惡口とのみ打ち消されないではないか？

敬愛する日本人諸君！吾々は近來諸君の吾々印度人に對する態度を見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、何だか諸君が狐に馬鹿されて居られる樣な氣がしてならない！諸君の賢明なる眞逆東洋に孤立するが如き愚は演ぜられまいと思ふが、近來の遣り口より察すれば、或は支那人も印度人も諸君を恃むに足らぬ人間狡猾老獪なる野狐の手先に使はるゝ人間だと思ふ樣になるかも知れない。諸君の腦味噌は頭にあらずして踵にありはしないかと思はるゝほど、諸君は英吉利に對し謙遜である。そして常に東洋に孤立すべく誘惑せられつゝあるが如く思はれる。亡國の民でも之れ位なことは讀めますぜ。敬愛する日本人諸君！シッカリ頼みますよ！

▽墨國大統領ヴェヌスティアノ・カランサに代つて

マスター・オブ・アーツ　島谷亮輔

我墨西其は獨立以來最も苦難なる過渡期に際會して居るのであるが、日本國民が擧つて深厚なる同情と精神的の援助を與へて吳れて居るのは衷心より我國民の感謝する所である。日本と我國との關係は進歩思想の先驅たる支倉六左衞門が今より三百餘年前に墨西其を通過した時から、恒に親善を維持して居る。而して此關係は年と共に益密度を加へ來るのは我國民一千五百餘萬を代表して余の慶賀する所である。余は嘗にコアウィラ州に知事であつた時から、在墨日本人と交際する機會をもつて居、是等の日本人によつて日本人の特色を親しく知ることを得た。彼等が任俠に富み、然諾を重んじ、義に當りて死を恐れないことは兼ねてより推服した所であつたが、余が憲政の大義を起し、社會改革、專制撲滅の旗幟を揭げてウェルタ征討の軍を起した時から、愈々推服の度を强めたのである。日本帝國は僅かに二十四五年前に憲法政治を敷いたのであるが、今日世界に隆々たる地位を博して居る。是れに反して我墨西其は獨立以來殆んど百餘年を經過し、初めより憲法政治を敷いたのであつたが、それは名のみで有つて實際は專制政治に苦んで居た事は誠にお恥しい事柄である。此國の歷史は一人の武斷者が起つて政權を壟斷し、其乾兒と共に政權と利益とを分配し、多數の國民をして塗炭の苦をなめしめた事をもつて滿たされて居た。然し乍ら時勢は何時迄も我墨西其をして暗黑世界たるを許さない。我敬愛するフランシスコ・マデロは嘗に憤然として壓制者ポルフオリオ・ディアスに對し反抗し、遂に墨西其をして初めて立憲的大統領を得せしめたのであつたが、不幸にして暴戾にして權勢を唯一の目標として居る舊式の野心家の爲めに乘ぜられ、街上に横死するの不幸に會した。不肖余はマデロの志を繼いで立つたのであるが、公明正大なる態度、天地に俯仰して恥ぢざる精神は幸に列國の認むる所となつて臨時政府の大統領の職を瀆して居る。余の目的は我墨西其をして貴國の如き立憲政治に浴せしめ、人民に公平なる裁判を與へ、生產の道につかしめんとするにある。不幸にして我人民の大部分を占むる印度人は無智蒙昧で之れを指導する事は實に容易の事で無い。其苦心は日本國

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

民の救濟を乞はんとする點である。何よりも先づ彼等をして奴隷的境遇より脱せしめねばならぬ。又國内には例ヴィヤの如き又サパタの如き野盗の群が徘徊して、内外國民の生命財産を掠め、遂に外國干渉の口實を得せしむるに至つた。斯る徒輩の蹤跡をたゝぬ事は寔に慨嘆に堪へぬ所であるが、余は誓つて是れを裁定して見せる積りである。聞く所によれば支那に於ても精英なる軍隊を擁して一人の私慾の爲めに全國民の利害を蹂躙せんとして、國内忽ち紛亂に陷れて居ると云ふ事であるが、何處にても斯る徒輩の絶えぬ事は實に嘆かはしき事である。余は飽迄憲政の味方であつて見れば、此大國たる支那に於ても專制私慾の徒が跡をたつて、憲政軍の凱歌を擧げる時ある事を熱望する次第である。然し憲政と專制の爭は無代償で解決せらるべきもので無い。余が幸にして今日あるを得たのは目的の爲めに突進して中途妥協の便宜主義(コンベンショナリズム)を採らなかつた結果である。それでマデロが妥協によつて顛覆した轍に鑑みた結果であるが、支那の憲政派も嘗て妥協の偸安を求めて失敗したことを聞いて居るから、憲政の先覺者である日本國民は隣國の革命家に向つて此失敗を繰返さしめぬやう進んで指導の任に當るべきであると思ふ。是れは余の經驗の教ゆる所であるから、一片の老婆心より申上げる次第である。世の中に妥協より不可なるものは乏しい。殊に主義をもつて立つたものが、中道にして妥協した時より見苦しい結果を生ぜぬ事は無い。マデロは余の忠言を容れずして、軍隊と妥協した爲めに失敗した事は玆に繰返して云つて置く必要がある。

それから墨西其が隣國の外交政策の爲めに多大の犧牲を拂つて居る事は、少しく歴史を研究して見ればわかると思ふが、平生正義と人道を口癖にして居る北隣の強國も、實際はその如く行動をして居ない。彼等は正義人道が自國の利益である時には其通りに行ふけれども、利害に反する場合には、之れをすてゝ顧みぬやうである。例へば此國の政治家は非干渉主義を此國の傳來的政策のやうに云つて居るが、干渉が利益と見れば、直ちに便利な尤もらしい口實を發見して干渉主義に轉じた事は珍しい事で無い。之れは一々例證して説明するまでも無いと思ふ。余の日本國民に望む所は主義の爲めに動かん事である。利益の爲めに主義を二三にするのは決して正直任俠を生命とする日本國民の名譽であるまいと思ふ。余は干渉主義又は非干渉主義にしろ何れを是とし何れを非とするのでは無い。唯終始一定の方針を採れと云ふのである。然し我良港ヴェラクルスが大國の軍隊の爲めに占領せられた時、此港の占領は曳いてウェルタを沒落せしむる所以であることを知つたけれども、墨西其主權の名に於て敢然として其政府に抗議したことを日本國民は記憶して居ることと思ふ。幸にして強國も正義の主張を容れて遂に其兵を撤退した。此度のヴィヤ征滅計畫は我政府と協議の結果で有つて我軍隊も米國内に侵入することを得るのであつて見れば、之れが爲めに我國威を失墜しない積りである。

余は多くの點に於て日本國民の性質及び行爲に服するものであるが、玆に一つ深大なる疑問を抱く點が有る。それは何故に排斥され嫌惡さる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る國に行く事を焦慮して我墨西其に多く來る事を爲さゞるやと云ふ事である。墨西其國民は決して排外的で無い。北方の隣國民に對しては少しく異つた事情かあるが、勇敢なる日本國民の來るとは大に歡迎する所である。我墨西其の山河は腕を擴げて、日本の青年の來らんとを待つて居る。らる種の日本人は是まで來た事は來たがその多くは中に立つた移民會社が惡るかつた爲めか、其他余の知るを得ぬ理由で失敗に終つたやうである。又墨西其に居るよりも經濟的から見れば富者な合衆國に赴く方が利益であるかも知れぬ。然し余の解する所では日本人は精神的の國民である。正義人道の爲めには經濟的苦痛は勿論のと生命迄も賭すとを以て誇として居るやうに思ふ。是れが或は日本國民の性情では無いかと思ふ。然るに兄弟の情を以て歡迎する墨西其に來らずしてあらゆる罵詈凌辱的態度を以て迎へる國に進んで赴かんとするのとは余の解する能はざる所である。彼の猶太人種は黃金のある所は如何なる侮蔑をも忍ぶと云ふ事を聞いて居るが、甚だ失敬な申分であるが、ある種の日本人諸君も此弊に陷つてはしないかと思ふ。若し余の考があやまつて居るならば說明を求めたい。

、それから次に余の不審にたへぬのは人口過剩に苦んで居る日本は海外に迸出せる民族を出す時に當つて、單に下層の社會よりのみ人口を排出する積りであるか或は否かと云ふ事である。即ち勞働者をのみ供給する積りであるか否かと云ふ事である。過去に於て墨西其は一萬以上の勞働者を受取つたとと思ふ。所が其大多數は我國民中の下層社會の者と比較してあまり立派な思想や素養をもつて居られるものとは想はれ無かつた。是れは人口のあり餘る所から最低等なものを外國に出して優秀なものを國內に止め　何時迄も國內の種族の美點を保存せらるゝと云ふ賢明なる政治家の考から出て居るのかも知れぬ。それならば別に異議を挾むべき餘地は無いが、我墨西其の要求する所のものは今迄送られた移民よりもつと立派な學問のある、進んで我國民の指導者たり得る人々であるとを御記憶願いたい。前申上げた通り墨西其には多數の無智な階級があつて此等を敎育するとは社會改良の第一步である。我國民は人種的偏見を少しも持つて居ぬから、見識ある日本人の來つて我國民の指導者たらんとするを喜んで歡迎する。獨り是れのみで無い。我國は最近十年間に驚くべき發達をなした。若し最近數年間の革命が無かつたならば國內の繁榮は非常なもので有つたと確信する。彼の北米合衆國をして今日の富を誇らしむるのは、加州其の他ロッキー山脈中の礦山や、石油坑であるが、我國は此ロッキー山脈の餘派が南に走つた所に位して居て、至る所の山脈には礦山の利に富んで居る。殆んど無盡藏と云つてよい。カーネギーやロックフェラーの富を得んとする人々が若し日本の青年の中にあつて、國內の生存競爭の爲に其大鵬の志を暢す事が出來ずに居るとすれば彼等は何故に我墨西其に來らぬか。片手にハンマーを携へ、肩に毛布とテントとを擔つて山河を跋涉せんとする勇敢なる青年が有つたならば、我墨西其は其人々に最大の野心を滿足せしむる機會を與へるべくまつて居るのである。況んや軍事に心得あるもの、鐵道に經驗あるもの、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

測量に心得あるもの、その他一藝一能に達したものは悉く其藝能を發揮し得る許りで無く、人間最上の慾望たる政府の首長たる機會も此國に於ては開かれて居るのである。即ち墨西其は遠大なる思想をもつてる日本の青年の墳墓を供給しはしないか。曩に日本は無智な勞働者を送つて失敗した故を以て我墨西其を顧みんとせぬのは甚だしき短見ではあるまいか。余は改めて有爲なる青年を歡迎する機會を見出さんことを希ふ。

▽獨逸皇帝に代つて日本國民に與ふるの書

向軍治

日沒の國の皇帝ウヰルヘルム第二世、書を極東日出の國の民衆諸士に寄せ、諸士の一考を煩はさんと欲す。一昨年歐洲諸國互に干戈を交ふるに及んで、貴國政府は日英同盟の結果已むを得ずとの口實の下に、我國に向つて開戰し、遂に膠州灣を占領し、極東に於ける我邦の事業を根本的に破壞し去れり。是れ畢竟諸士が千八百九十五年に於ける三國干涉に報ゆる所以にして、寡人諸士の意を諒とするに吝ならざるなり。若し夫れ諸士が勇戰奮鬪短日月を以て能く彼の金城鐵壁を陷入れたるは、寡人の稱讚措く能はざる所なり。諸士は往年露國と干戈を交へ、露國を目して不俱戴天の敵なりと爲したり。然るに一旦之を破るや忽ち積年の怨を忘れ、光風霽月何等意に介する所なきものゝ如し。今回の戰諸士の露國を攫くるの情多年親交の國に異ならず。諸士の心事何ぞ夫れ洒々落々たるや。諸士は寡人を以て黃禍論者の首唱と爲す。惟ふに恨骨髓に徹するものあらん。然れども青島已に諸士の手に歸して諸士の怨全く霽らされたる今日、寡人低頭平身して過ちを謝し歡を通ぜんと欲す。諸士の淡白なる、寡人は諸士の妄に之を斥けざるを信ずる者なり。請ふ暫く寡人をして陳謝の言を序することを得せしめよ。

貴國極東に峙立して覇を稱するもの久し。弊國と東西呼應して北に露國を膺懲し、南に英佛を威赫せば、ルーズヴェルトの頑強を以てするも猶必ず兩洋の間に屏息して、一指をも極東に染むること能はざるべく、寡人が貴國皇帝陛下と握手して唯使君と我とのみを語るの日決して遠からざりしなり。遠交近攻の術に長じたる故ビスマーク公の政策、專ら此方針に出でたり。寡人之を知らざるにあらず。然れども寡人の不德なる極東大使の人選を誤り、彼等寡人の眞意を貴國に傳ふること能はず、却て怨を貴國に構へ親友を變じて仇敵となし、遂に波斯灣に向つて突出せんとする寡人年來の計畫蹉跌するの厄に遇ふ。憾恨何ぞ之に加へん。貴國人情風俗弊邦のそれに酷似し、貴國の政治教育兵制實業盡く弊邦に倣ひ、弊邦の書貴國人士に愛讀せらるゝは、寡人常に之を喜べり。往年骨肉を派して歡を先帝に通ぜんと欲して果たさず、今回戰の未だ爆發せざるに及んで早く外務高官を貴國に使はさんとして成らず、遂に兩國人干戈の間に相見ゆるに至りたるは、職使臣等が寡人の眞意を察せざりしに

出ると雖ども、寡人の不明亦與つて力あり。自ら省みて慚愧の至に堪へず。聞くならく、今回開戰の際及其後に於て、貴國人士中弊邦に對して好意を持する者甚だ多しと。寡人深く之を德とす。兵馬倥偬の際、使臣をして親しく樽俎折衝の任に當らしむること能はざるは寡人の甚だ遺憾とする所なり。古人言へるあり。曰く、他人心あり我之を忖度すと。諸士若し紙背に徹するの眼光を以て此書を熟讀せば、必ず寡人の心底を諒とするに至らん。合掌懇願の至りに堪へず。

弊邦人士中貴國を悦ばざる者の說に謂はく、「日本人倨傲、自信強く、兵制教育政治實業盡く我國の風に倣ひ、模倣之れ勉め、一旦稍高き文明の程度に達するや、毫も感謝の意を表せず、我國に師事することを知らず、尊大自ら持して恩に報ゆるに怨を以てし、英國人の鼻息を窺ふこと恰も其の屬國に似たり。支那は獨逸勢力の好範圍なるに、日本は英國と結托して、我の與ふる所の武器を以て我敵英國を助けて我に反抗す。其の恩を知らざるは信賴するに足らざる國民なることを證明して餘あり。英國に阿諛すること甚しければ、到底我國と利を與にすることを肯んぜざるべし。若かず之を敵視し彼をして自ら覺醒せしめんには、英國と日本とは二羽の雀なり一投石の下に之を殪すあるのみ。」と

弊邦英國と西洋に於て相反目すること日久し。貴國は西洋に於て何等の利害關係を有せず。然るに貴國政治家は動もすれば英國に左袒して弊邦を擯斥す。極東に於ては則ち貴國の利害關係最も大なり。貴國は西洋諸國の極東に於ける政策に容喙するの權利を有せり。然れども西洋に於ける西洋諸國の政策に關しては、貴國容喙するの權利を有せず。貴國政治家は此區別を明にせず、妄りに西洋に於ける弊邦の政策を非議して、英國人の侮の塵を拂ふことに汲々たり。是れ弊邦人の貴國を恨むる所なり。貴國にして公平の態度を執らんか、弊邦の民心は翕然として貴國に向はん。罪固より政治家に在り。惟ふに國民諸士は殆ど全く之に關與せざるべし。然れども諸士國政を是等時勢後れの政治家に委ねて平然たるは、諸士も亦與に分つべき責任なしとせず。請ふ審に之を察せよ。

貴國人は米國人貴國開拓の恩に感ずること久しく且深し。眞に貴國人の美德なり。然れどもメッケル將軍の陸軍に於ける、ドクトル、ベルツ及ドクトル、スクリバの醫科大學に於ける、其他弊邦人の貴國のために盡力したる者舉げて數ふべからず。殊に貴國留學生の弊邦に於て受けたる恩惠、米國人開拓の恩惠に比して優るとも劣る所なし。然るに貴國政治家は弊邦に對して英國及米國に對するが如き同情を示さゞりき。是れ日清戰爭當時三國干涉の生じたる原因なり。此點に關しても罪は固より政治家に在り。然れども國民諸士が斯の如き政治家に信賴する以上諸士も亦其責任の一部を分擔せざるべからず。日露戰爭は却て日露接近の基礎を作りたり。青島戰爭何ぞ獨り仇怨相殺の效果なからんや。貴國にして魚たらんか、弊邦必ずしも水たるを辭せず。貴國の諺に曰はずや、雨降つて地固まると。請ふ之を再思せよ。

英國世界の海上權を掌握し倨傲日久し。支那海より地中海に至るの沿岸今猶文明の域に到達せざるは、文明退歩の英國が久しく是等沿岸を威

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

釀せるの結果ならずんばあらず。貴國人士は自由を愛し義俠に富めり。弊邦と相携へて亞細亞の文明のために奮鬪するは貴國の使命に非ざるか。諸士よ請ふ之を思へ。

弊邦が如何に文明に貢獻しつゝあるかは、今回の戰爭に依りて世界の市場に大凶荒を來たしたるを觀ても之を知るべきなり。英國は表面上北海封鎖を宣言すると雖も、其の實は則ち然らず。憐むべき英國人は弊邦の供給を仰ぐに非ざれば、一日も生存する能はざるまでに文明に後れたり。藥品染料の如き交戰中絕えず弊邦の輸出を仰ぎ居れり。貴國人は古來智に富み義に勇めり。文明のために奮鬪することは貴國人の弊邦人と與に好む所なり。日東の男兒何ぞ文明進步の先驅者たる獨逸人と事を與にせずして、已に衰亡に瀕して僅に虛勢を頼み世界文明の進步を阻害して、自己の腹を肥やすことにのみ汲々たる英國人と相携ふるの愚を敢する。諸士よ請ふ少しく反省せよ。

ローマン人種は多く耶蘇舊敎を奉じ、其信仰專ら形式に流れ、宗敎の精神を逸せり。是を以て其の思想、言語、行爲、文明進步の趨勢に反するもの多し。佛國人等動もすれば今回開戰の罪を弊邦に嫁す。是れ謂れなきことなり。弊邦は本來腹背に敵を有す。露國はバルカン半島に雄飛せんがために常に弊邦及墺國の勢力を殺がんことに腐心し、英國は其の商業日に月に弊邦のそれに壓倒せられ、漸く其の海上權を失はんとするを憂ひ、佛國及白耳義と結托して機會ある每に弊邦に迫害を加へんとせり。弊邦は常に腹背の敵に備へざるべからず。是を以て一日も軍備を怠らず。

弊邦の軍備擴張は攻擊のために非ず、防戰のためなり。而して其軍備擴張が如何に必用なりしかは今回の戰爭に徵しても之を知るべし。今回の戰爭は早晚避くべからざりしなり。開戰したる者は弊邦なり。然れども是れ開戰を好みたるが故に非ず、開戰を强ひられたればなり。先んずれば人を制す。戰に於て殊に然りとなす。佛露兩國軍備完成するの日を俟つて、其の侵入突擊を擅にせしむるが如き宋襄の仁を弊邦に望むは、是れ世界の趨勢を知らざる者に非ざれば能はざることなり。白耳義の中立を犯し、殘酷の行爲を敢てしたりとて弊邦人を誣ひ、弊邦人を蛇蝎視するの風、貴國に於ても亦盛なりと聞く。是れ貴國人士の見聞の狹きに職由せる謬見なり。ローマン人種は自己の罪を他人に嫁することを恥ぢざる虛僞の人種なり。諸士にして白耳義人が如何に殘酷なる行爲をアフリカに於て敢てしたるかを知らば、諸士も亦彼等が善因善果惡因惡果と覺悟する外なきを認めん。

スラヴ人種は未來に世界共通の敵たるべき發芽を示しつゝあり。貴國無學の政治家は此事を知らず、彼等の甘言に飜弄せられて、不倶戴天の敵と款を通ずるの愚を敢てせり。露國は未來永久に貴國の該國大平洋發展を阻止することを甘んずる者に非ず。窮すれば則ち低首して哀を乞ひ、勢を得れば則ち傲然暴戾を逞しうするは露國人の常なり。貴國弊邦と相携へて喉を扼し背を拊てば、露國の大を以てするも懼るゝに足らざるなり。此點に於ては弊邦の利益は則ち貴國の利益なり。諸士何ぞ弊邦と與に連衡の策を講ぜざる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寡人今や貴國人と相提携せんとするの意切なり。直言して貴國人の反省を促す。請ふ野人の禮に嫻はざるを恕して盛衰の在る所を洞察せよ。貴國の文化未だ米國に及ばず。東亞に於て貴國が孤立して米國と競爭せんとするは到底蟷螂斧を揮ふの愚たることを免れず。米國は過去に於て眠れる獅子なりき。今や眼を覺まして立てり。貴國の東洋の發展のために恐るべき敵は地理上便利を有せる米國なり。貴國にして協同事に當らんとするの眞意あらば、弊邦も亦貴國と事を與にすることを辭せず。請ふ事に世界の大勢を察して速に去就を決せよ。古人曰はずや、遠き慮なき者は近き憂ありと。今や世界に雄飛すべき國は貴國と米國と弊邦とあるのみ。貴國の心を得ると否とは弊邦の消長に關すること大なり。弊邦にして貴國と相携へずんば東洋は全く米國人の蹂躙する所とならん。米國人は實際的の國民なり。有形の財貨を作り出す上に於ては世界中米國の右に出づる者なし。無形の財貨に至りては弊邦之を獨占す。東洋文明のために盡さんと欲する貴國は、須からく弊邦と相携へて弊邦の無形の財貨を利用すべきなり。弊邦と事を與にすると否とは、貴國の消長に關すること大なり。又東洋の文明に影響を及ぼすこと大なり。請ふ深く之を察せよ。

之を要するに世界廣しと雖ども、精神的及物質的の文明のために中原の鹿を逐ふべき資格ある者は、歐洲に於ては弊邦あるのみにして、新世界に於ては合衆國あるのみ。而して貴國は其の中間に介在せり。二國の消長は實に貴國の向背に因りて決す。貴國は極東に於て合衆國と兩立せず。貴國にして今向背を誤らんか、貴國の未來推して知るに難からず。請ふ速に寡人の言を容れて國家千萬年の大計を出せよ。寡人今少しく休戰して大に兵力を養ひ第二回西方大攻撃の準備を爲すに急なり。使臣を派して親しく樽俎の間に折衝せしむるの遑なきを憾む。若し貴國にして弊邦と同盟するの意あらんか今の時を可なりとす。聯合軍の與し易きは貴國人も亦戰報を讀んで之を知らん。貴國の艦隊を以てせば英佛聯合の東洋艦隊に當るは必ずしも難事ならざるべし。貴國にして英國横暴の罪を數へ旗鼓堂々自由の戰を起さば、印度波斯等の東洋諸國は響の聲に應ずるが如く貴國に聲援すべし。弊邦は西に歐洲席捲の擧に出でん。貴國は東に闊歩せよ。東洋の事は一に貴國の措置に任ず。貴國と弊邦と兩世界を二分する亦一大快事ならずや。謹んで日本國民諸士の健康を祝し、其の速に國家千萬年の大計を決せられんことを冀ふ。別に書を裁して貴國皇帝陛下の玉座の下に呈せんとす。惟ふに陛下諸士に諮る所あるべし。萬世一系を以て世界に誇れる貴國の皇祚を泰山の安に置くと否とは、一に諸士の向背如何に因りて決す。諸士よ請ふ之を察し之を思へ。

頓首再拜。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

好評嘖々の名著

最近新聞紙學

楚人冠 杉村廣太郎君著

從來新聞紙學に關する著書といへば實用を主として理論を說くこと稀なり多年の研究と實驗とに基きて實用と理論を併せ說くこと甚だ詳密、書中收むる所の「インタギユー十則」の如き軟派硬派の比較論の如き又「新聞紙の特質と編輯の基礎」の如き皆先人の說いて精しからざる底、若しくは未た全く說かざる底に非らざるなし、新聞記者も讀むべく新聞記者たらんとする者も讀むべく、新聞紙の何たるかを知らんとする者も亦讀むべし、安んじて大方に薦むる所以也

□菊判美裝□

□五百四十六頁□

□定價一圓八拾錢□

□送料拾四錢□

文明と哲學的精神

慶應義塾大學教授 鹿子木員信君著

文明の意義及その內容を明かにせん爲め史上幾多の哲人を拉し來りてその精神を洞察しその主張を解剖して「人となれる哲學的精神」を眼前に彷彿たらしめ最後に文明の理想目的は哲學的精神が人生一切の活動を貫徹陶冶するにありと斷じ、以て向上猛進の精神を日本民族に鼓吹せんとする者、この書の帶べる使命なり、蓋し坐上一本を備へざる可らざる良書也

□四六判美裝□

□三百八十二頁□

□定價一圓三拾錢□

□送料八錢□

慶應出版局發行　東京堂發賣

信用ある書籍館及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

朝日新聞記者 鈴木秋風先生序

ドクトル メジチーネ 羽太鋭治先生新著

病的性慾及生殖器全書

著者は性學の大家にして夙に本書の爲に苦辛を重る事年餘材料の豐富と記述の正確は茲に贅するを要せず其内容は性慾、戀愛、結婚、病的等より泌尿生殖器の解剖、花柳病、泌尿生殖器病の豫防法及療法、姙娠、避姙論等殆ど網羅して餘蘊なし且つ圖解を示し有るを以て一般素人にも直に了解するを得而も裝幀高尚優雅にして衆人稠座の間にても繙讀し得べく是非一讀をあらむことを。

最新ポケット形
總クロース大金
箱入美本紙數八
百卅頁表題歐文
定價一圓六十錢
特價金
壹圓卅五錢
郵送料八錢

(中廿一〇二)

發賣元 東京本郷四丁目 文武堂
振替口座東京九五二七番



ピアノ
オルガンは
東京銀座の
山野樂器店
電話京橋(三三九八番)(一〇五二番)

信用なき商店及び猥褻なる物品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

曾根崎艶話

急山人著

□千種女史畫(舞妓)

□草平氏畫(紙治)原色版□

四六判四百拾頁箱入全一冊
鳥の子平摺木板絣鹿子表紙

定價金壹圓 送料八錢

增補再版 □□□

『曾根崎艶話』は大阪「北の新地」を舞臺とせる妓と客との情話なり。旦那あり、色男あり、舞妓あり、通客あり、老妓あり、俳優イ菱大盡あり、土州山あり、平鹿の火の見あり、松絲の奥座敷あり、門野の料理あり、凡そ北陽紅燈のかゞやき、酒池絃歌の歡び、淺酌低唱の樂しみ、寫し出だして盡くさずといふことなく、人をして思はず恍惚として自失せしむ。好評嘖々、版を重ぬるに際し斯界の問題となりたる『紅梅の蕾』の一編を增補し錦上更に花を添ゆ、加ふるに千種女史と草平畫伯と筆を並べて男性と女性の艶姿嬌態を描く。作者急人山は何人ぞ蓋し一時の假名、其の靈筆尋常一樣の作家にあらざるが如し。

三味線音樂の精解書

唄と三味線

■中川愛氷著 定價九拾錢

東京に於ける邦樂界に勢力ある大日本音樂會の幹事中川氏が七年間苦心の結果になる三味線音樂の精解書。

世界中聲量第一の樂器なる三味線とその唄とに關する知識の寶庫

(中付一の三)

京市丸の内 麹廿一號館 籾山書店發賣 振替東京二四一七

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

家庭醫學叢書

1 吾妻醫學博士述 お産の話
2 唐澤醫學博士述 小兒病の話
3 千葉醫學博士述 耳鼻咽喉病の話
4 山田醫學博士述 神經衰弱の話
5 額田醫學博士述 肺結核の話
6 岡村醫學博士述 皮膚病の話
7 佐藤醫學士述 婦人病の話
8 廣川醫學博士述 淋病の話
9 佐藤病院長述 黴毒の話
10 森肛門病院長述 肛門病の話

各冊 定價十五錢 郵税二錢

11 森醫學士述 病人看護の話
12 中村醫學士述 精神病の話
13 菊池醫學士述 脚氣とリウマチの話
14 竹中ドクトル述 感冒と肋膜炎の話
15 齋藤ドクトル述 寄生虫病の話
16 豐福醫學博士述 小兒傳染病の話上
17 豐福醫學博士述 小兒傳染病の話下
18 杉江醫學士述 ヒステリーの話
19 岡崎醫學士述 有益な食物と危險な食物の話 附喰合せの話
20 南醫學博士述 胃腸病の話

以下順次刊行

發賣元 東京市銀座尾張町新橋際 電話新橋一九九一番（振替東京二〇〇番） 新橋堂

◎蘆花 徳富健次郎著

訂正縮刷 みゝずのたはこと

（定價壹圓 郵税八錢）

第六十版

武藏野の孤村に鍬をとれる著者が折に觸れ興に乘じて筆を走らせし卽興のスケッチ、短篇小說、瞑想、書翰、紀行等を集む。淸新なる田園の小景、詩化せられたる敎訓、涙を含む笑に充てる物語、有象より無象に通ふ神秘の暗示、平淡の中戰慄すべき恐ろしき說話卷中に充滿す。

◎蘆花 徳富健次郎著

小說 黑い眼と茶色の目

（定價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢）

第十九版

十九の夏から二十の冬まで著者青春の生活を如實に現出す。「夢の如く起り而して著者の半生に大打擊を與へた初戀の神話が大部分を占む。懺悔の一片また「新思出の記」の一部、從來さまぐの形を以て著者を愛しくれた四國四周の生命に對しこれ迄の水臭い態度をよして更に露骨に而して深刻に愛を謝ひたい心から苦者は新しい企畫の手始めに先づ此れを書いた」著者曰

新橋堂 □賣捌所 市內並に全國各地書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



男難

大窪逸人

▲肅親王の王冠に、彫り鏤めてあつたといふ、由緒の正しい金剛石が、日光の中禪寺湖の滸から、行方も知れず、失はれてしまつたことがあつた。

その金剛石は、徑七分、重さ十八カラット餘り、纖い黃金の臺に輸せられて、宛も大人の栂指の端ほどの大きさを有つてゐた。掌に受けてみれば、正しくどつしりとした重さに、硬冷な感じを皮膚に添へて、また指に挾むで透かして視れば、有るか無きかの淡黃いろい彩りが、極めて靜かに飽和してゐた。之をその道の人達に鑑せても、素とより斯うと限つた評價をつけるわけには行かなかつた。それは淸朝の沒落の際に、琅玕、翡翠、眞珠、寶塔石、雞血石、空心石、碧璽、金冠、黃金の佛像などの夥しい數々と共に、肅親王家の一門が燕京に鸞離鳳別の恨をつゝむで、旅順口の湊江まで共に携へてきた、愛親覺羅氏の正統が嗣ぎ傳ふべき、御物の中の一つであつた。

中華の世は亂れても、與に識るべき義臣に乏しく、亡命の肅親王は爾來恰も五星霜の月日を、流落の身に飽きはてゝ、せめて滿蒙の一角になりとも、王室恢復

の實を擧ぐべく、昔の夢に今の夢を載せてゐた。そこに、滿洲旗人の末流を汲むべき慓悍な群々が、あるものは蒙古の南に、あるものは北滿洲に、喇嘛教の寺から寺へと、とりどりに氣脈を遠近に通じて、彼に巴布札布なる統領を推戴する一團が盟を結べば、是に陶什陶將軍を中心にして血を啜る結社が起り、何れ河南省項城縣の賤妓の私生兒袁世凱の、帝位簒奪の無道を鳴らすべく、先づ『滿蒙獨立』を唱ふべき淸朝復活の機運は、斯くて北京の北と東にまざまざと醞釀した。さうして、肅親王に絕えて久しい悅びがそこにあつた。その悅びを大きくする爲に、親王は朱塗の筐の蓋を開いて、底に久しく埋もれてゐた王冠を取りだした。その眞正面に彫り鏤めた、一塊の金剛石を脫しとつて、親王は昵懇の川島浪速さんに、其を若干の阿堵物に代ふべく委任した。尺璧も『滿蒙獨立』の爲には、只だ一發の鉛の彈にも若かざることを、親王は良く知つてゐた。縱ひあらゆる御物を典じても、『淸朝復活』の擧に充つべき現實の資金を得るために、親王は寧ろ潔く王冠の一金剛石を割愛したのであらう。川島浪速さんは濃紫の小さな縮緬袱紗に、その金剛石を藏めて、旅順口から東京の目白の邸に歸つてきた。

△

新橋の袂にちかいNS旅館に、赭革の大きな鞄一つを荷物にして、今年の二月の始めごろ、三週間あまりを滯在してゐた客人があつた。その泊り客は嘗て外出はしなかつたけれども、訪ねてくる人の數は、日に日に朝夕多くなつて、餘り廣くはない玄關の、敷石のうへに並ぶ靴の數が餘つて、高い上框の緣から右手を下す婢の二の腕が、辛うじて土間のうへに、猶ほ幾足かの靴を揃へた。

泊り客と其を訪ねて來る客とは、絕えて久しく會はないでゐたらしい疎濶の情を、さも懷しさうに雙方から、互に唇を銜いて取り交はすのもあれば、また一人は他の一人に紹介されて、男にしては慇ろすぎる初對面の挨拶を、泊り客の兩膝の前に、物堅さうに述べてゐるのもあつた。さうして其等の人達の着裝は、悉く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

洋服ばかりに限つてゐて、和服姿の一人さへも、その中に交つてゐなかつた。また凡その年恰好は、是も何れは三十代の、壯な氣象らしい人達ばかりに限られてゐて、何れも大概强い跫音を、階段の昇り降りごとに高く響かせてゐた。

宿帳につけた泊り宿の、右肩あがりの硬い字によれば、原籍は弘前市とあり、續いて士族と書きかけて、それを不器用に黑々と塗り消した下に、そゝくさと更に平民と書き流し、次いで大野克己(變名)左脇に三十八歳と、下になるほど際だつて大きく且つ粗笨な字畫が、掠れながらに記されてゐた。

大隅首相の自働車に、爆彈を二つ、闇にまぎれて拋げつけた、謀殺未遂の犯人二人は、彼等が宿を借りてゐた家の主人が認めた、警視廳あての投書によつて、時を移さず縛に就いたけれども、その爆彈を手製した後備步兵大尉の富田さんばかりは、遂に中途から其の蹤跡が分らなかつた。斯の事件に專任せられた捜索係の刑事達は、富田大尉の途絶えた脈絡を、さながらに甘きを嗅いで彷徨する蟻のやうに、鋭い觸感を四方に働らかせて普く摸索しつくした。そのうちの警視廳警務部刑事課捜索係勤務たる齋藤博一さんの觸覺が、偶々新橋々畔のNS旅館に出入する、洋服ばかりの且つ何れも三十代年配の、多くの男達のうへに逢着した。既に幾葉か複寫せられた富田大尉の、軍服姿の寫眞の一つが、齋藤さんの懷中に黑羅紗の合切袋の中に入つてゐた。さうして齋藤さんはNS旅館の滑らかな硝子扉を開いて、玄關脇の小ぢんまりとした帳場を訪ねた。鈍い瞳が澱んでゐる皺枯聲の番頭も、緻い眸に眞白い下膨れの仲働きも、齋藤さんが懷中から摘みだした富田大尉の寫眞を難かしさうに眺めながら、泊り客にも訪ねてくる客のうちにも、嘗て一向に見識らぬ旨を、首を傾げ／＼して、我と氣强いやうに重ねて答へた。齋藤さんは即坐に失望した。失望はしたものゝ、直ぐ傍の明石花崗の敷石のうへに、赭或は黑の靴がとり／＼に、幾足も並べてあるのが、齋藤さんの瞳を牽いた。「あゝまた今日も大勢來てゐるな」と、齋藤さん

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は思ひついた。さうして、徒らに空しくされた失望の跡を直ぐ現在に滿たさうとするやうに、齋藤さんの何ものかを摑みあてやうとする習性は、敷石の上の靴の主――及び其等が訪ねてくる泊り客の本體――延いて彼と是の間に含まれてゐる內容の眞相などに就いて、一時に鋭い知識慾を、自然に然し烈しく喚び起した。齋藤さんは默つて寫眞を復た懷中に收れてしまうと、

『一寸話がしたいのだが』と、言ひながら早速に、手捷く靴を無造作に脫ぎすてゝ、帳場の後の電話室に入つてしまつた。本局の千八百六十五番に電話をかけて、暫く話を交はして出てくると、齋藤さんは中腰になつて、大きな瀨戶の圓火鉢の中に、そゝくさと煙草の火をつけた。始めから立つたまゝ、齋藤さんを瞰ろしてゐた下膨れの仲働きは、自分の股のあたりに、齋藤さんの肩さきが觸ると、忽ち胸を躱はして、緣の廊下を足ばやに奧に往つてしまつた。齋藤さんは中腰のまゝ喫煙しながら、「課長は放置しておけと言ふんだが、と言つて何うも不滿足だなあ。俺は確かに徵候が訝しいと思ふんだが」などゝ、復た敷石のうへの靴の表を眺めながら、今しがた弛みかけた氣分のまゝに、課長との電話の始終を、淡々しく考へだしてみた。さうして、一本の煙草を喫つてしまうと、骨つぽい脊なかを冷たさうに見せてゐる直ぐ前の番頭に、

『君ね、僕の賴みを諾いてくれないか』

と、卒かに言ひかけた。小さな机の上に、頰杖をついてゐた番頭は、その赭い項を廻すと、鈍い瞳に大きな上眼を瞠いて、齋藤さんをまじ／＼と眺めた。

齋藤さんと番頭とは、雙方から暫く問答した末に、軌條が搖れるほど激しい響を起てゝ行く、銀座の電車に齋藤さんは飛び乘つて、日比谷の本署に歸つてきた。

▲

三日經つた後に午後の三時ごろ、齋藤さんは再びNS旅館を訪ねて往つた。帳場の同じ番頭は、內懷に收れてゐた一綴りの半紙を、齋藤さんの顏を見ると直ぐに拔きだして齋藤さんの襟飾の前にずつと差出した。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その半紙のうへには、表紙になつてゐる第一枚に、『大陸社綱領』の五字が、謄寫版の新しい油墨で刷られてゐた。表紙を折りかへして、更に十二三枚もあらうかと思はれる其の内容には、齋藤さんを直ぐに烈しく悦はせるほどの辭句が、飜へしてゆく一枚ごとの、上下に前後に綴られてゐた。最後に裏紙の内外ともに眞白なのを見定めた後に、齋藤さんは右の栂指を、肉が垂るんでゐるやうな番頭の大きな鼻の前に樹てゝ搖かしながら、

『今二階にゐるのかい』と、訊ねてみた。

番頭は眉の間に、深い縱皺を直ぐに攢めながら、次の意味を途斷れ〳〵に答へた。『あの人は今日の晝御飯を濟ませると、宿の袍溫を着たまゝのうへに、二重廻しを羽織つて、帽子も冠らずに、宿の駒下駄を穿いて、出て往つた。あの人が泊りに見えてから、もう八日に成るのだが、戸外に出たのは今日が始めてゞある。帽子を冠らずに出て往つたのから見ると、何かちよいとした用達にでも出かけて往つたのかと思つてゐるが、何しろあの人が、戸外に出たのは珍しい。だが今日は、未だ珍しいことがある。九時を過ぎたばかりの今朝がたに、一人の女――さう二十六七の女であつたが、それがあの人を訪ねて見えた。毎も訪ねて見えるのは男の人ばかりで、それも皆若い人達であるのだから、その二十六七の女が訪ねて來て、大野さんへ取次を賴まれた時には、實際はてなと驚いた。あの人はその女を直ぐに通した。それから小半時間も話してゐたらうが、やがて女は歸つて往つた。その歸つて往くときに、あの人はいつしよに二階から降りて來て、この玄關まで女を見送つてやつた。それも珍しいと言へば、やはり珍しい。あの人に隨分と澤山なお客が見えるけれども、今日まで一度も他を見送つてきたとの無い人である。その人が態々と此處まで降りてきて、上框の端に懷手で立ちはだかつてはゐたものゝ、その女が下駄を穿いて、戸の外に出て往くまで、見送つてゐたのは何うしても珍しい。何でもをかしいとは思はれるのだが、あの人は其のまゝどし〳〵と二階に上つてしまつ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た」

齋藤さんは片頰に微笑しつゞけて、番頭の答を聽いてゐた。三日前の自分の賴みを辛うじて承諾してくれた番頭が、遂にその通りに仕遂げてくれて、大野克己の周圍から、書類の一つを取出してきてくれたことが、齋藤さんには先づ悅しかつた。今聞く女の仔細も素とより諜知の斷片には成るのであつたけれども、懷中に收れた『大陸社綱領』なる謄寫版の書中に、齋藤さんの視覺を著しく亢奮させた、幾つかの人名や地名や熟語などの内容に比べては、女の仔細の類は、只だ一抹の影ぐらゐに相當するほどの、殆ど値の無いものに思はれた。それよりは一刻も疾く、その『大陸社綱領』を携へて、係長の橋本さんに提供することが、齋藤さんには當然の急務であり誇であつた。

▲

豫後備の將校達の間に、『大陸社』と謂ふ結社が出來てゐた。その人數は二十人足らずであつた。結社の名が示すとほりに、共の目的は大陸に繫つてゐた。NS旅館に泊つてゐた大野さんは、その大陸を六年あまり跋涉して、新しく東京に歸つてきた人であつた。さうして、大野さんが未だ大陸の奧深くに、東に西に動いてゐる頃から、『大陸社』が既に結ばれてゐた。猶大野さんと大陸社のうちに最も年長者の眞淵さんとは、陸軍の士官學校の同窓生であつた。

『大陸社』に就いて、以上より詳しく記すことは、姑く能きない。また此の物語のうへにも、『大陸社』そのものは、餘り深い關係は無い。齋藤さんが攫みあてた『大陸社綱領』も、警視廳の處理すべき範圍の外に屬すべきものであつた。

▲

大野さんの外出は、その後も頻りに續いた。また其の時刻は如何にも不規則であつた。ある時は午食の前に、ある時は夜の十時頃から、さうして、外出してゐる時間の長短も全く定まらなかつた。時には夜更けて二時前後に、NS旅館の潛り戶に、遠慮深かさうに低く然し捷い拳の音を起てることもあつた。それでも全

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夜を空けて他に泊つてくることだけは、決してなかつた。また夕食の膳には、たまさか燗をしてくれなどゝ、恰も無邪氣さうに言ふ大野さんが、縦ひ夜更けて歸つて來たときでさへ、酒の氣を帶びて見られることも、嘗てなかつた。

一度大野さんを訪ねて來た女は、その後更に姿を見せなかつた。多くの男ばかりは、やはり續いて敷石のうへに、各自に靴を脱ぎすてゝ、取次も案内もなしに、大野さんの部屋に通つて行くやうになつた。然し屢々大野さんが不在なのに、その誰彼は何れも訝しがつてゐた。大野さんの外出と、その誰彼との間には、何の連繫も無いのが本當らしかつた。

大野さんの行くさきに就いては、NS旅館の誰も知らなかつた。そうして、大野さんは三週間ばかり滯在した後に、NS旅館を去つて、やはり赭革の鞄一つを荷物にして、東京驛から午後七時發の特別急行列車で、門司に往つてしまつた。更に門司から大陸の奥深くに、北へ北へと旅し續けた。

▲葭町の相模家と云ふ家に、『春彌』といふ若い藝妓が抱へられてゐた。その相模家の主婦も、前に褄をとつてゐた時の名を、やはり「春彌」と稱へてゐた。この物語の今いふ春彌は相模家の主婦の名を繼いでゐるのであつた。それだけ春彌は抱妓のうちでも、わけて主婦から可愛がられて、主婦から靜かに『はあちやん』と呼ばれるごとに、春彌は微かな誇を毎も覺えてゐた。春彌の本當の家は目白の停車場の近くにあつた。父は水道局に勤めてゐた。母も健かに暮してゐた。その母と相模家の主婦とは、幼馴染の仲なのであつた。そうして春彌は年期もつけず身代金といふものも無く、十五の春から相模家に移されて、半玉といふ名のもとに、識らぬ男の盃に氣を着けながら、紅い彩りに包れてゐた。十二月生れの損な方ではありながら、身の柄は人並よりも大きくつて、「お酌」と呼ばれるのを、何とはなしに氣はづかしがつてゐた春彌は、越えて十六の秋に、一本の藝妓になることができた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春彌が一本になる前から悧潑ながらに淑かな、唇を噤むでゐながら猶ほ何處やらで何かを物語つてゐるやうな、たゞ名づけがたい含蓄を禀けてゐる、春彌の心にか身にか漾ふやうな雰圍氣を悦んで、殆ど宵ごとに繁々と、春彌を見にくる陸軍の將軍が一人ゐた。その將軍は春彌を呼ぶたびに、相模家の誰かの一人を、名ざしもせずに呼び併せて、それと春彌との二人に蒲團を布かせて、將軍自身は朱檀の机のうへに、黑ビールのコップを置いて、何かと言へば口癖のやうに、『春彌、どうした』とだけ優しく聲をかけてたゞ滿悦さうに、ビールばかりを飮むでゐた。其「春彌、どうした」の他には、撥をとれとの御意もなければ、その家の女中達にも御用はなく、大概一瓶を盡しかけるとコップを置いて、さも旨さうにシガーの一本を、將軍は心しづかに燻ゆらせながら、鴨柄のうへの額を仰いでみたり、机のうへに肱枕をして、その右の掌に顳顬を載せながら、煙の行方を眺めたり、そうして偶々此方から姉の藝者が話し始めれば、それも嫌ふといふのではなく、將軍は快さゝうに一々それに應答して、此方の話が一かた濟めば、『さうかいの、それで』などゝも、後の話を牽かうとする、その淡々しさと、ゆつたりとした趣に、直ぐに慣れゝばまた聊かも窮屈のことはなく、相模家の誰彼は、將軍の座敷といへば欣んで、毎ものやうに蒲團を布かされて、朱檀の机の程よい近さに坐りながら、將軍の半白な鬚のあたりも見慣れてきて『黑ビールの伯父さん』とあどけない渾名を、誰からとはなしに相模家の中で、將軍につけて善い噂をしてゐた。

春彌は相模家の内に居る時には、六人の抱妓のうちでも、わけて好く燥ぐ一人に算へられてゐながら、勤めの座敷に身を入れてみれば、我ながら眞から靜かな妓になつてしまひ、たゞの一つの愛想さへも、唇に湧きかねて、おほかたは俯眼がちのまゝ、徐かに息をしてゐるのが、それにつれて撫肩が緩かに揺いて、斜めに差した簪の銀の繊い短冊が、ゆら〳〵と揺れてゐるばかり、或はふつくりとした鳩のやうな額の影に、長

い睫毛が時々に瞬いて、豊かな瞼に漣をたてるばかり、さうして時の移るのも知らぬやうに、只そのまゝに、さながら満足さうに默つて其の坐に長くおちついてゐた。將軍の座敷に姿を見せて、また毎ものやうに、徐かに

『春彌、どうした』と、聲をかけられたときには、春彌の唇が纔かに開いて、かすかに優しく歯のうちに笑をつゝみながら、將軍の瞳を一瞬のうちに、自身の瞳に收れてしまうと、また其のまゝに瞼を俯せて、さうして少時く自然に餘つた笑のあとに、我と耽つてゐるやうに、唇のあたりに薄れてゆく笑の柔かさが、有るか無きかのうちに漾ふてゐるばかり、すると將軍は、徐かに是も笑ひ聲をたてゝ、さうして其のまゝ二人とも默つて然し互に柔い氣分のまゝにおちついてゐた。

相模家の家中が、方々に呼ばれて行つて、誰一人も殘つてゐなかつた夕暮の後に、間もなく春彌は將軍の座敷から新しく呼ばれたことがあつた。さうして其から小一時間もした後に、春彌は漸く將軍の襖を開くことが能きた。將軍は其の家の女中の舌を相手にして、やはり氣さくさうに黒ビールを飲んでゐた。春彌が疊のうへに坐りかけると、

『忘れてゐた。座蒲團を持つてきてやつて呉れたまへ。春彌、忙がしいか』と、將軍はコップを置いて、春彌を視ながら、いつもと同じ聲をかけた。

春彌は復た歯のうちに仄かな笑をつゝみながら、たゞ

『え』と應へたばかりで、やがて女中が隣り座敷から提げてきた、蒲團を勸められるまゝに、裾を爪さきに纖かく捌いて、ゆつたりとして坐り直した。

その夜は、始めて春彌ばかりが、將軍の座敷に一人だけゐて、他の相模家のものは、尚ほ一時間あまりも其のとり〳〵の座敷から他には移されずにゐた。さうして、其の間に將軍は何一言も口にせずに、只だ悠閑と默つてゐた。春彌も同じやうに自然に默つてゐた。彼も默り是も默り、默つたまゝの一時間あまりが、二人の間に移つて住つた。たゞ其だけであつた。やがて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

相模屋の一人が新しく加はつてきた後に、其が將軍に箱根の山景色や江の島の海景色などの、思出を少し話し始めて、將軍の簡素な笑ひ聲が、時々に部屋の空氣を搖かした。

斯うした將軍の遊興が、二月あまりも冬に續いた。

▲

歳の暮になつて、春彌の下駄が土に吸はれて、猶ほ重たくなつてきた一夜に、將軍は珍しく二人連れになつて、いつもの家の階段を踏むだ。その新しい始めての一人は、將軍の遠い姻戚にあたる、やはり陸軍の末だ若い士官であつた。さうして、春彌と、相模家の店を借りてゐた舊い藝妓の『富美咲』と謂ふのと、二人が同時に呼ばれてきた。

『春彌、どうした』が、復た將軍の唇から出た。その隣りに若い士官は荒い飛白の伊勢崎銘仙の羽織に、揃ひの著物に紺縮緬の帶をして、

『忠、正宗を飲むか』と、將軍から問はれた時に、

『え、頂きませう一合ぐらゐ』と、直ぐに答へながら、春彌の隙もない綺羅びやかな姿を、つく／＼と視まもつてゐたのが、

『君はほんとに綺麗だねえ』と、大きな嘆稱の聲をあげた。

それから將軍が毎もと同じく默りがちのやうに、その『忠』と呼びかけられた若い士官も默つてばかりゐた。それと無口な春彌と合はせて三人の間を、富美咲が巧者に綴つて、二時間足らずもゐた後に、將軍と忠さんとは歸つて往つた。

坐を起つたときに、將軍は、

『春彌、暫く會はんぞ。勉强せい』と、言ひながら、初めて春彌の身に手を觸れて、佇むでゐた春彌の左肩に右掌をかけながら、また、

『お前は惜しい女ぢや』と、言つた。

春彌は俯向きながら、麗かな顔を緩かに横に搖かした。さうして、將軍の語をはつきりと氣にとめた。

將軍は任地が移つて、西の方の師團長に榮轉して行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

忠さんも其のまゝ姿を見せなかつた。

▲

あしかけ七年すぎた。

春彌が一本の藝妓になり、六年の勤めのうちに、彼女の周圍には、またさま〴〵な他の物語があつた。然し其の六年の過程は、此の物語には關係はない。

宵ちかくなれば、それとはなく心待ちに待たれてゐた、將軍の座敷の印象が、遂に消えがたく心の奥に清く貽されてゐた春彌には、六年前に只だ一度、將軍に連れられてきた忠さんが、更に六年を經た後に、同じ家の同じ部屋に坐つてゐるのに呼ばれて行つて、直ちにそれと當年の其の一夜が、まざ〴〵と思出されてならなかつた。

忠さんは彌が上にも麗かな春彌の面に、一道の寂しみが含まれて、眉のあたりにそれとはなく匂ひの乾きかけてゐる跡を偲んだ。春彌にしても忠さんの今は何やら嚴めしく整つてゐる表情の、舊は無かつた髭のしたに、緊しく噤んでゐる唇の力を思つた。

斯うした單純な二人の仲に、話は何時か將軍の現在に及んで、春彌は將軍が今は昔の役を退いて、故園に老夫人と共に、簡素な生活を益々健かな老體に悠々樂むでゐる旨を、忠さんから聞くことができた。また忠さんは春彌から「黑ビールの伯父さん」の名や、「春彌、どうした」の口癖や、さうして春彌は未だ將軍の喫ひつけてゐたシガーの香を覺えてゐることなどを、順序よく聞かされた。淸い笑聲が二人の唇に交はされて、六年前には「一合ぐらゐ」などゝ言つてゐた忠さんも盃を重ねれば、我ながら無口であつた春彌の唇にも、同じ盃が今は幾度か啣まれて、その夜の淸興は、只だ初めから隔てのとれた二人の間に、時の移るのを忘れさせた。その歡樂は美しく終つて、忠さんは蹌踉と階段を降りても、靴を穿く手に危げはなく、送つて降りた春彌の頬は熱りながら、相模家への電話は確かに、彼と是との仲は未だ淡かつた。

然し、行くところまでは遂に行つてしまつた。それも行きついて未だ限りのないまでに、忠さんと春彌と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、既にすつきりとした宵の甘味に一つになつて溶けかはす二の手、三の手にまで共に分けいつて、その二人の間にその他には素より何も無くなつてゐた。

忠さんは其の時には、砲兵の中尉であつた。さうして幼年學校に寄宿生活をしてゐた時分から、生涯をかけて志してゐた支那の研究に、少尉になつた直ぐ後から、勤務の隙々に着々と歩を進めてゐた。その爲に、異性に對しては全く初心な忠さんの只だ一純な胸には、春彌の香が一切移つて、それは藝妓といふのではなく、將た女といふのでもなく、春彌といへば只だ春彌の、そこに忠さんは春彌を措いては自分の世界が悉く無いやうにまで成つてゐた。

春彌にしても、忠さんの前に坐つた時には、また六年前のお酌に出てゐた時分のやうに、我と訝しく唇が硬ばつて、さうして何とはなしに俯眼になり、餘り繼ぎ穗のないまゝに、そつと忠さんの顎のあたりを見あげては、また微かに優しく歯のうちに笑を包みながら、徐かな息を肩でしてゐた。さうした春彌のものごしは、すべてが六年前の彼女に復つてゐた。二人の逢瀬が繁くなつて、燈がつけば、忠さんと春彌とは、縱ひ離れてゐる折にでも、互の動悸が高くなつてゐた。忠さんが餘儀ない勤で出られぬ夕は、必ず電話を相模家に架けた。それを聽て切るときには、二人は暫く受話器を左手に持ち添へたまゝ、默つて遣る瀬なく佇むでゐた。それでもまた聽て思ひ切つて、受話器を掛金にかけてしまうと、春彌は小さな息を吐いた。その吐息は、春彌が忠さんと心をきない仲になつてから、三月ほどして、ほんとに深い溜息に變つてきた。

▲

相模屋の主婦は、始めのうちは悦んで、春彌を忠さんの前に出してゐた。家の中で抱妓の氣まぐれどうしが互に躁ぎながら、誰よ彼よと客の渾名を呼びかはして、揶揄つたり揶揄はれたりしてゐる一時に、主婦は昔の自分を心ひそかに興多く思ひ出しもして、殊に今の春彌が忠さんといふ若い人と雙方から相思つてゐるらしいのに、その生立の赤子の時分から好く知つてゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る主婦には、忠さんを一途に慕ふ春彌の心根が、今更不思議はないのにをかしく思はれてゐた。然し、主婦は春彌の母から嘗て呉々も頼まれてゐる一事があつた。それには斯う云ふ意味が含まれてゐた。「この文代のからだを頼むのについては、父親はほと／＼不服を唱へた。親子三人が暮して行くさきに、今日が明日にも路頭に困るといふでは決してない。一人娘を遊里に出して、それの貢を受けやうなどゝは、父の胸には前から微塵も覺えがない。と言ふのが父親の一存であつた。然しまた母の私には外の思わくが確かに有る。水道局の小役人の分際で、行末のわかりきつた身分に、文代の出世は、現今では何と言つても到底むつかしものと思はねばならぬ。それは今日明日に一升の米を風呂敷に提げて戻らうと言ふのではないにしろ、お互に文代の稼にかゝらう等と、若しも其の胸算でゐるならば、それこそ却つて此の子に世間の苦勞をさせなければならぬ。それよりは氣心も知りあつた相模家さんに此の子を先づ任して、末は此子に格子を有たせて、私が采配を振るといふ方が、子も樂なれば親にも氣苦勞はない筈ではないか。それも何年と年期をきめて、子を賣りにやると言ふではもし、若し嫌なれば嫌でよく、此の子は直ぐにでも引取れるといふもの、また此の子に確かな緣りもない旦那をもたせて、我々が左團扇で過ごさうなどゝ、さう蟲の好いことを當にするのでもなく、藝者で育てゝ藝者で身を立てさせやうといふのではないか。言はゞ地道でこそなけれ、これも考へかた一つでは滿更世間に稀なことでもない。と言ふのが先づ母の私の胸の中である。

　それで私は父親をとう／＼やつと説きふせて、此の子を他ならぬ姉妹同然の貴方に預けるのではあるけれども、もと／＼私の考が今いふ邊に有るといふ一事ばかりは、良く含むでゐて欲しい。若いものが斯うした稼業をして行かうといふのであれば、また時には好い人の一人や二人は出來もしやうし、また何れは或はお客に出もしやうし、それは豫め承知のまへで、今更兎や角と思ふ私ではないが、飽くまで藝者で貫かさうと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いふのが本であれば、此の子に其の道の過ちがないやうに、そこは貴方にとつて勝手がましい中々むつかしい話ではあらうけれども、良く／＼承知して置いて貰つて、程よいほどに手綱をとつて貰はねばならぬ。これが私の一つだけの頼みであり、前もつて呉々も言ひ添へて置いて安心もしたいのが、母の私の實の心である。それ見たことかお前の爲になどゝ父親には一言も言はせたくはない意地も、私の胸の片方には勿論しまつてある。それ故に少しは勤めの苦勞はかけても、自分勝手な苦勞は決してしないやうに、十分に監督をしながら、みつしり磨きをかけて貰ひたい。本當に母の私の心願であり是ばかりが氣がゝりである」

それを「よろしいか」と、春彌の母に念を押されて、「よろしい」と、相模屋の主婦がきつぱり理解して、さうして預けられた春彌の本當の戸籍名は文代といふのであつた。

その春彌が家の中で、忠さんの嬉しい噂をしてゐるうちは、主婦は未だ心を許してゐた。それもしかし春彌の唇に、忠さんといふ名がいつしか消えて、それと共にしんみりと春彌は沈着いてきて、それでゐてやはり繁々と、忠さんの座敷に呼ばれて行つてゐて、行つてしまへば後くちを頻りにかけても、中々に其處から動かないやうになり始めた、然うした春彌の深い氣色に、主婦は漸く氣づかひ始めた。

春彌自身が愈々母に連れられて、相模家の伯母の家に來て、そこが自分の家になり、伯母を其の日から母と呼ぶやうになつた日に、烈しい氣象の母が常になく長々と頼みこんでゐた一條を、春彌ははつきりと覺えてゐた。さうした母の頼みの意味は、それから時のたつに從つて、春彌の心に身に「成程」と、我とまさしく頷かれる節々機會も屢々あつた。然し未だ嘗て母の頼みに違ひ、また相模家の母に氣をかけさすやうな、愚かな心は六年かけて、春彌の胸に覺えがなかつた。藝者意氣地の呼吸も身にしめてみれば、勤めの興も汲みわけられて、我と怜悧な鋭い端々に、一瞬の他の瞳のいろにさへ、千種萬別のこゝろが、直ぐさま讀まれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るやうにもなつてゐた。それだけ春彌は、忠さんとの仲をば、相模家の母に氣どられることを鋭く懼れた。然し、主婦の瞳にしてみれば、鏡の前に化粧してゐる春彌の横顏にも、それとあり〱と映る今までにない眞情の閃めきが、既に其の裏にきつかりと根ざゝれてゐるのが讀まれた。また其の的は他ならぬ必ず忠さんといふ若い客から毅く萌してゐることも主婦にはさながら寐鳥をさすやうに判つてゐた。まして春彌がその忠さんの座敷から夜更けて歸つてきた時をみれば、わざとらしい素振の淡々しい表一重のうらに、重い絆を胸に祕かにまいてゐる底の底まで、主婦は春彌が上框に片足をかけて、挨拶の語をかける一聲のうちに、「逢つてきたな」と直ぐに判じた。春彌は自分の底の底まで、相模家の母に悉く覺られてゐることを、自分も直ぐにそれと覺つた。さうまた春彌が覺つた趣を、相模家の母も直ちに覺つた。隙を置かせぬ雙方の感觸は、互に忽ち幾度か會つては離れ、離れると思へば其の直ぐあとに互に應へて、さうして雙互の仲に其とはなく、今まで曾て知らなかつた空しい溝が自然に横に延び始めた。その空しい情が新しく我にもあらず生き始めたことを。それも素より何方からといふのではなしに、また二人とも直ぐに雙方ともに氣づいてゐた。

　未だ若い春彌は斯うした主婦の前を憚つた。中老の主婦は春彌のうへを氣づかつた。さうして二人は然うした互の仲を悉く自覺してゐながら、暫く氣を措きあつてゐた後に、主婦は一日きつぱりと、忠さんとの仲を堰きにかゝつた。主婦は春彌を二階に呼び上げて、次のやうな意味を、淀みなくすら〱と說いた。

「聞かして納得させやうと言ふのではないが、お前と私とが改まつて斯うした話をすると言ふのも、お前の胸には悉く判つてゐやう。すべて判つてゐながら其でゐて我から陷つてゐるのがお前であれば、そのお前を呼びたてゝ斯うしたことを言ふ私も實は苦しい。決して何も言ひたくはない。言ひたくはない私がよく〱の事だと思へばこそ、かね〲自分の子だとも思つてゐるお前を呼びたてた。お前のお母さんが私への、さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つい頼みの筋をお前は必ず覺えてゐやう。それだけお前は知つてのやうに他の妓と違ふ。よく此の邊を胸において、無理のないやうに稼いで行つてもらひたい。私も決して沒義道なことを言ふのではない。よろしいか」とだけ言つて、主婦はさながら「もう二十歳を越えるやうになつて、早いもの」と言ひたさうに、春彌のゆたかな髮のあたりを瞶めてゐた。

「忠さん」と名指し一つも介まずに、さうして胸の周を取圍むやうに話されてたのを、春彌は下唇を嚙むでは氣が着いてそつと放し、放しては復た嚙みながら、長い睫毛を俯せて聽いてゐた。相模家の母の然ういふ胸のうちは、其まゝ春彌にはつきりと解つてゐた。それには眞から感謝のこゝろも湧いてゐた。それだけ其の人の膝の前に座つてゐれば、もう何も彼も悉く此方の一切が汲みとられてゐるやうな氣がさして、春彌はあるにあられぬほどに辛かつた。

　春彌は少時く默つてゐた。何か言はう、言はなければと、いつもよりは一層氣勁く果はいら〳〵するまでに我と思ひこみながら、それでも、相模家の母の膝の前で、現に斯うした辛さを、ぴつたりと當てがはれるやうに味はされてみれば、まして其處には忠さんのくつきりとした面影も、幻のやうに立つたり座つたりしてゐて、春彌の唇は纖かく顫へながら、返辭の一言さへも湧いて來なかつた。

　然うして凝然と肩を窄めるやうにして、默つて座つてゐる春彌の帶のあたりを、暫く眺めてゐた主婦は、

『はあちやん。好いかい。其ではね』とだけ言つてしまうと、平常のやうに素捷くずらりと起上つて、

『さあ、階下へおいで』と、招ぐやうな聲をかけて、自分は徐かに階段を降りて往つた。

▲

その次の日の夜に、忠さんは毎もと同じ家から、春彌を呼んでみたけれども、その返事は、「春彌は風邪をひいて、熱が激しくて床に就いてゐる爲に」とばかりで、斷つてきた。

忠さんは少からず愕いた。さうして、直ぐに相模家

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の『鈴葉』といふのを呼んでみた。

其の前にも二三回、忠さんを識つてゐた鈴葉は、忠さんの顏を見ると直ぐに、「春彌さんは今朝急に入院した。風邪をひいて寢てゐることには成つてゐるけれども、ほんとうに急に入院することになつた。それには春彌さんが貴方に當て丶手紙を書き、それを私に事づけて行つた。私は今他の座敷から來た爲に、その手紙は家の私の鏡臺の抽斗にしまつてある。一旦家に歸つて持つて來るのにしても、春彌さんの手紙を何やら[illegible]てみれば、同じ此[illegible]で貴方に[illegible]から渡すのは、氣に染まないやうな風も有つた。と言ふのは、私の鏡臺は生憎にも相模家の母の座つてゐる直ぐ傍にある。

私が今から突然に家に歸つて、其の手紙を取出すのにも氣がさせば、また直ぐに此の同じ家に其のまゝ戾つてくるのは、猶氣苦しい。

そこで貴方は最う一時間も此處にゐて、それから更に別の家から私を呼んで貰ひたい。さうすれば、私は何うにかして其の隙に、必ず春彌さんの手紙を懷に入れて、その別の家で貴方に渡す」といふ意味を話し續けて、そこに宛ら大事を打明かして、またそれを決行するやうな氣負つた氣色に、うち昂つてゐた。

忠さんには一切がはつきりとは解らぬながらに、鈴葉の言ふとほりに實行した。また鈴葉から、春彌の容態を聞いてみれば、入院したといふ病源さへも、鈴葉は何も知らないでゐた。』唯だ其の手紙は、春彌が床の中[illegible]で、三枚の櫻紙に[illegible]ア[illegible]り鈴葉は知らない旨をも、言ひ添へた。

別の家に往つて、忠さんは鈴葉に會つた。漸く持つてきたといふ其の手紙には、いかにも淡く鉛筆に、讀みにくい假名ばかりが、よろめくやうに並むでゐた。電燈の光の下に、柔い眞白な櫻紙を透かして、その上に春彌の認めた、たど〳〵しい走りがきを、忠さんは漸く讀みとつてしまうと、それは全く意外であつた。病の性も書いてないのは其としても、その三枚の櫻

紙の始終を通じて、柔い心ねは只の片言隻句も發見することが能きなかつた。只だ暫く會ふことの能きないといふ理由ばかりが、前後も亂れ勝ちに、「實の兩親に看護されてゐる故に、縱ひ貴方であらうとも、客の見舞を受けるのは、如何にも春彌自身にとつて術ない」との意味が了解はされても、更に、「是を機會にして、身を引いて實家に一先づ歸つてしまうことになるかも知れない」と、之も素氣なく書き足してあるのが、然し其處には、その爲に忠さんとの別を惜しむ氣あひは、筆の跡には何の一字も、記されてないのだつて。

忠さんは其の終りまで讀みとほしてしまうと、そのまゝ讀みかへしもせずに、直ぐに鈴葉に手渡して、

「僕には解らん」と、言ひすてた。

鈴葉も其の手紙を讀むでみた。さうして、忠さんの瞳を視かへして、二人とも其のまゝ默つてゐた。少時く默つてゐた末に、忠さんは勢よく起上ると、忽ち歸り仕度をし始めた。何かは判らず、餘りの呆氣なさに繼ぎ穗もなく、忠さんの帽子を持添へて隨いて行つた鈴葉の手から、忠さんは上框の際で奪ふやうに帽子を取つて、其のまゝ戸外に出てしまつた。

▲

忠さんと春彌との仲は、一切が其で暫く途絶えてゐた。

「誑された」とばかり强い觀念が、忠さんの殆ど全部を掩ふてゐた。さうして、其の年來の宿志であつた支那内地、殊に蒙古方面への旅行を續ける爲に、忠さんは陸軍の其筋に願を出して許された。

東蒙古の哲里木盟に、『タンガラツム』と呼ばれる部落がある。喇嘛教の達賴罕の王府になつてゐて、その爲の大きな寺院が、部落タンガラツムの中心になつてゐる。部落の北側には、王爺廟と謂ふ宮もあるけれども、喇嘛教の僧侶達の權勢は、殆ど政教一致の體を成して、其のタンガルツムの他に、或はハガス、或はホロスナスモワ、或はホルホ、或はチヤーヂンタイ、など何れも喇嘛教の大小の寺院が、地方の權威に立てられてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

忠さんは、滿洲の奉天から眞直ぐに北して、法庫門に入り、更に北上して轉王府に着き、猶ほ西北に轉じて、奈曼旗の沙漠を横ぎり、タンガラソムの部落まで辿つて行つた。その旅程は許す限りの速さをとつて、忠さんは只だ北に北にと、一途に激しく心も身も飛ぶやうに移つて行つた。

タンガラソムの寺院の院主は、忠さんの來訪を、眞から快く請じた末に、その來訪の志を訊ねた。忠さんは好く語り好く笑ふ院主の純撲な肌あひに、忠さん自身との共鳴を覺えながら、東京の葭町から負はされてきた衷の矛盾と缺陷とを、そのタンガラソムの院主との誼によつて、我と和かに充たされて行くやうに思はれた。その實は、忠さんの底に埋もれてゐた年來の素志が、春彌と別れて而も東蒙古の境のうちに一歩を踏み入れたときに、始めて猛然と炎のやうに燃えさかつて忠さんの小さくはない野心が、當年の本然どほりに復活したのであつた。

火燵櫓に紅縮緬の掛蒲團を柔く掩ふて、その蒲團の下に、春彌の豐かな指と指とを縺れかはし、時と時で一つの笑ひに心ゆくばかり、此夢こそ永けれ永からねばと、互に祈りかはして復た同じ夢を、くりかへしく重ねに重ねて限りなく、盡きない胸と胸とをぴつたりと一つにして、無言の裡に頷きあつてゐた忠さんは、タンガラソムの寺院の奥に、始めて長途の旅を收めて其の滯在の一夜に、彼は院主に蒙古獨立の大義名分を力說した。

忠さんの通譯に傭はれてきた「石井」さんは、その時忠さんの抱いてゐた野心の輪廓を初めて知つた。さうして、石井さんは其の趣を、自分の首領株になつてゐるM陸軍大佐に宛てゝ、報告書を郵送した。そのM大佐は關東都督府の幕僚であつた。

蒙古獨立の機運が、殊に東蒙古に胚胎してゐたのは既に清朝末代の頃から、徐ろに其の芽を吹いてゐた。タンガラソムの院主が、忠さんの本體を其と明かされて、日本の將校と知つた時に、院主は忠さんの來訪を眞に限りなく悦んだ。

始め蒙古を弱くしたものは清朝であつた。喇嘛教の宣布を、官憲の力で後援し奬勵して、一家に生れた男子のうちに、その長男ばかりに家を嗣がせて生業を營ましめても、次男以下は喇嘛教の僧徒たらしめて、教旨による妻帶禁止の掟に餘儀なく服せしめた、是が蒙古族懷柔の一策は、殆ど好く成功した。

喇嘛教は盛になり、蒙古族は同時に衰へても、時の移るにつれて、蒙古獨立の聲は、露國の力によつて、丘脈起伏する大原の低いうねりの蔭に、天幕の下から下へと湧いて傳はつて行つた。

夥しい數の喇嘛教僧徒のうちにも、慨世の人はあつて蒙古獨立の聲々に、耳を傾けては眉をあげる者も、決して少くはなかつた。支那の本省に革命が起り、清朝忽ちにして宣統帝の退讓と共に沒落して、袁世凱が北京の主に成つた一場の劇は、實に計らずも强烈な刺戟を蒙古族に及ぼして餘りあつた。蒙古族は新大總統袁世凱に、先づ蒙古自治の旗旛を飜した。

タンガラソムの院主は、是も其の刺戟に亢奮した一人であつた。彼は語るべき蒙古諸王の合從連衡に、一臂の力を自ら添へて、蒙古自治の成立に盡した。然し其の諸王達は、北京に招かれて、袁世凱の甘くて力ある舌のうへに、悉く生氣を奪られたばかり、艶曲妙舞の伎婦、夜光の杯、天厨の膳羞、彼等は放歌高吟の聲々に送られながら、空しく蒙古に歸つてきた。

タンガラソムの院主は、時運の非に慨き更に嘆きながら、朝夕の誦經の聲に、暫く自分を隱してゐた。そこに、ゆくりなくも忠さんの來訪をうけて、異郷の人から志を同じうする大義名分を說かれた。院主の悅は大きかつた。その悅を聞いた忠さんの悅も大きかつた。悅と悅とに盟を訂して、二人は幾夜か室を同じうして寢るやうになつた。

然し、忠さんの悅は其のとほりには續かなかつた。驛遞の郵便馬車は、忠さんの手に歸朝命令を傳へてきた。忠さんは愕き且つ憤りながら、其の歸朝命令を更に强く恨んだ。愕きと憤りと恨みとは、忠さんに一つの快心をとらせた。彼は一夜石井さんを遠ざけて、院

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

主と親しい筆談の末に、そのまゝタンガラツムを後にした。單身西に走つて、札魯特却の境に入つてしまつた。さうして其の踪跡は石井さんにも旅順のM大佐にも分らなく成つた。

▲

故郷に老夫人と共に、栽培や養雞などの野の趣味に沒頭して世を忘れてゐた將軍は、一日蒙古の奥から忠さんの手簡を受けとつた。その中に忠さんは謂はゆる素志の遂行の爲には、一切を省みざるべき決心と、其の理由と、其に關する一身の處置とを、簡潔に認めて生別死別を將軍に告げ報らせた。

將軍は愕いた。昔て只だ單純な興趣に自ら乘つて、東京の遊里に雛妓を招き、黒ビールとシガーの味に、老後甘柔の宵を樂しとした、其の雛妓春彌と姻戚の青年士官とが、深く會つて淺く別れた一齣を、將軍は然し毫しも知らずにゐた。その忠さんから休暇旅行を請願して滿洲を見學に行くといふ通知の手紙を見た時に、將軍は其の計畫に其の時は贊成して置いたものゝ、何が故か忠さんが歸朝命令を受けて、然も其には服せずに、自ら强ひて踪跡を晦ましたといふ、其の前後が將軍に不審でもあり同時に全く不意の愕きでもあつた。將軍は舊知の未だ現職に就いてゐる一將軍に、忠さんの一身に就いて善しなに賴む旨の私信を認めて、客氣に馳られた忠さんの安否何れに憂を置いた。

忠さんはそれから半歳の後に、豫備役に編入された。さうして其の踪跡は全く誰にも分らなかつた。

▲

そのまゝ時は過ぎた。

只だ一發の鉛の彈にも若かぬ金剛石は、阪神地方の縉紳間に、誰から彼へと流轉して行つたけれども、何處にも其の主に逢ふべき緣故は結ばれなかつた。

それは次いで京濱間の富者の群の間にも、其處彼處と徂徠してゐた。然し其も徒勞に終つて、經六分の大きさと、十八九カラットの重さとは、空しい光を輝かしてゐた。

忠さんは其の間に、獨り極めて秘密に東京に歸つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きた。彼は親しい友を多く有つてゐた。わけて最も親しい一人のM中尉が。その時陸軍大學校に入つてゐた。
忠さんはある深夜に其のM中尉の郊外の家を訪ねた。未だ起きてゐたM中尉は、忠さんが柔い中折帽子の下から、
「おい、己だ」と言ふ沈むだ低い聲を、玄關先で聞いて、右手を出して忠さんを上に引きあげた。
其の夜は忠さんとM中尉と、晨ちかくになるまで、忠さんのお土産の野心の一策に就いて、語りあかした。忠さんは自分が豫備役に編入されてゐるのを始めて聞いて喜んだ。
その翌日の夜になつて、忠さんはM中尉と別れた。さうして、再び「第二の故郷」だといふ蒙古の奥に歸つて行つた。M中尉の家を出て行く時に、忠さんは、
「頼むだぞ」と、言つた。
「好し」と、M中尉が答へた。
忠さんが再び蒙古北上の途についた後に、豫後備役の青年將校達の間に、「大陸社」が結ばれた。M中尉が唯だ一人、その中に未だ現役でゐた。

▲

春彌の發病は眞實であつた。それは急性の肺炎に冒されたのであつた。然し症狀の未だ初期のうちに早く入院した爲に、重くはならずに取りとめることが、能きた。近くの先生が見えて、「是は入院した方が好い。然し御隨意に」との意味を、撫然として言つたときに相模家の主婦は、直ぐに其の場で「宜しくお頼みしますと答へてしまつた。
蒲團の下に胸を起して、朋輩の鈴薬から鉛筆を借りた時に、春彌は私かに涙をのむだ。熱にほてる兩頬の溫かいのに、忠さんの頬をしみ〴〵と偲びながら、櫻紙を枕の下から取出して、少時く考へた。始めて其人へ手紙を書くのに、如何にも凶い報らせを書かねばならぬ苦しさに惱みながら、春彌は鉛筆の尖を瞶めてゐた末に、一枚も書き損じずに、書き初めては滯りなく亂れた文字を一氣に連ねてしまつた。
書いてしまうと、直ぐに氣を勵まして、幾つにも截

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く折り疊むで一つに結び、階下に降りてゐる主婦を見張つてゐた鈴葉を呼んで、

「忠さんにお頼みするわ、どうぞ」とだけ言ひきつて鉛筆を添へて手渡した。

春彌の病院生活は三週間あまり續いた。退院しても相模家には還らずに、目白の親の家で保養した。さうして一月あまりして、漸く銀杏がへしに結ふことが能きた。其の間に、春彌は嘗て忠さんの聲を聞かなかつた。只だ鈴葉から、手紙を渡して貰つたこと、その時忠さんが俄かに歸つて往つたこと等を、聞き知つて、烈しい悲を長く殘して默つてゐた。

忠さんの消息は、其のまゝ春彌には分らなかつた。忠さんは友達と一所に遊びに來たことはなく、また勤めてゐるといふ營所に、自働電話で問合してみれば、其の度ごとに兵卒らしい卒氣ない聲で、

「中尉殿は居られません」とばかり、春彌は身と心とを疲れに憊れさせながら、それでも相模家の母の手前に我と氣を措いて、稼ぐことには、みつしりと氣をしめてかゝつてゐた。

そのまゝ、時は移つて行つた。

寂しみと艶やかさと、よく一つに調和して、勝つた才氣の露はになり始めた春彌は、一夜に幾つかの座敷を變へて、相模家には無くて叶はぬ一人になつてゐた。

ある夜、春彌は識らぬ名の客に呼ばれて行つてみた時に、その客は「春彌、君に眼の保養をさせてやらうか」と突然に言ひ始めた。外らさずに聞き續けて行くうちに、其の客は懷中から小さな袱紗包みを取出して春彌の前に抛げやつた。

堅い結目を解いてみれば、濃綠の小さなサックがあり、更に其の蓋をとつてみれば、春彌は流石に息をのむだ。「何といふ大きなダイヤであらう」と思ひながら手にうけて透かして見る瞳に、燦々として七色の光が幾趣幾樣に相交叉して、閃々とその角々から迸るのが此世の貴さを示現するやうに、氣強く映る。

「帯留にしてやらうか。ダイヤモンド藝者といふのでそいつを見に來る御客で、きつと君は流行るぜ」など

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゝ、その客は春彌の愕きを悅ぶやうに、燥いで言つた。

自分の指さきを離れるのに、流石に愛惜の思を殘しながら、春彌は其をサックに收めて、客に返すときに客の太腕が俄かに春彌の手頸を執つた。さうして、『日光に行かう』と言ひ、その約束を堅く結むだ。客は春彌と相模家の半玉とを連れて、日光に遊びに行つた。さうして、中禪寺湖の傍の旅館に泊つた。

五日ばかり客と春彌と半玉とは、日光の杉の空氣を悅んでゐた。

▲　・

賣れぬ王冠の金剛石は、川島浪速さんの手から、大陸社のうちの一人に委託されて、その一人は又樣々に心當りの傳手を求めて、金剛石は東京の此處彼處に、更に幾度か彷徨した。末つひに大きな牛乳店の獨り息子だといふ若者の手まで、賣却仲介を賴むだ。

大きな牛乳店の獨り息子といふ若者は、三日間といふ約束のもとに、金剛石を預りはしたものゝ、自身は素より誰に見せやうとの當もなしに、只だ其を携へてみたい空しい虛榮に掩はれて、彼は其のまゝ葭町に行き春彌の前に其を示した。さうして、日光に遊んで、一時の悅に耽つてゐた。約束の三日間は其のまゝ過ぎてしまつた。

大陸社の一人は、金剛石の行方を失つて、當然に愕き憂ひた。三日間に何の返辭も無いのみならず、四日すぎ、五日と過ぎて、其のまゝ分らぬ預り手の所在を知るのに苦しむで、果は警察の力を借りるまでに定めてしまつた。

再び蓉吉に親んでゐた忠さんは、再[illegible]東京に歸つてきた。M中尉は既に現役を退いて、全く別途の職に就いてゐた。さうして忠さんと會ひ、忠さんに大陸社の人達を紹介した。その人達は恰も金剛石の行方不明に惱むでゐた。

金剛石を大きな牛乳店の獨り息子に預けてから、五日目に預けた一人は電話を受けて、その所在を葭町の待合に求めることが能きた。日光から歸つてきた客はその待合から電話をかけて、預けた大陸社の一人を招

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き、まさしく金剛石を返却した。

漸く金剛石を携へて歸つてきた其の人は、安心しながらM中尉に次のやうな事を言つた。

『是は己の失策だ。失策はしたが己は不思議なことを見てきた。待合で獨り息子の坐つてゐる傍に、二人の藝者が坐つてゐた。その年をとつた方の一人の顔に、己は見覺えが有る。それだけならば不思議ではない。所があのNS旅館で、大野さんの所に往つたときに、大野さんが「大陸社綱領」が一部足りなく成つたと、抽斗の中を探してゐた。その時に己も一所に探したが、抽斗の奥に其の藝者の寫眞が有つた。確かに其の藝者の寫眞があつた。不思議ぢやないか』と、言ふのであつた。

M中尉は考へた。考へて判らぬときに彼は譯もなく憤激した。さうして、其の待合の名と在所を聞きたゞして直ぐに葭町に行つてみた。

春彌はM中尉の前に、やがて現はれた。「大野さん」と名を言はれて尋ねられても、春彌には一向覺えがなかつた。然し、M中尉が忠さんの本名を言つて、春彌に聞きたゞした時に、春彌の瞳は俄かに美しい力を添へて、

『僕は忠さんの親友で、今日も會つてきた』と、またM中尉が言つた時に、春彌の顔は光るまでに紅く熱つて、著しく亢奮した胸さきに、强い息を沈めながら、春彌はM中尉を暫く凝視してゐた。さうして、將軍に呼ばれてゐた半玉の時分の物語りから、入院して復た相模家に歸つてきた時までの、一切を、M中尉に打明けた。それには春彌が稼ぎを離れて、女性の眞面目を露はした懷舊の思が餘程强く含まれてゐた。

『會ひたいか』

『――』

『よろしい』M中尉は大野さんの昔に、さうした情の物語が綴られてゐるのに興を覺えながら、春彌に忠さん――大野さんのゐるNS旅館と其名とを敎へてやつた。それはM中尉にとつて、興懷一時に盡きないものがあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲

忠さんと春彌とは、即ち相會ふて昔を舒べた。さうして、大野さんの外出は繁く且つ不規則になつた。それでも二月の下旬には、大野さんは三度蒙古の第二の故郷に歸つて往つた。

　M中尉の所には、春彌から折々に電話が掛かつてきた。

「手紙は來ませんの」

「來ない。彼は筆不精で有名だから」

「でも來たら知らせて頂戴な、きつと」

「よろしい」

　三月の中旬であつた。春彌は復たM中尉に電話をかけた。

「手紙は」

「來ない」

「私も行かうか知らと思つてる所なの」

「何處へ」

「忠さんの所に」

「妙な事を言ひ給ふな」

「でも、其の困つたことに成つちまつたから」

「何うした」

「一寸來て下さらない」

「行かう」

　春彌は大野さんと再會した後に、實父母に稼業を廢めたいと主張し始めた。父は容易に承諾した。母は悉く不贊成を强く唱へた。父と母とは激しく相爭つた末に、その夜母は何處かに逃亡してしまつた。四日經つても未だ歸つて來ない。泊りに行く親戚も有るのでなく、また然うした友達の有るといふのでもなかつた。金も持つて行つてゐない。相模家にも來なかつた。

「無分別なことをしなければ好いがなんて、父までが然う言ふんでせう。困つちまうわ」と、春彌は萎れてM中尉に縋りつくやうに言つた。

「警察に屆けやうかつて言ふんですけど、外聞が惡いからつて私が止めてゐるんですの、何だかお母さんに悟られたらしいのよ。忠さんと撮つた寫眞を、家の手

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

筐の中に入れて置いたのを。鍵はちやんとかけて置いたのですがね、きつと然うだわ」

「警察に屆けて行つたつて、中々分るもんか。二三日うちには歸つてくるのに定まつてる。君が脅かされたのだ」

「でせうか。でも餘りだわ」

「君は止めて何うしやうと言ふのだ」

「蒙古の話を聞いて、急に行きたくなつたのよ。忠さんを輔けに行くわ」

「君に輔けられるやうな忠君でもなし、愚なことを言ひ給ふな」

「でも寂しいつて言つてたことよ。女だつて、きつと仕事が有るに違ひないから、行きさへすれば好いわ。それに夢を見たの」

「どんな夢を」

「忠さんが變な辯護士さんが着るやうな服を着てゐるの、私の枕もとに立つてゐて、私を瞰下してゐるんですよ。「來てくれ、文ちやん、來てくれ」つて、はつきり言ふぢやありませんか。そのまゝ私は眠つてゐるんですけれども、朝眼が覺めてから、きつと思出すのよ。不思議ぢやないこと」

「何でもない。夢なんか」

「四日續けて見たんですよ。貴方、今夜寢れば五度だわ」

「五度見ると思ふから、今夜も見るんだ。君が行つたら忠君が困るばかりだ。日光に行くのとは違ふから」

「さうか知ら。をかしいわね」

「君がをかしいのだ。下らないから止し給へ」

斯うした話の後に、M中尉は自分の勤めてゐる會社に歸つてきた。そこに大陸社の一人が尋ねてきた。

忠さんが張家口の北の、烏蘭呼都克と謂ふ部落で、腸窒扶斯の爲に、餘程の重態であるとの報が、張家口に居る一人から打電されてきたと言ふのであつた。

「重態といふだけか」

「然うだ。歸るにも歸れまいと想ふ」

「死ぬといふ感じは起らないね」

「皆然う言つてゐる。今死むでは惜しい」

二人は忠さんに就いて話しあつた。M中尉は今聞いてきた春彌の夢の話を思つた。

▲

大陸社は其の翌々日に、ある動機から餘儀なくされて、悉く解散した。

忠さんは容態好しとの電報が最近に來た。

春彌は忠さんの病氣を知らずに、やはりM中尉に「手紙は來てゐないの」を、電話で繰りかへしてゐる。其母は六日目に歸つてきた。春彌の父の月給を持つて行つたことを、春彌は知らないでゐたのであつた。夢はあれきり見なくなつた。然し蒙古には行きたいと言つてゐる。

金剛石は未だ賣れないでゐるといふ。

支那は大流血を必要とす

澁川玄耳

南宋が厓山に覆沒せずして尙ほ百年續いたとて、鄭成功が幸に明朝の中興を爲し遂げたりとて、支那の人民が幸福で有つたらうとは思はれない。專制政治、威壓政治は概ね百年ならずして情實纏綿、先例尊重、華奢淫靡、賄賂公行、便佞文弱といふ樣な弊風が積つて來る。百の文天祥が起つても其以上の大小秦檜が上下に充滿してゐるから到底挽回の事業は出來ぬものである。

□誰にも治らぬ支那の現狀

支那の何時の歷史を見ても同じ樣な腐敗を繰り返して革命が起つてゐる。大戰爭を經ない陰險な又は妥協

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的な禪受に依つた易姓は長持ちがせぬ。是非とも根本的に政治の機關を改造し官吏の種換へをして新規蒔直しをしたので無ければ、前代の積弊が根絕しない。今の袁世凱の政府の如きは首のすげ換へをした計で、大體に於て淸朝の政治を襲蹈してゐるに過ぎない、官場の弊風は依然としてゐる、人心が格別新に爲つてゐない、唯姓氏を異にし年齡を少うしたといふのみで新に登用された官吏の根性もやはり腐敗してゐる、命は惜しい金が欲しいの化け物揃ひである。此度の叛亂が鎭壓されたとて、袁世凱が到底太平の治を致し得る望は無い。袁世凱で無くて誰を總統又は帝王にしても同じ事であらう。

□人心一新積弊一掃の特效劑

是非共支那は大變亂を一度經なければ駄目である。澤山の血を流すこと其の事が何も必要といふのでは無い、人口の減少を望むのでも無い。前記の積弊を一掃しなければ、官民ともに氣分が新たに爲ならぬのに、人心に最も强い感動を與ふるものは戰爭であるからである。生命と財產に對して最も痛切な影響を及ぼすものは、此より外に無い。又た人材を最も早く淘り出すものも亦戰爭である、戰場に立つたときほど人間の眞摯な嚴肅な氣分は無い、だから眞摯な嚴肅の氣分の修養場は銃彈砲火の下に在るのである。慘酷放縱といふ樣な惡德も亦戰場に於て養はれ易いものでは有るが、今の支那に限らず太平的頹廢の氣分を一洗するにはやはり戰爭が一番利目のある劑藥である。

□英雄を養成するは戰場

戰爭に依つて人物が鍊ひ上げられ、選り出されることは何處の歷史にも證明がある。

今の支那戰爭でもいくらか死傷がある、いくらか命懸けといふ氣分にならねばならぬ、卽ちいくらかづゝでも場數を踏むうちに段々眞面目な性格が養成されて來る。數多い中には立派に出來上る人物も有らう。立派な人ならば澤山でなくとも宜い、一人でも豪傑の士

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は天下を動かすことが出來る、特に古來英雄崇拜の支那人だから眞豪傑が現はれたらば案外容易に驚天動地の偉業も樹てられる。

戰場は文明の高度な國でも困苦缺乏を免れない。少くとも平時の生活よりも苦艱が多い、苦艱に慣れて此に堪へる經驗といふ者はなか〳〵尊いものだ。德川家康が誡めにも、不自由な時には戰場の事を想出せといふ樣な意味の言がある。菜がまづいだの、蒲團が薄いだの、不足を言ひ贅澤が出るとき、戰場の困苦を憶ひ合せたならば、これも結構あれも滿足と思ひなほすことが出來るに違ひない。太平の世に慣れた人間が役に立たぬのは此の困苦缺乏の經驗が無いのも一原因である。

戰爭は我慢である、我慢の强い奴が五分々々の時には無論、ずつと不利な時でも尚押通して最後の勝を獲るのである。戰場生活で此の鍛錬を得ておくことは平時に益することが多い。

戰爭から得る其の他の利益は幾何もある、服從、規律、短簡、明瞭、一致運動、果斷、決行、應用力の發達など、皆太平懦弱の弊風を救ふの良劑である。特に支那の現代社會病に對する特効藥である。

第一、第二、革命戰は無論、此度の第三革命戰爭に於ても、まだ双方共本氣の戰爭をやつてゐない。もつと劇しく全軍全滅的の戰爭を繰返さなければ人物養成は出來ない、隨つて英雄出現も覺束ない。支那の風氣を一新せしめるには、慘酷ながら數年に亘る大流血を望まねばならぬのである。

支那領土保全の點から考へれば、內亂の長びくことは不利益である、列强との交涉事件が頻發して或は邊疆の蠶食を受け利權の强要に遭ふかも知れないけれども、人心の一新政治の根本的改革が出來れば、將來に向つて支那民族の健全なる發達が望まれる。寧ろ今のだゞ廣いよろけ家よりも小ぢんまりとした改築家屋の方が遙かに幸福であらう。

□歷史的考察を過重す可らず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

支那民族の特性といふものに付いて、歴史を重視した見解がいろ〳〵有るやうだけれども、四圍の事情が異つて來た今日に、從來の歴史的考察は餘程其證據力を減殺せられなければなるまい。日本の忠孝道德の如き萬國に超越したる固有の民族的特性なりと誇說する者がある。吾人も固り之を讃美し、今後も永久に助長して行きたいものだと熱望するのであるが、平安朝以來僅か千年許りの歷史を回顧した所でも餘り威張られぬ事例も乏しくない、固有の民族的特性と誇稱するには少々證據不十分の感も起るのである。或は足利末期の戰亂を經て鍛錬せられ德川時代に修飾せられたもので無いかとも思はれる點がある。政治腐敗の例なども朝鮮支那にヒケを取らぬ時代が日本にも屢々有る、日本民族ばかりが常に忠孝兩全淸廉潔白、勇敢義烈の特性を維持してゐるとは自惚れにくい樣である。現代に於ても隨分外國に對して愧づかしい、後代に遺したくない公私の腐敗事實が頻出するでは無いか。

□支那人を輕侮すべからず

我々は妄りに自尊してはならぬ、自尊と驕慢とは他人の眼には區別し難い類似色を有してゐる。驕慢の惡德にして且つ墮落性を帶びてゐるは申す迄も無いことである。日本人は近年一般に支那人を輕侮するけれども、此の支那人は二千年來我等の祖先に尊敬せられて來た者である。祖先の記した書の中に我々が今日見れば削つてしまひたい樣な支那崇拜の文句も少くないのである。我々が此の一千年間に屢々經過したるが如き變遷、特に最近五六十年に於けるが如き大變遷に、支那人も亦遭遇し無いとは斷言出來まい。

支那人を輕侮して、我々の價値を高めはしない。否な決して輕侮す可らざる者として彼に處するの道を今日に於て講ぜねばならぬのだと思ふ。

支那人が日本人に親まずして反つて歐米人に親むの傾向あるは爭ふ可らざる事實である。此に憤慨して支那人を攻撃する人も有る樣だが、公平に考へれば其は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

當然の事である。支那人が因襲的に日本人を優等視せざるべき歷史がある。支那人に精神的物質的の利益を與へる現在の事業を日本人は歐米人より少なく有つてゐる。支那在留の日本人は歐米人より遙かに多數であるけれども其の富力智力及び人格に於て歐米人より平均點が劣等である。日本人は一見したる外貌に於て歐米人より、又た支那人よりも貧弱である。之に加ふるに日本人は常に支那人を罵倒し機會さへ有れば何か振上げやうとする者なるかの如き威を支那人に懐かしめる様な下手な仕草が、官民共に有るのである。此で以て支那人に好かれやうとは日本人の註文がそもく無望ではあるまいか。

日本の對支那政策は唯二つある。是より心を入れかへて向後支那人に好かれる様な親切な優しい仕向けをするか、左も無ければ先方が好き嫌ひに頓着なく此方の意思に從はせる高壓手段を採るかである。主義が一定して有效なる手段が實行されさへすれば、結果は孰でも同じである。其の難易はと言へば支那の歷史では儒家の德化より法家の駕御が政治上有力で有つたことを證明する。

□萬里の長城の一端を見て

山海關の上に角山といふ山がある、此の頂上に登つて臨めば南は渺々たる波、地圖でこそ渤海といふ一灣であるけれども、際涯なき水は天に接するのである。萬里の長城は此の海の渚より起つて二丈三丈と地形に從つて高低一ならねども、那處たりとも兵馬の踰ゆることを許さぬ壘壁である、處々にアーチを作つて纔かに通路が設けられてある。山海關といふのは其の最初の萬里の長城の東端に於ける最初の關門である。東京の各見附の、もつと複雜に屈曲した構造を有してゐる。城門に向つて突擊すれば其の廣場ですら一個中隊以上の兵を運動せしむべき餘地は無い、アーチの內は纔に車が行き違ふだけの幅で高さも騎兵が槍を立てゝ過ぎられる位である。アーチの上に二層樓が建てられ、額に天下第一關と題してある、壘壁の上は馬を駢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べて馳せられる。全體が石と煉瓦で、銃砲戰に非る限り到底近き迫る可らざる一切の構造が完備されてある。而かも此の城が賴みになつた例が無い。萬里の長城は秦の始皇が築いたと謂はれてゐる。（實は其前より部分々々に築城された處もあつたのである）其の始皇が天下を統一して僅かに十五年にして秦は滅びて了つた。其後歷代長城の固めは堅くされた、併しながら平時に於て交通を妨げるの外まさかの役には立たなかつた。石と瓦は軟化もせず頑然として聳えてゐたけれども、每時內應者の手に依つて城門が開かれたのである。

□形式を以て脅かす支那

山海關は神戶の樣な地形である。蒙古の高原が漸く降つて渤海に盡きる所の傾斜面に在る、岩がちの瘦せた土地に楡柳の類が僅かに生えた海岸一帶、其の北は屛風を立てた樣に峩々たる巖山が聳えてゐる。其處に海中から起つた長城が蜿蜒として此の荒野を橫り直に山に登り峯を越え北に走つて迢に雲に入る。角山の頂に登つて、此の雄大な景を望んで予は支那人はエライと思つた。併し又長城が其目的を全うせざる點を想つては、支那は形式の國だなといふことを感じ、爾來十數年支那の事物に接すること多きに隨つてます〳〵此の感想を深うするのである。明治維新の前に至るまで我國人が兎角支那崇拜に陷つたのも其形式のエラさに脅かされたので、つまりは支那に對する精到な觀察を缺いたからである。二三十年來我國人の支那に對する感じは一變して崇拜は忽ち輕侮と爲つて了つた、此の感想も亦正鵠を失して矢張り又其形式皮相の觀察より生じたる早斷輕信ではないかと憂へられる。

□皮相の觀察多き日本人

今後、日本の政治的經濟的運命に最大關係のある舞臺が支那であるといふことは、何人も疑はれまい。外交の事は憂慮に堪へませぬとは原敬氏の口癖である。併し外交に於ける重要舞臺たる支那に關して由來政友

會は無識と嘲けられてゐる。更に今の政府者の與黨たる同志者は如何といふに是亦支那研究に關して甚だ賴もしからぬ狀態である。其の領袖たる某氏が數年前支那漫遊をして歸つた時の談話が、新聞に現はれたのを今尙ほ記憶してゐるが、想ひ出しても氣の毒な樣な皮相觀察である。其一例は斯うであつた『支那は何處に行つても日本留學生出身者が居て、自在に日本語を話して吳れるから、支那語を知らないでも旅行に不便は無い。行く先々で支那兵を護衞に附けて大に優待して吳れた。』などいふことを言つてゐたのである。經歷ある且つ未來ある此の人の旅行なれば、支那の方でも出來るだけの優待をするに極つてゐる、行く先々に出來るだけの便宜を與へる準備が整へられ、日本語を話す者の如き無論搜し求められて接伴に當らしめられてある筈である。若しも一平民の旅行であつたならば其んな準備は無い、其領袖が感じた便利は一も無いのである。日本留學の支那人で眞個に自由に日本語の操れるものは百人に一人も有るまい。其一原因は日本留學生に對する日本語敎育の不行屆から生じてゐるのであるが、原因は孰れにもあれ、支那人の日本語は極めて拙いものである。予は日本通譯を專務とする支那官吏にすら滅多に自在な日本語を聞いたことは無い、支那旅行に到る處不便を感ぜぬほど日本語が普及してゐるなどは迂濶な早斷である。其から又、旅行に兵士を附けられたのを特別優待をして吳れた樣に恐悅がるのも亦見當違ひである。或は間違が起つては面倒だから護衞兵を附け、或は旅行者の行動を監視的にも附け、或は旅行者の使役に便にする爲めにも附け、或は單にお體裁の爲めにも附けるのである。誰でも旅行免狀を携へて支那內地旅行をする者には例として若干の兵は附けられるのが普通である。兵士を附けたといふのが何も難有い優待でも何でも無い。

外國の瑣細な風俗習慣を熟知するとが、必しも外交家の大切なことでは無いから、同志會の領袖が此んな皮相觀察を爲したとて恥辱とも謂はれないけれども、隨時隨時に其誤りを正して適當なる說明を與ふべき隨

件者の缺けてゐたのでは無いかと思はれる、其ならば責任重き人の視察として甚だ不用意と言はなければならぬ。不用意は有らゆる場合に失敗の最大原因である。

外務省にも陸海軍にも學校にも民間にも平生支那研究に志して少くとも一部面々々の事情に通じた人は有る。此等の人の研究を連絡あり系統あらしむるやうに、機關を設け組織を立て、尙ほ之に加へて新たなる研究者を奬勵して、其等の總ての研究の結果を巧に利用する方法を講じたならば、當路の大官が親ら煩はしい支那研究を爲すには及ばない、高處大處より唯其の締括りさへやつて居れば、對支那政策は今日の樣なダラシ無いものにはならないのである。

□二の矢の用意なき我が當局者

今日の對支那政策は對支那で無くて對內、對議會、對人氣、對輿論、對新聞で、支那に對する一定の見當が立てゝ有つたものとは思はれ無い。少くとも第一の警告を發するには今少し確かな見當が有つたりさうに誰でも考へられる、現に同志會中の相當な人でも左樣買ひ被つて當路者の意思を敲いて見た者も有つたが、幾何敲いても空虛で何も正味は出て來ない。『あれはあれ丈のことサ』といふことに歸着したと憤慨した者が有つた。

周大使の拒絕などに至つては一層馬鹿らしい次第であつた。あれで以て大に袁をヘコマシた樣に手柄顏に吹聽したけれども、其實、此の拒絕一件は目白老公の思召に叶はなかつたといふ事を後に知つて內閣の手合が狼狽へて、俄に拒絕理由の訂正増補を講じたなどいふ喜劇の一齣も有つたのである。

『袁を排斥する』といふ根本問題が一決してゐるのなら、其れでも好い、國際の慣例に少々違つたとて管ふことは無い。どうせ國際新例製造の本場たる支那に對するのだもの、遠慮なく新手新案を應用するが可いのである。

『袁を排斥する』――袁を帝たらしめない――袁の權

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勢を失はしめる――袁を退隱せしめる」といふ順序なれば警告も亦層次的に發せられなければ趣意が立たない。差當つて帝政中止警告に附隨して、矢繼ぎ早に年號中止、封爵中止と警告を頻發しなければならなかつたと思はれる。どうせ袁の面目玉を蹈潰した以上、將來日本に好意を有つ譯は無い。袁を全く退隱せしめて了ふまで有力なる方法を取らなければならない筈では無いか。若し此のまゝにグヅ〳〵に終つて、南軍が兵器彈藥の缺乏其他の爲め敗滅するか、又は南北妥協といふ事にでも爲つたならば、日本は何の得る所なくして、將來の國交上非常の大障碍を貽すものである。考へなくても判つてゐる、南軍の熄滅以前に日本の取るべき道は。

だから、今頃に爲つて我商船が頻りに支那沿海に於て英國軍艦に臨檢せられるのだ。日本の取るべき道を英國が知つて、其の道を取らせまいといふのだ。他國の内亂の場合に如何に處すべきかといふことに就いて國際年齡の古い英國は善く心得てゐるのだから、我當局者が小田原評定をしてゐる内に英國は印度洋よりも支那海に當面の急を認めて、ユニオンジャックを以て垣を作つてしまつたのだ。

□雲南軍の呼吸口

雲南軍は長江を下るか西江を下るかの外に軍需品の供給を得る道は無い。即ち武昌に出づるか廣東に出づるかで無ければ外國との交通は出來ないのである。鐵道で佛領支那に通ずる道も有るけれども是は佛蘭西が露骨な援助を南軍に與へなければならぬからチトむづかしいのみならず、佛國以外との交通が困難である。やはり直接に江岸又は海港に達しなければ諸外國から直接に且つ迅速に豐富なる軍需品供給を受けることが出來ない。漢口迄には上海より三四日以上の困難なる溯江を要する、最も便利なのは廣東地方と限定されて來る。廣東省中で最も運輸の便なるは其の首府即ち廣州で、此處より西江の水は廣東廣西兩省を貫通して雲南に達し大部分は小汽船さへ通ずるのである。廣州は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

南雲軍に取つて最も望ましい地である。併し其入り口たる珠江灣の口には例の英國の東洋の眼と見張つてゐる香港が聳えてゐる。ユニオンヂャックが袁世凱を庇保する間は、雲南軍が廣州を占領しても此の灣口を過ぎて雲南軍の御用を勤むる船の進入することは容易でない。況んや雲南軍が廣州まで下るには約二千支那里の行軍を要し、其間に兩廣數個師團の成規兵を擊破又は懷柔しなければならぬのである。

□南北の決勝點は寧ろ山東

雲南軍が江岸又は海口に出でるのは斯樣に困難であるけれども、其處が支那の事で、日本人の机上の算用以外に如何なる變化を見るかは測られない。若しも山東省內、津浦鐵道線に近く反袁軍が旗揚げをして相應の勢力を得ることにでも爲れば南北の形勢は一變する。山東、河南、安徽三省の交界地區を中心とした勢力で有つたならば、津浦、京漢兩幹線ともに脅かされて南北の交通は絕たれて了ふ。袁世凱の派遣軍は立往生か潰散の外は無くなるのである、此の數日の電報に曹州地方（山東省西南部）に叛亂が起つた、東部の萊州方面にも匪賊が橫行してゐる、中間の濟南府に在る靳將軍は腹背敵を受けて狼狽の狀ありといふ。曹州地方は山東省中でも特に人氣の暴い所である、所謂慓悍の本場である。南北中斷の作戰には形勝の地である。濟南に在る山東將軍部下の一個旅團は主として曹州地方の壯丁である。其南に接して徐州には張勳が蟠居してゐる。若しも彼等が呼應した日に爲ると山東は勿論江南數省は一週日を俟たずして風靡するであらう。雲南軍が一兵に衂らずして長江に桴すといふことも亦有り得べからざる事では無い。

□關鍵は日本の手裏に在り

山東の形勢如何は今日に於て南北の勝敗を決するものである。泰山の西麓百里は治亂の祕關である、而して此の祕關に入つて其の鍵を最も確實に握り得べき者は我日本である。且つ最も容易に此に達し得べき捷徑

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は我が山東鐵道である。

袁政府に對する警告を氣まぐれとせずんば、其の趣旨を貫くに今後如何なる態度を取るべきかは自ら明かである。而して日獨戰役の效果も最も有力に發揮するは山東鐵道の活用である。幸に該鐵道の咽喉は我が占領する青島である。漢口、上海、廣州よりも芝罘天津よりも我との交通に於て最も利便の事情多き此の青島に出つて、今我が現に爲し得べき所を爲さずば、好機は我を俟たずに過ぎて了つて、百載の後我等の子孫が之を憾むことは恰も、今日の我々が德川初期の外航禁止令を憾んで、南洋地圖に咜嘆するが如きものであらう。

病中鑑定の題目に筆を執ること能はず、二三の雜稿を以て責を塞ぐ。三月十五日

漂泊の男・流轉の女

松崎天民

「漂泊の男・流轉の女」と云ふ題で、私一家の人生探訪を書かうと思ひ立つたのは、去年二月のことであつた。それから今日まで滿一年の間に、氣の毒な男や哀れな女の姓名は、私の手帳に數多く記入された。私は今その中から、數名の男女を拔いて、其の個々の上に潛む運命の經過を、私讀者の前に報告しようと思ふ。例に依つて、私の生活日記が其の背景になつたり、或は其の本雜萃になつたりして居る點は、改めてお斷りする迄もあるまい。 ―二月十四日夜より十五日曉―

其の夜の氣持

瀧田樗蔭兄足下 ――漂泊の男とは、何人であらう。他人の身の上を、書く迄も無い。僕自らが、今や漂泊の男に爲らうとして居るではないか。――

○

僕はまた今日から、浪人にならうと覺悟した。此の決心はたつた今、二月十四日午後八時に、少しの動搖も不安もなく、僕の念頭に浮び上つた事實である。

「そんな短氣な事は、およしなさいよ」

と、女房は頭から相談相手にならない。男子の去就進退と云へば、少しく大袈裟に聞えるけれど、僕は兎に角、東京毎夕新聞記者たる事を、明日から御免蒙る事に極めた。斯うした場合に、山の神たる女房のイエスとノーに、僕は何等のオーソリーチーを認めたくない。僕は僕自身の思ふ通りに振舞ひ得れば、それを何よりの幸福としなければならない。

僕が東京毎夕新聞に、客員の樣な立場で入社したのは、去年五月十六日の事であつた。東京朝日新聞を辭退して、「筆硯勞働」に從事して居た時、「毎夕は何うです、働き榮えがあるかも知れませんよ」と云つたのは、實に足下その人であつた。僕も多少は、色氣を有つて居たけれど、「東京朝日から毎夕へ」は、餘りに急轉直下し過ぎると思つて、幾度か躊躇や逡巡した。「今更、毎夕へ入る位ならば、何も朝日を辭めなくても宜かつたに……」そんな氣持が、兎もすれば威張りたがらうとする、僕の感情を討めたものであつた。

けれども、新聞社の空氣から離れた淋しい心を慰めるためにも、また眞に充實した生活を送るためにも、やはり新聞記者として立つ方が、僕には最も便利な方法であつた。それに半年以上の浪人生活で、少しは驕慢な心に鞭つて居たので、僕は親友たる國民新聞記者渡邊利喜松君の勸入で、毎夕新聞へ入社の決心をした。當時の社會部長永代靜雄君や、編輯局長たる小野瀬不二人氏の好意に依つて、僕の名刺には、新しく「東京毎夕新聞記者」の八字が殖えた。生活費の中から家賃と

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

米代と貰代と、其の三つを得たい爲めばかりに、久しく饑ゑて居た新聞社の空氣に接觸したい爲めばかりに、僕は毎日、青山から「築地兩國行」に乘る男の一人になつた。今から思ふと、僕は其の時分から、僕が思ふ以上の大馬鹿者であつたかも知れない。

毎夕に入社すると直ぐ、僕は豫期しなかつた病氣に罹つて、病中の二十五日に、今の女房との結婚式を擧げた。浪人生活と獨身生活のために、荒み切つて居た僕の家庭にも、久し振りに世帶の匂が強く漾ふ樣になつた。けれども僕の全生活を擧げて、毎夕新聞記者として活動するには、餘りに得る處の報酬が貧弱であつた。僕は最初から、毎夕新聞記者たる立場を、餘り名譽とは思はなかつたが、新聞社の空氣に觸れて、一種の刺戟を得られる事を、何よりの快樂(たのしみ)として、毎日必ず一度は電車で通勤した。電車が日比谷を過ぎ、數寄屋橋を經て、尾張町を後に見る樣になると、僕の心は不思議に滅入る樣になつて、一種の淋しさと果敢さとを感じた。けれども、僕は努めて「蠣殼町」で降りて、「蠣殼町」で働く人の氣分に同化しようとした。持主の木村政治郎と云ふ男は、當時何かの事件で保釋出獄中とやらで、何んな經歴を有つた何んな類(たぐゐ)の人物であるやら、僕には少しも見當が付かなかつた。政友會との關係上、表面の名義だけ社長になつて居る床次竹次郎氏が、何んな程度の新聞眼を有つて居る人であるか、そんな事も最初から問題にしなかつた。僕は唯、米國式の新聞經營者として、常に尊敬して居る小野瀨不二人氏と、社會欄の編輯上に、特殊の才分を有つて居る永代靜雄君と、其の二人を相手にして、比較的愉快な月日を送らうと思つて居た。

それが入社後、足掛十ヶ月目の今夜、いよ〳〵此方から御免を蒙らうと覺悟する樣になつたのは、よくよくの事なのである。「毎夕新聞記者」たる一片の名刺よりも、「松崎天民」と云ふ名前が可愛いために、僕は毎夕を退く事に極めた。事は僕一家の恐な一斷片に過ぎないにしても、問題は新聞記者の生活問題と、新聞記者の立場を正當に理解しようとする人々の上にも及

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぶ。また同時に、新聞界の資本主と被雇人との關係が、如何なる程度であるか、其の實例の一としても、これを叙述するだけの意義と使命とがある。

僕がこんな事を書くのは、生意氣でもなく、無理でもない。僕は僕の名譽と立場を正當に保護するためにも、何の顧慮する所なく、この手紙を書いて、これを畏友たる瀧田樗蔭兄足下に送る。

○

樗蔭兄足下、毎夕に於ける僕のお目見え仕事は、「此の頃は何うお暮しですか」と題した、一種の婦人訪問記であつた。次で「自殺探訪」から「自殺物語」も書いたし、伊豆大島の探凉記事や、「私立探偵奇譚」も書いた。僕の立場は特別記者であつて、僕の仕事は特殊の續物を書くことであつた。

去年の大典前には、帝劇女優を題材とした「白く塗れる墓」を書いたし、大典には京都から伊勢、奈良へ出張した。各地を歩き廻つて、滯在一ヶ月の後、歸社して見ると、社内の空氣は何となく險惡になつて居た。社會部長の永代靜雄君や、社員中の三五人は退社して、何となく編輯局がザワ付いて居た。永代靜雄君が退社したのは、何んな原因であつたか知らぬが、新聞記者としての體面上には、毫も關係せぬ私行上に、多少の缺點があるにしても、それを詮議立して退社せねばならぬ樣に仕向けるのは、毎夕と云ふ新聞格として、如何にも滑稽な感がした。僕が「毎夕は長く居るべき社で無い」と決心したのは、恰度その頃の事であつた、唯そんな動揺があつた時に、月日を隔てずに辭退しては、一を見て二を思はぬ連中の誤解もあらうとて、暫く隱忍して今日に及んだのである。一つには朝日を辭退した經驗があるから、僕だつてさう輕々しく進退は出來ぬと云ふ、少しは自重した心持が、何處かに潜在して居たからである。

然し、新に任命される社會部長の如何に依つては、それを機會に猶豫なく、御免を蒙らうとの覺悟だけは固めて居た。社内では

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「今度は、誰が社會部長になるのだらう」
と、寄ると觸ると其の噂のみして居たが、新に赴任したのは、僕の知人で穩和な君子人の黑田湖山君であつた。僕は此の人とならば、一所に仕事が出來ると思つて、「當分の間だけ」と云ふ積で、勤續する事に極めた。それまで別にあつた外交部長を廢して、黑田君が一人で切廻す事になつたので、仕事の段取は巧く行く樣であつた。久しく怠けて居た僕は、救世軍の矢吹少佐に逢つて、二三の材料を貰ひ、「流轉の女」と題する短い續物を書いた。腹黑い連中が見たら、救世軍の提灯持だと云ふほどに、僕は婦人ホームの眞面目な事業と、其所に收容された女の半生を、遠慮會釋なく書いた。そして木村政治郎と云ふ人の所有する每夕新聞に、救世軍に同情した續物を掲げるのは、何だか一種の皮肉の樣に思へて、人知れず微笑したりした。

他の記者達は、他社に比較して、驚くほど安價な俸給であり、冷薄な待遇であるにも拘らず、午前八時半頃から午後四時頃まで、極めて眞面目に働く人が多かつた。けれども僕だけは、何時も正午近くに出社して、二時半か三時頃には、歸宅するのが例であつた。殊に、
「松崎君は、別なんだから」
と、僕の勤務方法に對しては、時間上の制限を度外にして居た小野瀨局長の寛容に對して、さすがの僕も多少の慚愧はあつた。每夕社そのものに對しては、更に尊敬と有難味とを有ち得ない僕も、小野瀨局長が僕を特別記者として待遇された正當の好意に對しては、衷心から知己の感を抱いて居た。木村政治郎と云ふ人の所有する每夕新聞の爲めには、進んで働く氣分にはなれなかつた僕も、小野瀨不二人氏が主宰する每夕新聞のためならば、分に應じただけの働きは、爲ねばならぬと考へて居た。思ふに、每夕新聞四十の編輯局員中、僅に三五人を退いた大部分は、それと明ら樣には云はぬけれど、みな僕と同じ樣な考へを抱いて、働いて居る人達ばかりであらう。

然し、好い機會さへあれば、成るべく早く每夕新聞を辭退しようとした僕の決意は、依然として今日まで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

繼續して居た。僕が斯うした覺悟を有つて居ながら、今日まで退社し得なかつたのは、正直に云ふと、他に好い事も無いのに辭退すると、直に若干かの定時收入を失つて、生活上に一小打撃を被らねばならぬ事を氣遣うたのが、其の第一の理由であつた。また小野瀨不二人氏の知遇に對して、何一つ酬ゆる所なくして退社するのは、餘に自分勝手であると思つたのが、其の第二の理由であつた。社を辭退するにしても、何か花々しい一仕事をして、それから御免を蒙らうと云ふのが、近頃の僕の心組であつた。

然るに機會は僕の方から造らずとも、持主の木村から投げかけられて來た。それは僕が毎夕に於ける最後の仕事として、此の月の上旬から揭げ初めた「淺草界隈」の記事に就て、木村から故障が出たと云ふ事なのである。僕は其の事を今日の午後三時頃、黑田湖山君から電話で聽いた刹那に、

「いよ／＼退社する時が來たな」

と考へた。同時に僕の胸は激しく鼓動して、

「人を馬鹿にしてやがる……。毎夕新聞記者の地位よりは、松崎天民の名の方が惜しいぞ」

と云ふ強い反感が、ムラ／＼と起つた。

○

楞陰兄足下、餘に馬鹿／＼しくて、お話にならないけれど、暫く忍んで聽いて貰ひたい。

東京朝日に居て、「銀座界隈」を書いた時から、僕の仕事として考へて居たのは、「淺草界隈」の觀察記であつた。僕はそれを毎夕に於ける最後の仕事として、遲くても此の月の下旬か來月の中旬には、御免を蒙る腹であつた。其の事は社中の二三氏にだけ、それとなく打明けて置いたし、先日、足下が僕の宅に來られた時にも、何より先に、

「毎夕新聞は、長く居る社ではありません。近い間に御免を蒙らうと思つて居ます」

と云つた通りである。毎夕新聞を辭して何うするか、僕には豫定の段取があるけれど、それは僕一人の目論見であつて、實現する迄には、未だ多少の月日を要す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る事と思つて居る。

それは何うでも宜いとして、僕が黑田湖山君に向つて、「淺草界隈」を書いては何うかと發議したのは、一月三十日の事であつた。

「それには少く見積つても、二三十圓の雜費は入要であるが、見ようと書きように依つては、面白い續物が出來るかも知れない。僕も長らく怠けて居て、何だか相濟まぬ樣な氣持がするから、一つ「淺草界隈」で以て、思ふ存分に活躍して見たい」

僕が斯う云ふと、黑田君は一も二もなく贊同して、早速く小野瀨局長の同意を經た後、費用の內として十圓を受取つた。そして社の注文は、「成るべく突込だ事實を書いてくれ」と云ふ事であつたが、僕は唯々諾々としながらも、世間にはさう突込だ事實が、澤山に轉んで居るものではないと思つた。幸ひに淺草通を以て任ずる某社の某君(其の迷惑を氣遣つて、特に某君とのみして置く)が、僕個人に對する好意の上から、探訪上の便宜を與へてくれる事になつたので、僕は二月一日から淺草觀音堂附近に出沒して、訪問と瞥見と觀察とに從事した。光明方面の輕い興味中心の記述と、暗黑方面の驚異すべき叙述とを、每日交互に揭載しながら、漸次に突込で行かうと云ふのが、僕の豫定した段取であつた。

然るに今日の午後、小野瀨局長の電話と、今夜、黑田湖山君が來訪されての話に據ると、六七回揭載した「常盤の牛鍋にも」や、「井上正夫の悲哀」や、「安價な淺草藝術」は、餘りに赤裸々な提灯持記事であると云ふので、持主の木村から故障が出たと云ふのである。

小野瀨不二人氏の電話は、

「あれで八釜しい問題が起きてね、黑田君が非常に困つて居るのさ。君が何うの斯うのと云ふのでは無いが、何うも困つてねえ。明日の正午頃、兎に角、社まで來て下さい。黑田君と三人で、相談しようではありませんか。何うか怒らない樣にね……」

と、唯それだけであつたが、今夜黑田君が來られての話に據ると、實は開いた口がふさがらない始末である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

黒田君は、熱いウーロン茶を飲み、冷たい壽司を食ひながら、一件を詳細に語り初めた。

「例の持主がね君、小野瀬君に八釜しく云ふんだとさ。今更、判り切つた淺草の事を書く必要は無いの、まるで提灯持記事だのと、お話にならない譯さ。小野瀬君は極力辯明したさうだが、云ひ出したからには聞かない男なんだからね。僕に何とか云つてくれと頼まれたけれど、僕は何とも云ひ得る自信と理由がないと云つて、斷然お斷りしたんだ。結局、小野瀬君から君に云つて、中止して貰ふ事になるさうだが、豫告などして君、六七回で中止するなんか、話にならないと思ふよ。僕は少し書き方を變へて、提灯持で無いらしい材料を並べさへすれば宜いと思ふし、さうでもしなくては、讀者に對して變ではないか。持主の先生編輯上の事には口を出さない約束だのに、依然として干渉するのでね、小野瀬君も弱つて居るよ。僕は此の前に居た時、やはり持主の態度が氣に食はなくて、御免を蒙つたんだが、今度は名義だけでも社長が床次さんだから、持主の木村からは一切干渉させぬと云ふ約束で、それで入社したんだ。それが斯んな風であつて見ると、僕も考へなくてはならぬと思つて居るのだがね‥‥實に困つたものだよ。褒めて書けば賄賂を取る事と思ふし、攻撃すれば恐喝する事と思ふのだからね、自分の黒い腹で他を忖度されては全く君、遣り切れないよ。兎にも角にも、僕は十回なり二十回なり、何とかして續けて書いて欲しいと思つて居るのだが‥‥」

僕はこれだけ聽いて、もう澤山だと思つた。そして

「なぜ、毎夕新聞なんかに入つたであらう」

と、今更の樣に、僕自身の不明を愧ぢた。

○

梧陰兄足下、明日、小野瀬局長に逢つて、直接、聽いた上でないと、木村持主が何んな腹で居るか、判らない節もあるけれど、黒田君の以上の話だけでも、僕には大抵の所が讀めた。自分の黒い心を以て、他を忖度しようとする男は、氣の毒ながら一生涯浮かむ瀬は

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるまい。僕は重ね〲、木村政治郎と云ふ男が持主として持主風を吹かせて居る每夕新聞に入つた事を、取返しの付かぬ恥辱であると思つた。

「僕には木村の心持も判つて居るし、小野瀨さんや君の立場に對しても、お氣の毒に堪へないと思つて居る。先日、淺草界隈の豫告が出た時に、小野瀨さんは笑ひながら、木村持主は君が署名して書くのを、大變厭がつて居る樣であつた。松崎天民が社に居るのは、社のためにも廣告になるからと云つて置いたが、いろ〱例の譯の判らぬ天降りがあるのでね、と笑つて居られた。要するに木村政治郎は、松崎天民を知らないのだから、そんな社に居る必要は少しも無い。實は去年の暮から、退社しようと決心はして居たんだが、何だか小野瀨さんに對して、濟まぬ樣な氣もしたし、生活上の都合もあるので、それで今日まで御免を蒙らずに居たのだ。小野瀨さんも使はれて居る番頭さんであつて見れば、突込で木村に抗辯する事は出來なからうし、あんな記事のために心配をかけては、反つて申譯がない。そこで淺草界隈の記事は、斷然書かぬ事にするから、筆者病氣に就きとか何とか、宜い加減にして置いては何うだらう。同時に僕は、社を辭退する決心で居るから、明日小野瀨さんに逢つたら、其の事も云はうと思つて居る。僕は新聞記者となつて、足掛けこゝに十七年、互に了解し合つた知人になれば、晩飯位は御馳走になるけれど、それ以上の惡い事をする樣な、そんな怪腕は有つて居ない積なんだ。僕が去年、首になつた帝劇女優の事を、白く塗れる墓と題して書いた時、冒頭に社會部長足下としたので、木村は小野瀨さんに向ひ、松崎は社會部長の永代を奉つて居るが、何うも怪しいぜなどゝ、飛でもない馬鹿な事を云つたさうだ。普通の文章を理解する頭もない樣な、木村如き者の新聞社に、今日まで居たかと思ふと、僕は僕の歷史の幾ページかを、穢された樣な氣持がする。何れ明日は社へ行つて、小野瀨さんに逢つた上で、詳しい事を聽きもし、話しもしようよ。餘り馬鹿々々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しくて、怒るにも怒れないが、随分、人を侮辱した話だからねえ」

僕は一氣に斯う云つて、黑田君の顔を見た。

「君が今日、電話の時にも、社を辭めると云つたからね、僕は今、小野瀨君の所に寄つて、其の話もして來たのだ。僕は松崎君が辭めると云ふのは、無理も無い當然の事だと云つたが、小野瀨君はまア〳〵と云つて困つた樣な顔をして居たよ。辭めるのは宜いにしても君、損をしては詰らないから、も少し知らぬ顔をして、辛抱しては何うかね。僕が此の前に辭職した時には、十二日までの給料の日割もくれないし、毎月給料の内から、二十分の一づゝ差引いた金も、拂戻してくれないのだからね。給料から差引いた積立金は、恩惠的の物ではなく、當然社から拂戻すべきものであるのに、四の五のと云つて渡さないのだもの、こんな非道　社は、恐らく日本全國にあるまいと思ふよ。だから君も、知らぬ顔をして出て居て、給料でも受取つてから、決行しては何うだね。パッと御免を蒙るのは、痛快な事は痛快だけれどもね、木村の樣な男に對しては、何の見せしめにもならないよ。それよりもブラ〳〵して社に居ながら、給料だけ取つてやる方が、反つて一種の復仇になるんだよ。床次さんだつて、社長名儀は迷惑至極に思つて居られる樣子だし、彼の社も木村があんな風では、到底、見込が無いと思ふよ。編輯だつて事務だつて、木村が無罪になつた事を、心から喜ぶ者は一人もなく、反つて有罪になつて入獄してくれた方が何んなに社のために宜いか知れないとまで、思つて居る樣だからね。何にしても君、不思議千萬な社なんだよ……」

毎夕新聞社會部長の印綬を佩びて居ても、黑田湖山君の話は、極めて公明正大である。こんな内明話を語り合つて見ても、僕の毎夕退社の決心は、依然として飜へす事が出來ない。僕は相應の自我主義者ではあるけれど、祖先の名を尊むと共に、自身の名だけは、何處までも貴んじたい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○

樗陰兄足下、僕が毎夕に書いた「淺草界隈」は、斯うして中絶する事になり、僕が毎夕に於ける記者生活は斯うして永遠に終局を告げた。明日の日から、また筆硯勞働の素浪人になるのかと思ふと、晴々とした氣持に次いで、一脈の淋しさを感ぜずには居られぬ。

然し僕は最初から、毎夕新聞記者で死なうなどとは、夢にも思うては居なかつた。少しは信用もあり勢力もある新聞社に籍を置いて、人間としての待遇を受けながら、愉快に働きたいと思うて居た。「毎夕新聞社の方には、お目にかゝりませんけれど、松崎天民さんとしてお目にかゝります」と、僕は十ヶ月の間に、三五度そんな言葉を聽いた。僕は其の度毎に、天下に知己あるを喜ぶと共に、毎夕記者たる名刺に、何等の權威も無い事を、何んなに情なく思うたか知れなかつた。そして朝日記者であつた時代の自分の幸福を、何んなに羨ましく思ひ起した事であらう。

それにしても、日本首都の新聞界に、毎夕新聞の持主の様な男が居て、僕の如き正直な社會記者に、これだけの記述を敢てせねばならぬ程の亢奮した心持を起させると云ふのは、情無い事實ではないか。「淺草界隈」の記述に、提灯持の素質が有つたにしても、それは界隈そのものを題材とする性質上、千萬止むを得ぬのでそれを否決する以上は、最初から「淺草界隈」そのものゝ掲載を、否決するのが當然であつた。淺草觀音堂附近の大現象として、活動寫眞と連鎖劇の存在して居る事を閑却して、何うして界隈の氣分を描寫する事が出來ようぞ。それに新聞の品位を是非されて居る毎夕新聞の如きは、進んで他の缺點惡事を指摘するよりも、努めて長所と善事とを傳へる方が、新聞そのものゝために、最も賢い方法である。床次社長の方針も、小野瀨局長の要意も、其の邊に存する位の事は、僕も以前から合點して居た。「淺草界隈」を書くに就いても、僕は成るべく善意と好意とを以て、總ての事件を觀察し描寫して、惹いては毎夕新聞に對して、讀者の一部が抱いて居る因襲的惡感を、多少なりとも掃除したいと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云ふのが、僕の人知れぬ要意でもあれば、また覺悟でもあつた。

けれども僕は、小野瀨不二人氏の主宰する毎夕新聞に對しては、期待された百分の一も仕事を爲し得ずして、今この手紙を書いて居る刹那より、路傍の一讀者となるのである。木村政治郎と云ふ持主には、床次竹二郞氏母堂葬儀の際に一度と、去年の暮に社からお歲暮の金包を貰つたときに一度と、僅に二回逢つたのみで、更に何の交渉も有て居なかつた。名義だけの床次社長は、一月に一度も出社した事が無いので、極端に理想主義であるらしい其の新聞觀も、遂に承ることが出來なかつた。同時に新聞社長の虛位を擁して居る官吏出の政治家から、其の新聞觀を聽き得なかつたにしても、それが何の損失であるとも思へなかつた。僕は毎夕に於ける十ヶ月間に、小野瀨不二人氏の新聞經營振りを、親しく目擊した事を、何よりの收穫とし何よりの學問として、何時までも尊重したい。

さらば善良なる毎夕新聞記者諸君、いよ〳〵壯健にして、奮鬪的生活を送り給へと、僕は衷心から斯う叫びたい。僕は今、僕の良心と僕の名譽を保つために、十ヶ月間の知遇を受けた同僚の中から、たゞ一人自ら奮つて退く一種の勇者である。竹越與三郞氏を去らしめ、澁川玄耳氏を失ひ、倉辻白蛇氏を追ひ、結城禮一郞氏を退かしめた毎夕新聞は、數ならねども又僕を取逃がした。僕一人の去就は、毎夕新聞にとつて、固より何等の痛痒を感ずべき出來事ではないが、僕自身にとつては、一種の意味淺からぬ小革命である。僕はこれを好い機會にして、また更に新しい進路を探ねばならない。此の勇氣と覺悟とは、一定の收入を失つた不安の心を償ひ得て、尙大に餘りあるではないか。

瀧田樗陰兄足下、二月十四日夜十時に書き初めて、十五日午前三時三十分までに、恰度こゝまで書いて來た。僕が今夜の斯うした氣持は、既に「漂泊の姿」を語り、「流轉の心」を現したものではないか。國々を旅したり、貧しい町を歩かなくても、「漂泊の男」と「流轉の女」とは、僕の心に宿つて居る。それにしても俊敏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なる足下は、僕の此の手紙を見て、果して何んな心持を起すであらうか、何よりも先づ、僕はそれを聽いて、更にいろんな事を考へて見たい。

○

漂泊の男とは、何人であらう。他人の身の上を、書く迄も無い。僕自らが、今や漂泊の男にならうとして居るではないか。——(大正五年二月十五日午前四時書く)

天民附記——以上の記述を終へた日の正午、僕は毎夕新聞社の樓上で、小野瀬不二人、黒田湖山の二君に會見する筈であつた。そして改めて、辭職の旨を表明する筈であつたが、徹夜して原稿を書いた爲め、其の日の午後一時頃まで快い睡眠を貪つて、何處へも外出しなかつた。以上の原稿は使者をして、中央公論社へ持せ遣り、それで僕の心は幾分か慰められた樣な、一種の輕い快感を覺えた。

翌十六日の今日は、正午までに社へ行つて、小野瀬氏に面會し、辭意を申出で樣と思つて居た處へ、午前十時過ぎ小野瀬氏が來訪された。そして「君が辭退の旨は、黒田君からも聞いたが、此の問題で辭める事だけは、何うか暫く見合せて貰ひたい」とて、いろ〳〵打明けた話があつた。僕は小野瀬氏にして、其の言ふが如く、僕を信じ僕を認められて居る以上は、何處までも持主たる木村と爭つて、「淺草界隈」の記事中止に、反對さるべきが當然であると思つた。けれども野獸性に似た自我主義者の暴君に侍へて、その抱負と手腕を、十分の一も揮ふ事が出來ない程に、極めて不快な地位に居る小野瀬氏に向つて、僕は彼是と論難するだけの勇氣が無かつた。僕は唯「一應、考へて見ませう」とのみ答へて、小野瀬氏の歸るを送り出したが、僕の辭退の決意は、小野瀬氏に逢つてからも、依然として動搖しなかつた。

僕はそれから本郷西片町に、瀧田哲太郎氏を訪ねて、僕の原稿を印刷所へ送る事は、十六日中だけ見合せて貰ふことを交渉した。僕が退社の決意は既定の事實であつても、「漂泊の男・流轉の女」の第一には、他の事實を書いても宜い位の腹はあつたのである。そして午後三時頃、久し振りに毎夕の編輯局へ顏を出して見たが、其の刹那に感じた心持は、「こんな社へは、もう來る必要がない」と云ふ事であつた。黒田湖山君に逢つて、近頃また持主が社へ出て來て、社長たる實權を振り廻して居る由を聞いて、僕はもう一刻も毎夕に居るのが厭になつた。毎夕に居ること一日長ければ長いだけ、漸く正しく順境であつた僕の十七年間の新聞記者生活史に、一種の汚點を印すものであるとさへ思つた。そこで僕は改めて、理事たる杉廣阿彌氏、政治部長たる關口氏に、退社の理由を告げて、滿九ケ月間の厚誼を謝した。社員の一二氏にも、僕が確信して署名までして書いた

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「淺草界隈」の記事を、持主たる木村が中止せしめ、小野瀨、黑田の二氏も、それを如何ともする事が出來ないのは、僕の立場を辱めた樣なものであるとて、今日限り辭退の旨を述べた。木村持主の干涉に對して、好感を有て居ない社員達は、何れも僕の立場に同情して今更の樣に持主の頑愚を憫れんで居る樣子であつた。

それに黑田君から聞けば、木村持主は「新聞記事の極意は、書かれた者に厭な不快な氣持を起させ、讀む者に面白い心持を起させるもので無くては駄目だ」と云つたとか。さうした怪からん不量見な新聞觀を抱いて居る男が、社長名義の床次竹二郎氏の蔭に隱れて、依然として編輯上に干涉して居る樣な社には、斷然一日も留まる事が出來ない。僕は自分の名譽を愛し、自分の生活を愛するために、何うしても每夕記者たることを御免蒙らねばならない。小野瀨氏の好意に酬ゆるの道は、僕が每夕にとゞまる事のみではあるまい。—

「筆硯勞働」に從事する者が、自家の立場を擁護する時に、最も正しい方法として、與へられて居る當然の權利を以て、僕は以上の經過を敍述した。僕はこれを僕に同情さるゝ中央公論十萬の讀者諸君の前に言明した後、更に新しき生活の舞臺を開かうと思ふ。—十六・日夜十時記す—

倫敦戰時日記抄

穗積重遠

私は大正元年末から大正三年初夏まで「ドイツ」國に滯在し、大正三年八月大戰勃發の際は佛國に在り、八月十七日獨軍或は「パリ」に殺到せんを思ひて英京「ロンドン」に移り、爾來大正四年十月末まで同地に逗留しそれより米國を經由して大正五年二月末歸朝した文部省外國留學生であります。

扨て私か英國から米國に渡つて少しく意外な位に感じたのは、同國に於ける對獨反感の頗る强いことでありました。勿論『血は水よりも濃く』米人が英國側に同情を有するであらうとは豫想して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居ましたが、一方米國に於ける「ドイツ」人の勢力が中々强いことは兼々聞いて居り、且近來の米人は益々物質主義成功主義に傾きつゝあるとであらうから、必ずや「ドイツ」讃美者も尠なからぬとであらう、我等も米國に渡つたら少しく口を愼まねばなるまいと考へて居た所が大違ひ、先づ第一に米國の新聞は獨字新聞を除いては殆ど全部反獨的態度、又私も米國で隨分各種の人と面談しましたが未だ嘗て「ドイツ」の暴狀を攻擊するに於て窮屈遠慮を感じたことがないのみならず、寧ろ先方が先づ口を切り而して一層の强硬論者であるのが常でありました。勿論この米國に於ける反獨感情には種々の原因があるので、「ドイツ」の隆盛强大に對する米人の恐怖心、米國に於ける軍需品製造を妨害する獨墺人の陰謀等は其の主なる近因でありませうけれども、然かも此反獨感情の根本は米人祖先傳來の正義心に在りと私は信じ、流石は「ワシントン」「リンカーン」の國よと頼もしく思つたことでありました。

所が私が日本に歸つて參りまして再び意外に感じたことは、我國に於ける反獨感情が豫想外に弱いことであります。公開の席上に於て又個人間の談話に於て私は「ドイツ」の惡口を申して頗る手厳しい反對を蒙つたこと一再ならず、新聞雜誌を讀んで我國は果して協商側なりや同盟側なりやを疑つたこともないではありません。併しこれには種々の理由事情があり、必しも無理ならぬとは思ひますが、唯だ私は義を求めて利を云はず弱を扶けて强を挫くを以て賣り出した我日本人が、我利の爲めに無辜の弱國「ベルギー」を蹂躙した夫の强暴國を憎むの念薄きを怪しむのであります。若夫れ「ドイツ」は强きが故に、「ドイツ」軍に勝色あるが故に之を讃美し之を崇拜すと云ふならば、實利主義物質主義目的主義成功主義の米國に對しても私は我が東洋の君子國を耻ぢざるを得ぬのであります

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

併しながら私は我國に於ける多少の親獨的傾向をさう云ふ意味には解したくありません。これ畢竟我國と「ドイツ」とが似て居るからであると云ひたいのであります。新興後進の國であると云ふ點が先づ以て似て居るのみならず、我國の法律制度は大部分「ドイツ」式であり、我國の學者は大部分「ドイツ」流であり、我國の留學生は主として「ドイツ」國に遊び、而して兩國民の性質が或點に於て酷似して居るのであります。似たるが故に了解し易く、了解するが故に同情もし讚美もすると云ふは寧ろ當然の順序でありませう。私は一年有半「ドイツ」にあつて其の國情民心が我國と似て居る點尠なからざるを見、其の相似たる長所は益々彼に倣つて我を磨き、其の相似たる短所は速かに彼に鑑みて我を省みねばならぬと深く感じたのでありますが、その後英國に渡つて留まること又一年有餘、其の國情民心が我國及び「ドイツ」と相似ざること甚しきを見、而して其の相似ざるが故に一層我々が英國を研究して其の長短を比較參考する必要あることを更に深く感じたのであります。

或人は宜しく英に倣ふべしと云ひ、或人は須らく獨を學ぶべしと云ひます。併し必ずしも英のみに倣ふべきにもあらず、必ずしも獨のみを學ぶべきにもあらず、長は併せ採り短は並び斥けて等しく我國に裨益すべきである、吾人は「イギリス」贔負でもなく、「ドイツ」贔負でもなく、唯々日本贔負でなくてはならぬのであります。唯だ殘る問題は似たる獨を學ぶと似ざる英に倣ふといづれが獲る所多きかであります。私は此問題を一般的に斷定するだけの勇氣を持ちませんが、自己の專門方面に於ける實驗談のみを申しませう。私は東京法科大學獨法科の出身であります。故に「ドイツ」では日獨の法制が相似て居るのと自身に多少は獨法の知識があるのとで、了解に骨が折れなかつた代りには獲る所も甚だ多くはない樣な氣がしました。然るに英國に於ては、日英の法制が根本的に異つ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て居るのと自身の英法の知識が皆無なのとで、頗る入り惡くかつた代りに少しは新たに學び得た所もある樣な氣がします。一般の國情民心に就いても或は同樣の氣味合ひがありはしますまいか。

兎も角も英國の國情、別して其の戰時の實情を我同胞に紹介するのは、必しも無益の業でないのみならず、或は此の千載一遇の時機に在英したもの丶一の責務でもありませうか。恰も中央公論社から戰時の英國に就いて何か書けとの御需めがありましたので、日記中から或は『戰時の英國』を髣髴たらしめ得やうかと思ふ部分を拔萃して數回の連載を乞ふこと丶しました。毎夜の小閑を偸んで書き附けた其日々々の雜錄隨筆、不精不備は固よりの事ながら、必しも讃美せず必しも罵倒せず目に映じ耳に聞えた有の儘を記錄した點だけを買つて戴きたいと思ひます。

戰爭中とは思へぬ賑かさ

(大正三年八月十八日)英國は「ロンドン」市「ガワ、ストリート」八十番の日本人御定宿に思ひがけなき英國留學の第一日は明けた。……あちこちと市中をあるいて樣子を見るに、戰爭中とは思へぬ賑かさ、昨日心を傷ましめた「パリ」の寂寞とは正に別天地だ。强い海軍を持つた島國は幸福なる哉。

英國人の見え坊

(八月十九日)「ガワ」八十番は到底永住の地でない故今朝は早速下宿捜しに出かける。英國人は中々見え坊で、獨佛乃至我國の樣に『貸間あり』の札をぶら下げることを好まず、又ウッカリ這入り込んで『汝は空き間を持ちなすか』など丶露骨に遣らかさうものなら、飛んだ御不興を蒙る次第故、下宿捜しには都合が惡い。

戰時の新聞

(八月二十一日)今朝の新聞で「ブラッセル」の陷落を知る。思出多きあの美しき「小パリ」が無風流なる獨逸武者の馬蹄の塵に汚さる丶こと、壽永の昔も偲ばれて人事ならず殘念だ。……此頃は毎日朝夕の新聞を讀むのが一仕事、而して當國の新聞は戰況を比較的詳細

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

公平に報道する樣だ。佛國では普佛戰爭の際「パリ」の新聞記事に依つて「モルトケ」が佛軍主力の所在を知つたとか云ふので、今度は政府の取締が餘程嚴重な樣子、尙又記者と職工と及び用紙との不足の爲め、平生八頁十頁の大新聞がたつた一枚の號外然たるものになつてしまつたが、英國では「タイムス」始め諸新聞が爭つて詳細の記事論評を載せ、且追々と戰爭專門の雜誌類が出る。昨今は我國の對獨最後通牒の評論がやかましい。必しも感謝歡迎論計りではない。火事場泥棒ではあるまいかとの猜疑が多少はあるらしい。加勢はして貰ひたし得はさせたくなしと云ふのだから蟲が好い。そこへ行くと苦しまぎれに一人でも味方が出來るのを心强く思ひ、日本兵は何時來ますかなどゝ眞面目に尋ねる佛人は可愛らしい。

勝戰祈禱

午後「ウエストミンスター、アベー」で勝戰祈禱があるとのこと故行つて見ると、御寺は既に一杯、辛うじて最後の席を占めると間もなく祈禱式が始まつた。如何に神々しき道場ぞや、圓天井の色硝子を洩るゝ「神の榮光」とも謂ひつべき光を浴び、此國の大を成したる幾十の偉人の石像に圍まれて、「苦しい時の」と笑はゞ笑へ、百千の善男善女が心の限りを神に捧げる、心なき身も襟を正し想を潔くせざらんや。大僧正の祈禱の聲、合唱團の讃美の歌、祈る人歌ふ人が見えないで、彼は天より來り此は地より湧く如く聞えるのが、何とも云へず尊い。唯だ祈禱と讃美歌との文句も調子も餘りに弱々しいのが僕には物足らぬ。降魔の劍縛妖の繩護摩の火焰炎々たる中に怨敵を調伏する佛法の勇猛精進こそ戰爭にはふさはしけれ。

實戰は遲鈍商戰は機敏

（八月二十三日）兼々聞いては居たが英國の日曜程厄介なものはない。見物場娛樂機關飮食店等大半は閉鎖、地下鐵道其他の交通機關も運轉度數を減じ、宿でも午後から下女に暇を遣るので晩飯は冷肉を食はされる始末、「犬も此日は聲高に吠へぬ」と「ワシントン、アーヴィング」も云つたとやら。さなきだに閑靜な宿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の近邊は人ッ子一人通らない。たまに通れば聖書を手にした善男善女。

併し戰爭はまさか日曜休みもしない様子、平生は新聞も大抵日曜休刊だが。此頃は「タイムス」始め二三の新聞が日曜號を發行する。『日曜に新聞が出る様な世の中』と宿の婆さんが歎息して居る。其の日曜號で見ると、今日あたりから愈々佛獨兩軍の大衝突が始まるらしい。贔負相撲の立合を見物する様に面白くもあれば心配でもある。露軍がモットドシドシ進んで吳れゝばよいのに、大男にも困つたものだと氣が揉める。それより更にもどかしいのは英國陸軍、『泥棒を見て繩』とは眞に英國の事、名將「ロバーツ」元帥の卓見を馬耳東風と聞き流して、徴兵制度を採用しなかつた報は覿面"Your king and Country need you"などゝ云ふ廣告を新聞に大書したり「サンドイッチ、メン」にかつぎ廻らせたりして、大軍の急拵へ、兎も角も勢揃ひの出來た何萬かの第一軍が佛國へ渡るとて『我軍は何等の損害なく上陸』と新聞が書き立てる時分には、其の中立擁護の爲めに出兵の筈の「ベルギー」の首府はとつくに陷落して居る。流石に「タイムス」は『我が動員は不當に遲延せり』と白狀した。其代り商戰の方には頗る機敏"War on German Trade"と號して、此機を外さず「ドイッ」の海外貿易を奪ひ取らんものと早速計畫して居る。我國も愈々始めるとか。膠州灣攻擊の方は安心だが、大骨折つて「ドイツ」の勢力を東洋から逐つ拂ひ、支那貿易の獲物は英米の鷹に取られぬ様、其方の戰爭も宜しく願ひたい。

冷靜なる英兵

(八月二十九日)午前T少佐が來訪して大に戰況を論じて行く。『餅は餅屋』で頗る要領を得た。聯合軍は次第々々に退却して居る。今朝の新聞に依れば僕が渡英の節汽車を乘替へた「アラス」は既に獨軍に占領され彼の線路は既に交通斷絶したとのこと。此様子では結局「パリ」まで押詰められるかも知れない。英軍は思つたよりも中々勇敢な様だ。勇敢と云ふよりも沈勇と云ふ方がよいかも知れぬ。日本軍の司令官は『各員努力

奮闘せよ』と云ふ信號を揚げる。佛軍では「アントウージアズム」(感奮)なる字をよく用ひる。然るに英軍の格言は常に『クールネス』(冷靜)。英人の氣質をあらはし得て妙だ。隨つて敗軍退却の際などに中々よく其特長を發揮するらしい。嘗て「ナポレオン」麾下の一佛國士官の從軍日記に斯う云ふことが書いてあつたのを讀んだ樣に記憶する。

英國兵程いやな相手はない。他の諸國の兵はこちらが其の陣地間近く突進してドット鬨の聲を揚げると向うでも聲を合はせて立ち向つて哭れる故、一層勢が附いて突つ込みよい。然るに英兵はこちらがワーッと叫んでもだまりこくつて折敷の構をして居る故張合拔けがして突込みにくいこと甚しい。

成程どうやらさうありさうなことだ。否個人々々の英兵のみならず、英國其ものが今度の戰爭にも恐らく『默々として折敷の構』の態度に出ではしまいか。隨つて「ドイツ」に取つて最も『いやな相手』は矢張り英國ではあるまいか。

英國は流石に紳士的

(九月三日) 露都が「ペーターースブルグ」と云ふのは「ドイツ」名前だとて「ペトログラード」と改名した。此間「ベルリン」から來た人々に、同地第一の大カフエー「ピカデリー、カフエー」が「ピカデリー」は「ロンドン」の町名「カフエー」は佛語だとて「ファーターランド、カフエーハウス」と改名したと云ふことを聞いて笑つたが、西洋人も存外小供らしい。存外小供らしい位は結構だが、存外野蠻なのには呆れる。「ドイツ」人の亂暴狼藉は言語道斷だが、佛國でも露國でも、開戰早々「ドイツ」人を袋叩きにしたり「ドイツ」商店をぶちこわしたりで、「ドイツ」人は到底安んじて住居は出來まい。其處へ行くと英國は流石に紳士的だ。料理屋カフエー等のウエーター、床屋の職人等には「ドイツ」人が中々多いが、兎に角其儘働いて居る。「ドイツ」の商店も大抵開店して居る。今日の「デーリー、テレグラフ」新聞に、戰は國と國との爭で個人間の爭でないと云ふことを辯別する點に於て、日本人は歐米人に勝つて居る、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本人程敵國の捕虜を優待する國民はあるまいと云ふ樣な意味を書いて居た。

募兵演說

(九月四日)……活動寫眞で見ても英國水兵は如何にも賴もしく思はれるが、鳥打帽脊廣服で調練をして居る新募の陸兵はどうも安心がならない。獨軍愈々「パリ」城下に迫る騷ぎとなつたので、流石神經遲鈍の英國も愈々事態重大に心附き、今日から首相「アスキス」を始め諸名士が手分けして義勇軍應募奬勵の公開演說を始めることになつた。斯くして兵卒は多少集まるであらう。併し困るのは士官だ。今日の「タイムス」も此點を論じて歎息して曰く、

We have no one to thank but ourselves for remaining an unarmed people amongst nations in arms.

「ウイリアム平和王」

(九月五日) 愈々「パリ」を防禦線の一部としての戰鬪が始まるらしい。僕等が日曜の遠足地であつた「シヤンチイイー」などは既に獨軍の馬蹄に蹂躙され、S君とボートを漕いだ「マルン」河が天下分目の戰線になつて居る樣子だ。土地を知つて居るだけに別して感慨が深い。佛國は實に今や所謂危急存亡の秋だ。それから思ふと英國は誠に天下泰平、うつかりして居ると戰爭騷ぎなどは忘れてしまいさうだが、併し如何にのんきな英國でも、此の大戰爭の爲めに差當り種々の不便困難を蒙りつゝあることは云ふまでもない。然るに世の中の事必しも惡いこと許りはないもので、英國が此戰爭の御蔭で一息ついて居ることが二つある。一つは今にも內亂が勃發しさうであつた「アルスター」の「アイルランド」自治問題騷ぎが中止になつたこと、今一つは流石の「サフラジエット」女壯士連もピツタリ亂暴を見合せたこと。これ偏に「カイザー」樣の御蔭であると云ふので、或人、尊號を奉つて曰く、「ウイリアム平和王」(Willian The Peace-Maker)。「アイルランド」の「ホーム、ルール」騷ぎは、或は「カイザー」をして英國必ず起たずとの算盤を彈かしめた一原因かも知れない。果して然らば「兄弟墻に鬩げども」と云ふ東洋の諺を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御存知なかつたからの桁違ひ、戰爭開始と共に「アルスター」黨は戰爭中内輪喧嘩の休戰を約し、今にも政府に弓を彈きさうであつた「アルスター」の義勇軍は、丁度幸の出來合ひ故、尙ほ大に勇士を募つて一大隊なり一聯隊なりに纒めた上、同黨首領「カーソン」が最近の演說に所謂『今や一黨の leader にあらずして全國民の leader たる政府』の旗下に馳せ參じやうと云ふ勢、政府諸公定めてホツト一息つかれたことであらう。

一方婦人選擧權騷ぎの方でも、大將「パンクハースト」女史が近日愛國演說を遣ると云ふ景氣で、「アスキス」宰相も當分女難の御心配がなさゝうだが、此の女壯士騷ぎの中止に關聯して面白い現象がある。宿の主婦余に告げて曰く、『あなたはいゝ時に御出になつた、丁度戰爭中なので美術館が開いて居ます』、甚だ矛盾な申し分だが實際其通り。「ヴエラスケス」の名畫『對鏡のヴイーナス』が女壯士の兇刄に罹つて以來閉鎖して居た「ナシヨナル、ガレリー」始め諸美術館が、これなら大丈夫だらうと云ふので先日來開館したのだ。但し僕は實は「ターナー」の風景畫「ランドシア」の動物畫「ローレンス」の人物畫等の英國名畫よりは、寧ろ女豪連の活動振りが拜見したかつたことゝて聊か失望。

水晶宮裡の人

（九月十六日）午後からフト思ひ立つてI君と共に兼々噂に聞いた水晶宮（クリスタルパレース）を見物に行く。同所は海軍新募兵の屯營になつた爲め閉鎖されたと聞いた所、今日の新聞に "opened as usual" と云ふ廣告が出て居た故それでは屯營云々は虛報であつたか、兎に角有名なもの故又もや御意の變らぬ中に見て置かうと云ふので出かけたのだ。

この「クリスタル、パレース」なるものは一八五四年即ち丁度六十年前に出來たもの、「ヴイクトリア」女王の婿君「アルバート」親王が鐵骨硝子張の大建築を造つたら面白からうと云ひ出したのが始まりで、出來る出來ぬの議論の末とゞ本物になつたのゝ由。「クイーン」と「プリンス、コンソート」とが手を組んで得意氣に場内を御巡遊の畫を何かで見たことがある。成程水晶宮

の名に背かぬ總硝子張の宏大な建物で、六十年前の仕事としては實に驚くべきものだ。入場料一「シリング」づゝ拂つて、中へはいつて見ると驚いた。海軍新兵の屯營になつて居ると云ふのも本當ならば、"opened"と云ふのも本當で、唯だ"as usual"と云ふのだけが虚であつた。平生ならば場内及び庭園に樣々の展覽會や興行物があつて頗る奧山式を發揮して居るのださうだが、今日はヒッソリガランとして空屋(アキヤ)の氣分が漂つて居る。併し人が居ないのではない。國家干城の卵がウジヤ〳〵居る。「ハイド、パーク」の芝原にゴロ〳〵して居さうな手合が、アッチに一とかたまりコッチに一とかたまり、床にすわり込んでボンヤリして居るのがそれだ。向うの隅では古着屋然と水兵服を山と積んだ前でてん〳〵に裸になつて御召替へ最中、卵が雛子(ヒヨコ)に孵る所だ。庭に出て見ると此の雛子連がアッチにもコッチにも二三十人づゝ一隊となつて「レフト、ライト、レフト、ライト」と調練して居る。これ即ち純然たる兵營だ。「ドイツ」か日本ならばウッカリ門外に近寄つても「コラッ」と喰ひさうな所を、然かも戰時に相變らずの入場料を取つて見物人を入れて居る。扨々英國と云ふ所は氣の知れぬ所だ。

英國が徴兵制度を採つて居なかつた爲めに此際大に面食ひ、廣告やら演説やらで泥繩式に兵を募つて居ることは前にも書いた。應募者頗る多く以て我國民の愛國心を知るに足る。must go の兵と will go の兵といづれか强きと英國人は自慢する。夫れ然り豈夫れ然らんやだ。「ロンドン」は無職の浮浪民か「ハイド、パーク」を始め諸公園の草原にゴロ〳〵して居るので有名だ。戰爭でも始まれば尙更それが殖える筈。然るに昨今それが目立つて減つたと云ふ。どこへ行つたのか『氏無くして玉の輿』ではないが水晶宮裡の人となつて居るのだ。勿論大勢の中には佐野常世もあらう、併し大部分は一谷嫩軍記の『太五平』らしい。腹がへれば監獄入を志願する奴さへある。況んやこれは頗る體裁よき商賣、食はせて呉れ著せて呉れ、宿の心配もいらず其上充分の給料が取れる、妻子があれば、『別離手當』(Separation allowance)まで渡り、死ぬ者貧乏で戰死は拙らぬ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、捕虜になれば向うで養つて呉れるし、負傷すれば美人が看護して呉れる、もし武運目出たく凱旋の曉には勳章年金必ずしも非望にあらずと云ふ、「ハイドパーク」の「ごろね」に勝ること萬々だ。今こゝに御集りの連中が見るに容貌體格甚だ賴もしくないのが多い。これだから他國と同盟しなければ戰爭の出來ぬ國などゝ惡口を云はれるのだと、我が同盟國の爲めに惜しむの餘り、つい自身も惡口を云ひたくなる。

併しこれは唯だ一方面の觀察に過ぎぬ。他方英國上流社會の義勇奉公に至つては實に感歎の外ない。貴族の子弟大學の學生壯年の國會議員賣出しの辯護士等が奮然として筆を捨て劍を手にしつゝある光景は、痛快を叫ぶに足る。而して彼等の感心なことは、從來の地位官職の如何を問はず喜んで一兵卒として鐵砲をかつぐことだ。運動をして居るから體格もよし、馬の乘り方鐵砲の打ち方も一通りは心得て居る。「ロンドン」人の脊は東から西へ段々高くなると云ふ。即ち東部は貧民窟で西部は上流社會の住宅地なのだ。英國の上流社會は此等の點に於て或は我國の上流社會に勝つて居はしないかと思ふ。少なくも我國では上流中流下流に通じて愛國心には大した相違がない樣に思ふが、英國では愛國心の貧富の懸隔が頗る顯著だ。隨つて戰役當初の義勇兵は上流社會からの眞の義勇兵と下流社會からの賃銀本位の傭兵との二種から成立つて居ると云ふことが出來やう。中流社會からは主として職業が手離せぬ爲めと妻子に對する顧慮との爲めに餘り應募が多くない樣子だ。何故に此樣な愛國心の貧富の懸隔を生じたかと云ふに、それには種々歷史上の根柢深き理由もあらうが、差當りの原因は、一には敎育が高價にして上流社會のみ充分の敎育を受け下流社會が甚だ無敎育なること、一には我國の舊劇講談浪花節等の如く國民一般に忠孝節義を敎へ廉恥心を助長する何等の通俗敎育なきことにあらうかと思ふ。要するに下流社會の愛國心が盛なることは我國の國寶であるから、願くは永久に保存したいものだ。

話元に戾つて新米水兵の調練が中々面白い。水兵服

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を著たのもあり脊廣のまゝのもあり、帽子はかぶつたりかぶらなかつたり、脊ノ順などは御構ひなし、練兵中必しも談笑を禁ぜず、烟草をふかしながら號令をかけて居る士官もある。口の惡いI君曰く、『此奴等は「コンゴー」(混合)艦の乘組だね。』併し唯一つ感心なことは、流石に西洋人だけあつてよごれたりと雖も洋服を著、曲りたりと雖も靴をはいて居るので、軍服の心配は後廻しにして直ぐ調練にかゝれる。

其中に午後四時、喇叭一聲全軍屋内へ繰り込む。蓋し「アフターヌーン、ティー」だ。兵糧だけは中々規律正しい。僕等も人の調練を見て大分空腹になつた故、宿の晩飯に遲れぬ樣歸路に就く。(次號續出)

殘忍嫌の湯淺警保局長

鐵拳禪

(上)

近時、月刊雜誌若くは單行本の發賣禁止の嚴命に接するもの、頻々として相踵ぐ。政治季節の去ると共に、俄然發禁賣止熱の昂騰せる、一時政界に集中されし官僚の耳目の、此の方面に轉じ來れりとも見られざるに非ず。彼等の取締をなす、機に應じ變に臨みて、寛嚴の手心を異にする、固より其の所なりと雖も、時に放漫に失し、時に苛酷に過ぐるが如き、所謂氣まぐれの處置を敢てすべからず。氣まぐれは無方針なり、亢奮性を帶ぶ。亢奮は逆上の氣味あり、血眼を意味す。冷靜に事理を判斷するの能力を缺く。一時他を威嚇し、刺激するの目的は達せんも、却て他の反感を挑發し、反抗を激成するに止まり、反省と警醒との効果を收むる能はず。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

他を取締る、須く他に取締らるゝの心を持たざる可からず。他を制する、須く他を容るゝの量なかるべからず。然るに偏狹者の成す所を見るに、徒らに彈壓し排斥し、拘束するを以て能事となすが故に、他を取締る能はずして、却て他に取締らるゝ奇現象を呈するなきに非ず。彼の防疫の厲行と云ふが如き、要は衞生の取締を嚴にし、病毒の傳染を防遏するにあるも、其の厲行を橫使するに於ては、周圍の反感を惹起し、到底厲行の目的を達すること能はざるなり。何となれば、彼等厲行を橫使するの極、腸加答兒を以て赤痢なりと强ひ、橫痃を以て黑死病なりと誤診し、寒冒を以て腸窒扶斯なりと盲察し、重きに由つて處斷するが故に、兩三日にして治癒するが如き輕症者を、死に到らしむる等のことすらあり。爲めに其の厲行に對して惡感を抱き、遁匿或は忌避を企つる者尠からざるを致す。厲行の弊の及ぶ所、厲行せざるの危險に數倍することあり、取締の呼吸を解せざる者のなす所、多くは此の類なり。

吾人は、近時の出版物取締を以て、斯の如き厲行の橫使なりとは云はず。然れども、其の取締の辛辣なる彈壓に急なる、方針の遂行と稱せんより、一時的亢奮性を有するに非ざるやの疑なからず。苟も取締ると云ふ以上、其の性質の如何を鑑識し、薫蕕を判別せるの後ならざる可からず。文藝の作品に至りては、殊に甚深の注意を拂ひ、俗吏的眼光を以て小觀することなく須く其の藝術的價値を大觀せざるべからず。然るに現下の取締を見るに、其處に何等の考慮なく、鑑別なく、唯一樣に、無差別に、手當り次第に葬り去るに非ざるやを思はしむ。其の慌しく發賣を禁止すること、宛然傳染病の猖獗に對する、防疫厲行の觀あるは蔽ふ能はず。出版者は勿論、創作家と雖も、背後より不意に盜かさるゝの危惧と不安とを感ぜざるを得ず。谷崎の所謂『恐怖時代』に非ずして、操觚界乃至出版界の恐怖時代を現出せり。

發賣禁止の理由に二あり。治安妨害は其の一なり。風俗壞亂は其の二なり。前者は多く政論乃至思想論の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不謹愼を取締るに備へ、後者は多く文藝作品及び社會記事の奔放を取締るに通用す。其の取締ると云ふは、國家的若くは社會見地より、安寧秩序若くは風致を維持せんが爲めに外ならず。されば政府者の之が取締を勵行するや、思想の進步發達の如き、作品の藝術的價値の如き、素より問ふ所に非ず。一に警察眼風致眼より觀察するの外、何等の理想眼、審美眼を加味する者に非ず。而して其の發賣禁止を決行するに際し、二者其の一の理由を擇ばざるべからざるに至れば、前者よりも後者を以てすと聞けり。蓋し治安妨害は高等的、人格的なるも、風俗壞亂は劣等的、低級的なるに由り、出版物の品位に多大の關係あるを以てなり。其の何れの理由にせよ、讀者の好奇心を挑發するの一なるも、前者の聲價の高まるに反し、後者の聲價の失墜するは爭ふべからず。彼の少年少女、若くは婦人相手の雜誌の如き、一たび風俗壞亂の理由の下に禁止されんか、發賣部數頓に減ずるの例なり。斯るが故に、惡辣なる當局者ならんか、政府反對紙を壓迫するに、其の取締權を濫用して、風俗壞亂の汚名を以てするも測られず。

近時風俗壞亂を以て發賣禁止の厄に逢へるに、政治文藝の『中央公論』あり、純文藝の『白樺』あり。頗る世人の耳目を惹けり。一は一篇の脚本を以て、一は一葉の挿畫を以て、其の理由の主なるものとせり。而して其の風俗壞亂の解釋も、從來の風致眼より以上に廣義となり、從來の淫猥・姦通以外に更に、殘忍の作物にまで及ぼす事となれり。二誌は即ち、此の殘忍の脚本若くは繪畫を掲載せるが故に、官權の辣手に由りて市場より一掃し去らるゝの已むなきに至れるなり。世之を以て、文藝取締眼の一轉化なりと云ひ、新記錄なりと稱す。

警保局長湯淺倉平は、此の轉化の案出者にして、新記錄の發造者なり。所謂殘忍嫌の役人なり。是れ吾人の裏書を待たず、彼れが殘忍嫌なるの一事、其の言明せる、脚本『恐怖時代』禁止の理由に徵して瞭然たり。此の際、彼れの如何なる人物なるかを觀察する、多少の興味なしとせず。

（中）

出版物取締の權力者たる湯淺も、政府委員として帝國議會に臨めば、一個の屬僚のみ。動もすれば、皮肉なる議員の一喝に會ひて、尻込みせざるを得ず。然れども、彼れは腹中に、一字の『剛』を藏す。容易に他に屈する者に非ず。斯かる場合にも、彼れは激せず、慍らず、役人風の傲岸を以て之に對す。其の白を切り、不得要領の答辯を以て一時を糊塗し、其の場を切り拔けんとすること、依然として舊式の踏襲のみ。官僚の衣鉢を傳ふるを矜らば、即ち止む。少しく人物の大を成さんと欲し、若くは新人物として異彩を放たんと欲せば、舊式の屬僚を以て甘んずべきに非ず。併し、其の際立ちたる異彩を發揮せざる所、或は尋常人の學び得ざる所なるや知るべからず。

　彼れは素、凡山劣水の第一關たる福島縣の人なり。其の平凡多奇なる所、山水の感化を受けたりとも見るべき乎。然れども、東北の山河、由來一山百文なるに非ず。而も此の嗤笑を受けざるべからざる所以のもの、實に維新の當時薩長に敗北せるに在り。其の茫漠たる平野、蓊鬱たる森林、大河峻嶺、宛も大陸の風あり。未開荒蕪の地尠からずと雖も、猫額大の地を剩す所なく鋤かざる可からざる長州の比に非ざるなり。彼れにして斯の雄大と、茫漠との感化を受けたりとせば、單に外面的の吏才に止まる可きに非ず。必ずや大に將來に期する所あるべしと雖も、彼れは茫漠の一面を廓大せんには餘りに怜悧なり。平凡多奇なきに非ずして、實は餘りに輪廓鮮明なり。小廉曲謹に非ざるも、何程か其の嫌あり。官界に名を成さんとする、薩長何れの勢力かに夤緣せざるの止むなしとするも、彼れは餘りに長州化せり。其の妻を長州の士分より容れ、努めて長州の勢力に接近し、其の勢力に夤緣して擡首し來れり。されば今日、彼れを福島の產と云ふも、人多く容易に之を信せず。彼れを指して長州人と云へば、却つて何人も之を怪まざるに見るも、如何に彼れ湯淺が長州系の色彩の濃厚なるものあるかを知るべきなり。

　湯淺の帝大を出づる、偶ま明治三十一年の人材輩出

期に際す。現下中央に於ける少壯吏僚の中堅は、此の期の人物に屬す。局長級の雄に、内務に土木局長小橋一太あり。文部に專門學務局長松浦鎭次郎あり。農商務に商工局長岡實、山林局長岡本英太郎あり。遞信に通信局長田中次郎あり。其他大藏に勅參佃一誠、神戸關稅局長野中清あり。縣知事に太田政弘、池松時和あり。更に臺灣民政長官に下村宏あり。就中小橋は彼れと競爭の地位に立ち、曩に彼れが内相原の爲めに岡山縣に追はるゝや、其の後を襲ひて地方局長たり。今又小橋の敬遠さるゝや、彼れ再び内務に歸りて現在の椅子を占む。二者何れか早く次官たるべきかは、官界の齊しく興味を以て凝視する所ならずんば非ず。

夫れ湯淺は、事務長じ、且周到の才あり。博士古賀の豪放なく、有松の機略なく、太田の才氣なしと雖も、何等か世の耳目を惹かん程の仕事を成さんとの功名心なきに非ず。其の小手先の仕事の果して何程の効果を齎すべきかの疑はしきも、成さんとするの勇氣は愛せざるを得ず。今次の新記錄の如き、彼れが殘忍嫌の性質に基くよりも、寧ろ此の功名心に驅られたるの結果に非ざる乎。將又、他に見る所ありて然る乎。彼れが周到の用意を以てして、寬嚴其の宜しきを得ざるの處置に出づ、其處に何等か動機の伏在するを想はざるを得ず。

彼れは三十二年滋賀縣事務官に任ぜられ、爾來兵庫縣參事官となり、鳥取・愛媛・長崎各縣の警部長となり、神奈川縣事務官を經て、内務事務官兼參事官となり、累進今日に至れるなり。其の官歷中に警部長のページを有するに徵し、警察眼乃至暗黑味の殘存せるものなしと謂ふべからず。其の警察眼の發達せる、多年警視廳に就職せる太田に及ばざるべけんも、一たび辣手を揮ふに於ては、其の用意の周到なるだけ、一段の辛辣を呈するなきを保せず。彼れは今や年齡四十三、肉體漸く充實して、野心の火新に盛んならんとするの時期に際せり。彼れの辣手を揮ふも是れよりなれば、彼れの功名心を滿足せんと欲するも亦是れよりなり。彼れの總て成さんと欲する所を成す、今日以後の努力如何

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にあり。昨日の經歷は、今日以後、乃至明日の功業を成さんとするの準備に過ぎず。

曾て地方局長たりし時、彼れは意氣揚々として得意の色あり。而も彼れが自ら手を下して、何事をかなせる。地方官の更迭か、省内の改革か、吾人不幸にして多く聞く所あらず。唯世人は彼れが少壯にして此の地歩を占めたるに驚異し、何等かの非凡を其の器に發見せんとせしのみ。然るに彼れを前の床次に比し、博士水野に較する時、其の手腕必ずしも稱するに足るのもあるを認めず。現在の椅子、或は比較的彼れの適所なるべし。其の人物手腕を小橋に比すれば、一長一短、兄たり難く弟たり難しと雖も、級友岡に較する時は、其の識見に於て或は遜色あり。彼れにして今後經驗を積み、研究を重ぬるに於ては、良局長の名を成す、敢て難しとなさず。吾人好んで彼れを他と比較し、其の優劣を是非する者に非ざるなり。

（下）

地方局長としての彼れは、殆んど何事も成さずして去れるも、警保局長としての彼れは、荐りに何事をか成さんとしつゝあり。風敎上の取締の如き、畢竟するに其の序幕に過ぎざるなきや。若し果して然らんには彼れは序幕の後に當然來るべき、第二幕、第三幕に就て、舞臺上の技倆を見よ。序幕の失敗を以て、直ちに全體の失敗となすは、未だ湯淺を解せずと做すや知るべからず。然れども、序幕の失敗にケチが付き、其の爲め甚しき不評を招き、自らも亦萎縮不振、遂に失脚せるの例尠からず。彼れの戒心せざるべからざるの點實に茲に在り。

凡そ出版物の取締に切要なるは、其の出版物に對する鑑識眼なり。苟も出版物を取締らん程の者は、其の經世的見地よりすると、藝術的見地よりするとに論なく、鑑識の眼光少くとも常人の上にあらざる可からず世俗に迎合するを是れ事とする俗惡の出版物と、警世的の大文字と、藝術上の作品とを同一視し、其の薰猶を判別するの能力を缺くの徒は、斷じて出版物鑑識の資格を有せず。總て鑑識には、其の物に對する智識と

趣味と識見とを要す。文藝思想の產物の鑑識に於て、殊に然りとなす。一知半解は愚か、其處に何等の理解なく、趣味なき人々が、器械的に警察眼を活動し、風敎眼を展開して、其の取締權を橫使するに於ては、却て文敎の發達を阻害するの結果を將來するなきを保せず。吾人は彼れを以て、其の取締權を濫用する沒趣味、沒眼識の徒なりと指斥せざるも、又其の鑑識眼の非凡を信ずる能はず。何となれば、彼れは從來の取締以上に徹底せる理解と趣味とを有せざればなり。

唯彼れに一事の注目すべきは、其の取締の從來の放漫に失せず、何程か周到なる用意の上に置かれたるにあり。尤も斯の『周到』は、彼れが性格の反映に外ならずと雖も、蓋し潛かに期する所あるなり。故に彼れは徒らに盲判を捺押するを敢てせず、其の發賣を禁示すべき出版物に對しては自ら之を讀破し、後其の可否を決定せずんばあらず。然れども、彼れの鑑識にして下僚と多大の懸隔なく、下僚の警察眼風敎眼の上に一步を抽んでざらんか、如何ぞ公平の見地より趣味の批判を加へ、其の價値を發見するを得んや。旣に其の價値を發見するを得ず、焉んぜ能く傑作なりや否やを內容的に鑑別するを得んや。唯其の出版物を外面的に觀察し深く其の精神、乃至生命の存する所を探究せず、無思慮に、稗粟一樣に葬り去るに過ぎず。

吾人素より彼れの出版物の保護者に非ず、藝術の奬勵者に非ざるを知る。又、彼れが長官の令を含み、法規の命ずる所に從ひて、治安風俗の兩面より觀察して之が取締をなせば可なるを知らざるに非ず。而も彼れに對して反省を促す所以のもの、彼れが比較的進步せる頭腦を有し、考慮の餘裕を有するを知ればなり。彼れが風俗壞亂の範圍を殘忍にまで擴張せるは、强盜殺人等の續出する傾向を觀取し、漸く社會に瀰蔓せんとする惡風潮を防遏せんとする手段に外ならざること、略推測するに難からず。然れども斯の惡風潮は、果して出版物の影響なりや、はた小說・脚本・繪畫等の感化なりや。吾人は其の根源の生活難と、及び之より生ずる過勞狀態、或は精神の異常より來れるを知るも、文

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

藝作品等、何程の惡影響を及ぼせるかを疑はずんば非ず。假に影響ありとするも、殘忍を描寫せるもの谷崎の一脚本に限らず、『白樺』の一挿畫のみに非ざるなり血の滴るを以て殘忍の標準とせば、十字架上の耶蘇を描ける宗教畫の如き、犧牲を背景とせる『肉彈』の如き壯烈鬼神を泣かしむる日本海戰を描ける「此一戰」の如き將た世界の歷史に續出する戰爭記事、殊に宗教戰の如きも亦、其部分的の觀察を以てすれば、何れも殘忍の範圍外に出づるものに非ず。更に軍記物語、及び俠客傳等に至りては、慘虐の血潮の淋漓たるを見る。而かも一方に於て極力軍國主義を唱道して、國民の剛毅慓悍を冀ひつゝある我當局が、單に血を流すの記事を「殘虐」の二字に包括して、頻々之が禁止を斷行するが如き抑々何等の矛盾、何等の撞着ぞや。更に今日の新聞紙上に散見する姦通・强盜殺人・慘死等の記事に至りては、一讀戰慄を禁じ得ざるが如きもの尠からず。殘忍嫌の彼れは、果して之を如何とか見る。

今、讀書界の現勢を一瞥するに、純文藝の愛好者は少數の智識階級に限らるれども、戰記・俠客傳の類は一般的の讀物なり。殊に新聞紙の如きは、其の讀者の多數なる、到底雜誌及び單行本の及ぶ所に非ず。然るに彼れが風敎眼は、藝術的作品の印象の深きを怖れて、他の俗惡なる出版物の弊を認めざるか。縱令鮮血の彼れが警察眼を脅かすものなしと雖も、徒らに時好に迎合し、衆愚の好奇心を挑發する射利の出版物にして、發賣禁止をなすの可なるもの多々あり。而も周到なる彼れが、是等無價値の書を默認し、文壇を光彩する作物に向つてのみ嚴なるは何の故ぞ。既往は追ふべからず今後彼れが眼を大局に注ぎ、其の取締の寬嚴宜しきを圖り、公平無私の態度を以て臨み、發賣禁止の爲めに發賣禁止を敢てし、宛然血を見て血に狂ふが如き殘忍を敢てするなく、作者及び出版者の利害も亦其の考慮の中に置かんことを望まざるを得ず。

「能樂」の春と櫻

黒頭巾

其一

●此の春は、初に暖かく、雪の來ること遅し。去月十一日、朝來、飛雪紛々として來り、「花筐」の撥花の上に、雪の降りかゝれるも艶やかなり翌十二日は、寶生會に、別會ありて、天覽御能の連獅子を演じ、此の日一日ばかりは晴れ、其の後、連日、天、寒く、雪少しく飛ぶ。今、此の稿を草する時、硝子窓を隔てゝ、桃、丁子花などの匂ひ咲けるに、淡き綿を千切れるやうの雪、舞ふ。

●八年前の四月、關東の大雪に、東海道の鐵路さへ不通となりしとき、都は櫻花の滿開にして、恰も陰暦の望月にも當りしかば、雪、月、花を一時に鑑賞するを得るの奇觀を呈したる事あり。

●雪、月、花の奇觀は、此の生、眞に、逢ひ易からず。此の春の雪は、雪も少く、月も亦たあらず。花は稍、早かり。但だ此の雪の間に、能樂の花を、飽くまで見るを得たるは、また稀覯の清福と爲さずんばあらず。

●寶生會の、此の別會にては、春の能としては、嵐山と蘆刈とを見せたり、嵐山は、吉野の春は京に遠ければ、其の櫻を嵐山に移し植ゑたるを勅を承はりて、春色を見來るに、花の精、現はれて、勅使に語る。「花の精」は藏王權現なり。蘆刈は、浪花の春の蘆を苅るにて、晩春の氣分を見すれども花には關せず。

●龜山天皇の御時、吉野の櫻を移して嵐山に植ゑ玉へり。「春ごとに、想ひやられし御吉野の、花は今日こそ、宿に咲きけれ」此の地に、仙洞御所ありたれば、則ち此の御製あり。

●吉野の七曲阪を過ぐれば、一目千本の櫻花なり。されば嵐山に移されたる櫻にも、千本の春花あり。「花守の、住むや嵐の山櫻、雲も上無き梢かな。千本に咲ける種なれや、春も久しきけしき哉」

●能樂に見る花には、「花守」あり。「花守」は則ち「花の精」なり。「花の精」、春を惜みて、自から花を守るならずんばあらず。名こそ嵐の山なりとも、花は散らさじと、守るなるべし。「いざ〳〵花を守らうよ、〳〵春の風は空に滿ちて、〳〵」

●吉野山の神は藏王權現。權現は則ち吉野の花守の神。吉野の種を嵐山に移したれば、花守の神も、隨つて分身して、移りて花を守り玉ふなり。花の種を移植するといふは、則ち花守の神を勸請するの意味ならずんばあらず。「子守勝手、藏王權現、同體異名の姿を見せて、おの〳〵嵐の山に攀ぢ登り、花に戲れ、梢に翔つて、さながらこゝも金の峯（吉野、金

峯山)の、光りも輝く、千本の櫻」

●夫れ花あれば、則ち花守の神あり。花を移して、花中の神を移さゞれば、帝都を移して、神器を移さゞるが如くなるべし。

●昔、嵐山に、仙洞御所に近く、吉野の花を移栽し玉ひしは、坐ながら吉野の春を賞で玉はんの聖旨に出づ。則ち、紫宸殿前に、左近の櫻を栽ゑ玉ふは、恐らくは、此の一本の櫻をして、日本の櫻花を象徴せしめて普天、率土の春光を、帝座に近く、賞でさせ玉はん爲なりしなるべし。

其二

●「能樂」に見たる「春と花」とは、固より日本を舞臺とすれども、延いて海外にも及び、未だ西半球を知らざれば、唐土に及びたり。唐土は則ち東亞大陸なり。朝鮮半島及び塞外、則ち滿蒙地方に關するものは無し「昭君」の一篇は、塞外の春に關係なしとせず。東亞に關するもの、昭君の外、皇帝、西王母の二篇あり。

●謠曲の作者は、海外の「春と花」を詠ずれども、櫻花に及ばず。海外には櫻花無ければなり。故に、海外の春を詠ずるの謠曲は、唯だ春光を謳歌するに留まる。西王母と昭君とは、仙女に因緣あり。而して西王母は仙桃と桃花とを主題とす。

●能樂の花は、櫻多し。概ね櫻なり。桃花を歌へること、西王母の如きは少なし。歷史上の西王母は暫らく措く。文學に見たる西王母は、すべて仙女なり。窈窕とゝて、仙女の中の、華花たるものは西王母なり。日本にては、「羽衣」の仙女は、三保松原に下れり。富士山は櫻花の名所なれば、櫻花爛漫たるとき、仙女は、下り來れるべし。支那の仙女は、則ち桃花に憧憬するにや。

●漢武帝、仙を求むるの時、西王母、漢宮に下り來る。侍女、玉盤に仙桃を盛ること七顆、大きさ鴨の卵の如く、形圓(マル)く色青かり。西王母、先づ其の二を食して、五を帝に捧ぐ。帝食し畢つて、其の核を前に置く。西王母、其の故を問ふ。帝、答ふ、植ゑんと欲するのみ。西王母、此の仙桃は、三千年に一たび實るもの、下界に植う可きものに非ずと、言つて、笑ふ。

●三千年に一たび實るといふもの、支那の仙桃のみに非ず。日本の櫻も亦た三千年に一たび實るものならずんばあらず。支那の桃、悉く實らざるは無し。然れども仙果を得るは、三千年に一度といふ。日本の櫻花、悉く實らざるといふには非ず。然れども其の仙果を結ぶは、三千年に唯だ一度。故に、建國以來、國人、未だ仙櫻實を見ず。これを以て、能樂の作者も、仙桃を描きて、未だ仙櫻を描くに及ばざりし。

●支那には、堯舜以前、混沌たる太古の時、帝王、交も〳〵一萬八千歲の長きに及べるあり。則ち三千年の仙桃を見たるも少からざるべし。日本は、建國剏業、以來、僅ほ僅に三千年。木花咲耶姫命(コノハナサクヤヒメノミコト)、仙櫻實を食ひて、其の核を富士山下に植ゑ玉ひしにや。神武天皇、都を大和に開き玉ひし頃、一たび仙櫻實を聞し召し玉ひしにや。而して吉野の櫻といふは、天皇、其の核を擲ち玉ひしが、繁殖したりしにや。

●吾輩を以て見れば、三千年以前、吾が日本、建國肇業の砌、仙櫻實、六に實り、八百萬神、仙櫻花のかげに、仙櫻實を捧げて、皇祖の前に、歌ひ、舞ひし神代の春有りしことを想像せずんばあらず。

●能樂に見る西王母の仙姿は『光り、庭宇を輝やかし、黄錦の御衣を著し、劍を腰に提げ、〳〵、眞櫻の冠を著、玉觴に盛れる桃を侍女が手より取かはし、君に捧ぐる桃實の、花の盃、取りあへず』、何人か、神威輝きて、嬋妍たる木花咲耶姫命と仙櫻實との一篇を脚色せざるや。

其三

●皇帝、昭君、西王母の三篇は、悉く、仙女、美人を以て、春と花とを象徵せしめたれば、春の神を、女神(メガミ)と爲すものならずんばあらず。

●吾輩は、昭君の一篇に於て、柳を以て、此の美女を象徵するに對して頗る興趣を感ぜずんばあらず。凡手ならしめば、昭君を花の姿とこそ言ふ可けれ。然るに、柳の姿といへるに於て、却つて昭君の婀娜、妖媚、其の綸席の嫋々として、全盛の歌廓の描ける、スラリとした美女の描寫髣髴たるにはあらずや。

●古より柳は綠、花は紅といへり。春光の一半を表現するものは、柳なり。女を以て春を象徵し、而して柳を以て女を象徵す。『さても父母、別を悲しみ、春の柳の木の下に、泣き悲しみ玉ふ術はしさよ』といひ、『此柳も、さながら昭君の姿』といひ、或は、剖說して『唯だ昭君の黛(マユズミ)は〳〵柳の色に異ならず』といふ。昭君が柳か、柳が昭君か、柳の下に佇める昭君を見れば、春は此に在り。昭君去れりと雖、水邊に佇める、青柳の影を見れば、昭君を見るが如し。

●花は、女の顏を象徵す。女の姿を象徵するものは柳なり。女の姿は、則ち女の氣分なり。能樂は、象徵的なるが故に、昭君に柳といひしは、作者の筆に油の乘りしを思ふ。

●皇帝の一曲、楊貴妃が病鬼に惱まされ、枕を推す可き力も無く、かはり果てたる姿を、「鍾馗(シヨウキ)」の精靈、來つて病鬼を斬り平げ、貴妃、忽ち息災となれるを記するもの。晩春に、鍾馗(シヨウキ)を現出して、春に頽れ行く美人の艷姿を挽回したるは此の曲、如何にも、人間惜春の情を表現するものに似たり。

●病める貴妃は、暮れ行く春の姿なり。貴妃の、「枕波の斜紅の、世に類無き姿かな」は、行く春の情趣の、尤も艷美なるものを象徵す。人間、冀くは、鍾馗の勇威を藉り得て三春の光を留むるを得んかな。

其四

●能樂に於ける、三四月の春と花との舞臺は、これを人國記より見れば北海道及び維新以來の新領土を除くの外、殆んど全國に分布せり。南は九州、九州は肥前に「鶴太鼓」の一篇あるのみ。次は裏日本に少く、僅に、越前に實盛。加賀に歌占。越中に藤。越後に禪師曾我あるのみ。東北には、錦戸及び善知鳥あり。

●能樂の春は、主に山城に在り。山城に次きては、大和、攝津、近江の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三國を多しとし、近畿と雖、和泉及び丹波は、共に、唯だ一つ宛、而して河内は無く、紀伊は僅に二あり。山城の外、近畿の全部を擧げて、山城一國に匹敵するに過ぎず。然れども、能樂の春は、上方に在りといふを妨げず。

●表日本、則ち東海道の方面には、美濃には「養老」尾張の「草薙」、三河の「杜若」、遠江の「侍從重衡」、駿河の「羽衣」、相模には殊に多く「千手」「盛久」「江島」「和田酒盛」の四あり。武藏には「隅田川」上野には「船橋」、常陸には「櫻川」等あり。春は、裏日本よりも表日本を、晴々しく、陽氣なりとすべし。

●吾儕は、瀨戸内海の春光、能樂に見ること少きを遺憾とす。攝津の「須磨源氏」の如きは、此の中に入る可きもの。其の外、「淡路」一篇、諾、冊二尊を謳歌するは、春に適はし。播磨の「室君」あり。讃岐には、「八島」「松山天狗」の二あれども、二者ともに春光を歌へるには非ず。蓋し、瀨戸内の好景、游賞に適するは、汽船の便ありての事なれば、古人、三春の樂事は、究竟、上方の花を探るに在りしなるべし。

●春に關する能樂、必ずしも悉く花を歌へるには非ず。また必ずしも花を背景とせざるも少からず。唯だ偶、其の事の、春季に關するのみなるも少からず。花を謳へるに非ずとするも、往々春の氣分を描き得て、頽蕩、爛熟を極むるもの無きに非ず。

其五

●吾儕は、蘆苅の一曲を見たる時、恍然として、南國の春を憶出さずんばあらざりき。蘆苅は、貧に迫りて、夫婦分れを爲し、夫は、蘆苅を業とし、妻は京に上りて、身分善くなりたれば、再び浪花津に下りて、夫を尋ね、再會して伴ひ歸る事を、大和物語、今昔物語等に依りて、脚色したるものなるべし。蘆苅といへば、晩春の氣分あり。而して青蘆なるが故に、蘆苅男の、隱るゝにも便好し。

●吾儕、先年筆を載せて南征し、琉球に到る。彼地の同人、吾儕の爲に特に、琉球古劇を演ぜしめむ。其の中に、「花賣」の一齣あり。全然、蘆苅と同脚色。唯だ蘆に換ふるに花を以てし、舞臺を浪花津より琉球に移したるに過ぎず。此の曲、物語より直ちに脚色したるか、或は蘆苅より飜案したる乎。吾儕は、未だ之を詳にせず。然れども此の二者、偶合に非ず。飜案なる事は疑無し。

●蓋し、琉球古劇の作者は、屢、京都、江戸に來りて、能樂及び芝居を見、研究したる事少からず。當時、彼は、必らず蘆苅に傾倒し、其の飜案を思ひ立ちしなるべし。

●吾儕の見たる琉球の「花賣」は、「花賣」なる丈けに、蘆苅よりも華やかなり。蘆を賣るよりも、花賣の、春らしく思はれざるに非ず。夫婦再會して、艶やかに舞ふも、彼此、ともに同じ。寶生會の近藤(乾三)の舞は吾儕をして、一時、南國の春に憧憬せしめたり。

●此の頃、南國の春は、既に晩れたるべし。小杉未醒、先きに琉球に遊び、詩を送り來る。卓前一壺酒、海南二月瓜。獨坐閑愁盡、遠客不レ思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家と。彼は、「花實」を見るを得たりしや、否や。南國の風物と、彼が南遊、自得の情、想見するに餘あり。

●琉球の古劇は、吾が舊劇よりも、能樂に近し。琉球には、支那劇の影響もあり。能樂、南移して琉球に到らば、まさに古劇となれりと想像するも妨げず。則ち、能樂には、琉球を歌へるは無しと雖、「浦島」の一曲はあり。彼に「蘆苅」の名無きも、「花實」の實あり。能樂の春、百五六十年前、早く既に、琉球に及ぶといふも可なり。

其六

●江州の春は、琵琶湖に在り。春光、湖面に照映し、湖岸の花、悉く吹き飛んで湖水に入る。水國の大觀、瀨戶內海の如くに大ならず、遍ねく春を探つて悠游するに宜し。

●湖水に沿ひ、石山は、濃翠、水の如し。晚春の時、躑躅花、早く開いて、水と山とに映ず。此の時、石山寺に登り、所謂、「源氏の間」に入り紫式部を憶ふ。謠曲の「源氏供養」一篇、無數の騷客に依つて、つねに實現されつゝあるなり。

●實は、紫式部ならずとも、春の石山寺に來り、筆を執つて、湖上の月を寫さんと思ふ者、多かるべし。秋月といへども、秋月は淒し、寂し。石山寺の月は、吾輩を以て見れば、晚春を、尤も宜しとすべし。月光朧々たる時、紫式部の詩魂、春霞に溶けたる花の如くに、浮び來る可くや。

●兼平、白髭は除き、能樂に見たる琵琶湖の春は、女に象徵されたり「竹生島」の辨財天、「關寺小町」の小町、及び「源氏供養」の紫式部、いつれも絕代の美女なる可く思はる。暮れゆく春の湖岸に、百年の嫗となれる小町を見せ、關寺に縋り、梨の杖にすがり、都路に出て、乞食せしめたるは悲慘なり。

●歌仙といはれし小町に、天子より歌を賜はるは、道理なり。如何に老衰したればとて、此の女歌仙に、乞食せしめずとも可かるべし。然れども小町が『積れは、人の老となるものを、かほどに早き光りの陰の時、人を待たぬ習とは、白波の、あら戀しの昔やな』の述懷は、此の老女をして、麗らかなる湖光に對映せしめたるに於て、感興の深酷なるを致さずんばあらず。

●春月の湖上に、舟を放ちて、竹生島に至らば、「其の時、虛空に、音樂きこへ／＼花ふりくだる春の夜の、月に輝く乙女の袂、かへす／＼もおもしろや」の詩趣あるべし。花ふり降る春の夜の湖舟、此の曲の作者は蓋し實歷したるべしと思ふ。

●辨財天を出現せしむるの舞臺は、吾國にては、竹生島に勝るもの無し。辨財天は、則ち湖神ならずんばあらざるべし。吾輩を以て見れば、湖畔の詩趣は、能樂に盡きず。然れども極めて平和なる光景を以て、辨財天の出現を脚色したるは、江州の春を象徵し得たるなり。

其七

●大和の春は、遺憾無く能樂に現はれたり。先づ「采女」を描きて、奈良

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の春を現はせるが、背景は巧みに描かれたり。「月に散る、花の陰行く宮廻り、運ぶ歩みの數よりも、〳〵積る櫻の雪の庭、また色添へて紫の、花を垂れたる藤の門、明くる春の氣色かな」

●春より初夏の奈良は、櫻と藤とに象徴さる。吾輩、一昨年晩春の雨の中に、櫻散り、藤花、高く、喬木に懸り、見上ぐれば、嫩草山の峯に描ける如くに、鹿の並び立ちしを憶ひ出す。釆女の一篇、鹿を點綴せば今の奈良なるべし。鹿は秋と定まれるに非ず。

●能樂の大和は、「佐保山」に、春の女神を描きたるは可し。春日龍神及び代主ともに佳なり。代主は卯の花を背景として、事代主神を出現せしむ。およそ是等の三篇、ともに大和を表現するに足ると雖、尤も能く大和を象徴するものは、「三山」と「雲雀山」とならずんばあらず。

●大和は、日本の古國なり。神話の國なり。而して春の神話を美しく脚色するものは、「三山」の一篇なり。三山は萬葉集に歌へる山香山は男、耳なし、うねび二山は女、一男二女の山と稱す。此の三山が爭ひしといふのは播磨風土記に記す。能樂には則ち山の爭を象徴するに、美しき女と花とを以てせり。

●抑も「かしはでの公成」といへる男あり。其の頃、耳無の里に桂子、畝傍の里に櫻子といへる美女あり。此の男、兩手に花と、おぼろ月の夜に、二つの里に通ひしが、『男うつろふ花心、かの櫻子に靡き移りて、耳無の里へは來らざりけり』

●ことさら春の頃なれば、盛なる櫻子に壓倒されし桂子は、花無き身をかこち、夕ぐれに立ち出でゝ、櫻子の里を望む。『我は花無き桂子の、身を知れば春ながら、秋にならんも理りや。さるほどに起きもせず。寢もせで、夜半を明かしては、春のものとて長雨降る。夕ぐれに立ち出でゝ、入相もつく〳〵と、南は香山や、西は畝傍の山に咲く、さくら子の里、見れば、よそめも花やかに、羨ましくぞ覺ゆる』

●「三山」の一篇は、神話の山爭を象徴するに、一男二女の爭を以てし、桂と櫻とを以て、二女を象徴す。故に、桂子、櫻子の二女は、山の爭を象徴すると共に、かねて花の爭を象徴す。花の爭を象徴するには、普遍的にして、必ずしも大和の舞臺には限らず。三山の爭を象徴すれば、則ち大和の春なり。花の爭を、神話の舞臺に表現するに於て、長閑なる大和の春は、眼前に見るが如し。神話と花と、氣分の上に結び付きたるは則ち大和の春ならずんばあらず。

●花無き桂子の靈が則ち桂の木なるべし。桂の木の靈は、花やかなる櫻花を妬みて、風を起して、花を散らす。桂子の靈は、ありや、無しや。實に、櫻花の繚亂して散り行くは、花無き木の恨なる可くも見ゆ。年々神話の大和に、櫻花の繚亂して飛ぶ時、桂子の靈、來り見る乎。『春は年々。頃は彌生に、また花の咲くぞや。見れば、よそめも妬ましき。花の、うはなり打たんとて、桂の立枝を折り待ちて、耳無の山風、松風、春風も、吹き寄せて〳〵雪と散れ、櫻子。雲となれ、櫻子。』落花狼籍のどかなる大和の野にも花吹雪は、桂子の靈、櫻子を嫉ふなる乎。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其八

●春の王は櫻花なるぞかし。青葉となり、枯葉となり、落葉し盡したる櫻も、春來れば、また櫻の春なり。桂子の歌は歌ふ、『あら羨ましの櫻子や。また花の春になるよなふ。見よかし顔に櫻子の、花のよそ目も妬ましや。』實に、光り散る月の桂も花なれど、櫻咲く春には、月の光も、悉く櫻花に移れり。されば桂子は、又た歌ふ『光り散、月の桂も花ぞかしたゞ櫻子に移るらん。さかりとて光を埋む花心』

●見よかし顔に咲く櫻花も、春風に媚ほられ、桂子の靈に鞭たれて、狂ひ散る。頽蕩、爛漫の春は、散る櫻花に現はれたり。櫻子の歌ふ『此の耳無の山風に、吹きさそはれて來りたり。これ〱助けたび給へ。我はあの畝傍山に、櫻子と聞へし女なるが、風の狂ずる心地して、かやうに狂ひさぶらふなり。さりとては上人よ、因果の花に附き祟る、嵐を除けてたび給へ』

●『三山』に現はれたる櫻子と桂子との爭は、また花月の爭を象徴するものと見らる可し。春は、月の光も櫻花に奪はるれども、『花も散りなば、青葉ぞかし、櫻も桂も同じ色なるを、秋來れば、櫻は枯れて、月の桂は吹き匂ふべしや。』

●花月の榮悴、迭ひに來る。然れど、花の顔は、月の桂も妬みに堪へざるにや。花と月との、櫻子と桂子とが、耳無、畝傍の山の里に咲き競へる詩的爭こそ、神話の大和を描き得て、感興、極り無し。吾輩も、三山の一篇に對して、三山の舊游を回想せざる能はず。

●『三山』は、神話の大和を象徴し、『雲雀山』は、戯曲の大和を開く。前者は、古の大和に溯り、後者は、新らしき大和に沿ふて近づく。此の二者は、大和の古今の春を象徴するものなり。能樂の中、一國の春と花を描き得て此の如く興趣あるもの無し。

●雲雀山は大和の南、紀伊との國境に在り。此の一篇は中將姫を脚色す。雲雀山の一語、晩春、初夏の光景、恍然として眼中に在り。大和は、菜花の海、夕陽を漂はす。雲雀山は、菜花の海に浮べる島にして、雲雀の滿ちて、歌ふなるべし。

●大和は、近世に於ける戯曲の舞臺なり。初の淨瑠璃は、能樂より取れるは少からず。春の能樂の中、雲雀山は、淨瑠璃の粉本を爲せるものなり。中將姫の乳母が花賣を爲して、其の生を營み、姫を養ふといふは、古傳說に本づくか、作者の脚色なるやは詳かならず。而して能樂なれば中將姫に、子方を用ひたるは、春の雲雀山に調和すべき、可憐の中將姫を見するなり。

其九

●吾輩、今、玆に、能樂を論ぜんとには非ず。能樂の論、一日にして盡きず。吾輩は、唯だ能樂に依つて、春及び花の興趣を味はんとするなり。

●能樂は、或意味に於ては、精と幽靈との文學なり。能樂に見たる春と花とは、概ね、花を背景として人物の幽靈を出し、人物を背景として、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以て花の精を映出したるに非ざるは無し。

●花の精は、畢竟、花を人格化したるものなり。精と幽靈とは、幽靈は亡靈にして、精は生靈なりといふべし。佛教にては、三界萬靈にして、草木國土、悉皆成佛すといひ、佛教文學ともいふ可き謡曲に於て、あらゆるもの悉く精ありとなすは當然の事なり。「氷室」一篇は、春の丹波を題材とし、氷室の精を描けるもの、氷室の精、則ち氷の精なり。

●能樂に見たる花の精に少からず。「藤」も「西行櫻」も花の精を歌へるもの。然れども「墨染櫻」を尤も感興深しとなす。墨染櫻は、仁明天皇を深草に奉葬したる春に、侍臣峯雄が、「深草の野邊の櫻し、心あらば、今年ばかりは、墨染に咲け」の歌を上る此の歌に依つて脚色したるものなり。

●歌問答も亦た謡曲の一特色とす。春の能樂の中にても、鸚鵡小町及び此の墨染櫻の如きは、則ち其なるべし。前者は一字の返歌にして、後者は一句の返歌ならずんはあらず。則ち、墨染櫻の精、出現して、今年ばかり墨染に咲けとの詠は耻かしや。宜しく改めて、「此の春よりは」と爲すべしといふ。「今年ばかり」は峯雄の歌にして、「此の春よりは」は、墨染櫻の精の歌なり。

●櫻花の美を讃嘆したる謡曲は少からず。櫻花の德を嘆美したるは「墨染櫻」なり。櫻には水德ありといひ、紫宸殿前に、左近の櫻を栽うるも水德を發揮して、禁裏の火難を防ぐにありといふ。墨染櫻の精はいはく「夫れ櫻は諸木にすぐれ、水を生ずる德あり。是に依つて火難の恐を爲すこと無し。されば滿都を花洛と號し、陽花殿、月花門、在近の櫻に至るまで、禁中に移し置かれたり。主上、此木に向はせ玉ふ。是に依つて玉簾に、木向(ロッウ)といふ紋を顯はすなり。かほどめでたき花の德、誰かは仰がざる可き。」

●櫻花は水を得て、其の美を爲す。櫻に水德ありと道破するは、此の墨染櫻の一篇に始まる。古人、我が民族性と國粹とを謳歌するの文學、櫻花を嘆美し、櫻花を以て、國民性を象徴すと爲せども、未だ此の花を以て、水德を具すと爲すものは有らざるなり。日本は「水の國」、櫻花、水の德を發揮す。櫻花文學としても、此の墨染櫻一篇は、豈、特筆す可きものに非ずや。

●「墨染櫻」は、花と天子との關係を記し、侍臣の鍾情を述ぶ。中にも深草の櫻は舊院の御愛木、朝暮、御顏色に侍し參らせしを、「無常の嵐、吹き來り、花より先に散り給ふ。心無き草木も歎きの色に出でざらん」今年ばかりに非ず、此の春よりは、年々、墨染に咲くの眞情、此に在り。深草陵下の櫻花、長へに墨染に咲きて、帝陵に侍す。人ならば、君を失ひ奉りて、髮を剃り、墨染の衣を著けて、陵下に廬を結ぶものなるべし。日本の櫻花、眞に、鍾情の花なる哉。

其十

●能樂に見たる春の亡靈の中には、美人と歌人と英雄とあり。紫式部、和泉式部、小野小町、桂子、櫻子、大伴黑主、紀貫之、在原業平、及び義經もあり。恐多くも、崇德院も在します。

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●亡靈は、必ずしも人物のみならず。善知鳥もあり。源三位頼政に征伐されたる鵺の亡靈といふものこそ可笑しけれ。「何と見申せども更に人間とは見えず候、如何なるものぞ、名を名乘り候へ」と言へりし如く、如何にも人の亡靈とは見えず。面は猿、手足は虎、聞きしにかはらぬ變化の姿」かゝる怪しき亡靈も、春の朧夜に出でたるぞや。

●秋夜は凄壯なり。然れども怪靈の出沒するは、朧夜こそ宜しかるべけれ。晩春の朧なるは、人間、頭腦の狂亂を聯想せしむるものあり。晩春初夏は葉陰の櫻、青葉、若葉の時、即ち能樂に見る狂女の時なり。

●能樂には狂女多し。必ずしも春のみには非ず、然れども春に多し。百萬、隅田川、高野物狂、籠太鼓、櫻川などあり。吾輩は、櫻川を好む。櫻川一曲、四海の春を象徴するに足れり。

●表日本を舞臺とするの能樂の中にて、花は三河の「杜若」あるのみ。其の餘の「傑作」は悉く女に在り。隅田川は、名物となりぬ。然れども春光絢爛たるは、駿河の「羽衣」にして、爛熟せるは常陸の「櫻川」を推す。

●若し極味の酒を以て、此の三者を論せば、隅田川は醒後の寂味あり。羽衣は微醉の陶然たるあり。櫻川は即ち、酔味の煥發するあり。女を以て言はゞ、「隅田川」は稍、老女。「羽衣」の天人は、嬋妍なる少女。而して櫻川の櫻子は、婀娜酣なる年増盛なるべし。

●能樂には、櫻花を象徴する女の名を、櫻子とせるはおもしろし。日本の女性の名に、多く花の名を附す。然れども櫻といへるは少し。櫻を男子の名とせるは少からず。さくらは佳名なり。將來、日本の女の佳名に多くさくらを附せしめよ。さくらを代表名となすに至らしめよ。

其十一

●羽衣の事は、玆に喋々するを要せず。羽衣と櫻川とは、或意味に於ては、之を關聯し、對照せしめて、以て、玩味するを要す。富士山の神は木花開耶姫（コノハナサクヤ）。羽衣の一曲は、山前則ち神前の絶景地に歌はる。櫻川は、處は遠ざかれども、櫻子は木花開耶姫の申子と傳ふ。

●「櫻川」の櫻子は、故鄕は筑紫の日向なりといふ。櫻子の氏神は木花開耶姫、而して此の神の神體は櫻木なることは、此の謠曲に道破せらる。「さん候、我故鄕の御神をば、木花開耶姫と申して、御神體は、櫻木にて御入り候。されば別れし我子も、其の御氏子なれば、櫻子と名づけ育てしかば、神の御名も開耶姫。尋ぬる子の名も櫻子にて、また此の川も櫻川の、名のなつかしき花の塵を、あだにせじと思ふなり」

●櫻川の能樂は「狂女もの」なり。櫻子の母、春に狂ふさまの美しさよ。「中々の事、花は今が盛にて候。また此に面白き事の候。女物狂の候ふが、美しきすくひ網を持ちて、櫻川に流るゝ花をすくひ候ふが、けしからず面白う狂ひ候ふ」。實に、美しき女が、美しさ網を持ちて、櫻川に花をすくふさま、春の錦繡の、光華、爛熳たるものに非ずや。

●櫻花に狂へる櫻子の母が、狂ふさまを見よ。彼女はいふ、「櫻川には花の散り候ふの。何、散方（チリカタ）になりたるとや。悲しやな、さなきだに、行く事易き春の水の、流るゝ花をや誘ふらん。花散れる水の、まに〳〵とめ

くれば、山にも春はなくなりにけりと聞く時は、少しなりとも休らはゞ花にや疎く雪の色、櫻花散りにし風の名殘には』

●櫻川の地點に關しては議論あり。岩瀬驛の附近、櫻川を以て、其の舊蹟なりとする者あり。曲中に、霞うながす信太の浮島の句あり。浮島は霞浦の中に在り。霞浦は天下の水郷。湖水としては、琵琶湖に次ぐ。櫻川一曲、櫻花を以て、東方水郷を歌ひ、而して併せて櫻花神の本體を闡明せるものなり。

其十二

●熊野祇王などの名を聞けば、春に適はしき能樂たるを憶ふ。道成寺も、能女が烏帽子を着けて、鐘樓の鐘を覗つて、「花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん」歌ひつゝ舞ふ姿、艷やかなるべし。熊野の中に、遠江より上れる女を朝顔といふ。朝顔日記の美女朝顔は、此の名より著想したるにや。

●能樂の女の中にては、吾輩の、尤も印象したるは、「草紙洗」の小町なり。八年前の初夏、吾輩、中京に、寳生九郎の素謡を聞きしことあり。感興今に忘れ得ず。草紙を洗はせよとの綸旨に、小町は嬉しさ、泣く泣く『綸言なれば、うれしくて、おつる涙の玉襷、むすびて肩に掛け』「彼が謡ひ來る時、吾輩も亦覺えず、涙ホロホロとして落つ。

●此の謡を、吾輩、落涙す可きほどの悲曲とも思はず。然れども當時、涙流れて留らず。東京に歸りて聞けば、九郎は曾て、先帝に謁し、數番を謡ふ。重ねて、少しく謡へとの綸言あり。光榮、極無し。彼、頓首して、『綸言なれば嬉しくて』と謡へりといふ。

●窈窕たる盛春の姿は、能樂の女に。而して晩春の狂亂は、狂女、及び鬼神、天狗に表現さる。「舍利」に於ける、佛舍利を盗める足疾鬼を韋駄天が追撃する。唐土の『龍虎』に、龍驤虎嘯を見せ、「羅生門」に渡邊綱の鬼退治を語り、鞍馬天狗」に、花雲の上に、大天狗を出現せしむるに到る。

●能樂に見たる春は、すべて駘蕩たり。治まる花の都とて、〱風も音せぬ春べかな」といへるは、啻に、京都の春のみならず。また以て、能樂の春とすべし。綱が鬼退治の夜は、『春雨の、音も頻りに更くる夜の〱鐘も聞ゆる曉に、東寺の前を打過ぎて、九條をもてに打て出で、羅生門を見渡せば、物冷まじく、雨落ちて、俄に吹き來る風の音に、駒も進まず』羅生門は、春の亂れなり。

●「鞍馬天狗」は頗る面白し。春の能樂に、英雄的精神を鼓舞するものは此の曲に非ずや。『花さかば告げんといひし山里の、〱使は來り馬に鞍、鞍馬の山の雲珠櫻』雲珠櫻は櫻の一種。此の花下に、牛若丸と大天狗との英雄劇は開展し來る。

●爛亂せる櫻花の上に、鞍馬山の大天狗は、諸國の天狗を隨へ、羽扇を揮つて、出現し、牛若丸を應く。牛若丸は如何に。『さても沙那王がいでたちには、肌には薄花櫻の單衣に、顯紋紗の直垂の、露を結んで肩に掛け、白糸の腹卷、白柄の長刀、たとへば天魔鬼神なりとも、さこそ嵐の山櫻、花やかなりける出で立ちかな』さても美しき沙那王かな。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●春の能樂の、尤も崇嚴、壯麗絢爛なるものを象徴するは、鞍馬天狗の牛若丸にあらずや。春の美、春の力凝つて彼の一身に在り。

其十三

●春の能樂の論固より玆に盡きず、興趣も亦た湧きて已まず。始めて稿を起すの日、高村眞夫、來り招く。新海竹太郎、滿谷國四郎と吾輩と、主客、彼の畫室に團欒して、彼が新らしき歐洲を談ずるを聞きつゝ、彼の齎らし歸れる畫を見る。

●巴里の春に、チエリイと李（スモ、）と、而して最後に、林檎の花、白、茫々として邱陵を覆ひ、下に咲き匂ふと聞くも興あり。主客三人は既に歐洲に行く。未だ渡航せざるは吾輩のみ。滿谷と能樂を語るに、彼は、近ごろ頻りに、謠曲に熱心すといふ。

●李花、吹き浮べる巴里の野に、春の朝な〳〵、飛行機の、プロペラ〳〵の音、紙鳶のように呻なりつゝ。光景、瞑想するに餘あり。新海と、能樂の西を語り合ひて、寶生會に見し「鷺」の頸、恍惚として吾が眼中に來る。

●謠曲の新曲、嘘子の「鐵門」、數日中、鎌倉に於て公演さるべしと聞く。新曲公演の嚆矢なるべし。新曲は將來に續生す可き乎、將た續生せざる可き乎。此の春の能樂は多忙なりといふべし。

●吾黨、快談の中、風雪、夜窓を打ち來る。主人、趣味の人。話頭、東西に飛んで、夜の更けゆくを覺えず。門を出れば、萬樹、皆、花を著く。

眞夫、千載一遇の、歐洲の春を描き來る。彼の多趣味なるを以てして、未だ多く能樂を知らず。能樂の象徴的なる、味、盡きず。歐洲の藝術、此の味無し。彼に、「能樂の春」を見せばや。

●此の晩春、初夏。吾輩、歸省、母を伴ひて西游し、多く謠曲の舞臺を見來らんと期す。春は、瀨戸内海こそ面白かる可けれ。西游、到處、『室の海、室の海、波ものどけき春の夜の、月の御舟に棹さして、霞む空は面白やな、〳〵』の高興あるべくや。

此の稿を起すの翌日、友人角田浩々歌客、病、俄に革りて逝く。彼は富士山下の人。其の風格、才華、惜みても餘あり。彼が歿するの翌日、稿を續けて、篇を畢る。乃ち此の一篇を以て、彼の靈に捧ぐ。

三月十七日　　黑頭巾再記

妾の會つた男の人人

伊藤野枝

森田草平氏

四年ばかりも前に雁次郎が新富座で椀久を出した時に、私と哥津ちやんと保持さんが見にゆく約束をしました。さうして私と保持さんは始めから一緒に行つて、新富町についてから哥津ちやんに散々待ち呆けを喰されたあげく、這入つた時にはもう満員ですわる所がないやうな有様でした。しかし出方のあつかひで私達は二階の帳場に席をとりました。

其時の幕間にいきなり小母さんの座つてゐる前にヌーッと立つた人があります。

「酒を飲む所は何處です。」

と聞きました。

「知りません。」

小母さんもまた、ひどく「ぶつきら棒」に答へた後にハッとしたやうに顔を眞紅にしました。私は何にも氣がつかずに廊下へ出て行くその人の後姿を見送つてゐます。

「一寸、あの人、森田さんよ」

と小母さんは私の方を向いて云ひました。

「森田さんつて誰よう」

「ほら、草平つて人よ、平塚さんの――」

「へえ、彼の人が、まあ」

私はつゞけざまに、吃驚して廊下の方を見たときには、その人はもう影も形もありませんでした。

本當に、あんまり思ひがけないのでびつくりしたのです。「へえ、まあ」と幾度も私は繰り返しました。それ程草平と云ふ人が私には想像と違つた人だつたので

す。

何處から何處までキチンとして、何處をつついてもピンとした手ごたへのありさうに思はれる、しつかりした態度、あの意志を充分に現はした額、深い眼、——を持つた平塚さんの對照としては、あまりに意想外でした。ボワッとしたしまりのない大きな體軀、しまりのない唇、それ丈けでも、充分に、平塚さんに侮蔑される價値はあります。何處から見てもあの、「力」を拔かれたやうなどうにか人間の形にまとまつたと云ふやうなキリッとした處の少しもない體は、低能の人にしか見えません。私は、たつた今其處に立つてゐたその體と銳敏な、何時でも、チヤンと身がまへの出來てゐるやうな平塚さんをおもひ出して、何だか、くすぐつたくなつて仕舞ひました。

他人が問題にしてゐるのが何だか馬鹿らしいやうな氣がしてゐたことが、草平氏を見た時から私にはあの芝居が非常に興味を引きました。

「あの樣子で見ると——」私は思ひました。何時か生田先生がお話なすつたやうに、芝居氣を最初に出したのはあの間拔けた草平氏の己惚にちがひないし、面白がつて、一緒に踊つたのは平塚さんのいたづらつ氣と、ものずきで、幕切れのぶざま加減は草平氏の臆病と平塚さんの悧巧にちがひない。草平氏はあのことで器量を下げたのではなくて、前から平塚さんよりは一段も二段も下つてゐたのだと云ふ風にしか私にはとれなくなりました。草平氏は、女を馬鹿にしてかゝつて、あいにく、馬鹿になれる女を捕へそくなつて、自分よりも悧巧な女を捕へて器量を下げたのです。若しも草平氏と同じ程度のボンヤリ者か、もつと薄ノロな女なら草平氏も器量を下げはしなかつたでせう。けれどもそれでは草平氏も芝居をやる氣にはなれなかつたかもしれません。併し草平氏は他人から氣の毒だと同情される資格は充分にあります。これは平塚さんよりもずつとお人よしだと云ふことであります。一體同情をされると云ふのは人がきつと落ち目になつたときの事で勝ち目になつたときに厚意をよせることを同情するとは云ひ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ません。草平氏と平塚さんの事件にしても、まづ公表された範圍で考へる場合には同情すべきものは草平氏の方にあります。けれども、あの草平氏のお姿に接しては、つい、まづあそこらがあたり前の處と云ふ氣になつて來ます。

何處から何處までしめくゝりのないやうな口のきゝ方までがだら／＼した、神經と云ふものがあるのかないのか分らないやうな、恐らくどんなひどい虐待を受けてもへら／＼笑つてゐさうな草平氏のものごしに私はすつかり反感を起して、すべてが、あのノロマな自惚からの失敗だとしか思へなくなりました。平塚さんのしたことが嚴密な意味ではどうであるかないかは別問題として仕方がないと云ふやうにさへ思はれ出しました。同時にまた、いくら好奇でも、あの人の何處が平塚さんを引きつけたのだらうと不思議な氣がしました。

「平塚さんは唇の紅い人がすきなのですよ。御覽なさい、草平氏、陽吉氏、博氏、皆鮮かな色をした唇をもつた人達ばかりですよ」

これはたしか紅吉（？）の口から何時か聞いた言葉だと思ひますが、それにしても草平氏の紅い唇はあのボワッとした顔を一層だらけた、とり處のないものにする丈けのやうな氣がします。

併しこれは一寸會つた印象ですからもつとよくお話でもしたらいゝ處が見つかるのかもしれません。とにかく芝居の幕間に一寸會つた丈けですから、この位にして置きます。

西村陽吉氏

「石橋を叩いて渡る人」と云ふ稱號を青鞜社の同人から貰つてゐることを御本人は御承知かどうか知りませんが、非常に用心深いことはその物越しで直ぐ分りません。おちついて坐り込んで低い調子でおちつき拂つて口をきゝながら眼は何時でも注意ぶかく他人の話の奥底まで覗かうとするやうに光つてゐます。この人は本當に、心の底から可笑しがつて笑ふことの出來ない人に私には見えます。この人の心持が激昂することな

んか、なささうに見えます。何時でも平で、何時でも何かをもくろんで深く包んでおくと云ふ風に見えますけれどもこの人の聰明は直ぐと他人に感づかれる聰明です。併し「若い人には珍らしい」と必ず老人に喜ばれる聰明です。利害の念を離れては何にもない人と思はれます。一しきりは大分、江戸ッ子を氣取つてゐましたが私はまだ氏の江戸ッ子らしい處を見たことがない。江戸ッ子よばはりをして江戸ッ子らしからぬ處は岩野淸子氏と同じです。物事に淡白でない、執念深くて、あきらめが惡い――物を云つても煮えきらず、江戸ッ子のやうにテキパキと白い黒いがつかぬ所が第一、最もこれは商人にとつては一番大事な事と思はれますが、一向煮えきらぬことを云ひ〳〵相手を焦らすことに妙を得てゐます。云ひたいことを皆云つて仕舞ふことが出來ない。まつすぐに口がきけない。そのあげくに云ふ事は洗錬された江戸ッ子の皮肉でなくて、むつとする嫌味です。何處をどうさがしても江戸ッ子らしいスツキリしたところがない。どうしても商賣上手な勘定高くて他の氣持にさぐりを入れて話をする上方者です。

この頃ではまた御苦勞様な社會主義者顔！　生活々々と「生活と藝術」で悧巧ぶつて大變な勞働でもしてゐるやうな顔がをかしい。他人の勞作をもとでに商賣をしてもうけながら、その上に恩を着せたがるこの若い商人が社會主義者面！　はどう考へてもあんまり他人を茶にしてゐるとしか思へません。

「俺は金持でもこう云ふ風に貧乏人の心持も、それから同情することも知つてゐるぞ、おまけに立派な理窟までちやんと知つてゐる。世間の金持のやうに無智ではないぞ」

と云ふ意味があるのではないでせうか？　何しろ彼の人は器用に聰明に立ち廻ります。あの人に油斷のない所、心を許して高笑ひの出來ないのが彼の人が何時でも何かしら考へては常にポリシイを弄してゐる證據です。心に巧をもつてゐる人程落ちつきはらつてゐます。陽吉氏の額と眼と口とが一番あの人の心持を表は

してゐるやうに思はれます。

岩野泡鳴氏

赤黒い人テカ／＼光る顔、話がおもしろくなつて來ると大きな鼻の穴を一層ひろげて、出來る丈け口を開けて四邊の人を呑んでしまふやうな聲を出して笑ふ泡鳴氏は小膽な正直者であります。

氏のやうなみかけ倒しな人は少いと思ひます。但し氏のは思つたよりも中味が和らかいと云ふ意味です。あの鼻息ではどんなに恐い人かと思ひますがその實少しも恐い人でも何でもなく實は甚だ無造作な人であります。「そとづらの惡い人」と「うちづらの惡い人」とがあります。泡鳴氏は「そとづら」の惡い人の部類に屬する人です。從つて「內づら」は誠に神妙な人であるやうに見かけます。私たちが折々岩野さんのお宅に伺つて一番心を引かれたことは泡鳴氏が淸子さんに對しては如何にもをとなしい、優しい旦那樣であつたと云ふことです。泡鳴氏の感化らしいものを淸子さんに見出すのはむづかしい事でありましても、淸子さんの感化だとすぐ氣がつくことが泡鳴氏の方には可なりありました。家の中では泡鳴氏よりも淸子さんの權力の方が勝を占めてゐるやうでした。併したまに行つて私共が見たり聞いたりする範圍ですから全ての時に於いてさうであるかないか勿論其處までのことは云へません。併し外に向つてはあくまで强情我慢を云ひ出したことはどんな屁理屈であらうとも一歩も後には引かぬと云つたやうな泡鳴氏の半面に、さう云ふ點があり得ると云ふことは不思議な事でなくてはなりません。

泡鳴氏が本當におひとよしだと云ふとは此度の事件に就いても遺憾なく發揮されました。その他、氏の創作の長篇の中の主人公のどれにも皆ハッキリ出てゐます

泡鳴氏は大變人を後輩あつかひにしたがる人です。併し如何なる場合にも淸子さんを丁寧に扱ふことだけは決して忘れはなさらなかつた事丈けは事實です。この點では淸子さんは非常に幸福な人ではなかつたでせうか。外に向つて岩野泡鳴氏を推したてると同時に岩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

野清子氏を推賞しました。他人はこれを笑ひました。けれども泡鳴氏には毫もこれは笑事ではありませんでした。非常に眞面目な事なのでありました。それでこそ今だに清子さんには、二目も三目も置いてゐるのです。世間へ出ては出來る丈け大きな顔をしてえらがりたい泡鳴氏が清子さんにからおどしをされたり、腕をまくられたりしながらどうする事も出來ないのはそのせいです。泡鳴氏はたゞ單純な、えらがり屋であります。何時でも具足に身をかためて眞向から人を睨めつけてゐます。處が具足をとれば何でもないたゞの人よりは餘程よはい木つ葉武者なのです。泡鳴氏が一途に、何もかもおし退けて行かうとするあの向不見はおそらく氏のせつかちな性分がさうさせるのです。泡鳴氏には冷靜な理智などは全くないもの丶やうです。從つて何事にも公平な批判をすることは出來ないやうに思はれます。泡鳴氏の云ふことが何處までも自分と云ふものから離されずに何時でも自分を最上のものとして考へる處は理智の力で自分を取静めることの出來ない無反省な人であるかだと思ひます。それでその人が其の中にたつた一人の自分を譲つた細君に如何に不識見なことをされてもそれをどうすることも出來ないのが非常に氣の毒に思はれます。彼の泡鳴氏がなまじつかな佛心を出して禮を守つて人格を尊重してやつた、たつた一人の女からあ丶も滅茶々々な事になるとは何と云ふ皮肉なことでせう。泡鳴氏たるものこれから夢にも他人の人格の尊重などはすべきでないことをお覺りにならなくてはならない時だと思ひます。泡鳴氏は何處までも泡鳴式にと申上たい。けれどもう一歩進んで考へますと、この人格尊重も氣むづかしい、然し必要な、細君をつなぎ止めておく爲めの方便にすぎなかつたかもしれません。さうとしても泡鳴式の無造作加減がかう云ふ處にも現はれて來ますし、それからまた、その無造作にとりきめられたその方便の爲めに、最後に至つてその方便に背負投げを喰はされたと云ふことも偶然ではなくなつて來ます。何方にしても泡鳴氏にはおどかされやすいかはりにまた、手の内を知ることもはやく出來ます。此の傲慢不遜は少しも氏を知つてゐるものには腹を立てる事が出來ないばかりでなく、非常に滑稽に思へるのはその爲めであります。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

谷崎潤一郎論

人物評論（七十）



▽谷崎潤一郎氏に就いて

赤木桁平

ある與へられたる藝術品を評價する場合に、創造美といふことにのみ重きを置いてこれを鑑賞しようとするものは、先づ作者その人の「腕」の優劣を問題とする。併し「腕」の優劣は創造美の部分的な徵驗とはなりえても、未だ創造美の全體的な徵驗とはなりえない。創造美の全體的な徵驗となりうるものは、寧ろ「頭」の善惡である。何故なれば藝術製作の過程に參加して部分的完成を扶けるのは「腕」の重要なる役目であるが、藝術全體の活動を統整し、藝術全體の効果を一點に焦約するのは「頭」の主要なる職分だ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からである。かういふ意味に於いて、疑ひもなく「藝術は能力である」（クンスト、イスト、ケンネン）。單に製作的態度の眞摯と、主觀的背景の深邃とのみを以てしては、未だ完全なる藝術は成立たない。完全なる藝術が成立つためには、必ずや特種の藝術的能力を要求する。この見地からすると、谷崎潤一郎氏は明かに「能力」（ケンネン）の藝術家である。從つて氏は「腕」の藝術家であるとともに「頭」の藝術家である。

「腕」の妙味は表現の妙味に盡きてゐる。この表現の技能に於いて、谷崎氏は殆んど天才的（セニアール）ともいふべき或物を有してゐる。氏が一朝にして盛名を博しえたる當時の作品、例へば「少年」前後の諸篇のごときは、心憎きまでに氏の饒富なる才藻が現れてゐる。しかもその饒富なる才藻たるや、讀者をして後天的意味を有する鏤心彫骨の修練を聯想せしめるよりも、寧ろ氏の素質に具はる先天的な禀賦を想倒せしめるものがある。殊に氏の胸臆に醱酵したる藝術的感興が、一つの詩境を覓めて縱橫に奔逸する時は、その放恣なる空想と、その婉麗なる叙述とが、絢爛巧緻なる技巧の綾に包まれて、殆んど讀者の心目を眩惑する底のものがある。然かのみならず氏が得意とする變態的心理を取材とし、糜爛せる官能の交錯と、妖艷なる情感の惑溺とを描破する點に至つては、わが文壇にその人尠からずと雖も、未だ氏の「腕」に桔抗しうるものはない。思ふに氏が獨自の壇場であらう。

小宮豐隆氏は嘗て谷崎氏の小説集「刺靑」に批判を加へ、氏の文章を評して「落語家的完成」であると云つた。予は敢て小宮氏の批評に對して異議を提出しやうとは思はない。併し尠くとも谷崎氏が最近の作品には單に「澁滯がない」といふこと以外、單に「磨きの掛つた巧みさがある」といふこと以外、單に「調子が陽氣に滑つてゆく」といふこと以外、然かも單に「肌に觸るゝほどの生々しさを持つ」といふこと以外に、一種の爛化したる滋味と、一種の悲調を帶びた餘韻とがある。「お艶殺し」を讀み、「お才と巳之介」とを讀むものは、この滋味、この餘韻に依つて、動もすると浮華饒舌に亘らんとする作者の技巧が、漸く藝術的に救援（エルレーシエン）されてゐる事實を發見するであらう。それと同時に、氏が最近の諸作には、殆んど收拾すべからざる底のだらしなさと、殆んど濟度すべからざる底の狹さとがある。「お才と巳之介」及び目下東朝紙上に連載されつゝある「鬼の面」に於いては、殊にこの病弊が甚しい。前者のだらしなさは四十女の色氣に比すべく、後者の狹さは五十男の欲氣に比すべし。予はかうした見地に立つて、遺憾ながら氏の近業には氏の技巧に於ける頽廢（デカダンス）を語るところも多いと云ひたい。

特種の世界に對する注意力の尖銳なる點に於いて、對象の把握に於ける理解力の透徹せる點に於いて、さらに素材の招攏取捨に於ける綜合力の豐富なる點に於いて、谷崎氏は「腕」の優れた作家であるとゝもに「頭」の優れた作家である。從つて氏は摑むべきものは駛つかりこれを摑み、捉ふべきものは駛つかりこれを捉へ、放縱なる空想を驅使して、しかも現實との融化を忘れず、對境の表裏に着色して、あくまで自家の情調を喪はない。——氏が一個の詩人である所以は全く茲にある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

谷崎氏の素質が詩人的であるところに、また氏が作家としての疾患も潜んでゐる。元來詩人は概念的な眼を以て自然や人生を觀たがるものである。自然や人生の内容を經緯する一點一劃の微に着目して、これに精到冷徹なる描寫と批判とを加へることは、只管に「感激」をのみ急ぐ彼等の快しとしないところである。氏の描ける世界が、氏の優れた手腕と頭腦とを以てして、猶ほ概念化されたる自然と人生とを呈示してゐるのは、全くこの病弊に基づくものである。從つて氏が描ける性格の多くは氏自身の觀念界に跳躍する傀儡たるに過ぎないもの、氏の寫せる人事の多くは氏自身の趣味性より捻出せられたる空想たるに過ぎないもの、――甚だしく非現實的、非普遍的なものとなつてゐる。殊に氏は自家の藝術的境地を高調するために、好んで詩人的誇張を慣用するの結果、その作品をして益々非現實的、非普通的なものとしてゐる。「金色の死」に於いて然り、「神童」に於いてもまた然りである。予をして予の所感を忌憚なく云はしめると、谷崎氏は現實に意を斷つて、ポーのごとき純幻想の世界に入るか、但しは現實に執着して、ワイルドのごとき純官能の世界に殘るか、二途のうち一途を撰ばずんば、氏の世界は終に至醇なる藝術的境地を見出しえないであらう。蓋し氏の現在は「詩」と「散文」と、「空想」と「現實」との中間を彷徨してゐるものである。

殊に著しくこの問題に就いて考へさせるものは、谷崎氏の諸作に現れたる心理描寫である。心理描寫は現實的な境地に實存性（ウイルクリツヒカイト）を附加する最善の手段である。然るに一面空想的であり、一面現實的である氏の作品に於いては、この心理描寫が安んじて適歸すべき自己の地盤を失ひ、心理描寫そのものをして意外な失敗に逢會せしめてゐるものがある。「神童」のごときはその絶好なる適例で、「鬼の面」に於いても、また歴々として這個の失敗を指點することが出來る。これに較べると、氏が得意とする變態的心理の描寫は、心理そのものの性質が既に異常（アブノルム）であり、且つその内容が氏自身の宗とする藝術的境地とも吻合するために、「詩」と「眞」とがぴつたり一致して、意外な藝術的完成を示してゐる。

予はこれから谷崎氏の藝術的境地及び藝術的態度に就いて一言したい。

谷崎氏は「美」に於いてのみ「神」を見出さうとする人である。而して「靈」に對する「肉」、「善」に對する「惡」を拉し來つて、それから相互の間に於ける慘憺たる戰を描き、常に「靈」に對する「肉」、「善」に對する「惡」の捷利を語つてゐる。氏に從ふと、眞當の「美」は「肉」に於いてのみ存し、「惡」に於いてのみ潜むといふのである。氏の態度は徹頭徹尾現世的である。徹頭徹尾本能的である。予はこの點に於いて、「靈」と「善」とにのみ「神」を見出さうとする予等の道と、氏が全然反對な道を歩みつゝあることを悲しむものである。

遮莫、予は眞理の證（あかし）を主觀の裡にのみ認めやうとするものである。されば予は人間の生きゆく對象、即ち何物に向つて生きるかといふことよりも、人間の生きゆく態度、即ち如何にして生きるかといふことに非常

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な注意を拂ふ。從つて予は「惡德の花」を書いたボードレエルの態度や、「ドリアングレーの肖像畫」を書いたワイルドの態度にも、尙ほ且つ敬虔なる念慮を抱いて對することが出來る。何故なれば彼等にとつては、「惡」なり「肉」なりが予等の所謂「神」であつて、「惡」に奉仕する態度、「肉」に日參する態度の裡に、取りも直さず儼乎たる宗敎的意識が存在するからである。要はその把握の强度如何、その信條の硬度如何にある。果して然らば、ワイルドのごとく「肉」に陶醉し、ボードレエルのごとく「惡」に惑溺する谷崎氏の藝術的態度は如何。

予は屢々谷崎氏の作品は人間性の尊嚴を侮辱したものだといふ憤懣の聲あるを聞いてゐる。予もまた予の立場からすると、衷心からこの憤懣の聲に和したく思ふ。實際氏は「美は神なり」といふ自家の信條を徹底せしめるためには、どれだけ人間を殘虐に取扱うても平氣である。蹈み、蹴り、毆り、唾棄し、放尿するも憚らない。その殘忍酷薄な描寫は、讀者をして思はず面を蔽はしむるものがある。「惡魔」の主人公を見よ。「お才と巳之介」の主人公を見よ。氏が初期の傑作ともいふべき「麒麟」その他に於いて暗示せられてゐる氏一流の哲理は、その後の諸作に至つて益々露骨な鋒鋩を現してゐる。若し玆にトルストイ的論法を以て氏に薄るものがあれば、彼は必ずや「人生は果してかくのごとき乎」と反問するであらう。併しそれは駄目である。かくのごときが畢竟氏の動かしがたい信條なのであるから……

然らば攻擊の方位を一轉して、谷崎氏はワイルド乃至ボードレエルのごとく、自家の信條に於いて眞に「神」を發見してゐるかどうか。――これが最も重要なる問題である。なるほど氏が自家の信條を宣傳する態度は傍若無人である。一生懸命である。そしてその執着もかなりに强い。けれども冷靜なる眼で氏の態度を見ると、それらのすべてがどうも氏の趣味（ゲシュマック）から出てゐて、信仰（グラウベ）からは出てゐないやうな感じがする。從つて氏の態度が有する眞摯と執着とは、通人輩が點茶や生花に對して有する眞摯と執着とに類するもので、非常に宗敎的意識が稀薄である。この事實は氏の作品そのものを、動もすると浮華輕佻の色に彩らうとする傾向として現れてゐる。かくのごとき傾向はワイルドやボードレエルの作品に於いては到底發見することの出來ないものである。言葉を換へて云ふと、氏の作品と氏の生活との間には、猶ほかなりな罅隙（リュッケー）がある。二つのものがぴつたりと密着して相離れることの出來ないやうな自他一致の融合感が乏しい。

玆まで論じ來つて予が谷崎氏に向つて云はんと欲するところのものは果して何であるか。氏が從來の藝術的境地に於ける猶ほ一層の沈湎と惑溺とであるか。乃至は氏が從來の藝術的境地に於ける根本的な破壞と改造とであるか。この點に關しては、氏が氏の近業「鬼の面」に於いて、偶々その主人公の口を藉り、最も適切に、且つ最も賢明に自己の將來を豫言してゐる。

「自分に罪惡を欣ぶ性癖があるとすれば、自分は兎に角善人ではない。自分には『善』よりも『惡』の方が餘計美しく感ぜられる。この證

落した性癖を直さないうちは、己は到底文學者として崇高な藝術を作り出すことは出來ない。」

予は谷崎氏が自己を識るの明あるに服するとともに、冀くは這個の陥溺した藝術的境地より擺脫して、一日も早く新しい第一歩から踏み出すに至らんことを切望するものである。かく云へば予の言を捩けて或者は必ず云はう。「谷崎氏は現在の世界にあつてこそ谷崎氏である。この谷崎氏をして對蹠の世界に轉住せよといふ要求が既に誤つてゐる。況んや谷崎氏の素質にかくなりうる可能性が存在すると思ふに至つては、その淺見寧ろ嗤ふに堪へたるものがある」と。論者の非難に一應の理由が存することを予は泌々遺憾に思ふ。併し氏と雖も未だ青年作家である。終始一貫現在の世界にのみ沒頭して、あくまでその世界の凝視と低徊とに滿足してゐられやうとは、聰明なる氏の未來としてどうも想像することが出來ない。兎に角氏の前途にはかなり大きな動搖が豫想されてゐる。予は氏の「腕」を愛し、氏の「頭」を惜しむが故に、氏に向つて「不可能」をも猶ほ且つ强要せんと欲するものである。（五、三、一八）

▽谷崎潤一郎論

谷崎精二

田村俊子論の時に松魚さんが引張り出された格で潤一郎論に私が引張り出される事となつた。世間の人々は夫婦とか兄弟とか云ふ者の間から何か變つた辛辣な觀察でも得やうと期待して居るか知れないが、骨肉の關係は他人とは全く異つた方面に繋がつて居るのだから共通した興味が割に薄いものである。殊に私と潤一郎氏とは此の五六年全く別居して居るので私は潤一郎氏の日常生活を殆ど知らない。私の知つて居る限り家庭に於ける潤一郎氏は朝寢坊で、氣難かしやで、可成ずぼらな、然し又何處かに締つた處のある人である。實は之れだけにして引下つてしまひたいのだが、それでは許して貰へさうもないから以下聊か文壇に於ける先輩としての潤一郎氏を論じてみやう。

如何なる前世の因緣でか、私と潤一郎氏とは骨肉の兄弟として生れ合ひ、「四つ違ひの兄さん」と云うて暮して居る中に」お互の氣持は漸々懸け離れてしまつた。現在に於て二人は其の人生觀も宇宙觀も、從つて又個々の事象に對して抱く思想感情も著しく相違して居る。潤一郎氏はより多くマテリアリスチック、私はより多くスピリチュアリスチックである。然し私は玆で決してマテリアリストがスピリチュアリストより劣つて居るなどゝ云はんとするのでもなければ、又生命を肯定した人が唯肯定したが爲めに生命を否定した人より優れて居るとも思つて居るのではない。要は唯個人が各自の生れ乍らの運命を荷ひつゝ如何に勇敢に眞摯に生き得たかと云ふ事である。

潤一郎氏が始めて文壇へ現れた時之れを九天の高きに祭り上げた人に上田敏氏がある。永井荷風氏がある。是等の人々は博學な聰明な紳士で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるが私に云はせれば要するにデイレツタントである。而して潤一郎氏はデイレツタントに喜ばれる要素を多分に持つた作家である。

話は變るがツルゲネフがガルシンを評して「ガルシンは眞の藝術家たる資格を悉く備へた作家であるが唯一つ大きな藝術家となる要素を缺いて居た。」と云つたと云ふ。ツルゲネフはどう云ふつもりでから評したのだか知らないが、私に云はせれば此の大きな藝術家となるべき一つの要素とはポピユラリテイーと云ふ事である。幸にして又不幸にして潤一郎氏は此のポピユラリテイーを多分に持つた作家である。然し其れが爲めに潤一郎氏がガルシンより賢いと云ふ事は決して云へないのである。

潤一郎氏が始めて文壇に出た頃私は氏の作品の熱烈なる讃美者であつた。我等青年の爲め日本文壇に前人未發の新路を開拓してくれる人を氏に於て見出さうとした。然し今日ではもう氏の藝術に對する敬愛の情は大分失せて居る。之れは恐らく私一人ではないかも知れぬ。何處かで潤一郎氏はこんな事を云つて居た樣に思ふ。「あらゆる事業に成功するには聰明と眞摯との二つの資格を要する。而して他の事業に於ては聰明に於て缺くる處あつても眞摯に於て不足が無ければ必ず成功するが、唯藝術に於てのみは如何に眞摯であつても聰明に於て缺くる處があれば成功し得ない云々。」此の言葉は蓋し最も良く潤一郎氏の長處と短所とを現したもので、私達は之れと全く反對の意見を抱いて居る。實業家や政治家はどんなに不眞面目であつても、卑劣であつても聰明ならば成功するかも知れない。石の這入つた罐詰を賣つて男爵になつた男は聰明に依つて成功した好例であらう。然し藝術家に於て最も尊重すべきは常に眞摯と云ふ事でなければならぬ。若し日本の文壇で聰明なる人物の代表として鷗外氏を舉げ、眞摯なる人物の代表として漱石氏を舉げ、(必ずしも鷗外氏が不眞面目であり、漱石氏が不聰明であると云ふ意味ではない。)何れを尊重するかと問はしむれば私は何の躊躇も無く漱石氏を執る。

潤一郎氏は有り餘る程の聰明を持つた人である。而して氏の作品は悉く氏の聰明に依つて造り上げられた物であるが、其の聰明を裏づけるべき眞摯な、敬虔な氣分が乏しい爲め、ともすれば我々に多少の反感を起させる。近い例は「お才と巳之介」や「獨探」である。私達には藝術家がどんな場合に於てもあゝした暴慢な、不謙遜な氣持を抱き得るとは到底考へられない。暴慢や不謙遜は常に人生に對する正しい理解と同情とを滅ぼすものである。

かうは云ふものゝ今の文壇で享樂派とか耽美派とか云はれて居る多くの他の人々の淺薄愚劣なる作品に比べてみると流石に潤一郎氏の作は遙か傑出したものである。唯聰明なる人のみが其の聰明に依つて爲し得る明快なる判斷がある。精緻なる描寫がある。例ひ眞摯に於て缺くる處があるも何此の作者が豐かな天分を持つて生れ出でた大作家である事を思はしむるものがある。然し氏の「聰明」はともすれば其の鮮かなる個性的特色を薄らがせて世間的興味の中へ溶け込ませやうとする惧れがある。潤一郎氏がどんな醜惡な、どんな不自然な人生を描いても其れが單に氏の「聰明」に依つて造り出された物ではなく、其の「眞摯」に依つて知ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れ、感ぜられた物である限り私達は深い敬愛の念を以て之れに對するべく躊躇しない者である。凡そ一の作家が如何なる處に未知のライフ、インタレストを見出さんとしつゝあるか、如何なる處に自己の醇眞なる生活を築かんとしつゝあるか、私達が藝術家の作品に依つて先づ知らんとする處は是れである。而して又如何なる時代の如何なる藝術に就いても是れを外にして何の求むる物があらう。

要するに潤一郎氏はトルストイや、ドストイエフスキイの樣な博大な宗教的な、（玆で私が宗教的と云ふのは必ずしも神を求める心を指すのではない。人生經驗に對する統一的批評の精神を云ふのである。）所謂萬人の讀むべき作品を書く作家となるべく餘りに其の人生的興味が狹く、且又其の生活態度が官能的にのみ偏して居る。さればとてポオや、ボオドレエルの如き主觀的の情熱詩人となるべく餘りに熱意と誠實とを缺いて居る。潤一郎氏の有り餘る「聰明」は、知らず、氏の未來を如何なる方面へ進展せしむるであらうか。――妄言多罪。

▽我國唯一の唯美主義惡魔主義の作者

本間久雄

○私は今こゝで谷崎潤一郎氏の藝術全體について兎や角いふ準備を持つてゐない。たゞ最近に讀んだ氏の作一二から受けたほんの印象の一端を述べ得るに過ぎない。

○わが谷崎氏は前からオスカア、ワイルドに比較されてゐる。實際谷崎氏の藝術の與へる味ひの最も特色ある一面は、たしかにオスカア、ワイルドの藝術の與へる味ひの最も特色ある一面と非常によく似かよつてゐる。『刺靑』の作者として、『少年』の作者として、『惡魔』の作者として、『秘密』の作者として、又は『饒太郎』の作者としての谷崎氏の藝術は、ワイルドが『架空の頽廢』一篇の中で論じた所謂『唯美主義』の理論卽ち人生の藝術化といふ理論そのものを、直ちに實際具體化したものと見ることが出來る。谷崎氏は、この意味で、最も正當な意味に於て、我國に於ける唯一の唯美主義の作家である。

○しかし、最近の谷崎氏は、唯美主義(エフセチシズム)の作家としてよりも、寧ろより多く所謂惡魔主義(ダイアボリズム)の作家に傾きつゝあるやうである。最も惡魔主義といふことも見樣に依つては唯美主義そのものゝ一要素に過ぎないから、殊更惡魔主義の作家だなどゝ色分けする必要がないといふ人があるかも知れないが、それならばそれでよい。唯美主義中の惡魔的傾向に氏はより多く最近傾いて來たといふことに止めておかう。そしてその最もよい例は昨年九月の『お艶殺し』及びこの三月號の『恐怖時代』である。

○尤も谷崎氏の餘程前の作『惡魔』に於て、この傾向はすでに〳〵鮮かにあらはれてはゐる。あの作『惡魔』は、こゝに云ふまでもなく、最も世紀末的な病的官能の追求者を主人公とした作であつた。尋常一般の官能追

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

求では滿足することが出來なくなつて、遂に一般の人が嫌惡するやうな醜い官能を追求するやうになる主人公の心持ちはいかにも鮮かに、あの『惡魔』一篇に出てゐた。この傾向は更に『饒太郎』に至ると一層著しくなつてゐる。饒太郎が情婦に、普通の官能滿足では面白くないといふので故意（わざ）と、アーテフイシヤリーに、吾れと吾が身を赤裸にして麻繩で縛つて鞭で打つて貰つたり、足蹴にして貰つたり、痲藥を嗅がせて貰つたりして、そして、さういふ狂的なことに堪へがたい快樂を感じてゐるところの描寫などは恐らく、我國の文壇中類のないばかりでなく、西洋にも類ひ少ないであらうとおもはれる。尤もワイルドの『ドリアン、グレー』などには、この醜の中に美を見出さうとする傾向がいち早く現はれてはゐるが、それもこの『饒太郎』などに比べると餘程思想的、批評的で、病的狂的の味ひが少い。（但し、そのために『ドリアン、グレー』の藝術的價値を云爲しやうとするのでは決してない。）

○更にこの惡魔的傾向が著しくなつてゐる最好の例は、『お艶殺し』の中の所在にあらはれてゐる、又『恐怖時代』の基調をなしてゐる兇暴性、殘忍性を愛し喜ぶ傾向である。かの『ドリアン、グレー』の主人公も、やがては「どんな兇惡なことでも、それが却つて美の概念を實現し得る唯一の樣式である」と思ふやうになり、そして遂には平氣で人を殺し、そしてそれを却つて喜ぶやうになつたが、これと同じ傾向がお艶と新助との心の傾向に於て見ることが出來る。否、ドリアン、グレーの場合よりも一層猪突的にこの傾向を追うてゐる。「あまたの血だらけな罪業から出來上つた夫婦の間には、やはり血だらけな刺戟がなければ互ひに樂しみが薄いやうに感ぜられる」お艶と新助の心持ち、「人間の顏さへ見れば、直ぐにその肉體の醜たらしい屍骸になつた光景を想像する」といふやうなこの二人の心持ち、かういふ爛熟した、病的な兇惡を愛し、殘忍を喜ぶ心持ちは、物凄い筆で、いかにも鮮かに描かれてゐる。

○そして又、かういふ兇惡を愛し、殘忍を喜ぶ極端なデカダンの心持ちは、とりも直さず作者その人の心持ちであると云ふべきである。言葉を換へて云ふと、作者その人に取つても、かういふ病的愉樂は面白くて堪へがたいらしい。例へば『お艶殺し』の中のあの純眞な感情の把持者である筈の清吉が、始めて人殺しをやつた瞬間に、大低ならば——作中人物の性格の自然的推移の上から云へば——茫然自失するか、乃至は懊惱煩悶すべきところを、「つい、先（さつき）まで笑つたり怒つたり騷いだりした三太の肉體がをかしいくらゐ默り込んで材木のやうに倒れてゐるのを足先で蹴つて見ると、恐ろしいやうでもあり、馬鹿らしいやうでもあつた。何だか人間といふものがひどく巧妙な、面白みのある機械のやうに感ぜられた」といふのが、清次がこの殺人といふ大事件に臨んでの心境であるが、同時に、この言葉は、作者その人の對題材の態度（アチチユード）を說明してるものである。

○谷崎氏の作中人物が、いかに、この殘忍、兇惡を愛好するか、乃至作者その人がいかにこれを愛好するかといふ最もよい今一つの例は、氏の『恐怖時代』である。この一篇は、その題が示してゐるやうに恐怖その

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のゝ權化とも云ふべき人物乃至事件を描いたものであるが、しかし作者のこれに對する態度は全然唯美的であり、享樂的である。すなはち、作者自身に取つては、描かれた人物なり事件なりが、恐怖すべきものとしてゞはなくて享樂すべきものとして映じてゐるのである。從つて作者はこの恐怖すべき事件の具象化とも云ふべき殺されて死ぬ人間の斷末魔の苦しみに對しても、恐怖するどころか、却つていかにも興がつてゐるおもむきがある。例へば、この作の中で、醫者玄澤が毒殺されるところといひお由良殺しといひ、梅野殺しと云ひ、又、太守殺しのところで、殺された太守が「體をろくろくのやうに伸び縮みさせて顫へた揚句ぐるりと廻つて前方へ頭を向けて仰向きに倒れる」とか云ふやうに、作者は、殺されて死んで行く人間の斷末魔の樣子を、いかにも面白げに、愉快げに、ワイルドの言葉を借りると、さういふ殘忍をなこと、兇惡なことが「却つて美の概念を實現し得る唯一の樣式である」かのやうに享樂しつゝ描いてゐる。この惡魔的傾向、乃至「惡に對する偏愛」(predilection for evil)の徹底境を描いてゐる點に、わが谷崎潤一郎氏の最近の藝術が再々に與へる味ひの最も特色的な一面があるやうに思はれる。

○尤もかういふ殘忍、兇惡な人物事件に對する描寫は、我國の文學中にも他に求められないことはない。例へば、最近の文學中では默阿彌の作などには殊にこれが多い。しかし默阿彌物などのかういふ描寫は、たゞ殘忍を殘忍として、兇惡を兇惡として、乃至醜を醜として描いて居るに止まり、『恐怖時代』の作者のやうに、この中に美を求め、快樂を求めて居るもの、乃至は、その中に美を認め、愉悅を感ずるが故にさういふ醜の方面、惡の方面を力說してゐるものでは決してなかつた。この區別は西洋の文藝史に於ける自然主義と、唯美主義乃至惡魔主義の場合に於ても同じことである。要は殘忍、兇惡、醜といふものを、殘忍そのもの、兇惡そのもの、醜そのものとして觀照し乃至描くか、又は、それらを「美の唯一の樣式」として觀照し乃至描くかといふことにある。この意味からわが谷崎潤一郎氏は、思想的にも情緖的にも何と云つても、今の文壇唯一の唯美主義者惡魔主義者である。

▽谷崎君

正宗白鳥

谷崎君のやうな非凡な藝術家が濫作しなければならぬ境遇にあるのを悲しみます。「恐怖時代」を讀むと、小芝居か活動寫眞の怪談物を見るやうな感じがしました。「法成寺物語」が氏の近時の傑作です。

▽谷崎潤一郎論

長田幹彦

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

瀧田氏から谷崎潤一郎論をと云つて交渉のあつた時、私はどうも他人の作品を論議したり評價したりすることは到底柄にありませんからと云つて引下がらうと思つてゐると、瀧田氏はそれを云ひ出さぬ前にもう藝術上の論評は他の方々に頼んであるから貴方には酒間、乃至絃歌の巷に取圍まれた場合の谷崎氏を書いて與れと云はれる。さすがに私もそりや面白い引受けませうと云つて買つても出られなくなつて、方々戸惑ひしながら實はさういつた安手な側へ廻る自分の器量の惡さをつくづく感じました。これは全く愚痴でも何んでもありません。

谷崎氏の作品は何を云つても現時の文壇に於て私の最も愛好し、尊敬するものゝひとつであります。殊に前期の諸作品は私を熱狂させ、私に藝術に對する或種の理解と、敬虔の念とを與へて與れました。それと同時に私は人間としての谷崎氏も實に好きだつたのです。

私が初めて所謂酒間らしい酒間に谷崎氏を見出したのは京都でゞした。祇園、先斗町は云はずもがな、或時は奈良へ、或時は宇治へ、又或時は大阪へ、殊に丁度四月から六月へかけて一番京阪のいゝ時候だつたので、初めてその地方へ遊んだ氏と私とは思ふさま羽をひろげて遊びました。先斗町の茶屋の鴨川に沿うた離座敷でまるで根が生へたやうにゆたりと盃をあげてゐる氏、都踊の御殿から踊り妓の花とゆらぐ舞臺を冷たい眼をして默つて見下してゐる氏、宇治の月夜に兩手で顏を掩ひながら甲に冴えるいゝ喉で薄雲を唄つてゐる氏、それから木屋町の宿で机の傍に麥酒を置きながら、一字一句も疎かにしないやうな熱心な態度で執筆してゐる氏、さうかと思ふと又蒸し蒸しする奈良の春日の杜陰を脱ずれも厭はずに新藥師寺の方へ歩いてゆく氏、さうした様々な姿をした谷崎氏が今私の眼の底に映つて來ます。しかもそれは強い印銘をもつて私の心に焼きつけられてゐる記憶の一部分なのです。

氏は其の時分澁いお召の揃つけで、どう見ても相場師かさもなくば水商賣の人間としきや思はれないやうな好みの風裝をしてゐました。あの丸々と肥つた腹から出て來る地聲を聞いてゐると、どうしても生一本の江戸ッ兒といふところがありました。傳法な江戸ッ兒でなくて、何處か寡默な、大店の主人のやうなどつしりした品のいゝ江戸ッ兒でした。京都の或通人なぞはほんまの江戸ッ兒やなあと云つて、氏に逢ふ度に引入れられるやうにうつとりその一擧一動に見惚れてゐたくらゐでした。

併し私に云はせると、氏は決して典型的な江戸ッ兒ではないのです。所謂江戸ッ兒といふにしては餘りに聰明で、しかも江戸ッ兒の最も忌んだ執着といふものを持ち過ぎてゐるやうに思はれます。趣味といふ點から云つても氏は根底からの江戸趣味ではありません。譬へば食べものでも秋刀魚のはしりとか、鮟鱇とかいつたやうなものも無論好まれるでせうが、併し私の接した範圍では氏は血の垂れるビフテキが最も好きでした。そして日常の行住坐臥にも風姿や態度に似合はぬ西洋臭いところがあつて、往々その間に矛盾を認めました。所謂傳統的な趣味をそのまゝ何等の批評も加へずに隨承してゆく側の人でなくて、自分の嗜好に任せ生理的の要件に從つていつでもその傳統を破壞し、改造してゆくことの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出來る人でした。島原の廓の後朝に、人ならば不味い臺のものを押しつけられて態と粋がる處を、氏は西洋料理を食ふと云つてどうしても聞かなかつたほと趣味性の倨傲をもつてゐました。つい此間逢つた時にも氏は紋齋縞の下着に、小紋の上着を重ねて、その上から羽二重の元祿袖の羽織を着てゐましたが、さういつた好みでゐながら頭髪は洋服を着たら似合ひさうなもぢやもぢやした長い蓬髪にしてゐました。ちよつとした洒間にでもさうした倨傲に、個性的な趣味性の現はれる處に氏の藝術上の强みや人格としての强みがあるのではありますまいか。

それから又氏の軀幹や風姿をみて、どうしてこの人からあんなマゾヒズムなどが出て來るだらう、あれはきつと附燒刃だ、などと云ふ人を往々見受けますが、しかしさう云ふ人も二三日谷崎氏と行動を共にしたならばきつとその來る所因を觀取することが出來るでせう。私は氏のお召の着物を徹してその下に躍る氏獨特の血と神經とを洞視するとの出來るものでなければ、氏の最近の作品を云議することは出來まいと思ひます。つまり一言にして云へば、氏は江戸ッ兒でゐて西洋人で、少しのセンチメンタリズムもなければ、亦道徳的な處もない生れながらの遊蕩兒だらうと思ひます。私にはどう考へても、短歌の氣分を除去した吉井勇氏といふ氣がしてなりませぬ。藝術家らしい藝術家といふ點から云へば、今の文壇では先づ氏を以つて随一に推さなければなりますまい。

いやに上を向いた物の云ひ方をして谷崎氏には申譯がありません。妄言多謝々々。

▽谷崎氏の作品

上司小劍

谷崎氏のものは濃厚なところが好きです。私たちのやうにかみがたの俗惡な濃厚さの空氣の中に育つたものから見ると、谷崎氏のものは東京式の清洒な濃厚さ……とでもいふべき味があつて、其の點を殊に珍重します。谷崎氏は何處で育つた人か知らぬが、私たちから見ると、繪の具の塗りやう、極彩色の仕かたが、何うしても矢張り江戸前に見えて、こツてりした中にも、清々しいところがあると思ひます。其の代りにかみがた流から見ると底力の足りない、たとへば羽左衞門の藝術のやうに表面の力は十分で、反撥性とか彈力とかいふものには富んでゐるが、（もとより羽左衞門以上に）かみがた流のねちねちした底力がない。華々しいやうには見えても、かみがた流の骨まで舐ぶるといふシツコさに乏しい。しかしこれは惡い意味でいふのではない。さうしてかういふことは十分にかみがた流の『平凡な中に强いところ』のある一種の深刻味に充ちた生活の味を幼い時から嘗めつくした人とゝもに語り合はなければ、到底眞個の意味を酌み取つて貰ふことは出來ぬ。

谷崎氏の最近のものでは、矢張り『恐怖時代』に感心しました。上手な刷毛の使ひかただと敬服しました。あれは實によいものでした。狭苦しい壺の中みたいなところへ、えらさうな顏をして坐り込みつゝ、人生の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

否定とか肯定とか言つて、眼を白黒にしてゐる先生の身體をば、あゝいふものを煎じて、鰲の糞でも混ぜたので、洗つてやりたいやうな氣がします。

▽天才か、神童か、傳奇小説家か

加能作次郎

天才か、神童か、または通俗な傳奇小説作家か――兎に角谷崎潤一郎氏は現文壇の一異彩である。多くの作家の中に、氏の如くその作風傾向の特異なものはなからう。現今創作壇の趨勢をかりに色別して見ると、大體に於て、かの自然主義派系統を踏み來れる作家と、最近の一般の思想傾向に影響されたらしい所謂人生肯定派の作家との二つに別けられると思ふ。然るにこの間にあつて谷崎氏のみは其の何れの流派にも屬せずひとり超然として獨自唯一の境を占めて居るやうである。

五六年前、自然主義的の創作が漸く人心に倦まれ、それが行きつまつたとか何とか言はれて、その反動としてネオ、ロマンチシズムだとか新情緒主義だとか神秘主義だとかいふやうなことが盛に唱へられ、自然主義的作物の現實的客觀的なるに對し感傷的な情緒を主とした、寧ろそれに自ろ媚び耽つたやうな安價な追懐小説が盛にあらはれた。谷崎氏が『少年』や『刺青』等の作物を出して、一擧にして文壇に名を揚げたのは、丁度其の時分のことだつたと思ふ。そして氏自身もまた、その題材が多く過去時代の生活を取扱つてあるといふやうな點から、一時それらの新しい傾向の作家の一人のやうに見なされた。併しさういふ觀方は單に皮相的外面的のものに過ぎなかつた。けだしその所謂追懐小説や、情緒文藝やは、單に一時の反動否な流行として起つたまでゝ、それ自身文壇の主潮となるべき意義乃至價値をもつて居なかつた。それらの作家は、個性的獨創的ではなく、或る一二の作家の追隨模倣に外ならなかつた。で、いつの間にかその跡を止めなくなつて了つた。文壇は依然として現實客觀を重んずる自然主義的傾向が中心勢力となつて居た。ついでこの二三年來、オイケン、ベルグソンなどの頻々たる紹介につれて、その影響感化を受けて、多くの評論家等は新理想主義とか創造的生活とかの論議に沒頭するやうになり、そが一般思想界乃至文藝界の主潮であるかのやうな觀を呈して居り、さういふ新しい傾向を代表する如く思はれる多くの新進作家が輩出した。それらの人々の作品の特色は大體に於て、人生の肯定を中心生命として居る點にあるやうだ。併しまだそれは、矢張幼稚な安價な程度の人生肯定の城を脱して居ないやうだ。自分は今後文壇の傾向が如何に變轉して行くか明言することが出來ない。けれどもこの五六年間に、我が文壇は大體右に述べた如き筋道を經て來たやうに思ふ。然り而して谷崎潤一郎氏は依然としてそれらの何れの傾向からも離れて氏自身の獨自の路を歩んで居る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

谷崎氏自身の歩いて居る路は、果して正しい道であるかないかは別として、兎に角氏が輕浮なる文壇の風潮に動かされず、飽くまで自己の本領を發揮し、氏自身の藝術を打ち樹てつゝあるに對しては敬服せざるを得ない。氏の作物に、動かし難い底力があつて、何となく人を威壓するやうな趣のあるのも、一つは氏の根強い信念の結果だらうと思はれる。『少年』、『刺靑』などから、『秘密』、『飇風』、『惡魔』等を經て今日に至つた氏は、一作毎に常に文壇の聳目驚異の的となつた。これは氏の作が深い意義、高い價値を有し、藝術として優秀である爲たといふよりも、其の作風があまりに他の多くの作家のそれとかけ離れて居り、其の主材があまりに荒唐奇怪にして事々に人の意表に出づるが如き點があつたが爲めだつたといつた方が、けだし適當であらう。兎に角氏の作物は、その内容形式共に他の作家の到底企て及ばざる、到底追隨し得べからざる獨自のものである。此點に於て氏は一種の文壇の寵兒である。で、ある者は氏をオスカア、ワイルドに擬し、耽美主義、官能主義、惡魔主義の作家なりとして大に讃嘆し、或る者は氏の藝術をば眞の江戸藝術の復活なりと推稱し、また或者は反對に、徒らに荒唐奇怪を弄ぶ通俗な傳奇小說作家なりと貶した。

自分は今こゝで氏の藝術なり、人としての氏なりを詳細に論評するだけの材料と餘裕とをもつて居ないが、氏の藝術が耽美的であり官能的であり、一種の惡魔的の傾向を帶びて居ることは自分も認めるところである。主人公は大抵極端に病的にまで官能の滿足を追求する人物である。層一層强烈な刺戟を求め漁り、遂には自分自身をまで慘虐に取扱ひ、そこに一種悲壯な痛快味を感じ、生の刺戟を見出すやうな人物である。併しそれは心靈の惱みから必然に求める官能上の滿足ではなくて、殆ど先天的の廢頽から來たものである。本能的衝動的のものでない。可笑しいから笑ひ、悲しいから泣くといつたやうな内發的のものではなく、笑ふから益々可笑しく、泣くから益々悲しくなり益々涙が出で、從つて益々泣き益々悲しくなるといつたやうな一種の聯想作用から來るものが多いやうである。

氏が人間の或る根本性情を捉へて、それを徹底的に（誇張的ではあるが）抉出し表現するに創作上の他の諸條件を忘れるほどに全力を集中し、而も其の點に優れた天分をもつて居ることは、自分の常に敬服し、且つ最も興味を感じて居るところであるが、それが動もすれば今言つたやうに外部的の興味に驅られて、人間の内的方面、心靈の方面の生活を閑却して居るやうな傾きのあるのを常に不滿足に思ふのである。

現代の生活の中に、滅び行く過去時代の傳襲的生活を認め、そこに限りなき追懷思慕の情懷を寄せ、そこに現代生活の苦惱を忘れんとする逃避的傾向のある一二の作家がある。さういふ作家は好んで過去時代の生活をその創作の主材とする。谷崎氏も亦た好く過去時代の生活を描いて居る。けれども谷崎氏の場合は前者とは其の態度を異にして居る。氏には懷舊的、逃避的傾向がない。滅び行く過去の傳襲的生活の中に逃避するよりも、寧ろ、その中に現代生活の意義を見出さうとして居る、過去

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時代の生活の中に現代生活を生かさうとして居る傾が認められる。氏の藝術をば江戸藝術の復活だといふのも、恐らく其點を指したのであらう。作しそこにも矢張、現代人の外部的、衝動的生活の象徴しかあらはされて居ないと自分は思ふ。過去時代の人間は、依然過去時代の人間として描かれて居る。自覺める現代人の全生活が過去の人物中に具體化され象徴化されて居ない。

谷崎氏の作物の一般的外形的特色は、如何にもそのスケールの大袈にして豪宕らしい點にある。取材が先づ奇拔である。そしてその結構脚色描寫が如何にも放膽豪壯である。輪奐の美をきはめた廣壯な建物に接するやうな感じがある。そして太繩を以て縛せられるやうな強い力をもつて飽くまで讀者を引きつけねば止まない。不自然であるとか不眞實であるとかいつてる暇のない位にぐん〳〵と最後まで讀者を引き廻して行く力をもつて居る。色彩が濃厚で、目眩ぐるしいほどで、刺戟が強烈で、そして一種の殘忍性を帶びて居るのも、他の作家に認め難い特色である。たゞしその濃厚な色彩や、強烈な刺戟やは、温室内の花壇から受けるやうな艷麗な潤澤なものでも、また炎夏白熱の日光から受けるやうな一種壯快清透の氣を帶びたものでない。何となくどろ〳〵した、黑い凝血のやうな混濁した、惱ましい一種の壓迫を感ずるやうな種類のものである。爛滿の疲れといつたやうな頽癈した氣分が氏のどの作にも漂うて居る。惡瓦斯に咽せるやうなのが氏の作を讀んだ後の心持である。『飇風』、『秘密』、『惡魔』、更に先月の本誌に載つた脚本『恐怖時代』（その他多く擧題を忘れたから省く）等皆なさうである。

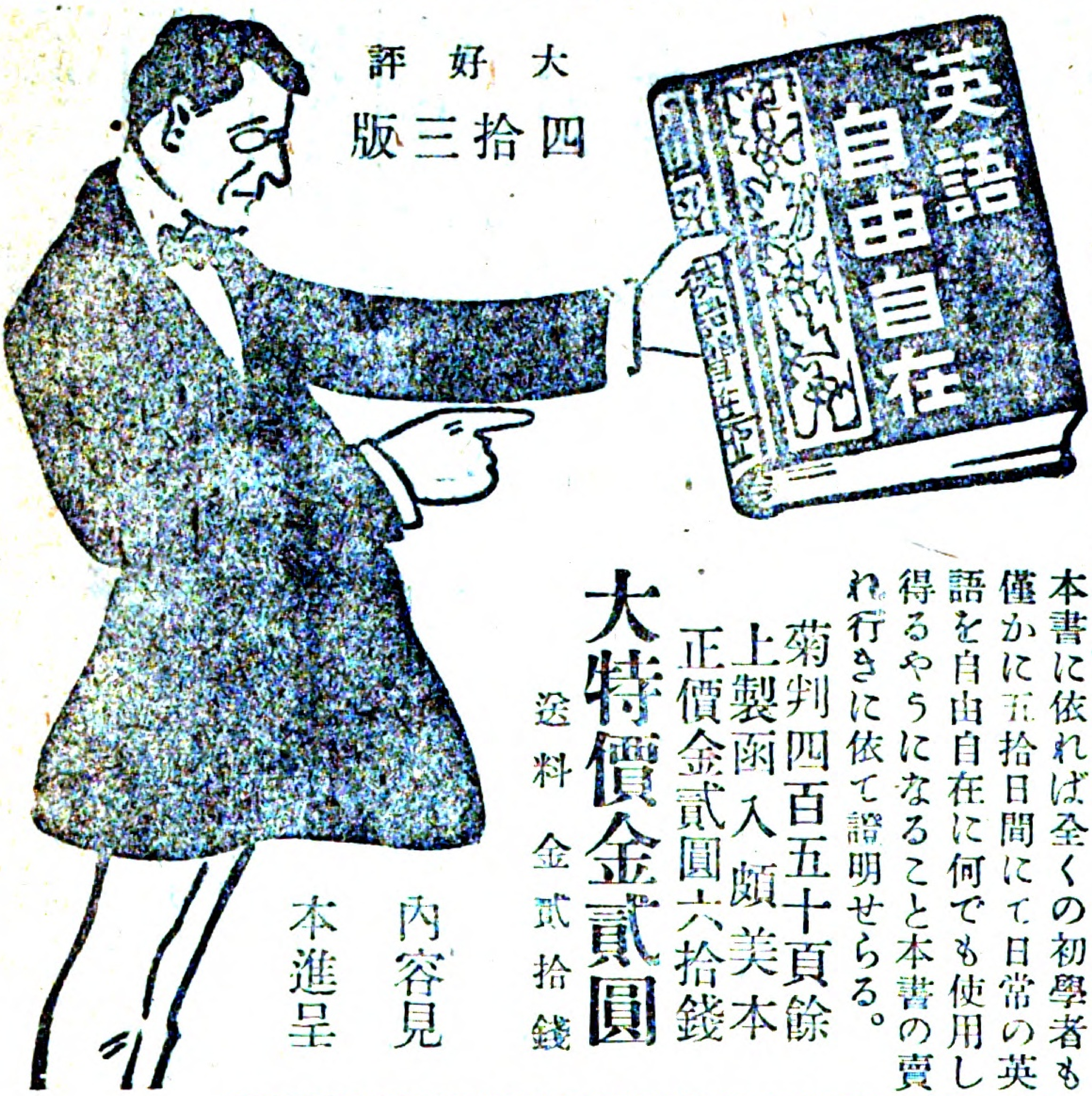
個人としての谷崎氏については自分は殆ど知るところがない。氏と中學に同級であつた僕の一友人は曾て次のやうに言つたことがあつた。『谷崎君は、級中の一異彩であつた。自分等が教科書にかじりついて居る時分に、君は、難かしい、高尙な哲學文藝の書に親しみ、其言行は衆人と異つて居た。何となく凡人ではないやうであつた。きつと今に何か素敵なことを仕出來かす人に違ないと思つて居た。ところが一高から帝大の國文科に入つたといふことを聞いたので、何だか平凡に化して了ふのではないかとも思つて居たが、矢張りさうでなかつた。終に文壇の驚異となるやうになつた。』と。自分は一月の本誌に出た『神童』を讀んで、圖らずこの話を想起し、そゞろ微笑を禁ずることが出來なかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

生きた教授書。五拾日卒業

英語の必要は愈々今日に迫る、今後の社會に英語を知らざるものは日々の不便と損失實に莫大ならん。生きた教授をする本書に依れば全くの初學者も僅かに五拾日間にて日常の英語を自由自在に何でも使用し得るやうになること本書の賣れ行きに依て證明せらる。



大好評 四拾三版

菊判四百五十頁餘
上製函入頗美本
正價金貳圓六拾錢

大特價金貳圓

送料金貳拾錢

內容見本進呈

文學博士 南條文雄先生著（縮刷）好評十六版

安心錄

◎國民必讀絕好無二の修養書也◎

博士はもと是宗教界、教育界の宿老、教義を布き、教を垂るゝこと既に業に久し、東奔西走、未だ曾て一日も怠らず、足跡國内に普ねき所以のもの一に高潔の人格と熱烈なる至誠あるがためなり。而して此等は是れ博士胸中の琴線、物に觸れて鳴り、人に觸れて響きたるもの、その鳴るや敎訓となり、その響くや感化となる、心に不安ある人。煩悶ある人、將又立身を希む者。出世を望む者、速かに本書に依て活潑々地の人となれ、又以て速かに人生の歸趣を解せよ。眞に是れ現代人の救世主。

三六判凡三百頁上製天金付函入美本
正價七拾錢
送料六錢

東京本郷森川町一番地 振替東京壹九四六七番

文成社

電話下谷 參貳壹〇番 參〇壹壹番

（中付二の一）

信用なき店舗及ひ卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

漱石 蘆花 樗牛 獨歩 四大文豪の警句集

地上聖語

○吉田常夏編
定價九拾錢送料六錢
小形四五〇頁函入美本

二十世の活きた處世訓

内容
△處世觀△人情觀△宗教觀
△道德觀△家庭觀△死生觀
△社會觀△戀愛觀△藝術觀
△生活觀△女性觀△學藝觀
△人生觀△自然觀△雜觀

是れ悉四大文豪の達觀也

警句眞理二千章

時事新報評―漱石、樗牛、獨歩、蘆花四氏の文中より警句雋語人を啓發する事多き短文二千章を拾ひ之を處世道德以下十五篇に分類せるもの流石に現代文壇の巨擘たる人々の名句、一章一語悉く讀者を刺激する光明たらざるは無し

好評忽再版

東京本郷千駄木四九
發行所 四方堂
振替東京九五五六番

奇想天外生 奥野他見男著
犬丸嶺夫畫伯裝幀

最新刊

女學校出の花嫁さん

菊半截美裝 價四拾錢 郵稅四錢

始めて結婚し始めて家庭を作りし花婿、花嫁、一は大學を出で一は女學校を出づ。其着想の奇抜、文の輕妙、諷刺、滑稽洵に當代一品たり。

六版
大學出の兵隊さん
菊半截美裝 價參拾五錢 郵稅金四錢

發行所 東京日本橋鐵砲町 振替一五〇五六番 磯部甲陽堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎東京第一高等學校教授 三並良先生新譯◎

（最新刊書）

賣行激甚

オイケン氏 人生の意義と價値

獨逸が四面敵の攻撃を受けながら、彼等をして一歩だも國内に進入するを得しめずして奮闘するは驚嘆に價せずや。而も是れ單に國家主義や軍國主義の賜にあらず、人類が依て以て立つべき高遠甚深なる宇宙人生の目的と價値とを悟了せるが故なり。是れオイケンが本書に於て道破する主眼の點にして又本書が彼等猛將勇卒を鼓舞する大なる所以なり而も是れ單に獨逸の問題にあらずして世界の問題なり。若し世界の人にして之を悟らば戰爭は自ら絶滅せん茲に大なる謎あり。オイケンは之を説明して餘蘊なし。愛國の士も宇宙人生の謎を解かんとする人も本書を繙けば十年の疑問自ら釋然たらん

菊判上製美本全

正價金壹圓五拾錢
郵稅金八錢

好評三版

早稻田大學講師 吉田絃二郎氏新著

生の悲劇

■四六判上製美本全壹册■ 正價壹圓■（好評再版）

過去を知らず未來を知らず、たゞ現實の靈と現實の肉とにのみ彼れの生命の凡べてを燃焼せしむることを允されたる者にとりてはそれが暗であらうと悲哀であらうと只現實を貪り現實を懐しみ現實を慈しむの心の他には何の希望もあり得ない人間に與へられた運命が暗い淋しいものであるとしても自分はそれを呪はないそれが自分の生に對して與へられたる唯一のものであることを想ふ時に私は一層その不具なる人類の運命を悠はらずには居れない。
──（著者の感想より）

稻毛詛風新著

■心の叫

菊判半截全壹册 正價金九拾錢 郵稅金八錢

若き人道主義者が僞らざる心の叫を聞かんとする人は來れ尊べき眞人の感想録は世に現はれたり。

（中付二の一）

東京市神田區表神保町七番地 ■大同館發行■ 振替貯金口座東京八七貳番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

永井荷風著

■荷風氏獨特の藝術を窺ふに足る『荷風叢書』

縮刷 紅茶の後

□漫録□
□隨筆□
□日記□
□二十五篇□
□附録大□
□窪多與里□

縮刷 すみだ川

□すみだ川□
□見果ぬ夢□
□夏の町□
□下谷の家□
□傳通院□
□平維盛□
□秋の別れ□

■荷風氏獨特の文才を發揮したる『荷風叢書』

「荷風叢書」目録

■冷笑
■新橋夜話
■牡丹の客
■紅茶の後
■すみだ川

□以上五冊刊行□

定價各冊金六拾五錢

創刊 雜誌 文明

永井荷風主筆

要目

●創作 發刊の辭 荷風
●小説 矢筈草 荷風
●脚本 宗 久米秀治
■けふ此頃 荷風
■文反古 荷風
■時世粧
■藝者論
■その日そのこと

［四月一日創刊發行］定價金貳拾錢

東京市丸の内 籾山書店 振替東京一四一七二

無代進呈(文藝の話)

信用なき店舗及ひ卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

評論

内外時事評論

後繼内閣の詮議

法學博士　古川學人

議會閉會と共に大隈内閣の辭職、從つて後繼内閣の詮議が世間の問題となつた。昨今の形勢では大隈伯は又居据りの決心を固めたやうにも見えるけれども、どうせさう長くはないと世間の一般が認めて居るものと見えて、誰をして後繼内閣を組織せしむべきやは依然として政客の唇頭に上つて居る。

本誌前號の「來るべき後繼内閣の組織者」なる項目の下に集められたる諸家の説は、偶々此問題に向つて好個の代表的意見を我々に提供して居る。中にも關、田川兩氏は政府黨系の説を代表し、戸水、小川の兩氏は政友會系を代表し、田、仲小路の兩氏は正に官僚系を代表すると見ることが出來やう。固より此等の人々の説はそれ〲其の屬する各系統の思想を嚴格に代表するものと斷定することは出來ない。けれども此等の人の説を通じて略ぼ其連中の一般の考の那邊に存するやを忖度するは强ち甚しき見當違ひでもなからうと思ふ。

政府黨系の考は、現在の場合別に大隈伯の引退すべき理由を認めないが、若し何等かの理由で政界の勢力關係今日の儘なるに大隈伯の引退を見ざるべからずとせば、之に代るものは當然加藤内閣でなければならぬといふ立場を取つて居る。此點は田川氏の説も關氏の説も同樣である。只加藤男を總理大臣とする内閣は、優に衆議院に於て多數を制することが出來ても、貴族院といふ有力なる敵國の存する以上、現今の政界に於て獨り立ちで縱横に經綸を行ひ得る程に、有力でないと認められて居るやうである。そこで田川氏は、加藤男に未だ力の足らざるものあり、其準備の熟し、其の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勢力の更に一展進するを待つまで、是非共大隈伯を戴いて居りたいと希望して居る。關氏は、老雄の餘生を安樂ならしむる爲めに、伯の退引を止むを得ずとすれば、加藤内閣に配するに犬養氏の一派を以てし、即ち犬養氏の援助を條件として初めて有力なる加藤内閣を實現すべしと說いて居る。兩者共に超然内閣の出現には反對の意を表明して居るけれども、貴族院系統の有力なる勢力の反對に畏怖し、密に大隈伯無しの現政府黨に隱くすべからざる危惧の念を置いて居る。犬養氏と加藤氏との提携は殆んど之を見るの望がない。而かも大隈伯にして到底其職に留まらずとすれば、彼等に心を安んじて加藤内閣を押し立つるの確信なきこと前述の如くなるが故に、或は下院に多數を擁しながらオメ／＼と引下がるの陋態を演じないとも限らない。超然内閣の出現は立憲の本旨より見て之に反對するといふも、然らば如何なる内閣の出現を希望するにや、又如何なる内閣の出現を期待し居るやについては彼等の言說より何等の定見を探ることが出來ない。

小川、戸水兩氏の說にあらはれたる政友會方面の意見は、一言にして云へば寺内伯後藤男の一派に政友會の割込んだ内閣を以て甘んずるといふに歸する。流石に小川氏はいろ／＼婉曲な言辭を弄して居るが、正直なる戸水博士は最も露骨に擧國一致内閣の出現を主張して居る。更に細目に入りて寺内伯を總理とし、後藤男を外相とする武斷内閣を出現さしたいと言ふて居るから、打明けたところを言へば、寺内後藤と政友會との妥協内閣といふことに歸するであらう。現内閣派の代表者として高田博士一人位は留めていゝとは言ふて居らるゝも、主たる幹部の席を寺内後藤系と政友系との以外に割くといふ考のないことは疑を容れぬ。小川氏は流石に立憲の常道といふ主義の論を楯として、大隈伯が止めれば其反對黨たる政友會が出るのが當然だと說いて居る。けれども議會に多數的根據を有せざる政友會の、獨力を以て政府を占め能はざるは初めより明白である。そこで氏は政友會が主となり『其他の隱れたる力であるとか、又彼方此方に散在して居る力となつて居るもので、總て主義主張の類似したもの』は皆我黨を助くべきものであると言つて、暗に官僚との妥協を拒まざる態度を示して居る。官僚との妥協提携其事に已に是非得失を爭ふの餘地はあるが、それは暫く措くとして、官僚が主となつて妥協するか、政黨が主となつて妥協するかの遣り方が又大いに物議を醸す種

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

となる。此點について小川氏は何處までも政黨が主となるべきことを主張し、所謂『隱れたる力』『諸方に散在して居つた力』などゝいふものは、表面へあらはれて來べきものではないと言つて居る。然るに氏は後段に至つて今日のやうな世界の大變動に際し、大いに國家の威力を張るべき時代に於ては、非常に有力なる内閣を必要とする。之が爲めには多少立憲の常道とは筋道の違つた遣り方に出づるも亦止むを得ないと言ふやうな、極めて婉曲なる言辭を弄して、暗に官僚を主とする妥協にも不同意ではないかの如き口吻を洩らして居る。聞く所に依れば氏は豫ね〴〵山縣公を起して今日の時局の拾收に當らしめたいと希望して居るとやら、黨士たる氏の考としては尤もの次第である。併し山縣公の出馬は到底實現の見込が無いから、結局は寺内後藤邊に落ちるの外はあるまい。兎に角氏の説は一言にして言へば、今日の場合だから我等は官僚の走狗となるも亦之を辭せないといふ意味であらう。斯くして戸水小川兩氏の説を通覽するに、政友會の極めて政權に渇して居ること、而かも自ら獨力を以て出馬する丈けの覺悟がないこと、而して有力なる官僚と妥協して其走狗となつても政權に近からうといふ考があることは明白である。而して妥協の相手と目指されて居るもの、寺内伯後藤男の一派なることも亦明白に言外に現れて居る。

田、仲小路兩氏によつて代表さるゝ官僚系の思想は、正に政友會の思想と相應じ、政友會を踏臺として寺内伯後藤男を押し立てゝ行かうといふにあるらしい。官僚系の中にも、無論積極的に現政府に同情するもの、或は消極的に政友會に反感を有するものもあらう。只此等の人々は後繼内閣を如何にすべきかの問題に直接に觸れない。此問題に直接の興味を有するものは、現内閣に反感を有する一派である。從つて此等の派が下院を操縱せんが爲めに利用せんとするところの勢力は、自ら政府反對黨でなければならぬ。此點を田男は最も明白に説いて居る。即ち新舊二勢力の聯立内閣といふことを主張して居られる。男は所謂擧國一致内閣に對しては其不可能なるを説いて不贊成の意を表され、大隈内閣の後を受くべきものとしては、政友會と官僚と聯立でなければならぬと説いて居るのである。仲小路氏に至つては短刀直入、人才内閣を説き、今日の場合『飽くまでも積極的に有爲な人物を擧げて其技量を揮はしめ、剛健にして生氣潑溂たる有爲な内閣を造る外には途はない』など、頗る景氣のよいことを言つて、盛に寺内後藤を擔いで居る。議院の關係が何うだらうが、民間の思想が何うだらうが一向頓着しないところに仲小路氏の面目が躍如として居るやうにも思はるゝ。然し恰も下院の多數黨を貴族院が掣肘すると同じやうに、貴族院亦全然下院の勢力を無視することは出來ないから、仲小路氏とても寺内後藤丈けで確實に天下が取れると思つて居るのではあるまい。然らば寺内後藤を經とし、政友會を緯とする内閣を胸中に描いて居るものであらう。要するに政友會を踏み臺として、こゝに寺内内閣が出現するとすれば、一時下院に多數を制し得ざるより

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來る多少の不便はあらんも、大隈內閣瓦解後の政界は、或は一ト先づ之で落付くことがないとも限らない。

政友會と官僚系との結托は、憲政進歩の上から見てよいものかわるいものかの議論は暫く之を措き、貴族院が衆議院に對抗して、否、時としては衆議院を凌駕して、今日の如く儼然たる大勢力を有つて居る以上は、政黨が官僚の後塵を拜するのは、殘念であるが、事實之を如何ともすることが出來ない。衆議院に甲乙の二黨相對立して爭ふが如く、貴族院に於ても亦衆議院と同じやうな團體の對立を見、而して上院の甲と下院の甲と相結び、上院の乙と下院の乙と相結ぶといふことは、もと吾々の希望する所である。上院の甲乙が夫々全然下院の甲乙と合體して同一の黨派を爲すか、或は上院は暫く政黨組織を採らないで居るべきかの問題は、別に之を論ずるの價値あるも、全體としてはそれ程重要な題目ではない。只立憲の常道から之を論ずれば、上下兩院の同一臭味の團體の結托關係は、常に下院に於けるを主として、上院に於けるを從とするものでなければならない。上下何れが主となるやの順位の問題が、憲政の上に極めて肝要である。必ずしも下院のものが總理大臣にならねばならぬとか、又は上院の出よりも下院の出が內閣に於て多數の椅子を占めねばならぬとか言ふのではない。全體としての中心點が下院にあらねばならぬと主張するのである。此點に於て吾人は寺內後藤對政友會の妥協提携其事を無條件に不可とするものではないけれども、政黨が客位となつて官僚の門に降るといふ形式を取るといふ上から、此內閣の出現を不滿足に思ふ。尤も世間には有力なる內閣を造つてドン／＼國家の爲めに有益なる仕事を遣ればいゝではないか、主客の順位を論ずるが如きは愚も亦甚だしいといふものもあらう。目前三尺の天地を見る者に取つては成程之でも一應の理由が立つかも知れないけれども、見えざる人心の機微に立ち入り、制度施設の國家の將來に及ぼす精神的効果を重んずる者から見れば、此問題は決して微々たる問題ではない。

支那革命運動の形勢

○南北對陣の形勢は昨今段々明白となつて來た。先づ南軍の陣立から見ると、目下兵を二道に分ち、一方は四川の南部を侵し、他の一方は貴州から出て湖南の處

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を衝いて居る。何れも兵力も多くなし、軍器彈藥も乏しいと見えて、捗々しい發展はして居ない。只湖南方面は政府軍の大部分の四川の討伐に出拂つた虚に乘じたので比較的成功して居る。其中の一軍は阮江を降つて常德を脅かさんとし、途中の辰州は二月廿九日を以て占領したといふことである。又他の一軍は衡州より湘江を降つて長沙に出でんとする勢を示し、已に寶慶は三月四日占領を終つたと云ふ。何れも下るに易い道筋であるのに、政府軍側には殆んど何等の堅めがないから、日に〳〵進む一方である。然し其割合に捗々しい發展を見ないのは、一つには目下雨期に際して戰爭に不便なる點もあらうが、又一つには兵數軍資の甚だ少きが爲めであらう。若し夫れ三月十日前後の新聞電報に見えたるが如く、袁政府が果して張勳の兵隊を借りて、湖南に送ることが出來るとすれば、此貴州軍の運命も何うなるか判らない。若し夫れ四川の方面に至つては、昨今の電報の示すが如く、其發展意の如くならざるのみならず、却つて北軍より切りに壓迫されて居る。元來政府軍の四川に入るには非常な困難があること已に述べた通りである。政府軍に其軍容を整ふるの餘裕を與ふれば、軍器彈藥の貯なき革命軍は到底之に抵抗する能はざるは解り切つたことであるから、南軍の計略としては、政府軍の準備未だ整はざるに先つて速かに四川省を席捲し、之を確實なる味方とするに急くべきであつた。此點について南軍に手ぬかりがあつたとは言はないが、要するに兵數軍器の缺乏は意の如く其軍勢を發展進捗するを得せしめず、遂に北軍に勢容を整ふの餘裕を與へたのは南軍に取つては返す〳〵も遺憾である。而して今や南軍は北軍の壓迫を蒙り、河を隔てゝ守勢を取ることすら困難なるが如き有樣となつた。

以上の南軍の形勢は同時にまた北軍の形勢を語るものである。四川に於ける北軍の形勢は目下極めて有利に發展して居るやうだ。北京政府は目下のところ四川に其全力を傾注するの方針を取つて居るのであらう。之れ蓋し四川を失へば南方獨立の形勢が玆に略ぼ完成するからである。二月廿六日北軍は瀘州を占領し、三月二日には敍州を略し、更に三月四日には納溪まで其手に歸したといふことである。先に嘉定を略して遙かに成都を脅かした南軍一方の運命については、まだ明白に知るところなしと雖も、或は悉く揚子江の南岸に追ひ込まれたのではあるまいか。兎に角目下の形勢では、南軍は到底再び河を超えて四川省の中原に乘り出す見込みはなくなつたやうである。それ丈け四川に於ける政府軍は先づ成功を收めたものと見なければならぬ。然し政府側は之れ丈けを以て未だ討伐完成の期近きにありと安心する譯には行かぬ。なぜなれば四川討伐の爲めに空(カラ)になつた湖南は、貴州軍の侵入を蒙つて目下大いに動搖し

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て居るからである。尤も政府は之に對して茫然傍觀して居る譯ではない。即ち張勳の兵若干を借りて湖南の急に赴かしむるといふ差當りの手段を講ずるの外、政府は一方廣東軍を廣西省の百色方面に派して後方から雲南〃脅かさしめ、他方廣西省の陸將軍に合して貴州の横を衝かしめんとして居るからである。龍覲光が兵五百を率ゐて百色に向つたといふことは先に述べた。最近彼は二千の增援を得、三月五日の電報によれば其將李文富をして州境を超えて剝隘を占領し、更に廣南に迫らしめて居るといふとである。廣西の陸榮廷は或は廣東の龍と去就を共にすべしと言はれ、又或は密かに革命黨に內應すべしと言はれたが、三月六七日頃の電報によれば、北京政府に向つて忠勤を誓ひ、特派貴州宣撫使の任を受け、今や兵を柳州に集めて貴州に進軍せんとする勢を示して居るといふことである。然し彼が果して刄を貴州に向けるものなりや否やは、實は今日のところ甚だ怪しいのである。場合によつては戈を逆まにして革命黨に加擔するに至らざるべきやを疑ふの餘地も大に在る。然し一歩を讓つて假りに貴州に攻め入ることゝしても、地勢上攻め上ることは容易なことではない。啻に此方面許りではない。百色より雲南に攻め入る方面も、四川の敍州瀘州方面から段々雲南に攻め入る方面も、孰れも共に下るには易くして攻め上るには非常に困難な處だから、如何に政府軍の形勢が有利に發展しても、雲南貴州の本據までが蹂躙され顚覆さるゝといふことは容易に無からうと思ふ。

南北對峙の形勢は將來何う落ち付くであらうか。目下のところ全體としては政府軍の形勢は比較的によい。加之雲南貴州の革命的突發に續いて諸所方面に起るべく豫期されし幾多の反袁主義者は、革命黨の人々の期待に反して今尚手を拱いて觀望的態度を續けて居る。豫期した擾亂が案外に起らないといふのが、之れ亦政府軍の一つの强味と言つてよからう。然しながら他の一方から考へれば、南軍に取つても亦その强味と認むべき幾多の點がないでもない。中支に於ける馮、張の態度の煮え切らざるも亦南軍の一つの强味である。張勳は一部の兵隊を袁世凱の用に供したと言はれるけれども、彼が三月初旬袁の懇命を受けながら而かも斷乎として上京を肯んじなかつたといふ以上、袁に取つて彼は今尚一敵國たるを失はない。馮國璋に至つては、先に南軍討伐總司令官の任を受けたるも、病と稱して再三之を固辭した。是れ自己の軍隊より決して離れざらんとする彼の決意を語るものである。馮、張の斯くてある間は、政府は到底倪嗣仲の兵を多數南方に送るといふことは出來ない。此二人の態度の煮え切らない爲めに、政府はどれ丈け南方の派兵に困難を感じて居るか解らない。次に各地に於て小規模ではあるが諸方に動搖の起つて居るといふのも亦一つの南軍に取つての强味である。先きに二月十八日には武昌に動亂が起つた。同廿一日には長沙にも起つた。何れも急いで事を起した爲めに不成功に終つたけれども、此

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種の動亂は其外各地に起り相當に當局者に迷惑をかけて居る。此事は二月廿日北京發電として日本の新聞に現はれた次の報道によつても推察することが出來る。曰く革命黨員各地に入り、軍隊を動かして兵亂を起さんとする者あるに鑑み、政府は其豫防策として、事前に之を密告する者には一萬元の賞を與へ又直に其位階を上進すべしとの布令を發したと。第三に反袁各派の大同團結の成立も亦革命派にとつての非常な强味である。袁世凱討伐の爲めには何事をも差措いて一致すべしとの議は上海に於て纒まり、孫逸仙の一派を除いての大同團結は殆んど出來て居るといふことである。孫逸仙とても固より今度の革命運動に全く贊成しないのではない。虚心坦懐なる彼には、固より今度の運動の當初の計畫に參與せしめられざりしの理由を以て拗ねるといふやうな狹い考は毛頭ない。けれども彼は一面熱烈なる空想的理論家である丈け、容易に節を枉げて他に迎合しない。即ち彼は强て大同團結の中に入らんが爲に、從來の理想を枉ぐるに忍びずとなし、其作るところの中華革命黨を提げて獨立に運動しようといふて居るさうだ。故に彼は今度の南方革命運動の主動的部分の中には這入つて居らない。けれども袁世凱を討伐して共和政治の回復を見る爲めには此際矢張り積極的の運動に熱中して居るのである。斯くして天下擧つて袁世凱に反對だ。して見れば目下差當りの形勢は成る程政府軍の景氣がよいやうではあるけれども、更にもう一枚上皮を剝いで觀れば、今日の袁政府は正に累卵の危きにあるものと言はなければならない。

斯くて袁世凱及び袁世凱の政府は、固より内外に對して、强いことを言うて居るが、内心全く自家の地位の極めて不安なることに氣が付かないではない。如何にかして多少體面を損じても其地位を維持せんことが目下の彼等の苦心であらう。さればにや二月廿三日には遂に帝政延期の宣言を國民に發した。一月の下旬には即位式の延期を特に諸外國に向つて宣言したのであつたが、今度は自國の國民に向つて帝政の延期を宣言したのである。更に二月の廿六日には外國の忠言並びに國民の輿望に從ふの口實の下に、政治の刷新を企つると稱して、内外の名士を集めて政治研究會なるものを起した。何れは此會の研究の結果に待つといふことになるだらうが、責任内閣の制を布き民選の立法議會を速開すべしとの說は、逸早くも北京の政界に言ひふらされた。斯くして帝政の實行に伴ふ内外の不平異論

の口實を除き、三月の一日には大典籌備處に事務の停止を命じて暗に帝政斷念の意をさへ示した。斯くては表向き南方の革命軍に、强ひて袁政府に反對するの口實がなくなる譯になる。是に於て自ら妥協論が起らざるを得ない。三月初め以來北京電報の屢々妥協可能說が專ら在留外國人間に行はれて居るといふ報道を齎らして居るが、それ恐らくは袁政府の內心の希望であり、又袁政府の有力なる擁護者たる英國人間の切なる希望であらう。過般モリソンが南方に赴いたのは畢竟南北調停の運動の爲めであることは公然の秘密である。然し彼の折角の南方巡遊も上海に於ける諸星例へば伍廷芳、湯化龍、梁啓超が悉く南方同情者なること、又馮國璋、張勳等が南軍の同情者でない迄も、決して袁を援くるものではないといふとを看得して歸るに止つたとの事である。そこで世人は一時英國の態度或は玆に一變するかも知れぬと豫期したのであつたが、今日までのところ未だ何等著しき變化を見ないやうである。して見れば出來る丈け袁政府に讓歩せしめて爭の口實を去り以て南北を妥協せしめ、こゝ暫くは袁世凱をして兎も角も引續き支那の主權者たらしめんとするのが、英國側の希望であらう。只之に對して我が國は抑〻如何なる態度を取るであらうか。之れ支那の問題を決するに最も重大なる關鍵である。

今日の形勢では日本を差措いては諸外國何れも支那に一指をも染むることは出來ない。如何に英國が南北の妥協を希望しても、日本が動かない以上は、其實現を見ることは出來ない。從つて妥協が出來るも出來ぬも日本の態度如何によるとは、北京より來る電報にも屢々あらはれて居る。即ち妥協の成否を專ら日本の意嚮に置き、日本をして獨り支那の治亂の責任者たらしめんとし、斯くて婉曲に日本を動さんとして居る。傳ふるところによれば、三月七日我が政府は特に閣議を開いて支那に對する態度を協定したといふことである如何なる協定をしたのか、外間には何等明確なる事項の傳はるものなきも、主なる問題は支那各地に居留する帝國臣民の保護方法如何といふにあり、而して動亂の範圍今日以上に擴がらざる限りは、內外の疑惑を招ぐが如き積極的行動に出づるは特に之を避け、袁政府の利用とするところとならざるの注意を用ふべきことを極めたといふことである。果して然らば、帝國政府の方針としては此際妥協調停の爲めに積極的に盡力することを避け、當分儼正中立の態度を維持するとい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふ決心をしたものと觀なければならない。斯く觀れば大勢は革命派の成功に終るものと見て差支はあるまい。

假りに今度の南軍が散々政府軍に敗けたとしても、醇勃たる反袁熱は決して之を以て屛息するものでない。況んや政府軍が四川邊で多少の勝利を占めても、更に深く雲南の本據を衝くといふことは、頗る困難なるに於てをや。革命諸派の畫策幸に功を奏し、機熟して長江沿岸にも盛に動亂の勃發するを見ん乎、南軍の勢の更に大に振ふべきは言を待たぬが、よし然らずとも、南軍は雲貴二州に據つて暫く機會の到來例へば袁世凱の死を待つの策に出づるであらう。南方の有志の中には早く已に如斯形勢の來るべきを豫期して、雲貴二州の内治問題に研究を轉じて居るものもある。持久對峙となれば、内治を整頓して内は民心を繫ぎ外は外國の信用を博するといふことは、彼等に取つて最も必要である。元來革命諸士は袁政府討伐といふ消極的目的には合致して居るけれども、更に進んで將來の支那を如何に統治すべきやの積極的手段については殆んど一致を缺いて居ると云てもよい。且つ彼等は一般に破壞に急にして深く建設を念とせざるもの多きが故に、内治整頓の問題の如きは其最も弱點とするところである。されば戰爭に勝つても後をどうするだらうかは隣邦憂國の士に代つて我々の最も憂慮して居るところであつた。然るに彼等の中業半ばして已に内治問題に思を潜むる者あるを見るのは、革命有志の思想の最近大に進歩せるものあるを認めざるを得ざると共に、吾人はまた成功後の革命派に多大の希望を繫いで可なりと考ふるものである。(三月十四日記)

歐洲戰局の近狀

其後久しく沈滯して居つた歐洲の戰局は、二月廿二日早朝より開始せるヴェルダン要塞の攻擊によつて、再び我々の耳目を欹てしめて居る。ヴェルダン要塞の堅牢は世界無比である。且つ地勢の險岨から云つても文字通りに難攻不落の城砦と云はれて居つた。如何に勝ち誇つたる獨逸軍でも之が奪取を計るの無謀の擧であるとは、久しく一部世人の認むる所であつた。されば攻擊開始の當初は、他方面で大々的攻勢を取る前提としての牽制運動であらうと認められたのであつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、後餘りに此處に力を入れ過ぎて居ることが分つたので、牽連制動でも何でもない、ヴェルダンの奪取其事が主たる目的であることが明になつた。かくて獨軍の損害の大なる事、實に想像の外である。廿五日要塞の一角デューモン保壘一旦獨の占領に歸したが、廿七日朝佛軍之を奪還し、結局獨軍の努力が水泡に歸して攻戰に一段落を告げた。然るに三月の三日に至つて獨軍は再び攻擊を開始し、前にも優る激しさを以てヴェルダン目掛けて殺到して來た。今度は正面攻擊ばかりで無く左右兩翼からも佛軍を壓迫して、殆んど全力を擧げて遮二無二此要塞を落さずんば止まざるの勢を示して居る。勝敗の數何れにあるやは、固より今日の所未だ明かでない。獨逸側は科學的研究の結果を應用して、一方には何處までも理責めに押して行き、他方にはとんでもない新工夫を案じて之を攻擊に利用するから、堅牢無比のヴェルダンといへども或は遂に獨逸の奪取する所とならずとも限らない。けれどもヴェルダンの堅牢は戰前に於ても已に定評あり、戰後に於て更に一層の堅牢を增したのであるから、此要塞にして猶ほ落ちるものなら、凡そ要塞は必ず結局に於て陷落するものなりと言ふ戰學上の新原則が定まらねばならぬと、其道の專門家は觀て居る程である（四方包圍せられた要塞は又自ら別である。ヴェルダンの場合を之と混用してはならぬ）。さればヴェルダンは容易に落ちないといふ說にも相當の根據がある。よし落ちても或は非常に永い時を要するか、或は獨逸側の非常なる損害を蒙つた後の事である。し見れば假令此堅壘が落ちても、之によつて獨逸軍の獲るところは決して非常に大なるものといふことは出來ない。何となればさらでも段々兵數に乏きを感じて居る獨逸に取つて、こゝに幾十萬の新らしき損害を蒙ることは、容易ならざる重大事であるからである。尤もヴェルダン陷落の結果假りに勢に乘じて巴里までヒタ押しに押して行くことが出來ないにしても、適當の地まで軍を進めて有利の陣形を布けば、從來百萬の兵を備へて居つたものが五十萬で濟むといふやうなことになるだらう。茲に節約し得たる兵數を更に他方面に用ふるを得るは、兵數に枯渇せる獨逸にとつては最も有利とするところでなければならぬ。それにしてもあれ程大なる犧牲を拂つたのでは、差引きどれ丈けの利益となるだらうか。尤も之によつて敵の軍氣を沮喪せしめ、又自國の民心を鼓舞するといふ精神的効果は極めて著しきものがあるだらう。然

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し斯ういふ單純な精神的効果のみを打算の基礎として斯かる大事を決行したとも思へぬから、要するに獨逸のヴエルダン攻擊の目的は、一擧に事を決し、多少の冒險を侵してゞも速かに戰局を終了したいといふ特殊の必要に出でたものと見るべきではあるまいか。故にヴエルダン攻擊は一面に於ては獨軍の勇往邁進萬難を辭せざるの猛志を示すものであるが、又他の一面に於ては獨逸内部の窮狀を語るものであると思ふ。

吾人の耳目が悉く獨佛境上の戰局の進行に注がれて居る間に、東方アルメニヤ方面に於ても亦重大なる戰爭が戰はれて居る。即ち二月の半ば露西亞の高加索軍は境を超えてアルメニアの土軍を壓迫し、遂にエルゼレムの堅塞を陷れた。之より露軍は一方は直ちに西して土軍を追擊し、更に他の一隊は南方に下り、東は彼斯內に蟠居せる土軍を掃蕩してハマダンを略し、二月廿五日にはカルマンシャーを占領するに至り、又西はヴアン湖の西岸ビトリスに迫り、三月四日確實に此地を占領した。斯くて露軍はアルメニヤに於ける土軍とメソポタミヤに於ける土軍との聯絡を絶ち、啻に土軍の勢力を中斷し得たるのみならず、之によつて長く土軍の壓迫に苦しんで居つたメソポタミヤに於ける英軍の地位を著しく安全ならしめた。加之露軍は更に裏海よりメソポタミヤの北岸に兵員を上陸せしめ、已に三月六日アチナ港を占領し、更に西方に迫つてトレビゾント港に迫つて居る。斯くして露軍はメソポタミヤを確實に占領して段々小亞細亞の方に進出せんとするの形勢を取つて居る。

此戰爭は云はゞ局部の小衝突にして、固よりヴエルダン本戰と比較して同日に論ずべきにはあらざらんも、然し其影響する所は決して爾く少なるものではない。なぜなれば其結果メソポタミヤに於ける英軍の地位を安全にし、彼斯に於ける土獨軍の勢力を一掃し、以て久しく不安の眼を以て見られて居つた印度の天地をして一先づ安全何等憂ふべきものからしめたからである。二月廿九日の倫敦發電によれば、露軍のカルマンシャー占領の結果、彼斯の狀態は大に改善せられ、內閣も亦新に親英露派を以て組織せられたとある。夫迄は政府部內に土獨の勢力が少く無かつた。之等の者が各種の隱謀を企てゝ彼斯の政界を動搖せしめて居つたのである。彼斯にして若し全然土獨の勢力の下に歸せば、印度の擾亂は必ずしもあり得べからざることではない。印度人は概して英國に忠誠を表して居るといふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

程ではないけれども、去ればとて、一般に非常に敵意を有して居るといふ譯でもない。且人種宗教の關係は極めて復雜にして、到底吾人は彼等に統一的活動を期待することは出來ない。夫れに英國の統治は大體に於て宜しきを得て多數の印度人は實に之に滿足して居るのであるから、印度に聯絡ある大動亂が起ると云ふ樣なことは思も寄らぬことである。けれども波斯の土匪が一度土獨の軍人に率ゐられて印度の境に侵入するとありとせん乎、少くとも印度西北部の慓悍なるパンジャッブ州民は之に雷同して、英國守備の空しきに乘じ段々南下して政府の煩とならぬとも限らない。斯くなれば日本の印度出兵などゝいふことも問題になり得る。此等の憂は實に今度の露軍の成功によつて全然消滅した。是れ此戰捷の效果を重要視すべしといふ所以である。

啻に之ばかりではない。此戰捷は亦大に埃及の人心をも感動せしめて居るといふことである。バルカン半島の戰勝以來土軍はパレスタイン、シリア方面に兵を集めて蘇士進出の計畫を進めつゝあつたから、埃及の人心は大に動搖して居たのであつた。英國は印度兵を獨佛境上から割いて少からず之を埃及に送つたのであつた。要するに所謂埃及遠征の計畫なるものは去年の暮以來着々進行しつゝあつたので、埃及土民の人心は著しく不安を感ずる。而して此不安の感は實に英國に取つては當の敵よりも恐るべき危險分子であつた。然るに今や此不安の念も亦一掃されたといふことであれば、露軍の戰勝は此點から見ても多大の成功であると云はねばならぬ。

然し露軍は此戰捷の效果を確實に保有し、更に吾人の期するが如く土軍を西へ西へと壓伏して、折角得たる戰捷の結果を十二分に收むる事が出來るであらうか。露西亞は去年大にガリシアに勝ち、將に長驅してブタペストを衝かんとする勢を示したのに、カイゼルの精鋭を送つて之に對抗せしむるや、忽ち土崩瓦解し、遂に漠大なる領土を敵手に委して遙か後方に退却するの醜態を演じた。之と同じやうなとはアルメニヤ方面に於ても起ることはあるまいか。最近傳ふるところによれば、エルゼレムを失つたのは、實は土軍の重大なる過失によるといふことである。それは露軍の殺倒を豫期して始め土耳其參謀部内の一部には、余力をアルメニアの防備に注いで露軍を食ひ止むべしとの說があつた。然るに他の一部の軍人は埃及遠征計畫の寧ろ急を要するを說いて、兵員の大部分をパレスタインの方面に割かしめた。之は獨逸例の要求に出てたといふ說もある。其說の眞僞は兎も角として、土耳其はかくて確にエルゼレムの防備を多少等閑に附した嫌がある。して見ると露軍の戰勝は土耳其軍の怠慢に乘じたもので、之を以て直に露軍の強大を斷定することは出來ないやうにも見える。最近の報道によれば、土耳其政府は大に覺醒するとこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろあり、三月初旬改めて獨逸より傭つて居るリマン、フォン、ザンデルス將軍を總司令官に任じて小亞細亞に向はしめ、續いてパレスタイン方面の軍隊を撤退して東方に集中したといふことである。蘇士東方の鐵道工事も中止したとあるから、埃及遠征計畫は暫く之を放棄したものであらう。斯くしてフォン、サンデルス將軍指揮の下に全力を注いで露軍に當るといふことであれば、今後此方面の戰爭がどう變るやら斷言が出來ない。但だ今となつてはパレスタインの引上げも實は已に時期を失して居るの嫌がある。と言つて吾人はまた決して露軍の將來を樂觀することも出來ないな。ぜなれば特に露軍に著しき兵器物資の缺陷け、其後鋭意補塡に苦心して居るとは言へ、今日尚未だ十分に整はずと見るべき理由あるからである。そは露軍に若し此準備ならば、今獨が西方ヴェルダンに忙殺され居るの好機に際して、彼は當然事を東方に起すべき筈であるからである。東方に事を擧げ得ずして空しく此好機會を逸し去のは、之れ露軍の準備まだ成らざるを證明するものであるまいか。只多少露軍にとつて頼となるのは、露軍に準備なきのみならず、ヴェルダンに忙しき獨逸から多量の供給を得るに難いと云ふ點からして、土軍も亦露西亞に當る十分の準備が無からうと思はるゝ點である。

露軍の弱點は一に軍用物資供給の欠缺にある。それ丈け彼れは今や大に我國に頼るの必要を感じて居る。先頃ギオルギ大公の渡來ありしは、此方面の關係を整ふるの政治的目的を有するものであつたことは疑がないが、其結果は着々今日にあらはれ、或は兵器彈藥の多額の注文となり、或は宗谷、丹後、相模三艦の讓渡

となり、果ては日露同盟の風說すら起つて居る。日露同盟說については我輩に自ら一種の說あるが、之は他日に讓り、只日露相親和するは、我國の爲めにも又東洋の爲めにも喜ぶべきことであるといふことを一言して置く。日露は必ずしも東洋に於て全然利害を同じうする國ではない。けれども現今露國の我を便るの必要は、自ら兩國の和親を來し、而して此關係は戰後に於ても暫くは續くであらう。之實に我國の外交家に奮躍の好機會を與ふるものであつて、何を差措いても我が外交家は、之を利用して東洋に於ける日本の地位を安全にし且つ鞏固にし、更に一歩を進めて日英同盟をもつと有利に運用するを心懸けねばならぬ。日英同盟はもと露國を共同の假想敵として起つたものであつた。而して兩國は始め其共同の敵に當るに急にして、支那に於ける日英の利害關係は十分に之を調節する用意を欠いた。今や日露の關係は亦舊の如くでない。卽ち我國は日露關係の親善を利用して、支那に於ける日英の關係を根本的に解決すべきである。斯く言へばとて固より必ずしも日英同盟の從來の効果を疑ふのではない。況んや一派の論者の如く全然之を不用と論ずるが如きをや。此頃ボツ／＼日英同盟に疑を抱く論者の起るに

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

際して、頻々として上海近海に於ける英國假裝軍艦の日本船舶臨檢のことあるは誠に慨すべきである。是れ一つには一部の英人の尙未だ東洋に於ける日本今日の地位を適切に了得せざるの致すところかも知れない双方孰れにも多少の誤解はあらうが、どの道日英同盟は何とかしてモット有効な者としなければならない。而して今や日露の和親は英國をして日本の新地位を知らしむる絶好の機會を供するものである。日英同盟を最も有利に利用するの好機會は今日を措いて又とない。

(三月十四日記)

思潮評論

中澤臨川

田山花袋氏へ

田山花袋君

あなたにはもうかれこれ三年餘りもお目にかゝる機會がなくて過ぎてまゐりました。先日もY君と話したとき、一度あなたをお尋ねしやうといふ約束だけは致しましたが、ついそれも其儘になつてゐます。然しあなたの經て來られた生活の道筋はかなり私には分つてゐるやうな氣がします。私には近來のあなたの心的經過がなつかしい姿をとつて映じてまゐります。あなたが毎月發表される數多くの小說なり隨筆なりの大半を物憂くも讀みのがしてゐる私でありながら、それでゐて不思議と私の心は無意識にあなたの生活を凝視してゐるやうに思はれます。つまりはあなたの生活の周圍を取卷いてゐる渦の中に潜んだ淡い fatalism といつたやうなものが私を牽附けるのであらうと思はれます。

花袋君。私が直接あなたを知つてから今日までの約十年間に、隨分とあなたはつきつめた經驗を履まれ、思ひ切つたさま〴〵の苦勞をされた事と思ひます。日本に自然主義文學を鼓吹する先驅者となられるまでのあなたの努力もさる事ながら、私には寧ろその後にあなたの辿られた道の方がより多く感奮を牽くのであります。

花袋君。あなたはよく中年者の悲みとか、初老の淋しみとかいふやうな意味の事を描かれます。實際、人間が四十に手のとゞくやうな年輩に達すると、そこに著しい變化が起ります。この變化は我等にとつて、最も恐ろしい、そして最も危險なクリチカル、ポイント

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

であらうと思はれます。その年輩の頃から我等の心の中にも、我等の肉の中にも、至て徐かな然し極めて根本的な變化が起りかゝります。それは自然の必然であつて、いかに偉大な人間の意志を以てしても決して抵抗することは能きません。かやうな場合我等の意志は粉々に打碎かれます。かやうな場合、我等の心も肉も到て外界の刺激にセンシブルになり、あてのない鬱憂と喪心と悲哀とが我等の全身に喰ひ入らずにはおきません。しばらくは無目的な生命が細い繩で空虚な宇宙に吊るされる時が參ります。

かやうな場合我等はいかにして此恐るべき不可抗な運命を迎ふべきかといふ事が問題であります。我等の一生には其以前に青春（アドレッセンス）といふ危機がありますが、この時代にはまた我等の生命慾と希望とが熾んなので、その危機は割合に無難に過ごさるべきであります。然るに世間の實際の例を見ると、青春の危機の方が却て危險で、中年の危機は知らぬまに經過されるといふやうな有樣であります。これは何ういふものでありませう。

私はこの顯象を思ふたびに、實に人生の一大損失を恐れずにはゐられません。我等が中年の危期に逢遇すべき時代には、我等には既に妻があり子供があつて、多人數の家族といふ手足纏ひが我等に離れがたない桎梏を加へてゐます。この愛着の絆に何等かの不安と反抗とを與へるやうな魔が我等の中に頭を擡げやうとするのに對して、成るべく之を避けようとするのが、普通の人情でありませう。この人情が我等を毒し、我等から正當な自己判斷の力を奪ひ去つて、我等の當然通過すべき危機――それから體讀せなければならない運命の偉力と愛――に眼をそむけさせるのであります。殊に中年の四十前後は人間が社會的に最も活動する時期で我等はその爲に肝心な生存の根本問題を忘れ勝であるばかりか、それまでに造り上げた社會上の位置をも顧念するところから、つい盲目になり、怯懦になつて、まともに人生を凝視し經驗する勇氣を失墜し、自分から自分の生命に「中止」を命ずるやうな境遇に陷ります。

花袋君。これがほんとうの生活でありませうか。實際世間で幾人の人が自分の生命を回顧して、Mediocreな其平常生活から奮起する暇を持つたでせうか。中年期の危機のどれだけ危險でそしてどれだけ重大であるかといふ事を、世間の幾人の人が經驗したでせうか。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

疲れた田舍道の馬車馬のやうに、「習慣」といふ重い荷を牽き、家族といふ目隱しをさせられ、名利の鞭を浴びながら、あてどもなく進むのが感心すべき人生でありませうか。

中年期の危機の何れだけ危險であり、然し何れだけ重大であるかといふことは、トルストイなどの一生を見てもわかることであります。實際眞面目で誠實な人の一生には必ずこの時代に再生か死かの恐ろしく緊張した一齣が蹈まれなければならない筈です。中年期に於ける偉人の心理がやがて人間最高最悲劇の心理であり、文字通りの、「復活」の心理であると私は思ひます。

花袋君。誠實でそして「自由」である人が斯樣な時期に際會した場合採るべき手段を、あなたは何であると思はれます。回避か、晦韜か。否な〳〵、直往と凝視――のほかはありますまい。妥協のない全き經驗のほかはありますまい。實際、かやうな困難な道はありません。然し正直で且つ「自由」な人の採るべき道がこのほかにありませうか。彼は否應なしに進まなければなりません。

花袋兄。あなたは兎に角にあなたの全力を盡して斯うした妥協のない尊い道を蹈んで來られたといふ事が私の眼に映じます。あなたは中年の危機に就て赤裸々な經驗を積まれたやうです。私の好奇心が熱心にあなたの近來の生活に牽き附けられるといふのも、かうした理由からであります。

花袋君。人生は情熱と意志との二元場裡であります。この二つの交互の流れのリズムが我等の生活であります。そして我等の生活のリズムをして完全ならしめるためには、我等は我等の情熱と意志との其の何れをも「自由」であらしめなければなりません。我等の生活がどちらの極に近かづかうとも、そこにはジエヌインの姿を保たなければなりません。放縱と拘束とを超越した自由にだけは我等の責任を帶ばしめなければなりません。自由な情熱と自由な意志とのハーモニイが取も直さず人生の極致であります。

しかしかやうに美妙な平衡は、最初からとても望むことは能きません。一方の情熱は甚だ危險な我儘な子であります。そこで平和な妥協を望む社會はいつも我等の情熱を繼子扱ひにいたします。社會は道德だの宗敎だの慣例だのといふものを造つて人間の情熱に眼隱しすることを努めてゐます。文明とは或る意味に於て情熱の海邊に築かれた堤防だと見ることが能きます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然し田山君、あなたも御存じの通り、かやうな堤防はまことに脆いものであります。殊に中年期の危機に於ては最早かやうな人爲的の制限は少しも用をなさないものであることを、あなたは充分に經驗されたことゝ思ひます。心理と肉體との兩方面から、徐かに然し深くひし〳〵と責め寄せて來る生の不可抗な約束の前には、我等自身の意志も、社會が我等に課せやうとするあらゆる律則も、凡てが無効であります。この時我等の隱くされたる心靈の扉は殆んど無抵抗に開放されます。

嵐の庫の戸が開かれると、そこには赤裸々な「人間」の形をしたあまたの demons が現はれます。何たる恐怖でせう。然しまた何たる貴い「人獸」の姿でせう。

花袋君。かやうな不可抗な情熱は最早普通一般の放縦な情熱とは同じものでないことを、あなたは承認されるだらうと思ひます。しかもかやうな情熱には、生れつき誠實な者ほど犧牲になり易いのであります。なぜなら彼等は怯懦な常識の防禦を缺いてゐるからであります。昔から天才者が、より強き情熱の餌食となつたといふのは當然な事柄でありませう。然しかやうな情熱は一方に大きなカウンター、バランスを要求します。

悔恨と絶望とがそれであります。情慾の demon が導く海は悔ひと悲みの海のほかありません。深淺の差こそあれ、誠實な人生の戰鬪者が必ず一度は落ち込まねばならない深淵は正にこれでありませう。

花袋君。私はあなたが中年者の悲哀と喪心から、少くとも一時はかうした情熱の捕虜となられたことを認めずにはゐられません。あなたの四五年前の述作は明らかにその徑路を談つてゐます。しかもあなたは之に處して勇敢であつたことも認められます。あなたは世間の一般のやうに家庭や社會に對する未練から臀込みばかりしてゐずに、或る程度までは大膽に、眞摯に人生の危機に對面されました。それが何よりも私にはあなたの中の尊い物に思はれます。その爲めにあなたが拂つた苦慘な犧牲も想像されんではありません。

花袋君。あなたの其の戰は何ういふ結果を齎したでせう。その後のあなたの生活には稍や疲勞の一時期が續きました。あなたは旅行やら僧庵生活やらに孤獨の生活を求めてゐました。あなたに對する私の同情と凝視とが深くなつたのはその頃からの事であります。かうした Solitude の一時期があなたに healthy な結果を齎すか、それとも Poisonous な結果を齎すかを、殊に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私は注意して見てゐました。

かうした人生の特殊の運命に對する戰が、その人の心的健康にとつて過重なものであれば、其の人は全く打ち砕かれます。その人の受けた痲痺は一生癒ゆることなしにその人を悩まします。その時からその人は何等かの意味で不具者になり了せます。彼の行く道は强て世に背くか、一生世と妥協した生活を送るかのほかはありません。

然るに强い人、健全な人は、かうした困難な運命の下から再び蘇ります。彼は何等かの意味で「復活」の新しい道をとります。花袋君。私はあなたの近來の態度から推して、あなたが健全な新しい道を踏み出されたことを認めて、あなたの爲めに祝福せずにはゐられません。私がこの一文を書かうとする動機も主として此の喜びの爲めであります。

ロマン、ローランはその愛する主人公クリストフが、命から〲に「燃ゆる叢」の中から歸つて來たのを迎えて、かう言つてゐます。「戰を戰ふには意志するだけでは充分でない、人間は不可知な神の前に彼自らを卑下せねばならぬ、人間の意志は神の意志なしには何事も爲すことが能きない」と。またかうも言つて居ります、「何人も戰の神の許可なしには彼自らの主人公たりと驕りえない」と。

花袋君。あなたの近頃の態度には、ちやうど是等の詞の意味が示すやうな忍從と明らめの分子が見えます。眞の人生の戰の味ひを一度たりとも知つた人の底堅い fatalism の氣分が忍ばれます。

花袋君。近頃のあなたはあなたの今の年輩と經驗とに似合はしい欲望を以て、沈靜と明智とを求めてゐられるやうに想はれます。あなたは chaos を出て order にあこがれる時期に這入られたのでありませう。今からはあなたは眞に自由な意志の人として、生命のもろもろの力を統御して行かれることを信じます。あなたの生活からも藝術からも demon の分子は次第に薄らぐ事でありませう。私は今後のあなたの述作から心理と明智とを欲求してゐます。

然かし花袋君。情慾は人生の根本元素であります。一時その火は消えたやうに見えても、決して消え去るべきものではありません。自由な意志で保護された自由な情慾――この二つのものの微妙な調和から打建てられた人生、藝術が、眞に我等の欲するものであり、また今後のあなたに望みたいものであります。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

花袋君。長いこと不得要領な物の言ひ方を致しましたが、これは全く今日の私の氣分に應じた得手勝手な當推量であつて、あなたの本意とは懸け離れたものであるかも知れません。なほこの批評は主として A man としてのあなたを見たので、表現としてのあなたの藝術に對しては、私にも稍や不滿足な點がありますが、その事はこゝには述べません。何れお眼にかゝつてお話を伺ひたいと思つてゐます。

新刊批評と紹介

近時本文の記事極めて輻輳を來たし爲めに新刊書を詳しく紹介批評する餘地なく、已むなく只其一部の書名を並記せり。寄贈されたる著者、出版社及び未だ批評するに遑あらざる著書の寄贈者の御宥恕を乞ふ。

△永遠之戰（定價金壹圓） 鹿兒木員信著 同文館發行

△東電筆誅錄（定價壹圓八拾錢） 野依秀一著 實業之世界社發行

△小夜曲（定價九十五錢） 竹久夢二著 新潮社發行

△戰爭と巴里（定價七十五錢） 島崎藤村著 新潮社發行

△近代思想十六講（定價壹圓五拾錢） 長江、臨川共編 新潮社發行

△滿洲觀（定價壹圓貳拾錢） 幣原坦 寶文館發行

△近世に於ける「我」の自覺史（定價壹圓貳拾錢） 朝永三十郎著 寶文館發行

△シャロック、ホルムス（一）（定價七拾錢） 加藤朝鳥著 天弦堂發行

△黎明（定價壹圓貳拾錢） 茅原華山著 實業之日本社發行

△支那論集（定價壹圓貳拾錢） 市村瓚次郎著 富山房發行

△日本史通覽（定價四圓） 高桑駒吉著 實業之日本社發行

△アラビヤンナイト（下卷）（定價貳圓） 杉谷代水譯 富山房發行

△新生活の創始（定價八拾五錢） 佐野袈裟美著 早稻田文學社發行

△狂犬（定價七拾五錢） 廚川白村著 大日本圖書株式會社發行

△美人禪（定價壹圓） 笛岡清泉著 丙午出版社發行

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

△通俗郵便物語（定價八拾錢） 田中大郎著 丁未出版社發行

△新譯碧巖錄（定價壹圓） 蜂谷柳莊譯 大阪屋發行

△信念の發揮（定價壹圓） 南條文雄著 東亞堂發行

△人生の裏面（定價壹圓） 村上浪六著 東亞堂發行

△無駄なき生活（定價壹圓） 山脇房子著 東亞堂發行

△スマイルス人生と努力（定價壹圓貳拾錢） 井關十二郎譯 佐藤出版部發行

△戰爭と國民性（定價五拾錢） 芳賀矢一 富山房發行

△春の水（定價五拾五錢） 松本若味譯 文正堂發行

△眼と神經衰弱（定價七拾錢） 前田珍男子 實業の日本社發行

△米國より日本へ（定價壹圓） 正岡猶一譯 警醒社發行

△明智光秀（定價七十錢） 武田仰天子 講談社發行

△明治照憲兩陛下御製集（定價六十錢） エフ、エ、ロムパート譯 警醒社發行

△契約書式大全（定價九拾錢） 龜谷正司著 東亞堂發行

△人心收攬術（正價金六拾錢） 佛心道人著 東亞堂書房

△通俗大學文庫（定價毎册參拾錢） 通俗大學會發行
(1)最近の東京市（阪谷芳郎著）(2)國民教育論（大隈重信著）(4)都會生活と村落生活（建部遯吾著）

△文集しら菊（定價四拾錢） 中村孝也著 大日本雄辯會發行

△惡魔の曲（定價五拾錢） 林和著 岡村書店發行

△幼兒より中學迄のしつけ（定價金四拾錢） 高橋淡水著 東亞堂書房

△臨川論集（現代評論選集第一五）（定價三十五錢） 新潮社

△別れた妻（代表的名作選集第十六篇）（定價參拾錢） 近松秋江著 新潮社發行

△お艶殺し（同第十七篇）（定價參拾五錢） 谷崎潤一郎著 新潮社發行

△松本博士の大黑天考を難ず（非賣品） 上田恭輔著

△新聞研究第四階級（定價金參拾錢） 河合乙彦著 二松堂書店

△近代思潮叢書神秘主義者の思想と生活（五〇） 吉江孤雁著 天弦堂發行

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此際入會者に 沙翁三百年祭記念畫像無料贈呈

學務顧問

坪内逍遙先生
森鷗外先生
夏目漱石先生
幸田露伴先生
大町桂月先生
島村抱月先生
五十嵐力先生

大日本文學會 文章講義錄

壹箇年卒業

文章上達の秘訣を求むる人は來たれ

新學期開始會員大募集入會絶好機

趣味教養の糧を渴望する人は來たれ

講義

文章一般の作法と文藝一般の理論を明快平易に教授し他に比して二倍三倍の質量ある内容をば會員に提供す

本會の根本特色は之れ

添削

會員に限り文章長詩短歌俳句の四種を丁寧親切に無料添削し他に比して數倍の權利と自由とを會員に贈與す

五大特典

入會金不要
文章寶典(價參拾錢)贈呈
貸費制度開設
現代名文範(價五拾錢)贈呈
懸賞文應募資格附與

一流なる講師 卅餘氏の講師先生はすべて現文壇に活動する大家揃ひなり

有益なる雜誌 會員に限り毎月文藝雜誌を無代頒布し會員の實習機關とす

低廉なる會費 非營利的の趣旨に基き實費として毎月僅に五拾錢を徵收す

完全なる設備 質疑相談自由懸賞文募集の他講師面會日を定め直接指導す

見本付會則を速に請求せよ

無代進呈

葉書又は電話にて申込あれ

(中付三の一)

東京市外高田村元巣鴨上り屋敷 大日本文學會事務所 電話番町五三八六番 振替東京二八七九二番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

沙翁三紀念號

早稻田文學

■沙翁劇の梗概（沙翁の劇作卅有六に及ぶ。斯くの如く多數の作を網羅したるもの他に見るべからず。）　横山有策

□英米劇壇と沙翁劇……坪内士行
□シエクスピアとプロスペロ……長谷川天溪
□日本に於ける沙翁劇……伊原青々園
□沙翁と佛國劇壇……松居松葉
□沙翁の墓に詣ずるの記……島村抱月
□沙翁劇演出の變遷……中村吉藏
□沙翁と獨逸文學……山岸光宣
□沙翁昇天三百年に臨みて……楠山正雄
□沙翁劇と近代劇……島村民藏
□沙翁と默阿彌……河竹繁俊
□優俳カインツのハムレツトの型……秦豐吉
□トルストイの沙翁論……本間久雄

■呼吸（小說）　小川未明
■生と死の愛（小說）　谷崎精二

沙翁傳　横山有策

口繪＝菊判二倍大二枚
挿繪＝凸版寫眞版廿余

倍號（四月一日發行）定價五十六錢　郵税三錢

東京神田表神保町　振替東京二七〇番
東京堂

信用ある書舖及び卑猥なる實品の廣告は謝絶す

（中付三の四）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論春期大附録

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

沙翁二紀念號

早稲田文學

口繪＝菊判二倍大二枚
挿繪＝凸版寫眞版廿余

倍號（四月一日發行）定價五十六錢　郵稅三錢

東京神田表神保町 ■ 振替東京二七〇番 ■ 東京堂

（中付三の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論春期大附録

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お松彦三

田村俊子

一

如月の末の日から彦三郎は煩ひ出して、その上に眼も惡るくなつた。お松はその藥を煎じたり、桃の實を擂つた汁の眼藥を、その眼に射してやつたりして、看護をしてゐる。

枕許には行燈が薄暗く點つてゐる。其の行燈の傍にお松は悄然と坐つて、彦三郎の窶れた寐顏を打守つてゐた。幾日か結はない島田が崩れて、赤い切れが亂れた鬢に落ちかゝつてゐる。その赤い切れに灯影が映つて、臙脂のいろにぼつと灯が四方に滲染んでゐる。細そりしたお松の黄八丈の肩にもその灯影が濃く落ちて、お松の白い頰に時々陰翳がゆら／＼と走る。暫らくの苦勞にその頰がげつそりと削けて娘らしい可愛氣な面影が消え、高い鼻の小鼻の蔭にも、窪んだ二た重の瞼の隈にも、陰欝な線が刻まれて、限りない悲哀をその濃い眉に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

含んでゐる。着物の裾や襟の間から仄見える赤い色にも、その媚かしさが痛々しい苦惱のかげを帶びてゐた。

お松は男の顔を打守つてゐると悲しくなつた。男の蒼白い額には汗が浮いてゐる。其の額に手が觸れたら氷のやうに冷めたくはないかと思ふほど、男の顔は眞つ蒼である。お松は襦袢の赤い袖で男の額をそつと拭いてやつた。男の髮の毛が亂れて、其れがはら／＼と頬に落ちかゝつて來た。

「お孃さま。」

彦三郎は目を覺ましてお松を見ると、熱に渇く唇を動かしてお松に聲をかけた。

「確かりして。彦三。」

「あなたはお一人でお淋しう御座いませう。」

「いゝえ。何ともない。」

とお松は頭を振りながら甘えるやうに呟いた。お松は男を可愛しく思ふ情で、思はずこの胸が塞がつたので凝つと默つた。

「私よりもあなたが煩ひでもなさいませんやうに、私の爲に決して無理な事をなすつて下さいますな。」

彦三郎は然う云つて枕に顔を埋めたが、一時にいろ／＼な事が考へ出されて悲しくなつた。叔母のお角からは今朝もいろ／＼と邪慳な事を彦三郎は云はれた。そのお角の言葉や、二人の行末の事などが彦三郎の弱い胸を痛めて、彦三郎は何うして好いか分らないのである。

「お前も意氣地の無え上にその病氣ぢや、私も重荷の上に重荷と云ふものだ。大家のお孃さんを連れ出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したと云へば大した器量だが、後がこれぢや何にもならねえ。お嬢さんを女房にするなら女房にするやうに、早く世帯を持つ仕覺をするとか、其れが出來ずば、お嬢さんを御主人の方にお返し申してお詫びをして見るとか、何とか始末を付けねえぢや、迷惑するのは私ばかりだ。この貧乏暮しの中から二人に何時までも食べ扶持なしのお米を食はして置く譯にもならねえから、お前もその積りで何とか工夫をして見ねえ。病氣々々と云つてゐちや、何時まで經つても埒は明かねえよ。」

彦三郎は斯う云はれたお角の言葉を一とつ〳〵思ひ浮べたが、何時かその眼からほろ〳〵と涙が落ちた。

此家へ二人が隱れ忍ぶやうになつてからも、彦三郎は御主人の大切な娘を連れ出した大それた罪咎に責められ、其の上にこの先き二人が何うして活計して行かうと云ふ行末の心配に、一つ時とても安らかな時を過ごした事がない。

「私はお前のもの。何所へでも、何所の果てへでも連れて行つて。」

と女から朝夕迫られても、彦三郎にはその女の身體を何うすることもならなかつた。女の熱い戀は彦三郎の心を惱ますけれ共、彦三郎はその女の身體を抱いてこの世に生きて行く術を知らないのである。自分のやうな意氣地のないものに、何所へ行つて、何うして二人の活計が初められやう。彦三郎はその行末の難義さを思ふとあまりの恐しさに、この天日さへもはつきりとは仰げない様にその心がおろ〳〵と臆した。少しの資本でもあれば、其れを便りに何所の果てへども行つて、今まで習ひ覺えた鼈甲小間物でも商ひながら、細々でもその日の暮しを立てると云ふ詮術もあるけれ共、その僅の資本を作ると云ふ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事が彦三郎の力では出來ない。

「何うぞして僅の金子でも手に入れる工夫はないものか。金子が欲しい。金子が欲しい。」

彦三郎は唯そればかりを望み暮らしたが、幾度心に繰り返して見やうとも彦三郎にはその金が出來ないのである。其の上に、思ひもよらぬ病氣になつて、彦三郎はお松にも云はれぬ苦勞に苦勞を重ねた。

「此家を明日にも出されたら、二人は乞食でもしなければならない。」

彦三郎は何うして其れをお松に云ひ聞かせたものかと、其れにも思ひ惱んでゐた。

お松は彦三郎がまた、何か苦勞にして泣いてゐると思ひながら、自分も涙含んで來た眼を屢打いて膝の上に掻い寄せた袂を撫でゝゐる。何だか二人の姿が果敢なく切なくて、生きてる空もないやうに思ひ詰める宵であつた。お松は寂しさに堪えられなくなると、

「彦三。彦三。」

と云つて彦三郎を呼んだ。

「はい。」

と彦三郎は返事をして顏を上げたが、その頰にまだ涙が白く傳はつてゐる。

お松は男の心持が、まるで變り果てゝゐるやうで賴りがなかつた。男が何を考へてゐるのか、其れが解らないので斯うしてゐても、賴りない。男は何にも打明けずに唯一人してくよ〳〵してゐる。二人が斯うして一所に居るやうになつてからも男は一日でも浮いた顏を見せた事がない。何時も鬱々と沈み込んで、恐れと惱みに蔽れた顏色をしながら、お松と顏を合せるのさへ厭はしそうに、奥の一と間にばか

り閉ぢ籠つてゐた。明るい眞晝の光りさへ見るのも厭つて、雨戸も閉ざした儘に、何か考へては泣いてゐる。お松にはその男の心が少しも解らなかつた。そうして時とすると、自分の顔を見るのさへ厭はしそうにする程、男は何を一人で思ひ惱んでゐるのか、お松には解らなかつた。髮も亂れ、月代も延びて、美しく可愛らしかつた男の顔が、僅二十日も經たぬ内に瘦せ衰へてしまつた其の頰を撫でゝやりながら、男が一人して泣いてゐるその涙を、お松は何時も不思議にして見守つてゐた。

「お前は何故泣いてゐる。」

お松が斯う云つて聞いても男は默つてばかりゐる。然うして唯可憐らしく泣いてばかりゐた。

これ程の樂しい日を男が少しも浮かないでゐると云ふ事がお松には解らなかつた。火事のあつたその晩に、無間地獄の繪のやうな恐しい猛火の中を彦三郞に連れられて逃れた時、お松は思ひ迷つてゐる彦三郞を促し立てゝ、遂に家を出てしまつてから、二人は此家に隱れて好き自由な二人の日を送るやうになつた。終日一と間へ閉ぢ籠つてゐれば、その二人の仲を覗きに來るものもない。そうして他愛のない睦言に、毎日の事を珍らしそうに手と手を取り合つて、

「もう二人はどんな事があつても離れずにゐやう。」

と膝を交へて堅い約束をする。唯それだけの事を、お松は百年千年繰り返しても倦きやうとは思はないのに、男はそれが欝陶しそうであつた。お互に觸れ合ふ指先にも情けの火が燃える。お互に見合はす目と目の内にも熱が輝く。物を云へば戀で息が彈む。お松はその長い袂の内に生命の限り男を可愛しんでも、男の心は女の戀とは一所にならないでゐた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「お前はつまらない。何を然うして考へてばかりゐるのだらう。お前はちつとも私の事を考へてはゐない。」

お松が斯うして焦れてゐる時も、彦三郎は重く屈托してゐて默り勝ちでゐた。

「彦三はちつとも自分の相手にならない。」

お松は然う思ふと悲しかつた。二人が家にゐた頃、忍び逢つてゐた時の彦三郎の懸命な、優しい戀をお松は今も確かりと胸に抱いてゐて、其の昔の土藏の中の戀ひしい夢からお松の思情は離れずにゐた。

彦三郎が湯が欲しいと云つたのでお松は其れを湯呑みに汲んで來た。叔母のお角は湯に行くと云つて宵に出たぎり、まだ歸らずにゐる。あの叔母の居ないと云ふ事がお松にも嬉しかつた。お松は彦三郎の後に廻つて脊など擦つてやらうとすると、彦三郎は、

「それ程苦患でも御坐いませぬ。」

と云つて其の手を取つて、自分の枕邊へお松を座らせた。見る影もないやうに窶れたお松の姿を眺めてゐると、彦三郎の胸に切ない思ひが亂れた。そうして、お松を連れて路頭に迷はなければならない日が、何時かは二人の上に迫つてくる事を彦三郎は思ひ浮べた。

たつた一人の頼りに思ふ叔母の無慈悲——それは幾度繰り返しても詮のない事であつた。それも金さへあれば一時の凌ぎは付くのだと思ふと、彦三郎は何うあつても其の金が欲しい。何うしたら其の金が手に入るものか、と幾度思案をして見ても、其の手段は何うしても彦三郎には見付からないのである。彦三郎は落膽として枕に頭を付けた。無慈悲な叔母の仕打を思ふにつけ、「人の情け」と云ふ事が、しみ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

じみと身に感じられて來て、彦三郎の眼に又涙があふれた。

彦三郎は親も兄弟もない孤兒で、それを幼少い時にお角の手からお松の親夫婦の手に渡されて、其の家で育てられた。奉公人とは云へ、主人夫婦の情けは親にも勝つて慈愛をかけられたのに、主人の歿後は兄息子の五介の放蕩で家產も傾き盡し、其れに今度の火事で再び店ゝ開かれぬ程に落魄したと云ふ噂も聞きながら、其の主家の難義も打捨てゝ、斯うして主人の娘と不義の戀に行方を忍ばしてゐるのである。然う云ふ人非人な自分が、現在の叔母から情けを知らない無慈悲な扱ひを受けると云ふのも、人の恩義と情けを無にした報いからと彦三郎は空恐しい氣さへしてゐる。其の無慈悲な叔母に、何うあつても縋らなければ今日と云ふ日も過ごされない意氣地のない自分の身が、彦三郎はつく〴〵と味氣なかつた。

「お孃さま。」

と彦三郎が思ひ屈した、遣る瀨なげな面を上げてお松を打守りながら云つた。

「私はあなたにお願ひが御坐います。お聞きなすつて下さいますか。」

その彦三郎の蒼ざめた頰の肉がわな〳〵と戰ゝてゐた。

「何をえ。」

お松は彦三郎の、深い覺悟のあるやうな顏色に驚かされながら、何を云ひ出すのかと靜に待つてゐた。枕の上に兩手を突いて、暫らくは何とも云はずに默つてゐる彦三郎の横顏を見詰めてゐると、お松は不思議に襲はれるやうな物恐しい氣がした。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「彦三。」
と促して見ても、彦三郎は直ぐには口を開かない。お松の小さな胸は、彦三郎が默つてゐるほど何とも知れぬ恐れに震へた。
「私がどんな事を申しても、決して恨んで下さいますな。私はそれより外には、もう分別がないので御坐いますゆゑ。」
彦三郎は斯う云つた儘で、まだ考へてゐた。
　彦三郎はお松に、舊の家へ歸つてくれるやうに、其れを云ひたいのだが、直ぐには云ひ兼ねて心の中で苦しんでゐる。唐突に家へ歸るやうにと云つても、お松には其れが何の故とも知る由がないに違ひなかつた。彦三郎は他愛のないお松の心を、俄な苦勞に騷がしたくもないと云ふ氣遣ひに、その胸が優しく閉ぢられて猶更何も彼も打明けることが出來なかつた。
「あなたは一日々々と斯うして暮らしてゐて二人の行末はいつたい何うなるのだとお思ひなさいます。」
彦三郎は暫らく經つてから、躊躇ひながらお松に云つた。
「何うにもなるまい。二人は何時までも唯斯うして一所にゐるばかり。」
と即坐に返事して、お松は夢を見るやうな恍惚とした眼に笑つた。
「何故そんな苦勞をするのだらう。先きの事などは何うでもよい。」
とお松ははつきりとした鈴のやうな聲で云つた。
「でも然うは參りませぬ。あなたには何時までも斯うして一所に居られるものとお思ひなさいましても、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

浮世は辛う御座います。今朝も私は叔母からいろ〳〵な事を聞かされまして、叔母はこの上二人の食べ扶持が入れる事が出來ずば、此家を出て行けと申しました。あなたも叔母の邪慳は御存じで御座いませう。金と云ふものを見せなければ叔母は本當に私たちをもう一日も此家に置いては呉れませぬ。今、二人が此家を出されましたらその先きは何うなるとお思ひなさいます。私もあなたも其の日から路頭に迷はなければなりませぬ。」

と彦三郎は深い吐息を漏らしながら云つた。

お松はそれを默つて聞いてゐた。彦三郎の云つてる其の言葉は、よく解るやうにも思ひながら、彦三郎が何うして其の爲に斯う苦しむのかゞお松には解らない。お松は凝つと彦三郎を見た。見窄らし氣な肩の痩せ、削けた頰、何處かに痴呆た皺の陰翳がその悲しみに充ちた表情の間を走つてゐて、男の顏は一層哀れ氣であつた。お松はその顏を打守つてゐる内に急に悲しさが迫つて、長い袂を顏に當てゝ歔欷り上げた。

「あなたが何も其のやうに心配をなさることは御座いませぬ。」

と彦三郎はお松を案じながら、蒲團の上から居膝り出して來てその肩を優しく撫でながら云つた。

「私がお願ひと申すのはこゝの事で御座います。私一人の身ならば乞食非人になりませうとも厭ふことは御座いませぬが、あなたにまでそんな難儀はおさせ申されませぬ。何卒あなたは今宵限り、一旦親御様のところへお歸りなすつて下さいまし。」

お松は其れを聞くと、默つて頭を振つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あなたは厭とおつしやるので御座いますか。」
「何うして今更私に家へ歸られやう。お前も情れない事を云ふ。」
とお松は涙を拂ひながら、堅く心を決めてるやうに又頭を振つた。
「私にはそのやうな事は苦勞とは思はれぬ。お前が乞食非人になるなら私も乞食にならう。叔母御が此家に居て惡るいとおつしやるなら、今宵にも二人して此家を出やうではないか。私はなんにも恐い事はない。何故それがお前には苦勞になるのだえ。」
「無分別なことを仰有います。あなたが何うして、其の樣な身の上に成れるとお思ひなさるので御座います。」
「二人が一所にさへ居られるなら、私は何所へでも行かう。なんにも恐い事はない。」
「其んな事を仰有つて、私たちは死ぬより外に詮もない身になるで御座いませう。私はあなたにそんな苦勞はおさせ申されませぬ。」
　女が餘りな無分別な事を云ふと思つて、彦三郎は打沈みながら口を噤んだ。その弱い心の内には壓されるやうな悲しみが展がつてゐた。
「私は金子が欲しう御座います。」
とやがて彦三郎は萎れながら云つた。
「僅の金子さへ私の手にある事なら、あなたにも何を苦勞をかける事も御座いませぬに。意氣地のない私の身ではその僅の金子さへ調へることが出來ず、あなたにも辛い目をお爲せ申します。あなたはお厭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

では御座いませうが何卒お家へお歸りなすつて下さいまし。私をお捨てなすつて下さいまし。其の内には又どんな時節が參らないとも限りませぬ。それより外に好い分別は御座いませぬ。」

金子が欲しいと彦三郎が切迫詰まつたやうに云つてる事がお松には解らなかつた。何故金子に困ると云ふのか、金子と云ふものは何所にでもあるものではないかとお松は思つた。金子と云ふものを、これ迄一度も自分の手にした事のないお松には、其の金子に困ると云ふ彦三郎の言葉が腑に落ちない。お松はお孃さま氣質の夢見るやうな心から、金子は地からでも湧いてくるものゝやうに考へてゐる。

「お前は苦勞にもならない事を苦勞してゐる。お金が欲しければ、何所にでもあるものを。」

とお松は笑ひを含みながら優しく云つた。

「あなたはまあ、世間見ずなお坊さんのやうな事を仰有います。其所等に金子が落ちてゞもゐるやうに――其れはみんな他人のものでは御座いませぬか。其れを私が何うする事が出來ませう。」

彦三郎が繰り返し同じ事を云つても、お松には然うではないと自分の胸の中で彦三郎の言葉を打ち消してるものがあるやうな氣がする。其れ程までに思ひ詰めなくとも二人の行末は何うにかなるとお松は其の夢見る心の奥で、何か大膽に思ひ辿つてゐる。何だか餘りに彦三郎の弱々しい心だと、お松は男を可愛しくさへ思つた。彦三はほんとうに、苦勞にもならない事を苦勞にしてゐると、お松は幾度も自分の胸に自分で云ひながら、

「お金のことなぞ、何うにでもなる事ではないか。」

と彦三郎を慰めるやうに重ねて云つた。

「あなたは世間と云ふものを御存じない故、何事も然う安いことにお考へなさるので御座います。私は明日と云ふ日が恐しくてたまりませぬ。」

自分の云つて聞かせる事が何一とつ會得の出來ぬお松の他愛のない心が、彦三郎には今更に頼りなく情ない。お松が家へさへ一旦立歸つてくれる事なら、自分の一人の身は何うにでもなる。然うしなければ二人の今の難儀は逃れられぬと思ふほど、家へは歸らぬと云ひ張る娘氣の我が儘が、彦三郎には恨めしかつた。

「お孃さま。あなたは私の當惑をお察しなさる事が出來ませぬか。」

と彦三郎は思ひ入りながら俯向いて云つた。

「叔母は又明日になれば、私に何の彼のと申しませう。其ればかりが苦になつてなりませぬ、私の申すことに御會得が參りましたなら、あなたもお辛うは御座いませうが、親御樣にお詫びを入れ、いつたんお家へお歸りなすつて下さいまし。私もあなたにお別れ申したくは御座いませんが、其れもこれもみんな私が意氣地がない故に。」

彦三郎は涙に聲が塞まつて、後の言葉が出ない。お松との別れが、又しみ〴〵と彦三郎の胸に悲しく染みて來た。

二

彦三郎はその宵から熱が烈しく、今朝は枕も上らなかつた。お松は途方に暮れながら、熱に苦しむ彦三郎を撫で擦つたり痛はつたりして、其の傍から離れずにゐる。彦三郎は病ひに疲れて大方はすや〳〵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と眠りに落ちてゐるけれ共、目が覺めると、

「胸の左が痛んでなりませぬ。」

と云つて苦しんだ。

「あなたもほんに御苦勞な事で御座いますね。」

お松が勝手元に出て、一人して藥を煎じてゐると、お角がそこに出て來て傍から覗きながら聲をかけた。

「あなたにもいろ〳〵お世話になつて濟みませぬ。」

お松は昨夜の彦三郎の言葉を思ひ浮べながら、その人を鬼とも思ふ恐しさの中から、聲を戰はして挨拶した。

「出來さへする事ならどんなお世話でもする覺悟では御座いますが、私もこの貧乏故に屆きませんのさ。彼れがこの儘ずつと惡るくなる樣な事でも御座いますと、困るのは私とあなたばかり。何うしたもので御座いませうねえ。」

お角は其所に蹲踞んで兩膝の上に手を重ねながら斯う云つた。お松は何う返事をして好いか分らないので默つてゐる。七輪の上から藥土瓶を下して見たが、又それをそつと掛けて、そうして吻と小さな息を吐いた。

「あなたにばかり御迷惑をかけて、濟まない事で御座います。」

お松は何時か涙含みながら小さい聲でおろ〳〵と云つた。恐い恐いと思ふほど、お松の身體が縮んで手

足が震へてくる。お松はお角の顏を見上げる事さへ出來ないでゐる。

「もし、お孃さん。」

お角が太い聲で、急に何か思ひ付いたやうにお松を呼んだので、お松は、

「はい。」

と返事はしたが、一層お角が恐しかつた。

「あなたに少いつとお相談が御座いますがね、まあ一寸此方へ入らつしやいまし。」

お角は然う云つて先きに立つて行つた。お松は藥土瓶を片手に持ちながら、長く曳き摺つた裾を片手に引き上げて其の後に隨いて行くと、お角は薄暗い上り端のところでお松を招いだ。

「あなたに、こんな事をお聞かせ申したくは御座いませんが、私も一人者の貧乏渡世で一文の貯へのあらう筈もなし、あなたがた二人を斯うして世話するお蔭には、この頃では時借り質借りなどをして不義理な事だらけで御座います。この世智辛い中から何時までも私もお世話をする譯にも參りませんが、彦三郎はあの通りの意氣地のない奴、それにあの病氣では何うする事もなりますまい。あなたは一體この先き何うしやうと思召す了簡だえ。」

お松は頻りに胸騷ぎがして、凝つと落着いてはゐられなかつた。お角の云ふ一と言々々が嚴くお松の胸を刺すばかりでなく、斯うしてゐるとお角の口から絶對絶命の難儀が自分や彦三郎の身に迫つてくるやうに思はれて、お松はお角の言葉に耳を傾けてゐる事が恐ろしかつた。

「私にも何うして好いやら分りませぬ。」

とお松は俯向きながら恐わ〳〵に云つた。

「あなたもお家においでなすつたころは、ほんのお嬢さんで浮世の苦勞も知らずにゐながら、今更斯うした御苦勞をなさると云ふのも、一と口に申せばあなたの心柄。好いた男の爲なら仕方がないと云ふものゝ、斯うしてゐては其れこそ淵川へでも身でも投げずばおさまりが付きますまい。今の内にあなたも篤くりと御思案をなすつて、好い方便をお考へなさいまし。」

「私には何うして好いやら分りませぬ。」

お松は又同じことを繰り返して、がつくりと兩の肩を落した。「路頭に迷はなければならぬ。」と云つた彦三郎の昨夜の言葉が今は假初め言ではなくお松の心に悲しく應えてきた。お松は病苦に惱んでゐる彦三郎の哀れな姿を思ひ浮べてゐる内に、何とも知れぬ涙が溢れて來たので、お松は袖で顏を掩ひかくして涙を拂つた。

「何うして好いか分らないとはおつしやるが、あなたも小供ではあるまいし、十七なら十七相當の分別も思案もありそうなものでは御座いませんかえ。昨夜私が此家へ歸つて來た折に、ちらりと彦三郎があなたに親御の許へお歸んなさるやうと勸めてゐたのを聞きましたが、あなたは何う云ふ御所存だえ。」

「私は家へは戻りませぬ。」

とお松は弱い聲で優しく云つた。

「彦三と別れて私一人家へ戻らうとは思ひませぬ。たとへこの儘難儀に難儀が重なり、乞食非人に落ちませうとも、私は彦三とは離れませぬ。」

お松は思はず情が迫つて身を顫はしながら云つた。彦三郎を酷く扱ふ叔母の無慈悲――お松は其れを深く怨みに思ひ染みながら、激しい心で云つた。
「それ程思ひ詰めてゐらつしやるお心なら、どんな事でもお出來なさる筈で御座いますが、よく御思案をなすつて御覧なさいまし。乞食や非人にならなくとも、まだ好い工夫は御坐いませう。彦三郎の苦勞を助けてやるのもあなたのお心一とつ、まあ世間は何うにでもなりますのさ。」
とお角は鐵漿をつけた歯を見せて笑つた。
「其れは何う云ふことで御坐いませう。」
お松が愛度氣なく首を傾けてお角に聞いた。
「なに、何でもない事で御坐いますのさ。あなたがお心が付かなければ私がお話し申して上げても宜う御坐いますが、其れよりは御自分でお考へなすつて御覧なさいまし。あなたのやうな御容貌なら、金は何處からでも降つて參りませう。」
お松は初めてぢつとお角の顔を打守つた。
「私に身を賣れと云ふのではないか。」
お松はその顔を打守つてゐる内にふと、お角の謎がわかつたと思つた。
「よく御思案をなすつて御覧なさいまし。若いお人は兎角に一とつにばかり思ひ詰めて、やれ人の門に立つてもとか、咽喉を突いてもとか云つてよくない心中立をするもので御坐いますがね、この面白い浮世を然う狭く渡らうと云ふのは惡るい御了簡で御坐いませう。斯うしてゐれば又どんな方便でゝも世間の

渡れない事は御坐いませんから、同じ事ならあなたも浮世を面白く、彦三の爲にもなるやうに御思案なすつて御覽なさいまし。」

お松は默つて首を垂れてお角の云ふ事を聞いてゐる。ぢり〱と鈍い刃物でその胸を刻まれるやうな切ない思ひがするので、お松は齒を噛んで耐へてゐる。お角は何か思ひ出したやうに、

「私はお醫者の光炫さんを招んで參りますから、兎に角病人を診てお貰ひなさいまし。あゝして打つ捨つておいては早く治るものも長引く道理で御坐いますから。」

お角は然う云ひ置くと、直ぐに氣短に出て行つた。

お松はその後を見送つて、暫らく茫然と佇んでゐたが、思ひが亂れて取り留めがなかつた。

「彦三の爲なら――」

お松はその亂れた思ひの中から、この一と言を夢うつゝの樣に考へ辿つてゐる。お角から聞いた言葉は何一とつ胸に染みないやうに思ひながら「彦三の爲に。」と云はれたその一と言ばかりが胸に殘つてゐた。

お松は幾夜も眠らずにゐたやうな疲れを覺えて、身に正體がなくがつかりとしてゐた。奥の一の間へ入つて來ると、彦三郎はすや〱と眠つてゐた。其れを一と目見るとお松は急に彦三郎が戀ひしくなつて夜着の上に袂を投げかけながら彦三郎の身體をその上から掻い抱いた。涙が其の眼から落ちてきた。

「お孃さま。何所へおいでなすつたので御坐います。」

ふと目を覺ました彦三郎は、重さうに瞼を開いて呟くやうにお松に聞いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何所へも行きはしないけれど、彼方で叔母御と話をしてゐた故。」
「叔母があなたに何か申しましたので御坐いますか。」
「お藥を煎じてゐると、其所へ出ておいでゝ、お醫者の光炫さんにお前の病氣を診て貰ふとお云ひだから、私も賴んで置いたけれど、却つて惡るい事をしたやうで私は氣にかゝつてゐる。」
「叔母がそのやうな事を申しましたかえ。」
彥三郎はお松から然う聞くと、叔母の心が解らなかつた。
「お孃さま。急に叔母がそのやうな優しい心遣ひをすると云ふのが合點が行きませぬ。叔母は常から惡るい企みをする人で御坐いますから、何卒あなたも御用心なすつて下さいまし。叔母はまだ外に、あなたに何か申しはいたしませんでしたか。」
「いゝえ。」
お松はその彥三郎の面を凝つと見入りながら、
「彥三。」
と云つて其の手を取つた。
「昨夜お前の話の中に、お金子が欲しいと云つておいでだつたが、そのお金さへあつたらお前は何うしやうと思ふのだえ。」
「あなたは何を考へてその樣な事を仰有います。もしお金さへ御坐いましたら、この家になどはおりませぬ。あなたをお連れ申して何所の果てへでも行き、そこで樂しく二人が暮らしませう。其れも今では

出來ない望みで御坐います。」

お松の心の上に、今までお松の知らなかつた樂しい二人の行手が展がつて見えた。お松はその急な歡びに震へながら、

「彦三。彦三。」

と彦三の手を緊く握りしめながら呼んだ。

「そのお金は直ぐにも出來やう。そうしたら何處の果てへでも行つて、たつた二人で暮らされる。彦三。お前はそれが二人に出來ない事とお思ひか。」

「あなたは夢のやうな事を仰有います。」

と淋しく笑ひながら云つた。

「そんな事よりも、叔母があなたにどんな難題を申すか知れませぬ。あなたは決して叔母の申す言葉に乘つては下さいますな。叔母は恐しいことを考へてゐるかも知れませぬ。」

彦三郎はお松の美しい顔に、うつとりと目を注ぎながら、叔母のお角がお松に何か惡るい智慧でも付けはしないかと其れが安じられた。

「叔母御はお前の云ふやうに、それ程惡るいお人でもあるまい。」

「いゝえ。中々油斷がなりませぬ。叔母はどれ程惡るい事の數々を仕盡してゐるか知れませぬ。」

彦三郎は其のお松の顔を可愛しく見守つてゐる内に、何時からうつ〳〵と熱に襲はれて苦しい眠りに落ちた。

「彦三。」

と呼んでも、彦三郎はうつ〱としてゐる。見ると、今も又額に汗が滲染んでゐる。お松はその汗を拭き取つてやりながら、病ひに苦し氣な彦三郎の顏をしげ〱と打守つてゐた。

一時に氣が赫と上つて、お松は狂亂するやうに胸が燃えた。ふら〱と椽の破れた障子を押し開けてお松は自分にも覺えずに緣先から素足を落したが、其の儘暫らくは恍惚として外の光りに目をやつてゐた。だん〱に心が靜まつてくると、土に落した足の裏に冷めたさが透つてくるのが覺えられる。外はもう黃昏で、夕月が賴りない空の中に仄のりと匂つてゐた。あばら垣の狹い庭の中には、紅梅の木がたつた一本あつて、遲咲の梅が纖に窶れた娘のやうに淋しい色に咲いてゐた。垣根の彼方は屋敷の片側町で、夕暮れの町を忙しそうに人々が步いて行く。お松は暫らく氣を失つたやうな心地に外を眺めてゐたが、黑い頭巾を被た侍が頻りに垣根越しにお松を振り返りながら通つて行つてしまつた後で、お松は自分に返ると急に心寂しく悲しくなつて、

「彦三。彦三。」

と呼びながら部屋の中に戾つて來た。彦三は眠つてゐるので返事がなく、四邊が森としてゐる。ふと何も彼もすつかりと解つたやうな冴えた會得がお松の胸に起つて來た。

お角から云ひ聞かされた事、其れが一とつ一とつ明瞭とお松の心に首肯けて來た。そうして其れは皆恐しい事ばかりであつた。自分の身體を金に代へるやうにとお角の謎をかけたその言葉も、あの時には何の氣もなく聞き過ごしてはゐたが、何うして自分にその樣な大逸れた事が出來やう。そんな事をしなけ

れば金と云ふものは出來ないものか、お松は然う知ると何も彼も恐しい。世間も恐く、お作も恐く、自分の身の果てまでもお松には恐しかつた。

「身を賣るのは恐い。私は恐い。何うしたら好からう。」

金さへあればたつた二人が何所ぞへ行つて樂しく暮らされると喜んだ先きの思ひも、この恐しさを通らなければ其の樂しい世には逢へないと知つて、お松は苦患な呵責に逢ふやうに唯おろ／＼とした。

「私は恐い。」

お松の眼から絞るやうに涙が流れて來た。

「お孃さま。何うかなさいましたか。」

彦三郎がふつと目を覺ますと、お松が一人して泣いてゐたので驚いて身を起した

「いゝえ。何うもしないけれど。」

お松は涙に汚れた顔ににつこりと笑ひを含みながら彦三郎を見た。さうして、

「お前の病氣が悲しくなつて。」

と云つた。

「あなたがそんな御苦勞まで成さいますな。」

と彦三郎は吻と息をしながら云つた。

「私は恐い。」

お松は思はず呟いたが、彦三郎に聞かれては惡るいと思つて然り氣ない顔をしながら涙を拭いた。彦

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三郎にも明けて云はれぬと云ふ事が猶更苦しい。お松は、今はもうお角に縋つて身を賣ると云ふ外に、好い分別をして貰ふより仕方がないと思つた。此家にさへ二人を置いて吳れるならば、自分はどんな水仕業でも厭はない。洗ぎ洗濯もしやう。賃仕事もしやう。そうして叔母の爲に働かうものを、とお松は悲しく覺悟を定めながら、賴みにならぬ叔母の情けに縋つても二人の行末を賴んで見やうと哀れに考へた。

三

「光炫さん、何うで御座いますね。」

とお角はお松が立つて行つた後で、光炫に云つた。

「大層好い娘だが、成る程彼あして置くのは惜しいものだ。あれが彦三郎さんと駈落をした娘かえ。」

「然うで御座いますのさ。お孃さん育ちの氣隨氣儘で私の手には逐へませんが、藝はたつぷり仕込んで有りますやうだし、容貌は美し、何とかなりそうなものだと思案を致してをりますのさ。」

「お角さんは又、あの娘で好い事をしやうと考へてゐなさるんだらうが、彦三郎さんが氣の毒だ。飛んだ溫和しい娘にお前さんが智慧をつけて惡るく仕込みなさんな。」

「其れはあなたの思召し違ひさ。なあに、私もあの娘の事ぢやいろ／＼苦勞をしてゐますから、何うか娘の身の上の好いやうにと其ればかりを考へてゐますのさ。彦三の奴がほんの意氣地のない奴で、娘を連れ出したところは氣が利いちやをりますが、後はこの通り私にばかり迷惑のかけつ放しで、其の上にあの病氣で御座いますものを、途方に暮れるのは私ばかりで御座いますのさ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「然う聞けば氣の毒のやうだが、それで何うしなさらうと云ふ了簡だえ。」
「まあ、あなたへだけのお話だが、身を賣つてしまやあ其れ迄で御座いますが、娘を世話して下さる親切なお人でもあつたら、娘も仕合はせ、彦三の奴も一と息つけると云ふもので御座います。光炫さん、あなたも能くそんな周旋をしてゐなさるやうだが、何所か心當りはおあんなさらないかえ。」
「それは滿更ない事もないが、娘は得心してゐるのかえ。」
「得心せずば、又その時は好い工夫も御座いませう。」
光炫は煙草を吸ひながらにやりと笑つてゐたが、
「御病人のお脉を拜見いたしませう。」
と云つて、彦三郎の枕許へ立寄つて來た。
「これは一向に手當ても屆いてをりませぬな。」
光炫は薄い夜着を退けながらお松に聞えるやうに呟いた。彦三郎は起上つた時に烈しく咳き入つたので、お松は其の脊を擦つて介抱してゐる。その間にも光炫の眼が絕えず自分を見てゐるのを知つて、お松は其れを厭ひながら彦三郎の背後（うしろ）に隱れるやうに身を窄めてゐた。お松は初めて光炫を見た時から、其の厭はしさに慄然とした。何とも云へぬ厭はしさ――丁度、二人の上に何か忌はしい因緣が纏綾つてゐる其の前の世の約束を、ふとその身に感じたやうな、不思議な厭惡の魅惑（まどわし）がお松の身内をついと走つた。お松は光炫が物を云ふ度に、胸がどき〳〵と波を打つた。
「この御病人は、心勞から來たお煩ひだから、普通のお藥では間に合ひませぬ。可なり重い御容體のや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うにお見受けするが、お氣をお付けなさらなくちやなりませぬ。御病人には冷えが何より大毒故、もつと大切に、夜着も煖にしてお上げなさらなきや成りませぬ。」

とお松を振返つて光炫は云つた。光炫の顏は丸く、脂肪でぶく〳〵と蒼黑い色に膨れてゐる。小さく垂れた眼をぢろりと光らして、太い首を曲げがら光炫はお松の顏を時々覗いては眺めてゐる。

「お孃さま、この方は此所等に名高い先生で、中々こんな貧乏人のところなぞは滅多にお出で下さるやうな安い先生では御座いませんのさ。其れを私がいろ〳〵にお話申して斯うして來て頂く事にしたので御座いますから、あなたもよく〳〵お禮を仰有いまし。」

とお角がこの後でお松に云つた。お松は默つて手を突いて頭を下げてゐる。光炫は熱を下げる藥だと云つて、一服調合して其れをお松に渡してから、

「御病人をお大事に。又明日お見舞ひ申しませう。」

と挨拶して歸つて行つた。

三日五日と日が過ぎてからお角はある日に、

「お孃さま。其の後御思案はつきましたかえ。」

と云つて、例の薄暗い上り端へお松を連れて來た。

お角の口から斯う云つて今日は問ひかけられるか、明日は問ひかけられるかと、毎日安い心もなくて過ごしてゐたお松は、斯うはつきりとお角の口から云ひ出された其の途端に、自分の行末が定まつたやうに自づとはつとした。

その顔は恥ぢと恐れで赤くなつてゐた。この老婆から受ける迫害と云ふ感じが何時ものやうにお松を顫はしてゐる。お松は自分の眼の前でお角の指がふと動いても、何か知らず慄然とした。その太い底に力を持つた聲がお松の胸を裂くやうで、お松は其れも厭はしくて堪らないでゐる。殊に今日はお角の白髮交りの髮がばさ〳〵と鬢際に刎ねてゐて、拔け上つた四角な額が鬼のやうにお松には見える。剃つてゐる眉毛の痕に疎らな月代が延び、窪んだ眼が鈍く光つてゐるが、獰惡らしい形相が口尻の皺に表はれてゐて、一寸其の片手に提げてゐる長煙管までが老婆の意の儘のやうな陰險な質を帶びてゐる。

お松は髮を束ねて下げ、お角の心添えで他所から借りて來た鼠の紬小紋の袖丈の詰まつた小袖に着代へてゐるので、頰の痩せが目に立ち、年さへ老けて見えた。さうして襦袢の赤い襟の覗いてゐる細い頸筋が、俯向いてゐる程可憐らしく、行丈の長さうな痩せた兩肩にも哀れが含まれて、その肩が折々胸の慟悸から顫えてゐた。

「まだ御思案はお決めなさらないかえ。」

お角は和やかな聲でお松を痛はりながら、其の傍に摺り寄つて、底意の刺を口先にも見せずに優しさうに云つた。

「はい。」

お松は何う云つたら老婆の氣に逆らはずに濟むだらうと其れにばかり心を奪られてゐる。この老婆から何も彼も優しく宥して貰ひたいやうに、其の袖にも縋り度く思ふ哀訴の情をお松は抑えながら、老婆が摺り寄つてくる程お松はぢり〳〵と傍に身を退いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「左樣で御座いますかえ。」

と云つて、平たい口許を窄めてお角は靜に笑つた。お角は他を向いて暫らく何か考へてゐる。お角が何も云はない程お松は胸が騷ぐのを、自分もぢつと唇を堅く結んで辛抱してゐた。

「其りや御思案のお定まんなさらないのがお道理さ。ほんのお孃さんで乳母日傘でお育ちなすつたあなたが、いくら其の日の活計に困つたからと申して直ぐにもあなたが自分で稼ぎをなさらうと云ふのは、少いつと無理なお話さ。彦三の爲とは云ひながら、私もそんな身の上にお落し申したくも御座いませんのさ。これは一體何うしたもので御座いませうかね。」

とお角はわざと思案に餘つたやうに吐息をつきながら、自分は矢つ張りお松の方を見ないで他を向いた儘で云つた。

「あなたはお解りにもなるまいけれど、この頃の要り用と申しちや大變なもので御座いますのさ。私もあなた方のお世話の爲に、斯うしてこの頃ぢや人さまの洗ぎ洗濯も止めておりますから、昨日は昨日、今日は今日とほんの借金ばかりで凌ひでおりますのさ。そのお陰にはこの頃はこの儘ぢや門も通れない樣な不義理な家も出來、いろ〳〵苦勞をしておりますのさ。お孃さんえ。あなたもなんぼ世間知らずのお孃さんだと云つても、少しはこんなお察しが付きなさるかえ。」

「はい。」

とお松は口の中で呟くやうに返事した。老婆の云ふ事はみんな道理に聞かれて、お松は何と云ふ術もない氣がした。何か責苦に逢つてるやうな辛い我慢の中から、一時も早く、自分も思案を定めなければな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らぬと哀れに苛ら立しく、お松は氣もそゞろに成つてゐる。
「だがね。其れも決して御無理だとは思ひませんのさ。」
お角はわざと、思案を運らすやうに再び暫らく默つてから、
「あなたはお屋敷奉公をなさるお心はないかえ。」
とお角が又摺り寄つて來て、お松に囁いた。
「御奉公。」
お松はふつと、自分の身が空洞になつたやうに思つた。急に今迄思ひ亂れてゐた考へが消えてしまつてお松は茫としながらお角の顔を見上げた。
「何でもない御奉公だが、奉公は厭で御座いますかえ。」
お松はその言葉に追はれるやうに微に頭は振つたが、其れが好い事なのか惡るい事なのか直ぐには思い付かれないで、唯お角の顔を見詰めてゐる。何所からか、眞つ暗な恐しさが犇と身に迫つてくるやうにも覺えながら、お松は唯一心にお角を見詰めてゐる。お角の顔から其の御奉公の好い事か惡い事かを見て取らうとするやうに——お角の顔は先きとは違つて、人好く優しそうな笑ひの影が瞥ついてゐて、懐かしい面影にお松の眼に映つて見えた。お松は思はず其の優しさに馴れるやうに心が自然と安まつてきた。
「御奉公をなさるお心がおありかえ。」
「はい。其れは御奉公も致しますが、今日にも御奉公に經るので御座いますかえ。」

「何も今日が今日とは申しませんがね、あなたが其れを得心なら、ある御屋敷に御奉公の口が御座いますから御頼み申して見やうかと思ひますのさ。其れでは御奉公に御上んなさいますね。」

御松は斯く念を押されると、また返事が爲兼ねた。御屋敷へ行けば彦三郎とも別れなければならない。彦三郎と離れて一人して奉公する身はどんなに辛いものかと、御松は其れを考へてゐる。だん／＼に御奉公と云ふ事が厭はしくなつて來て、御松が切なく默つてゐると、

「何うで御座いますえ。御奉公をなさるかえ。」

と御角が焦れた聲で激しく云つた。

「はい。」

御松は厭。厭。と思ひながら、思はず其の聲に引き摺られるやうに返事をしたが、直ぐその後からしみ／＼とした心細さと頼りなさとが胸に上つてきて涙がこぼれた。

「その御奉公は、彦三の病氣が癒つてからでは惡るう御座いますかえ。」

「彦三の病氣が癒つてから御奉公をしやうと仰有るのかえ。」

「はい。」

と御松は恐々に云つた。

「其れは何うでも構ひませんのさ。御屋敷の御奉公と云つても殿樣の御機嫌さへ取れば好いのだから禮儀の作法のとむづかしい事もないし、極く優しい御奉公さ。この間光炫さんからそんな話があつたからあなたに御尋ね申したのだが、あなたさへ其の氣なら好い樣に賴んで置きませう。まあ、これも何かの

御縁で御座いませうから、私も後生の好いやうに、隨分お世話もいたして見やうよ。それがあなたのお家の丹波屋さんが昔のやうな御身代なら、私もほんにお世話の仕甲斐があると云ふもんで御座いますがね、それもこれも的のない事ばかりで、先きを思ふと私も苦勞の仕榮えがないと云ふもんで御座いますのさ。意氣地の無え彼奴の爲に、あなたも御苦勞をなさいますが、まあ御辛抱をなすつて下さいまし。」

お松はお角の斯う云つてる言葉を自分の耳に入れてはゐなかつた。唯、奉公を厭だ厭だと思ひ續けてゐる。何故そんな事をしなければならないのか。厭な奉公をしなければならないのか。お松には其れが解らなくなつて來た。

「何うか勘忍して下さいまし。」

お松は斯う云つて、叔母に其の奉公を勘忍して貰ひたい。そんな事は爲せずに欲しい。外の辛抱は何でもしやう。お松は頻りに焦燥つてゐながら、奉公を免してくれと云ふ事が何うしても口へ出てこなかつた。身も骨も粉々になるまでにこの叔母から打ち打擲された後のやうにお松はげつそりと疲れながら、その虐げられてる弱い心の中に自分をぢつと潜めた儘で、お松は、

「御奉公は厭。御奉公は厭。」

と思ひつゞけてゐる。

「だがこの事は彦三には云はずとお置きなさいまし。彼れが又餘計な取越苦勞をするといけませんから、宜う御座いますかえ。」

とお角が密やかに云つてる。お松は彦三と聞くと、又涙がはら〳〵と溢れて來た。これで身の行末が定

まつたやうな氣がする。何日かは彥三郎とも別れて御奉公に出なければならない。意地の惡るい朋輩の居る辛い御奉公に出るのだとお松は思つた。悲しくなつてお松は涙がとまらなかつた。
「今日明日にでも奉公にゐらつしやるのでも御座いませんのに、そんなにお泣きなさる事は御座いません。御奉公と申してもちつとも辛い御奉公ぢや御座いませんから、御安心なすつていらつしやいまし。何うして私が、あなたに辛い目などをお見せ申して宜いもので御座いますか。お案じなさる事は御座いませんのさ。」
お角が笑ひながら慰めた。
お角はその日から彥三郎にも優しくなつて、何所からか淸淨とした夜着を借りて來てそれを敷かせたりして心を盡し初めた。昨日までは彥三郎の枕許に立つて、
「お前も何時まで煩つてゐる事だ。高價い藥をのんでゐながら一向驗が見えないと云ふのも、お前の氣が愚圖だからだ。誰れが藥をのませてゐると思ふんだ。」
と大きな聲で罵つてゐたお角が、その日からはまるで荒い事も云はずにお松の看護に心を添えてゐた。
「叔母のこの頃の親切が却つて心にかゝつてなりませぬ。」
と彥三郎がお松に云つた時、
「叔母御はむら氣なお人故、氣の向く時は親切になさるのであらう。優しくして下さるのは嬉しい事ではないかえ。」
とお松は他事のやうには云つてゐながら、然う云ふ叔母の仕打の一とつにも、御奉公と云ふ鎖がお松の

身を一層堅く縛り付けてくるやうでお松は心が痛んだ。

光炫が欠かさず毎日病人を見舞に來るけれども彦三郎の病氣ははつきりとは快くもならなかつた。夜となく晝となく熱に苦しんで、うつ〱と覺めたり眠つたりしてゐる。一日快いと思ふ日があつても、その翌る日は又惡るくなつた。

其れでも、油斷のならぬと思ふ叔母の親切が、幾日となく續いて來ると、其れが知らず知らず彦三郎を氣安く馴れさせて、其の日の容體で病ひの輕い日などには、お松と向ひ合つてる二人の仲になつかしい戀が人知れず忍んで來たやうな恍惚とした氣分で過ごす時があつた。

「お前は痩せた。」

と云つて、お松にその顏を打守られる時、彦三郎は病ひに見苦しい自分の姿を羞かしく思ふやうな、戀する人の憐れな心遣ひを抱いたりした。今日と云ふ日も明日と云ふ日も消え果てた、眼前の戀の時ばかりが二人の仲に續いて行く時、お互の可愛しさに溺れて何事も忘れ果てたやうな夢の時がつゞいて行く時、ある罪科を受けてる人のやうに、お松は彦三郎と別れて御奉公に行くと云ふ日がその夢を破つて辛く思ひ出されてくる。

「何うぞして、御奉公をしないで濟ますことは出來ないものか。」

とお松は彦三郎にも云はれずに一人して思ひ悩んだ。そうして、

「そつと叔母御の傍を逃れて行くより外には、詮術がない。」

と斯う心付いてからは、お松は其れにばかり思ひが凝つた。

「さうして彦三と二人して、誰れも知らぬやうな何所ぞの果てへ行きたい。二人して此家を逃れて行きたい。」

お松は然う考へると、其れは何でもない事のやうにも思はれた。初めて此家で、二人の行末の覺束なさを彦三郎から聞かされた時と同じやうに、お松は何所へ行つても二人の樂しく住む所がありさうに思はれてくる。二人の戀の天地がお松の眼には限りもなく擴がつて見える。何所へ行つても、どんな世界へ行つても、二人が何時までも離れずに隱れ忍べる所がありさうに思はれてくる。夢のやうに、唯その行先は白々としてゐながら、其所には確かりと抱き合つて何時までも何時までも離れずにゐる二人の姿がお松の眼に見えてゐる。お松は心も躍るやうに共の樂しい行先にぢつと思ひを注いでゐると、彦三郎と二人してこの儘何所までも走つて行きたいやうにお松の心は苛れた。直ぐにも彦三郎と此家を出たい。然うすれば自分は御奉公にも行かずに濟む。

「何うぞして此家を逃れて行きたい。彦三が病ひさへ辛抱するなら、私はどんな苦勞も厭ひはしない。私は叔母御が恐い。」

とお松はお角の居ない時に、彦三郎に云つた。

「二人して何所ぞへ行かう。何所にでも二人の行先きはありさうに思はれる。何所ぞへ逃げて行きたい。彦三。行かれぬ事はあるまい。」

お松は、毒と彦三郎の手を握り緊めながら、焦燥だつた涙を薄く眼に滲染まして、その纖細い身體の内から溢れるいつぱいの力で彦三郎に取縋りながら云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お孃さまが、又わからない事を云ふと思つて彦三郎は陰欝に面を垂れながら直ぐには返事もしないでゐる。お松が急に叔母を恐いと云ひ出したことに、彦三郎は暗い疑ひを持ちながら、叔母が多くの若い娘たちを惑はして、人の妾や藝妓などに其の身を賣らせた數々の惡るい仕業を知つてゐる彦三郎は、叔母がお松にもそんな惡い企みを仕かけたのではないかと考へたが、彦三郎の弱い心では其れをお松に聞き質すことも出來ないやうに氣が怯れた。この上は、矢つ張りお松に家に歸ることを納得させて、そうして此家を出て行くやうに爲せるより外には道もなかつた。彦三郎は其れもお松が厭だと云ひ張る事を知つて、胸が塞まつて何も云はれずにゐる。取り縋られたお松の手を彦三郎も確と握つて、戰く唇をぢつと嚙みしめてゐると、何うしたのか、不意と彦三郎の眼に、二人が非業の最期の慘ましい身の終りの幻影が浮んできた。

「お孃さま御無理を仰有つて私を苦しめて下さいますな。あなたをお連れ申して此家を出ることは出ましても、直ぐに又辛い難義をしなければなりませぬ。幾度申しても同じことで御座いますが、あなたは矢つ張りお家へお歸りなすつて下さいまし。」

彦三郎の眼から、その忌はしい幻影がはなれないでゐる。その幻影を追つてゐると、病苦に衰へた彦三郎の神經は物に憑かれたやうに戰いて、お松の理非もない一向な言葉に惹かされながら、何時かは此家を迷ひ出て行く自分のやうな氣がした。自分もお松とは片時も別れてゐやうとは思はない。二人がこの儘離れるならばもうこの世に生きてゐる甲斐もない。同じ慘ましい身の果てならば、二人が長く難義に漂浪ひ歩かうとも、其の行末は定まつてゐるやうなものと彦三郎は思つた。然う定まつてゐる行末

ならば少しも恐しい事はない。だが彦三郎は、
「いゝえ。」
と云つて其の思ひと一所に忌はしい幻影を打消そうとした。
「私にはもう何うして好いやら分りませぬ。」
彦三郎はお松の手を拂つて、蒲團の上に病ひの身體を投げ出しながらほろ〳〵と泣いた。
お松はその彦三郎の泣いてゐる姿を見ると、急に男が可憐らしくなつた。こんなに彦三郎に苦勞をさせてはなるまいと思ふと、人も自分も唯哀れになつた。夢中に逆上つてゐたお松の氣がおちつと靜まつて、しほ〳〵と情が萎えてきた。
「私があなたをお連れ申して此家を出ましても、直ぐその日から何うなる事だと思召すので御座います。幾度も申すやうに、あなたも私も路頭に迷はなければなりませぬ。私一人の身なれば又、行先きも御座いますが、あなたをお連れ申しては私は何うする事も出來ませぬ。」
と彦三郎はまだ蒲團に顔を押し付けながら涙の中で云つてゐる。
矢つ張り二人の身は何うする事もならない。この儘走つて行つても二人の住むところはこの世の何所にもないのかと、お松は彦三郎の云ふ事を聞きながら、悲しい會得の中で考へた。

四

「あなたは彦三の病氣が癒つてから御奉公に行くと仰有いましたが、彦三の病氣も何時まで長引く事かわかりませんから、何うせ御奉公に上る日は何時になつても同じ事、いつそ思ひ切つて今夜これから私

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と一所にお屋敷へ上つて見ちや何うで御座いますゥ。」
お角が格子の外にお松を呼び出して斯う云つたのはその日の宵であつた。外にはしと〳〵と小雨が降つてゐる。何所からか歸つて來たばかりのお角は片褄を端折つて、軒の下に番傘を傾けて立つてゐた。その傘に雨が折々さあと降りかゝつた。格子の内に立つてゐるお松の胸も髮も雨の餘沫で濕つた。
「あなたもお厭ぢや御座いませうが、御奉公に上つて見れば又その氣になるもんで御座いますからね、思ひ切つて私と一所においでなさいまし。何もね、こんなに急ぐ譯ではありませんのを、實の話は、あなたを欲しいと云ふ其のお屋敷から、光炫さんの手でこの頃少しお金を借りてをりますのさ。お屋敷の方ではあなたを一日も早く上げろと、毎日々々催促をされますが、私も斯う云ふ義理がある故、然う〳〵は受け流してばかりもゐられず、其れでは今夜にもあなたをお連れ申そうと、受合つて來ましたのさ。あなたが得心をして下さらなきや私の首が飛びますから、私を助けると思つてこれから一所にお出でなすつて下さいまし。決して介抱に不自由をさせは致さないから、これから直ぐにあなたは彼方へ上つて下さいまし。宜う御座いますかえ。」
「これから直ぐに。」
お松はうろ〳〵としながらお角を見た。頰冠りをした男が破れた傘をさしながら小歌を歌つて通つて行つた後は、人の氣勢もなく、暗い路次の中は森としてゐる。雨がさあ〳〵と打濕つては降りかゝつて來る。お角は風に戰える傘の柄をしつかりと握つて、格子の内を差覗いた。
「何もお考へなさる事は御座いませんよ。此所から近い所で御座いますからね。雨は降つても造作はあ

りませんのさ。お屋敷へ上ると云つても今夜直ぐに殿樣にお目見得をするんぢやありませんから、姿なんぞは何うでも宜う御座いますのさ。直ぐに其所から出てお出でなさいまし。」

お松は格子の内に身を潛めてゐて、お角がその袖を捉へやうとして差出した片手から思はず飛び退いた。

「彦三。」

斯う云つて叫ばうとしたが、お松は何うしたのか其の聲が塞まつて立てられない。もう逃れるにも逃れられない危難がその身に迫つて來た時のやうに、お松は總身の血をわな／＼と戰はして、格子の棧につかまつてゐる。

「どうぞ勘忍して下さいまし。」

お松は漸つと口の中で云つた。

「あなたは厭だと仰有るのかえ。」

「いえ。」

お松は頭を振りながら、其の時にそつと後を振返つて見た。灯が汚れた障子に黃色く鈍く映つて、中には誰れも人の氣がないやうに寂りとしてゐる。今、彦三郎がよく寢入つてゐた事をお松は思ひ浮べながら、自分の身體はそこから一寸も動く事が出來ないやうに堅くなつてゐる。お松はきり／＼と袂を噛みながら、苛ら／＼とした泣きたさを我慢して立つてゐた。

「お厭でなければ直ぐにお出でなさいまし。私も斯うして立つてゐちや、雨に濡れるばかりで御座いま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すよ。」

お角が外から急き立てながら、格子の內に其の大きな腮のしやくれた顏を突き出して云つた。薄暗い中に、お角の濁んだ眼が獸のやうに光つた。

「御奉公は明日ではいけませんかえ。」

「あなた、そんな嬰兒見たいな事を云つて、私を困らせなさるのかえ。あなたも一旦得心した御奉公ぢや御座いませんかえ。今夜あなたに行つて貰はなけりや私が困るから斯うしてあなたに賴んでゐるのに、なんぼお孃さんでも、あんまり我が儘が過ぎると云ふもんで御座いますよ。今夜行くも明日行くも、行く味はおんなじもんで御座いますのさ。あなたも少つとは浮世の義理と云ふ事を考へて御覽なさいまし。今日が日人の世話になつて、おまけに病人の世話にまで成つて置きながら、ぞべら〳〵と二人が好い仲で斯うして何時まで暮らして行けると思ふのは、餘り他愛のなさ過ぎる話ぢやありませんかえ。世間は中々然う調法には行きませんのさ。辛い厭なことも目を閉つて辛抱しなけりや、好い夢は見られない道理で御坐いますのさ。」

お松はお角が格子の內に顏を突き出した儘で、斯う云ひ續けてゐるのをぢつと見詰めてゐた。殘忍さを帶びた四角な額、鼻の先きの丸い低い下司な鼻、口尻の下がつた卑しい大きな口許、眼が患いのでいつも眼脂の付いてる窪んだ眼、蒼黑い頰――平生の記憶が歷然と浮んできて、お松の眼にはその薄暗い光りの中で、お角の顏がはつきりと見える。お松はふと狂氣のやうにお角を悄く思ふ情が込み上げてきた。お松は身の震ふやうな悄さでお角を長い間見詰めてゐた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「後の事は御心配なさるにや及ばないから、私に任せてお置きなさいまし。悪るいやうには致さないから。」

お角が斯う云つたがお松は默つてゐる。心が堅く石のやうになつてゐてお松は何にも云ひ度くなかつた。そうして、もう何時までも、死ぬまでも斯うして此所に立つた儘でゐる自分のやうにお松は思つた。この自分の身體に、お角が何うして其に指を觸らうとするだらう。お松は恐れ臆した色のすつかり消えてしまつた眼に、唯憎しみを含んでお角の顔をぢつと見詰めてゐる。雨に濡れた髮の毛が頬に亂れて、お松は蠟のやうな顔色をしてゐた。

お角はやがて顔を引つ込めて「ちつ」と舌打をした。お角は何か考へてるやうに其れ限りで暫らく氣勢の動くやうにもなかつた。雨が小止みになつたので、お角は傘を擴げた儘に側に落して、そうしてお角も凝つと立つてゐる。お松はお角が默つてしまつたので、憎みに張り詰めてゐた氣が馳んで吻とした。熱くなつた片頰に冷めたい袖を當てゝ、裾をかゝげながら、ずつと安まつた思ひになつたが、まだすつかりは逃れ切らないこの手詰のお角の言葉が心にかゝつた。

何だかうと〳〵と時が經つて行くやうにお松は思つた。雨が又さら〳〵と降つた。自分が死ぬまで斯うして立つてゐれば、雨もまた十年も百年も世が闇になるまで降り續くやうに思はれる。お松は暗い穴の底にずん〳〵と落ち込んで行くやうな欝陶しい思ひがした。お角は何時まで經つても其の儘にしてゐる。格子の外にその黑い姿は魔物のやうに突つ立つてゐた。

「明日になつたら、きつとお屋敷へお上んなさるかえ。」

やがてお角が外から云つた時、お松は思はず、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「はい。」

と云つた。其の自分の聲に誘はれたやうに、お松は急におど〳〵と氣怯れがして來て、胸が騒いた。一度強く張りを持つた其の意は又碎けて、お角のたつた一と言の太い聲がお松の耳にはいつもの恐しい響きを含んで、その神經を脅かした。

「だが明日になつたら、又明後日と云ひなさるだらう。」

とお角が考へながら云つた。

「まあ兎に角今夜はこれから私と一所においでなさいまし。これから行かうと云ふ家は、あなたをお屋敷へ世話しやうと云ふお人の家で御坐いますがね、一度あなたを見せて置けば私も安心だが其れで先きも得心するだらうから、ちいよと一所にいらしつて下さいまし。其の代り今夜はそれで一旦歸ることになさいまし。あなたも其の位の辛抱ならお出來なさるだらう。何うですえ。」

「はい。」

「宜う御座いますかえ。然う定まればさあ直ぐに參りませう。ぐづ〳〵して居て彦三の奴にわかると何の彼のと又煩せえから早くなさいまし。」

お松にはお角が嘘を云つてゐるのだと云ふ事が確然とわかつてゐた。斯うして自分を欺して連れて行くのだとお松にはわかつてゐながら、お松には其れを拒むことができないで、逡巡としながら口では重ねて、

「はい。」

と云つた。今出て行けばもう二度とは此所に歸れない。自分は遠く何所ぞへ連れて行かれるに違ひない。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

遠いところのお屋敷へ連れて行かれるに違ひない。お屋敷へ行けば此所へは歸れまい。もう何時まで經つても彥三の傍へは歸れまい。

「まだぐづ〳〵して居なさるのかえ。たつた一つ刻の辛抱がおできなさらないのかえ。何うしたもんで御坐いますえ。ほんに世話をお燒かせなさるねえ。」

お松は斯う云はれた時に、ふら〳〵と外に出た。もう二度とは此所には歸れない。遠い所へ連れて行かれる。遠いお屋敷へ連れて行かれる。お松は斯う繰り返しながら外に出た。緋縮紗の鼻緒のすがつた重ね草履を突つかけて、さうしてお松は格子の外の雨の中に立つた。

「お孃さま。」

斯う呼んでる彥三郎の聲が聞こえると思つた。お松はおつと立つた儘で其の聲をはつきりと聞かうとしたが、後は何にも聞こえない。お松は戀しさもなつかしさも、其れから別れも、一とつに押し包んでそつと胸に忍ばせてるやうな、あきらめた靜な心でうつかりと暗い雨を見上げてゐる。格子の閉まつた音がしてお松ははつとしたが、其れはお角が閉めたのであつた。

「さあ、お出でなさいまし。」

とお角が云つて、傘をお松に翳しかけた。

暗い道を二人は步いて行く。泥濘の中にお松の草履は一と足一と足に埋まつた。お角は氣が付いて、

「草履を穿いておいでなすつたのかえ。」

と云つたが、仕方がないと云ふ風をして、自分は足駄の爪先きでその泥濘を掬ひながら步いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雨は降つても春の溫かさが其濕めつた中に溶けてゐる。月の光りがむら雲の間を隙いてきて、四邊が雨の中にぼんやりと薄白く浮いてゐる。屋敷長家の黑い羽目に沿つて、お角が斜に差しかける傘の中にお松は濡れながら、まるで自分を忘れたやうにしてうつゝなく辿つて行つた。そうして其の眼には絕えず彥三郞の顏が見えた。幼少い時の彥三郞の前髮の顏、それがふつと眼に浮ぶと、お松は左の眉尻にある黑子をその頃自分がよく指で突いてやつたことを思ひ出した。よく蟲齒を病んでは泣いてゐると、乳母のお琴がその小さい彥三郞を抱へて灸を据ゑたことまでお松は其の頃のやうにはつきりと思ひ浮べてゐる。と、病苦に衰へたこの頃の彥三の顏がふと眼に映つた。濃い眉毛ばかりが目立つて、可愛らしい頰の瘦せた、蒼白い顏をその幻影の中に見詰めてゐると、長い病ひで鬢も亂れ髷も崩れた男の髮が見える。少しは病ひの好い日にはあの髮を解きつけてやらうと思つてゐた事を、お松は考へ出してきて甚く心にかゝつた。

雨がまた小止みになつてゐる。月が先きよりは濃い光りに地上に落ちてゐる。饅頭笠を冠つた男が先きから二人の行く方をぽつ〳〵と步いて行つたが、それが一層よく見えるほど月が明るくなつてゐる。

「お孃さん。何も御心配なさる事は御坐いませんよ。」

とお角が聲をかけた。

「あなたも一度世間を通つて見れば、なに、今のやうな心配も笑ひの種になりますのさ。あなたも初心なお孃さんぢやなし、情事をしやうと云ふ娘さんが、そんな氣の弱い事で何うなりますものか。もつと馬鹿氣た世間を踏んで御覽なさいまし。惡い事は申しませんのさ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

長家の中途から左に折れて其所に懸つた小さい橋を渡つた頃には雨がすつかり止んで、月の薄い光りが堀の水の上に銀いろを流してゐた。雲が薄衣の樣に漂つてゐる。傘を窄めたお角は、そこまで來ると片手にお松の手首を取つて急ぎ足になつた。

お角がお松を連れて來た家は同じ小梅で、三町とは離れてゐなかつた。角(かど)に小さな不動堂があつて、薄暗い御燈が往來の方に冥路(よみぢ)の光りのやうに陰氣に流れてゐる。其の横を入ると兎ある家の黒い門をお角はとん／＼と訪れるやうに叩いた。

「誰れだ。」

「私だよ。」

中から人が出て來て直ぐに門を開けた。

「お角さんかい。」

と云つてお松の方を透かすやうに眺めたのは光炫だつた。

「お孃さんぢやないか。とう／＼連れて來たのか。」

「まあ兎も角此家まで連れ出して置かうと思つてね。雨の中をほんとに大骨折さ。お前はもう寐なすつたのかえ。」

「なに、まだ寐やしねえ。」

お松は光炫の聲を聞くと直ぐ、その頭の中を暗い陰が過ぎて行つたが、唯それだけでお松の心は少しも騷かずにゐる。恐れと云ふ念がまるで失くなつてゐた。お角の思ひの儘に、その惡るい企みの儘に自分の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

身を投げ出してゐるやうな氣がしてゐる。緊く縛しめられた後の痲痺れが全身に廻つてるやうに、そうして心まで痲痺れてるやうに、お松は自分の心が何かに抵抗はうとする力を失つてゐる。恐しい淵の際までも默つて引き摺られて行くやうな虐げられたもの丶弱さにがつかりとしてゐる。其れでゐてお松の身體はがたがたと戰えてゐた。齒の根が合はないのでお松は唇を結んで、きつかりと齒を噛みしめてゐた。

柳が門の内に一本靡いてゐた。雲がむらむらと過ぎる度に、日の光が冴えたり暗くなつたりして、その柳に寂しい影を掠めてゐる。其所に立つてるお松の髮の亂れた帶の緩んだ取り亂してる姿が、暗い運命を宿してる薄命な悲慘な娘のやうに、朧の光りの中にぼんやりと照らされてゐる。光炫から顏を外らした俯向いたお松の手も足も、髮の毛までもおの丶いてゐる。雪のやうに白い頸脚、すんなりとした雨肩、美しい額、鬢の亂れ――その輪廓が夢のやうに濡れた夜の色の中に慘染んでゐる。

「近いから好いやうなもの丶、其れでもふつと中途で逃げ出しやしねえかと思つて、大した氣遣ひをしたものさ。」

と云ひながらお角はお松を戶の中に引き入れた。

「まあ、愚痴は云はずさ。その位の骨折は仕方がなからう。」

「ほんに世話の燒ける、苦勞な仕事だ。」

暗い土間に入つてお松は玄關の上り緣に腰をかけた。お松は來る途中で、何時の間にか草履を脫いでしまつて裸足になつてゐる。お角は手拭を出して自分の濡れた頭髮や半纏の肩を拭いてゐたが、お松のその裸足を見ると、

「草履を脱いでお了ひなすつたのかえ。それは困つたね。」

お角は、お松の泥に塗れた、裾のよごれたしどけない姿をぢつと眺めて舌打をしてから、

「どうもお嬢さんで仕方がねえ。光炫さん、憚りだが洗足の水を一とつ貸しておくんなさいまし。お嬢さんの足がこの通りよごれてゐるから。」

手燭を持つて立つてゐた光炫は、手燭をお角に渡して自分は勝手へ水を取りに行つた。蠟燭の焔が、お角の高くさゝげてる手許から、その白髪の鬢にちろ〳〵と搖れて陽炎つてゐる。灯の陰翳がお角の口許に搖れると、丁度それが黒い一線になつて耳まで裂けたやうに口尻が展びて見えた。その蒼黒い頰に映つた灯が、赤く黑く繪の具のやうに色を射して、惡魔の面のやうに、お角のいつもの獰惡な形相が一層醜く彩られてゐる。お角は無言にお松の顏や姿を、灯に透かしながら然うした儘で眺めてゐた。自分の捉へた大事な玉を樂しみながら眺めてゐると云ふ風でゐる。眼の中に惡魔の慾が燃え、下司な高慢な笑ひをその皺のよつた口許に漂はしてお角はつく〴〵とお松の樣子を打守つてゐる。

「それ。」

と云つて光炫が小盥に水を持つて來た。お松はその足を洗ふと云ふ考へもなく、土間の土の上に足を付けながら、裾を兩手に挾んで茫としてゐると、

「もしお嬢さん。足を洗はないぢや疊の上にあがれませんよ。」

とお角が傍から、威赫すやうに荒い聲で云つた。光炫が土間から下りて來て、盥の水を下におろしながら、

「俺が洗つてやる。」

と云つて其の下にうづくまつた。鐵色の絹紬の一枚小袖の膝が抜けて、そこから綿が食み出してゐる。ぐる〳〵と巻き付けてる黑繻子の女物の半巾帶が解けかゝつて、裾の方に曳きずつてゐるので其れが足に纒繞つて光炫はよろ〳〵とした。
お松は其れを見ると驚いて立上つた。
「いえ。」
と云つて傍へ退かうとした時に、光炫の熱つた手が其れを抑えるやうに强く觸つたので、お松はよろめきながら、
「あ。」
と聲を立てた。その聲に光炫も驚いてお松を見たが、身を縮まして戰えてゐるお松を見ると、人好さそうに光炫はにやりと笑つて玄關へ上つて行つた。
「光炫さん。お孃さんをおどかしなさんな。虫でも起すと困るぢやねえか。」
「どうも癇性なお孃さんだと見える。」
光炫は上からお松を振返つて、又大きな聲で笑つた。
「俺の方がおどかされる。」
「機嫌を惡るくさせちや困るよ。大事なお孃さんだ。お孃さんえ。早く足を洗つてお上んなさいまし。」
と云つてお角は光炫と一所に奥へ入つて行つた。
暗い土間に一人殘されたお松は、壁に寄りかゝつて立つてゐたが、掠るやうに足に觸られた光炫の手

の感じがいつまでも生温くそこに殘つてゐて、ひどくお松の神經を亢ぶらせてゐた。お松は何かを拂ひ落そうとする樣に、夢中に足と足をかさねて、肌の破れるほどに强く一と點を踏みつけてゐると、

「何うなすつたえ。」

と氣にして顏を出したお角が、又その傍へ來て促した。

五

足を洗つて長四疊の玄關へ上ると、お松はそこに一人で凝つと座つてゐる。奧ではひそ〴〵と光炫とお角が何か話してゐる。

「三十兩――」とか「十兩――」とか云つてゐるお角の聲が時々聞こえてくる。

「安くはねえぜ。」

と光炫が大きな聲で云ふと、

「何しろ、いくらでも玉子は產んでくれるから、初めからあんまり慾張りすぎるのも柄が惡るい。そんなところであきらめておくとしやうかね。」

とお角が云つてゐる。と、又二人はひそ〴〵と話し出した。光炫の吃逆がその間々から大きく響いてくる。

お松はその聲を耳にしながら、眼は蠟燭の火をぢつと險しく見續けてゐた。長い間の雨漏りで古るく汚點ついてゐる壁の上が、彼方此方ゝ腐つたやうに破れてゐる。唐紙も破れて、書を拵めた上に雨の汚點が赤く流れてゐる。眞つ暗な、煤けた壁の隅に、赤い塗りの手習ひ机が一とつ置いてあつた。手燭はその机の上に載つてゐる。

お松はまだ、光炫の手に觸られたその身體の氣味惡るさが取れずにゐる。その氣味の惡るさを、何うすれば取ることが出來やう――お松は蠟燭の焔の青白い美しさを見てゐる内に、その焔で光炫に觸られた足の一と點を奇麗に燒かうと思つた。お松は立つて行つて其の手燭を取り上げると、

「もしお孃さん。」

とお角が奥から呼んだ。

「此方へお入りなさいまし。」

それでもお松の返事がないので其所へ出て來たお角は、お松が手燭を持つてうろ〳〵としてゐるのを見ると、

「あなた何をしておいでなさるんだえ。」

と嚴い聲で云つた。さうしてお松の手から手燭を取つて、その灯を吹き消してお松を次ぎの室へ連れて來た。

そこには長火鉢の傍に光炫が胡座をかいて座つてゐた。有明行燈が遠くの方に點いてゐる。膳の上には德利と猪口ばかりが載つてゐて、赤い顏をした光炫は歪つになつた赤樂燒の茶の湯茶碗で酒をのんでゐた。

「何うしたえ。お孃さん。」

がぶりと片手に持つた茶碗から一と口酒を飲みながら、光炫は調子に乘つた喚くやうな聲をして云つた。

るんだ。ねえ御孃さん。あなたは眞から得心しておいでなさるんだらうね。」

歸り支度をして立上つたお角が、片褄を端折りながらお松を見下した時に、默つて兩手を膝の上に重ねて首垂れてゐたお松が、ふと顔を上げてお角と目を見合はせた。

その時お松は自然に彥三郎を思ひ浮べた。其れは思ひ忘れてゐたものを新に思ひ浮べたと云ふのではなかつた。今まで片時も其の心から離れない彥三郎の上を、ある壓迫から自分がわざと胸の内に隱し潜ませてゐたものを、ふと其の壓迫を押退けてさうして自分からその心の中の彥三郎を覗いたのであつた。火のつくやうな戀しい情が暫らくはお松の胸の中で燃え狂つてゐた。お松は其れを不思議な感情のある慣れから、ぢつと胸の中に含むやうにして我慢をしながら、お角の顔をうつとりと見入つてゐる。その眼が、險しく釣れてゐた。瘦せた頰が引き緊まつて、瞼に靑い隈が表はれてゐた。

「何うだえ。もう世話は燒かせなさるまいね。」

お角はお松の近くに寄つて、その顔を差覗いたが、何かに魅入られてるやうなお松の眼を見るとお角は悚然とした。

「お孃さん。何うなすつたえ。」

とお角はその肩を突いた。

「いえ。何うもしませんね。」

「私の云つた事を聞いてゐなすつたのかえ。」

「はい。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

―其れぢゃ宜う御坐いますかえ。私は歸るが、明日はまたあなたの衣裳を持つてくるから、それまで篤くりとよく考へて、まあ悠くりとお休みなさいまし。お屋敷と云ふのは小さい旗下だか、殿様が大層な美男だと云ふ事だから、迷はないやうになさいまし。なあ光炫さん。」

「うむ。」

と光炫が云つた。

お松は彦三郎のことを考へてゐる。直きにほろ〳〵と泣く彦三郎の可憐らしい姿――其れが染みつくやうにお松の胸に浮んでゐる。もう長い時、彦三郎の聲を聞かない。長い時彦三郎の眼を見ない。そうして彦三郎の眼が自分を見ない。

「可愛しい。」

と云ふ言葉、それを長い時、彦三郎からも聞かない。自分も云はない。そうして長い時、自分の手を彦三郎が取らないでゐる。自分も其の手を取らないでゐる。

「彦三に逢ひたい。僅の間でも彦三に逢つて物が云ひたい。彦三に逢ひたい。」

お松は激しいこゝろが面に上つて目が眩むやうに思つた。思はず立上つて襖の方へ二た足三足歩いた。

お松は、彦三郎の傍へ其の儘走つて行くやうに思つて、そうして襖の外へ駈けて出た。

「お孃さん。」

お角が驚いて後から追つて來た。

「あなた何所へお出でなさるんだえ。」

お松の耳にはお角の聲が聞こえたけれども、其れが誰れの聲とも思ひ分けなかつた。

「ちよつとの間でも彥三の傍へ行きたい。彥三。彥三。」

お松は斯く胸に叫びつゞけて、暗い土間に走り下りた。其の時盥に躓いてお松は足を打つたけれども、夢中に立上つて戸の方へ走り寄つた時、お角がお松の肩を捉へて其所に引き据ゑやうとした。光玆もよろ／＼として居る醉つた足許を踏みしめながら、後から出てきて立つてゐる。

「まあ、何うなさらうと云ふんだえ。」

「云はない事ぢやねえ。井戸へでも飛び込むつもりだ。」

「なに、彥三のところへ歸らうと云ふんだらうが、仕樣のない我が儘娘だ。斯う世話を燒かせちや仕樣がないぢやありませんかえ。」

お松はそこに引き据ゑられて土間の上に仆れてゐる。冷めたい土がお松の頰に觸つた。

「もし。」

斯う聲を張つたお角は、お松の長い髮の毛を手に持つて引き起した。さうしてぶる／＼と顫えながら、お松の身體を二三度強く小突いてから、ぐつと力を入れて突き放した。

「解らねえ娘だな。もうあれ程口を酸つぱくして、世間の義理を云ひ聞かしてゐるのに、其れが解らねえと云ふ道理がねえ。あんまり人を甘く見てゐるからだ。そんな事を爲りや猶更打つ捨つては置かねえよ。何うするか覺えてゐるが好い。」

「まあ然う怒らずとものことだ。此方へ連れて來るが好いや。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「逃げやうと云つても然うは爲せねえから、然う思つてゐなさるが好い。」

お角は聲も枯れ〳〵に罵つてから、お松の手を取つて引つ立てた。お松は其の捉へられた手の中で身を悶掻いてゐる。何うしても彦三の傍へ行く。彦三のところへ行く。誰れが私を押へるのだらう。

「はなして。」

お松はあるたけの力で、お角の手を捥ぎ放そうとした。そうして、もう一つ時も斯うしてはゐられない。彦三の傍へ行かなければ。とお松は心も空に思ひつゞけて居る。

「この手をはなしたら何うなさるんだえ。さあ一所に上へおあがんなさいまし。」

お角は舊の調子に返つてお松を引き上げやうとしたが、お角の力ではお松の身體を引くことが出來ない。

「光炫さん。手を貸しておくんなさい。」

とお角は其所から光炫を呼んだ。光炫が下りて來てお松の身體を後から抱へながら、無理に玄關へ連れて來ると、お角は、

「仕樣がねえから縛つてしまふさ。そうして今夜一と晩金藏へ入れておくんだな。」

と光炫に云つた。二人が惡い企みをして、時々何所からか連れて來る女を、無理に押し籠めて置く押入れがこの家にある。其れを二人が金藏と呼んでゐた。お角はお松を其所へ入れやうと云ふのであつた。

「うむ。」

光炫が何か考へながら立つてゐる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「そんな事をしねえでも、柔順しくなりさうなもんだな。」
「一と晩は處刑をしないぢや、云ふ事を聞かねえから。まあ彼所へ入れておくさ。」
光炫が奥から赤い細紐を持つて來ると、二人はそれでお松の纎細い兩手を括し上げた。

六

お角が長く光炫と酒を酌み交はしながら錠を下した押入れの戸の外にゐた。お松はお角と光炫の聲を聞きながら、憎みと恨みと戀しさの執念に身も心も火のやうになつてゐた。何所が自分の身體の一部を嚙み切りたいやうな焦燥の中に、お松はきり〳〵と齒を嚙んで、手首を縛しめられてる兩の拳を、身も破れるほど握りしめてゐたが、自由にならない五體は直きに癇が疲れて、お松は押入れの中の眞つ暗な闇の底に惹き入れられるやうに茫然となつて行く。お角の聲も光炫の聲も、遠くに聞こえたり、近くに聞こえたりして、夢とも現とも分らぬなくなると、お松は又はつとして現に返る。朦朧とした意識の中に、彦三郎の可憐らしさうな姿が灼きつくやうにぱつと浮んでくると、彦三郎と二人の長い間の愛情の印象がお松の胸に忽ち悩ましく亂れてきて、さうして戀の炎がそこから燃え立つてはお松の心を狂はせる。お松は一としきり聲を絞つて泣き續けながら、なつかしく、
「彦三。彦三。」
と呼んで見る。と、いくら彦三と呼んでも返事をしないのがお松には悲しくなる。彦三は何所になるのだらう。彦三は何所へ行つたのだらう――お松は何時となく、自分は行方を失つた彦三郎の後を追つて、うろ〳〵と何所かをさ迷つてゐるのだと思つて、さうして頻りに何所ともなく走り出さうとして悶掻い

てゐる。すると又、夢とも現とも分らない境に落ちて行つて、うと〳〵とした。ふと、眼が冴えたと思つて四邊を見廻すと、彦三郎が自分の傍にゐた。
「彦三。」
お松が我れを忘れて其の手に縋ると、
「お孃さま。」
と彦三郎が云つた。男はほろ〳〵と泣いてゐる。何とも云へぬ可憐らしい姿をしてゐるとお松は哀れになりながら、
「お前はまあ何うして此所へ來たのだえ。」
「私はあなたのお後を追つて參りました。」
と云つて彦三郎は袖を顔に當てゝ泣いてゐる。
「何うして私の此所にゐる事が知れた。此所は恐いお屋敷だから、早く逃げなければならない。彦三も逃げて。」
「さあ、これから直ぐに此所を逃げませう。早く。」
と彦三郎がお松の手を取つた。
「逃げやう。逃げられない事はない。」
お松は急いで走らうとしたが、何うしたのか自分の身體は重く、床の上に吸ひついて居て動かないでゐる。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「逃げやう。逃げやう。」

お松は頻りに呟いて、無理無體に自分の身體を引き起そうとするけれども起きる事が出來ない。見ると、光炫とお角が其所に立つてゐる。——

その夢がまた覺める。押入れの中は地獄のやうに闇く、濕つた物の臭氣が息の塞まるやうに臭つてゐる。お松の情は細々と弱つて、憂欝な悲しみがその胸を閉ざしてくる。——「觀世音。南無佛。與佛有因——」お松の胸に「十句觀音經」の一句が夢のやうに浮んでゐた。そうして其れを唱へてゐるのが乳母のお幾のやうにお松は思つてゐる。

「觀世音。南無佛。與佛有因。與佛有緣佛法僧緣。常樂我淨。朝念觀世音暮念觀世音。念々從心起。念々不離心」

お松の幼少い時、乳のお幾がお松を守りをしながら、この「十句觀音經」を三遍一と口に唱へれば、恐しい危難から直ちに救はれると云つて、始終お松の耳にこの句を聞かしてゐた。お松は何の氣もなく、お幾と一所になつて「觀世音。南無佛。與佛有因」と小唄のやうに歌つてゐた。中年から丹波屋に雇はれてゐた乳母は西國生れの女で、其の頃はもう六十に近い老婆であつた。

お松は今、その句が不思議に心に浮んできた。もう十年も十何年もその句を口にした事のないお松が、はつきりとした記憶の中から流れるやうに其の句がお松の口に泌みて出てくる。お松は自分で自分に呼くやうに其の句を誦してゐる。何だかお幾がその傍にゐるやうな氣がしてゐる。お松か十三の時に死んでしまつたお幾がお松の傍にゐるやうに、お松は現なく考へてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「觀世音——觀世音——」
「お幾がゐる。乳母。乳母。」
お松が然う云つて呼ぶと、「觀世音——觀世音——」と誰れかゞお松の耳の際で斯う唱へる。
「佛さまはお慈悲深いかたであらつしやいますよ。」
お幾の始終斯う云つてゐた聲が、其の儘ありくとお松の耳に響いてくる。
「佛さまはお慈悲深い。どうぞお助けなすつて下さいまし。お救ひなすつて下さいまし。」
お松はお幾に手を取られて、そうして一心に合掌をしながら祈願をしてゐる。
「觀世音。南無佛。與佛有因。與佛有緣佛法僧緣——」
お松は彥三にも祈願をさせなくてはならないと思つて、
「彥三。」
と呼んだが返事がない。それがひどく悲しくつてお幾の手を振拂つて走り出そうとすると、又はつきりと現に返る。そうして何時となく又夢を辿つた。

お松が目を覺ますと、押入れの戶の隙間から晝の光りが射し込んでゐる。お松はその薄白い光りを茫としだ視力で眺めながら、
「夜が明けてゐる。」

と、ふと嬉しく思つた。

頭が重く痛んでゐる。頭の痛みが胸元に響いて、そこで激しく慟悸を打つてゐる。熱い涙が泌みてきて眼も痛んでゐるのを、お松は其の苦惱も忘れて、一と筋の線の昔の光りを懷かしみながら長く見守つた。今日と云ふ日の一日の生の望みが限りなく含まれてゐる其の光りに、お松はすべてを忘れて憧れながらそろ〳〵と戸の方に居膝つて行つた。そうして戸の隙間にぴたりと顏を押付けて覗かうとしたが、僅二分ほどの隙間からは何も見えない。却つて横柱に遮ぎられて、光りさへ闇のやうに消えてしまつたので、お松は落膽として後へ退がつた。顏を離せば一と筋の銀のやうな光りはお松の方へ展びて、懷しい微な輝きさへ含み初める。

お松は急に身の廻りが欝陶しくなつた。慟悸が一層激しく鳴つてゐる。呼吸が刻々と迫つて心臟のあたりが緊く壓搾されてくる。血を吐くやうな苦しみがお松の頭に上つて、顳顬の脉が切れそうにづきづきと神經が響きを打つてゐる。咽喉が腫れ塞がつて、口の中が渇いてゐる。お松は頻りに一と口の湯が欲しく、つと立上らうとしたが、上には板が張つてあつて、お松の頭は半身も延ばさない内に其の板に壓し塞げられた。お松の身體は狹い床の上に投げられたやうに仆れたが、お松は仆れた儘で、一と筋の光りを吸ふやうに顏を差しよせた。

外には人の氣勢もなく寂寞としてゐる。お松は唇を閉ぢて、羽目に凭れながら十重二十重に自分の身を圍む闇黑の中に稍々長く凝つとしてゐた。から〳〵と咽喉が痙攣つてきて、口中の渇きが一層募つてくる。お松はその苦しみに堪へ兼ねて、我れを忘れて、

「光炫さんえ。光炫さんえ。」
と押入れの中から光炫を呼んだ。光炫の返事は聞こえないので、お松は戸の傍に居膝り寄つて行つて、隙間から外を窺ふやうに顔を押付けながら、もう一度、
「光炫さんえ。」
と呼んだ。
「何だ。誰だえ。」
光炫が寐轉けてゐる中から、ふと返事をしたやうな、鈍い聲で稍々離れたところから答へてゐる。
「光炫さん。お願ひで御座います。」
「お孃さんか。」
斯う云つたぎりで光炫は起きないと見えて、何の物音もしないでゐる。お松は戸を肱で押しながら、
「光炫さんえ。」
と繰り返して呼んで見た。
「何だ。」
暫らく經つてから、光炫が荒く疊を踏んで來て、押入れの戸の外から斯う云つて聞いた。
「え。何だ。」
光炫が耳を寄せたと見えて、お松が戸の隙間に差寄せてゐる顔に近く、其の聲が響いてくる。お松は
「お願ひで御座います。此所を開けて下さいまし。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と聲を張り上げて云つた。

「開けてくれ？　開けてやつても好いが、何か用か。」

「はい。水が一杯欲しう御座います。」

「よし。よし。」

やがて光炫が押入の戸を開けて、そうして外から覗き込みながら、

「辛い處刑で辛からうが、其れもお前の心柄で仕方がねえ。何うだ。少しは柔順しくなつたか。」

光炫は湯呑に汲んで來た水を、お松の眼の前におきながら云つた。

「出してやつても好いが、又ぞろお前に飛び出されでもすると手數だから、まあ、もう暫らく押入の中に坐つてゐるねえ。手が痛けりや紐だけ解いてやらう。」

光炫は中に潜つて來てお松の兩手を縛しめた紐を解くと、自分は直ぐに外に出た。

お松の眼の前には、明るい光が漲るやうに擴がつてゐた。障子の際から、薄汚れた疊の上に落ちてゐる日光の影までお松の眼に眩しく映つてくる。お松は其の明るさを、奥の方から臆病らしく見守りながら、何かに心を奪はれたやうに迂つ潤りとしてゐる。心付いて、初めて自由になつた手に湯呑を取り上げて、お松はそれを一と口に飲み干した。

「何うだ。もう一杯やらうか。」

お松は微に頭を振りながら、兩手で、垂れ下る髮を後に掃つた。お松の膝前は崩れて、横に投げ出した裾の下から緋色の長襦袢が亂れてゐる。短い着物の袖の中に、たくし込んであつた襦袢の丈長い大き

な袖も袂から落ちて、波を打つてお松の兩側から床の上に流れてゐる。お松はその袖を其膝の上に掻い抱いて、明るい光りに照らされた自分の亂れた姿を、恥かしさうに取り繕ひながら、眞つ白な透き徹るやうな頰に、直きに黑い髮が纏繞るやうに垂れてくるのを、お松は幾度も〳〵手で拂つてゐる。その度に白い兩腕に緋の袖が惱ましく纏れては亂れる。光炫は稍々長い間、お松の然うした姿を恍惚と眺めてゐた。

「お前、饑じくはねえか。」

光炫が息の塞まるやうな聲で聞いてゐたが、お松は又、頭を振つた。お松が何時ともなく嚙んだ唇に赤く血が滲染んでゐる。お松は目を上げて凝つと光炫の方を見ながら、

「此所から出して貰ふやうに、光炫に賴まうか。」

とお松は考へてゐる。云ひ出せば直ぐに光炫が自分を宥して吳れるやうにも思はれながら、お松は自分の心の底に泌みついてゐる厭はしさが、この時もお松の弱身を抑えつけてゐて、口を噤ましてゐる。「もう暫らくの間、然うしてゐねえ。」

ふつと光炫が斯う云つて、押入の戶を閉めた。

「昨夜はお前の爲に思ひがけない通夜をして思はず寢込んでぢまつたが、もう八つだ。」

光炫が錠を下しながら獨りで呟いてゐる聲がお松の耳に入つた。

七

「何うだ。お前外へ出たいか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

光炫は押入の前に膳を据ゑて、酒の燗をしながら、そわ／＼とした樣子で、彼方此方と眼を配つてゐる。膳の上には、今光炫が自分で買つて來た刺身の血が載つてゐた。

お松は暗い押入の中で、光炫の云ふ事を聞いてゐる。何うかして外へ出たい。外へ出たいと思ひ詰めながら、

お松は、その言葉に縋るやうに、

「はい。」

と云つた。

「はい――か。ぢや、出たいんだな。」

光炫は押入の中から聞こえてくるお松の聲を耳にしながら、お松の白い身に赤い色を亂した先きの姿を思ひ浮べてゐる。頰に垂れた黒い女の髮――あらゆる惱亂に力を失つてゐるやうな其の姿態が、光炫にかず／＼の恣まな連想を貪らせる。光炫は押入の戶にぴたりと頭を押し付けて、目を上げて、内のお松の樣子を想像しながら時々醜ひ笑ひを漏らした。

「出たけりや出してもやるが。」

光炫は斯う云つて考へて、例の茶の湯茶碗でぐびり／＼と二三杯傾けてから、

「お前、外へ出たいか。」

と同じ事を云つて、お松の聲を樂しむやうに、恣まな連想を樂しむやうに、ぢつと聞き耳を立て〻ゐる。

お松は暫らくしてから、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「はい。」

と内から答へた。

「然うか。そんなに出たいか。お前には餘つ程辛い處刑と見える。」

光炫は然う云ふと、後は默つて酒に浸りながらふと考へ込んだ。

押入れの内からは、時々微な衣摺れの音が、光炫の情を誘ふやうに漏れてくる。光炫は其の肩へ頭を曲げて沈つと聞き澄ましながら、お松の手、お松の髮、お松の口許、お松の肩、と順々に思ひ浮べていつた。自分の眼で見た限りの、お松の身體のすべては悉く光炫の眼前に露はれてゐたが、光炫は又想像から想像へと頭腦を亂してゐる。

「さあ。出るが好い。」

光炫は押入の戸を開け放して、中からお松の手を取つて引き出した。お松はその手を振り拂つて、すつと身を起しながら押入れの外に出た。ふら〳〵と目眩ひがして、お松は仆れそうになる身體を支へながら、何と云ふ事もなく珍らしそうに緣側から外の方を見詰めて長い間立つてゐた。黑繻子と腹合せの緋鹿の子の帶が、解けて褄先きに流れてゐる。しどろに亂れた裾の下から、小さな眞つ白な素足が可愛らしく覗いてゐた。

「まあ坐りねえな。」

光炫はうつかりとお松の立姿を眺めてゐたが、やがて氣が付いて斯う云つた。お松が引き据ゑられるやうに其所に座ると、

「俺はお角の奴のやうに、お前にお屋敷の奉公をしろの。其れが承知が出來ずば押籠るのと、そんな野暮な無理はお前には云はねえのさ。お屋敷の奉公だなぞと云ふのは、あれは空嘘だ。お角の奴はお前を藝者に賣らうと云ふ魂膽よ。お前をお豊といふ桂庵婆あのところへ連れ込む積りなんだ。何うだお屋敷の奉公よりはもつと恐い御奉公だぜ。だがお前の心一とつでお前の身體にお角の奴の指一本でも觸らねえやうに俺がしてやるが、何うだ。」

光炫は吻と大きな酒の息を吐いて、擴げた襟元から胸の内に手を入れながら、ぐい／＼と右手で肌を摩擦りながら云つた。

「え。何うだえ。」

お松はその光炫の顔を見てゐる内に、ふと、昨夜自分の足に光炫の手の觸つた時の戰え上るやうな感じが、生々しくお松の感覺の上に起つてきた。何うする事もならない足のある一と點に受けた汚らしさと厭はしさの感じ、――蠟燭の灯で肉を燒かうとした時の亢ぶつた神經が、お松を一時に赫とさせた。お松は急に立上つて縁の方へ逃れるやうに出て行つた。

「おい。何所へ行くんだ。」

光炫がよろ／＼と立つて來て、お松の身體を抱きすくめると、其儘座敷の眞中へずる／＼と引き戻してきた。

「逃げるつもりなのか。そんな事を爲りや、元の通り押入の中へ入れて錠を下すばかりだ。い丶か。」

光炫の肩がお松の肩先を押へ付けてゐるので、酒に腐つたやうな息がお松の頸筋に吐きかゝつてく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。お松は光炫の手を刎ね退けやうとして手を悶掻くと、しどろに醉つてゐる光炫は自分の力が餘つて前にのめつた。其れと同時に疊の上に仆れたお松はそこから居膝りながら懸命に床の間の前まで逃れて行つた。

「何所から逃げやう。」

お松は一途に逃げなければならないと思つた。うろ〳〵と眼を四方に走らしながら、光炫の隙を見て緣から庭に出やうと考へ付いて、急いで身體を返そうとした時に、お松は床の間の上に鞘の黑く汚れた白鞘の短刀が投げ出してあつたのを見た。お松はその短刀を見るとふと手を延ばして取り上げた。

「お孃さん。まあ落着いて俺の云ふ事を聞くが好い。」

光炫はだらしなく着物の胸がすつかり開いて、左の肩が辷り落ちてゐる下から縞八丈の襦袢の胴が出てゐた。お松の後に立寄つて、其の身體を抱きながら、ぬつと顏を出して、お松の頰に自分の頰を差し付けやうとすると、短刀の鞘を取つてその刄先を眺めてゐたお松は、光炫の胸先へ其の刄先をぐいと突き刺した。

「何をする。」

光炫はお松の手から短刀を挘ぎ取らうとして其の手を掴みながら、

「そんな事で人殺しが出來るものか。」

と光炫は罵るやうに叫んだが、お松は短刀を引き拔くと、狂氣のやうな力で光炫を突き仆しながら、一散に緣から庭に走つて下りた。光炫はお松を追はうとして、蹌踉きながら立上つて緣に出て來たが、痛

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

手は輕いけれ共醉つてゐるので踏み度を失つた光枝は、其の緣を踏み外して、高い切石の脱沓ぎへその額を打付けながら庭へ轉げ落ちた。

光枝の身體と一所に庭下駄の片方がお松の方に刎ね飛んできた。お松は五葉の松の太い幹にしつかりと掴りながら、片手には血に塗れた短刀を握りしめて立てゐる。そうして、其所に轉び落ちたぎりで、少しも動かうとしないでゐる光枝を、お松は何時までも凝つと見詰めてゐた。

「何うしたのだらう。」

と云ふ疑ひが、お松の胸に浮んできたが、お松はその傍へ立寄つて行くことが出來なかつた。幾時經つても光枝は起き上つてこない。顔を沓脱ぎの方に向けて、打つ伏しに仆れてゐる光枝は、右の手で頭を掴んでゐる。兩足が手水鉢の傍の葉蘭の内に落ちてゐるので、葉蘭が幾枚か亂れて下に靡いてゐた。縞八丈の黄色い襦袢の絹に、外の光りが映つて滑らかな艶を浮かしてゐる。お松は自分の足下の大きな据ゑ石の上に腰をかけて、うつとりとしてゐる。据ゑ石の上には錆びて朽ちかゝつてる金燈籠が置いてあつた。

お松はいま、快い、自由な、濶々とした氣分になつてゐる。十重二十重に自分を圍んでゐた縛しめが一時に除れて、何所へでもこの儘駈け出して行くことが出來ると云ふ安心な氣がしてゐる。もう自分を追つて來るものもない。自分を捉へやうとするものもない。厭はしいもの汚らはしいものが、其の神經から奇麗にすつと拂はれてゐる。――

だが何故然うなのかは、お松はまだ考へないでゐる。何うして自分を捉へるものがなくなつたのか。

何うして自分を追はうとするものが無くなつたのか、自分を十重二十重に縛しめてゐたものが無くなつたのか、お松は其の何故と云ふ事をまだ知らないでゐる。だがその胸の内の血は生き〳〵と脉を打つて、廣い〳〵自分の世にお松は初めて生れ出て來たやうな氣がしてゐる。

お松は眼を上げて四邊を見た。その眼に奇麗に咲いてる櫻が見えた。袖垣を越した彼方の塀際から、櫻はその梢だけを擴げてゐる。

「櫻が咲いてる。」

とお松は思つた。お松には、その櫻がこの世の花とも思はれない程に、美しく輝いて見えた。夕暮れの陰が淡く靜にその梢に落ちてゐる。晴れてる空が靑磁の色を帶びて、一と重櫻の花片に上臈の眼眸のやうな光りを投げてゐる。あらゆる春の優しさが、その一とつの梢に含まれてゐて、そこに濃やかな情が溶けながら、花はうつとりと沈んでゐる。お松は僅の間その花に見惚れて茫としてゐた。雁が鳴いて行つた。夕暮れの鐘の音が悠くりと川に響いて傳はつてくるのがお松の耳に聞こえる。

「彦三に逢へる。」

突然な、躍るやうな喜びがお松の胸を打つた。お松は身を起すと、緣先まで走つて行つた。そうして沓脱石の下に横に仆れてゐる光炫の姿が眼に入ると、お松は悸然として足をとめながら、何所からその高い緣に上らうかとお松は見廻した。

だが、その沓脱を越える外には、緣へ上る足場がない。お松はそろ〳〵と沓脱の方へ近寄つて行つた。沓脱へ足を掛けやうとした時、お松は思はず光炫の方に心を惹かれて見下すと、此方を向いてる光炫の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

顏がありありとお松に見えた。總髮の眞中から眞額にかけて打ち破れた傷から、血が一ぱいに頰や鼻に傳はつてゐる。口中からも夥しく血が吐き出されて、それが土の上に染み流れてゐる。眉を八字に寄せて、その眼が生きてる人間のやうに薄く見開いてゐた。

お松はそれを見ると慄然とした。光炫が死んでゐる、と云ふ事が、お松には今初めて思ひ知られてきた。そうしてその時に、お松は今まで片手に握り緊めてゐた短刀に心が付いた。お松はあわてゝその短刀を抛り投げやうとしたが、柄と手に血が粘りついて居てその手から直ぐには離れない。短刀の刄先に血がいつぱいに附いてゐる。そうしてお松の手首にも袖口にも血が附いてゐた。お松は椽に駈け上ると、障子に刄先を打付けて、その手から短刀を取つてから、玄關まで走つて行つた。ふを其所に自分の髷中の笄が落ちてゐた。昨夜こゝで自分がお角に追はれた時に落したことをお松は思ひ出しながら、立ちながら髮を束ねてその笄で留めた。

「おや。何をしてなさるえ。」

振向くと後にお角が立つてゐる。何時の間にか勝手口から入つて來たお角が、玄關を覗いて、其所にお松の姿を見付けると、斯う聲をかけたのだが、お角は直ぐにお松の傍に來た。

「お前さん一人かえ。」

「はい。」

お松は自分の着物に附いてる血をお角に見られまいと思つて、お角から身を外向けながら、ちりちりと後に退つて行つた。お角はお松の風を見ると、一寸その場の樣子が覺れないやうに思つた。誰れがお

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

松を押入から出したのか、そうして此所で一人で何をしてゐたのか。——お松の姿はまるで普通とは違つて取り亂してゐるとお角は思つた。お角はぢろ〳〵とお松を見守つてゐる内に、

「又光炫が例の癖を出して、お松を追ひ廻してゐたのではないか。」

と想像した。

其れにしてもお松が一人でゐると云ふのがお角には腑に落ちない。——と思つて、

「光炫さんは何所かへ行きなすつたのかえ。」

とお松に聞いた。

「はい。」

お松はお角の隙を見て、こゝを逃れやうと焦慮りながら、真つ蒼な頬を引緊めて、唇を戰かしながら立つてゐる。お角は其のお松の手を捉へて座敷の方へ引つ張つて來た。

坐敷の中は黄昏の色が薄つすりと忍んでゐて、暗い陰影が四方に落ちてゐる。光炫が飲んでゐた膳が其の儘に押入の前にあつて、燗德利や茶碗などが取り散らされてゐる。押入の戸はすつから開いてゐて、昨夜お松の手を縛しめた赤い細紐が直ぐ其所に投げ出してあつた。

「誰れがお前さんを彼所から出したんだえ。光炫さんかえ。」

「はい。」

「然うかえ。」

火の氣のない長火鉢の傍にお松を坐らして、お角は自分も其所に坐つた。お松の息遣いの荒いのがお

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

角によく聞こえる。刄物のやうな冷めたい險しい眼をしてお松は時々お角の顏を偸み見しながら、落着いた風でお角の前に凝つとしてゐた。

「處刑が止んだのはお前さんの了簡がおとなしくなつたと云ふのかえ。とう〳〵往生をしなすつたのかえ。」

「はい。」

お松ははつきりとした聲で返事をしてゐる。そうして其の途端に、お松は何うしたのか胸先から何か込み上げるやうな氣がした。お松は口を開いて、金屬の響くやうな徹み通つた聲で笑つた。だが其の顏には笑ひの表情は浮んではゐない。すつかり削けてゐる頰は引緊まつた儘で、眼も險しく釣れてゐた。頬が殊に蒼く、笑ひに開いた口許が[illegible]つたやうに動かないでゐる。お角はその笑ひ聲に呆氣に取られてお松の顏を見たが、正氣の人の顏付のやうにはお角には思はれなかつた。お角は暫らくお松の顏を打守つてから、ふと、お松の手にべつたりと血の附いてるのに氣が付いた。

「お前。怪我でもしたかえ。其の血は何うしたんだえ。」

「え。」

お角に覗かれてお松は狼狽て其の手を押隠した。お角は何とも云へぬ薄氣味惡るさに、お松の傍から我れ知らず居膝り退いて、そうして其所からお松を見詰めた。お角はお松の手に付いてゐる血をいろいろに判斷しながら、其の眼が自づと二三尺先きの疊の上に行つた時に、そこにも血が滴り落ちてゐるのをお角は見付けた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あの血は何うしたんだえ。」

お角は床の間の前に立つて行つて、其の血の痕を眺めたが、血は縁の方へ向いて少しづゝ薄らぎながら垂れてゐる。お角はその跡を追ひながら縁に出た。其所に血塗れの短刀が投げ出してあつた。何氣なく見下した眼の下に光炫が仆れてゐるのをお角は見た。

「光炫は何うしたんだえ。」

お角が振向くと、お松が立上つて玄關の方へ出て行かうとしてゐるので、お角は引つ返して行つてお松を其所に連れて來た。

「こりや何うしたと云ふんだえ。」

薄暮の光りを受けてお松は幽靈のやうに蒼い顔をしながら、お角が指してゐる縁の下を見まいとしてお角の手を押退けて身體を轉した。

「お前が光炫を何うぞしたのぢやねえか。」

「いゝえ。」

「いゝえぢやあるまい。――お前人殺しをしなすつたね。」

お角は斯う云ふと、いきなりお松の髪を掴んで其所に引仆しながら、拳でお松の頬を力任せに打ち續けたが、お角の憤怒に灼かれる胸はまだ其れでも癒えなかつた。お角は何うしたらその忌々しさの念を晴らす事が出來やうと云ふ様に、お松の身體を彼方へ突き放して、然うしてお角はお松の顔を見た。

お角の憤怒は、自分の樂しんでゐた儲け仕事が、こんな事で壞されて了つたその口惜しさから起つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來たのであつた。こんな大罪を犯した娘は、もう何の役にも立たない。その上に自分の家から大逸れた繩付を出さなくてはならない。何と云ふ益らないことを仕出來す女だ。お角はその時に、お松を抵當に少しの手金を取つた昨日の金も、これで自分の所有にならないと云ふ事を考へてゐた。

「これからお前を引き連れて行つて、訴へて出るから然う思ひねえ。」

お角はこれが、せめてもの自分の忌々しさの復讎だと思つた。

「おれも隨分若い時から惡い事にかけちや拔目のない人間だが、まだ人を殺した事はねえぜ。十九や二十の若い身でこんな大逸れた事をやるとは、お前も末恐しい女だ。お前は人を殺して恐くはねえか。」

光炫を殺しはしない。自分は光炫を殺しはしない。とお松は先きから思ひ續けてゐる。お松は何うしても自分が光炫を殺したのではないと思つてゐる。其れで一層、お角の「人殺し、人殺し、」と云つてるのがお松には口惜しかつた。そうして例のお松がお角を見る時の憎みが、其の胸に突き上つてきた。

「おれと一所に來ねえ。何うせお前の身は逃れつこはありやしねえよ。」

お角は茶縞の半纏を脱ぐと、お松の手を捉へて引き立てやうとした。お松の頭にその瞬間に、恐しい獄屋の囚はれの幻影がふつと浮んで來た。それはもう長い〳〵一生を貫く間の囚はれのやうな氣がする。

そこへ一旦囚はれゝば、彦三にも、もうこれぎりで逢ふ事も出來まい。

「やつぱり彦三には逢はれない。彦三の傍へは行くことが出來ない。」

お松はお角の手を摺り拔けながら、

「私は人を殺しはしませぬ。」

と叫ぶやうに云つた。

「殺さないと云ふのかえ。そんな事があるものか。ぢやあ誰れが光炫を殺したんだえ。光炫は死んでるぢやねえか。」

光炫は死んでる――お松は其れをはつきりと事實の事に今思ひ出してゐる。その光炫を誰れが殺したのだらう。誰れが殺したのだらう。お松には其れが分らない。自分の殺さない光炫が何うして死んでゐやう。

「私が殺したのではない。私は何にも、なんにも知らない。」

とお松が叫びつゞけた。

「ほんとに手前は極道な女だ。さんざん人に世話になり、厄介をかけた上に、こんな迷惑までかけやあがつて、何所からこの返禮をする積りだ。獄門首になつてからでも禮をするつもりかえ。」

お角はお松の手を捉んで、もう一度引つ立てやうとした時に、お松は足下の短刀を拾ひ上げて、丁度光炫を突き刺した時と同じやうにお角の胸先へ短刀を突き通した。

「人殺し。」

お角が思はずから叫びながら倒れた上にお松は乗しかゝつて、もう一度その咽喉元へ短刀を突き通した。

「殺す。殺す。殺さないでおくものか。」

とお松は叫びながら。

不思議な、充滿な力がお松の總身に涌いてきた。逃げやうとして、身を悶掻くお角が、立上らうとしてばたりと緣に仆れた時、お松は緣の柱に捉まつてそれを見てゐたが、お松も人の手に引き据ゑられたやうに其所に腰を突いた。何時か四邊が暗くなつてゐる。お角の仆れてゐる緣の隅にも闇が這ひよつてゐた。お松は急に逃げ走らうとして其の腰を立てやうとしたけれども、足が上らなかつた。一度投げ捨てた短刀を拾つて其れを杖に立上らうとしても、お松は何うしても身を起すことが出來ない。お松は片手を緣について、片手は短刀を杖にして、ずる〳〵と居膝りながら、勝手口の方へ出て來た。お松は漸つと流し元まで下りて行つて、水を一と口飲んだ。そうして暫らくは其の儘で板敷の上に坐つてゐた。死の寂寥が四邊に充ちてゐる。障子の開け放してある勝手口に、お松の見馴れたお角の下駄が脫ぎ捨てゝあつた。

お松はその障子に捉まつて立上つた。がく〳〵と足が戰えてゐて、跣足の一と足一と足が宙に浮いては、お松はばたりと轉んだ。門の口までお松は然うして這ひ摺つて行つたが、門の戶に捉まると、そろそろと立上つた。門を開けてそつと其の戶に捉まりながら探るやうに外に出たお松は、まだ仄のりと薄い光りの殘つてゐる通りを見渡すと、躓くことも忘れて一散に走り出した。

八

「彥三。」

お松は其の名を呼びつゞけながら走り通してお角の家へ戾つてきた。すつかり暮れて了つた外には、十三日の月が淡く輝き初めてゐた。格子を開けて、お松は駈け入りながら、

「彦三。」
と呼ぶと、
「お孃さまでは御座いませぬか。」
と云ふ彦三郎の飛び立つやうな聲がして、障子が開いた。
「彦三。」
「お孃さま。私は昨夜からまるで瞼も合はず、あなたをお案じ申してはつかり居りました。あなたはまあ。何所へお出でなされたので御座います。」
お松は空に漂ふやうな眼で彦三郎の顏を凝つと見たが、神經の疲れから、その瞳子が暗く何か陰が集つてくるやうで、お松には彦三郎の顏が判明と見えなかつた。どれほど瞳子を据ゑてぢつと見ても、その彦三郎の顏がお松にははつきりと見えない。お松はよろ〳〵と彦三郎の手に縋つて、その見えない眼を見張つて彦三郎の顏をいつまでも見詰めてゐる。
「お孃さま。あなたは何方へお出でなすつたので御座います。叔母に聞きましても、叔母は知らぬとは申しておりましたけれども、私はあなたが叔母に連れられて何所ぞへお出でなすつたのではないかと思ひ、どんなに案じたか知れませぬ。」
「いゝえ。」
とお松は云つた。彦三郎の息がお松の頰にかゝつてくる。彦三郎の手の溫みがお松の手に傳はつてくる。
お松は何も物を云ひ度くなかつた。彦三郎の手に抱かれて、其の手に何時までも斯うして縋つてゐたい

彦三。私はどんなにお前が戀ひしかつたか。夜も晝も、私はお前のことばかり思つてゐた。お前の傍に來たく、お前に逢ひたく、一時も離れてゐやうとは思はないお前に、私は一日も一と晩も離れてゐた。私がお前のところへ行かうとすれば、其れはならぬと云つて暗いところへ押籠められて、猶其の上にも私を遠いところへ連れて行くと云はれる。私はどうして此所を逃げやうかと思つて、どんなに苦勞をしたか知れぬ。もう決して私はお前の傍からは離れまい。何時までも、何時までも離れてはならない。もう私を捉へるものもなくなつた。私を押籠めるものも無くなつた。私をお前の傍に置くことはならぬと云つて苛めるものもない。私とお前はもう離れないで濟む。私はもう何所へも行くまい。彦三も私の傍をはなれないで。私の傍に、私の傍に——

「お孃さま。あなたは大層疲れてお出でなさると見え、うつ〳〵とお寐みなさいますが、あなたはまあ何所からお歸りなされたので御座います。」

お松はふと目が覺めたやうに思つた。彦三郎の手に縋つて、其の胸に凭れながらお松はうつ〳〵と寐入つてゐたのであつた。彦三郎のなつかしい顏がお松には今は先きよりは明瞭と見えて來た。

「彦三。はなれないで。」

「はなれは致しませぬ。あなたはひどくお氣をお遣ひなさいましたな。何うなさいましたのか、私に譯をお聞かせなさいまし。叔母があなたを何うぞいたしたので御座いますか。」

お松は「いゝえ。」と頭を振つた。彦三は何故あんな事を聞くのであらう。其れは云つてはならない。お前も云つてはならない。そんな事よりも、お前は私をまだ一度も可愛しいと云はないではないか。私は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お前が戀ひしかつたのに、お前は私を可愛しいと云はずにゐる。私はお前に逢ひたくて、いろ〳〵な苦勞をしてきた。もう其れは〳〵恐ろしい苦勞をしてきた。お前は其れを知らずにゐる。

「お孃さま。」

と云はれてお松は又我れに返つた。

「あなたは何所からお歸りなさいましたので御座います。」

「遠いところから――遠い〳〵ところから。――彦三私は咽喉が渴く。」

彦三郎が急いで立つて行つて湯を汲んで來た。お松の脊を抱いて、湯呑をその口に當てがひながら幾口か飮ませてやると、お松は又、彦三郎の胸に凭れて其の手に縋つた。

「遠いところと仰有つて、其れは何所で御座います。」

「遠い〳〵ところから――」

お松の眼に血に塗れた短刀が見える。「あ。」と思つてお松は其の短刀から眼を外らした。あんなものを見てはならない。それよりは、何所かに櫻が咲いてゐた。奇麗な〳〵櫻が咲いてゐた。其れは奇麗な〳〵櫻――彦三と二人で櫻を見たことがあつたか。何所で――とお松が見廻そうとすると、黃色い縞八丈の襦袢の胴が見える。あれは誰れが來てゐた襦袢であらう。おゝ、光炫の襦袢ではないか。光炫、光炫――

「お孃さま。あなた、確かりなさいまし。浮言を仰有いますが、あなたは强い御心勞がお身體にさわつたので御座いませぬか。お孃さま。兎も角こちらでお寐みなさいまし。あなた大附な熱で御座います。」

「いゝえ。寐てはゐられぬ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とお松が目を開いて彦三郞を見た。

「でも、お話はあとの事にして、少し身體を横にしてお寐みなさいまし。私がお擦り申しませう。まあ、どんな御苦勞をなさいましたことか。」

「いゝえ、私はこの儘お前に凭れてゐたい。唯斯うして――」

額の熱がお松の眼をぢりつと塞がせる。と、眞つ暗な〳〵地獄の底へ直ぐに引き落されて行く。こんな恐しい暗いところへ行く事はいや。まあ眞つ暗な。こんな所へ入つて私はもう出られないのではないか。苦しい。切ない。私は出たい。私は此所から出たい。だが戶には錠が下りてゐる。私の手が縛られてゐる。私は何うしやう。

「お孃さま。」

と彦三郞が氣魂しく聲を上げた。

「あなたの手に大層な血が――まあ、着物にも――大層な血では御座いませぬか。」

「え。血が――私の手に血がついて。」

お松ははつとして彦三郞の胸から刎ね起きた。つい、一つ時前の慘たらしい一場の樣子が、あり〳〵とお松の頭腦の中に擴がつてきた。夢うつゝの間に光炫とお貞とに短刀を突き刺したときの自分の姿と、そこに倒れて居る二人の死骸！、――薄暗い黃昏の色の中に、人の血に染みた死骸を見た其の時の悽々とした印象――お松はその眼を塞ぎながら、

「あ。」

と聲を立てた。

「私は人を殺した――」

彦三郎が驚いて凝つとお松の顔を見上げたが、其の心を失つてるやうな眼を見ると、

「お孃さま。確かりなさいまし。何故そんな事を仰有います。あなたは何か幻でも見てゐらつしやるのでは御座いませぬか。何かひどい難儀に遭ひ、あなたはお心が何うかなすつたのでは御座いませぬか。確かりと心をお持ちなすつて下さいまし。」

と云ひながら、お松の手を取つて其所に坐らせた。

「いゝえ。人を殺した。お前の叔母御を私は殺した――」

「えゝ。其れはほんとの事で御座いますか。」

彦三郎は、行燈の燈を斜に受けてゐるお松の耳前髮に、微な血の指痕の附いてるのに氣が附くと、ぞつと身内が總毛立つた。袖の血、襟元の血、髮を振り亂して立つてるお松の顏が、まるで打つて變つたやうに彦三郎には恐しい形相に見えた。

「あなたは何で、何う云ふ譯で其のやうな恐ろしい事をなさいました。お孃さま。」

彦三郎は息が塞まつて聲さへ立たないでゐる。唯恐ろしさに心が眩んで、何が何とも辨別へ兼ねながら、その眼からは、お松の身體に附いてゐる酷い血汐の痕が泌み付いてはなれない。「人殺し」と云ふ言葉の恐しさ、彦三郎は其れを胸に呟き返して見て、そうして一層わなわなと震えた。

「私は斯うしてゐられぬ。直ぐに、直ぐに行かなくてはならない。」

お松は氣もそゞろに四邊を見廻しながら、
「何所へでも。何所へでも。彦三。直ぐに私と一所に逃げて。」
お松がその手を取つて、夢中に走り出やうとしたが、彦三はその手を拂つて、そうして無言に後退りした。
「彦三。」
お松は震えてゐる彦三郎を見ると、其の身體に取り付いておろ〳〵と撫で痛はりながら、
「彦三。なんにも恐い事はない。」
と云つた。
「私は恐しう御座います。あなたはまあ、恐しい事をなさいました。」
「いゝ。恐い事はない。私が惡るいのではない故恐い事はない。私はなんにも惡るいのではない。」
「其れは叔母は非道な人で御座います故、其の樣な目に逢ふも心がらでは御座いますが、例へどの樣な理があればとて人を殺しては此の世に生きてはゐられませぬ。人殺しは大罪では御座いませぬか。あなたは前後の考へもなく、つい其の樣な大膽れた事をなすつたのでは御座いませうが、私は恐しくてなりませぬ。」
「いえ。其の樣な事はない。」
お松は彦三郎の恐しがるのが恐しかつた。その彦三郎の物恐ぢ深い弱い心から、却つて罪の悔いと呵責とがお松の胸に響いてくる。自分は何にも惡るい事をしたのではない。私が惡るいのではない。何う

してそれが罪咎であらう。その罪咎の後に何うしてこの世に生きてゐられぬと云ふのであらう。私は惡るい事をしたのではない、と心を强く張つて、お松は斯う繰り返して見ても、どこかに痛々しい呵責がお松の胸を壓してくる。

「あゝ、賴りない。」

とお松は思つた。彥三は少しも自分を痛はつてはくれぬ。彥三の情け——それが欲しい。彥三は何故恐しがつてばかりゐて——お松は彥三郎に緊く縋りながら、何うして彥三郎を慰めやう、何うして彥三郎の弱い心を引き立てやうと焦慮りながら、

「彥三。何にも恐しい事はない。何にも恐い事はない。」

と云つて其の手に取り縋つた。熱い淚が不意にお松の眼から溢り落ちてきた。

「恐い事はない。恐い事はない。」

と、お松は其の恐しさを打拂ふやうに、淚の中で呟きながら。

「私は恐しう御座います。もう恐しくて恐しくてなりませぬ。」

彥三郎が絕え入るやうに戰きながら云つた。

お松の手に附いてる血汐の痕が、彥三郎の眼に入ると、彥三郎は、

「あつ、血が。」

と狂氣のやうに云つて、思はずお松の傍から飛び離れた。恐しい血汐の痕——彥三郎は其の殘忍な血の痕を厭ふやうに、袖を顏に當てゝ俯つ伏した。

「其れもみんな、お前の傍に來たいばかり、お前に逢ひたかつたばかり。お前と一所に暮らしたいばかりだつたものを。何にも恐い事はない。これから直ぐに何所へでも行つて、そうして二人が離れずに何時までも暮らしたい。彦三。然うする事は出來ないかえ。」

「あなたは其の樣な事を仰有つて――まあ何うしてこの後、あなたと二人が安閑と暮らされませう。其れは決して天道樣が許しては下さいませぬ。あなたは恐しい事をなさいました。もう私もあなたも、この世に生きてる事が出來ませぬ。今にも追手がかゝりましたら、あなたは何うなる事だとお思ひなさいます。」

「彦三。」

と云つてお松は立上つた。

「私と一所に逃げて。――早く。私はもうせめて一日なりとお前と一所に暮らしたい。それが叶はずば、半時なりとも何の氣遣ひもない中にお前の傍に居て見たい。何所へでも何所へでも、二人が一所に隠れて居やう。彦三。」

と云つて彦三郎の手を取つたが、彦三郎は震へながら其の手を拂つて、お松の傍から身を引き退けた。

そうして色を失つた唇をわなゝかしながら、

「恐しくて恐しくてなりませぬ。私はあなたが恐しう御座います。あなたの手に血がついております故。あなたの着物にも血がついております故。私はあなたが恐しう御座います。」

お松は斯う云はれて自分の手の血の痕を見た。黒く凍り付いてる血の痕は手首から掌に殘つてゐる。

お松は其れを行燈の灯影にぢつとみつめながら立つてゐた。

「私はあなたの其の手にさわりました故、恐しくてなりませぬ。恐しい。恐しい。」

彦三郎は面を垂れて、袖に顔を埋めながら轉ぶやうに疊の上に仆れ伏してゐる。生きてる空もないやうな恐しい心地が、彦三郎の上に地獄の責苦のやうに襲ひかゝつて來る。恐しいお松の身體に附いた血潮の痕——其れは何時までも、何時までも、彦三郎の眼先きから消え去らうとも思はれない。

「彦三。この血が恐いのかえ。」

お松は臺所へ駈けて行つて、水でその血を洗ひ落すと、

「彦三。もう恐い事はない。」

と云つて其の手で彦三郎の震えてる身體を搖い起した。

「彦三。何故そんなに氣の弱い事を云ふのだえ。彦三。しつかりして。お前が弱い事を云ふと私も恐しい。もつと心を丈夫に持つて——私は何も恐しい事をしたのではない。」

「いえ。これが恐しい事でなくて何ういたしませう。あなたは人をお殺しなさいました。あなたの身體についた血が、いつになつたら取れるとお思ひなさいます。あなたはその樣な恐しいお人では御座いませんでしたのに、何故その樣な恐しい事を——」

「其れもみんな、お前の傍に來たいばかり——せめて一日なりとお前と一所に暮らしたい。それも叶はずば一つ時なりとも、誰れも邪魔のないところに隱れてお前の傍にゐたい。彦三。何所へでも、何所へでも行つて隱れてゐやう。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いゝえ。私は、私は、」
と云つて彥三郞は、氣も狂亂に走り出やうとした。
「彥三。」
「私はもうあなたのお傍にはゐられませぬ。」
と云つて彥三郞は、袂に捉まつたお松の手を緊く振り拂つた。
「私は生きてはゐられませぬ。」
「え。死なうとお云ひか。」
「私は生きてはゐられませぬ。」
「いゝえ。死んではならない。私は死ぬことは厭。死ぬことは恐しい。」
彥三郞は無二無三にお松を突き退けて外に走つて出た。
「彥三。待つて、私を一人置いて行つてはならない。」
とお松も彥三郞の後を追ひながら外に出た。
日影が白く地の上に曳いてゐる。彥三郞は屋敷長家を外れると土堤に上つて、三圍の邊りまで走つて來た。
「恐しい。恐しい。」
と絕えず口の中で呟きつゞけながら、唯ある櫻の木に捉まると、そこから水面を見下しながら凝つと立つた。待乳の森が月の光りに墨を含んでこんもりと浮んでゐる。川の水がその光りを碎いて靜に流れてゐた。

「彦三。」
お松が追ひ縋がつて彦三郎の腕をとらへながら、
「彦三。勘忍して。私が惡るい。勘忍して。」
と聲も嗄れ〳〵な息苦しい下から云つた。
「私が惡るい。」
彦三郎はお松の手を振り拂つて、ぢつとお松の顔を見た。月に照らされた彦三郎の美しい顔。凉しい眼許、優しい脣――それは昔の彦三郎の面影のやうにお松に見えた。お松は、覺えず彦三郎の胸に身を投げかけて、
「彦三。勘忍して。勘忍して。」
と云つてその胸に縋りながら、この一と時にその身の燒き盡さるやうな激しい戀慕に、お松はその面を差し寄せやうとしたが、彦三郎は、
「あ。血が。」
と云つて後に退つた。そうして川を見渡しながら、
「あの川が血でいつぱいで御座います。御覧なさいまし。まあ恐しい。あなた御覧なさいまし。」
「彦三。もうその様な事は云はないで。川の水に血などは流れてはゐない。もう血などは何所にもない。」
「いゑ。あなたの身體にも附いております。その血は一生あなたの身體からはなれはしませぬ。」
「私が惡るい。」とお松は涙に喘ぎながら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何うすれば、お前のその胸が靜まらう。彦三。何うすれば。」

「私はあの血の中に入りませう。お嬢さま。あなたもお入りなさいまし。」

「彦三。死んではいけない。私はあの血の中に入りませう。私はお前と一所に生きてゐたい。何時までも。」

彦三郎は櫻の幹からはなれると、その儘川の中に身を投げた。

「彦三。彦三。」

お松は聲を限りに叫びながら、彦三郎の凭れてゐた櫻の幹につかまつて水の中を見下した。月の光りが其所に皺んでゐた。お松の半面もその月に照らされた。水の上は――一切が消えてゐて何も見えない。

――〔完〕――

編者申す。田村女史が「毒婦お松」を起稿せんとする最初の趣意は、普通人の見て以て毒婦とする性格の中に、極めてヒューメンなる分子を認めて、淺薄なる俗人の迷妄を醒まさんとの意氣組なりしも、前號谷崎潤一郎氏の「恐怖時代」を『殘酷』との名目の下に發賣禁止を命じたる當局者が、よし全體の結構がヒューメンなるにもせよ、部分的に毒婦らしき行動あらば、又再び其所謂忌諱に觸るゝこと絶無ならざるべきを思ひ、女史に乞ふに毒婦の本色を發揮せる部分は絶對に描寫せざることを以てせるの結果、女史は「毒婦お松前記」とも云ふべき、熱情ある純なる女子が、其戀の爲めに思はざる罪を犯し、其罪の結果つひに殺人とも別るゝに至れるまでにて擱筆せらるゝ事となれり。而かも其思はざる殺人をなせる狀景の最も印象的藝術的なる部分は、又氣紛れなる當局の所謂手加減の不分明なるが爲めに全部之を抹殺するの已むなきに至れるは、編者の深く作者及び讀者に謝する所なり。



陰影

德田秋聲

一

淺野が、今から五年ばかり前の春、その土地の有志に誘はれて、畫筆を挈げて或山國の小都會へ行つてから、消息も絶え〴〵になつてゐた蘆川といふ老人から、不意に東京へ出て來たといふ通知を受取つたのは、ちやうどその事件——今書かうと云ふ——の内容に觸れかけた頃であつた。

蘆川が上京の通知は、彼が初めて見る中央停車場で、粜の鉛筆で葉書に認められたものであつた。「東京の變つたには一驚を喫する。」その葉書には、そんな事が書いてあつた、淺野は以前長いあひだ見馴れた彼の手蹟や文章から、彼の此頃の生活氣分をでも書出さうとするやうに、暫くその葉書を眺めてゐたが、彼が何のために遽かに上京したかは、その文面では解りかねた。

「おい、蘆川は彼方を引揚げて來たのぢやなさゝうだぜ。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淺野は寢床を離れて、机の上の薬書を見てから、先刻まだうとうとと夢現の境にあつた自分の耳元で、蘆川が東京へ來たことを告げて行つた妻と、茶の間で顏を合したとき、言つた。

「へえ、然うですか。」

「それにしても何の用事で出て來たらう。」

東京に殘されてある蘆川の、脊の丸くなつた、眼光の鋭い、氣象の剛毅した年老いた母親のことが、直に二人の念頭に浮んで來た。淺野は二三年前、蘆川の留守宅が火災に逢つてから、一二度その老母を見舞つたことがあつたが、老母たちが遠い郡部へ引越してからは、訪ねる機會もなくて過ぎたのであつた。

「偶然としたら、あの御母さんが大病か、亡つてお仕舞ひなすつたかぢやないでせうか。」

「多分そんな事かも知れない。」

「あのお婆さんも、もう餘程のお年でせう。」

妻はその鋭い目や、落着いた不斷の態度などが、ありありと目先に浮ぶやうな顏つきをして言つた。武家に育つて、昔しは槍術などに鍛錬されたと云ふ老母の體は、腰が二つに折れるほどになつてからも、まだしやつきりしてゐた。淺野は寂しく暮してゐたらしい其の老母の晩年を思ひながら、何とはなく自分にも荷がおりたやうな安易を感じた。

「蘆川さんも隨分お變んなすつたでせう。あの奥さんも彼方でまた一人くらゐ、お子さんが出來てゐるでせうよ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妻はもうその面影も忘れたやうな、蘆川の細君や子供たちのことを、言出した。その細君が蘆川がその土地へ行つてから三年目に、二人の子供と一緒に、彼の懇意にしてゐる土地の或有力家につれられて行つたことを、淺野は三度目に彼の留守宅を訪問したとき、初めて聞知つたのであつた。親の代から東京の眞中に生育つて、淺野が知つてから、一度伊豆の溫泉で夏の二月ばかりを過したほか旅といふほどの旅をしたことのなかつた蘆川が、邊鄙な山のなかの町に、五年も滯つてゐるといふことは、淺野夫婦には殆んど想像のできないほど不思議な、慘しい事實であつた。食べものや遊び場などの、都會的生活に、特別の趣味と矜りとを持つてゐる蘆川が、雪の深い、寒い山上の高原地に、長いあひだ漂浪の身となつてゐることは、皮肉な運命の惡戲としか思はれなかつた。彼は滯り〱してゐる畫債や、係りあつてゐる色々の仕事のために、一年々々と引摺られて、半永久的な生活の根が、その土地に卸されてしまつたらしく想像された。

淺野の家に始終出入してゐた、白井といふ青年が、この一月ばかり歸つてゐた田舍から出て來て、暫く彼の家に寢泊することになつたのは、交涉の殆んど絕えてしまつた彼の友人を、淡い不思議な興味を以つて心待ちに待つてゐた頃であつた。

去年の春學校を出たばかりの青年白井が、友人の經營してゐる或る本屋の仕事のために、暮に出向いて行つた其の鄕里から、實際突かつてみた其の仕事に興味のない不滿やら、自分の思ひどほりに行かない失望やらを洩した手紙を受取つてから、淺野は一週間目に、元氣のいゝ、しかし每時の上京の時とは

違つて、何處か不安定な落着のない彼の聲を玄關に聞きつけたのであつた。

　淺野は、暮のうちに荷物を整理して、東京を立つて行つてから二月もたゝぬうちに、近いうちまた東京へ歸ると云ふ報知を彼から受取つたとき、いつにない彼の生活に立入つた氣持で返辭の手紙を書きなどしたのであつた。東京の學校へ入ることすら不服であつた彼の兩親が、長いあひだ手放してあつた最愛の一人子息を、卒業後暫くでも自分たちの傍に牽つけておきたかつたのと、同じ年頃の子供をもつた土地の親類などへ對する體裁上から、名儀だけでも何等かの職業に有つかせたかつたのとで、彼がその本屋の編輯員として郷里へ歸りたいと云ふ希望が、造作もなく歡び迎へられたのであつたが、これまで白井の生活や一身上の方嚮について、出來るだけ傍觀的態度を取るより外なかつた淺野に取つても、現在の事情、彼の赴任について、當分のうちならば……と云ふ條件づきで、それに贊成しない譯に行かなかつた。しかし仕事の條件が好すぎることが、白井が立つた後まで彼の不安として殘つてゐた。そして、あれほど鼻息の荒い、父や母や友人の前に、惡巧みのない暴君として、我儘に擧動つて來通した世間見ずの男が、周圍と何の點まで折合つて行けるかゞ、氣遣ひな謎として彼の心に繋つてゐた。目鼻立や輪廓のくつきりした彼の顏や健康な肉體に、何等の陰影がないと同時に、思ひ昂つたやうな彼の心も、多少の荒いところがありながらに、常に緊張し切つてゐた。

「宴會などの席上で、僕がゐると衆が壓迫を感ずるさうです。」

　彼は中學時代から、鼻ッ張りの强かつた自分の周圍に對する性格の現はれについて、時々淺野夫婦の前に、そんな話をした。

「子供の時分には、僕ほど近所からお尻を持込まれて、母に迷惑をかけたものはないでせう。一度などは、傘屋の小僧を滅茶苦茶に窘めたので、大僧に飛出して來られて、ぽか／＼頭を毆られてあんな痛い目をしたことはなかつた。それで口惜しいから、僕は石塊を澤山拾つて行つて、店へばら／＼投つけて逃げたもんです。」

緊張しきつた彼の生活力が、時とすると悩ましさうに、淺野には見えた。可恐しい力をもつて、外面にのみ勃れあがらうとする、その性癖を壓しつけることが、彼に取つて少からぬ苦痛であつた。

「爲方がなければ、少し遊んで見るのだね。女にでも揉まれたら、少しは効驗があるかもしれない。」

淺野は時々、自分のさうした青年時代の苦しかつた心持を想像しながら、笑談のやうに言つた。彼は異性の對象を通して、自分や世間を何のくらゐ知ることが出來たか知れないと思つた。

「Kさんも然う言つてゐます。」

白井はその頃憧憬を傾けて師事してゐたK氏からも、同じやうな事を言はれてゐたが、異性に對する興味を追ふには、彼は餘りに驕慢であると同時に臆病であつた。

長いあひだ傾倒してゐたK氏の家へも、學校を出ると間もなく、彼は足を絶つやうになつた。卒業論文を書きはじめる頃から、彼は時々K氏から、彼が内面生活に立入つて、大膽にその缺陷と弱點を指摘されてゐた。その前後ほど白井が憂鬱と興奮に陷つたことを、淺野は曾つて見たことがなかつた。

「え、つまりね、私に深い思索的生活がないといふんでせう。着物や口腹のことばつかり言つてゐるから全然駄目だといふんです。君等には藝術なんかは、絶對に解らないといふんです。それが實に手厳し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いんでね。どうせ僕なんか、藝術は柄にないんですから、その方は斷然思ひきつて、何か外のことをやらうと思ふんです。」

ちよい／＼來ては、興奮したやうな調子で、何かしら憤激と絶望の聲をもらして行く彼を氣遣つてゐる淺野に、白井がそんな事實を、斷れ／＼に話しだしたのは、その事があつてから餘程經つてからであつた。

「白井さんはKさんから、何か大變言はれたらしいんですよ。」

淺野は時々さう言つて、半ばは同情の意を表してゐる妻の言を、それまで長いあひだ聞流してゐた。

「何だか大層落膽して、口惜しがつてゐますよ。」

その内容に深い理解のない淺野の妻は、何となしその心持だけには、同感ができるやうな氣がして、二度も三度も淺野にその事を告げたのであつた。

「これまで飯時にでも行けば、いつもなら此方へ來給へと言つてくれて、一緒に飲食をしてゐたのです。それが此間行つた時は、(うむ、君か)と言つたきりで、何とも言つてくれないんです。でね、私は爲方なし勝手の方に、赤ン坊を愛して待つてゐたんです。奥ぢやOだのSだの、いつもの友達がKさんと一緒に飯を食つて、話し込んでゐるんです。私は實に苦しくて、直ぐ歸らうかと思つたんですけれど、やつぱり立おくれがして、默つて我慢してゐたんです。それから飯がすんでから呼ばれて、お叱言が初まつたんです。」

淺野は自分にも、屢ば同じやうな苦しい感じを嘗めさせられた、小い經驗があるので、すぐ其時のそ

の場の光景と、戰き顫えてゐる彼の神經とを想像することができたが、双方の性格から言つてそれに早晩來なければならぬ悲劇であるやうに思はれた。

「さう云ふときの氣持は、切ないものですよ。」

淺野の妻が、傍から言つた。

「僕が逢つたら、よく話しておかう。」

「いゝえ、それには及びません。迚も見込はないんださうですから。」

「しかしK君だつて、親切でさう言つてくれるんだらうから、そんなに悲觀しない方がいゝだらう。」

「それは然うかも知れませんけれど……私はKさんから絶對に見離されて了つたんですから。文學なんかもう止めてもいゝと思ひます。」

白井は自暴にさう言つて、先刻から倚つてゐた縁端へ上つたり下りたりして、いら／＼しい氣分の遣場がなさゝうに、妄みに莨を喫しながら、そこらを動いてゐた。そして、「どうも小父さんにまで御心配かけて濟みません。」と、氣毒さうに頭を下げた。

それが彼の歸省の心構をしてゐる、夏の頃の或日の午後であつた。

淺野は周圍と衝突すべき素質を、十分有つてゐる白井を知つてゐたけれど、そしてそれを矯めることは、今後長いあひだの内省と、經驗と親切な周圍の提撕とに待たなければならぬことも、K氏の苦言が、多少融和を缺くほど、調子の強い徹底的なものであつたにしても、それは彼に取つて當然忍ばなければならぬ筈であることをも感じてゐたけれど、此の場合、今まで精神的にも物質的にも、そんな苦勞をさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せられたことのない白井に、可憐しく思はない譯に行かなかつた。

「今度行つたら、もう東京へは歸らないつもりです。あつちで親父の仕事でも助けて、家に引込んでゐた方が、可さゝうです。」

白井は歸りがけに、反撥的な調子で言つた。

「それよりか、御父さんたちの言ふとほりに、結婚でもして落着いたら如何だ。」

「それも考へてるんですがね、でもね、此頃の若いものゝ新世帶なんか見ると、何だか餘りにあたじけないやうな氣がして、迚も女房なんか持つ氣にはなれませんよ。若い細君の臺所を見ると、慘で、厭になつて了つてね。それでゐて少し文學なんか囓ると、直ぐ誰の小說がいゝだの惡いだのつて、實に厭ですよ。さうかといつて、豐富な生活をするには金がかゝりますから、さう親父から取るのも氣毒でね。」

「君もやつぱりむつかしいな。」

淺野は、自分が世間並に世帶持になるときの姿を直視するに忍びないやうな、彼の冷嘲的な口吻に、苦笑しながら言つた。

「せつかく、あゝやつて學校を出ても、苦勞なものですね。」

白井が落着なく出て行つてから、淺野の妻は嘆息するやうに言つた。

「家の正夫には、どうか苦勞はさせたくないものですね。」

「さうは行かないさ。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淺野は苦笑した。

白井はその夏、八月の初めに歸省して、それから九月へ入つてから上京して來ると、急に長いあひだ居馴染んだ下宿を引拂つて、素人屋に移つたのであつたが、當分の職業に働くために、押詰つてから遽かに慌忙しい思ひで、郷里の都へ立つて行つたのであつた。さうして、二月の中間に、再び東京へ舞戻つて來た。

「おやお歸んなさい」と、淺野の妻が、愛相よく彼を玄關に迎へて、「行つたばかりで、またお歸んなすつて、眞實に御苦勞さまでしたね。」

白井は玄關で、少しどぎまぎしてゐるやうであつたが、「いやね、實に詰らん話でね。……荷物は午後でないと屆かんさうです。小父さんは。」

「は、居ります。」

白井は、淺野が茛を喫してゐる火鉢の側へ寄つて來ると、わざと元氣よく「また此方にゐることになりました。いや、そのね、行つてみると案外ぼろ糞の本屋でね、如何せ長くゐるところぢやないと思ひましたからさつさと切揚げて來ました。Y君が編輯長でね、小父さんに宜しくと言つてゐました。」

Y氏といふのは、つい一昨年の頃淺野が、ある新聞社で懇意になりかけた、記者の一人であつた。

「Y君は割合に解つた人です。一等好いでせう。しかし月給は皆な安いもんですね。Y君なんかも高々×××圓くらゐのもので、氣の毒のやうです。私なんかは何にもしない割には好い方です。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「Y君の×××なんか好い方だよ。東京だつて一流の額だらう」と、淺野は自分のゐた社から、その後不意に離れることになつたY氏が、早くもそんなところに落着いてゐることを感心したやうに、「人間は皆な相當に働くところがあるもんだね。」

「然うですね。」と白井は、淋しく笑つて、「あの人も兄さんに似て熱情家ですね。私が衝突して止めると云ふことを聞いて、一晩大いに飮明して、色々引止めてくれたり何かして、心配してくれましたけれど、何しろ周圍が不可いんでね。私が社で痰火を切つたんで、皆が驚きやがつてね……しかし、仕事は少しばかり此方ですることにして來ました。旅費も相當に取つてやつたから……。」

「何處へ行つたつて思ふやうには行かないさ。」

「その代り、今度あつちで大變遊んでしまつてね、ひどく親父の機嫌を損じてしまつて。」

白井は、暫くの間に、色澤もよく、ふつくり肉づいた顏に、どこか暗い影を見せながら、急に氣が沮んだやうに押默つてしまつた。

「どうせ可いぢやないか、今急に金を取らなくちやならない譯でもないから。」

「親父もね、金は如何でもいゝと言ふんです。けど、一年か二年家にゐてくれなくちや困ると云ふので、遊び旁たどんな仕事でもやつてゐれば可いぢやないかと言ふんですけれど、家になんか、窮屈で、迚もゐられませんからね。親父は外から歸つて來て、私がゐないと、何かなく物足りないさうです。だけれど、一時間も二時間も酒のお相手をさせられたり、一日母と差向ひでゐるのは、實際私には遣切れませんからね。年々さうなつて行くんだから爲方がありませんよ。今度なんかも、實際家にゐるのが辛くつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てね、だから、つい二晩も續いて家を明けたり何かしたんですけれど、さうするとひどく機嫌が惡いんでね。母親なんか、私に急にぐれ出されちや大變だと思ふんでせう。」
「そんな事で、喧嘩でもして來たんぢやないか。」
「いや、さうぢやないんです。しかし、實に大失敗をやつてね。」
白井の顏が、また曇つた。
「何をやつたんだ。」
「何をつて……小父さんにも、これは少し話しにくい。」
「あつちで女でも出來たんでせう。私は貴方の顏を見ると、過ぐ解つてしまつた。」淺野の妻が、白井の顏をじろ〳〵見ながら、傍から笑つてゐる。
「いや、然うでもないんですがね」と、白井は目眩しさうな目を伏せたが、「小母さんは氣味がわるくて爲樣がない。いづれ一杯小父さんと何處かで飮んで話しませう。然うでないと大いに工合がわるい。」
文樂や芝居や、あつちで此頃簇々出來たての成金の話などが淺野と白井の間に交された。白井がしばらくの間に、ちよく〳〵浸つてゐた色町の噂や、女の批評などゝ出た。急にそんな處へ足を踏込んで行くやうになつた、白井の浮々した話のうちにも、紛らせ得ないやうな彼の心の傷か、想像された。
「しかし共の問題と云ふのを、今聞いてもいゝね。」淺野は笑ひながら言つた。
「いや……」と、白井はやつぱり氣が進まないらしい目色で「どうせそれは話さなければならん事ですけれど……どうも言ひにくい。餘り好いことぢやないんだから。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それぢや其うち聞くとしやう。」

「この頃に、小父さんと市村座へでも行きませう。」白井はまた話を、そんな方へ持つて行つた。

「己はJ氏やT氏と新富の約束もあるんだけれど……」と、淺野は、机のうへの葉書に目を留めた。

「いや……石切もつまらない芝居でね。」

午後になつてから、湯に行つてゐる間に屆いた荷物を、白井は玄關脇の小間で釋くと、その中から子供への土産に、菓子の大きな鑵などを取出して來た。

「これは、いつも言ふ淸元の師匠が、東京からもらつたのを、又た貰つて來たんですがね、この家の下駄は、ちよい〳〵貰つてゐるやうです。」

白井はボール箱のなかにある草履を一足そこへ取出した。

「どうして好い草履よ。大分出てゐますよ。」淺野の妻が、手に取上げながら、打返して眺めてゐた。

「小父さんに如何です。」

「如何してこんな物を下さるの。貴方穿いたら可いでせう。」

「私は取つてくれればありますから。」白井は着いたときと同じやうな、そわ〳〵した態度で、行李のなかを彼方こつち引くら返してゐたが、「それは然うと、宿へ荷物を取りにやらなければなりませんね。」

白井の目が、また不安さうな色に陰つた。

淺野が白井から、その事件の内容を聽知つたのは、二三日淺野の家に寐泊りしてゐた白井が、一時假

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りに近所の下宿へ引移つてからであつた。

「どうせ是は知れることだから、小父さんにだけは話さないと不可いつて、親父がさう言ふのですね。」

彼は或日の午後、淺野が一人で机の前に坐つてゐるとき、その事件の極めて漠とした輪廓を、淺野に話しだした。

「やつぱり女の問題なのか。」

「つまり然うなんですがね。」白井はいつも彈みきつて遣場のなささうな體を、いくらか落着いて、思ひきつた、しかし自分の秘密をまだ何處々々まで淺野の前に告白するのを屑よしとしないやうな調子で言つた。

「いや、これを話したら、小父さんか嘸ぞ冷笑される事だらうと思ふんですけれど……」と、白井はさう言つて躊躇したが、彼が今までゐた宿と云ふのが、その女と同棲してゐた二人の世帶だつたと云ふことが、直に淺野にも感づけた。

淺野は去年の九月、白井が國から出て來ると、急に今までの下宿をやめて、春木町の方の素人屋へ移つて行つてから、絶えてその宿を訪問するやうな事はなかつた。それは彼が何となくその頃の生活に、淺野夫婦の觸れて行くことを忌避してゐるらしい氣持が受取れたからである。白井はその夏の頃から、毎日のやうに來てゐた淺野の家へも、三日に一度くらゐしか姿を見せなかつた。好きな芝居なども、もう見飽いたと云つて、今迄のやうに淺野を誘ふやうな事はなかつた。

「多分牛込の男の世話で、あの家へ入ることになつたのだらう。事によると、結婚の準備かも知れない。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淺野はさう言つて、妻とその噂をしてゐたが、或音樂會へ誘つたときも、ちよつと其入口まで立寄つたゞけで、二階へは上らずにしまつた。

「白井君は何だか可笑いやうだぜ。」一二度白井の宿を訪ねた淺野の妻の縁類にあたる醫者が、淺野の妻に、そんなヒントを與へて行つたのは、その頃であつた。

「ちよいと可愛い女が、己が入ると二階から降りて來たぜ。」彼はさう言つて、にや〳〵笑つてゐた。

「へえ。それぢや何か出來たかも知れませんね。」淺野の妻はさう言つて、その事を淺野にも話し、白井にも聞いて見たが、白井の返辭は簡短であつた。そして、それは宿の細君の姉だと云ふのであつた。宿は三田の學生が、近頃一緒になつたその細君と新世帶を持つてゐるのであつた。出來會つたその人達は、白井がそこへ行李を持込んで行つた時分、學生の父親が、子息の要求どほり、二人を夫婦にするために遙々九州から出向いて、來てゐたと云ふことは、淺野もその當時白井から聞いてゐた。

「しかしもう其の姉も行つてしまひました。細君がお產をするので、助けに來てゐたのですから。」

白井はさう言つて、淺野の妻の言を否定してゐたが、間もなくその細君の母親の家の方へ引移ることになつたとか言つて、今の宿へその女や女の母と一緒に、別に世帶を持つことになつたのであつた。

「それぢやドクトルの觀察は中つてゐたんだ。己たちは迂濶だつたね。」淺野はさう言つて笑つて、「しかし夫婦約束でもした譯かね。」

「いや、そんな事はしません。」白井は胡散くさい目色で應へた。そして、女と、女の周圍と自分の是迄の關係の紛糾を何う說明したものかと思惑つてゐるやうな表情をした。

「どうして又そんな宿へ行つたんだ。」

「女が、知つた好い家があるから、そこの二階を借りませうと言つたから、行つたんです。初めは些とも解らなかつたんですが、そのうちに細君が女の妹だと云ふことが解つて來る。母親がどこからか現はれて來る。その母親が、また實に厭な奴でね、妹の男の父親が出て來た時なんか、契約書を書かしたり何かしたんです。私にも籍を入れろとかね、證文を書けとか、始終云やがるんです。此奴は大變だと、私もその時思つたんですが、隨分喧嘩もしました。田舍の門閥なんかを喧しく言ふ婆あでね。」臼井は其頃の苦い双方の感情の觸合を憶出して、慄然とするやうに言つた。

「しかし私は、そんな物は斷じて書きません。それに暮に歸るとき、五十圓ばかり置いて行つてあるんです。今の家を持つについても、敷金や何か出してゐますし、彼方から手紙を出してありますから、別に面倒は起らない意です。唯困ることは、國のお袋が大變怒つてしまつたんです。私が二晩ばかり家を開けてゐるうちに、本屋から符箋で家へ屆いた、女の田舍の兄の禮狀が、お袋の手に入つたゝめに、悉皆暴露てしまつてね、それから女の手紙を搜し出して、そいつを片端から讀んだものなのです。私の顏を見ると、いきなり阿呆呼ばりか何かで、ひどく脂を取られてしまつたんです。これまで何一つ不自由な目をさせた覺えがないのに、何が不足でこんな事をすると云ふのでね、女の親を養つたことなんかを、酷く怒つてゐるんです。それも藝者買をして、そのお尻の始末をさせられるのなら、まだしも外聞がいゝけれど、女房にする氣もない女に關係をつけるなぞ、第一不道德だと云ふのでね……お袋は昔し氣質の女ですから、さう云ふことには比較的偏狹な考を有つてゐるんです。それに……一つは、早く嫁をも

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たさないから、そんな事になるんだと、親戚から惡口言はれるのが厭なんでせう。」
「御父さんは如何言つてゐるんだね。」
「親父は、若し氣に入つてゐるものなら、どうせ貰ふんだから、結婚しても可いと言つてゐるんですけれど……。」
「それぢや然したら如何だね。」
「ところが、それ程の女でもないんでね。」白井は少し顏を顰めて、「感じの硬い女でね、性質も剛情です。私はよく打つたもんです。たゞ可愛いさうでね、お袋とも間が惡いやうでしたから、つい引摺られてしまつたんですけれど、女房にするには無智過ぎます。教育なんかなくとも、もつと譯のわかつた女だと、我慢して女房にもつてこともありますけれど、そいつは如何もね。それをお袋は惡いと言ふんです。だけど、そこまで考へてやつた事ぢやないんですからね。」
「とにかく少し深入りしたやうだね。」
淺野は大分たつてから、嘆息するやうに言つた。
「まあ荷物を取りにやつて見給へ。捜りをいれるつもりで。」淺野は言つたが、自分にも何だか先が見えないやうな氣がしてゐた。
「然うします。それに昨日三芳のところへ行つたら、女の方から會社へ電話がかゝつて來て、頻に私の歸るのを待つてゐるさうですから、三芳に話してもらはうと思つてゐます。」
白井はさう云つて、國から送つた風にして、自分の名刺に、手捷く何か書きつけてゐたが、淺野を煩

はすのが憚られて、自分だけで事件の解決をつけやうとしてゐることが、昨夜友人の三芳と、その用談のために、日本橋の鳥屋で飯を食つて來たりなどしてゐる彼の様子でも、淺野には感づけた。淺野は然し、それを傍觀してもゐられないやうな氣がした。此の男を監督すべき責任が、急に自分に湧いて來たやうに思へた。

「それあ白井さん、渡しませんよ。」

暫らくすると、運送屋のことを頼んでゐる白井に、首を傾げて言つてゐる妻の言が、淺野の耳へ入つたが、淺野はそれに深い注意を拂はうともしなかつた。

「いゝえ、大丈夫です。」白井が自信ありさうに言つてゐた。

「渡すものですか。私なら渡しません。貴方はそんなに、輕く見ていらつしやるけれど、名刺一枚ぢや駄目ですよ。」

淺野の妻は二度も三度も、それを繰返した。

二度目に、淺野の手紙を持つて行つた、運送屋の若い者が、鉛筆で書いた女の返辭を齎して、空車をひいて歸つて來たとき、淺野は、そんな事にすら分別した自分自身の判斷や思慮を缺いでゐることを腑效なく思はない譯に行かなかつた。

鉛筆で書いた女の手紙には、「白井さんがもうお出の筈ですから、お目にかゝつて色々お話したうへのことにして頂きたい」云々の意味が認められてあつた。

「それ御覧なさい。渡す氣遣はないんですもの。」淺野の妻が勝矜つたやうに言つた。

「へえ、怪しからんな。さう云ふ筈はないんだがな。」白井は感情の動搖を、强ひて壓しつけるやうに、反撥的な調子で言つた。

「無いつたつて有るつたつて、渡さないものは爲方がありませんわ。これは貴方の考へてるやうな譯に行きませんよ。貴方は少し暢氣すぎますよ。」

「へッ」と、白井は「小母さんに叱れた」と云ふ顏をして、へたばつたやうに頭を搔いた。そして體の置き場がないやうに、そこらをどさ／＼と動いてゐたが、間もなく下宿へ歸つて行つた。

後で淺野の妻は、「どうも可笑いと思つたんです」と、暮に國へ歸つて行く白井に事づけるための親類への土産物などを屆けに、初めて訪ねて見たその宿の樣子の希有であつたことを、また言出した。

「あの時私が座敷へあがつてゐれば、直ぐ解つたでせうよ。下宿なんかを喧しく言ふ白井さんが、居さうな家ぢやないんですもの。お父さんを寄せつけないやうに、時刻を量つて家で落合つたなぞも、今考へると矢張りさうだつたんですね。」

「とにかく如何な女だか、ちよつと行つて見て來やうか。」

女の方から始終白井の樣子を探るために、その會社へ電話をかけられてゐる白井の友人の三芳が、今夜あたり女の方へ行く筈になつてゐることを知つてゐたけれど、自分の方からも一應樣子見に行つておく責任がありさうに感ぜられたので、淺野はさう言つて家を出た。

白井と世帶を持つてゐたと云ふ其女の家は、十町ほどの距離にあつた。電車通から、ちよいと曲つた

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ところ、清元の師匠の家の出格子窓があつて、その隣に仕立物の看板の出てゐる門を入ると、二三軒ごちや／＼した家のある其の突當りの、目隱しのやうな塀に切戶のついた、薄暗い家がそれであつた。格子戶を開けて入ると、上り口に杉で作つた下駄箱が目について、上に古新聞を敷いて、子供の學校用の草履袋があつた、土間に穿減された女の塗下駄や、盥などがあつた。陰氣くさい家のなかは閉寂して、低い話聲が洩れ聞えた。

淺野が案內を乞ふと、奧から女の聲がして、やがて上り口の障子を開けたのは、色の小白い、ちんまりした顏つきの小柄の女であつた。淺野には直ぐそれと感づけた。

淺野は名刺を出して、「先刻程白井の荷物を受取りにあげましたが、何かお渡しになれない譯があるんですか。白井が間代でも滯らしてゐるんでせうか。」

淺野は出來るだけ平易な調子で訊ねた。

女は淺野の來たのを悅んでゐるやうな、當惑したやうな顏色で、「いゝえ。それには少し譯がございまして……」とぎつこつ張つたやうな、潤ひのない聲で言つて、硬々した體を後へ捻向けるやうにした。

「淺野さんが入らしたんですけれど……お話して了ひませうか。」

「その方が可いでせう」と云ふ意味の母親の答が聞えた。

暫くすると、淺野は長い三疊の玄關の間から、開き戶を開けて通るやうになつてゐる緣側を通つて、八疊ばかりの、薄暗い座敷へ通された。床には白井の軸や花瓶などが据えられ、明取の着いてゐる些とした棚のうへには、書籍が幾積みとなく積まれ、行李の類も疊のうへに置いてあつた。眞中に出してあ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る唐机の側には、彼の坐りなれたメリンスの座蒲團が二三枚出てゐた。門の方の衣桁には、それらの代物と釣合はないやうな、古い半月なりの色の褪めた牡丹色の肩掛が唯一つ、下の方にぶらりと貧乏くさく懸つてゐた。白井が假にもこゝに初めての世帯をもつてゐたのかと思ふと、淺野は何だか情ないやうな氣がした。

白井が四五十圓か、質から出してやつたやうに言つてゐた物の一つである、角い唐金の厳い火鉢に、火が入れられてから、女の母だと云つて、身裝など田舍々々してはゐるが、目鼻立の割合に調つた、色の淺黑い、しかし何處か長いあひだ棲んでゐた土地の暗さを想はせるやうな、五十ばかりの女が、それでもきちんとした身裝をして出て來て、都會馴れない、ぎごちない調子で淺野に叮嚀な挨拶をした。

「一體どう云ふんですか。」

おど／＼してゐるやうな母親に、淺野は暫くしてから訊いた。

「實はな、これには色々込入つた深い事情がありますので、何時まで裹み隱してもおけない事だで、事によつたら、いつそお話をして了つたら何うだらうかと、先刻も娘と然う申してゐましたのだ。」

彼女はひどく氣分の混亂したやうな調子で、言出した。

「では幸ひですから、伺つてみませうか。」

「私も田舍で、娘の父が亡つてから、兄が少し失敗をして、身上を減してしまつたもんだから、娘を淺草の方の叔母にそつくり托けておいたもんだで、何をしてゐたか些とも知りましねえのだが、何うやらお屋敷の奉公もして來たやうな樣子ですのだ。それで昨年の夏、私も東京に置いてある娘二人が心配に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なるものだで、娘の妹のお産のおりに、東京へ出て來ましただ。ところが二階に白井さんといふお方がお在になつて、如何云ふ關係で來ておいでなさるだか、娘も言はなければ、妹も包み隱しをしてゐると云ふやうな譯で、私には解りましねえけれど、然うかうしてゐるうちに、然う〳〵は隱し切れる譯のものでもないものだで、實は云々だと云ふ話でな、私にちよつとお目にかゝつてくれと言ひますのだ。私もな、今は兒が馬鹿をしたで、肩身の狹い體になつたけれど、門閥を言ふ日になれば、然う人さまに可恥しいものでもないに、白井さんはどんな豪い方だか知らねえが、言つて見れば親の私から、伺ふて御挨拶をしなければならないと云ふのか、可笑しいとは思つたけれど、白井さんが己の方から頭を下げて行きにくいと仰やると云ふもんだで、逆樣だけれど、私が二階へ行つて、御挨拶を申したのだ。」

淺野は始終おど〳〵したやうな、それで居てどこか腹黒いところのあるやうな、ぐぢ〳〵した彼女の聽取りにくい能辯から、辛うじて其要所〳〵を聽きわけることが出來た。

山國の萎けた土地に育つて來た人に有がちな、始終人の所思に神經をいら〳〵させてゐるやうな、めそ〳〵した調子で、彼女はまた續けた。

「それから私も段々白井さんの御樣子を見ますのに、別に惡い方と言ふでもございましねえが、何うもちと氣象のお荒いやうなところがありますだ。かう申しては濟まないが、お年の割にはな……。」

「何分坊ちやんですから。」淺野は笑ひながら莨をふかしてゐた。

「それに娘もお氣には入らん樣子で、始終喧嘩をしますのだ。まあ大抵の場合は、白井さんにどんな御無理があつても、娘にお詫をさせるやうにして來ましたのだが、どうか是では先が案じられるで、私は

まあお暇を戴いた方がよからうと申して、始終娘にも色々言ひ聽しますのだけれど、やつぱり間のわるい時ばかりもないものだで、つひ／＼私も子に引されて、目を瞑つてゐましたやうな譯なのだ。だが、やつぱり打たれたり、無理を言はれたりしますもんだで、階下へ來てはめそ／＼泣くと云ふやうな譯ですのだ。娘も、お金をかけては詰らないからと云ふので、それはもう成たけお金のかゝらないやうにとしてゐましたけれど、二階と階下とで、世帶が一つだもんだで、お互に面白くないことが出來て、娘と妹と仲違ひをしましたやうなことで、それでは寧そ世帶を別にしたらば如何だらうかと、白井さんにも御相談申して、それで漸く私等は此方へ一戸借受けることになりましたのだ。」

「その費用は白井か持つた譯ですか。」

「それもな、一切娘が白井さんと談合ひでしたことで、私は何にも知りましねえのだ。」

「御家族はお幾人ですか。」

「小い子が一人な。」彼女は低聲で應へて、「私も妹娘の方に乳呑兒があるもんだで、あつちにも用事が多いで、一時は助けに行つてゐましたけれど、それがまた白井さんが、氣を惡くなさると云ふで、まあ愍して來てはをりますけれど、どうせ娘も親御さんたちや衆さんのお許しのないものを、此の先き圓く行くものやら行かないものやら、私もあの方の御氣象では、どうも先が案じられてならねえで、今のうち話をつけて、別れることにした方が、白井さんの爲めにも可いだし、娘のためにも可いと思ひますのだ。それに就いちや、娘も普通の體ぢやござりましねえで……。」

淺野は、はつとした。白井がそんな事を匂はしてゐたやうにも思つた。始末をつけるには、五十圓乃

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

至五百圓と云ふ、彼の父親の言出したその五百圓が、そんな場合を想像しての見込みのやうにも考へられた。

「妊娠ですか。幾月です。」

「それも先頃、妹娘の奉公してゐました榊と云ふお屋敷で御存じの人に診みもらひましたところ、七月とか云ふことで……どんな話にならうと、娘も身二つになれば、それ相當の身の振方もつけねばならねえで、産れた子供は是非引取つてお貰ひ申したいもんで……まあ疵をつけられたと申しちや濟まねいことんだけれど、私も田舍は田舍で兄が手ぬかりで、先刻もお話し申したやうな譯で、まごついてゐるところへ、私が行届かねえばかりに、娘が我儘でこんな事を仕出來してくれたで、如何していゝだか、思案に餘つてをりますので、親類へも顔向きもならねえ始末ですのだ。」

「お話は解りました。」

淺野は娓々した彼女の話が、段落を告げたとき口を利いた。

「そんなことは些とも知りませんでした。それならば其のやうに、私が責任を負つてお話をつけませう。」

「どうぞ一つな、白井さんも親御に取つては大切なお子さんだで、如何あつても面倒を見て下さいと申すではないで……」と、彼女は奥の方へ聲をかけて、娘を呼んだ。

娘は涙に濡れたやうな顔をして出て來たが、口の利き方は、やつぱり硬かつた。そして表情のない様子をして、「白井さんにお目にかゝれば、何もかもわかる事です。たとひ親が不承知でも、その時は己は

如何しても東京で、自分の腕でやるから、決して見棄てるやうなことはしないと、彼方からも何本となく手紙がまゐつてをります。」

「でも此處はな、どうしてもお前が諦めをつけないと白井さんのお爲めにもならないで……」と、母親はぽろ〳〵涙を出した。そして淺野の方へ、

「私もこれを宥めるのに、大抵骨がおれることぢやござりましねえ。氣が變なものになつてゐるで、何か言へばもう逆上せあがつて、手がつけられましねえやうな譯だ。それに脊孕みだとか申してな、お産が大層重いやうなお話だで、若しや間違ひでもあつてはと、それも氣遣ひだし、私も兄のことで、散々苦勞してるところへ、またこんな事が持ちあがつて、何といふ不仕合せのことだらうかと、戴くものも喉へ通らねえくらゐですのだ。」

「とにかく一應親元へ通知しまして、お話はつけませう。御事情は十分お察ししますから、惡いやうにはしません。」

「は、どうぞ一つな……。」

「ところで荷物を一つお渡し願ひたいものです。白井の方からも然う言つて來たのですから」

母親は筋肉の硬張つたやうな表情を見せた。

「荷物と申したところで、白井さんがお歸りのとき、あらましお持ちになつたもんだが、是と云つて金目のものもござりましねえで。それも別れるやうな事があれば、そつくりくれると娘に言つておいでだつたと云ふで。の、お母さんは何にも知らねえこんだで、お前がお約束したことは、わかるやうにお話

し申して……。」

「それはお手紙にも、どんな事があつても、お前に心配かけるやうな事はないから……」と、女は涙を呑んで、聲を曇らせた。

「荷物も萬一のときは、お前にくれると言つたのです。」

淺野は何だか、自分ばかりを主張してゐられなくなつた。そして、それは話がついてからといふ事にして、そこから出た。

家へ歸ると、茶の間では妻と白井とで、今し方、昨日白井が下町で註文した、國への贈りもの丶下駄がついたと云つて、その荷造りをしてゐる處であつた。二箱ばかり、もう油紙に包まれた分を、白井は照れかくしに、何か景氣の好いやうな調子で、妻と笑談を言ひ交しながら名宛を書いてゐた。

「妊娠だと云ふぢやないか。」

白井が漸とのことで、側へ寄つて來たところで、淺野は言出した。「どうもお忙しいところを濟みませんん。」白井はさう言つて、胡散くさい目を、眼鏡の奥にぽつかりさせてゐた。

「そんな事を言つてゐましたけれど、何だか解らない。」白井は、どきまぎしたやうな氣分をわざと惚けて言つた。

「だつて、もう大きいよ。」

「まあ、然うですか。」淺野の妻が惘れたやうな顔をして、言つた。「下駄どころぢやないぢやありませんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「だつて、然云ふ筈はないんだがな。」

「一目見ればわかる。顔も水々してゐる。それにそんな事まで嘘をつくやうな女ぢやない。しかし覺えはないのかね。」

「それあ無いこともないです。」

「とにかく些と面倒だぜ。」淺野は嘆息するやうに、「坊ちやんにも困つちまふな。」

「それ程僕も、迂濶ぢやありませんよ。だから荷物の好いものは引揚げたんです。」白井は分疏のやうに言つた。

「親父は、寐ざめのわるくないやうに、百と云つたら百五十、二百といつたら三百、五百までは出してもいゝ、それ以上だつたら、ちよつと知せろと言ふんです。」

「まさか、そんなにも要るまいが……。」

三人は額を鳩めて、ひそ〳〵話しはじめた。淺野はくど〳〵愚痴をならべる母親の聲や、娘の泣顔が、耳や目に絡はりついてゐるやうな、重苦しさを感じた。結婚などを否決してゐた白井の態度も、鼻息の荒い彼の性格から來る一種の反語だと思はれた。

「何の彼のと言つても、もう親父になつたのだから爲方がない。」淺野はさう言つて、まだ乳の氣のとれないやうな白井の顏を、不思議さうに眺めた。

「ヘツ」と、白井は首を反して、ぎゆつと口元の筋肉を歪めたが、父親と云ふ實感は、少しも起らねらしかつた。

「それに、その子は白井の血統であつてみれば、その處分については、己も御父さんと一應相談しなければならない。」

「さうですね」と白井は、首を垂れたが、「親父もどうせ貰ふんだから、小父さんのお考へで一緒になるなら、また其の話にしやうと言つてゐるんです。」

「餘り感服しないね。あれでは君の御母さんが、嫁だと云つて連れてあるくのに、少し困るだらうと思ふ。第一ちつとも情趣がないぢやないか。」

「僕の審美眼も怪しくなつて來ましたな。」白井は頭をかきながら、「それでなくとも、周圍があれぢやね。だから一緒になるなら、親と緣を切れとまで言つたんです。するとお袋が怒つてね……。」

「しかしまあ可いさ。餘り明るすぎるのも不幸さ。」

「もつとブリリアントな奴が世のなかに澤山ありますよ。」白井は空想じみた目つきをして、今荷造りをした中の草履の屆け先きになる或金滿家の若夫婦の友だちの身の上を話しだした。堅い商業の方と、投機の方と、財產を二つにわけて、素破らしく大きくやつてゐると云ふその友人の家に、白井は上京前の二三日を逗留してゐた。

「親父は、藝者買ひの尻拭ひなら、金はそんなに惜しくないと言ふんですけれど、然うなればそれで苦情が出るんですからね。大體もつと親父は金をくれても可いんですよ。道樂をするくらゐなら、餘り吝なこともできませんからね。」白井はやゝ興奮したやうに、乘地になつて言つた。

「己なんかは……」と、淺野は慘であつた自分の青年時代を憶出したやうに、何か言出さうとしたが、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氣が乘らなかつたので、口を噤んでしまつた。

二度目に淺野が迎へを受けて、女の家を訪ねた時には、蘆川が五年ぶりで、もう彼の書齋に姿を見せてゐた。

蘆川の來たとき、淺野は奥の四疊半で、箪笥に凭れ頭を凭せかけながら、安火に當つて何やら讀みかけたまゝ、うと〳〵して居た。淺野は妻と彼との話聲を耳にしながら、暫く起きかねてゐたが、やがて安火から出て行つた。

蘆川は、淺野が今の妻と一緒になるとき、ちやうど現在の白井と其の女との關係と、同じやうな事情の下にあつた二人を、結びつける友誼的役目を勤めたやうなものであつた。

淺野と彼女との秘密の關係を聽知つた蘆川は、その時淺野を勸告して、もうその頃赤子を膝に載せてゐた彼女から、友人を自由にならせやうとしてゐた。淺野はそれに何の異存もなかつた。蘆川が訪ねて行つたとき、彼女は自分の成行を知つてゐた。

「恁うなると何だか私にも判斷がつかなくなつて來る。もう一度考へさせて下さい。」

、そんな世間的の交渉事に特異な才をもつてゐる蘆川は、その時自分にも涙が入染出て、腕を拱きながら、自分の主張を撤回しやうかと思惑つた。膝に載せた赤子の顏に、彼女の涙がほろ〳〵と零れてゐた。

「どうだ君一緒になつちや。」蘆川は女から遠退いてゐる淺野をその下宿に訪ねて、いつにないしんみりした調子で言つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「己も思案に餘つて、母に訊いてみたんだよ。すると母も一緒になつた方が可からうと言ふんだ。」

それで淺野たちは、漸と同棲することに決つた。それから十五年の月日が流れた。淺野の子供は、もう中學へ入つてゐる。淺野は時々、盧川の一言で然うなつた二人の、反對の運命を考へてみることがあつた。そしてそれは主に最愛の子供の前途に就いてゞあつた。今の苦しみよりその場合の惱の方が、どんなに重苦しく彼の生涯に附絡はつたか知れないと思はれた。

「今度君母が亡つたんだよ。」盧川は挨拶がすむと、以前の通りの調子で言出した。

東京にゐた時は、善く神經衰弱や胃腸病に惱まされてゐた盧川は、長い山國の生活で、何處となく體に膨みが出來てゐた。皮膚の色も、高原地の風で、多少濁つたやうな赭黝さを帶びてゐた。そして昔しながらに綺麗に襟を重ねて、折目の正しいセルの袴をはいてゐた。

「多分そんな事ぢやないかと思つてゐたんだよ。」淺野は驚きもしなかつたが、妻は「まあ」といつてお弔みを述べた。

「ぢや死目にお逢ひなさらないで。」

「電報は危篤といふのでしたが、無論間に合ふまいと思つてゐたところ、それでもまだ目を落さないうちに着きましてね。しかし解りませんでした。たゞ此方の氣持だけのものでね。」

「お幾歳でした。」

「今年八十ですよ。」

「まあ、それぢやお年に御不足はございませんけれど……。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何だか、風邪をひいたやうだと言つて、暫らく寢てゐたさうですがね。これと言つて別に病氣もないのです。謂はゞ自然の死です。御存じのとほり耳が少し遠いだけで、目も丈夫でしてね、歯などは、以前家内が醫者へつれて行つた時など、醫者が歯を見て驚いてゐたさうです。此の方は百まで請合ふなんてね。」

「近頃はしかし寂しかつたらう。」

「爲方がないさ」と、蘆川は嘆息するやうに言つた。「まあ可いつてことにしておいてくれ給へ。」

封建時代から觀て來たと云ふ、その老母や姉によつて、始終某ちやん〳〵と、幼名を呼ばれて寵愛されて來た蘆川の頭にも、五年見ないあひだ白髮が目に立つて、脊なども、眞丸く屈んでゐた彼の老母を思はせるほどに、心持ち眞直を缺いて來たやうにさへ思へた。淺野や彼の妻自身にも、同じやうな變遷が拒まれなかつた生活の層が、時と共に推移つて行つた。

「如何だい、僕は變らないだらう。」

蘆川は空虚な調子で言つた。

「變らんね。」淺野は互に相憫むやうな目を側めて應へた。

「いゝえ……」と、淺野の妻は、首を反して言はうとしたが、急に話を紛らせた。

「奥さんはお變んなすつたでせうね。」

「彼奴はもう……それに近頃胃潰瘍なんかやりましてね。それが丁度お産後でしたから、隨分弱りましたよ。偶然としたら、死にはしないかと思つてね、子供を三人まで遺して死なれた日には事だから、さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すが暢氣な僕も考へたよ。僕の家內と來た日には、餘まり物事に執着がなさ過ぎて、てんで養生なんかしやしないのだもの。」

山國の町の生活が話されたり、東京に於ける連中の消息が噂されたりした。そのなかには土に入つてしまつた者も、可也多かつた。行方の知れなくなつた人も二三人あつた。

「Mは如何してるね。」などゝ、蘆川は二人とも一番親しくしてゐた一人の友達を思出して、懷かしさうに訊いた。

「しばらく逢はないね」淺野は時としては自分の家族の一人のやうにしてゐたMが、女房子を持つてから、何時とはなし疎々しくなつて行つた二人の生活を思出しながら、應へた。

長いあひだ友達に渴いてゐたやうな蘆川には、それが又一つの不思議であつたりした。彼は都會に於ける人々の生活の慌忙しさをも、忘れてゐるらしかつた。

やがて次ぎ〱に歸つて來る、淺野の子供たちの大きくなつた姿容が、山に行く前に始終見てゐた彼等の面影を憶出させた。

「全部で一體幾人なんだい。」などゝ、蘆川は交る〱見えたり隱れたりする多勢の子供を眺めて、驚異の目を睜つた。

そして二人が、猪口を取りあげながら、晩の飲食ひをすました時分に、白井の女の妹が、淺野を呼びに來たのであつた。

「三芳さんにも來て頂くことになつてをりますし、叔母も參つてをりますから……。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妹はさう言つて、姉とはまるで違つた、しをれのある聲で言つてゐた。淺野はふと玄關へ出て見た。妹は昨日、彼が通りを歩いてゐるとき、勸工場の横で、ふと何氣なしに彼が目を惹かれた其の女であつた。彼女はその時も、派手な銘織の袢纏で赤子を負つてゐた。頭髮は女優のやうに眞中で分けて、流行の肩掛などをかけ、目鼻立もぱらりとしてゐて、どこか男の心を惹着ける愛嬌をもつてゐた。面影が、白井の女と肖てゐながら、様子ががらりと變つてゐた。

「ひよつとすると三田の學生の細君になつてゐると云ふ妹の方かもしれない。」

淺野はさう思つて、その時一度振返つて見た。その女が今彼の薄暗い玄關先に立つてゐるのであつた。

白井もその時來合せて、蘆川と一緒に猪口を持つてゐた。

「あの女なら、己は昨日見た。」淺野は女が歸つてから言つた。

「あれだつたら、關係した男はちよつと離れにくくなるだらうよ。」

「だから大學生の競爭者があつたんです。」白井が言つた。

「ちよつと、本人が表へ來て待つてゐましたよ。」淺野の妻が、部屋へ駈込むやうにして言つた。

「白井さん、うつかり外へ出られませんよ。きつと様子を見に來たんです。」

「昨日も、確かに見張をしてゐたのだ。」淺野が言つた。

「險呑だぜ、え、君。」蘆川が面白さうに笑つた。

「眞實に危いですよ。白井さんのやうに暢氣に構へて、うろ／＼してゐた日には、何處で掴まらないと

も限りませんわ。」

「ヘッ」と、白井は剽輕に應へたが、それが反つて興味のある光景を、彼に想像させるらしかつた。

「ぢや、此邊なんか危險區域ですね。何處かへ行きませうか。」

淺野が行つた時、三芳がもう來てゐた。赤々とした電氣の下に、軀の頭抜けて大きい、男々した叔母も坐つてゐた。

青年にしては、ま　で隱遁者のやうに見える三芳は、落着いた、素直な調子で彼等に應對してゐた。京都育ちの彼は、會社で圖案などの仕事に働いてゐた。

「別段貴方がたをお疑ひするといふ譯ぢやありませんけれど、此間お願ひしておいた産婆の診斷書のやうなものは、如何なつたでせうか。」三芳はさう言つて、女たちを詰つてゐた。白井の手紙を取返したいやうな希望をも、述べてゐた。

母親は、それに分明した返答を與へなかつた。そして毎時のやうなぐち〳〵した調子で、拒むとも、分疏ともつかぬやうな、自分の勝手を並べてゐた。

「けれど、この話は私からお願ひしたことぢやないので、貴方がたから私にお頼みになつたのぢやないですか。」三芳はさう言つて、自分の有利な立場を主張した。

淺野はそれには喙を挾まなかつた。眞中にすゑた火鉢に、鐵瓶の湯の沸る音が、靜かに聞えてゐた。

「それではお金で、片をつけて頂くことにしまして、皆さんの思召はどのくらゐのものでせう。」

大分たつてから、叔母が少し焦り氣味になつて言出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それは貴方の方で、切出して頂きたいと思ふのです。お話ができるか如何かは、それを伺つた上でないと……。」淺野は應へた。

「それに就いては、昨日から色々相談もしてありましたのだが、まあ成るたけお金のかゝらないことにしましても、何分お產のことだから、間借りと云ふのも不自由なものだし、此まゝ此の家にゐて、私が附いてをりますれば、それ相應に入費もかゝる。お產が重いやうなことも申してをりますで、病院へでも入るやうになれば、莫大の費用も入ります。お產がすめば、それで可いと云ふものでもないで、まあ一月や二月はな。何にしろ娘も行末長くお世話になる意でゐたで、その邊も御參酌下すつて……慾にかゝると思召すのも本意でないで、決して法外なことを申さうと云ふのぢやござりませんが、どう積りましても、こゝで少し纏まつた金が入るで、それを能くお願ひして、身の振方のつくやうにしたら可からうと申しますのだが、昨夜も娘が白井さんに欺されたと言つて、一晩泣いてゐるもんだで、私の言ふことなどは耳へも入らないやうな始末でしたのだ。」母親がまたくど／＼しく辯じたてた。

「けれど白井の親たちの方から言へば、子息が酷いものに引かゝつたやうに考へるのは當然ですからな。」淺野が應へた。

「欺すの何のつて、私はそんな女ぢやございません。」叔母の陰に坐つてゐた女が、泣きながら腹立しげに言出した。「田舍へ聞いて頂いても解ります。私たちは決して、人樣を瞞すやうなそんな橫着なものではございません。」

「貴女や白井は、お互にその意でなくても、親たちから見れば、東京と云ふところは可怕いところだく

らゐは考へるでせう。」と淺野は興奮した女を、宥めるやうに言つたが、女の神經は一層亢進するだけであつた。そして、座に居堪らないやうに、奧へ引込んでしまつた。

「とにかくあの娘も一生の疵物ですから、一つ其點をお考へ下すつて、如何でございませう、片手くらゐのところで……。」

暫くしてから叔母が切出した。そして不安な目色をして二人の顏を眺めた。

「五百ですね。」淺野はさう言つたきり、暫らく默つてゐた。

「まあ其位ならばと思ひますが、そこは又貴方がたの思召もございませうから。」叔母は大分たつてから附加へた。

「これが獨立の人間なら、十分手切も出せませうが、何分先は親係りの坊つちやんですからな。高い安いの問題よりか、出せる出せないの問題なのです。それに白井も、今度は非常な窮境に立たせられるだらうと思ひますから。」淺野はさう言つたきりで、交渉を打切らうとした。

「何分私どもの考とは餘程距離がありますから、ちよつと私の一存にも行きませんので……。」

「然やうですか」と、叔母はしら〳〵した顏で、淺野を眺めてゐた。

淺野は三芳と一緒に、直にそこを出てしまつた。

「少し無法だね。」淺野は暗いその露次から、町へ出てから、言つた。「あれぢや反つて同情を失つてしまふ。我々は最初から好意をもつて、先方を理解しやうとしてゐるんだ。然し白井も深入りし過ぎてゐる。もつと睃りしてるかと思つたら、坊ちやんは坊ちやんだね。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「臼井の坊ちやんも久しいもんですが、今度はちと藥が利きすぎたやうです。」

この問題の交渉を、自分に引受けやうと言出した蘆川が、女の方へ出向いて行つたのは、それから自分の用達しなどに歩いて、二三日經つた或日の午後であつた。

「何だ、女の話か。それなら僕が行つて話をつけやうぢやないか。」

絶えず話の出てゐるその問題に、時々退屈な耳を引立てゝゐた彼は、ある午前、淺野と湯上あがりに寄つて、久振りで味はつた不味い洋食や一盞の洋酒に、暢びりした心持になつて、三四日居眠んだ部屋へ歸つて來たとき、言出した。

「東京はやつぱり好いね。」蘆川は湯から出ると、道路の變つた町の樣や、往來の人たちの姿などを眺めながら、しみ〴〵言つた。

「己も何だか歸りたくなくなつたよ。」彼は魚が水に復つたやうな、都會生活の懷しさを心から深く感じたやうに、さうも言つた。

「然うかしら。己はまた去年久し振りで歸つて見た田舍の方が懷かしい。」

「君何か食はうぢやないか。」蘆川が言出した。そして二人は近所の洋食屋へ入つて行つたのであつた。

「近頃カフエとかバアとか云ふものが、方々にあるつていふぢやないか。」蘆川は思出したやうに言つたりした。

時分時の洋食屋には、學生たちが一杯入つて、飲食ひをしてゐた。それは凄じい光景であつた。若い

生活力に充満ちたやうな、其等の人たちの話や様子を見てゐると、長い間の生活に疲れたやうな自分たちの姿を、目先きに突つけられるやうな痛さを感じないでは居られなかつた。

「そんな事は何でもないよ。己もぶら／＼してゐるんだし、君も忙しいんだから、早く片をつけてしまひ給へ。二百五十圓なら話はつくよ。」

蘆川は昨日下谷で買つて來た、色々な形の繪筆を包みのなかゝら出して眺めながら言つた。

「筆も君、高くなつたね。これで十圓さ。」と、彼は景物にくれた一本を、淺野の前へ出して、「これは字筆だらう。進呈しやう。」

「己も家から手紙も來てゐるし、此の二月が仕切りだと云ふのに、何もかも放擲やつて飛出して來たんだから、然う／＼は東京に引かゝつてもゐられないんだよ。」

彼は年二度の支拂ひになつてゐる、その山國の取引狀態や、自分の生活の立場などを話した。町へ歸れば、そこには又五年のあひだに根を張つて來た、彼の生活が待つてゐるのであつた。

淺野の妻は、今朝三越から屆いた白井の羽織地を出して、着丈などの詮議をしてゐた。白井も傍にゐて、行李のなかゝら引出して來た茶色のお召の羽織などを着て、それの着丈を見てもらつてゐた。白井にはじみすぎる其羽織から、派手な裏たけを取つて一枚新調しやうとして、昨日淺野を引張出して、反物を買つて來たのであつた。白井の懷ろには、大阪を立つとき家から持つて來た七八十の金と、使ひのこしの三越の切手などが、更紗の紙入に入つてゐた。

「まだ六七十圓ありますから。」白井は時々、そこらに投出しておく、その懷中を覗きながら、にこ／＼

してゐた。彼はそれを何かに使ふまでは頭が落着かないやうであつたが、一錢も無駄には使ふまいと用心してゐた。

三越の歸りに、淺野は近所で手輕な飯を食べて、それから新富座の「石切」を一幕覗いてみた。雁次郎の「石切」が、腹立しいほど巫山戲たものであつた。

「紙治も見るがものはない。」彼はそれで或責任を果したやうな氣がして、雁次郎がさも名優らしく駄々威張をしてゐるのを疎ましく思つた。

彼はこの事件を頭へ入れてから、何時とはなし氣分の興奮させられてゐるのに氣がついた。

淺野の妻は、大島の襲着などをして、めかして嬉しさうに出て行く白井の姿を眺めて、「貴方は暢氣だけれど、先ぢや大變ですよ。」など〻揶揄つてゐたが、やつぱり羽織の仕立などに氣を褫られてゐた。

蘆川は、ちやうど自分自身の商用か何かの傍ら、白井に逢つて來たもの〻やうな風をして、大阪から今汽車で着いたばかりだと云ふ觸込みで、女の家へ訪ねて行つた。

「袴を脫つて行かう。辯護士か何かのやうに思はれちや、話がしにくい。」彼はさう言つて、ふらりと出かけた。

退屈な晷が三時間ほどたつと、彼が歸つて來た。

「どうもね、母子して泣かれるんで遣切れないよ。」

蘆川はさう言つて、長い愚痴話に聞疲れた體を、火鉢の傍へ來て坐つた。

「どうせ一度ぢや話はつかんよ。それに淺草の叔母と云ふのが居ないから。まあ氣を永くして辛抱して

聞いてるのさ。女は愚痴つぽいからね」と、彼は白井の顏を眺めて、「君もなか／＼巧いことを言つてやつてゐるんだもの」と、皮肉らしく微笑した。

「まあ產むまでの手當を百、體の振方をつけるのに……つまり手斷れだな、それが百圓、若し子供を取れば、其上に五十圓、その代り子供を此方へ取れば、五十圓はやらずと濟むんだ。大概それで決まるつもりだ。」

「その位はね……。」淺野の妻が言つた。

「その位でいゝですか。」白井も言つた。「その位ですめば安いもんですね。ね、小父さん先が慾にかゝつて來たから可かつたんですね。」

「慾にかゝるつて譯でもないよ。」淺野は喙をいれた。「知らないよつて、放擲つてしまへば其れぎりだけれど、然うすれば後の祟りが可怕いからね。」

「ですけれど」と、白井は絡はつて來るやうな氣分で、「私があの時書附なんか入れてゐたら大變でしたね。」

「まあ可いつてことにして置きたまへ。」

その晩、白井の家の方への手紙を書いてゐる淺野の机の横に、白井もいら／＼したやうな表情で座つてゐた。今度の事件を、どうかすると皮肉な一面を見せることのある淺野が、どう云ふ風に報告するかが不安であつた。

「少し餘計に言つてやつて頂けませんかね。」白井は大分經つてから言つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何かい、上前をはつらうと云ふのかい。」

「いや、然云ふ譯ぢやないんで……。」

「そんな不徳義なことは可かんよ。一文でも君の要求には應じる譯に行かんよ。」淺野は極つけるやうに言つた。

「上前をはつるは可かつたね。」蘆川が傍から噴笑してしまつた。

その晩は話に夜が更けて、淺野と蘆川が、疲れた體を寢床に横へたのは、大分遲かつた。

「君、何か面白い話でもしたまへな。」

暫く寢つかれずにゐる蘆川が、寢返りを打ちながら言出した。

「面白い話もないね。」淺野がつまらなさうに應へた。

「君、不思議な事があるものだね。」大分たつてから、蘆川が言出した。

「己は前後二回の火事で、家財を不殘燒いてしまつたんだが、最近の火事のとき母や姉の立退いた家へ、あの家の持主の花村と云ふ肉屋の叔父が見舞ひに來てね、ふつと其處らへ散らかつてゐる過去帳を何心なく見てゐたものさ。すると其中の、蘆川一枝と云ふ己の親父の名を見て、そのお爺いさんが酷く驚いて、貴方がたが蘆川一枝さんの御遺族とは、不思議な御緣だと言つて、親父のことを話したさうだがね。そのお爺さんと云ふのは、以前品川の顏利きで、その時分遊廓の取拂か何かの問題が持ちあがつたとき、政府部内で盡力してくれたのが、己の親父なんだとさ。親父は素と旗本で、伏見の戰爭には脫走組の方だが、元老院議官をしてゐた頃の事と見えるんだ。それであの社會では、それを德として、毎

年岩倉公を筆頭に……何でも父が六人のなかの五人目かで、名前を書いた軸を取出して、供物をしてお禮詣りをすると云ふんだ。」

蘆川はさう言つて、彼が幼少のをり死つた其の父親が在世のをり住つてゐた駿河臺の屋敷が、今病院になつてゐる事などを話した。淺野は長い彼との交際の間、彼の口から一度も其事を聞いたことがなかつた。世に下らないやうな、何處か高い氣位の、彼に失せない理由が、そこに在るのだとも思へた。彼はそのために、何のくらゐ損をしてゐるか知れなかつた。

「狩野の彩色法なども、十分腹に入つてゐるものは、今日はいくらも居ないよ。口幅つたいことを言ふやうだけれど、その方で行けば、己も自信があるんだよ。」

蘆川は話したことのない自分の生育ちと、畫家としての傳統などを話してから、さうも言つた。

美術界の噂さや、彼が新たに歩み出すべき道や、そんな話がいつまでも續いた。

するうち蘆川が先づ、うと／＼を眠に陷ちかけた。時雨のやうな雨が、袖垣の葉蘭や廂に輕く音づれて來た。

中二日ほど置いて、叔母が來たからといつて、迎へに來た例の妹を還して、話を取決めるべく出向いて行つた蘆川が、四時間の餘もかゝつて、契約書の下書まで作成して歸つてから、淺野のために惱ましい日が、また二日ほど過ぎた。

銀行爲替で來る筈になつてゐる金の代りに、その朝二回目の白井の父からのと、母親から白井へ宛て

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのと、二つの手紙が屆いた。「病氣、金明日送る」と云ふ電報が、それと前後して着いた。
その朝も、白井は晝近くに、やつと眼れぼつたいやうな目をして、下宿から起きて來た。
「どうも荷物が來ないので、不自由で可けない。夜具を早くくれないと、遣切れない。」
白井は今し方客に出したばかりの唐饅頭を、むしやり、むしやりと食べながら、まだ筋肉の硬張つてゐるやうな顏をして、言つた。
手紙が來たとき、淺野と蘆川とは、待遠しい時間を消すために、安火に當つて雜談に耽つてゐた。淺野はこの二三日、何となく神經がいら〳〵してゐた。この數年來、漸といくらか寬いだやうな氣持で、周圍が見られるやうになつた彼の心に、厭なとげ〳〵しさが、また苛だつて來るのを感じた。どんな事でも、はい、はいと言つて、彼に反抗の色を見せない白井の氣分の絡はりに、淺野のいぢけたやうな弱々しい我が、時々蠢めいて居た。
淺野は白井が讀んでゐる母親の手紙に、ふと目を觸れたときに、自分がこゝまで進めて來たことが、全然自分の出しや張りであつたとしか思へないやうな、疎ましさを感じた。「やつぱり御母さんたちは、不服なんだらうね。」淺野はさう言つて、むつくり起あがつた。
家を出るとき、母親に痰火を切つて來た白井の態度に、すつかり失望され、怒らされてしまつたやう母親の手紙には、瀆らはしい子供を引取つた上に、金を出すことの愚かさだの、暫くでも仇のやうな女の母親を養つた情なさだのが、長いあひだ總てを一人の子供に捧げて、一心に家を守つて居たやうな、堅氣の女らしい風情が、一杯に溢れてゐた。――自分の夜具にも寢られぬやうな身になつて、少しは目

がさめましたか。あんたのやうな悧巧な人は譯のわからぬ親の言ふことなど耳にも入るまいけれど、御父さんがお氣毒だとは思ひませぬか。――そんなやうな言が、讀んでゐても涙の入染むほど細々と書いてあつた。

「いや、怒つたの何のつて。」白井は目を曇らせながら、わざと跳上るやうに言つた。「お袋は來るとき、喧嘩をしたのが酷く癪に障はつたんです。それでなくとも、年々子供から離れられて行くやうな氣がしてゐるんです。」

「その執着が、どのくらゐ强いか知れやしない。」淺野も胸を壓さるゝやうに言つた。「しかし然う言はれて見れば、己も自分の責任を感じない譯に行かない。」

「でも、親父は可いつて言ふんですから。」

「しかし裏面に、そんな氣分があつては、僕も何だか氣が進まない。」

夕方蘆川に誘はれて、二人廣小路で飮食ひをして來てから、淺野は一層我儘な自分の立場を頑固に主張した。それが自分を潔ふする最善の方針だと考へた。

「おや爲方がありません。私はこれから行つて女と一緒になります。」

長い押問答の後、蒼白い顔を戰かせて、白井が起上つた。涙が目に煌めいてゐた。それ迄に彼は昂ぶる感情をどのくらゐ壓しつけてゐたか知れないと思はれた。

「母親が一緒にさせやしないよ。」淺野は終に白井を窘しめたことが、愧ぢられて來た。

翌日爲替がついてから、銀行から受取つて來た金を、白井から受取つて、蘆川が出て行つてから、二

時間ばかり經つと、荷物を運ぶために、一緒につれて行つた運送屋の若い衆が、彼の手紙をもつて、歸つて來た。荷物受取について、交渉困難、ちよつとお出でを待つと云ふ意味が、それに認められてあつた。彼の困窘の狀が、その文句にも想像された。

緊張しきつたやうな氣分で、淺野が入つて行つたとき、可恐しい闖入者をでも迎へたやうに、今まで座敷にゐた母親の、急に引込んで行く姿などが、彼の目に入つた。

「荷物は白井君に貰つたといふのだがね。」盈川は、白井から受取つて行つた品目の書附を眺めながら言つた。

「だから話をつけたのだからね。それに今來た手紙によると、白井も是迄に大分費つてゐる。金も出し、子供も取つて、荷物を押へると云ふ法はない。」淺野は聲を、少し高くして言つた。

茶の室で、ひそ〳〵話をしてゐた母親が、充血したやうな目をして、入つて來ると、顏もあげないで、くど〳〵と哀願的な言を並べた。

「娘も返すくらゐなら、一層机も本も庇物にして返すと云つて、取ついて泣いてをりますやうな譯で、本や何かは頂いても何だから、夜具や蒲團のやうな物は、切めて片身に頂きたいと申してをりますのだ。昨夜も、一晩心細がつて泣いてをりますやうな始末で、私ももうそんなに聞分がないなら、此先き如何ならうと、一人で勝手にするが可いと申しますのだ。」

そして言が行詰つたときに、彼女は娘を呼んだ。

「お前も善うく考へて、一生の浮沈みになることだで、お願ひするところは、能うくお願ひするが可い

た。」

女はむくれ上つたやうな頬から口元の筋肉に、遣瀬ない悲痛を押怺えてゐるやうに、目からぽろ〳〵涙を出した。

「一目白井さんにお目にかゝれば、解ることです。其中の支那鞄も、簞笥を買つてやりたいけれど、當分代りに使つてをれと言ふと……中には中學校時代の單衣物が少し有るきりなのです。硯函も、赤いから女の物だと言ふて私にやると言つたんです。セルの單衣物も、仕立直して着いと言ふてをつた物です。」

女はその中の數品の一々について、涙ながらに說明した。

「お二人さまを親とも思つつて、お縋り申すのですから、この處はどうぞ助けると思召して……。」女は歔欷くやうな聲を立てゝ、途斷れ〳〵に頭へながら哀願した。

「この書附に詳しくお書きになつたのを見ると、座蒲團一つでも取りあげてしまはうと云ふ、それでは餘り薄情だと言つて、これが口惜しがつてをりますのだが……。」

陰氣な、じめ〳〵した室內の空氣が、次第に淺野の心を、深い哀さに引入れて行つた。そして蘆川との協議のうへで、白井が讀み書きをするに必要なものや、紫檀の煙盆や、掛軸や、花瓶のやうなものゝ外、一切を殘して行くことに決めた。

二人は荷物を、取出すのに忙しかつた。

「どうしたんです。たつた其れだけですか。」

歸つて來たとき、白井と一緒に車の側に立つてゐた淺野の妻が、不思議さうに目を睜つた。

「夜見たつて貴方、五六十圓のものですよ。單衣物だつて、木綿とは言ひ上、皆な金目のものが二十枚もあるのですわ。」

「それに毛布もあるんです。蚊帳だつて、本麻の上等のです。」白井も喙を容れた。

「座蒲團だつて、絹のが三枚、メリンスが三枚、衣桁もあれば、お茶道具だつてね。」

「や、ひどい〳〵。散々だ。」荷物を調べてゐる白井が叫んだ。「何も彼も取りやがつた。それも可いですが、本がない。字書だの、演劇史だの、××さんから貰つた本だの、金になりさうなものは、皆な拔きやがつた。軸も二本ばかり取りやがつた。」

「ようく調べてごらんなさいよ。」淺野の妻は蒼くなつて情なさうに、「夜具や何か、御母さんが可愛い一心で縫つて下すつたのにね……女は何よりそれが惜しうございますからね。」

「酷い奴だな。」淺野の心に、泣いて哀願した彼等の卑しさや、今日になつて、荷物を不殘片着けて、お盆一枚でも菓子器一つでも、好い方は出しても見せなかつた狡猾さが、憎られて來た。

「ざつと百圓はありますね。なか〳〵食へない人たちですよ。」淺野の妻は、月に涙をためて口惜しがつた。

「して見ると、娘を出して泣かすのが、彼奴等の手なのだね。非人か乞食のやうな、賤しい奴等だ。あんな賤民を劬はらうとした、己たちが愚なのだ。」淺野は唾棄するやうに言つた。

「だつて、餘り人情を知らな過ぎるぢやありませんか。いくら何でも、座蒲團の一枚くらゐは寄越しさうなものぢやあらませんか。」

「よし、明日行つて思ふ存分取つちめてやらう。君も來てくれたまへ。」淺野が、蘆川に言つた。
「行くとも。」蘆川も、裏切られた不快さを壓しつけるやうにして言つた。「二百圓に負けさせられた腹癒せもあるのさ。お終に此方がペテンに罹つた譯さ。」
「とにかく一杯飲まう。」
暫くすると、三人の前に酒や食物が、運び出された。
傍で、女の子が琴のお浚へを初めたりした。
「しかし考へてみると、彼等も然うでもしなければ、生きて行く瀬はないんだ。」淺野はやゝ興奮の去つた顔に、酒の醉を見せながら言つた。
「好い手蔓を遁した、口惜しまぎれに違つたんですか。いえ小父さん、百圓札を二枚突きつけたのは、些と痛快ですね。」
「何處でゝも割れますよ、どんな大きなお札だつて。」淺野の妻が、白井の無邪氣さを笑ふやうに言つた。
「それより貴方、これからまたお産の入費や、産婆のお禮、子供を餘所へくれるにしたつて、それ相當のことはしなくちやなりません。これが又百圓……では如何ですかね。」
「然うですね。それを持つて遊べば可かつた、惜しい〱。」
「彼等は、彼處でまた店を擴げる支度に取りかゝるんだね。」淺野が云つた。
「第二の白井が、引かゝるんだ。」蘆川が笑出した。
「それにしても、三田の書生と云ふのは、氣毒なものだね。」

「あれも長くは續かんでせう。女の方が、滿足しちや居ません。」
「いゝえね、今聞いたら、懸云ふことは人情で來るのが一等厄介だと言ひますよ。」茶の間へ來てゐる誰かと話してゐた妻が、その時座敷へ入つて來て言つた。「泣きといふ手もあるんですつて。」
蔭で一々母親に敎はつたやうな、女の文句が淺野にてつきり思當つた。
「それにね、彼奴は年を四つも胡魔化してゐたんです。」
子供の琴の音が、冴えだして來た。淺野の妻は、嬉しさうに、捷こく動く其の手頭に見惚れてゐた。
「これなども、娘を飾つて、今に好い鳥を引つかけやうとしてゐるんです。」淺野は嘆息するやうに言つた。
「金のある奴は、また華族でも釣らうと焦心つてゐるしね。男も女も然うさ。」
暫らくすると、蘆川の注意で、白井が品目の詳しい內容を、卷紙へ二尺ばかり書きつけた。惜しいものが、夫から夫へと、彼の記憶に浮んで來た。（をはり）



葛城太夫

近松秋江

一

しと／＼といつまでも降りつゞいてゐた春雨がやんで薄墨色の雲が散らけてゆくと眞蒼に洗ひ出された空から瑠璃のやうに艶やかな日の光が嫩い芽の萠えでた前栽の木々を蒸すやうに照らして黑く濡れた土地から湯氣のやうないきれが濃く立ち騰つてゐる。

陰氣に濕つてゐた部屋のうちが俄に明るくなつて來たのに氣がついて、今まで一生懸命に針の手を運ばしてゐた姉のおそのは、がくりと折れまがつたやうになつてゐた首をふつとあたげてその女のよくする癖の、白い額に怜悧さうに描かれた眉根のあたりに深い皺を刻むやうな眼をして明るい日光の映る障子の方を眺めた。

『あゝ天氣になりまつせ。一ぺんあこ明けまへうか、あんた寒いことおへんや

ろ。」

彼女はさういつて傍ゝ病床に横つてゐる弟の方を見た。

また少し熱が出てきたやうで、さつきから頭を枕にうづめて微睡してゐた弟の梅雄はさういはれたので大きな二重瞼をぱちと見開いて姉の方を見た。長い間患らうてゐるにもかゝはらず不斷から色白の顏は透きとほるやうに白くなつて熱のせゐか兩方の頰の眞中だけがぼうッと薄紅を潮してゐる。

弟が自分の方を見たので姉はもう一ぺん、

「あこ明けまへうか、あんた寒いことないやろ。」

と、いつてきくと。

「あけとくれやす。」

梅雄は弱い聲で返辭をした。

おそのは立つていつて椽側の障子をさつと開いた。

「はあ、辛氣くさ。かうしたらえゝ心持どすやろ。」

と、いひながら彼女は胸をひらくやうに太息をついてうるさく這ひさがる髮のほつれ毛を纖細い指先で撫であげながらそこに立つて碧く晴れてゆく蒼空の方にその黑瞳がちの眼を放つた。

そこからは向の家の屋根ごしに知恩院の森も見えてゐた。低い築地塀に取圍まれた狹い庭には今しも一本の櫻花が春雨のあとの花きれを立てながら眞盛りに咲きほこつてゐる。

「ちよつとこの花を見とみやす。そこから見えまつか。よう〳〵咲いてますやろ。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

姉はさういつて少し身をひらきながら病床の上の弟の方を振顧つた。
梅雄は熱に上氣したやうな顏をもの憂さうに枕の上に横向きにして、姉の言葉につれて庭の方を眺めた。熱臭い部屋の内に暖い日光とゝもに花の匂を含んだ新鮮な空氣が流れるやうに入つてきた。
長い間冬の寒さにいぢけてゐたものを何もかも一時に蘇らすやうな麗かな春光は今靜に天地に漲つてゐるのである。
「姉さんもう去んとお化粧がおそならしまへんか。」
病のせゐで神經が過敏になつてゐる梅雄はさういつて姉の歸るのが遲くなりはせぬかと氣にした。
「まだちよつとくらゐかまへん。お母はんが歸らはるまでにこれだけして仕舞ひまへう。」
おそのは椽側から入つて來てもとの座にすはつた。そしてぼうッと汗ばんだ顏をして、
「おゝ暑。」
と、いひながら黑縮緬の平常羽織をぬいで傍におしやり、もう少しになつてゐるめれんす夕染の蒲團の絎け殘しを取上げた。
「これ着たら、あんた身體が輕るうなりまつせ。」
さういひつゝおそのはせつ〳〵と針の手先をいそがした。すんなりとした身體に映りのいゝ高向な黑地に白い立縞のあるお召の綿入れを着て針を動かしてゐる肩先が細つて纖弱さうに見えてゐる。
「はやう良うなつてたら、私も姉さんの太夫さんの姿が見られたんやがなあ。」
姉の針を運ぶ手先を見るともなく寐ながら見まもつてゐた梅雄は長い自分の病氣をかこち聲にいつ

た。

「そんなもん見んかてよろしいからどうぞ精だしてはやう良うなつとくれやす。」

姉は元氣をつけるやうに口ではさういつたが梅雄の病氣は遂に見込みはなかつた。

今年十八になる梅雄は小學校を卒業すると間もなく好い手づるがあつてある電氣會社の給仕を勤めてゐたのであつたが溫順しいうへに何より學問が好きなので月々もらふ僅かばかしの月給を持つてかへつてくるといつもそのまゝ一度は母親の手に渡して、その中から自分の小使にと分けてもらつた錢で英語や數學の本を買つては獨りで勉强をしてゐた。小學校を卒業したばかりで中學校にゆくこととの出來ぬのが何よりも悲しかつた。十三の歲に父親に死訣れてから、あとには母親と自分には四つ年長の姉のおそのと三人きりの、はかないわが家の生計に年老いた母や若い姉が苦んでゐるさまを小供ながらにもよく知つてゐるので同じやうに小學校にいつてゐた良い家の子供達が今はみな制服姿で中學校に通つてゐるのに、自分は朝會社へのゆき道に、時々以前の友達に行きあふことがあるのが何ともいへない恥しく羨ましいのを、思ふまゝにならぬのが今の自分の境遇とあきらめて、世間の小供が遠足だの活動寫眞だのと遊ぶことに心を奪はれてゐるのに梅雄は無駄づかひ一つしやうともせず中學校にゆくかはりに晚に會社から退けて歸つて來るとあとは家の内に引籠つて獨學自修に餘念もないのであつた。

去年の暮にふと風邪をひいて十日ばかり會社の方を休んでから、それは間もなく癒つてまた今までのとほりに毎日出勤してはゐたけれど、どうかすると身體に熱のさしひきがあつて段々出勤も怠りがちになつてゐたが正月になつてからどつと寐ついて、そのまゝ枕が上らず醫者は遂に結核といふ無慘な宣告

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずさへ下してしまつたのである。

それでも自分ではそんな病とは知らぬから、いつかは快くなるおりが來るものとばかり思つてゐるのが傍にゐる母や姉の心にはいつそいぢらしかつた。

「あゝ僕こんどようなつたらどないしてゞも東京にいきたい。東京にいてどんなことしてゝも勉强して出世して、早やうお母はんや姉さんを樂にしてあげんならん。姉さんがいつまでもそんなことしてゐてはどもならん。」

梅雄は昂奮したやうな顔をしてまたしてはよくいふことを繰返した。

「早うようなつとくれやすや。ほしてお母はんや私に安心さしとくれやす。」

おそのは針の手先をいそがしながらつとめて病人の氣嫌に逆らはぬやうに弟の對手になつてゐても、そのことをいひだされるのが何よりもつらかつた。

おそのは今葛城太夫といつて祇園で賣れ妓の太夫であつた。

それまでは西陣の邊で古くからかなりに手廣く夕染屋を營んでゐた人の好い父親が、退かれぬ義理から他人のために招かぬ損をさせられたのが家運の傾くはじまりで、ひきつゞいて焦燥ればあせるほど思ふとほりにゆかぬ商買の失敗から氣落ちがしてそれが病みつきになり、長い間わづらうて死んでいつたあとは、もう自分達の住んでゐる地所つきの家さへ借金の抵當に人手にわたるばかりになつてゐて、小供を對手の女手には、それをどうする術もなかつた。それでもまだ二三年が間はどうにかして親子三人のものがその日その日のことには貧しいながらも困らぬだけのことはできたのを、手をつかねて居食ひ

をしてゐるのも勿體ないとよしない女の考へからお園が勝氣な氣性にまかせて仕馴れぬ小商賣をはじめたのがよくなかつて、それがために一年とたゝぬうちに、またもや女には脊負ひきれぬほどの新しい借金をさへこしらへてしまつた。

『お母はん、わたしがしばらく身を沈めればいゝさかい。』

母子して散々思案をしつくした揚句のはておそのは到頭一家の不運を、その纖弱な女の身一つに脊負つて今から二年ばかりまへ櫻花ならば今からが盛りといふ二十の年の十月に町家そだちの堅氣の身を可惜祇園の遊廓に沈めてしまつたのである。

けれどもおそのゝ考へは間違つてゐた。さらば良い家の娘といふほどではなかつたが、親讓りの應揚な性質は幼い時から世間の荒い風波にも當てられず、これまで苦勞といふことも知らずにたゞぬうつと育てられたので、親兄弟のためにうら若い女が自分の身を苦界に沈めるといふことはそんなに惡いこととも卑しいこととも思へなかつた。さう思はぬばかりではない、芝居や淨瑠璃で見てゐさういふところにゐて卑しい憂き勤めに人知れぬ悲慘の涙に泣きくれてゐるやうな女はみな美しく哀れであつた。おかるの身賣りを見ても宮城野信夫を見てもさうであつた。おそのは遊廓に身を沈めることが好いことのやうにさへ思はれた。

愚鈍なくらゐ堅氣一方なお園母子は勤め奉公といへば昔から人の卑む、つらい稼業であるとは知つてゐても一旦そこへ身を沈めたが最後容易に脱け出ることの出來ぬ恐ろしい地獄であるといふやうなことは深くも思ひ及ばなかつた。さういふ場合に相談對手になつてくるやうな近しい身寄りといつてもなお

つたので二人はほんの一寸の間のつもりで女衒の手にかゝつたのである。

「まあ規則は規則どすさかい、こして四年の年期にはなつてゝもそないに長いこと勤めんかて二年もたたんまに借金は拂へます。またそのうちにはえゝお客さんが付きますさかい、ほしたら半歳か長うて一年も辛抱してゐやはつたら仕合にしてもらへまつさ。いはゞ出世の近道見たいなもんどす。」

判人は身の代金と引換へに仕切りの書付を收めながらそんなことをいつた。それが實際に廓の内部に入つて見ると、素人かんがへに聞いてゐたとは大變な相違で、前借の返濟はおろか、浮華を競ふ遊里には義理とか外見とかいろんな遊里の習慣があつて出錢ばかり多く、厭でも應でも屋形から新しい借金でもせねば、どうしても立ちゆかぬやうな仕組みになつてゐるのであつた。そこへまた思はぬ弟の難病でおそのはどちらを向いて見ても錢の入ることとのみで、だん／＼借金の深味に陷つてゆくよりほかはなかつた。

「今もうそんなことといはんとおいとくれやす。あんた病氣やさかい、そんなこと考へんと氣張つてはやうようなつとくれやす。」

お園はそんな考へには、そつと蓋でもしておきたいやうに目を瞑つて顏を慄はすやうにした。

「僕の病氣で姉さんにばかり責任がかゝつて仕樣あらへん。もちよつと辛抱して待つてとくれやす。僕が癒つたら、どないにしても姉さんを救けるよつて。」

梅雄は今にも自分の病氣が本復するやうな心持ちになつてさういつた。

「どうぞはやう救けておくれやす。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おそのはさういひながらも一心に針の手をいそがした。

互にいたはりながら姉弟がしめやかに物語る間にも、そよ〳〵と外から流れこむ爽かな白晝の風には庭に咲きこぼれた櫻の花や山吹の甘い匂ひがそこはかとなくたゞようてゐる。

「そやけど姉さん、僕の病氣はとても癒らへんえ。」

しばらく默つて天井の方を凝視めてゐた梅雄はじれたやうな鼻聲になつてさういつた。

「なんでどす。」

「なんでちうこともあらへんけど、何やしら私そんな氣がする。昨私昨夜恐いこはい夢を見た。」

「どんな夢どした。」

「私、どこや知らんなんでも河原の上の方見たいなところで會社の友達で遊んでゐるところへ死なはつたお父さんが、どこからかふつと出て來やはつて、お前そんなところにゐたらあかへんさかい、お父はんのゆくところへ一緒につれていてやる。こつち來い、こつち來い、いはゝつて暗いくらい大きな樹の生えた山の中を通つて大文字さんの山を越して遠いといところへ連れていかはりますから、私しんどうてしんどうてよう歩かれしまへんやろ。ほで私ぢつと道ばたへ立ちとまつてゐると、さあ早うはやういふて手をとつて引いていかはりますから、わてえあんまりしんどうてふつと目がさめると、體中汗でづく〳〵なつてた。」

おそのはそれをきいて氣にかゝつたけれどさあらぬ風に、

「さうどすか。そやけどそら夢どすもの。そんなん夢くらゐ氣にしてたら仕方あらへん。そなこと氣に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かけんとおきやす。」

さういつて慰めてゐるうちに蒲團の絎けがやつとおはつた。今着て寢てゐる蒲團は重いからといつてお園が自分で孛姆をつれて夕染の皮と綿とを買つて來て、お花にゆく暇々を見てはやつて來て自分で仕立てたのである。

「さあ、やう〳〵出來ました。」

おそのは絎けおはつた蒲團をそこへ擴げて、ところ〴〵針のあとを摘んで見たり絲屑を拾ひとつたりして着てゐる先の蒲團をとつて新しいのと取換へた。

「へえ、おうきに。えらい輕うなりました。」

梅雄は床の中で身動きをしながら新しい蒲團の柔か味を病み疲れた身體に感ずるやうにいつた。おそのはそこらに取り散らかしたものを一つひとつ形付けて、襟先きを掻きあはせ、脱いでおいた羽織をきて、細かい金細工の紐をかけ、たつぷりと半襟まで這ひかゝつた銀杏返しの多い頭髮をちよつと撫でつけるまねをして、そこに坐りなほした。そして細い煙管に輕くつめながら二三服たてつゞけに吸つた。

「お母はんどないしやはつたんやろ。えらい遲いえなあ。」

「もう去なんなりまへんやろ。どないしやはつたんやろ。藥からひだけとちがひますか。」

「ほかに何ぞ用たししてゐやはるんやろ。もうかへらはるやろ。」

さういてゐるところへ、

「ごめんやす葛城さん、ゐやはりますか。うちでもうかへつてお化粧せんと遅なるいふてはりまつせ。」

さういひながら屋形の女衆が上つて來た。

そして寐てゐる病人の方を向きながら、

「梅雄さんどうどす。今日ちつとはお加減よろしおすか。」まだ十八九にしかならぬ女衆は丸髷に結つたひしやげたやうな惡毒氣ない顔をにこ／＼さして葛城のそばに坐つた。

「もう去ぬとこやけど、お母はんがお藥もらひにいかはつて、まだかへつてきやはらんもんやから。今やつと蒲團がでけたとこやの。」

「あ、ほんに。ようでけました。えゝ色氣どすなあ。梅雄さんえゝ具合どつしやろ。」

「うちの妓もう皆お風呂にいて。」

「えゝ、みないかはりました。墨染さんも今私出てくるときいかはりました。外は花見でそらえらい人とつせ。」

「ほんなら私ちよつと先いぬさかひあんたお母はんがかへらはるまでこゝにゐてとくれやす。もうぢきかへらはるやろ。」さういつてお園は梅雄の方を見ながら『ほんなら私お清どんにゐてもろて、ちよつといてきまつせ。外に何か用ないか。』

お園は母のかへるまで弟のそばに女衆をつけておいて一人母の家を出て來た。

二

おそのは今日都踊の點茶の出番にあたつてゐるので、それに間にあふやうにお化粧をしなければならなかつた。自分の體でゐながら自分の自由にまかせぬ囚はれの身の悲しさは平常はお茶屋に送られるほか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、めつたに一人で外出あるきさへも叶はぬのであるが、今日この頃弟の病氣が俄に重くなつてからはこゝ半月ばかり屋形の方でも日頃の勤めぶりに免じて大目に見てくれて體のあいてゐる時でさへあれば午前だけは、かうして勝手にわが家にかへることを得さしてくれてゐるのである。

わが家とはいひながら、お園が廓へ勤めるやうになつてから、それまで永く住み馴れてゐた西陣の方は引拂つて、母親は弟をつれてこの祇園近くの露地裏にさゝやかな借家住居をして娘からわづかばかりの仕送りではかないその日その日を暮してゐるので、弟がどつと寐ついてから、じめ／＼した露地裏の住居は病氣のためによくないからといつて幸ひ屋形のお寺になつてゐる智恩院の末寺に二三年前に死なれた先住が長い間患らうて寢てゐた離室がまだそのまゝになつて空いてゐたので、そこを借りてこの間から母親をつけて出養生をさしてゐるのである。

麗かな春の日影を眞正面に浴びた築地塀について松林の中の小徑を曲りながらおそのは薄色の傘に顏を隱して、どんなことがあつても急がぬ靜かな歩調で小堀の御門の方まで出て戻りかゝつたが、ふつと今日は朝來しなに急いだために、毎日弟を見舞ふたびについでにおまゐりすることになつてゐる山の辨天さまに詣るのをすつかり忘れてゐたことを思ひ出した。

お化粧をいそぐけれどもそれはもうこの間中から何度も着つけまでしてお稽古をしてあるので、これからかへつて風呂に入つて頭髮をあげさへすればそれでいゝ。さう思つて彼女はまた引返して人通りの少い櫻の馬場を智恩院の方へと上つていつた。圓山公園の方へ通ふ往來にはぞろ／＼花見づれが動いてゐるのを避けて、山門の横から曲つて女坂を上つてゆくと奇麗に掃き淨められた花崗石の石磴には松の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

落葉とゝもに薄紅の花片がさそふ風もないのにはら〳〵と散つてきた。そこを上りきるとお園は多勢の男女が階段を上つたり下りたりしてゐる智恩院の御本堂の方を向いてちよつと頭を下げて、そのまま高い木魚の音の冴えわたつてゐる廣い境内を素通りして鐘樓の方から山道を通りぬけてやう〳〵公園の見晴し臺まで出てきた。此頃では毎日一度は辨天さままでは上つて來るのではあるが、此方の山道はいつ通つたか、しばらく歩いたことがないので、それに雨後の陽氣が俄に暖くなつたので、おそのは心持ちの惡いほど汗ばんだ體をそこの置石に腰をかけて、どこからともなく花の匂ひを送つてくる爽かな微風に吹かれてゐた。

向の方を眺めるとこの間の春雨で急に淡蒼く色づいた祇園の森の彼方には四條の大通りから黑い甍の立ち並んだ下京をかけて蜒蜿とした愛宕つゞきの山のはてに鳥羽野の方の片田舍までが一樣に淡紫の春靄の底に穩かに眠つてゐるやうに展けて見える。お園はすぐ眼の下の南座から東西兩本願寺、七條の停車場と、中で目に立つ高い建物に見るともなく目を留めてゆくとずつと先の方に東寺さんの塔が模糊として夢のやうに立つてゐるのを認めた。それを見ると彼女はふつと薄ら悲しい感じが胸に迫つてきた。

自分なぞの知らぬずつと以前にもうそこの家は死に絕えて、今ではお母はんの腹違ひの兄弟が一人殘つてゐるばかりやけれど、何でもお母はんの話しにきいてゐるのでは、お母はんの生れた家といふのはあの東寺の果てに見える田舍の大きな農家であつたといふことや。こゝからは智恩院の森にかくれて見えぬけれど、遠くに霞んで見える西山の方を見るにつけても思ひ出されるのは西陣の方のことである。今では電車が便利になつて京極や四條あたりへ出て來るのはわけはないけれど、自分がまた小供の時分には西陣といへば京の中に、も一つ京があるやうに一廓別になつてゐて、春は嵯峨や御室の野遊びにも、

秋は夜長のつれ〴〵にその頃まだ生きてゐた姉さんと一緒にお母はんにつれられてよく見にいつた見せ物や小芝居などにまで懐しい思ひ出が殘つてゐるのであつた。

その美しかつた姉さんは、お父はんより一年前に丁度今時分春雨にさそはれて花びらのちるやうに方々いゝところから嫁入りの話があつたのを仇に聞きながら二十一で敢へなくなつた。そのころから一家は急な落目になつた。以前はまだ家も困らず兩親が堅氣であつたから幼い時から三味線はほんの手ほどきくらゐで藝事などもあまり仕込んではゐなかつたし、それに藝妓といつては此方で望むやうな纒つた金を貸してもくれなかつたので、つい仲に立つ者の口車に乘つて、同じ勤め奉公とはいひながら、昔はとにかく今では藝妓といふよりは人聞のわるい太夫に身を落したのであつた。

けれども今更それを悔んだとて仕方がない。どうせ自分はこんな薄命な身に生れ合したのやからそれはもう諦めてゐるけれど、氣にかゝるのは弟の病氣である。お醫者さんのいはれるのでは、とても救かることはむづかしい。もしもそんなことになつた場合には自分は不具同様な體やし、遠い先祖からつゞいてゐる松野の家の血統はこゝで斷絶してしまはねばならん。どうかしてかけ換へのない弟の一命を取留めることが出來るなら、どんな情けない憂目を見ても厭ひはせぬ、たとひ自分の體をないものにしてゞももとの壯健な體にしてやりたい。さう思ふてこの頃ではもう日夜そのことばかりに心を砕いてゐる効もなく、とてもふたゝび本復する見込みはないらしい。

いそがねばならぬのもうち忘れてお園は四邊の景色が陽氣であればあるほど、その麗かな春の眺めの底にどこからともなく湧いてくるうら悲しい頼りなげな春愁に胸をとざゝれてついうつとりと思ひわび

てゐた。

するど不意と誰れか背後から來て默つて肩のところを抑へたものがあるので、おそのはびつくりして振顧ると、それは笠原春雪といつて、この春まだ寒い頃東京から來て京都の地に足をとゞめてゐる畫家であつた。

『ほ、あんたはん、散歩どすか。』お園は蒼白く沈んでゐた顏に急に元氣づいたやうな微笑を浮べながらいつた。

『あ、あんまり好い天氣になつたもんだからぶら〳〵歩いてきた。』春とんびを脱いで左の手に掛けた笠原はさういひながらそこに突立つて額の汗を拭きふき『そして病氣はどうだね。あんた一人でどこへいつたの。』

『へ、おうきに。やつぱり同じことゝす。私今お母はんのとこから出てきて、これからそこの辨天さまにおまゐりしてすぐ屋形かへるとこどす。』

『さうか、やつぱりあの病氣ではねえ。今日もこれから都合がよかつたらちよつと寄つて見やうかと思つてゐたんだが、今うちにおかあはんがゐるだけかね？』

『さうどつか。何時もいつもあんたはんには深切に見舞ふてもろて、ほんまに内でも喜んでます。そやけど今はいかんとおいとくれやす。お母はん今藥とりにいかはりまして留守どすさかい、屋形の女衆にちよつとゐてもろうてるとこどすから。』

おそのは四邊に氣をおくやうに低聲でいつた。

まだ知つてからやう〱一月あまりにしかならぬのであるが、どこか氣に染んだところがあると思はれてその客はひどく自分を深切にいふてくれて初めて逢ひそめたときから親や兄弟はあるかとか、どういふ理由でこんな境遇に身を沈めたかとか、何處の生れで年はいくつになるかとかいろ〱身の上を聞かれて、それからは五日め七日めぐらゐにはきつと知らしてくれて寄せてもらひさへすればいつでも二日も三日も花を付けて遊ばしてくれて、晝間は顏がさすから一緒に出歩くことはせぬけれど、一人でゆくなら何處へでも好きなところへゆけ、自分はこゝにゐて繪を描いてゐるからといはれるまゝに、

『ほんならえらい勝手どすけど晩までお母はんのところへ遊びにやらしてもらひます。』

といつて、わが家へかへつて來て母親や弟のそばで何時もいつもゆつくり骨のばしをするのであつた。弟が患ひついてからはまた格別に氣をつけて、樂花を付けて自宅へやらしてくれたり偶には餘分な小使などを心配してくれて、此度出養生をさすのにも内々力を添えてくれたのであつた。それからは自分でも時々弟の好くやうなものなどを買つて見舞ひに來てくれることもある。けれども古い廓の習慣を重んずる土地柄とてお客が抱妓の親元へたづねて來たりするのは殊のほかやかましいうへに、多勢の抱妓の手前を加減しい〱日頃自分を可愛がつて、親のところへも勝手に出入りさしてくれてゐる屋形の姐さんの思惑も考へねばならぬので、滅多にやつてこられて、もしもそれが屋形に知られるやうなことがあつては困るのであつた。

『さうか、ぢや今日は止さう。』

『どうぞさうしとおくれやす。えらい勝手いふて濟んまへんけど。それに私今日點茶の出番どすさか

い、これからお參詣してすぐ往んでお化粧せんなりまへんよつて。あんたはんこれからどこへもおいきへんのやつたらそこまで一緒にいきまへう。』

『あゝ、さう。今日だつたな。』

『さうどす。今晩どす。あんたはん私を描いとくれやすのやつたらどうぞ見に來とくれやすな。』

笠原は繪でも日本畫の方なので、祇園の廓には今はもう絶えて見られなくなつたが四條の大通りがまだ今のやうに傷々しく破壞されぬ前までは微暗い格子先の巷路を素足に絡はる緋縮緬の蹴出しを踏みわけみつあしで練りながら茶屋入りをした華麗な古めかしい太夫姿をこの葛城に見立てゝ心ゆくばかりの繪に描き活かして見たいと、かねていつてゐたのである。

『さうだ。ぜひ拜見にゆくよ。』

笠原が葛城の太夫姿を繪にして見やうと思つたのももと〳〵半ば繪師がする粋興の筆ずさびに思ひついたのではあるが、一つには彼がこれまで繪行脚をして到るところの土地々々で常に太ることを怠らなかつた數ある女に比べて單にその標緻姿態の婀娜としてさながらに古い浮世繪にでもありさうな、見るから賴りなげな風情のこぼれてゐるばかりでなく、その起居振舞から氣質や物の言ひぶりなどにも、娟を賣る女でありながら不思議に卑しくない、名ばかりは太夫と呼び慣れてゐてもその實骨荒く人ずれのした今樣の女の中にはめづらしい浮世ばなれがして、今尙ほ狹斜の巷にありし世の香ばしい名をとゞめ粋を解する者の口にいつまでも語り草となつてゐる島原の吉野とか夕霧とかいつたやうな古名妓が名殘りの面影がどこかに忍ばれるやうな心持ちがしたからである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうぞ來とくれやす。ほんならそこまで一緒にいきまへう。」
「ぢや私もこれから公園の中を一廻りして宿へかへらう。」
「さうおしやすな」
二人はそんなことをいひ交しながら、そこを立つて眞青な雜草の萌えでた原つぱの中に開かれた細徑をひろふて辨才天を祭つた小さい祠のある崖下の方へとだら〳〵おりていつた。
「私おまゐりしますよつてちよつと待つてとくれやす。こゝ何でもよう賴むことをきいてくれはりまつせ。」
お園はさういひながら辨天さまの社前に進んで帶の間から小さい銀貨入れをとり出してお蠟燭をあげたりお賽錢を投げこんだりして、合掌した二本の白い人さし指を額のところにつけてやゝしばらく祈願をこめてゐたが、それがすむと帶の上に掌をくみ合したまゝ小さい御堂の廻りを三遍ほどぐる〳〵まはつて出てきた。
そこから二人はまた連れだつて、手入れのとゞいた樹蔭の散歩道を迂曲しつゝ、ぞろ〳〵上つたり下りたりしてゆく花見づれの間を縫ふて平野屋の前までおりてくると、笠原はつと道の片蔭に身をよけながら立ちどまつて、
「あんたはこれからずつと屋形へかへるのやらう。」
「さうどす。」
「ぢや私はこれからも少し眞葛ヶ原の方を散歩しながらかへるから、點茶の席が濟んだらきつと來てゐ

くれ。』
『へえ、おほきに。』と、いつたがお園はふとその晩は大阪のお客さんにもぜひにといはれて、薄々約束してあるのを思ひ出して、
『わたしあんたはんのところへ寄せてもろう思ふてんのどすけど。もうせんどから都踊の時には寄せてもらふことになつて大阪のお客さんにお約束してをますさかい。』と、思案しかねたやうにぽつうと顔を染めながらいつた。
　すると笠原は急に不安な面を曇らせながら、
『そりやいけないなあ。だつて今日は君がめづらしい昔の太夫姿に粧して點茶に出るのだから、私はそれをよく見ておいてあとで美しい繪に描うと思つてゐるんだもの。』と、ねだるやうな媚るやうな調子でいふ。
『そやけど……』と、おそのは當惑して少しの間默つてゐたが、
『點茶だけどつせ、あんなお化粧して出るのは。あんたはんあこお見やしたゞけではあんじよう描けまへんか。』
『たよりないことをいふねえ。そりやお花にくるにはそのまゝでは來られないだらうけれど、折角美しい姿に裝ふて、その晩君がほかのお客さんのところへお花にいつてしまつたのでは繪を描かうたつて感興が失せてしまつて、とても繪なんか描いてゐられやしないぢやないか。都踊を見にゆくにも氣がなくなる。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春雪が四邊に心を配りながら、すばり〳〵江戸辨でさういふのが彼女の耳に京や大阪のお客のいふ言葉とはちがつたそゝるやうな強い響きを與へた。そして、

「そらさうどつしやろ。」と、どつちつかずの決しかねたやうな返答をしながらちよつと考へてゐたが、

「ほんなら私晩に寄せてもらひます。そのかはりほんまに見にきとくれやす。」

「そりやあのちに君がきてくれさへすれば、私の方でも見にゆくよ。」

「わたし必ず寄せてもらひます。」

「ぢやきておくれ。そしたら都合がよかつたら、おかあはんのところまで一緒にいてもいゝから。……

……こゝであんまりながく話しをしてゐるといけない。はやく行かう。」

「ほんならさうします私もいそぎます。あんたはんもう何處へも寄らんと眞直ぐに下河原におかへりやすな。」

おそのはさういひながら公園の散歩道を歩いて池のある方へおりかけた。すると、

「ほんとに來るか、またいつかのやうに、すぐにも來るといふやうな返事をしておいて、遲くなつてから急に斷るやうなことがあるから。何だか怪しいぞ。」春雪が後から追掛けるやうに戲談らしいことないふので、彼女はふつと振顧つて、自分もいくらか微笑みながら二足三足戻つて來て、

「あんたはん、まだ私の心を疑ふとゐやすの。寄せてもろういふたら、ほんまによせてもらひます。」

「そんならいゝ。きつとだよ。」

「よう分りましたやろ。ほんなら私これからかへりまつせ。」おそのはさういつて此度すた〳〵道を急い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で公園の群衆の中を脇目もふらずに祇園社の裏から石段下の廣場にでゝ末吉町の屋形に戻つてきた。

三

おそのは傘をつぼめながら格子口を入つてゆくと、店の間の上り口にはもう黒漆の三枚歯がちやんとそろへてあつて、紋付を着た男衆の小父さんが用ありさうに立ちうごいたり、稚髷に結つて顔だけ眞白にお化粧をした禿が嬉しさうに部屋入りの刻限になるのを待ちかねてゐた。小父さんはおそのが歸つて來たのを見て、

「あ、おかへり。えらい遲おしたなあ。お清どん葛城さんかへらはりましたえ。」と奥へ聲をかけた。

おそのはそのまゝ急いで二階座敷の自分達の部屋に上つてゆかうとして階段を上りかけると丁度奥から姉さんが顔を出して、

「えらい遲いえなあ。あんた今まで何處へいてたんえ。お清どん、もさつきにおかあはんのとこからもどつてきて、あんた先歸らはりましたいふやんやさかい、どないしたんやろおもうてた。」

「えらい遲うなりました。今朝ゆきしなに忘れてましたから私ちよつと山の辨天さまにお參詣してました。」

「さうか。ほんならすぐお風呂にいて髮結ひさんへゆかんと遲なる。もう二時過ぎたる。ほかの妓みなお化粧出來たえ。」

「さうどつしやろ。これからすぐいてきます。」

おそのはさういひながら二階の部屋に上つてゆくと、今日此家のうちから太夫ばかり三人そろつて點

茶の出番になつてゐるので、表座敷の紅殼格子の方によせて置いた朱塗の大鏡台の前には白粉や香油の蒸息(いきれ)の立て籠つた中に墨染と勝山とが艶めかしい不断着の夕染の長襦袢一つになつて頭ばかりのやうに見える大きな伊達兵庫の頭髪を鏡に映しながら、化粧方の小母(おば)さんに手傳つてもらつて頻りに顔をこしらへてゐるところである。

墨染は自分の頭髪のうしろから大鏡に映る葛城の姿を窮屈さうに覗きながら、

「お、おかへり。あんたはんえらい遅おしたなあ。結髪さんきつう待つてはりましたえ。はやういといでやす。」

「へ、おほけに。すぐいてきます。多勢いてはりましたか。」

「そんなことおへんやろ。」

「あ、さうどつか。」葛城はさういつて自分の鏡臺の處から小さな金盥の中に手拭やら石鹸やらお湯の道具を入れて階段をおりてきながら、

「お清どん、ほんなら私(わて)これからお風呂へいてすぐお種さんのとこへゆくさかい、あんたあれ持つていといておくれやす。」

「へえ、畏りました。」

さういつて臺所の方から出てきたお清に店先まで送られながら葛城はそこからすこし先の松の湯の暖簾をくゞつた。風呂にはもう今朝一度入つたので、それに他妓(ひと)とちがつてお化粧などに手間のかゝらぬ彼女は熱い日向を歩いてきた體の汗をざつと洗ひ流すと、いそいでそこから新橋のさきの髪結のところ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へ廻つていつた。

踊りが始つてから目のまはるほどの急しさにこの頃では三四人の梳手をつかつてゐてもまだ手の足らぬほど、いつもは多勢の藝妓や舞妓がもう朝の内からつめかけてゐるのであるが、大抵みな午すぎまでに歸つてしまつて、あとは水の退いたやうにひつそりとした姿鏡の前にはそれも遲れてきた二三人が座つてゐるばかりである。

「お、おいでやす。あんたはんえらい遲おすな。」お種さんは今しも出來上つた一人の藝妓のおしどりの髷に毛筋棒をあてゝ鏡に映る姿を見比べながら熱心に髱の格向をつけてゐた顏をちよつと葛城の方に振向けた。

「えらいおそなりまして、ほんまにお氣の毒さんどす。」

「なんでそれが。」お種さんはいそがしさうに手を働かせながら姿鏡の面から、隣りの鏡の前にきて座つた葛城の姿にどこか寂しさの目立つのを横眼で見ながら、

「あ、ほんにあんたはん弟はんが具合わるいちうて、きつう心配しとゐやすさうにおすが、この頃どうどす。少しはよろしい方どすか。」

「へえ、おほけに。まだやつぱり同じことやので、こまつてます。」

「さうどつか、そらいきまへんなあ。」

そのうちお種さんはやつと頭髮から手を放したので、今まで鏡の面のみを見てゐた藝妓はやつと葛城の方を向いて兩方で、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「今日は」

「今日は」

と輕い會釋をかはして、かへつていつた。

やがて葛城の後に來て立つた梳手は、銀杏返しの根元に鋏を入れてかちんと元結を切つて手早く髷をほぐし、素直な多い毛を疊の上までばら〳〵と這ひ亂してふけを取つたあとを、小さい濡れ布巾で力を入れて癖をなほしながら、

「ほんまに葛城さんの毛はえゝ毛やは。こんなんやつたら、ほかの毛を入れんかて兵庫に結へまつしやろえ。」

「おう、おう。そないに賞めとくれやしたら私どない云ふたらよろしいやろ。」

「今日はあんたはんが點茶におでやすのやちうて、も、えない人氣どつせ。私も葛城さんが太夫さんに粧しといやすとこ一遍見とおす。」

「どうぞ見にきとくれやす。」

「ほんまにいきとおす。皆そない云ふてはりまつせ。あんたはんやつたら、昔の太夫さんのとほりにそら美しいやろちうて。」

そんなことをいつてゐるうちに癖直しもすんで幾度も奇麗に梳かれた長い黑髮は漆のやうな光澤を生じて脊に垂れた。丁度そこへ、

「ごめんやす。」といつて、屋形からお淸どんが髮飾りに用ひる大櫛だの花釵だの笄などを入れた小匣を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

抱へて入つてきた。

しばらく手を休めてゐた結手のお種はその奇麗に梳かれた髪に毛筋棒を入れて一本の毛も亂さず前髪は前髪、鬢は鬢と巧みに分けとり、思ひきつて耳の下まで大きく鬢を張つて、一番後に赤熊を入れて髷を結ぶと見るみるうちに京風の伊達兵庫の頭髪は格好よく出來上つた。それに花櫛やら八本の大笄やらを挿して、最後に長崎といたづらとを飾りつけると鏡に映る細面の色白の顔が、まるで人形芝居の雛絹のやうに可愛らしかつた。

そこへ屋形から俥が迎へにきたので葛城はそれに乘つてかへつていつた。

格子先で俥を降りて重い頭を大事さうに家の内に入つてゆくと姉さんは、

『おう、おう。えらい早う、ようでけました。』と、起つてきて頭のぐるりをとみかうみして『さあ彼方(あつちや)へおあがり。私手傳ふてお化粧してあげます。』

『へえ、どうぞ。』といひながら葛城は階段を二階の部屋に上つていくと、もう墨染も勝山もすつかり顔のおつくりが濟んでこれから衣裳を着けやうとするところで金絲銀絲で刺繡をした裲襠や厚ぼつたい前帯などが足の踏み場もないまでにとりひろげてある。

葛城は姉さんに手傳つてもらつて念に念を入れて厚くお白粉をつけて、それから下地の好いうへに更に眉黛で眉を刷くと黒瞳がちの二重瞼から眉のあたりが一層引立つて見えてきた。そして小供のやうに小さく引結んだ唇にそつと口紅をさしてもらふと彼女は鏡に映る顔を眺めて自分ながら見ちがへるほど美しくなつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

着物は下が紅入夕染に上が二枚白味の勝つた綸子形の羽二重の三枚襲ねに、源氏車に青柳を繡ひとつた髙尙な黑繻子の前帶を胸一杯に大きく結んで、白羽二重の襦袢の襟裏を紅く返して、これに緋と銀とで有職風の簾垂れ模樣を脊一面に刺繡した裲襠を被ると、白襟の片方のへ紅裏を返してゐなかつたなら、太夫といふよりは歌舞伎芝居のお姫樣といひたいやうな上品な姿に出來あがつた。

「まあ、まあ、綺麗なわ。葛城さんには髙尙のんがようよう似合ひまずえなあ。」

「太夫さんやなうてほんまに八重垣姬のやうどすなあ。」

階下から女衆や芋姆までが上つてきて多勢で葛城の周圍を取卷いて口々にその美しい姿をほめた。

「なあ、へ。この見立て丁度あんたによう似合うたえなあ。」

姉さんも少し後にさがつて遠目に眺めながら、滿足したやうにいつてくれる。

「さうどすなあ。」葛城も嬉しさうな顏をして鏡に映る姿を飽かず眺めてゐた。

姉さんを初め皆から『弟さんがもしものことがあつたら、葛城さんはほんまに狂氣にならはるやろ。』といつて心配してゐてくれるほど、この頃はもう明けても萘れても弟の病氣ゆゑに心を腐らしてゐる葛城もさうして美しく粧した姿を皆に賞められて見れば、流石に自分でも氣がまぎれて、自然と心もいくらか春めいて來るやうであつた。

「お母はんに葛城さんがこないしてるとこ一遍見せてあげたらえゝのやけど、とても來られへんやろなあ。なあお淸どん。」姉さんはそこに突立つてゐるお淸の方を向いていつた。

「さうどすなあ、私ちよつとさういふてきまへうか。なあ葛城さんお母はんきられますやろ。」

「お清どんせいていていて、梅雄さんがえらう惡うなかつたら、あんた代つてゝ、お母はんにちよつと見においでやすいふとくれやす。」姉さんはさういつたけれど、葛城は

「姉さん、そやけど梅雄が見たがりますといけまへんさかい、もうそんなことといはんとおいとくれやす。」と、いつてことはつた。

「さうどつか、ほんならお清どん行かんとおきやす。」

姉さんはそれから三人の立姿を見たうへにも眺めて着物の裾さばきや裲襠の脊の格向を何遍となく直してやつと氣がすむと

「さあ、もう皆よろしい。やがて時どすやろ。」

と合圖をするやうにいつた。

さすがに長閑な春の日もやう〳〵西山の頂に傾きかけると、廓の夜は暮れをも待たず妓樓々々の軒先に吊した紅提燈の火影より瞬きそめて、一日の行樂に遊び疲れた花見歸りやこれから夜櫻を見にゆく連中や都踊りにゆく人で、祇園町の大通りから花見小路にかけて晝の賑はひにも倍して人足に景氣づいてくるのである。

やがて五時になると一同部屋入りをするので、春本からは三人の太夫姿が揃つて小路も狹しとばかりに搖ぎ出た。靜かな横丁から四條の通りへかゝると華麗かな裲襠姿に眼を奪はれた群衆は

「そら太夫はんや。」

と、さつと道をひらいてぞめき囃した。中には酒に醉ひしれた若い花見連れなどが人込みから、賣色の

身にも顔から火の出るやうな大口を利いてゆくのもあつた。葛城はさうした多勢からわが名を呼ばれるのが大地に穴があれば入りたいほど悲しかつた。依頼になるほどの親類とてはないけれど、自分がかういふところへ來てゐることを隱してゐる遠い親類は澤山あつた。お園さんは近頃どこか洛東で仲居奉公をしてゐるといふだけは薄々知つてゐても、今祇園で名の賣れてゐる葛城太夫がそれだとは知つてゐなかつた。お母はんの異腹の伯父さんは時々商賣仲間のお交際で祇園で遊ばはるといふことをも聞いてゐるので、それがために、これまでまだ幸にお茶屋で顔を合はすやうなことはないけれど、はつと氣がさして思はず赤面するやうなことがないでもない。……

彼女は騷々しい人聲や周圍を取卷いてゐる眼まぐるしい男女の顔にぼうつと上氣したやうな心地になつて、踏み馴れぬ三枚歯の運びも覺束なく、やう〳〵の思ひで歌舞練場の樂屋口までたどりついた。

銘々に割りあてられた部屋に入つて葛城はほつとしながらそこに備へつけてある姿鏡のそばに寄つてまた顔をなほしたり、着つけの襟格向を繕つたりしてゐるところへ

「へえ葛城さんお見舞どつせ。」といつて女紅場の男衆が、大皿に盛つていづ字の箱壽司をとゞけてきた。

「あ、さうどつか、おうきに。」

といつて葛城は、一心に鏡に面して頭をなほしてゐた顔をちよつと後に振顧つた。彼女はその通し物に添えてある紙片を見て、ちよつと考へるやうな顔をしたが、わざと名前は變へてあるけれど、すぐ思ひ當つた。

お献茶の式には今年初めて出るので、どうかと氣使つてゐたけれども稽古の時から數多い藝妓達の中

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にもすぐれて好い筋やといつて先生から賞められてゐたお手前ほどあつて、さういふ姿に着更つて來目を一身に集める晴がましい席に出て見ると、不思議とひとりでに氣分も平常の自分と違つたやうな心地になつて、五番とも手際よく御殿の式を濟ますと、葛城は舞臺の方から最後の踊の三味線や太鼓の響きが一つになつて澱むやうに聞えてくるのをきゝながら夜寒の中を俥で屋形へ急いだ。

屋形へかへつて來るともう五六軒のお茶屋から電話が掛つてゐた。中には二三軒あまり行きつけぬお茶屋の名があつたが、木屋町のお客で入つてゐるところからも下河原のお客でいつてゐる茶屋からも知らしてきてゐた。

「松池はんから、先刻からも、何度もかゝつてきてますのどつせ。あんたはん何處へいかはります。そないいふて斷るところは、も斷はらんなりまへんさかい。」お清は葛城が自分の部屋に上つてゆくのを後から二階について來てさういつた。

「さうどつか。」と、葛城はちよつと考へるやうにしたが、すぐ「ちよつと待つてとくれやす。」といつたまゝお清に手傳はれながら靜つと重い裲襠と前帶だけをとつて、鏡臺の前に座つて花櫛や笄を一つひとつ抜きとつた。そして濃く化粧つた顏のお白粉を油で拭きとらうとすると、着物の始末をしてゐたお清は慌てたやうに

「あの葛城さん、どうぞその顏を拭かんとおいとくれやす。松池はんから茶席のまゝですぐ來とくれやすいははりましたよつて。」

お清がさういつたので葛城はふつと別なことを思ひ出して、そのまゝ顏をなをさうとする手をとめて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

考へた。

かうなるのやつたら先刻お茶席へ出てゆく前に一と口誰れかにさういひ置いてゆくのであつたものを。お化粧が遲れたので心がせいたゝめについ忘れてしまつた。あゝして木屋町からも下河原からも部屋見舞まで通してくれてゐるくらゐやから、きつと兩方で今時分は踊のはねる時刻を待ちわびてゐやはるにちがひない。茶席では脇眼も振ることが出來なんだから、來てゐやはつたか、來てゐやはらなんだかよう分らなんだけれど、下河原のお客さんは繪を描くいふてはつたから見にきてゐやはつたに相違ない。茶席のまゝといふたかて藝妓とちがひ太夫がこのまゝの扮裝でめつた何處へもゆくことはできぬけれど、下河原へゆくんやつたらせめて顔だけはなをさずにおかう。……そやけど木屋町のお客さんかて松池から何遍も電話でせいてくるいふし、どないしたものやろ。あのお客さんもいつもの浄瑠璃の縫之助さんや舞妓の花蝶に友菊それから木屋町のお女將はんなど一緒に見にきてゐやはつたにちがひない。大方今時分は木屋町で多勢の一座が花やかに笑ひさゞめきながら、私の來るのを今かいまかと待つてゐやはるやろ。……

葛城は、ほんまの心をいへば氣の置けない、自分を丁度友達のやうにしてくれる旅の繪かきの處へゆきたいのであるが、いくら深切だといつてもその方はつい昨今の淺い馴染であるのにひき換へて大阪のお客さんにはまだ店出しをしたそも〳〵の時分からもう三年ごし贔負にしてもろうて、つい二た月三月ばかり前までは、かれこれ一年餘りといふもの、自分が繊弱い女の身一つで母や弟を養つてゐる健氣な氣だてや境遇を愛で哀れんで月々その方の面倒さへ見てくれてゐたのであつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「藝妓はんにかて、あんなえゝお客はんは滅多にあらへんえ。大事にせんとあかへん。」

席貸しのお女將んも松池のおかはんも同じやうにさういつて、何ぞのおりには恩にもきせたり、こちらの爲を思ふて意見もしてくれたりするのである。それはもうなんぼうにも身にしみてよう知つてゐるけれど、それくらゐだからこちらがその人獨りを賴りに思へばおもふほど向の勝手氣隨も漸次と募つて、ほかへお花にいつてゐて、どうしてもその晩外すことが出來なかつたり、今日は必ず行くからといふお約束の日や時間にちよつとでも遲れやうものなら、ぷいと氣嫌を惡くしていくらおそくからでも最終の電車で大阪へ歸つてしまふやうなことがある。そんな時にはもしこれきりになつたら月末のことをどうしようと直ぐお母はんや弟のことを思ふて氣が沈むのであるが、それでも

「お客といふものは、ほんまに我儘のものや。こつちやではこれほどに勸めておるのに。」

と、さう思ふと性來の勝氣から自分でわびて出るのも口惜しいし、あんまりわけの解らぬ怒りやうも厭になつて、そのまゝ棄てゝおくと向でも二た月も三月も何の沙汰もなく默つてほかしておいて、ふとまた向から折れて知らしたりするのである。此次もそんなやうなことから怒つてしまつて、この間まで長く逢はなかつたのをお茶屋と席貸しとでどう仲に入つて取りなしたものか先月の節季に迫つて知らしてくれた時松池のお女將はんがその時から

「あんた今度しくじつたら、もうおわびの仕樣があらへんえ。ほして點茶の時には來てやるいふてゐやはつたから、間違ひなうあんたも來とくれやすや。」

さういふてかたく約束してゐたのであつた。それを今自分が顏を出さぬとなると、折角陽氣に花の咲

いてゐるお座敷がどんなに白けてしまふであらう。大阪のお客さんのあの氣むづかしい顔やお女將はん達が仲に入つて困らはる顔が眼に見えるやうである。

葛城は鏡に面して見るともなく眞白に化粧つたわが顔を覗きながらそんなことを思ひ惑ふてゐると階下から

『お清どん松池はんからまた電話どつせ。』と呼ぶ聲がする。

『あゝさうどつか。』お清は返事をして『なあ、へ葛城さん此度はどない云ふて返事しまほ。』

葛城はまだ心を決しかねたやうに

『そやなあ。ほんなら、こない云ふとくれやす。えらい濟まんことゝつけど葛城さん、すぐお家へ寄せて貰らはんならんいふてましたけど、點茶からかへつてきますと、お母はんのところから今夜病人がきつう惡い云ふてきましたよつて、すぐその方にいきましたさかい。今晩はお斷りいたします。また近うちお目にかゝつてお詫びいたします。そない云ふとくれやす。』

さういつておいて彼女は重い頭飾りをとり去つて、起ち上つて別の着物に更めた。

お清はすぐまた上つて來て

『葛城さん、私松池はんかと思ひましたら、ちがひます。木屋町からどす。松池のお母はんもあこへいてはります。ほて、あんたはんがいはゝりましたとほりにさういひましたらな、あとで大阪のお客さんが自分で電話口に出てきやはつて、弟がきつう惡い云ふのは、そら噓やろ。ほかに色男でもあつてそこへいたんやろ。こないにいはゝるのどつせ。何やしらきつうきつうおはこいふたはります。』

それが大阪のお客のいつもの癖であつた。いつかも木屋町にいつて三晩もつゞけて泊つてゐた時、お母はんのところに急に用事が出來て屋形の女衆に呼び出して貰つてお母はんが自分で電話に出ると、その時もやっぱりお客さんが自分で電話口に出て

「急な用事といふのは、そら嘘やろ。母子して一緒になつて色男をかぼうてゐるのやろ。」

さういふて大きな聲でお母はんに怒鳴りつけたことがあつた。なんぼぼんくらのお母はんかて、その時だけはよく／＼腹も立つやら悲しいやらで、屋形の姉さんに

「こんなんやつたら私がもし家で死んでおつてもあの娘は知らずにゐますやろ。」さういふて、つらがつたのであつた。

「まあ、まあ、そないに云はんとおきやす。勤めといふものは昔からつらいにきまつたもんやさかい。あのお客さんかて解るところは解つたはる方やから、先で何といははつても此方は默つて辛抱さへしておればえゝ。末ではまた仕合せな身にして貰ふいうこともあるのやさかい。」

生れは徳島とか和歌山とかで、幼い時からこの祇園の遊廓に賣られて來て今から二十年ばかり前まで薄雲太夫といつて、長い間全盛で鳴らした覺えのある姉さんはさういつて慰めたのである。

「あゝ、さうどつか。」と葛城はいつたが、そんな具合やつたら、これから行くとまた厭味をいはれたり、明日になつても明後日になつてもかへしてくれないかも知れぬ。さう思つて

「怒らはつたら怒らはつたで、かまへん。」

彼女は獨語のやうにいつた。

四

「お君どん笠原さんがおかへりやしたえ。」
と臺處の方で呼ぶ聲がするのをきゝながら春雪は階子段の下の薄暗い廊下をつたふて自分の部屋にきめた奥二階の方に上つていつた。
と、仲居のお君はすぐ後から十能に火を盛つてやつてきて、
「おかへりやす。さぞ寒うおしたやろ。」
「隨分寒いよ。晝間はあんなに暖くつても夜になるとまだなか〳〵寒い。」
「京都はまた格別寒うおす。」
「いや東京だつて寒い。いつも今頃は雪が降るんだもの。」
「あら、さうどつか。」
「降るも降るも君、いつだつたか櫻花(さくら)が眞盛りに咲いてゐるのに雪が降つてそれが氷柱(つらゝ)になつたことがあつたよ。そら奇麗だつたよ。」
「まあ、まあ、さうどつか、東京ちうたらえらい寒いとこどすなあ。」
お君は火鉢に火をつぐと十能と飲み殼の茶碗とを下げていつた。そして新しい茶を煎れて持つてきた。
「おゝ好い茶だ。」春雪は熱い茶を一口飲んで、茶碗をひねりながらその中を覗くやうにして「何ともいへない好い色をしてゐる。これか本當の山吹色だ。こちらの茶はほんとにいゝ。」
「さうどつか。東京にはえゝ茶おへんか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「そら好いのといつたら、ないこともないだらうが、ちよい〳〵飲むのにこんなのはないなあ。」

「都踊どうどした。葛城さん献茶に出やはりましたか。」

「え丶、出ましたよ。」

「さぞ綺麗におしたやろ。あのお方やつたら太夫さんにお粧しやしたかて、ほんまによう似合ひますやろ。今晩きやはりますか。」お君は微笑みながらいつた。

「さあ、そんなことにはなつてゐるんだが、どうするか。曳手あまたですからな。」

「一遍電話をかけて見まへうか。」

「さうですなあ、かけて見て下さい。」

「畏りました。」お君はさういつて、丸髷の頭を淑やかにさげて襖の外に出ていつた。

春雪は脇息に凭れながら暫らく茶をすゝつてゐたが、やがて煙草が燻いてしまふと、立ち上つて今まで着てゐた羽織と下と對の茶微塵の結城お召の着物をぬいで、八端の褞袍に着更えた。

彼が今度この下河原に繪行脚の旅裝を解いてから、やがて二た月近くにもなるので、氣をつけて萎れぬ先からさきから挿しかえてくれる床の間には、もう幾度かその季節〳〵の眺めが移り變つて、今は爛漫たる櫻花の小蔭に緋縅の大鎧を着けた容齋派の武者繪の軸を懸け、淸水燒の花瓶には椿に黃梅が亂挿にしてある。黃褐色の砂壁も木理の見えぬ天井も黑く煤けて隨分古く建てたものらしいが、その代りに目に見えぬところに何處か手が入れてあつて、よく拭きこんだ床柱と隅の方の押入れのところに立てゝある抱一風の八橋を描いた二枚折の銀屛風だけが灯影の中に輝いてゐる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

八疊の座敷の眞中に敷きひろげた緋毛氈の上には晝間描きさした繪絹がまだそのまゝになつてゐて、繪の具箱のそばに取り散らかした白い皿には朱や綠や白い胡粉が鮮やかな色に流れ出たまゝ乾きついてゐる。今取りかゝてゐるのは、こゝに落着いてから先月の初にまた一週間ばかり月ヶ瀨附近の溪山の眺めを探つたついでに、關の古驛から鈴鹿峠にかけて昔の東海道の舊跡を歩いて寫生帳に收めた、その折の記憶を辿りながら、大阪のさる富豪の依囑に應じて描いてゐるのである。三枚の中一枚はもう出來上つて、砂壁の表にまだ枠のまゝ立てかけてあるのがそれである、それは月ヶ瀨からまだずつと奧の景色を描いたもので、紺碧を湛えた溪水が巖角に激して白雪を噴いてゐる上を一人の樵夫が危橋を渡つてゐる處で、一叢の杉木立に清香浮動してゐる風韻が遺憾なく出てゐる。

春雪は火鉢の傍によつて腕ぐみをしながらぢつと坐つてゐると、晝間でさへすぐ上の高臺寺の山から、どうかすると氣まぐれな鶯が前裁の樹立に飛び迷ふてきて鳴くほかは、外をさゞめかしてゆく花見連れの賑やかな笑ひ聲ひとつ聞えぬ程の靜かさなので、夜の更けるにつれて四邊はひとしほ閑寂としてゐる。

どこか近くの席貸では今日この頃の陽氣な春の宵を、わざと祇園町の騷がしさをいとふて浮世離れたこの山の中の奧座敷に、しんみりと二人對向ひで忍び逢ふ夜の戀を樂んでゐるものがあると見えて、ゐすむやうな爪びき音が艶かしく聞えてゐる。春雪はそれをきくともなく靜つと耳を傾けてゐると、何處かで聞いたことのあるやうな三味線のあひの手である。さう思ひながら尙ほも耳を澄ましてゐると、幾度も繰返してゐるので、それはずつと前に東京の新橋でちよつと知つてゐた藝者が自慢でよく彈ひてゐた小唄の「心でとめて」であるのを想ひ浮べた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心でとめてかへす夜は、可愛いお方のためにもなろと、泣いて別れてまた御見もじ、猪牙の浦嶋も夜露に濡れて、後は物憂きひとり寝するも、こゝが苦界のまんなかかいな。

それとはつきり分ると、夜が靜かなので唄の文色が手にとるやうに聞えてくる。春雪は思はずそれにひき入れられて、ついそゝられ氣味になりながら、今見てきた太夫の艶麗な姿を思ひ浮べて、それを繪絹の面にうつす工夫を凝してゐた。太夫といへば今では島原が日本に唯一の古めかしい面影の殘つてゐるところとなつてゐるが、この間見たその道中姿と今宵の献茶の席で見た祇園の太夫姿とを比べると、島原の方はさすがにまだ古式が多く保存されてゐるだけ裲襠や前帶などの好みが大時代は大時代だが、あまり濃艶にすぎてあくどい。それに反して祇園の方はずつと世話に碎けて淡彩で上品に出來てゐる。それだけ祇園の方は今様になつてゐる。併しいづれにしても最早ふたゝび歌麿や春信によつて描かれ、西鶴や近松によつて語られたる遠い美と傳奇の昔に今の時代を後戻りさする術もなかつた。彼は一旦破壞された夢幻の美をどうかしても一度び思ひ活かさうとするやうに眼を瞑つて恍惚と心に過去の姿を追ひ求めてゐた。と、また先刻御殿の茶席で見た葛城の姿が、錦繪の古めかしいまぼろしの中に髣髴として鮮麗な色を現はしてきた。ぬけるほど白く化粧つた襟頸に黒絹のいたづらが絡つてゐるのもあどけなく、細面の顏が一層細く見えるほど大きく張つた兩鬢の婀娜めきたるに、玳瑁の大櫛八本の笄銀色燦爛たる花簪を透いたところもなく飾して、京風の伊達兵庫の金元結にとりつけた紅いべらの色紙までが艶めかしく眼をひいた。白羽二重のつゝましやかな詰め襟の片方だけ紅色夕染の裏を返へして、胸一杯に結んだ黑繻子の前帶の下に兩の手を隱し、觀客が息を殺して一齊に視線を集めてゐる次の間の杉戸の陰か

ら舞ぶりの摺り足でしづしづ現はれて釜をのせた卓の前の床几に進んで腰をおろした。

春雪は、葛城の現實の生活の傷ましさは憐れんでゐるが、この場合彼はたゞ彼女の妖麗なる姿態を愛でゝゐるばかりなのである。古い江戸の錦繪によつて得られる快感を假りに彼女の姿態と色彩の鑑賞によつて代り求めやうとしてゐるのである。

彼はいろ／＼に視點をかへて姿態の變化を想像しながら、それを頭の中で絹繪の面に描いて見た。初め杉戸の陰から立ち現はれてきた正面の姿よりも、また纖やかな手先で袱紗をさばく古風の形よりも、やがて點茶を終つて靜に一禮してあの銀絲の簾垂れに緋の絲でその椽を繡ひとつた背一面の大模樣を觀客の方に向けてゆるやかに引込んでゆく裲襠の後姿を斜に描いて見るのもまた面白いと思つた。

そんなにして繪になるほどの美しい光景を、いろ／＼想ひ浮べてゐると後からあとから面白い考が浮んできた。梅幸の十六夜が廓を脱けて出てくるところも滴るばかりの色氣はあるが、深紫の綿帽子に面を包んで下げ帶にした福助の小春が、黑縮緬の着付けに緋の長襦袢の艶めかしい姿態で花道から舞臺にかゝつて紙屋の内の樣子をそうつとうかゞひながら、そのまゝ用水桶の小蔭に身を忍ばすところの風情の方が遙に好ましい。江戸の清元と浪花の淨瑠璃。春雪はそんなことまで次からつぎへと思ひ樂んで藝術的空想に耽つてゐた。

と、すうつと後の襖をあけて、

「ごめんやす。」といひながらお君が入つてきた。

「まことにお待ちどをさんどした。今さき電話をかけて見ましたら、屋形でまだ點茶からかへつて來や

はりまへんいふことゞしたから、もすこし後になつてまたかけて見ます。大若さんでそない云ふてはりました。も、ちよつとしたら此方からまたきいて見まほ。」

「あゝ、さうですか。まだ都踊からかへるにはちよつと間があるから。」

お君は立つていつて今春雪がぬぎすてゝおいた着物や長襦袢を一枚々々鄭寧に疊んで、違ひ棚の亂れ箱に入れてその上から鬱金木綿の風呂敷を被せかけた。

「こゝもう形付けまへうか、それともまだお描きやすか。」

「いや、もう形付けてもらひませう。」さういつて春雪もともに立つて筆を洗つて繪絹や毛氈を收めた。

「それからねえお君さん、何か出來るものでいゝから、酒を持つてきてください。隣家で好い音がしてゐるのをきいてゐると何だか急に寂しくなつてきて堪らない。」

「ほんまにいな。何家どつしやろ。」

「なら繁かな、それとも藤の舍か。」

「藤の舍さんどつしやろ。」お君はぢつと耳を澄まして三味の音じめをきゝながら「あの方この頃ようよう來てはりまつせ。」

「羨ましい仲だな。」

「そやから、あんたはんも劣けんやうにおしやすな。」

「どうつかまつりまして。いつも捌かれてばかりゐる人間なんですから。」

「きつい云ひやう。今に葛城さんがきやはりましたら、そない云ひまつせ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうぞ。」

「ほんならおつき持つて參じます。ほてまた一遍きいて見まへう。もう歸らはる時分どつしやろ。」

お君はさういつて、すら／＼と立つていつた。

いつまでも聞えてゐた隣家の三味の音がやがて絶え／＼になつたと思つてゐると、思ひがけもなくすぐ耳の傍で高臺寺の鐘がごうんと一つ高く響いて、しめきつた障子に微かな顫動を與へた。そしてその鐘の餘韻が長い間そこら中に立ち迷ふて暫らく消えわづらひながら泣くやうに細くほそく搖れてゆくと、また一つごうんと撞き出す。やがて十一時を數へおはると、三味の音色もそれとともにふつりととぎれて、四邊の夜は一層靜まつた。

「おほきにお待ちどをさん。」といつてお君が烏賊のおつくりに鰉の燒いたのを添へて酒を持つてきた。

「それから今また電話をかけましたんどつせ。ほしたら大若さんでいはるゝには、點茶からはおかへるにはもうさつきにお歸りやしたけど、本人さんの實家にきつい病人やたら出來たいふて、そつちやへいかはりましたさうにおす。ほて、來とくれやすのどすか、來とくれやへんのどつかて聞きましたら、何ともいふていかはらしまへんさかい、內でもえらい困つてます。そない云ふたはりますのどつせ。えらい鈍なことどすなあ。」お君は氣のぬけたやうな顏をしながらさういつて銚子を取り上げた。

「なんともいひ置いていかないといふのが可怪しいな。」春雪は一と口唇につけながら眉根に心持ち不安の色を浮べた。

實家に病人のあるといふのはよくきこえてゐる。それとも急に惡くなつたのであらうか。晝間立ち別

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れる時には堅さうな口を利いてゐたが、大阪のお客とは遠から點茶の晩の約束がしてあるといつて斷りさうにしたのを、强ゐてこちらへ靡きよせるやうにしたのであつた。かねての話の樣子では先客には隨分長い間ひいきになつてゐるらしい。それをばまだ昨日今日の淺い馴染の自分が、平常ならばとにかく彼等にとつては一年中でも最も晴れやかな一日であるべきその今宵の花をば橫から出て奪はうとするのは執心がすぎて野暮である。

「寄せてもらひますいふたら、寄せてもらひます。」自分であれほど堅く約束してゐたくらゐだから來られるものなら來るだらう。それでももし來なかつたらその時心の決めやうもある。さう思ひきめてしまふと、彼は手にしながら飮みさした盃を一息に乾した。

「どないしまほ。も一遍せいて見まへうか。」お君はつゞけて銚子をさし出した。

「まあしばらく打棄つておいたらいゝでせう。來ないんなら實家へゆくときにさういひおいて出るでせう。」

すると遠くの廊下の方で幽かに話し聲とゝもに人の步く足音が近づいて、

「お君さん」と、一聲高く内の芧姆が階子段の下から呼んだ。

「はあい。」と、お君はそちらに返辭をして「あ、來やはりました。」

と、いひながら耳を澄ましてゐると階段にさらく と衣摺れの音がして、やがて下からついてきた芧姆があける襖の間から、浮世繪の中からぬけ出たやうな葛城のすらりとした姿が表はれて微笑みながらしづく 入つてきた。人目を忍ぶために茶席の華美な裝ひは一切更めて、いつものやうに年に合はしては

地味すぎる黒縮緬の羽織にやつぱり晝間着てゐたとほりの黒地にも少し細かい白の立縞になつてゐるお召の襲ねを着てゐるので、繊細い立姿がひとしほあでやかに細つて見ゑる。頭髮の飾もみなぬき取つて、伊達兵庫の太い金元結だけが黒いところにきらきら光つて、顏も柳の葉なりに刷いた眉黛だけを殘して頸から上を奇麗に油で拭きとつてゐる。

「姉さん、おほきに。今晩は。」と、青く光る口紅の小さい唇を綻ばせながらお君の敷いた火鉢の向の蒲團にきて座つた。

「病人がまた急に惡いとかいふのはどうしたえ。」

「そんなことおへんやろ。」訝りもしずにいふ。

「そんなことおへんやろて、先刻お君さんが大若に電話を掛けたら屋形でお母はんのところに病人が出來ていかはりましたといつてゐたといふぢやないか。ねえお君さん。」

「へえ、そない云ふたはりました。」口の先で、いひながら、お君はうつとりと葛城の髷を眺めてゐた。

「さうどつか。そら何か屋形の人が思ひちがへしたんどつしやろ。」葛城はさあらぬ體でいつた。

「あんたの內はよう思ひちがへをする屋形どすなあ。」

春雪は戲談らしう疊みかけてさういつたが、葛城はぼうつとしてそれには答へず。

「姉さん、私今恐うおしたえ。幌掛けてましたけどお月さんが明うあかうおつしやろ、ほんであこに木娘がすうつと立つてるのがよう〳〵見えました。私俥の上で慄然としました。」葛城はお君の方を見ながら舞妓のいふやうな小供らしいことをいつて、細いのべの煙管をとり出した。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あゝ、さうどつしやろ。ほんまにあこのとこ恐つせ。どなたはんかて、そない云ふて氣味わるがらはります。」

「晝間見たんぢやそんなでもないがなあ。夜、月の明りにあれは女が袖を搔合せて立つてゐると思つて見るからさう見えるんだよ。」

「何かそない申しまようか。」お君は立ちさうにして訊く。

「さあ。あんたは。」

「私まだ夕飯たべしまへんのどつせ。」

「都踊では食べないの。」

「あんなん何やわからしまへん。」

「よく食べる人だなあ。どうぞお好きな物を御遠慮なく。」

「ほんなら姉さん、えらい濟んまへんけどなあ」といつて葛城の訛へるものをよく聞きとつてお君は、

「畏りました。」

といつてまた襖の外に出ていつた。(前篇おはり)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授
文學士 宇野哲人先生新著

新刊發賣

四書講義 大學

大學は儒教の目的を最も善く組織的に叙述せるものなりとは著者の創唱する所なり。此書は如上の見解によりて平易明晰に講述せるものにして冠するに大學要旨を以てし且つ附するに索引及之と密接の關係ある幾多有益の研究を以てす。苟も儒教の何物たるを知らんと欲せば必ず此書を繙きて著者の圓熟せる講話を聞かざるべからず。敢て識者の一讀を希ふ。

菊判上製美本
全壹册箱入
正價金壹圓廿錢
郵税金八錢

東京帝國大學文科教授
東京高等師範學校教授
宇野哲人著

（好評激甚）三版

支那哲學史講話

本書は上古より清末に至る迄の支那思想の大要を極めて平易簡明に叙述して最もよく要領を盡くせるものなり。特に清朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裏に革命を惹起するに至りしか支那の新人の思想は如何なる傾向を帶ぶるかは著者の最も留意せし所にして從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依て補足せられて亦遺憾なし。本書は又附錄として一々原文を掲げ直ちに堂奧を窺ふの便に供し亦著者の議論の根據あるを知らしむ。要するに初學者にも專門家にも座右に缺くべからざる絶好の新著なり。

菊判上製全壹册
紙數四百五十頁
正價金壹圓六拾錢
郵税金拾貳錢

英國ブラクフォックス原著
日本 今西嘉藏氏譯

●將來の大問題

太平洋の爭覇戰

全壹册

特價金五拾錢
郵税金八錢

（中付四の一）

東京市神田區
表神保町七
大同館發行
振替貯金口座
東京八七貳番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

野口米次郎題詩　（布表紙美装）

佐佐木信綱序詞　（正價七拾錢）

片山廣子作　（郵便六錢）

歌集 翡翠

全一冊

狂熱と理智との爭、ありのまゝに事物を見て進まうとする心と世間の因襲と普通の常識とに依る判斷の爭、これが著者の今日までの心の經過と見られる。著者の歌は外面に於いて頗る平易である。併しそれが凡て此爭鬪の濃き陰影を印してゐることに於て其特徴を見出される。靜かな晴れた晝の如く明らかなるものがあると同時に雨の闇夜の如く暗いものがあるのはその爲である。矛盾は爭鬪の影である。覺めむとして覺め得ざる心の姿である。眞面目なる婦人の内的生活の記録の一片として本書を我が文壇と文壇以外の人々に推薦する。

發賣所　神田表神保町　東京堂

（中付四の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

天才號

雄辯臨時増刊

▼横井小楠を憶ふ……海老名彈正

▼民族的天才ゲーテ……臺凌雲

▼神を見たる人綱島梁川……豊田大誓

▼熱火の天才バイロン……高田邦一

▼天才的雄辯家馬場辰猪……矢野花瘦

▼農民畫家ミレー……大川政八

▼國木田獨歩を懐ふ……中桐確太郎

■高杉晉作（新講談）……伊藤痴遊

■未定……保科孝一　内藤鳴雪　尺秀三郎　内ケ崎作三郎　野口米次郎　中内蝶二　下田次郎　田中義成

▼尾崎紅葉と私……高瀬文淵

▼ロマン・ローラン……増田篤夫

▼一葉と其の作品……清水柳三郎

▼ハルサックとベルレーヌ……三富義臣

▼天才らしい凡人の一生……鈴木秋風

▼月夜の曲ベトーフェン……かすみの人

▼巣林子と西鶴……文學士 靜浦學人

▼風雲を叱咤するロイドジョージ……快鷹山人

物心……

■天才の殘した警句……

▼天才の片鱗……

▼三天才戀物語……

▼ラマルク……三上於菟吉

▼グレー墓畔吟……文學士 川島堰一郎

■新天才論……法學博士 新渡戸稲造

■誰か天才……文學博士 谷本富

■靈妙なる天の賜……貴族院議員 仲小路廉

■天才不遇の時代……代議士 林毅陸

■天才奇談……文學士 横山健堂

■杜甫と李白……福本日南

▼經濟界の三天才……永川俊美

▼未定……文學博士 芳賀矢一

▼詩人雲井龍雄……兒玉花外

▼軍事的見地より觀たる那翁と怪傑……陸軍大尉 本山薫

■畫壇の天才……笹川臨風

■天才の變質と悒鬱性……

號に限り 金六拾錢 郵税三錢

東京市本郷區駒込
大日本雄辯會
振替東京三九三〇

（中付四の三）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■澁川玄耳先生著

中村不折畫伯口繪

名取春仙畫伯裝幀

縮刷

日露戰役 從軍三年

日獨戰役 小敵大敵

▽好評嘖々三版出來△

三五判紙數壹千頁余 總クロース特製函入

▽正價金壹圓參拾錢 小包送料金八錢

日露戰役の文學的產物として唯一の好評を博したる『從軍三年』は百萬從軍の士に代つて有らゆる從軍の辛酸と愉快とを諸士の子孫に傳ふべき好紀念なり『小敵大敵』は山東に關する著者の新著にして從軍三年とは別個の地位に立てり青島戰役の最後に亘り各種の觀察と議論とを包含す

■發行所 東京日本橋鐵砲町六番地 振替東京(壹五〇五六番) 磯部甲陽堂

■東京神田區錦町一丁目 振替東京(六貳九四番) 誠文堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



放火殺人犯（二幕九場）

野上彌生子

時――現代

場所――東京郊外の森の中。

登場人物――

大貫　先生　　宗教家にして教育家

河　上　淳　　大貫氏の崇拜者なる青年

桑田　右一郎　　大貫氏の經營せる中學校の敎師

桑　田　春　代　　右一郎の妹、大貫家の家庭敎師

少女（まり子／つる子）　　大貫氏の娘

その他生徒　　事務員、など

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第一幕

第一場

東京郊外の森の中。大貫氏の經營せる基督教主義の特色ある中學校の構内。木立ちの間に右手に遠く新築中の赤い煉瓦の講堂が見える。これを背景にして大貫氏の洋風の住宅の後庭が舞臺の前景を一杯に占めてゐる。庭に二つの花壇がある。秋の草花が咲いてゐる。

九月上旬。第二學期が頓て始まらうとする頃の或る日の午前。幕の開いた時、舞臺は暫く空虚。たゞ窓の内側からオルガンの音が陰鬱に響いてゐる。そのうち庭に向いたドアが開いて妹娘つる子が走り出る。美くしくて快活な少女。姉まり子がその後から續く。妹と反對に沈んだ容貌。殊に顔色が蒼白で、妖精の娘のような、特徴のある表情をしてゐる。

つる子。あら、私のカンナが又眞つ赤に開いた。

まり子。私の花壇には桔梗がどつさり咲いたわ。今日は初めて白が咲いてよ。

つる子。桔梗なんか幾ら咲いたつて詰らないわよう。

まり子。なアぜ。あなたが嫌ひだつて私は好きですもの。そんなに惡く云ふものぢやないわ。

つる子。あらいやだ。カンナの方が幾らいゝか知れやしないぢやないの。色だつて、まつ赤で、綺麗で。そいでもつて後から〳〵と咲いてよ。

この問答の間に彼女等の家庭教師なる春代が室内から出て來て廊下に立つて此方を見てゐる。細面の容貌、地味な、質粗な服裝。妹娘が目敏く見つける。

つる子。春代さんはどちらが好きでせう。私聞いて見ようや。

つる子此方へ近づいて來た春代の側へ駈け寄つて叫ぶ。

つる子。春代さん、あなた此カンナと桔梗とどちらがお好き？

春代。そうね、何故そんな事をお聞きになりますの。

つる子。だつてもねえ。私はカンナが好きで桔梗が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嫌ひなんでせう。それにお姉様つたら桔梗が好きでカンナは嫌ひですつて。

まり子。 私カンナが嫌ひだなんて一度も云へはしないことよ。たゞ桔梗が好きだつて云つた計りですわ。

春　代。 全く桔梗はしほらしい花ですわねえ。私も大好きで御座いますわ。

つる子。 あらいやだ。春代さんまで桔梗が好き？ぢやカンナは私ばかりになつて詰らないわ。

春　代。 いゝえ。私はカンナも好きですわ。どちらも同じ位ゐに好きなのですからよろしいでせう。さあそれで仲直りを致しませうね。

春代左右に少女の手を取つて微笑する。つる子は無邪氣にその微笑に報いて笑ふ。併しまり子は陰氣らしい表情になる。

まり子。 私ね、桔梗の花を見るとお母様の事を思ひ出してよ。

春　代。 なぜで御座いますの。

まり子。 お母様は、桔梗が大好きだつたのですもの。ですから、お亡くなりになつた時にはね、お棺の中にこの花を一杯詰めましたの。手も足もお身體もみんな埋まつて仕舞つて、お顔だけ花の中から見えてゐましたわ。

つる子。 私そんな事、何んにも覺えてないことよ。

まり子。 當り前だわ。つうちやんは赤さんだつたのですもの。

姉妹の對話の間に春代は何んとなく不安の狀を現はす。

つる子。 さうねえ。お母様のお亡くなりになつた時には私二つだつたんだわ。だから私お母様の事考へて見ようたつてはつきり分らないわ。お顔だつてさうよ。幾らお寫眞を見たつて何んだかぼんやりして嘘のようなのよ。

まり子。 本統はお寫眞よりかもずつとお優しいお顔だわ。春代さんにどこか肖てゝよ。

春　代。 あら。まり子さん。そんな事を大きな聲して仰しやるものぢやありませんわ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春代狼狽してまり子を制す。まり子は無心に續ける。

まり子。いつだつたかお父様もそう仰しやつてよ。春代さんの横顔はどうかすると大變お母様に肖て來るのですつて。

春代。……どうぞ、そんな事仰しやらないでね。

まり子。なアぜ、私のお母様に肖てゐらしてはお厭？

春代。飛んでもない……たゞね、小さいお孃様方が誰は誰に肖てるなんて、そんな噂をなさるのは餘り品のいゝ事ぢや御座いませんの。

まり子。あゝそうなの。いけなかつたわねえ、御免なさい。

春代。いゝえ。あなたはいつもまあ、何んて素直な方でせう。

春代、まり子を抱くようにして落涙す。つる子はその涙を不審らしく見る。

つる子。春代さん。また蟲齒がお痛いのねえ。

春代。えゝ。

つる子。今度こそ金をお詰めなさいよ、ね。學校の河上さんも金齒でせう。私、だから河上さんとお話する時、口のところ計りぢつと見てるのよ。

まり子。いやなつうちやん。お轉婆ねえ。

其處へ庭園の外輪をなせる低い生垣の下手から一人の青年登場。少女等の噂した河上淳である。痩せて脊が高い。神經質らしい青白い、感傷的な容貌。彼は故郷の田舍から今着いたばかりの旅裝である。粗末な紺の脊廣に麥藁帽を冠つてゐる。

河上。歸つて來ましたよ。

つる子。あら、河上さんだわ。

つる子が一番に駈け出して行く。まり子と春代も續く。今まで主として上手で動いてゐた舞臺上の一團が、今度は稍下手に移る。

まり子。お歸りなさい。

春代。割りにお早かつたのねえ。

河上。早くもありませんよ。とうと二タ月田舍で暮らしましたからね。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つる子。　河上さん。いつ歸つてゐらしたの。林檎忘れやしなかつて？

河　上。　大丈夫です。つうちやんとあれ程約束してあるのですもの。

つる子。　だつて持つてゐらつしやらないぢやないの。

河　上。　今小使を停車場に取りにやりましたから。もう三十分ほどお待ちなさい。

春　代。　大變正確なお約束ねえ。

一同笑ふ。笑ふ時河上の細い金歯が光つて、彼の顔に初な子供らしい表情を作る。

河　上。　弱りましたよ今度は。

春　代。　さうでせうね。

河　上。　家の後始末なんてものが斯んなに面倒なものとは知りませんでしたね、初めは何から手をつけていゝか分らない位でしたよ。僕の家はまた他家とは比較にならないでせうがね。

春　代。　お察しいたしますわ。

河　上。　しかし僕の意志は堅く極まつてゐるし、且つ僕がそれから何かの利益を得やうとするわけぢやないから、まあ事はしやすかつたのですが……

彼は斯う云ひかけて言葉を切る。

河　上。　委しい話はいづれ後にしませう。未だお稽古があるんですか。

春　代。　繪畫がも一時間。

河　上。　ぢやそれがすんだら直ぐと歸つてゐらしやい。桑田君はゐませうね。

春　代。　お寄り下すつて。

河　上。　えゝ。ぢや、待つてますよ。つうちやん、林檎が來たらすぐと開けてお食んなさい。——（この後は春代に向つて云ふ）——僕の林檎畑から取れた林檎を食べるのもこの秋が最後ですよ。ぢや失敬。

春　代。　左様なら。

つる子。　左様なら。

河上。まり子さん。先刻から默つて僕の顏ばかり見てるんですね。今年は海岸に行きませんでしたか。あなたの青い顏色がつうちやん見たいに紅色(べに)にならないものかなア。

（河上は通りすがりにまり子の頰をつゝいて退場。）

まり子。私、河上さんは何んだか怖いの。

春代。どうしてゞせう。

まり子。あの目を見てると怖いわ。いゝ人だけれども怖いの。春代さんは怖くなくつて？

（春代は或るショクを受けたものゝ如く眞つ靑になる。）

春代。怖い目！　ほんとうに怖い目ですね。

第二場

同じ森の一隅に在る教師館の、木造の簡單な洋風の一室。右手の二つの窓の下に大きなデスク、本箱、椅子、籐の寢椅子などがかたまつて、その一廓は自然と桑田右一郎の書齋になつてゐる。反對の窓即ち見物席から左手の一廓が妹（春代）の居るところである。女らしい小形な書き物机、一寸とした戸棚、椅子などが並んでゐる。机の上の花瓶にはダリヤが二三本投げ込んであつて、右手の窓の下の排列の、男性的に無裝飾なのと對照をなしてゐる。これ等の家具の二つの集團の中央に大形の圓卓が一つあつて、周圍に二三の椅子が置いてある。其處はこの部屋での客間の用を務めてゐる。その圓卓を挾んで桑田と河上が話してゐる。

同じ日の午後。

桑田。それで君の父(ファーザー)の遺產といふのは一體どの位あつたのだ。

河上。殆んど五十萬近くもあつた。僕は今日までよく知らなかつたんだがね、そんなにあらうとは意外だつたよ。

桑田。それを皆んな分けて仕舞つたんだね、君以外の人達に。

河上。この學校に寄附した金とあの講堂の建築費の外はすべてそうだ。嚴正な意味に於て僕は今無一文だよ。これからこの學校の一教師として働いて貰ふ金より以外には、僕の金はなくなつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

桑田。 思ひ切つてやつたねえ。全く。金持ちの子供と生れた君にして初めて出來る事だよ。

河上。 皮肉かい。

桑田。 否や。皮肉ぢやない。本統にそう思ふよ。何をしようとするにも一番に金の事を考へさせられるような位置に在つた者には、到底出來る事ぢやないからね。

河上。 そう云はれると、僕と云ふ人間が如何にも金の價を知らないで育つたように聞えるね。君の云ふ意味は物質物に傾き過ぎてるし、僕の說は餘りに理想的かも知らないが、僕に云はせれば、僕ほど金の價値を知つてゐる人間はないのだ。知り過ぎてる位だ。知り過ぎてるから怖ろしいのだ。僕はこんな巨額な財產を遺して死んだ親爺の事を委しく君に話す機會を持たなかつたが――斷はるまでもなく、それは我々の友情には無關係な事だよ。僕は親爺の事を誰にも話し度くなかつたんだからね。――それを遂一話したら君だつてよく分つて呉れると思ふ。本統に親爺の一生涯を思ふと怖ろしくなるよ。

桑田。 君の父が金錢の極端な崇拜者であつた――君の前で失敬だが――その主人ではなくつて、寧ろ奴隸であつたと云ふ事は、僕だつて承知してゐる。その奴隸の心と方法を以つて搔き集めた金を、君が自分の物となし得なかつた純潔な感情も分つてゐるよ。

河上。 僕が新たに話そうとしてゐるのはそれ以上の事だ。親爺を金錢の主人としないで、奴隸たらしめるまでに至つた悲しいコースだ。死ぬ時の彼は殆んど人間らしい心を失つてゐた。彼の情意は金錢のために――四十年來彼が忠實に奉仕した主人のために醜く押し歪められ、蝕ばまれてゐた。僕の鄕里の附近では、「鬼」と云へば、もう親爺の事だつた。併し二十時代までの彼は決して「鬼」ぢやなかつた。矢つ張し若い、純潔な青年だつた。ところが、彼は不幸な戀愛をしたのだ。或る女から裏切られたのだ。僕と外に二人の弟妹

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を生んだ女——僕の母親は、單なる金のために良人を捨てたのだ。子供を捨てたのだ。その時親爺は君の所謂金の價値を彼一流の見解で深刻に感じさせられたのだ。血みどろになつてそれを感じたのだ。

桑田。君の父の過去にそれ程の悲劇があつたとは知らなかつた。同時に、それは例としては珍らしい事でもないね。よくある話ぢやないか。

河上。君にはそう感じられるだらう。第三者から見れば通俗小說のエピソートに過ぎないのだからね。然し僕に取つては珍らしい、珍らしくないの問題ぢやない。その悲劇の主人公が僕の父母であつたと云ふ事實がたまらないのだ。それからの父の變化を想像して見玉へ。呪はれた人生觀——冷酷な自我主義——何一層わるい極端な拜金主義——奴隷だ。斯くまで一箇の人間を支配し、威壓した力を何んだと思ふ？　僕が金の價値を知り過ぎてゐると云ふ意味が分つただらう。

桑田。分つた。同時にその魅力から徹底的に脫却しやうとする君の努力もよく分る。然しね、君は後悔する事がないだらうか。

河上。何を後悔するのだ。それだけの金を皆んな人に呉れてやつて、自分が一文なしになつたと云ふ事をかい。

桑田。それもある。……

河上。君の目には僕はまだそれ位危かしい人間にしか見えないのかねえ。情けないな。

桑田。否や。そんな意味ぢやない。今日の君が決して危かしいと云ふのぢやない。寧ろ君は一番今がしつかりしてゐる。一番强くなつてゐる。一番危かしくなくなつてゐる。その事は僕も信ずるよ。然しその强さは、君の今の立場が幸福に統一されてゐる、理想的に固められてゐる、と云ふ前提から生じてゐるのぢやないかと思ふね。君自身の力のみで突立つてるのぢやない。蹈み臺があると僕は信ずる。若しその前提が破壞れても、君の足の下にしつかり蹈まへた積りのも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のが突然ぐら〳〵になつたとしても、矢張り君は今の通り強くなり得るだらうか。

河上。君の暗示は餘りぼんやりしてゐる。併し僕が今自分一人の力のみでしつかり立つてゐるのでないと云ふ君の言葉は正しい。僕には確かに踏臺がある。倚り縋る柱がある。それは君にも分つてゐる通り大貫先生に對する尊敬だ。それから君の妹に持つてゐる愛だ。大貫先生は自殺にまで陷つた悲觀から、僕を救ひ上げて吳れた恩人だ。春代さんは愛に飢ゑながら愛する事を知らなかつた僕に、眞實の愛を敎へて吳れた人だ。而して僕に初めてこの世の美と希望を感じさして吳れた人だ。この二人がなかつたら、僕はもう三年前に生きる力を失つてゐたに相違ない。全く、あの頃の僕は絕望のどん底に投げ込まれてゐたのだからねえ。骨肉に失望したのはもう少年時代からだ。世間を見る目が出來た。而して目に入つたものは荒凉たる曠野であつた。振り返つて自己を見ると、惰弱、無能、痴愚に愛想が盡きた。唯つた一つ、一番しつかり捉かまつてゐた筈の「神」をさへ、僕は疲れて投げ出さうとした。その時ふとした機會で讀んだのが大貫先生の『信仰と解脫』だつたのだ。

桑田。君のそれまでの心持ちは僕にもよく分るよ。それ以來君が先生の忠實なヨハネとして、ぐんぐん先生の世界へ這入り込んで行つた足跡は、批評家としてはたから見てゐた僕にさへ愉快な程だつた。而して生れたまゝの心の純眞を、その年まで少しも失つてゐない君が美やましかつた。

河上。賞めてゐるのかい。

桑田。否や、惡口も云つてるのだ。君が自分に容易に保存されてゐる純眞を、誰にでもその通りに完全にあるやうに、きめてかゝる事は危險な事だよ。君は自分の周圍にゐるものは誰をでも土の上から離したがる。自分と一緒に天に引つ張りあげたがるのだ。

河上。僕もそれは氣付いてゐる。併しね、僕として

ては然うまでしなければ堪へられないのだよ。今まで餘り醜いものばかり見せられて來たから。

桑田。その點は君はまるで子供だからな。

春代が這入つて來る、大きな籐細工の籠に林檎の一杯入れたのを提げてゐる。

春代。早速開けましたわ。

河上。痛んでやしませんでしたか。

春代。否え。一つも。先生のお家の籠を拜借して參りましたの。お剝きして見ませうか。

春代籠を卓上に置き、戸棚からナイフと洋食皿を出して來て剝き始む。

桑田。泥坊見たいな奴だな。人の荷物を勝手に開けて、慾張つて持つて歸つた上、早速食はうと云ふのだから。

春代。ひどいこと。そんな事を仰しやつて一番に召し上るのはお兄さんでせう。

桑田。何んでもいゝ。早くむけ。いゝ香りだね。

春代。ほら御覧なさい。

一坐の輕き笑ひ。春代剝いた林檎を小さく切つて、皿に盛つて出す。而して又一つを剝きかける。

春代。私、林檎畑といふものが一度見たいのですの。こんな眞つ赤なのが、棚になつて續いてるところはどんなにか綺麗でせうねえ。

河上。僕があなた方のお國のざぼんのなつてる所を見度いのと同じ心持ちですね。

春代。でもざぼんなんて然う澤山一ッところに植つてやしませんもの。それに比べると林檎は畫のやうだらうと思ひますわ。廣い、見渡す限りの畑がみんな林檎なのでせう。而してそれが一緒に眞つ赤になるんですもの。

河上。あなたの空想ほど詩的ではなくとも、まあ綺麗ですよ。

桑田。あァに。こいつは食ひ意地の方が先きだから、然うやつて枝になつてる新鮮な奴を、丸かじりに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する事でも夢想してゐるのだね。

春代。それはお兄さんですわ。

河上。ハヽハヽハヽ。

桑田。そうだ。春代。先生はゐらしたかい。

春代。先刻(さつき)普請場から歸つてゐらつしやいましたわ。河上さんにはあちらでお逢ひになつたのですつてね。

河上。えゝ。先生と御一緒に初めて中へ這入つて見ました。もう殆んど出來上りましたね。あれまでになつてゐやうとは思ひませんでした。

桑田。ぢや、僕は一寸と失敬する。

河上。また原稿かい。

桑田。先生の論文集の英譯だ。學期の始まるまでにやつて仕舞ふ積りだつたが、中々はかゞ行かなくつてねえ。

河上。併しえらいものになるだらうねえ。先生の論文なんか讀者の範圍の狹い日本語だけに留めて置くべきものぢやないのだ――印刷は米國(あちら)でやる筈ぢやなかつたのか。

桑田。此方でする事になつたのだ。尤も費用はあちらの教會の武井君が持つんだがね。來月一杯には刷り上げて、この冬の先生の渡米の時に持つて行けるやうにしようと云ふのだ。

河上。またすばらしい演説をやるだらうねえ。武井君だつたかゞ評したぢやないか。先生の論文を讀んだゞけぢやまだ本統の先生は分らない。逢つて話して見なけりや分らない。尙それでも分らない凡てのものが、演壇に立つた時の先生から初めて放射されるつてね。

桑田。ふむ。武井がそんな事を云つたかねえ。それとは少し意味の違つた話だが、或る西洋の詩人が一人の有名な牧師の説教を聞いた時斯う云つたそうだよ。「あの人の言葉は余りに鋭い。余りに沈痛過ぎる。額に銘印せらるゝ者が呼び出すやうな聲だ、恐らくあの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人は過去に何等かの罪を犯したのだらうつて。」怖ろしい批評だねえ。―それでと、僕は一寸と失敬して先生のところへ行つて來るよ。君はゆつくりして行き玉へ。

河上。そうか。それぢや失敬。

春代。行つてゐらつしやい。

桑田机の上の書き物をまとめて退場。河上と春代と對坐。

河上。桑田君は何んだつてあんな牧師の事なんぞ思ひ出したものですかね。あんな話を先生の場合に比較するやうな云ひ方をされると、僕は可なり不快ですよ。

春代。――あなたは余り神經質ですわ。

河上。併し、これで僕はこの頃は可なりのんきになつた積りですよ。たゞ特別のもの――僕が一番大事がつてるもの――あなたゞとか、先生だとかに就いてだけは神經質です。極端なほど。そりや自分にも氣がついてゐますがね。――それが惡い事でせうか。

春代。惡い事だなんと、私申したのぢやありませんわ。

河上。僕はあなたから咎められたやうに感じたのです。昔の言葉に「塵をすゑじ」とか云ふ事がありますね。僕は自分の尊敬してゐるものや、愛してゐるものに對しては、絶えずそんな心持ちがしてゐます。他人がそうして呉れないのさへ不快なのです。

春代。――私なんぞそんなに仰しやつて頂いては罰が當りますわ。

河上。何故です。

春代。――あなたから、それほど大事がられる値打ちは私には御座いませんもの。――

河上。あなたは未だそんな他人行儀な事を僕に云ひ度いのですか。あなたは僕の妻になつて呉れる筈の人ぢやないのですか。

春代。――河上さん。どうぞ、然う仰しやらないで――

春代泣く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

河　上。何をお泣きになるのです。僕は——不安でたまらない。目の先がまつ暗になるやうな氣がします。あなたは——はつきり云つて下さい。僕を愛してやしないのですか。

春　代。——そんな事を——私今更あなたから念を押されなければならないのでせうか。

河　上。それぢや何故僕の妻になる事を躊躇なさるのです。僕には絶えずそれが疑問でした。どんなに二人で愉快にしてゐる時でも、話が結婚まで落ちて來るとあなたは屹度それを避けた、怖れるやうにした。僕がそれを心付かないとお思ひですか。その事では幾ら今日まで苦しんだか知れません。有らゆる怖ろしい想像までしました。その後から、すぐとあなたを對象として假りにもそんな不純な想像を抱いた自分を恥ぢました。あなたが最後の返事を怖れるのは、畢竟するに僕がまだそれを受けるに値しないといふのでせう。僕はいつまでも待たうと決心しました。併し僕に取つてあなたと云ふものが、どれ程必要であるかはあなたがよく御存じの筈です。僕はあなたを信じてゐます。——あなたは僕を失望させるやうな事は決してなさらない——

春　代。——否え。否え。私はそんな立派な人間ぢや御座いません。——あなたにそれほどまで思つて頂く値打ちなんか御座いません。

河　上。春代さん。

春　代。——私は罪人です、怖ろしい罪人で御座います。——あゝ——

河　上。何を仰しやるのです。しつかりなさい。たぜそんな滅茶苦茶な事を仰しやるのです。あなたが罪人——そんな事があつてたまるものですか。嘘だと云つて下さい。ねえ。早く。あなたは何か餘り考へ過ぎて、興奮してしまつたのだ。

春　代。否え。嘘ぢや御座いません。——あゝ何もかも云つて了ひたい。——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

河上。それ程苦しい事があつて、今まで何故僕に云つて下さらないのです。

春代。――皆んなお話したら――本統の私がお分りになつたら、二度とあなたに愛して頂く事は出來ますまい。それが悲しう御座いましたから。

河上。お約束しませう。僕はそれがどんな事件であつたにしろ――

春代。否え。否え。どうぞ早まつたお約束をなさらないで下さいまし。あなたは嘘つきになるかも知れません。――

河上。一體どんな怖ろしい事を僕は聞かなければならないのだらう。――さあ、春代さん、僕は決心しました。どんな事でもよろしい。直ぐ仰しやつて下さい。一分間でも待たせるのは殘酷です。――

春代。河上さん。私に手紙を書かして下さいましな。どうぞ。明日の朝まで。私はその手紙で何もかも申上げますわ。

河上。――

春代。どうぞそれまでお待ち下さいましね。

河上。〔點頭く〕

春代。その上で――若し私の過去をお許し下さる事が出來ましたなら――

河上。過去？　あなたに何の過去があると云ふのだらう。僕を愛して呉れた、僕の光明であつたと云ふ外に、何の過去もある筈はない。――僕は氣が狂ひさうだ。

春代。河上さん。

河上。僕はいつも誰にも云つてる通り、大貫先生とあなたに救はれた人間です。先生とあなたの力がなかつたなら、僕は生涯暗黑だつたのです。地獄だつたのです。分けてもあなたは僕の生きて行く目的です。

春代。お許し下さい。ね、

河上。誤解しないで下さい。僕はあなたを咎めてるのぢやありません。感謝してゐるのです。本統です。

學校友達から『死靈』だの、『墓堀』りだのつて仇名に呼ばれてゐた僕の顏が、人並みに笑つたり、輝いたりする事の出來るやうになつたのは、皆んなあなたのお陰でした。それが――あゝどうなると云ふのです。

春代。お許し下さい！

河上。明日の朝が怖ろしい。默つて來つゝあるものが怖ろしい！

第三場

同じ部屋の夜。春代の机の上には靑い傘のランプがついてゐる。彼女はその上で手紙を書いてゐる。時々すゝり泣きながら。その內、ある興奮に捕へられて聲をあげながら椅子に凭れて泣き入る。その瞬間、後のドアが音なく開いて、兄の桑田登場。春代は氣がつかないで尙ほ續けて泣いてゐる。又机に向ふ。書いたものを默讀して見る。悲しくなつてまた泣く。兄は自分の椅子から始終を見てゐる。而してその時靜かに聲をかける。

桑田。春代！

春代。――あら、お兄さん!?

春代は狼狽しながら平氣を裝ふ。

桑田。何を泣いてゐるのだ。手紙を書いてゐたのだな。誰に出すのだ。

春代。河上さんへあげますの。

桑田。河上？ 河上なら晝間こゝで一緒に逢つたぢやないか。

春代。その時のお約束で書いてゐますの。

桑田。そうか。お前が河上へやる手紙を何も兎や角云ふことはないが、俺は何んだかその手紙が氣にかゝるのだ。どんな事を書いてやるのだ。

春代。――

桑田。見せなくもいゝから、差し支へがなかつたら、內容を云つて呉れ。

春代。なぜ、お兄さん。今までそんな事を仰しやつた事もないのに――

桑田。だから云つてるぢやないか。おれはその手

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

紙に限つて知り度いんだ。

春代。　いけませんわ。

桑田。　さうか。ぢや仕方がない。それぢや俺の聞くことに答へてくれ。それは何か秘密を打ち明けた手紙ぢやないかい。

春代。　秘密ですつて？

桑田。　大貫先生に關する秘密だらう。そんなに驚かなくもいゝよ。他に誰もゐやしない。

春代。　あゝ！

桑田。　今泣いてゐるところぢやないだらう。しつかりしなくちや駄目だよ。

春代。　――

桑田。　俺が今までその事に何んにも氣がつかないでゐたと本統に信じてゐたのなら、お前は思つた程もない不聰明な女だよ。併しそんな事はどうでもいゝ。兎に角俺は皆んな知つてゐる積りだ。一昨年の夏、米國から歸つて來て暫くお前と一緒にゐるうちに、先生とお前との間にあつたらしい事がすぐ感じられたのだ。しかし俺は別に不自然な事とも思はなかつた。幾らえらいと云つても大貫先生だつて矢張り一人の男だからね。まだ壯年時代を過ぎない男鰥だからね。自分の家に預つてゐる十九の女に愛を持つた事が別に不自然といふわけではない。俺は默つて見てゐた。一體俺はどんな事に關せず、何んでも少し離れて見てゐるのが好きなのだ。俺がお前見たいな眞劍な戀愛（ラヴ）を經驗しえないのも、又河上見たいに熱情を以つて先生のあとへ續き得ないのもその譯だ。つまり臆病者なのだね。

春代。　いゝえ。お兄さんは强い方ですわ。

桑田。　――今は俺の話ぢやないのだ――其處へ河上が現はれた。河上の目が意味深くお前の上に注がれ出したと同時に、お前の心にも變化が起つた。それは大貫先生に對する場合の、單なる尊敬から出た窮屈な修道院臭い戀愛（ラヴ）ではなく、若さが若さを牽く靈の流動だ。俺はお前が本氣で戀（コヒ）をし出したのを祝福した。而

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して二人の戀愛の順當な成長を尙ほ默つて見てゐた。しかし俺はたゞぼんやりと見てゐたのぢやないよ。或るとき、第三者としてお前達の間へ這入らなければならない日の來るのを待つてゐた。同時にその日の來るのを怖れてゐたのだ。それはどんな時機を指して云つてるのか、お前に分るかい。

春代。——結婚の事ですか。

桑田。結婚？ そうだ。そう云つてもいゝ。併し意味は違ふよ。俺は單に結婚の相談が打ち込まれる日を待つてゐたのぢやない。それだけならお目出度い話ぢやないか。何んにも怖れる事はありやしないさ。俺が心配しながら待つてゐたと云ふのは、その結婚話と一緒にきつとお前がやりそうだと思つた冒險に就いてだ。

春代。冒險？ 何の意味でせう？

桑田。頭の惡い奴だな。それが分らないか。お前が現にやりつゝある事が分らないか。其處に書いたその手紙の事を考へて見ろ。

春代。あの手紙は——もうかうなれば何んにも隱しは致しませんわ。あの事を打ち明けて、河上さんに許して頂く積りで書きました。

桑田。そうだらう。それが怖ろしい冒險だと云ふのだ。お前はその結果を豫想して見たか。

春代。——それを考へない位なら、今まで隱しては置きませんわ。

桑田。大きにそうだ。それでお前は河上が許すだらうと思つたのだねえ。お前の過去を皆な。あの男の思ひもかけぬ重大な過去を。——

春代。河上さんは愛して下さいますから——

桑田。その點は俺にもよく分つてゐる。河上の愛はお前があの男に持つてる愛以上でも、以下ではない。併し「愛はすべてを許す」と云ふ諺はすべての場合に當てはまるものぢやないよ。寧ろ特殊の例外に過ぎない。春代！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春代。――はい。

桑田。もし河上が許さなかつたとしたならどうする。

春代。あの方はそんな殘酷な方ぢやありませんわ。――私の苦しい立場をよく分つて下さると思ひます。

桑田。理解はするだらう。同時に絶望だ。而かも二重の絶望だ。大貫先生に對して。それからお前に對して。

春代。若しそんな事があつたら――ああ、私は死なゝければならない。――

桑田。そう興奮しては話が分らなくなる。冷靜に考へて見ろ。まあ、それ位なところですめば俺は結構だと思つてゐる。もつと怖ろしい事が起るかも知れないよ。凡ての秘密が曝露された時の河上の心持ちを思つて見ろ。あの男は日頃から何んと云つてゐる。先生とお前に救はれたと公言してゐるぢやないか。そしてお前と先生をば殆んど神聖視してゐる。――

春代。ですから――尙と私は默つてゐられませんわ。今思ひ切つて打ち明けなければ、私は一生涯自分の噓から免かれる事が出來ませんもの。

桑田。お前は假面を脫ぎ度いと云ふのだね。正直な、本統の自分を知らせようと云ふのだ。お前に取つては一番氣持ちのいゝ事だ。そうだらう。お前と云ふものゝ中に溜つてゐた、而して絶えず種々な形でお前を苦しめてゐた古血が、皆んな吐き出されるのだから。併し、同時にその對象には――それを吐きかけられた者には堪らない事ぢやないか。それが抽象的なもの――例へば「神」だとか「良心」だとか云ふものを、向ふへ置いておくだけで氣がすんでゐる間はまあ無難だが、それでは終にすまなくなる。乾度當の相手――人間――がまともに置かれるのだ。殊に河上の場合は殆んど運命的の打擊だよ。――それも何のためだ。單にお前が正直になりたい爲だ。純潔に對する子供らしい

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

慣からだ。我儘な自己解放からだ。

春代。――そんな、私がそんな我儘な心持から云ふものとお思ひになつて？　餘んまりですわ。――餘んまりですわ。

桑田。　意識した我儘ではないだらう。併し要するに我儘だよ。背負つた荷物の重さに堪へられないで、路傍に投げ出すのと大した相違のない事だ。春代！　俺はお前に今一度はつきり聞いて見度い。お前はお前の過去を本統に後悔してゐるのか。

春代。　――後悔してゐます。

桑田。　罪惡だと思ふか。

春代。――河上さんに對して、罪惡だと思ひます。

桑田。　そうか。然し河上と云ふ人間が現はれなかつたとしたら。

春代。　――。

桑田。　思つた通りを云へ。

春代。　――矢張りいけない事だと思ひます。

桑田。　それは何故だ。

春代。　私が先生を尊敬した事を――またお懐しく思つた事を、惡いと思ふのではありませんが、結婚の形式を取らないで、暫くでもそんな事實を作つたのは――否え、それよりもそんな事實を、秘密にしてゐた事は、卑怯だと思ひます。

桑田。　そうだ。お前達の過去の罪惡はその點であつて、且つそれだけに過ぎないと俺は思ふ。――春代、大貫先生をお前は本統にどう思つてゐる。

春代。　尊敬いたしてゐます。

桑田。　その過去の有無に關せずだね。

春代。　それは――そんな缺點がなくてすんだら、その上の事はありませんけれども――私の立ち場と先生とは又違ひますもの。

桑田。　お前には河上に對する責任が出來た。先生にはそれと直接關係がないと云ふ意味だね。

春代。　えゝ。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

桑田。ぢや、先生に取つては、その事は缺點としても、ほんの僅かな缺點に過ぎないと信ずるのか。

春代。えゝ。

桑田。それではお前は、單にそれだけの缺點で、先生の生活の全部を否定し、敗滅させる勇氣があるか。

春代。どうして。どうしてそんな事があられませう。私は河上さんにあの事を打ち明けるにしたつて、何も先生の事まで訴へるのぢや御座いませんもの。たゞ私の罪のお許しを乞ふばかりですわ。

桑田。お前は實にのんき者だね。さう物事が簡單に片づくと信ずるかえ。お前には河上のあの氣象が分らないか。一本氣で、生眞面目で、何處までも純の一字で盡きる單純な性情だ。惡く云ふと、子供同様の幼稚な熱情家に過ぎない。潔癖であるだけそれだけ狹量だ。思ひ返しの出來ない生れつきだ。且つあの男が先生に對する崇拜の態度を考へて見ろ。まるで救世主に於ける使徒だ。先生を何處までも人間離れのしたものにして、祭壇に祭り上げておかなければ氣がすまないといふ風だ。尚一層不便な事は先生と亡くなつた夫人との間にあの男が描いてゐる詩的空想だ！

春代。その事は私もよく聞かされましたわ。

桑田。さうだらう。あの男は八年前先生が夫人に別れてから頑固に獨身生活を續けてゐられるのをあの男一流の解釋法で美化して悦んでゐるのだ。死んだ後までも尚生前の愛を裏切らない、靈的戀愛の最高限に淨化されたものとしてゐるのだ。さう云ふ幻影の中にお前達の秘密を抱擁し得るとお前は信ずるか。先生の複雜な矛盾、人間生活の弱點を偏見なく分り得ると信ずるか。理解すれば理解するほど彼の男は苦しまなければならないのだ。殊に先生の對象がお前であつた事は、あの男に取つては致命傷だ。天上から地獄のどん底へ突き落される事だ。

春代。――あゝ、私はどうしたらいゝのでせう。

桑田。春代！ お前は沈默と云ふ事を考へて見た

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事があるか。

春代。――そう云ふ意味は、河上さんに打ち明けるのをよせと仰しやるのですか。

桑田。違ふ。俺はそんなことを命令しやうとするのではない。すべてをお前の判斷に任せるのだ。

春代。――どうぞお兄さん、これだけは私の決心を挫じさせないで下さい。私は考へて〳〵、どうしても斯うする事が正しいと感じてゐるので御座いますから。若しこゝで弱い氣を起したら、私はまた嘘から嘘を續けなければなりません。

桑田。嘘を續けろと云ふのぢやない。たゞ、今日まで默つてゐた如く、默つてはゐられないかと聞いて見た丈けなのだ。「自然」もそれを默つてゐたではないか。――「自然」はあらゆる善惡に對して、常に沈默を守つてゐる。それを洩らしたり、曝いたりするのはいつも人間の饒舌である。若し假りに「自然」が狹量な潔癖家で、どんな一寸とした不正、不義、邪惡、醜汚も假借しないとしたならば、有らゆる敗德はすべて曝露されなければならない筈だ。明るみへ打ち擲げられてそれ〳〵正當の裁きを受けなければならない筈だ。その間に一分の片手落ちもあつてはならない筈だ。――併し世の中はそうではないだらう。――とにかく「自然」にはそんな事はどうでもいゝのだ。自然は母親だ。子供をぢつと眺めてゐるいゝ母親だ。子供に少し位ゐな過失があつても、決して目かどを立てゝ咎めはしない。却つて與がつて、その成長の過程を眺めてゐるのだ。そして人間は或る過失につまづくと、同時に、飛び上るアンテウスのように、其處から又一つ新らしい力を攫んで步き出すのだ。滅びるのは、その轉機に新しい力を攫めない者だけだ。大貫先生にしろ、先生の中にあれ程痛切な、人の魂を震はせる程の力が潜んでゐるのは何故だらう。犯した罪の觀念――それのみとは云はないが――それも一つの原因ではあるまいか。先生はあの罪に依つて、より深刻な人生を味つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たといふことも出來やう。

春代。それは私も感じますわ。

桑田。そうだらう。而して尙ほより以上偉大な、底深い人間の方へ進みつゝある途中にわづかな故障のために凡てが打ち挫かれて了ふ事を、お前は氣の毒だとは思はないか。

春代。——そう云はれると私どうしていゝか分かりませんわ。でも、河上さんもよく譯を話せば、お分かり下さる事と思ひますから、お兄さんの仰しやるような、そんな怖ろしい結果にはならないですむかと思ひます。

桑田。だからお前はのんきだと云ふのだ。まだそんな事を考へてゐるんだね。若し一歩を讓つて河上がすべてを理解し、凡てを冷靜に受け取り得るとしても、その次には『世間』だ。お前は『世間』と云ふものを考へて見ないか。何かの秘密が發見された時、『世間』は狂犬の如くそれに喰ひかゝる事を豫想し得ないか。

春代。それはお兄さんのお思ひ過しですわ。河上さんがそんな事を輕々しく洩らすやうなお方でせうか。

桑田。あゝ。お前はだからのんき者だと云つてるのだ。秘密と云ふものは、當事者の間にだけ守られてゐる事に依つて、わづかに安全を保つものなのだ。——併し、お前がどうしても決心してゐると云ふのなら、仕方のない事だ。

春代。お兄さん、御免下さい。

桑田。なに。俺に謝罪る事はないよ。俺はたゞ傍觀者としての老婆心を發表したまでぢやないか。併しね。春代。

春代。はい。

桑田。最後に今一度云つておくがね、お前のしようとしてゐる事は大變な事だよ。どうしてもお前はやるか。

春代。——えゝ。河上さんから、近日お國を立つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と云ふお手紙を頂いた時から、私は毎日その事ばかり神樣にお祈りしてゐました。――先生にはすみませんけれども、私としては――これからまつ直な生き方をしようとするには、どうしても斯うするより外に仕方がないと思ひます。

桑田。そうか。それ程思ひ詰めてゐるのならそれでよろしい――その決心を二タ心なく何處までも突き通せれば、實はそれが一番正しい事なのだ。俺が今まで云つた事なぞは、それに比べれば第二義的な方便主義に過ぎないのだ。

春代。――お兄さん。

桑田。それは正しい事だ。その代りそれまで突き進んで行つた最後に、のんきな妥協を見出さうなんて考へてゐたら、お前は間違つてゐるよ。お前はそれつきり、永久に河上から離れるのだと思はなければいけない。

春代。――

桑田。先生と河上は敵になるのだよ。

春代。――

桑田。そんな事がまだ心配になるのかい。

春代。――否え。みんなよく分つてゐます。私は初めて覺悟が出來ました。今まではまだ駄目でしたの。お兄さんにこれだけ云つて頂いて、やつと本統の決心がつきました。

桑田。まだ〱それ位ぢや駄目だ。その結果としてどんな事が來やうとも、狼狽したり、あはてたりしちやならないよ。それだけ強くお前はなれるか。

春代。――なれます。

桑田。何が起らうと懼れるな。

春代。――あゝ、神樣！

桑田。それだけの決心がつくなら初めてやつてもいゝ事だ。それまでになり得なければよせ。

春代。――いゝえ。懼れません――もうどんな事があらうとも――私は決心して居ります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

桑田。よし。お前の思ふ通りにやるがいゝ。

春代。——お兄さん。お兄さん。お兄さんだけはいつまでも私を愛して下さい。

桑田。心配しなくもいゝよ。俺はいつでもお前の味方だ——二人で靜かに暮さうね。

春代。——田舍のお母様のお墓の側へ歸りませうね。

桑田。人一倍美しい心を持つて生れたから、お前は人一倍苦しまなければならないのだ。

春代。——あゝ神樣。神樣。私をお助け下さいまし。〔幕〕

第二幕

第一場

同じ構內の普請場。新築の宏壯な煉瓦の講堂と、木造の校舍の二棟が殆んど出來上つてゐる。講堂の足場はまだ取つてない。大工や石工が各自の仕事に急がしく働いてゐる。桑田が學校の老事務員と赤い煉瓦屑の散らかつた中に立つて話してゐる。

第一幕目より三四日を經たる午後。

老事務員。十一日の始業式までに足場だけでも取れますとようがすがなア。

桑田。斯うまッ四角に建つてからが、まだ中々手のかゝるものですね。

老事務員。どうしてあなた。こんな西洋普請の事は手前共には皆目分りませんが、家は造作の方が却つて手のかゝるものでしてな。昔や、これで、一寸と凝つた家の一軒も建てようとするには、普請三年造作三年としたものでさ。

桑田。厄介なものですね。

老事務員。昔の事はまあ何に限らず、若い方にはお話し見たいなものですよ。此處いらの事にしてからがあなた、斯うやつてすぐ表には電車が通るの。東京まで晝飯食ひに行つて來るのと申しますが、手前共の若い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時分には、高崎屋まで一升の酒を買ひに出るのも一日がゝりでさ。この學校の森なんかでも、つい近年まで狐や狸の棲み家だつたので御座いますからね。學校が出來たり、えらい先生方がお住まひになつたりする今から思ふと、嘘のようですよ。

桑田。その時分からあなたはこの近所はお委しいんですか。

老事務員。委しいも、委しくないも、土地ッ子でさ。ほら、この森の後にSさんの別莊になつてる邸が御座んせう。あれが昔は××和泉ノ守様のお下邸でしてね、私の親爺は其處のお留守居役を務めてゐましたから、腕白盛りの頃は、こゝいらの森でよく兎狩りをしちや暴れ廻つたものです。

桑田。そうですか、初めてあなたのそう云ふ話を聞きますね。失禮だが遠藤さんはもうお幾つです。

老事務員。八になりますよ。

桑田。六十八ですか。僕等の二倍以上なんですね。

老事務員。人間も斯うなつちやおしまひでさ。何もあなた方の年頃の事ですよ、面白いも、おかしいも。

桑田。面白い昔話がありそうですね、今度ゆつくり聞かして貰ひますかな。

老事務員。ハヽ、ハヽ、ハ。過ぎて仕前へは何も夢でさ。

生徒數名登場。

第一の生徒。すつかり出來たね、これぢやAは負けるぞ。

第二の生徒。Aがどうしたのだ。

第一の生徒。AとBが賭けをしたんだよ。お暑中休みに暇になつて歸る時に。この講堂が十一日までに出來上るか出來上らないかつて。

第二の生徒。何を賭けたんだ。

第一の生徒。西洋料理さ。

第二の生徒。そいつあいゝね。Bの奴旨くやり上つたなア。

第三の生徒。あの二人は仕様のない奴等だ。

第二の生徒。何を憤慨するのだ、いゝぢやないか。僕も這入ればよかつた。

第三の生徒。君までそんな事を云ふのかね。君は講堂を賭けにしてまで西洋料理が食ひたいかい、殊にこの講堂はよその中學校の講堂やなんかとは違つて、或る意味に於て僕等の禮拜堂(チャペル)だ。それも河上先生と大貫先生の間の美しい熱情を體形した神聖な紀念物ぢやないか。

第四の生徒。又Hの說敎が始まつたね。

第一の生徒。冷靜(ひやか)すなよ。Hの云ふのは本統だ。よその學校見たいに、方々のお情(なさけ)を乞ひ廻つてやつと出來るような建物ぢやないだけでも氣持ちがいゝさ。

第二の生徒。併しね、國の親類ぢや河上先生の事を氣違ひだつて云つてるぜ。

第四の生徒。君は先生と同鄕だつたね。

第二の生徒。隣り村だ。先生のやり方も亂暴なんだよ。おやぢさんの貯めた金は一文も家に殘さないと云ふのださうだから。

第一の生徒。アイスだつてね。父(ファザー)は

第二の生徒。有名なアイスさ。皆んな「鬼」だつて云つてら。

第三の生徒。えらいなア。ふだんは幾ら何んと云はれても、大抵の者ならその金に目が眩んで仕舞ふ筈だ。河上先生だから投げ捨てられるんだ。

第一の生徒。それで新生活が始まるんだねえ――結婚するんだぜ。乾盃。

第二の生徒。――妹(シスター)だらう。桑田先生の。

第一・第三・第四 叱つ。

一同稍離れて右手に在る桑田を注意する。

第二の生徒。聞えやしないさ――ね、そうだらう。

第三の生徒。僕もさうだらうと思つてゐた。

第一の生徒。僕の想像したのも同一人物だ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第四の生徒。　もしさうだと理想的だね、しかし僕が昨日夕方逢つた時には、そんな幸福が近づいてゐる人のやうでもなかつたぜ。近頃になくメランコリーだつたよ。

第二の生徒。　先生に何處で逢つたの。僕は保證人だからね、判を貰ひ度い事があるんだけれども、いつ行つて見てもゐなくつて困つてゐるんだ。

第一の生徒。　食堂にも二三日影を見せないぜ。

第四の生徒。　そうか。僕は『無花果の小屋』の前で出逢つたのだよ。禮をしたけれど知らぬ顏をしてゐたから、又何かあの先生の冥想が始まつたのだらうと思つて、僕はすぐ此方へ引つ返して來た。

第三の生徒。　先生が『無花果の小屋』から出て來ない間は、學校は始まつても當分授業はお休みだね。

第四の生徒。　君休める事ばかり考へてゐるんだね。

第一の生徒。　兎に角、あの小屋は僕等のような背教者が行つても、妙に宗教的な氣分になるやうな場所だねえ。

第四の生徒。　あの小屋は、ヨハネ傳の中の『ピリポが爾を召ばざる先に、無花果樹の下に爾の居るを見たり』といふ言葉から大貫先生がつけたのだつてねえ。

第二の生徒。　そんな意味があるのかい。僕は周圍に澤山無花果の樹があるから、たゞそう云ふのかと思つてゐた。

まり子とつる子が後の森の中から駈けて來る。

つる子。　桑田さん——桑田さん——

桑田。　どうしたんです。

まり子。　あゝ。怖かつた。

桑田。　二人とも駈けないでゐらつしやい。煉瓦屑があるから轉ぶとあぶない。

まり子。　だつてねえ。河上さんがゐたんですもの。

桑田。　河上がどうかしましたか。

つる子。　あのね、私とお姉様とね、無花果を摘みに行つてたのよ。そしたらね、樹の蔭からひよいと河上さ

んが出て來たんでせう。お姉さんが出しぬけに怖い！つて云つたから、私までびつくらして駈け出したの。

桑　田。　詰らない。

まり子。　だつて私、ふだんでもあの人の目が怖いやうなのに、今の様子つてなかつたわ。まつ靑な凄い顔をして、ぢつと私達の方を見てたんですもの。

つる子。　お姉さんがいけないんだわよ。あんな聲を出しておどかすんですもの。折角取つた無花果をみんな落して來ちやつたわ。

老事務員。　そりやいけませんでしたねえお孃さん。今私があつらへ參りますから、御一緒にゐらして又お取りなさいまし。

つる子。　そう、お爺さん行くの。ぢや私また取つて來よう。お姉さんゐらつしやらない？

まり子。　私、いや。

つる子。　お姉さんは河上さんが怖くて行けないのよ。

老事務員。　ハヽヽ、ハヽヽ、ハヽヽ、あの森にはお化けはゐませんよ。

第二場

森の奥に在る粗末な一室きりの小屋。これは聖書の句に依つて、『無花果の小屋』と呼ばるゝ隠遁所である。窓がたゞ一つ開いてゐる。室内はうす暗い。その中にぼんやり白く浮いてゐるのは、丸太造りの壁にかゝつてゐる大きなクリストの繪像である。その下に河上がうづくまつてゐる。

同じ日の夕暮。戸を叩く音がする。

河　上。　桑田君か。

表の聲。　そうだ。

河上が上つて戸をあける。桑田が這入つて來る。

河　上。　遠藤さんが云つてくれたか。

桑　田。　うん。何んだか知らないけれども僕に日が入つたら來て吳れ、と云ふ事だからやつて來た。

河　上。　すまなかつたなア。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人は室内の適當な場所に坐る。

桑田。灯はないのか。

河上。君は灯がいるかい。僕はいらない。

桑田。そんな事を云はなくともまあ顔を見て話そうよ。蠟燭を持つて來た。

桑田袂をさぐつて蠟燭とマッチを取り出して磨る。

河上。僕はあれから四日たつた今日まで、此處に斯うしてゐて灯はつけなかつた。明るくなるのが怖いよ。僕の額には惡魔の角が生へてるかも知れない。

灯がつく。鈍い黄色い光が小屋の中を照らす。クリストの繪像が先より白く、はつきり現はれる。

桑田。角はない。安心して影を見玉へ。

河上。いゝや、僕はもう鬼だ。惡魔だ。僕はこの前君に逢つた時、親爺を鬼だと云つて話したが、僕も今では親爺と同じ鬼だ。親爺の惡口を云ふ資格はない。

桑田。何を云つてるんだ君は。今日までこの小屋に籠つてゐたのは、惡魔の弟子になる修業だつたのか。

河上。そう云はれても辯解は出來ない。僕は闘つた。一生懸命怖ろしい考へから逃げやうとして藻掻いた。でもとうと負けたのだ、僕はもう絶望だ！

桑田。君の心持ちは察しるよ。しかし如何しようと云ふのだ。

河上は部屋の隅から何か包んだもの持つて來る。

桑田。ピストルだね。

河上。型は違ふが丁度二つある。これの方はね、親爺が若い時これを持つて僕の母を追ひ廻はしたと云ふ歴史つきのものだ。こつちのは、僕の從弟で兵學校に行つてゐた男が、氣が狂つて自殺したピストルだ。——考へて見ると不思議な運命だね。この間來る時に偶然僕がこれを——併も二つまで持つて來る氣になるなんて。

桑田。それで、これをどうするのだ。

河上。先生へお屆けして呉れ——そしてどちらでも撰んで頂いて呉れ。彈丸は籠めてある。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

桑田。——分つた。併し先生へだけこれをお屆けするのは片手落ちだと思ふね。妹はどうする。

河上。——妹——春代さんを僕がどうされるものか——

河上泣く。

桑田。それは戀愛(ラヴ)の偏見だよ。先生を咎められば妹も同罪だ。先生を憎めば、あの女も憎まなければならない——

河上。——春代さんが憎めたら、僕はこれ程苦しまなくてすむだらう。——が、憎めないのだ。あの人に罪があらうとは思はれない。たゞ先生だけは許されない。あれ程信じてゐた人が、僕の身も心も捧げてゐた人が、仇敵だつたのだ。——

桑田。併しね河上。斯う云ふと如何にも同情のない云ひ方だが、その失望は君の方が無理だよ。君は先生の本統を知らうとする前に、幻影(イルージョン)の網ばかりをかけてゐたのだ。「斯うあるべきだ」と云ふ假定のみから出來上つた空な人間を、君は本統の人間と信じて縋つてゐたのだ。僕はそれが間違ひの原因だつたと思ふね。

河上。そう云はれると僕は何んと云つていゝか分らない。この間逢つた時、君が僕の事を本統に安心して立つてゐるのぢやない。踏臺がある。若しその踏臺が動揺したらどうするか、と云つた意味が、今はつきり分つた。君は皆んな知つてたのだね。

桑田。必ずしも知つてた譯ぢやないよ。氣のついた事があつたゞけだ。

河上。君と云ふ人間は不思議な人間だ。それでゐて、よく平氣に先生とあんな親しい交渉を持つてゐられるねえ。

桑田。僕は誰とでも自分の眼をはつきり開けてつき合つてるだけだ。君も知つてる通り先生は僕の死んだ父の親友だつたし、色んな世話にもなつて來てゐるが、併し先生は先生だ、僕は僕だ。或る程度以上僕の中に這入り込まれる事は不快であると共に、僕も決し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てそれ以上先生の中に這入り込むことを好まない。だから僕は先生にどんな欠點があらうが平氣だ。「見許す」と云ふやうな、そんな驕慢な言葉でなくたゞ傍觀してゐられるのだ。併し君はさうぢやない。

河　上。　分つてゐる。それはよく僕にも分つてゐる。僕は直ぐ盲目的になるのだ。僕は君見度いな冷たい目で見てはゐられない。飛びかゝつて摑むか、捨てるかだ。――これは僕も知つてゐる、僕の家の遺傳的の激しい血の沸騰だ。考へて見れば親爺もこの血の犧牲になつた人間だつた。僕も同じ犧牲だ。

桑　田。　君の父（ファーザー）は氣の毒な人だつたね。

河　上。　僕と同じ一本氣な愚者だ！　もし僕に君の半分だけも客觀があつたならば、この悲しい秘密だつて、已むを得ない人間の弱點として許す事はなんでもなかつたらう――否え、これが他人の場合であつたならば、僕だつても許す方に味方する一人であつたかも知れない。けれども先生がそんな人間と同一の列に並ばなければならないと云ふのは、何んと云ふ淺間しい事だらう――情けない事だらう――相手は僕のたつた一つの光りだ――どうしてもいけない。どうしてもいけない。――許す事を知つて許されない僕だ。許す事の、より美しい愛である事が分つてゐて、それが出來ない僕なのだ。だから僕は「鬼」だと云ふのだ。僕の胸に沸つてゐるのは、「惡魔」の憤りだ。父の狂暴な血が、僕の脈管の中にも同じ鼓動で流れてゐる事が、今度初めて分つた。僕は矢張り地獄の領分に住むべき人間だつたのだ。

桑　田。　君は求めて地獄に下らうとするのぢやないか。

河　上。　救つて吳れ。眞つ暗い穴の中に突き落されて行く今の僕を、救へるものなら救つて吳れ！

桑　田。　大貫先生を蹴落して直接神に行つたらどうだ。

河　上。　神か。――僕は昨夜その壁のクリストの夢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を見た。顏はたしかにそのクリストに相違ないのだがね、なりは小さい田舍の小僧だ、僕もまだ小さかつたらしい。何んでも田舍の家のあたりらしいのだ。田畝の間の狹い小路を、その小僧と二人して歩いてゐるうちにいさかいを初めたのだ。何の事だか分らないが僕は青くなつて摑みかゝつた。すると小僧が逃げて行くのだ。僕はわけもなく腹立たしい氣で追つかけて行くとね、不圖と小僧がふり向いた。その瞬間僕は小石を拾つて投げつけた。小石はあやまたず小僧の眉間に當つて、だく／＼とまつ赤な血が流れ出した。その顏が正しくこの繪のクリストだつた――僕は目が覺めてから曉方まで震へてゐた。僕はクリストに石を投げたのだ。夢の中にまで僕はこんな人間に墮落したのだ。――もう神の名を云つて吳れ玉ふな。この上少しでも僕を苦しめまいとするなら――

桑田。　そうか。ぢや僕はもう何んにも云ふまい。――それでこのピストルはたゞ然う云つて屆けて置けばいゝのかい。

河上。　斯う云つて吳れ。明々後日の夜××墓地でお目にかゝれませうか――

桑田。　明後々日は亡夫人の命日だつたね。

河上。　毎月九日には、どんな事があつてもお墓詣りをなさるのは君も知つてるだらう――何と云ふ大膽さだらう。何んの顏があれば平氣にそんなお芝居が出來るかねえ。墓の中の人に恥ぢるがいゝ。――あゝ、そう云ふ點にかけては、先生はどうしても惡魔だ。憎むべき惡魔だ――見損つた！

桑田。　ぢや、そう傳へて置かう。僕の用事はそれだけかい。

河上。　もう歸るのか。

桑田。　別に用事がなかつたら失敬する。――病人がひとりだから。

河上。　――病人？　春代さんが病氣なのかい。

桑田。　强さうな事は云つても、まだあいつも子供

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だからね。君に手紙を書いた明けの日からひどく熱を出して弱つてゐる。

河　上。——そうか。

桑　田。——見舞に行つてやらないか。

河　上。——

桑　田。悦ぶよ。

河　上。——何故そんな殘酷な事を云つてくれるのだ。

桑　田。何んにも殘酷な事を云ふ積りぢやなかつたのだ。——どうだ、これを先生に屆ける前に、兎に角妹に逢つて見ないか。

河　上。——否や。よさう。こんな心になつてしまつた僕が逢ひに行つたつて却つてあの人を悲しませるだけだし、——且つ危ない。

桑　田。——妹をも殺し度くなるかも知れないと云ふのか。

河　上。——僕の脉管の中には親爺の血が今一番濃く流れてゐるのだ。それが怖ろしいのだ。

桑　田。併し妹は君の彈丸なら滿足して受けるかも知れないよ。——萬一またそれまでのカタストローフに行かないで、今一度彼女の愛に君が生きる路を見出せたら——

河　上。理想的に云へばそれが一番だ。どうしても出來ない事だ。僕はもう人間並みの感情を失つてゐるのだ。

桑　田。不幸な事になつたね。

河　上。——この小屋は、僕が初めて先生を訪ねて來た時おいて貰つた部屋だ。このクリストもその時からの長いおなじみの繪だ。僕はひまさへあればこの下で祈つた。それは、これまでのやうな絶望の祈禱ぢやなかつた。新らたな光りを見せて吳れた、感謝と悅びに充ちたものだつた。僕は初めて自分の住むべき土を見出したのだ。先生の仕事を助けて一生この森の中で働こうと決心した。その内に僕は戀愛をさへ得た——

あの頃の僕は本統に惠まれたる者だつた。併し僅かに三年だつた。僕はこの小屋にまた戻つて來た。これから、此處へ這入つて來た時と同じやうに、また暗い世界の中に出て行くのだ。僕は到底人並みに明るい日の中には住めないやうに、生れる時から呪はれて來た人間かも知れない。――幾ら云つてもいゝ愚痴だ、兎に角今の僕にはその壁の顏よりも、父の記念のピストルの方に心が牽きつけられるのだ。怖ろしいものだね、血は怖ろしいものだねえ。この血の魅力の前には、僕の意志なんてものは何んにもなりはしない。何物か分らない、妙な血みどろのものが、非常な誘惑を持つて僕を壓し潰ぶして仕舞つたのだ。僕は僕自身をどうする事も出來ない。その怖ろしいものゝ方へ震へながら藻掻きながら、だん〳〵引つ張られて行くより外に仕方がない――僕はもう二度と君達の側へは歸つて行かれないのだ――妹さんを愛してやつて呉れ。僕の分も一緒に大事にしてやつて呉れ。

桑田。妹の事なら心配しなくもいゝ。

河上。――決して悄んではゐない。――悄めないと云つて呉れ。――あゝ、畜生！　惡者は一人だ！どうするか見て居ろ！

第三場

學校の森から表ての――街道へ通ずる裏路。深い立ち樹の中。第二場より三日目の夕方。樹木の中なので時刻以上に暗い。星が樹の間の空に瞬いてゐる。其處へ二人の男の聲がする。

第一の聲。――先生ですか。

第二の聲。――どうでしたね。待つてゐましたよ。

第一の聲。――もうお出かけになつたのかと思つて心配いたしました。

第二の聲。もう十五分遲いと行かなければならない時刻です。S牧師はゐましたか。

第一の聲。丁度、ゐらつしやいましたからお渡し申

して來ました。

第二の聲。 傳言もしてくれましたね。

第一の聲。 確かに。明日の朝になつたらあの文箱の手紙を御覧下さるやうにとだけ申して參りました。

第二の聲。 御苦勞でした。君も今夜僕が歸らなかつたら――乾度歸らないと思つてゐて差し支へないでせう――明朝、僕の書齋の机の上に置いた、先刻のものを讀んで下さい。その時分にはS牧師も丁度來られるでせうから。

第一の聲。 もう行らつしやいますか。

第二の聲。 出掛けませう。

第一の聲。 森の端れまでお見送りをさして頂けませんか。

第二の聲。 君は今夜ひどくセンチメンタルですね。

第一の聲。 ――そう仰しやられても仕方が御座いません。白狀致しますと、僕は今夜初めて先生が本統に分つたやうに感じます。このまゝでお別れ――永久にお別れ申さなければならないのが殘念で御座います。

第二の聲。 私も好んで死に度くはない――兎に角、あちらで河上君に逢つて見ませう。ぢや左樣なら――病人を氣をつけておやりなさい。

第一の聲。 ――とうと行つてしまつた。あの人が惡人か？ 惡人といふものはあんなものぢやない。ぢや誰が惡人だ？――惡人は一人もゐはしない。それで、めい〳〵死ぬほど苦しまなければならないのか。――何故だらう？

第四場

春代の病室となつてゐる小さい部屋。第一幕第二場に現はれたる、兄弟の書齋の隣室と知るべし。左にその部屋に通ずる戸がある。も一つ外に出る戸が右手にある。正面に窓が一つ開いてゐる。その下に粗末な、併しまつ白い清潔な寢台がある。その上に春代が額に氷嚢を載せて寢てゐる。側の小さい卓の上には、隣室にあつた、先夜の青い傘のランプに灯がついて載つてゐる。桑田

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がその前の一つの椅子に腰をかけてゐる。

同じ夜の眞夜中。

春代。お兄さんなの。

桑田。目が覺めたかい。

春代。まだ起きてゐらつしやるの。お寐て頂戴よ。

桑田。うむ、寐るよ。

春代。さあ。お兄さんが起きてゐらつしやると、却つて氣になつて眠れないから。

桑田。餘計な心配しないで、落ち着いてよく寐なくちやいけないよ。

春代。私も眠りますからお兄さんもお寐つて頂戴。

桑田。俺は今夜眠くないのだ。

春代。なぜ。

桑田。宵の紅茶が濃過ぎたのかも知れないね。一寸とも眠くない。さ、お前は早く眠れ。

春代。――私も本統はちつとも眠くないの。

桑田。また熱が出て苦しむよ。さあ、直ぐ眠ろ。

春代。――お兄さん。

桑田。――何んだ。

春代。――河上さんは何故返事を下さらないのでせう。矢張り私を憎んでゐらつしやるのねえ。

桑田。そんな事はないさ。僕に傳言をして來たぢやないか――お前を決して憎んではゐないつて。さあ、病人が餘計な心配をしちやいけない。眠れ。眠れ。

春代。今夜は熱が下つてゐてはつきりしてゐるんですから、もう少し話さして頂戴――あの日にお兄さんは河上さんとどんなお話をなすつたの。聞かして下さらない？

桑田。そんな事を聞くのは今はよした方がいゝよ。――よくなつたら又委しく話してやるから。

春代。――河上さんはもうあの小屋にはゐないのですつてね。

桑田。――誰がそんな事を云つた？

春代。　遠藤さんが今朝お見舞にゐらして下すつた時、聞きましたの。——一昨日あたりからお見えにならないのですつて。——何處へゐらしたのでせうね。

桑田。——俺にも分らない。

春代。——もう此處へは歸つてゐらつしやらないのでせうか。

桑田。——分らない。

春代。——本統？　私お兄さんは何んでも知つてゐらつしやるような氣がしますわ。聞かしい下さいな。

桑田。——全く分らないのだ。——歸つて來るか來ないか。俺にだつて分るものか。さあ、その話はもうよせ。

春代。　歸つてゐらつしやるのか。ゐらつしやらないのか——たゞ一言、それだけでいゝから。そうしたら快くなるまでもう何んにも聞きませんわ。

桑田。——俺は運命は豫言し得ない。

春代。——運命ですつて。

桑田。　兎に角、分る時にはいやでも分らなければならない。——明日の朝まで待て！　さあ、俺も彼方の部屋で寐てゐるからお前も眠らなきやいけない。いゝか。用事があつたら呼ぶんだよ。

桑田去る。森とした眞夜中の病室に、ランプの光りのみが、青く照つてゐる。その中に何んとなく外の方が物騒がしくなる。

人の聲。　火事だア。火事だア。

半鐘の音が聞え出す。チヤン、チヤン！　チヤン、チヤン！　チヤン、チヤン！

人の聲。　火事だア。火事だア——

桑田があはてゝ這入つて來る。妹の寢台を覗いて見て、すやすやと又眠入つてゐるのを見るとその儘出て行く。五分程たつて後誰かゞ右手の戸を激しく叩く。

表の聲。　桑田さん！　桑田さん！　大變です。大變です。

その物音に春代が目を覺ます。

春代。　どなたですか。

表の聲。　遠藤です。火事ですよ。講堂が火事ですよ。

春　代。　――えツ？　火事ですつて！

春代は寢台からよろめき出て戸を開ける。老事務員が這入つて來る。

老事務員。　桑田さんはゐらつしやらないのですか。大變な事になつちまつて――

春　代。　お兄さん、お兄さん。

春代隣室に行つて見る。

老事務員。　ゐらつしやいませんか。

春　代。　あちらの鍵が外れてゐますわ。

老事務員。　ぢや、もうゐらしたのかな。何しろ校長先生がお留守のところへ持つて來てこの騷動で――どうもはや。

春　代。　先生はゐらつしやらないのですか。

老事務員。　今日は御承知の通り亡夫人の御日でさね、それでお墓詣りにお出掛けになつたつきり、まだお歸りがないんだそうで――　あつ大變だ！　また燃え上つた。かうしちやゐられない。まあ御大事に。

寢台の上の窓ガラスにまつ赤に火影が映る。老事務員狼狽して去る。

春　代。　どうしたのだらう。こんな火事を出すなんて――あつ、まつ赤だわ。煉瓦がばら〳〵落ちて行く。あれの出來上る日をどんなに樂しみにしてゐらしたか知れないのに――でも今となつては、あの講堂の燒けるのも、何かの運命のやうで怖ろしい――もしや？――私はよつぽどどうにかしてる。そんな、そんな馬鹿げた事があつて堪るものか。屹度大工かなんかゞ火を粗末にしたのだわ。――あつ、また燃え上つた。――あの人はこんな事とは夢にも知らないのだわ。何處へゐらしたのだらう。何處へ行つてしまつたのだらう――あゝ、目が眩らむ――

第五場

寄宿舍の一部なる炊事場の前の井戸端。第二幕第一場に現はれたる生徒等が、ポンプ井戸にしがみついて盛んに水を汲んでゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

水を運ぶものが行つたり來たり、景氣のよい若者共の混雜が繰り返されてゐる。

火事は此處からはずつと近くなる。盛んな火の子。爆聲。

第一の生徒。 ――燃える。燃える。

第二の生徒。 ――危ねえぞ――校舍に移るなア。

第三の生徒。 ――もう自暴自棄だ！ 燃えるだけ燃える。畜生！

一同。 ――わつしよい！ わつしよい！

第四の生徒。 ――確つかり應せ！ うんと應せ！

第一の生徒。 西洋料理の賭けはどうなつたい。

第二の生徒。 極つてら。Bの負けさ。出來上らないうちの火事だもの。

第三の生徒。 Aが助かつたわけだなア。

第一の生徒。 その代り僕等にAを奢らせやうぢやないか。

一同。 ――よし、よし。

第二の生徒。 蕎麥で我慢してやらあ。

第一の生徒。 ――そんな話をすると餘計腹が空くなア――誰か握り飯でも持つて來ないかなア。

第三の生徒。 ――腹が空いては戰が出來ぬ――こりや、こりやだ――

水運びの第一の生徒。 ――馬鹿野郎！ 何を浮かれてるんだ。

水運びの第二の生徒。 ――無駄口をきく間があれや洗面器でも持つて駈け出して來い。

水運びの第三の生徒。 此奴等、井戸にぶら下つてふざけてゐやがるんだぜ。失敬な！

水運びの第四の生徒。 ――叩き下ろせ！ 叩き下ろせ！

第一の生徒。 生意氣云ふない。汲むほど持つて行けもしねえくせに。

第二の生徒。 ――そんな奴にはやるな、やるな。

第三の生徒。 畜生！ 水かけやがつたな！

第四の生徒。 こつちも懸てやれ！ や――い、や――

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

——い。

一同。 ——面白い。面白い。

第一の生徒。 一年に一遍位ゐはいゝな。火事も。

第二の生徒。 ——發火演習よりや氣がきいてら。わつしよい！ わつしよいだ！

其處へ一人の生徒がづぶ濡れになつて駈けて來る。

第五の生徒。 大變だ、大變だ。

第一の生徒。 何んだ、何んだ。

第五の生徒。 河上先生が氣が狂つて、火の中へ飛び込んだのだ。

第二の生徒。 君見て來たのか。

第五の生徒。 さう云つてみんな騷いでるのだ。

第三の生徒。 燒け死んだかなア。

第一の生徒。 極まつてらァね。石まで燃えてるんぢやないか。あの通り。

第四の生徒。 僕あ行つて來る。貴樣代つて呉れ。

第五の生徒。 水汲みも樂ぢやないね。

第四の生徒。 愚圖々々云はないで來いよ。

第二の生徒。 よせ。よせ。貴樣が行つたつて先生が火の中から出て來やしまいしさ。

第四の生徒。 ——冗談もいゝ加減にしろ。大變な事ぢやないか——もしそれが本統だとすれば。

第四の生徒は亢奮の狀態で火焔の方へ駈けて行く。

第一の生徒。 あいつは河上先生崇拜なんだ——ボール見たいに飛んで行きあがつた。

第二の生徒。 なんでもいゝや。此方は水汲みが忙しい。忙しい。

第三の生徒。 僕の手は感じがなくなつたぜ。

第一の生徒。 ボートならもう五六里は漕いだねえ。

第五の生徒。 もう一と息だ。ふんばれ！ ふんばれ！

一同。 よいしよ！ よいしよ！ よいしよ！

第六場

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春代の寢室。（第四場の舞台面に同じ。）春代がぐつたりして椅子に倒れてゐるところに桑田が這入つて來る。窓の火影は稍暗くなつてゐる。

春代。――お兄さん。

桑田。何故そんなところにゐるのだ、寐てなければゐけないぢやないか。

春代。――皆んな燒けたのですか。

桑田。もう濟んだ。

春代。――先生はお留守だつたのですつてね。

桑田。うむ。

春代。先刻遠藤さんがあはてゝ――駈け込んで來ましたの。――どんなに喫驚なすつたでせうと思つて――

桑田。――先生は火事は御存知ない。

春代。あら？　どうして。

桑田。まあ、寢床に行け。話して聞かせる事があるから。

春代寢台の上に坐る。桑田はその前に椅子を引つ張つて行つてさし向ひになる。

桑田。――お前は河上にあの手紙を書いた時に、僕と話した事を覺えてゐるかい。

春代。――よく覺えてゐますわ。

桑田。――お前のやらうとしてゐる事は大變な事だ――それからどんな怖ろしい事が起きるかも知れないと云つたのを覺えてるか。

春代。――覺えてゐます。

桑田。――それから何が生じやうが、お前は驚かない、慴れないと云ふ約束だつたねえ。覺えてるかい。

春代。――えゝ。

桑田。それならいゝ。その約束を守る時が來たのだ。見ろ。御前のやつた事の結果をよく見ろ。あの通りだ！

桑田は冷靜な態度で窓に移る火影を指す。

春代。――ぢや矢張り――たゞの火事ぢやなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのですか。え？　お兄さん——

桑田。　お前の想像の通りだ。——河上は火を放けてあの火の中に飛び込んで死んだ。

春代。　——あゝ、どうしませう。どうしませう。

——

桑田。　——まだそれ計りぢやないよ。先生は河上からピストルで打たれて殺された筈だ。——

春代。　——あゝ、神樣。——

春代は殆んど悶絶して床の上にうつ伏す。

桑田。　なんだその狼狽方は。そんな約束ぢやなかつたぢやないか。確かりしろ。

春代。　——だつて餘んまり殘酷です。——殘酷です。——

桑田。　——「自然」から云へば殘酷と云ふものは何んにもない。——たゞ彼等の「運命」に任せた丈けだ——

春代。　——その「運命」が餘んまり殘酷ですわ。——それまで——それまでしなくもいゝと思ひます。

桑田。　——何んだ「運命」の鋏を握つてゐたのは誰でもない。——お前ぢやなかつたのか。而してそのお前が糸を絶つたのだ。あんな強い決心で——何物をも懼れないと云ふ覺悟で——

春代。　——

桑田。　あの時は俺の方が臆病だつたぢやないか。——併しお前は何處までも自分の道に進んで行つたのだ。——怖ろしい爆發藥の埋まつてる場所とも知らず突貫する兵士のやうに——さうなればもう、誰がどうする事が出來よう——傍觀してるより外に仕方はない。

春代。　——許して下さい。許して下さい。——

桑田。　——それはどう云ふ意味だ。今になつて自分のした事を後悔したのか。

春代。　——後悔した——と云へば違ひます。私としては矢張りあゝするより外に途はなかつたのです——

の。――たゞ餘んまり怖ろしい事になりましたから。

――

桑田。――然う云ふ心持ちは卑怯だよ。お前としては、あれ程の覺悟で糸を絶つた本人としては、幾ら怖ろしくとも、震へても、また泣きながらでも、目の前に起つたもの、そのものをぢつと見てゐなけりやならないのだ。『自然』があゝやつて默つて見てゐる通り。この事が曝露しない時だつて、『自然』は默つてゐた。曝露した今だつて――こんな悲慘な出來事に了つたとしても、矢張り默つてゐるぢやないか。――今宵の事のために、あの空の星が一つでも曇つたらうか。これだけの深い森の樹の葉が一枚でも、この悲しみのために動いただらうか。――要するに『自然』の前には、小さい蟲が二匹通りすがりの馬の足に蹈み潰ぶされた位ゐに過ぎないのだ。――

春代。――幾らなんでも――お兄さんの見方は餘んまりですわ。あんまり冷酷です。――

桑田。――俺が冷酷だ？　そりや間違つてゐるよ。今度の事で一番冷酷なのはお前自身だとは思はないか。――お前は『運命』と同等に冷酷に振舞つたのぢやないか。

春代。あゝ――どうしたならよかつたのでせう。

――

桑田。――そんな愚痴を云ふものぢやない。――幾ら冷酷でもお前はお前として立派に行動したのだから滿足すべき筈だ。同時にどんな苦痛も忍ばなければならない。――賠償として――責任として――

春代。――その事は分りました。よく分つてゐますけれど――私はお兄さん程――それ程强くなれないのです。――

桑田。いけない――强くなれ！　もつと〳〵强くならなけりやいけない。――でなければお前も運命に負けるのだぞ。――死んでしまふぞ。

春代。――死に度い。死に度い。――神樣――ど

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うぞ私をもお殺ろし下さいまし、お殺ろし下さいまし。——

桑　田。——何を詰らない事を云ふのだ。さあ、鎮靜劑を飮んで寐ろ。眠るのが一番いゝ——これも今に一つの夢になるのだ。——〔幕〕

▼次號小說豫告▲

牛部屋の臭ひ（長編）　正宗白鳥

葛城太夫（後編）　近松秋江

淚　腺（長編）　森田草平

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

祖國文學の新開拓

文學博士 芳賀矢一先生編纂

歷代名著新釋

第二編 文學士 鈴木敏也先生註釋

雨月物語新釋

最新刊

菊判和裝美本一冊
總紙數二百九十頁

定價金八拾五錢

郵稅 內地八錢 臺樺鮮支十錢

『……祖國の文學の研究が、すべての點に於て、まだ甚だ不完全であるのは、我等現代の學者の大に奮發しなければならぬ所である。よつて同志と相謀つて玆に歷代名著新譯の企をなした。先づ從來註釋の絕無な各著を採つて新註を施し、尙進んでは古註の語を直して新註を出さうとするのである。本書は其第一卷として、秋成の不朽の名著を解釋したものである。今人の出來得るだけの努力も、後世から見れば訂正すべき點もあらう。但し今人としての、國家に對する貢獻は、後世の爲に進步の一津梁たることを失はぬ、一歧なりとも古人の研究以外に進まうといふのが本叢書の目的であつて、吾人の義務を盡す所以と思ふのである。』――これ芳賀博士序文の一節で、誠によく本叢書發行の趣旨を盡して居る。さて雨月物語は上田秋成壯年の作と云はれ曩に弊社發行の袖珍名著文庫の中にも第一に選ばれたものである。秋成の雨月か、雨月の秋成かといはれる程の有名な物語で、文材共に秀雅警拔、當時の短篇小說の上乘と稱せられて居る。今此名著に向ひ、鈴木學士が熱誠なる研究と、獨特の創見とを以て、最も懇切に註釋考證を加へたものが本書である。文章流達、何人も一讀直ちに品作の妙味を掬し得て、興趣限りなく、特に國語國文學の學習法及び研究家の爲には最良無二の指針である。

發行所 東京神田 富山房 振替五一〇 賣捌 全國書店

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本號特價金六拾錢　郵税四錢

（後付の二）

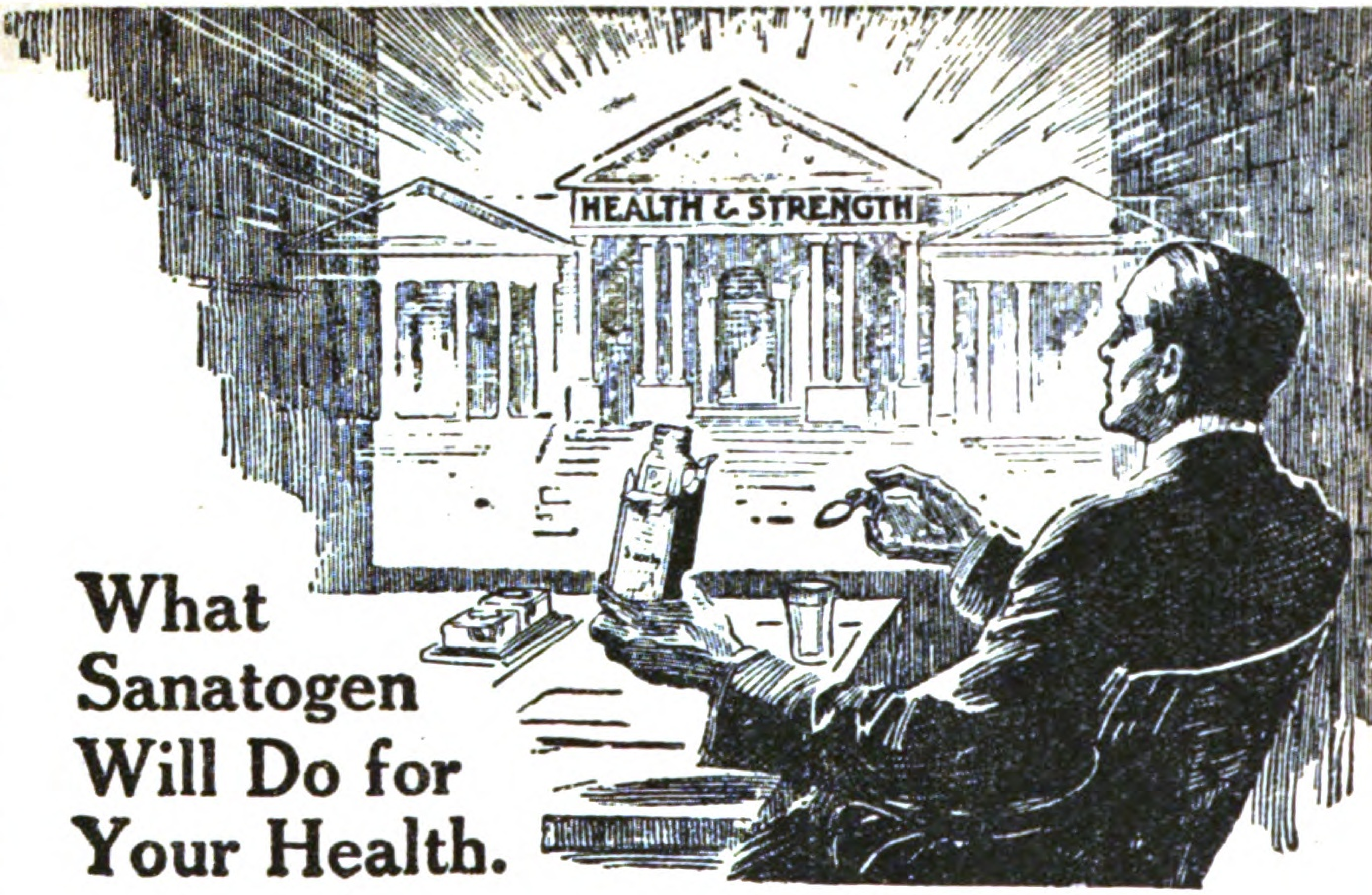
東 全 全 全 全 全 大 全 全 全 京 全

廣告取次店

印刷所

秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



腦及神經の營養劑

◎サナトーゲン

▼文明諸國の醫學社會に於て今や嘖々たる好評を博しつゝある本品は牛乳中に微量に存する高價なるカゼインと燐との化合物にして近時專門大家の熱心に推奬せらるゝ神經營養劑なり

▼**サナトーゲン**は食慾を進め神經系統に吸收せられて新しき精力分子を増殖し同時に新血液新筋肉を構成し衰弱せる體力を短時日に驚くべく一變せしむる靈妙なる作用あり

▼一般病弱者、神經衰弱者、腦力過勞者の强壯劑として本品の右に出づるもの斷じてなし劇務に精神を勞する人は活動能率を旺盛ならしむるため毎朝一回**サナトーゲン**を用ふべし

價格　大瓶　參圓貳拾五錢
　　　小瓶　壹圓八拾五錢
有名藥種店にあり

神戸市海岸通一丁目三

說明書進呈

タムソン商會

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 40 sen including Pos... entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



四月の三越

寄裂見切反物大賣出し（一日より）

第三十一回 新柄陳列會（一日より）

和田英作氏筆油繪『富士山と薔薇』展覧會（一日より）

洋傘陳列會（五日より）

五月人形陳列會（五日より）

懸賞裾模樣圖案陳列（十日より）

日本書道會主催 第五回書道會展覧會（廿日より）

m.6

東京 三越呉服店

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA